
Groupmax Document Manager Version 6

システム管理者ガイド

解説・手引書 共通マニュアル

3000-3-473-50

マニュアルの購入方法

このマニュアル，および関連するマニュアルをご購入の際は，
巻末の用紙をご利用ください。

HITACHI

対象製品

P-1B46-5141 Groupmax Document Manager Version 6 06-52 (適用 OS : HP-UX 10.20 , HP-UX 11.0 , HP-UX 11i)
P-1B46-5441 Groupmax Document Manager Version 6 06-52 (適用 OS : HP-UX 10.20 , HP-UX 11.0 , HP-UX 11i)
P-1B46-5641 Groupmax Document Manager Version 6 06-52 (適用 OS : HP-UX 10.20 , HP-UX 11.0 , HP-UX 11i)
P-1M46-5141 Groupmax Document Manager Version 6 06-52 (適用 OS : AIX 5L)
P-1M46-5441 Groupmax Document Manager Version 6 06-52 (適用 OS : AIX 5L)
P-1M46-5641 Groupmax Document Manager Version 6 06-52 (適用 OS : AIX 5L)
GMX6-DMFW Groupmax Document Manager - Filtering Server Version 6 06-50 (適用 OS : Windows 2000 , Windows NT)
P-24D1-2F14 Document Filter for Text Search 02-00 (適用 OS : Windows 2000 , Windows NT)
P-1646-514 Groupmax Document Manager Version 6 06-02 (適用 OS:HI-UX/WE2)
P-1646-544 Groupmax Document Manager Version 6 06-02 (適用 OS:HI-UX/WE2)
P-1646-564 Groupmax Document Manager Version 6 06-02 (適用 OS:HI-UX/WE2)
P-16D1-2F1 Document Filter for Text Search 02-00 (適用 OS : HI-UX/WE2)
P-1BD1-2F11 Document Filter for Text Search 02-00 (適用 OS : HP-UX 10.20 , HP-UX 11.0 , HP-UX 11i)

上記の製品のほかにも、このマニュアルを御利用になれる場合があります。詳細は「ソフトウェア添付資料」または「Readme ファイル」でご確認ください。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

AIX は、米国における米国 International Business Machines Corp. の登録商標です。

HP は、米国 Hewlett-Packard Company の会社名です。

HP-UX は、米国 Hewlett-Packard Company のオペレーティングシステムの名称です。

Lotus は、Lotus Development Corporation の登録商標です。

Lotus 1-2-3 は、米国 Lotus Development Corp. の商品名称です。

Microsoft は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

Microsoft Excel は、米国 Microsoft Corp. の商品名称です。

Microsoft Word は、米国 Microsoft Corp. の商品名称です。

MS-DOS は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

PowerPoint は、米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Windows は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

Windows NT は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

X/Open は、X/Open Company Limited の英国ならびに他の国における登録商標です。
一太郎は、(株)ジャストシステムの登録商標です。

発行

平成 13 年 3 月 (第 1 版) 3000-3-473 (廃版)
平成 13 年 12 月 (第 2 版) 3000-3-473-10 (廃版)
平成 14 年 3 月 (第 3 版) 3000-3-473-20 (廃版)
平成 14 年 9 月 (第 4 版) 3000-3-473-30 (廃版)
平成 15 年 3 月 (第 5 版) 3000-3-473-40 (廃版)
平成 15 年 10 月 (第 6 版) 3000-3-473-50

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2001, 2003, Hitachi, Ltd.

変更内容

変更内容 (3000-3-473-50) Groupmax Document Manager Version 6 06-52

追加・変更機能	変更箇所
フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録ユティリティの機能を追記した。	8.19
フォルダー一覧表示ユティリティの機能を追記した。	8.27
フォルダ名称一括変更ユティリティを追記した。	8.39

単なる誤字・脱字などはお断りなく修正しました。

変更内容 (3000-3-473-40) Groupmax Document Manager Version 6 06-51

追加・変更機能
環境変数の設定方法を追加した。
環境設定ファイルにオペランド「Import Inherit」を追加した。
ウィルスチェック機能を追加した。
メッセージを追加した。

変更内容 (3000-3-473-30) Groupmax Document Manager Version 6 06-50

追加・変更機能
Document Manager サーバとは別サーバ上にある ,Groupmax Document Manager - Filtering Server を使用してテキストを抽出する機能を追加した。
テキストファイルの登録または削除 (IStssync) ユティリティのオプションを追加した。
メッセージを追加した。 KHS015-I , KHS016-I , KHS150-E , KHS2001-I ~ KHS2004-I , KHS2101-W ~ KHS2102-W , KHS2104-W ~ KHS2108-W , KHS2201-E ~ KHS2224-E , KHS2227-E ~ KHS2232-E , KHS2235-E ~ KHS2248-E
システムコールのリターンコード一覧を追加した。

変更内容 (3000-3-473-20) Groupmax Document Manager Version 6 06-02

追加・変更機能
AIX 対応の記述を追加した。

はじめに

このマニュアルは、日立のグループウェア Groupmax Version 6i のアプリケーションを連携して文書を管理する、Groupmax Document Manager Version 6 の機能及び環境設定について説明したものです。

以降このマニュアルでは Groupmax Version 6i を Groupmax、Groupmax Document Manager Version 6 を Document Manager と呼びます。

対象読者

このマニュアルは、Document Manager の環境を管理及び運用するシステム管理者を対象にしています。また、Document Manager の導入を検討している方も対象にしています。

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す九つの章と付録から構成されています。

第 1 章 解説

Document Manager の機能の概要について説明しています。

第 2 章 一般文書データベースでの文書の管理

一般文書データベースでの文書の管理方法について説明しています。

第 3 章 フォーム文書データベースでの文書の管理

フォーム文書データベースでの文書の管理方法について説明しています。

第 4 章 Document Manager の操作環境の構築

Document Manager を操作するための環境を構築するためのガイドを説明しています。

第 5 章 Document Manager の環境設定

Document Manager を起動する前に必要な環境設定について説明しています。

第 6 章 サーバの起動と終了

Document Manager のサーバを、起動及び終了する方法について説明しています。

第 7 章 システムの運用

Document Manager のシステムの運用について説明しています。

第 8 章 Document Manager で使用するユティリティ

Document Manager で使用するユティリティの機能について説明しています。

第 9 章 障害対策

Document Manager で障害が発生した場合の対処について説明しています。

付録 A Document Manager のディレクトリ構成

Document Manager のディレクトリ構成について説明しています。

はじめに

付録 B 属性ファイル

属性ファイルの概要及び形式について説明しています。

付録 C Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録

Groupmax Address を使用しないで Document Manager を運用する場合に必要な環境設定について説明しています。

付録 D ローカルグループの登録

Groupmax 全体で一元管理しているグループとは別のグループ管理について説明しています。

付録 E Document Manager に登録できるファイルの規則

Document Manager に登録できるファイルの規則について説明しています。

付録 F 全文検索サーバと連携する場合の注意

全文検索サーバと連携する場合の注意事項について説明しています。

付録 G 異なるバージョンが混在する環境を使用する場合の注意

バージョンが異なるクライアントを使用する場合の注意事項について説明しています。

付録 H テキストデータベースの移行 (HI-UX/WE2 又は HP-UX の場合)

Bibliotheca/TS のテキストデータベースを Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースに移行する方法について説明しています。

付録 I メッセージ

Document Manager サーバに表示されるメッセージを一覧で説明しています。

付録 J フォルダ名称が重複した環境における文書のサーバ移行例

フォルダ名称が重複した環境における文書のサーバ移行について説明しています。

付録 K エリア再構成時の分割手順

Document Manager システムのエリアを再構成する場合のエリアの分割手順について説明しています。

付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害

分類索引・分類・フォルダの名称に半角コンマを使用している場合、文書配布機能、インポートユーティリティ、一括登録ユーティリティ、登録用属性ファイルによる属性登録機能で障害が発生します。ここでは、発生する現象と対策について説明しています。

付録 M ウィルスチェック機能の使用 (HP-UX の場合)

Server・Scan を利用したウィルススキャン機能を使用するための環境設定、使用方法について説明しています。

付録 N 用語解説

Document Manager で使用する用語について説明しています。

関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

Groupmax Integrated Desktop Version 6 ユーザーズガイド (3020-3-B38)

Groupmax Integrated Desktop Version 6 を操作する場合に参照してください。

Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド (3020-3-933)

Groupmax Document Manager Client Version2.0 を使って、環境を構築する場合に参照してください。

Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編 (3000-3-471)

Groupmax Mail Version 6 及び Groupmax Address Version 6 と連携する場合に参照してください。

Groupmax Agent Version 5 システム管理者ガイド (3000-3-A49)

Groupmax Agent Version 5 の環境を設定する場合に参照してください。

Groupmax Agent Version 5 エージェント作成ガイド (3020-3-A77)

サーバエージェントを作成する場合に参照してください。

Groupmax Document Manager Version 6 プログラマーズガイド (3020-3-B66)

Document Manager サーバの機能を利用したアプリケーションプログラムを C 言語で作成する場合に参照してください。

Groupmax Workflow Version 6 システム管理者ガイド (3000-3-477)

Groupmax Workflow Version 6 の環境を設定する場合に参照してください。

Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド (3000-3-475)

Groupmax Object Server Version 6 及び Groupmax High-end Object Server Version 6 の環境を設定する場合に参照してください。

Groupmax Form Version 6 ユーザーズガイド (3020-3-B36)

Groupmax Form Client・Design Version 6 の操作をする場合に参照してください。

Groupmax Server - Scan Version 6 (3020-3-B58)

ウイルススキャン機能を使用するための Groupmax Server - Scan Version 6 の環境を設定する場合に参照してください。

HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS (3000-7-306)

Bibliotheca/TS と連携する場合に参照してください。

Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド (3000-7-224)

Bibliotheca2 TextSearch Version 2 と連携する場合に参照してください。

HI-UX/WE2 システム管理 導入・保守編 (3000-9-106)

HI-UX/WE2 システム管理 導入・保守編 (3000-9-107)

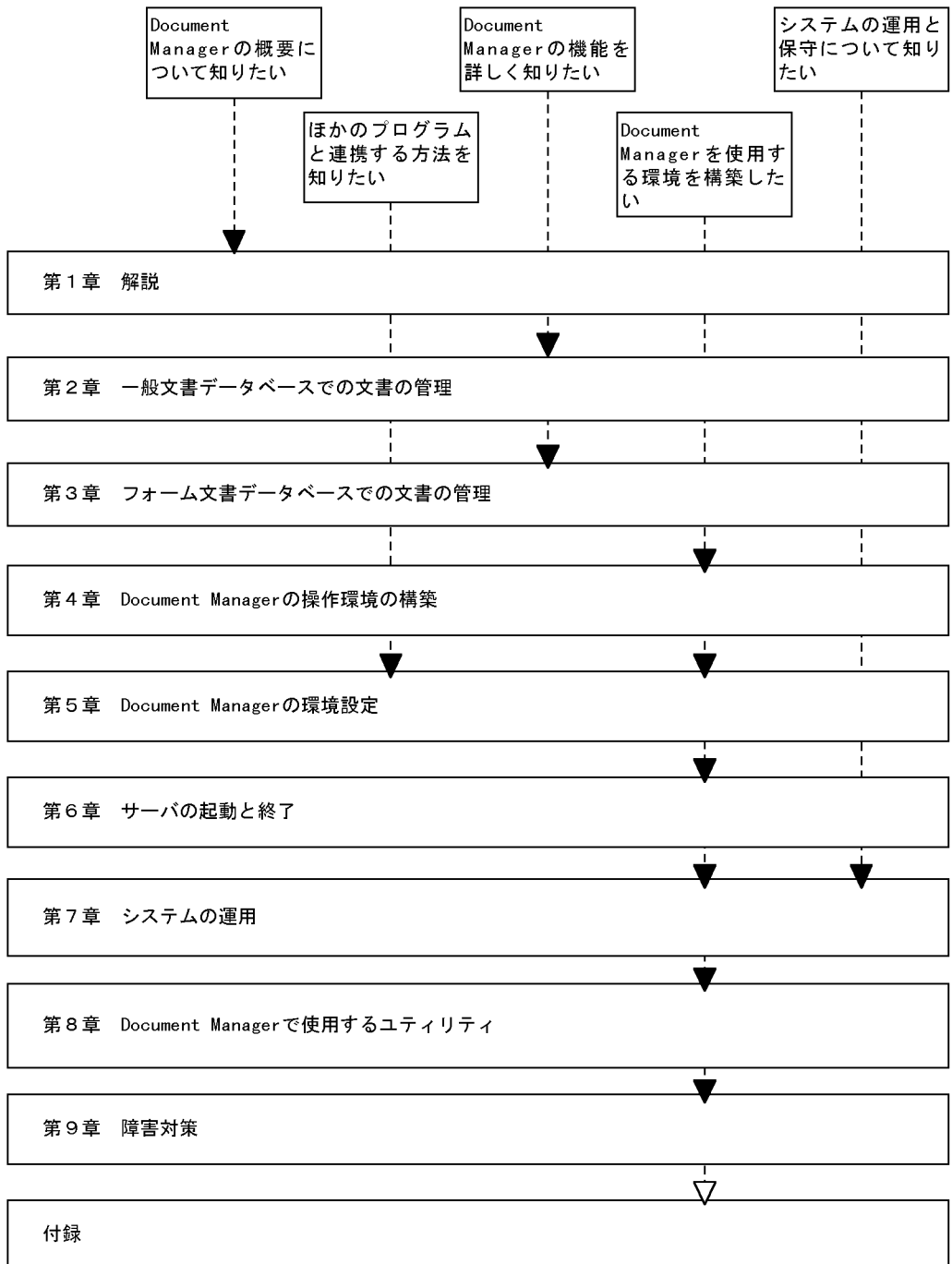
HI-UX/WE2 システム管理 導入・保守編 (3000-9-701)

Document Manager を 3050RX グループまたは 3500 シリーズに組み込む場合に、機種に応じたマニュアルを参照してください。


はじめに


読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択してお読みいただけます。利用目的別に、次の流れに従ってお読みいただくことをお勧めします。



(凡例)

 : 必ず読む項目

 : 必要に応じて読む項目

このマニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を、次のように定義します。

記号	意味
[]	メニュー名及びボタン名を示します。
{ }	この記号で囲まれている複数の項目のうちから一つを選択することを示します。項目が横に並べられ、記号 で区切られている場合は、そのうちの一つを選択します。 (例){ A B C }では、A、B または C のどれかを指定することを示します。
[]	この記号で囲まれている項目は省略してもよいことを意味します。複数の項目が横に並べて記述されている場合には、すべてを省略するか、記号 { } と同じくどれか一つを選択します。 (例1)[A]は「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。 (例2)[B C]では「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示します。
< >	項目を記述するとき従わなければならない構文要素を示します。
: : =	: : = の左にあるものを右にあるもので定義することを示します。 (例) A : : = B では、「A とは B である」と定義することを示します。
	1 文字の空白を示します。
n	n 文字以上の空白を示します。
...	この記号の直前に示す記号を繰り返し、複数個指定できることを示します。 (例)(<プロパティ>)... プロパティは一つ以上で複数個、繰り返して指定できます。

このマニュアルで使用する構文要素

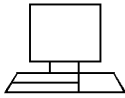
このマニュアルで使用する構文要素の種類を次に示します。

種類定義	
<英字>	A ~ Z a ~ z
<英大文字>	A ~ Z @ # ¥
<英小文字>	a ~ z
<カナ文字>	ア~ン ヲ カナ小文字 ` ° -
<数字>	0 ~ 9
<数値>	<数字> . + -
<英数字>	<英字>または<数字>
<漢字>	2 バイトコードの文字列

このマニュアルの図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を、次のように定義します。

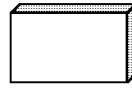
●パーソナルコンピュータ、ワークステーション



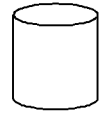
●入出力の動作



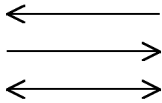
●プログラム



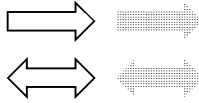
●ファイル



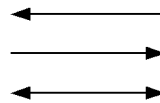
●制御の流れ



●データの流れ



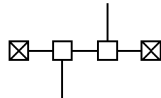
●その他の流れ



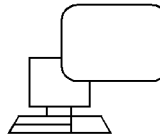
●ネットワーク



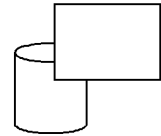
●バス形のLAN



●画面の表示



●ファイルの内容



このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名称を次に示す略称で表記しています。

製品名称	略称
AIX 5L	AIX
Bibliotheca/TS-SS 又は Bibliotheca/TextSearch-Server	Bibliotheca/TS ¹
Bibliotheca2 TextSearch Server Version 2	Bibliotheca2 TextSearch ¹
Bibliotheca2 TextSearch Server Library for Document Manager	
Groupmax Document Manager Version 6	Document Manager
Windows 3.1 Groupmax Document Manager Client Version2.0	Document Manager Client
Groupmax Document Manager Client-Development Kit Version 6	Document Manager Development Kit
Groupmax Document Manager Development Kit Version 6	
Microsoft(R) Excel	Excel
Groupmax Address Server Version 6	Groupmax Address ²
Groupmax Agent Version 5	Groupmax Agent

製品名称	略称
Groupmax Document Manager - Filtering Server Version 6	Groupmax Document Manager - Filtering Server
Groupmax Form Client-Design Version 6	Groupmax Form
Groupmax Integrated Desktop Version 6	Groupmax Integrated Desktop
Groupmax Mail Server Version 6	Groupmax Mail 2
Groupmax Document Manager Version 2.0	Groupmax Version2.0
Groupmax Document Manager Version 3	Groupmax Version 3
Groupmax Workflow Server Version 6	Groupmax Workflow
Groupmax World Wide Web Desktop Version 6	Groupmax WWW
HP-UX 10.20	HP-UX
HP-UX 11.0	
HP-UX 11i	
Microsoft(R) MS-DOS(R)	MS-DOS
Microsoft(R) Powerpoint(R)	PowerPoint
Groupmax Server - Scan Version 6	Server-Scan
Microsoft(R) Windows(R) Operating System Version3.1	Windows
Microsoft(R) Windows(R) 95 Operating System	
Microsoft(R) Windows(R) 98 Operating System	
Microsoft(R) Windows(R) Millennium Edition Operating System	
Microsoft(R) Windows(R) 2000 Server Network Operating System	Windows 2000
Microsoft(R) Windows(R) 2000 Advanced Server Network Operating System	
Microsoft(R) Windows NT(R) Server Version 4.0	Windows NT
Microsoft(R) Word	Word
Groupmax Object Server Version 6	オブジェクトサーバ
Groupmax High-end Object Server Version 6	

注 1 全文検索用のエンジンを、「全文検索サーバ」という略称で表記します。このマニュアルでは、「Bibliotheca/TS」と「Bibliotheca2 TextSearch」を指します。

注 2 このマニュアルでは、「Groupmax Address」及び「Groupmax Mail」を合わせて「Groupmax Address/Mail」と表記することがあります。

HP-UX , AIX でのディレクトリ名の表記について

このマニュアルでのディレクトリの表記は、HI-UX/WE2 を標準としています。したがって、HP-UX または AIX をお使いの場合は、`/usr/infoshare/...`を `/opt/infoshare/...`と読み替えてくだ

さい。

常用漢字以外の漢字の使用について

このマニュアルでは常用漢字を使用することを基本としていますが、次に示す用語については、常用漢字以外の漢字を使用しています。

宛先（あてさき） 臼（うす） 閉塞（へいそく）

KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）、1MB（メガバイト）、1GB（ギガバイト）、1TB（テラバイト）はそれぞれ 1,024 バイト、 $1,024^2$ バイト、 $1,024^3$ バイト、 $1,024^4$ バイトです。

目次

1	解 説	1
1.1	Document Manager の概要	2
1.1.1	Document Manager とは	2
1.1.2	Document Manager の特長	2
1.1.3	Document Manager の活用例	3
1.2	Document Manager の機能	6
1.2.1	文書の統合管理 - Document Manager データベースでの管理	6
1.2.2	文書の分類及び整理が容易 - 一般文書データベースでの管理	6
1.2.3	目的に応じた文書の管理 - フォーム文書データベースでの管理	8
1.2.4	セキュリティ機能による文書の共有化 - アクセス権の設定	9
1.3	Document Manager のシステム構成	10
1.3.1	Document Manager のプログラム構成	10
1.3.2	Document Manager のシステムを構成するプログラム	10
1.3.3	Document Manager と連携できるほかのプログラムとの関係	12
1.4	Document Manager の基礎知識	13
1.4.1	Document Manager での文書の管理の仕組み	13
1.4.2	サーバとユーザの関係	15
2	一般文書データベースでの文書の管理	19
2.1	一般文書	20
2.1.1	一般文書の概要	20
2.1.2	一般文書の管理	22
2.2	一般文書の管理体系	23
2.2.1	一般文書データベース	23
2.2.2	フォルダ	24
2.2.3	分類索引	27
2.2.4	属性の管理	29
2.2.5	アクセス権の管理	34
2.3	一般文書の検索	46
2.3.1	検索の種類	46
2.3.2	検索の方法	46
2.4	分類索引帳を利用した文書共用	53
2.4.1	分類索引帳とは	53

2.4.2	分類索引帳を利用したユーザ間の文書共用	55
2.5	文書配布機能による複数サーバでの文書共用	56
2.5.1	文書配布機能とは	56
2.5.2	文書配布機能に関する管理	61
3	フォーム文書データベースでの文書の管理	67
3.1	フォーム文書	68
3.1.1	フォーム文書の概要	68
3.1.2	フォーム文書の管理	68
3.2	フォーム文書データベース	70
3.2.1	フォーム文書データベースの概要	70
3.2.2	フォーム文書データベースの管理	76
4	Document Manager の操作環境の構築	81
4.1	一般文書を管理するための操作環境の設計と運用	82
4.1.1	一般文書を管理するためのオブジェクトについて	82
4.1.2	一般文書データベースの設計	82
4.1.3	一般文書データベースの定義と変更	83
4.1.4	フォルダの設計	86
4.1.5	フォルダの定義と変更	88
4.1.6	分類索引の設計	90
4.1.7	分類索引の定義と変更	92
4.1.8	分類索引帳の定義と運用	94
4.1.9	文書配布機能によるサーバの運用	94
4.1.10	配布する文書の種類	94
4.1.11	文書配布対象グループの操作	95
4.2	フォーム文書を管理するための操作環境の設計と運用	97
4.2.1	フォーム文書データベースの設計	97
4.2.2	フォーム文書データベースの定義と変更	104
4.3	Document Manager の使用例	110
4.3.1	一般文書データベースを使用した文書管理の例	110
4.3.2	フォーム文書データベースを使用した文書管理の例	115
5	Document Manager の環境設定	119
5.1	環境設定の流れ	120

5.2	環境を設定する前の準備	123
5.2.1	Document Manager を使用するユーザ及びグループの決定	123
5.2.2	データベースの構造の決定	123
5.2.3	ディレクトリ構成の決定	124
5.3	組み込み	125
5.3.1	Document Manager の前提プログラム及び関連プログラム	125
5.3.2	Document Manager の組み込み	126
5.4	オペレーティングシステムでの環境設定	127
5.4.1	通信設定ファイルの設定	127
5.4.2	オブジェクトサーバの環境変数の設定	127
5.4.3	環境変数の設定	128
5.5	オブジェクトサーバでの環境設定	129
5.5.1	初期設定パラメタでの指定	129
5.5.2	システム共通定義ファイルでの指定	133
5.6	Groupmax Address での環境設定	136
5.6.1	Document Manager サーバ情報の一元管理	136
5.6.2	Groupmax 全体でのユーザ情報の一元管理	138
5.6.3	ログイン先のサーバの切り替え	138
5.7	Document Manager での環境設定	140
5.7.1	Document Manager の使用環境の設定	140
5.7.2	文書配布機能を使用するための環境設定	151
5.7.3	イベント通知機能を使用するための環境設定	153
5.7.4	アプリケーションプログラムと連携するための環境設定	155
5.7.5	Groupmax Address を使用しない場合の環境設定	163
5.8	全文検索サーバと連携するための環境設定	165
5.8.1	Document Manager の文書と全文検索サーバとの関係	165
5.8.2	Document Manager の環境への登録	166
5.8.3	全文検索サーバでの環境設定	169
5.8.4	全文検索サーバと連携するときの文書の操作	170
5.8.5	テキスト自動抽出機能	171
5.9	Document Manager の環境の初期化	179
5.9.1	オブジェクトサーバの初期化	179
5.9.2	Document Manager の初期化と Document Manager データベースの作成	179
6	サーバの起動と終了	181
6.1	サーバの起動	182

6.1.1	サーバの起動手順	182
6.1.2	サーバの起動方法	182
6.2	サーバの終了	184
6.2.1	サーバの終了手順	184
6.2.2	サーバの終了方法	184

7

システムの運用 187

7.1	バックアップの取得方法	188
7.1.1	Document Manager のファイル	188
7.1.2	オブジェクトサーバのファイル	188
7.1.3	全文検索サーバのファイル	188
7.1.4	バックアップの取得例	189
7.2	特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録	190
7.2.1	特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録とは	190
7.2.2	特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録の操作	190
7.3	フォルダ，分類索引体系の抽出と登録	194
7.3.1	フォルダ，分類索引体系の抽出と登録とは	194
7.3.2	ユティリティの実行	194
7.3.3	定義情報ファイルの形式と編集	195
7.3.4	ログ情報の取得	198
7.3.5	一般文書データベース体系移行時の注意事項	200
7.4	文書の一括登録	201
7.4.1	文書の一括登録とは	201
7.4.2	文書の一括登録の操作	201
7.4.3	登録用属性ファイル	206
7.4.4	定義ファイル	210
7.5	フォーム文書の移行	212
7.5.1	フォーム文書の移行とは	212
7.5.2	フォーム文書の移行で移行できる情報	212
7.5.3	フォーム文書を移行するための準備	212
7.5.4	フォーム文書の移行手順	213
7.5.5	フォーム文書を移行する場合の注意事項	214
7.6	一般文書の圧縮	215
7.6.1	一般文書の圧縮とは	215
7.6.2	文書配布時の一般文書の圧縮	216
7.7	アクセスログに関する運用	218

7.7.1	アクセスログの取得	218
7.7.2	アクセスログの出力形式	221
7.8	文書配布ログに関する運用	226
7.8.1	文書配布ログの取得	226
7.8.2	文書配布ログの出力形式	227
7.9	ファイルの整合性に関する運用	229
7.9.1	全文検索サーバのテキストデータベースとの文書の整合性	229
7.9.2	サーバとクライアントの作業領域間の文書の整合性	229
7.9.3	文書の状態と作業領域との整合性	230
7.9.4	オブジェクトサーバとの整合性	231
7.10	作業領域の運用	233
7.10.1	作業領域と文書	233
7.10.2	作業領域の運用上の注意	233
7.11	テキストファイルに関する運用	235
7.11.1	テキストファイルの登録と削除	235
7.11.2	ユティリティを使用したテキストファイルの登録と削除	236
7.12	ほかのプログラムと連携するときの運用	239
7.13	文書の配布状態管理機能に関する運用	242
7.13.1	文書の配布状態管理機能	242
7.13.2	エクスポートファイルの自動削除機能	242
7.13.3	環境設定	242
7.13.4	運用手順	243
7.13.5	注意事項	243
8	Document Manager で使用するユティリティ	245
8.1	運用コマンド一覧	248
8.2	運用コマンドの文法	251
8.2.1	運用コマンドの指定方法	251
8.2.2	運用コマンドの実行結果	252
8.3	Document Manager の環境の初期化 (ISinitdb)	253
8.4	Document Manager の起動 (ISstart)	255
8.5	Document Manager の終了 (ISstop)	256
8.6	文書配布機能の実行環境作成 (ISreplica)	257
8.7	文書配布送受信デーモンの起動 (ISreplicastart)	258
8.8	文書配布送受信デーモンの終了 (ISreplicastop)	260
8.9	複数グループアクセス権情報を出力又は更新する (ISdefmga)	261

8.10	ファイルの整合 (ISfsck)	265
8.11	サーバ作業領域のチェック (ISdirchk)	267
8.12	文書配布情報ファイルの取り込み (ISimport)	273
8.13	文書配布対象グループの一覧表示, 作成又は削除 (ISgrpct)	274
8.14	文書配布対象グループ情報の表示 (ISgrpinf)	277
8.15	配布先サーバの追加又は削除 (ISaddsrv)	285
8.16	文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)	288
8.17	文書の配布状態表示 (ISrpstat)	290
8.18	文書の再配布機能 (ISrpsnd)	295
8.19	フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録 (IScpdef)	297
8.20	特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する (ISexport 及び ISimport)	301
8.21	フォーム文書の抽出 (ISexform)	304
8.22	フォーム文書の取り込み (ISimform)	305
8.23	文書の一括登録 (ISregist)	306
8.24	文書の圧縮 (IScomprs)	308
8.25	文書の圧縮の解除 (ISexpand)	309
8.26	テキストファイルの登録又は削除 (ISstsync)	310
8.27	フォルダの一覧表示 (ISlsfldr)	312
8.28	文書実体ファイル格納ディレクトリの変更 (ISchfldr)	315
8.29	フォルダ階層の移動 (ISmvfldr)	317
8.30	文書一覧の表示 (ISlsdoc)	318
8.31	サーバ情報一覧の更新 (ISmksvls)	322
8.32	ログインユーザ数の表示 (ISuserls)	323
8.33	分類索引の一覧表示 (ISlsview)	325
8.34	TS 文書 ID 変換テーブルの生成 (ISstidtbl)(HI-UX/WE2 又は HP-UX の場合)	328
8.35	ローカルグループ情報のキャッシュ化 (ISlgrpcc)	329
8.36	文書をフォルダ, 一般文書データベース, 分類索引, 分類又は文書単位で一括して移動する (ISmvdoc)	331
8.37	文書をフォルダ, 一般文書データベース, 分類索引, 分類又はフォーム文書データベースごと一括して削除する (ISdelidx)	333
8.38	ユーザ ID, グループ ID を一括して変更する (ISchusrid)	335
8.39	フォルダ名称一括変更 (ISchflnm)	340
8.40	運用コマンド実行時の注意事項	345
8.41	リターンコード一覧	346

9

障害対策	347
9.1 障害が発生してから正常に戻るまでの流れ	348
9.2 障害の要因の確認	350
9.2.1 障害の要因の確認手順	350
9.2.2 メッセージが出力されずにシステムが停止した場合	350
9.2.3 Document Manager 組み込み時に障害が発生した場合	350
9.2.4 「KFXO」で始まるメッセージが出力された場合	350
9.2.5 「KIIS」で始まるメッセージが出力された場合	350
9.3 障害への対処	352
9.3.1 ユーザが対処できる障害の場合	352
9.3.2 ユーザが対処できない障害の場合	352
9.4 障害からの回復	356
9.4.1 Document Manager サーバで障害が発生した場合の回復方法	356
9.4.2 オブジェクトサーバで障害が発生した場合の回復方法	356
9.4.3 セッション異常終了時の回復方法	356
9.5 環境設定時の障害対策	357
9.5.1 Document Manager サーバの環境設定時に障害が発生した場合	357
9.5.2 クライアントからサーバにログインできない場合	358
9.5.3 文書配布受信デーモンが起動しない場合	359

付録

付録	361
付録 A Document Manager のディレクトリ構成	362
付録 A.1 Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成	362
付録 A.2 Document Manager の作業領域のディレクトリ構成	365
付録 B 属性ファイル	367
付録 C Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録	379
付録 D ローカルグループの登録	381
付録 E Document Manager に登録できるファイルの規則	383
付録 F 全文検索サーバと連携する場合の注意	385
付録 G 異なるバージョンが混在する環境を使用する場合の注意	386
付録 H テキストデータベースの移行 (HI-UX/WE2 又は HP-UX の場合)	388
付録 H.1 移行情報出力ユーティリティの機能	388
付録 H.2 テキストデータベースの移行手順	389
付録 H.3 テキストデータベースの移行パターン	391

付録 I メッセージ	393
付録 I.1 メッセージの形式	393
付録 I.2 マニュアルのメッセージの見方	393
付録 I.3 メッセージ	393
付録 I.4 オブジェクトサーバの詳細コード	498
付録 I.5 システムコールのリターンコード (errno)	500
付録 J フォルダ名称が重複した環境における文書のサーバ移行例	502
付録 K エリア再構成時の分割手順	504
付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害	506
付録 M ウィルスチェック機能の使用 (HP-UX の場合)	508
付録 M.1 ウィルスチェック機能とは	508
付録 M.2 環境設定	509
付録 M.3 ユティリティ	510
付録 M.4 運用手順	516
付録 M.5 障害発生時の対処	516
付録 M.6 注意事項	517
付録 N 用語解説	518

索引

目次

図 1-1	Document Manager のプログラム構成例	11
図 1-2	作業領域を使った一般文書の操作の概要	15
図 1-3	ユーザとグループの関係	17
図 2-1	排他モードと文書の操作	21
図 2-2	フォルダ階層を使用した文書管理	25
図 2-3	分類索引の構造	28
図 2-4	分類索引を使用した文書管理	29
図 2-5	分類索引、フォルダ及び一般文書データベースを使った検索例	50
図 2-6	分類索引帳の作成例	54
図 2-7	サーバ間での文書配布の仕組み	57
図 3-1	フォーム文書データベースの概要	70
図 3-2	目的別一覧の表示例	72
図 3-3	フォーム文書と返信の例	73
図 3-4	受注伝票フォームの例	75
図 3-5	目的別一覧「顧客別」で一覧表示したフォーム文書の例	75
図 3-6	データの集計例	75
図 4-1	営業日報のフォームの設計例	98
図 4-2	ディスカッション用のフォームの設計例	98
図 4-3	フォームとユーザ定義属性の関係	99
図 4-4	人事データ管理用のフォームの作成例	103
図 4-5	フォルダの構築例	111
図 4-6	分類索引の構築例（会社組織）	113
図 4-7	分類索引の構築例（プロジェクト）	114
図 4-8	「営業日報」データベースに定義するフォームの例	115
図 5-1	Document Manager の環境設定の流れ（1/2）	121
図 5-2	Document Manager の環境設定の流れ（2/2）	122
図 5-3	初期設定パラメタの指定例	130
図 5-4	Groupmax Address での Document Manager 用アドレスユーザの定義例	136
図 5-5	Document Manager と全文検索サーバの関係（文書を登録する場合）	165
図 5-6	テキスト自動抽出サーバを使用したテキスト抽出の処理の流れ	172
図 7-1	文書格納ディレクトリの例	202
図 7-2	登録用属性ファイルの例	203
図 7-3	定義ファイルの作成例	203

図 7-4	文書を分類索引に登録する場合の登録用属性ファイルの例	204
図 7-5	登録用属性ファイルの定義例	207
図 7-6	参照用属性ファイルから登録用属性ファイルを作成する定義例	209
図 8-1	複数グループアクセス権設定情報の出力例	263
図 8-2	詳細情報の出力例	270
図 8-3	文書配布対象グループの一覧表示例	279
図 8-4	文書配布対象グループの文書更新情報の表示例	281
図 8-5	文書配布対象グループの文書一覧の表示例	283
図 9-1	障害が発生してから正常に戻るまでの作業の流れ	349
図 A-1	Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成 (1/3)	363
図 A-2	Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成 (2/3)	364
図 A-3	Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成 (3/3)	365
図 A-4	サーバの作業領域のディレクトリ階層	366
図 B-1	属性ファイルの構成	368
図 H-1	テキストデータベースの移行パターン	392
図 M-1	システム構成の概要	509

表目次

表 1-1	Document Manager を活用できる業種の例	4
表 2-1	改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書への操作	26
表 2-2	一般文書データベースのシステム定義属性	30
表 2-3	一般文書のシステム定義属性	31
表 2-4	フォルダのシステム定義属性	32
表 2-5	分類索引のシステム定義属性	33
表 2-6	ユーザ定義属性として定義できる属性型	34
表 2-7	一般文書のアクセス権の種類と許可される操作（Groupmax Integrated Desktop を使用する場合）	36
表 2-8	一般文書のアクセス権の種類と許可される操作（Document Manager Client を使用する場合）	37
表 2-9	一般文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作（Groupmax Integrated Desktop を使用する場合）	37
表 2-10	一般文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作（Document Manager Client を使用する場合）	38
表 2-11	フォルダのアクセス権の種類と許可される操作（Groupmax Integrated Desktop を使用する場合）	39
表 2-12	フォルダのアクセス権の種類と許可される操作（Document Manager Client を使用する場合）	39
表 2-13	分類索引及び分類のアクセス権の種類と許可される操作（Groupmax Integrated Desktop を使用する場合）	40
表 2-14	分類索引及び分類のアクセス権の種類と許可される操作（Document Manager Client を使用する場合）	40
表 2-15	設定される排他モードとアクセス権の関係（Groupmax Integrated Desktop を使用した場合）	44
表 2-16	設定される排他モードとアクセス権との関係（Document Manager Client を使用した場合）	45
表 3-1	フォーム文書のシステム定義属性	68
表 3-2	集計フォームを利用した属性型別の検索機能一覧	74
表 3-3	フォーム文書データベースのシステム定義属性	76
表 3-4	フォーム文書データベースのユーザ定義属性	77
表 3-5	フォーム上の属性型と Document Manager での属性型の対応	78
表 3-6	フォーム文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作	79
表 3-7	フォーム定義のアクセス権の種類と許可される操作	79
表 3-8	目的別一覧定義のアクセス権の種類と許可される操作	80

表 4-1	Document Manager で管理する文書の種類と定義する属性の例	82
表 4-2	属性値を変更できる一般文書データベースの属性 (Groupmax Integrated Desktop の場合)	85
表 4-3	属性値を変更できる一般文書データベースの属性 (Document Manager Client の場合)	85
表 4-4	属性値を変更できるフォルダの属性	89
表 4-5	分類索引の設計例とリンクさせる文書の例	91
表 4-6	属性値を変更できる分類索引 (最上位分類) の属性	92
表 4-7	属性値を変更できる分類の属性	93
表 4-8	管理者が使用できる目的別一覧「管理者用」の定義例	103
表 4-9	一般ユーザが使用できる目的別一覧「一般ユーザ用」の定義例	104
表 4-10	属性値を変更できるフォーム文書データベースの属性	109
表 4-11	フォーム文書データベースに読み込まれる属性型	116
表 4-12	目的別一覧「製品別」の定義例	116
表 4-13	目的別一覧「担当者及び製品別」の定義例	116
表 5-1	Document Manager の前提プログラム及び関連プログラム	125
表 5-2	エリアの定義数	132
表 5-3	エリアの名称の規則	133
表 5-4	エリアのセグメントサイズ	133
表 5-5	HI-UX/WE2 版及び HP-UX 版の Document Filter for Text Search がバージョン 02-00 時点でサポートしている文書の種類	178
表 5-6	Windows 版の Document Filter for Text Search がバージョン 02-10 時点でサポートしている文書の種類	178
表 7-1	定義種別の一覧	195
表 7-2	属性種別の一覧	196
表 7-3	アクセス権の種類を表す文字	197
表 7-4	グループ種別を示す文字列	197
表 7-5	ユーザ定義属性の指定方法	198
表 7-6	登録用属性ファイルに定義する項目	206
表 7-7	エクスポートファイルの状態及び配布先サーバでの設定と登録される一般文書の圧縮の状態	217
表 7-8	環境の初期化の手順	239
表 8-1	Document Manager の運用コマンド一覧	248
表 8-2	複数グループアクセス権設定情報の出力項目	262
表 8-3	詳細情報として出力される内容	269
表 8-4	文書配布対象グループを一覧表示する場合の表示項目 (コンソールへの出力)	279
表 8-5	文書配布対象グループを一覧表示する場合の表示項目 (ファイルへの出力)	279

表 8-6	文書配布対象グループの文書更新情報を表示する場合の表示項目（コンソールへの出力）	280
表 8-7	文書配布対象グループの文書更新情報を表示する場合の表示項目（ファイルへの出力）	281
表 8-8	フォルダ単位に出力されるヘッダ情報の出力形式（コンソールへの出力）	282
表 8-9	文書の一覧の出力形式（コンソールへの出力）	282
表 8-10	フォルダ単位に出力されるヘッダ情報の出力形式（ファイルへの出力）	283
表 8-11	文書の一覧の出力形式（ファイルへの出力）	283
表 8-12	文書一覧情報	319
表 8-13	理由コード一覧	342
表 8-14	リターンコード一覧	346
表 B-1	属性ファイルでの属性の並び（一般文書の場合）	369
表 B-2	属性ファイルでの属性の並び（一般文書データベースの場合）	373
表 C-1	グループに所属するユーザ	380
表 I-1	オブジェクトサーバの詳細コード	498
表 I-2	システムコールのリターンコード（errno）別の要因	500
表 L-1	分類索引・分類・フォルダの名称に半角コンマを使用した場合に発生する現象と対策	506
表 M-1	Server-Scan での指定と Document Manager の処理との関係	510

1

解 説

この章では、Document Manager の概要、特長及び機能について説明します。また、Document Manager とほかのプログラムの関係についても説明します。

1.1 Document Manager の概要

1.2 Document Manager の機能

1.3 Document Manager のシステム構成

1.4 Document Manager の基礎知識

1.1 Document Manager の概要

この節では、Document Manager の概要及び特長について説明します。

1.1.1 Document Manager とは

企業内では、文書を電子的に作成することが日常的になりました。しかし、文書が電子的な情報になっても、その利点が十分に活用されているとは限りません。例えば、文書が多くのコンピュータに分散して情報が探せなかったり、複数の人が同じ文書を保管したりするむだがあります。また、せっかく電子化した文書も、最終的には紙に印刷して管理されていることもあります。

Document Manager は、電子化された文書を効率良く管理し、情報を有効に活用するために開発されたプログラムです。

Document Manager は、ネットワーク上のコンピュータ（クライアント）で作られた文書を統括して管理します。また、これらの文書を検索しやすいように分類、整理して、電子化された情報を効率良く活用できるよう支援します。

1.1.2 Document Manager の特長

ここでは、Document Manager の持つ機能と特長について説明します。

文書を統括して情報を共有化

Document Manager ではデータベースで文書を管理します。分散したコンピュータ上で独立している文書をデータベースで統括して管理できるので、大切な情報は常に最新の状態グループや企業内で共有できます。ただし、公開したくない文書にはアクセス権（文書を参照したり編集したりできる権限）を設定できるので、機密を守って管理することもできます。

文書を体系化して分類、整理

Document Manager のデータベースには、ユーザの利用環境に合わせてフォルダを定義できます。文書をフォルダに格納することで、体系的に管理できるようになります。また、文書には複数の索引を付けることができるので、フォルダとは別の観点で文書を分類、整理できます。

文書をいろいろな方法で検索

文書を管理するフォルダの体系をたどったり、索引を基に文書を絞り込みながら検索できます。また、Document Manager で管理する文書には、作成した日付や作成者などの属性が付けられます。この属性を基に文書を検索できます。さらに、文書中の単語をキーワードにして検索することもできます（全文検索サーバとの連携が必要です）。

文書の再利用

電子化された文書は、内容を更新して再利用できます。例えば、Document Manager

に、議事録や旅費精算書のような定型文書のフォーマットを文書として登録しておきます。議事録や旅費精算書を作成するときには、このフォーマットをダウンロードして、必要なデータを入力するだけです。

Windows アプリケーションプログラムとの連携

Document Manager は、Word や Excel といった Windows アプリケーションプログラムで作成したファイルを文書として管理できます。したがって、Document Manager の導入前に作成したファイルを管理する場合でも、そのファイルを作成し直したり、特別にデータを変換したりする必要はありません。

1.1.3 Document Manager の活用例

次に、営業活動支援のためのプログラムとして Document Manager を活用する例を紹介します。

(1) 情報を分類して管理する

毎日の営業活動によって集めた情報は、今後の営業戦略や方針を決定するための資料になります。Document Manager を使うと、これらの資料を目的に合った分類方法で管理して、必要な情報を取り出せます。

例えば、集めた情報は「営業日報」、「顧客情報」などのように企業内や部署内で決められた形式で文書化し、分類します。文書の分類方法は、目的に合わせて設定できます。「営業第1課」、「営業第2課」のように部署内の組織別に分類してもよいし、開発する製品ごとに分類、整理しても便利です。

必要な情報を探るときは、分類から絞り込んで目的の文書を取り出せます。

例えば、「確か営業第2課のだけれど、製品Aに関する顧客情報を持っていた」のように、複数の観点から文書を絞り込めます。したがって、文書の名前や作成者が分からなくても情報を取り出せます。

(2) 情報を検索する

Document Manager に登録した文書は、分類での絞り込みのほかに、いろいろな方法で検索できます。

例えば、営業日誌が Document Manager のデータベースに格納されている場合、情報を検索するには次の方法があります。

文書名（文書の登録名）で検索する

文書を作成した日付で検索する

（文書が更新されている場合には、更新した日付でも検索できる）

文書を作成したユーザの名前で検索する

文書中のキーワードから検索（全文検索）する

（全文検索サーバと連携した場合だけ検索できる）

1. 解説

また、上記の方法を組み合わせた検索もできます。また、検索した文書は、連携したアプリケーションプログラムを使って編集できます。

このほかにも、製品の取扱説明書などをデータベースに登録すれば、顧客からの問い合わせに対して該当する文書を検索して対応できます。

(3) 情報を基に提案書などを作成する

営業担当者が提案書を作るには、たくさんの情報が必要です。しかもその情報は、最新である必要があります。Document Manager は、提案書や報告書のような、最新の情報を基にした文書の作成を支援します。

例えば、担当製品に関する情報をデータベースに登録します。こうすれば、製品の仕様が変更になるなど情報に変更があるたびに、文書を更新できます。文書を更新しても、更新前の文書はデータベースに残っているため、情報の変更の過程が分かります。

また、提案書を作成するときには、製品に関する文書を検索し、引用する情報をそのまま提案書に写すことができます。さらに、作成した提案書は、顧客の名称や住所などの顧客情報と併せて管理できます。また、Word など、普段の業務で使っているアプリケーションプログラムを使って文書の作成や編集ができます。

(4) 様々な業種での Document Manager の活用例

Document Manager を効果的に運用及び活用できる業種を、表 1-1 に示します。

表 1-1 Document Manager を活用できる業種の例

業務の種類	業務の内容	利用する主な組織・部門
文書の検索を中心とした業務	議事録の検索	官公庁
	特許情報の検索	製造業
	技術文献の検索	製造業，研究機関
	新聞記事の検索	新聞社，企画部門
	図書文献の検索	図書館
	顧客問い合わせサービス	製造業
	各種情報の検索	情報サービス業
文書の管理を中心とした業務	文書ファイリング	企画部門，製造業設計部門，研究機関，官公庁
	業務指向文書管理（顧客管理，製品管理との連携）	製造業設計部門，営業部門
文書の編集を中心とした業務	技術文書・設計文書の編集	製造業設計部門
	製品マニュアルの編集	製造業
	業務マニュアルの編集	金融業

業務の種類	業務の内容	利用する主な組織・部門
	論文・技術報告書の執筆	研究・教育機関
	法令改正の支援	官公庁

1.2 Document Manager の機能

この節では、Document Manager の機能について説明します。

1.2.1 文書の統合管理 - Document Manager データベースでの管理

Document Manager では、アプリケーションプログラムで作成した文書を、データベースに格納して管理しています。Document Manager で使用するデータベースを、Document Manager データベースといいます。Document Manager データベースには、文書のデータのほかに、文書を作成した日付や作成者などの情報（属性）も管理されません。

1.2.2 文書の分類及び整理が容易 - 一般文書データベースでの管理

（1）一般文書データベースとフォルダでの管理

Document Manager では、同じ属性を持つ文書をデータベースにまとめて管理します。これを一般文書データベースといいます。一般文書データベースには、文書ひな形という文書の書式を登録できます。文書ひな形を基に文書を作成すると、統一された形式で文書を管理できます。文書ひな形は Word や Excel などのアプリケーションプログラムであらかじめ作成し、一般文書データベースに登録します。

一般文書データベースに格納されている文書は階層化した体系で管理します。この体系をフォルダといいます。一般文書データベースに格納されているすべての文書はフォルダに属します。

なお、一般文書データベースに格納される文書を一般文書といいます。

一般文書は、Word や Excel などのアプリケーションプログラムで作成します。

（2）複数の観点から文書を検索する分類索引での管理

Document Manager データベースでは、一般文書を複数の観点から分類して管理できます。この分類を分類索引といいます。分類索引は階層構造をしており、目的に応じて複数個定義できます。そして、作成した一般文書がどの分類に所属するのかを定義します。分類索引を使うと、フォルダに格納した一般文書を複数の観点から検索できます。

例えば、「技術部のだれかが作成した A プロジェクトに関する特許」のように、複数の観点で絞り込みをして検索できます。

分類索引をたどりながら一般文書を探す方法を、分類索引検索といいます。

(3) 更新された文書を時系列にバージョン管理

更新する前の文書と更新後の文書には、バージョン（版）が付けられて管理されています。したがって、Document Manager データベースでは、文書を更新しても、更新する前の状態が残されています。このため、文書を誤って更新した場合の回復に利用できません。

なお、バージョン管理できるのは一般文書だけです。

(4) 文書検索の種類

一般文書は次に示す様々な方法で目的の文書を検索できます。

(a) フォルダをたどって文書を絞り込む検索（フォルダ検索）

一般文書はどれか一つのフォルダに格納されています。フォルダをたどりながら、フォルダに格納されている一般文書の一覧を表示できます。

(b) 文書に付けられた情報を条件にした検索（条件検索）

一般文書には、属性や格納先のフォルダなどの様々な情報が付けられています。これらの情報を検索条件として指定できます。検索条件として指定できる情報と検索例について次に示します

一般文書が格納されているフォルダを条件にした検索

文書が格納されているフォルダを条件にした検索ができます。例えば、「フォルダ『議事録』に格納された一般文書を探す」のような検索ができます。

文書の属性値を条件にした検索

文書には、作成者や日付などの属性が付けられて管理されています。その属性を基にして、例えば、「1997年12月10日から1998年1月10日までに作成された文書を探す」のような検索ができます。

文書中のキーワードを条件にした検索（全文検索）

全文検索サーバと連携すると、文書に含まれる単語を条件にして検索できます。例えば、「A社の新製品について書かれた報告書を探したい」という場合、「A社」及び「新製品」という単語を含む文書を検索できます。

分類索引を使用した検索

一般文書は、一つ以上の分類索引の複数の分類に登録できます。これらの分類索引へのリンクを検索条件として指定できます。

例えば、「技術部のだれかが作成したAプロジェクトに関する企画書」という文書を検索する場合は、分類索引「組織」の「技術部」の分類と、分類索引「企画書」の「Aプロジェクト」の分類の両方に登録されている文書を検索できます。

一般文書が管理されている一般文書データベースを条件にした検索

一般文書データベースを複数作成して運用している場合は、文書が管理されている一般文書データベースを条件として検索できます。例えば、「文書データベース「営業日報」で管理している一般文書を探す」のような検索ができます。

1. 解説

なお、これらの検索条件は一回の検索で、複数指定できます。したがって、文書名だけを条件とするような単純な検索から、文書名、文書中のキーワード、リンク先の分類索引というように条件を複数指定した複合的な検索まで、柔軟に対応できます。

(c) 分類索引をたどって文書を絞り込む検索（分類索引検索）

一般文書を登録する分類索引は階層構造を持つことができます。文書を登録した分類索引を下位にたどりながら一般文書を検索できます。

(d) 検索結果を論理演算した検索（論理演算検索）

検索で得た検索結果の集合同士を論理演算して検索できます。幾つかの検索結果の集合の論理積（AND 演算）を求めて、その結果をベースにして更に絞り込んで検索することもできます。

(5) 複数サーバ間での文書の共用 - 文書配布機能による文書の配布

Document Manager では、あるサーバで管理している文書の複製を別のサーバに配布して、文書を複数のサーバ間で共用できます。この機能を文書配布機能といいます。なお、配布できる文書は一般文書だけです。

文書配布機能で文書を配布する側のサーバを配布元サーバといいます。また、文書を配布される側のサーバを配布先サーバといいます。

ユーザから文書の配布要求があると、配布元サーバは、該当する文書実体ファイルとそれに関連するファイルを Document Manager データベースから抽出し、配布先サーバに配布します。配布先サーバは、配布された文書実体ファイルを、配布元サーバ側と同じ名称の文書データベースに登録します。同様に、配布元サーバ側と同じ名称のフォルダ及び分類索引にも文書を登録します。これによって、配布元サーバと配布先サーバの間で文書を共用できます。

1.2.3 目的に応じた文書の管理 - フォーム文書データベースでの管理

Document Manager では、業務の目的に応じたデータベースを定義できます。これをフォーム文書データベースといいます。フォーム文書データベースには、フォームという文書の型を定義し、このフォーム上にデータを入力して文書を作成します。作成された文書に対してコメントを付けたり、返信したりすることもできます。フォーム文書データベースに格納される文書をフォーム文書といいます。

フォーム文書は、Groupmax Form で作成したフォームを基に作成します。作成したフォーム文書は、目的に応じて定義した表示形式（目的別一覧）によって、様々な観点から一覧表示できます。

1.2.4 セキュリティ機能による文書の共有化 - アクセス権の設定

情報を参照したり更新したりできる権利を、アクセス権といいます。アクセス権が設定されていないユーザは、情報を参照したり更新したりできません。

文書を共有化すると、文書を公開する範囲を決めたり、参照できるユーザを限定したりする必要があります。アクセス権は、一般文書、一般文書データベース、フォルダ、分類索引、フォーム文書データベース、フォーム定義及び目的別一覧定義の単位で設定できます。したがって、文書を共有化してもきめ細かい機密保護ができます。

1.3 Document Manager のシステム構成

この節では、Document Manager を使用する環境とシステム構成について説明します。

1.3.1 Document Manager のプログラム構成

Document Manager は、クライアント・サーバシステムの形態で稼働します。クライアントで使用するプログラムは Groupmax Integrated Desktop の文書管理機能（共用キャビネット）又は Document Manager Client です。クライアントの操作については、各プログラムのマニュアル又はオンラインヘルプを参照してください。

サーバで使用するプログラムは Groupmax Document Manager Version 6 です。これを特に、Document Manager サーバと呼ぶこともあります。

なお Document Manager Development Kit を使うと、Document Manager サーバの機能を利用したアプリケーションプログラムを C 言語で作成できます。Document Manager Development Kit については、マニュアル「Groupmax Document Manager Version 6 プログラマーズガイド」を参照してください。

1.3.2 Document Manager のシステムを構成するプログラム

Document Manager は、次の前提プログラム及び関連プログラムの環境で稼働します。

オブジェクトサーバ

Document Manager データベースを共有するために使用します。オブジェクトサーバは、文書の属性などを管理するための格納エンジンとして使用します。

オブジェクトサーバとして、Groupmax Object Server Version 6 又は Groupmax High-end Object Server Version 6 を使用できます。

Groupmax Mail

Groupmax Mail で受信したメールを Document Manager に保存できます。反対に、Document Manager で管理している文書を、メールで発信することもできます。

また、文書配布機能を使って文書を配布する場合も、Groupmax Mail を使用します。

Groupmax Address

Groupmax Address は、Groupmax のアプリケーションプログラムのユーザ情報（ユーザ ID など）を一元管理します。また、Groupmax Address に複数のサーバを登録しておけば、クライアントからの操作でログイン先のサーバを切り替えることもできます。

Groupmax Form

フォーム文書データベースに登録するフォームの作成や、フォーム文書の作成及び参照に使用します。

Groupmax Agent

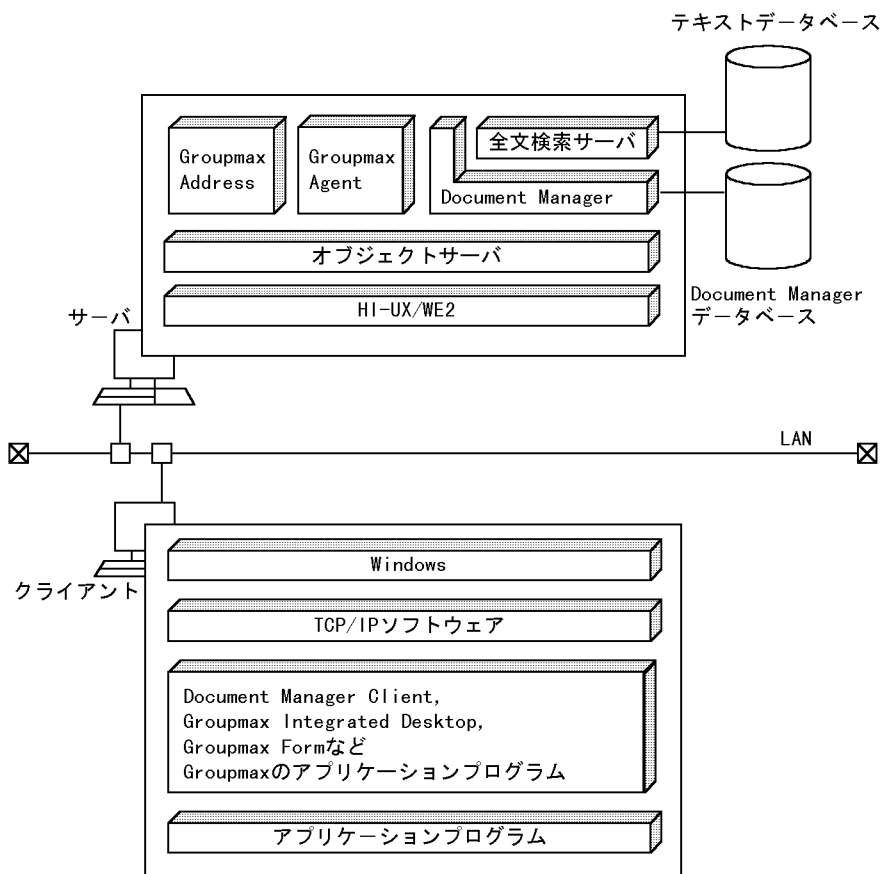
エージェントによる一般文書の登録監視，一般文書及びフォーム文書の自動削除などに使用します。

全文検索サーバ

文書に含まれる単語をキーワードにして検索する方法である，全文検索に使用します。全文検索サーバとしては，Bibliotheca/TS 又は Bibliotheca2 TextSearch を使用します。

Document Manager のプログラム構成例を，図 1-1 に示します。

図 1-1 Document Manager のプログラム構成例



注 Groupmaxの各アプリケーションプログラムと連携する場合は，前提プログラムの環境に注意してください。

1.3.3 Document Manager と連携できるほかのプログラムとの関係

ここでは、Document Manager がほかのプログラムと連携してどのように稼働するかについて説明します。

(1) Word 及び Excel などのアプリケーションプログラムとの関係

Word 及び Excel などのアプリケーションプログラムで作成した文書を Document Manager データベースに格納して管理できます。例えば、文書のひな形を Word で作成して一般文書データベースに登録しておくことで、共通の書式で文書の作成や管理ができます。

これらのアプリケーションプログラムの情報は、あらかじめシステム管理者が定義しておきます。この定義の方法については、「5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定」を参照してください。

(2) 全文検索サーバとの関係

Document Manager では、全文検索サーバの機能を利用して全文検索ができます。全文検索とは、文書に含まれる単語を指定して、該当する文書を探し出す方法です。例えば、「『新製品』について書かれた文書を検索する」という場合、「新製品」という単語が含まれる文書がすべて検索されます。

Document Manager で全文検索をするには、全文検索サーバにテキストデータベースを定義します。Document Manager データベースでは Word などで作成した文書が管理されます。テキストデータベースには、文書から抽出したテキストデータが登録されます。

全文検索サーバと連携するには、接続する全文検索サーバのサーバの名称や、テキストデータベースの名称などをシステム管理者が定義しておきます。この定義の方法については、「5.8 全文検索サーバと連携するための環境設定」を参照してください。

1.4 Document Manager の基礎知識

ここでは、Document Manager での文書処理の基礎的な概念について説明します。

1.4.1 Document Manager での文書の管理の仕組み

ここでは、Document Manager で扱う文書の概念と、その管理の仕組みについて説明します。

(1) Document Manager データベース

Document Manager では、ユーザがアプリケーションプログラムを使って作成したファイル（文書実体ファイル）に、作成した日時やユーザ名などの属性を付けたものを合わせて、文書と呼びます。

Document Manager では、文書を Document Manager データベースで管理しています。

Document Manager データベースは、アプリケーションプログラムで作成した文書実体ファイルを格納する領域と、文書の属性情報を格納する領域で構成されます。文書の属性を格納する領域は、オブジェクトサーバ上に作成されます。このエリアは、オブジェクトサーバのスキーマと 1 対 1 で対応しています。なお、Document Manager データベースは、サーバに一つあります。

(2) Document Manager で扱う文書

Document Manager で扱う文書には一般文書とフォーム文書があります。

一般文書

Word 及び Excel などのアプリケーションプログラムで作成された文書です。一般文書データベースとフォルダで管理されます。さらに、フォルダ及び分類索引を使って管理できます。

フォーム文書

Groupmax Form で作成されたフォームを基に作成された文書です。フォーム文書データベースで管理されます。

(3) 文書を管理する体系

(a) 一般文書を管理する体系

一般文書は、次に示す三つの体系で管理されます。これらの体系は Document Manager データベースで管理されています。

一般文書データベース

一般文書データベースは、管理する一般文書の属性を定義する単位です。同じ文書データベースで管理している文書は、同じ形式を使用していたり、同じ属性を持っていたりします。一般文書は、必ず一般文書データベースで管理されます。

1. 解説

フォルダ

フォルダは、ディレクトリを使用したファイル管理のような役目をします。フォルダは、階層構造を Document Manager データベースに一つ構築できます。一般文書は必ずフォルダで管理されます。

分類索引

分類索引は、一般文書を様々な観点から検索するための分類です。分類索引は Document Manager データベースに複数個の階層構造を構築できます。

(b) フォーム文書を管理する体系

フォーム文書はフォーム文書データベースで管理されます。フォーム文書データベースは Document Manager データベースで管理されます。

フォーム文書データベース

フォーム文書データベースは、管理するフォーム文書の属性や、基になるフォームを格納する体系です。フォーム文書は必ずフォーム文書データベースで管理されます。

(4) 文書と作業領域

(a) 作業領域とは

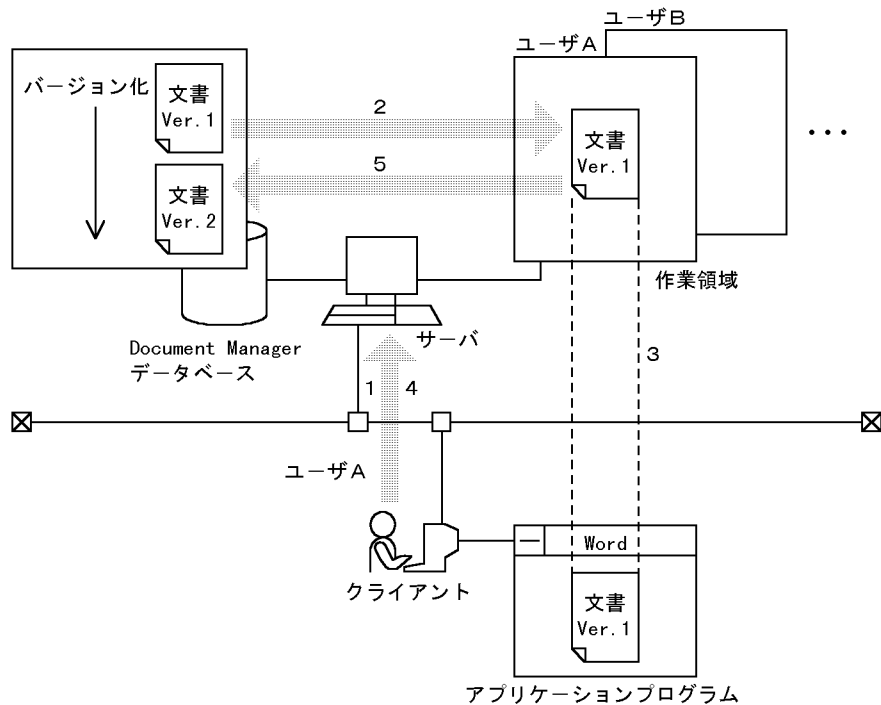
文書を作成したり編集したりするには、Document Manager によってユーザごとに割り当てられた作業領域を使います。Document Manager データベースのデータを直接編集しないので、不当なデータの更新を防ぐことができます。また、作業領域を経由すれば、Document Manager と連携していないほかのプログラムとデータを交換できます。

(b) 作業領域の利用形態

作業領域は、サーバとクライアントのそれぞれのディスク上にあります。「文書を開く」などの要求があると、文書は Document Manager データベースからサーバの作業領域に複写されます。次にクライアントの作業領域（クライアントで定義されたエリア）に転送されます。

作業領域を使った文書の操作の概要を、図 1-2 に示します。

図 1-2 作業領域を使った一般文書の操作の概要



- 1 クライアントのユーザAから文書を開く要求がサーバに出される
- 2 サーバは、指定された文書をユーザAの作業領域に転送する
- 3 クライアントは、ユーザAの指定した文書に対応するアプリケーションプログラムを起動する
- 4 文書の編集後、クライアントのユーザAから文書を登録する要求がサーバに出される
- 5 サーバは指定された文書を、作業領域からDocument Managerデータベースに転送する。このとき文書を別のファイルに時系列で（バージョンアップして）登録する

1.4.2 サーバとユーザの関係

ここでは、サーバがユーザを管理する方法について説明します。

(1) サーバのセッション管理

ユーザがサーバを利用している間を、セッションといいます。セッションは、ユーザがログインすると開始し、ログアウトすると終了します。

(2) Document Manager を管理するユーザ

Document Manager は、次に示す 2 種類のユーザが管理します。

システム管理者

UNIX のスーパーユーザです。サーバ全体の管理や運用をします。また、Document

1. 解説

Manager のユティリティを実行できます。

Document Manager 管理者

環境設定ファイルで Document Manager 管理者として定義されているユーザです。

Document Manager データベースの管理や運用をします。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(3) サーバとユーザの関係

Document Manager ではユーザを、Groupmax Address 又はオペレーティングシステムのどちらかで管理します。システム管理者は、あらかじめ Groupmax Address 又はオペレーティングシステムに対してユーザを登録します。サーバは、登録されているユーザのユーザ ID が正しいかを判断して、クライアントからの要求を実行します。

なお、Groupmax Address に複数のサーバを登録しておけば、クライアントからの操作でログイン先のサーバを切り替えられます。

ユーザの名称やユーザ ID の登録については、「5.6.2 Groupmax 全体でのユーザ情報の一元管理」又は「5.7.5 Groupmax Address を使用しない場合の環境設定」を参照してください。

(4) ユーザとグループ

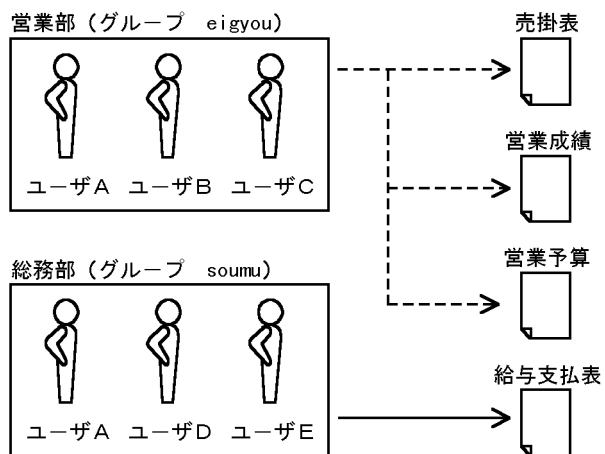
Document Manager では、ユーザをグループという単位に分けて管理しています。グループは、複数のユーザをまとめた単位です。一人のユーザが、複数のグループに所属することもできます。システム管理者は、どのグループにどのユーザが所属するかを、ユーザの登録と同様に定義しておきます。

文書を参照したり更新したりするアクセス権は、このグループ単位に設定することもできます。この場合、Document Manager で管理するオブジェクトごとに、グループのアクセス権を設定できます。

グループの登録については、「5.6.2 Groupmax 全体でのユーザ情報の一元管理」又は「5.7.5 Groupmax Address を使用しない場合の環境設定」を参照してください。

ユーザとグループの関係を、図 1-3 に示します。

図 1-3 ユーザとグループの関係



(凡例)

--> : 営業部のアクセス権

—> : 総務部のアクセス権

2

一般文書データベースでの 文書の管理

この章では、一般文書データベースでの文書の管理方法について説明します。

2.1 一般文書

2.2 一般文書の管理体系

2.3 一般文書の検索

2.4 分類索引帳を利用した文書共用

2.5 文書配布機能による複数サーバでの文書共用

2.1 一般文書

この節では、一般文書の概要と管理方法について説明します。

2.1.1 一般文書の概要

(1) 一般文書とは

一般文書は、Word や Excel などのアプリケーションプログラムで作成したファイルに、Document Manager での属性を追加した文書です。

一般文書は、一般文書データベースで管理され、必ずどこかのフォルダに属します。また、分類索引を使って検索できます。

(2) 一般文書とバージョン管理

編集した一般文書には、バージョン（版）が付けられて管理されています。バージョンは、初めて一般文書を作成した時点から登録するごとに付けられ、登録した時間の新しい順に管理されます。誤って文書を更新してしまったときには、一つ前のバージョンを利用して文書を回復できます。

サーバで管理されるバージョン数は、環境設定ファイルで定義します。デフォルトは、「2」です。バージョン数が定義した数を超えると、最も古いバージョンの文書から削除されます。

(3) 排他制御

(a) 排他制御とは

Document Manager データベースの一つの文書を複数のユーザが同時に更新すると、文書の一貫性が保てなくなります。これを避けるために、一人のユーザが文書を更新している間は、ほかのユーザがその文書を登録できないように制御します。これを排他制御といいます。

(b) 排他モード

Document Manager では、次に示す二つのモードで排他制御しています。ただし、文書を参照したり更新したりできるアクセス権を持たないユーザは、文書进行操作できません。

参照モード

文書を使用するユーザに、その文書を参照できる権限が与えられます。ほかのユーザはその文書を、参照及び更新できます。

編集モード

文書を使用するユーザに、その文書を更新及び参照できる権限が与えられます。ほかのユーザは、その文書の参照だけできます。

排他モードと文書の操作を、図 2-1 示します。

図 2-1 排他モードと文書の操作

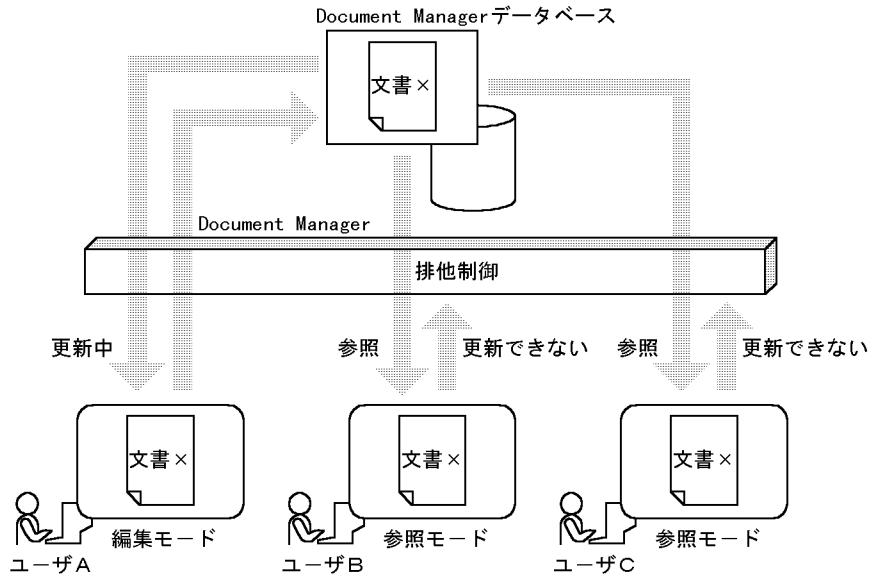


図 2-1 でユーザ A がユーザ B 及び C より先に編集モードで文書 X を使用すると、ユーザ A だけが文書 X を更新できます。したがって、ユーザ A が文書 X を更新している間、ユーザ B 及び C は、文書 X の参照はできますが、更新して登録できません。ユーザ A が文書 X を作業領域から削除するまで、文書 X は排他制御されます。

排他モードは、文書を取り出すときにクライアントから設定します。

Groupmax Integrated Desktop を使用する場合
排他モードとして、次の 2 通りで設定できます。

- 参照
参照モードで文書を取り出します。
- 編集
編集モードで文書を取り出します。

Document Manager Client を使用する場合
排他モードとして、次の 3 通りで設定できます。

- 参照
参照モードで文書を取り出します。
- 更新
編集モードで文書を取り出します。
- 自動設定

文書を取り出すときの排他モードが Document Manager によって自動的に設定されます。最初に使用するユーザは、編集モードで文書が取り出されます。次にほかのユーザが使用する場合は、参照モードで文書が取り出されます。

ほかのユーザの排他モードと自分の持つアクセス権によって、排他モードが異なり

2. 一般文書データベースでの文書の管理

ます。設定される排他モードについては、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

2.1.2 一般文書の管理

(1) 一般文書データベースとフォルダを使用した文書管理

一般文書はフォルダを使用して管理します。フォルダは、ディレクトリを使用したファイル管理のような役目をします。フォルダについては、「2.2.2 フォルダ」を参照してください。

さらに、ユーザが定義した属性を付けて管理したいときには一般文書データベースを使用します。例えば、「議事録」という一般文書データベースに、「開催日」という属性を定義すれば、開催日をキーに文書を管理できます。ただし、通常はシステムが提供しているシステム文書データベースだけで運用することをお勧めします。一般文書データベースについては、「2.2.1 一般文書データベース」を参照してください。

(2) 分類索引を使用した文書管理

分類索引は、一般文書にインデクスを付けて管理するときに使用します。通常の業務で管理される一般文書は様々な内容について書かれています。内容や関連性を体系化して、詳細に分類すると便利です。分類索引については、「2.2.3 分類索引」を参照してください。

(3) 一般文書とアクセス権

個々の一般文書には、ほかのユーザに参照させたり更新させたりする許可（アクセス権）を設定できます。アクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

なお、新規に一般文書を登録するときには、所属するフォルダのアクセス権を初期値として引き継ぎます。

(4) 一般文書の圧縮

一般文書を圧縮して管理できます。圧縮することで、一般文書を格納するためのディスク容量を節約できます。

2.2 一般文書の管理体系

この節では、一般文書を管理する体系と一般文書の管理方法について説明します。

2.2.1 一般文書データベース

ここでは、一般文書データベースの概要と管理について説明します。

(1) 一般文書データベースの概要

(a) 一般文書データベースとは

一般文書データベースは、一般文書の構造を定義する役割を果たします。具体的には、属性を定義して、その定義ごとに一般文書をまとめて管理するときに使用します。

(b) 一般文書データベースの構造

Document Manager をインストールすると、システムによって一般文書データベースが一つ作成されます。これをシステム文書データベースといいます。システム文書データベースを基にして、その下位に新しく一般文書データベースを作成して、階層構造をサーバに一つ構築できます。ある一般文書データベースから見て上位にあたる文書データベースを上位文書データベースといいます。また、ある一般文書データベースから見て、下位にあたる一般文書データベースを下位文書データベースといいます。

一般文書データベースは、管理する文書の種類を考慮して定義すると便利です。

(2) 一般文書データベースの管理

ここでは、一般文書データベースの管理について説明します。

(a) 一般文書データベースを使用した文書の管理

ある特定の一般文書に対して、特定の属性を付けて管理するときに一般文書データベースを使用すると便利です。例えば、議事録には「出席者」や「会議開催日」などの属性を追加して管理できます。「4月15日に開催した会議の議事録を参照したい」という場合、追加した属性（会議開催日）をキーとして文書を検索できます。このように、一般文書データベースに対してユーザが任意に定義する属性を、ユーザ定義属性といいます。ユーザ定義属性については、「2.2.4 属性の管理」を参照してください。Document Manager で管理する文書を図書館の蔵書と考えると、一般文書データベースは図書カードを利用した管理に相当します。

(b) 一般文書データベースとアクセス権

一般文書データベースを作成したユーザは、その一般文書データベースの所有者になります。ただし、システム文書データベースの所有者は Document Manager 管理者です。

一般文書データベースの所有者は、ほかのユーザ又はグループに対してアクセス権を設定できます。アクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

2.2.2 フォルダ

ここでは、フォルダの概要と管理方法について説明します。

(1) フォルダの概要

フォルダは、一般文書を格納する単位です。一般文書は必ず一つのフォルダに格納されるため、フォルダは、ディレクトリを使用したファイル管理のような役目をします。複数のフォルダに一つの一般文書が格納されたり、一つの一般文書が複数のフォルダに格納されることもありません。格納されている一般文書は、フォルダ間で移動したり、複写したりできます。

(2) フォルダの管理

ここでは、フォルダの管理方法について説明します。

(a) フォルダを使用した文書管理

環境初期化ユティリティを実行して Document Manager データベースを作成したとき、システムによって次のフォルダが作成されます。

- 最上位フォルダ
- デフォルトフォルダ

最上位フォルダは、すべてのフォルダの上位になるフォルダです。デフォルトフォルダは、最上位フォルダの直下に作成されます。バージョン 01-XX のクライアントから登録された文書を格納したり、文書が配布されたときに配布文書を登録するフォルダが配布先のサーバに存在しない場合に配布文書を格納したりするフォルダです。

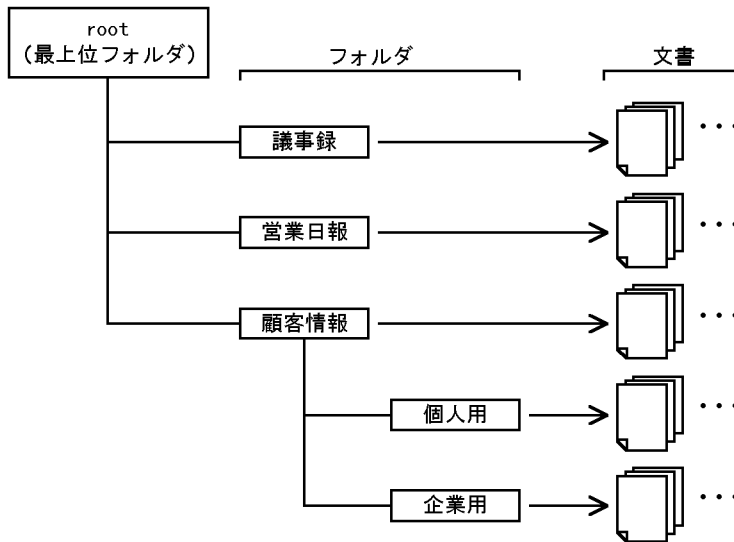
最上位フォルダを基にして、その下位に新しくフォルダを作成して、階層構造を構築できます。これをフォルダ階層といいます。フォルダ階層は、Document Manager データベースに一つだけ存在します。あるフォルダから見て、上位にあたるフォルダを上位フォルダといいます。また、あるフォルダから見て下位にあたるフォルダを下位フォルダといいます。

各フォルダには、フォルダの利用目的（どのような種類の文書を格納するか）に合わせて、文書を登録します。例えば、組織内で開催される会議ごとに議事録を管理する場合は、「議事録」というフォルダの下位フォルダに会議の種類を表したフォルダを作成します。作成した議事録は、会議の種類ごとのフォルダに格納します。一般文書をファイルとして考えると、フォルダはディレクトリに相当します。なお、1フォルダ当りの登録文書数は5000件までを目安にすることをお勧めします。

また、デフォルトフォルダには、バージョン 01-XX のクライアントから登録された文書の格納、及び配布された文書を格納するフォルダが作成されていない場合の格納に使用するため、このほかの文書を登録しないことをお勧めします。

フォルダ階層を使用した文書管理の概念を、図 2-2 に示します。

図 2-2 フォルダ階層を使用した文書管理



(b) フォルダとアクセス権

フォルダを作成したユーザは、そのフォルダの所有者になります。ただし、最上位フォルダの所有者は Document Manager 管理者です。アクセス権の状態は格納する一般文書に引き継がれます。

フォルダの所有者は、ほかのユーザ又はグループに対してアクセス権を設定できます。アクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

(c) フォルダと改変禁止モード

改変禁止モードとは

全ユーザに対して、文書のアクセス権に関係なく、文書の更新や削除などを禁止するモードを、改変禁止モードといいます。改変禁止モードは特定のフォルダに対して設定します。このため、改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書は不当な改変を避けられます。例えば、承認印の押された文書などを改変禁止モードが設定されたフォルダに格納しておけば、自由に改変されることを防げます。

改変禁止モードが設定されたフォルダの管理者

Document Manager 管理者は、特定のフォルダに対して改変禁止モードを設定できます。また、Document Manager 管理者は、改変禁止モードが設定されたフォルダに対して、管理者（改変禁止フォルダ管理者）を一人設定することもできます。改変禁止モードが設定されたフォルダの管理者は、Document Manager 管理者が環境設定ファイルで指定します。改変禁止フォルダ管理者が改変禁止モードを設定する場合は、編集権が必要となります。

改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書に対する操作

改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書に対する操作の可否を、表 2-1 に示します。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

表 2-1 改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書への操作

文書に対する操作	操作の可否
検索	
新規文書の登録	
文書を更新して登録	×
削除	× ¹
バージョンの削除	×
移動	2, 3
複写	
属性の参照	
参照モードでの取り出し	
更新モードでの取り出し	×
アクセス権の参照及び更新	
アクセス権以外の属性の更新	×
分類索引への登録と解除	

(凡例)

：操作できる。

×：操作できない。

注 表 2-1 に示す操作は、必要なアクセス権が設定されていることが前提です。

注 1 Document Manager 管理者と改変禁止フォルダ管理者だけが文書を削除できます。ただし、改変禁止フォルダ管理者の場合は、削除権が必要です。

注 2 移動先のフォルダに改変禁止モードが設定されている場合だけ移動できます。

注 3 編集モードで取り出されている改変禁止モードが設定されているフォルダに属さない文書を、改変禁止モードが設定されたフォルダに移動する場合は、エラーとなります。

改変禁止モードの設定

改変禁止モードは、Groupmax Integrated Desktop から、定義します。改変禁止モードを設定できるのは、Document Manager 管理者と改変禁止フォルダ管理者だけです。また、改変禁止モードは、下位のフォルダから順に、フォルダごとに設定してください。

改変禁止モードが設定されたフォルダに下位フォルダを作成すると、作成したフォルダにも改変禁止モードが設定されます。ただし、次に示すフォルダには改変禁止モードは設定できません。

- 最上位フォルダ
- デフォルトフォルダ
- 下位フォルダに改変禁止モードが設定されていないフォルダ

改変禁止モードの解除

改変禁止モードの設定を解除できるのは、Document Manager 管理者と改変禁止フォルダ管理者だけです。モードを解除する場合は、上位のフォルダから順に、フォルダ

ごとに解除してください。上位のフォルダの改変禁止モードが解除されていないフォルダは、改変禁止モードを解除できません。

2.2.3 分類索引

ここでは、分類索引の概要と管理方法について説明します。

(1) 分類索引の概要

ここでは、分類索引の概要について説明します。

(a) 分類索引とは

会社の組織は、一般的に部、課、係などから構成されます。また、電気製品には様々な種類があり、種類別にたくさんの製品があります。このような様々な観点を表したものを分類索引といいます。分類索引を使えば、Document Manager に登録した一般文書を、業務に合わせて様々な観点から分類して管理できます。例えば、ユーザの所属する組織や、何の仕事に関係しているかなどで分類できます。

Document Manager をキャビネットと考えると、一般文書を分類索引に登録する（リンクさせる）ことはインデクスを付ける作業に当たります。一般文書を分類索引に登録しておけば、具体的な検索条件が分からなくても検索できます。

例えば、「営業 1 課の鈴木さんが作成した、今期のビデオの売上の展望を示した資料」という一般文書を考えてみます。この一般文書は、次のように分類索引にリンク付けておくくと便利です。

組織を表した分類索引

この会社で販売している電気製品を体系化した分類索引

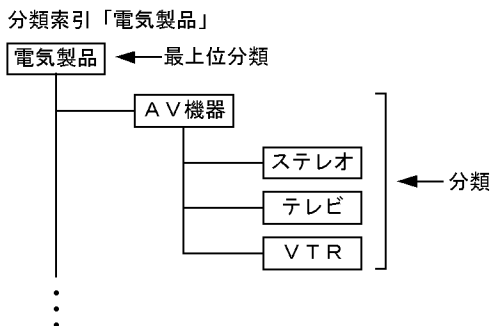
(b) 分類索引の構造

分類索引は、Document Manager データベース内に複数個作成できます。定義する観点によって分類索引は階層構造を構築できます。分類索引の各節を分類といいます。それぞれの分類索引の先頭を、最上位分類といいます。最上位分類は、その分類索引が何を分類するのかを表しています。また、最上位分類の下位には、その分類索引の詳細な分類項目を複数個定義できます。

階層構造を構築すると、各分類項目間には、階層上の上下関係ができます。ある分類から見て、上位にあたる分類を上位分類といいます。また、ある分類から見て、下位にあたる分類を下位分類といいます。

分類索引の構造を、次の図 2-3 に示します。

図 2-3 分類索引の構造



- ・分類「AV機器」は、分類「ステレオ」「テレビ」及び「VTR」の上位分類である
- ・分類「ステレオ」「テレビ」及び「VTR」は、分類「AV機器」の下位分類である
- ・分類「AV機器」は、最上位分類「電気製品」の「下位分類」である

(2) 分類索引の管理

ここでは、分類索引の管理について説明します。

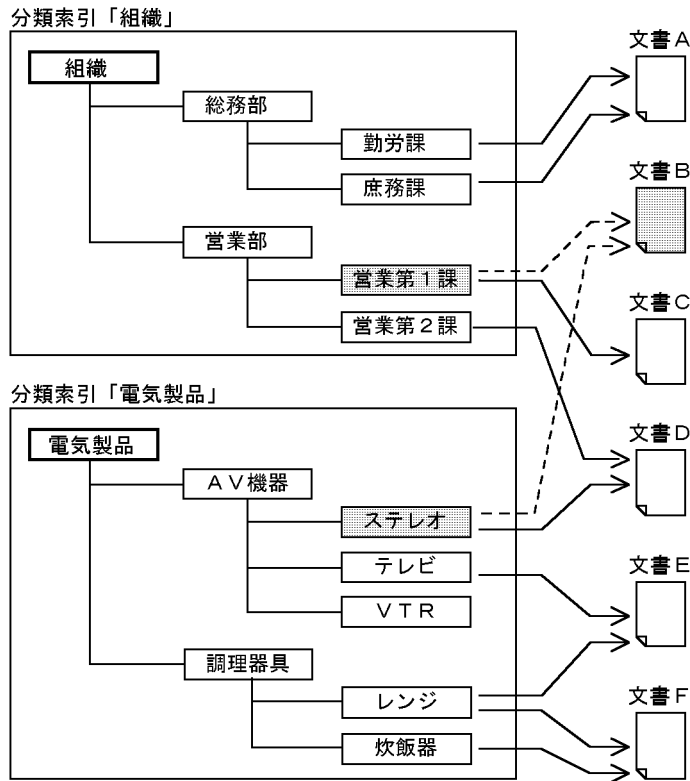
(a) 分類索引を使用した文書管理

分類索引の階層構造は、どのように枝（詳細な分類項目）を張るか、つまりどのように分類するかを、業務に合わせて定義します。その枝の指し示す所に、一般文書をリンクさせます。一般文書は複数の分類索引に多重的にリンクさせることができます。

例えば、一般文書を管理する体系を、会社の組織と、開発する電気製品に関する企画から分類するとします。この場合、分類索引として、会社の組織を表した分類索引と企画する電気製品を体系化した分類索引を定義します。会社の組織を表した分類索引には、総務部、営業部などの会社の組織内の部署を定義します。また、企画する電気製品を体系化した分類索引には、開発する製品の種類を定義します。

この分類索引で、「営業第1課に所属する人の書いた、ステレオに関する一般文書」を示す場合、組織の分類索引の中の営業第1課、電気製品の分類索引の中のステレオの両方の分類索引に所属することになります。なお、1分類当たりの登録文書数は5000件までを目安にすることをお勧めします。分類索引を使用した文書管理の概念を、図2-4に示します。

図 2-4 分類索引を使用した文書管理



(凡例)

---> : 分類索引「組織」の「営業第1課」と分類索引「電気製品」の「ステレオ」の両方にリンクしている文書

(b) 分類索引とアクセス権

分類索引を作成したユーザは、その分類索引の所有者になります。分類索引の所有者は、ほかのユーザ又はグループに対してアクセス権を設定できます。

アクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

2.2.4 属性の管理

ここでは、一般文書などに付けられる属性の概念と管理方法について説明します。

(1) Document Manager のオブジェクトと属性

ここでは、Document Manager でのデータの分類と、属性について説明します。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

(a) オブジェクトとは

Document Manager で扱うデータを総称して、オブジェクトといいます。オブジェクトには、一般文書、フォルダ、分類索引、一般文書データベース、フォーム文書、フォーム文書データベース及び Document Manager データベースが含まれます。

(b) 属性とは

オブジェクトには、それぞれ属性が付けられて管理されています。属性とは、オブジェクトを作成したユーザの名前や識別子などの付加情報です。属性に対して付けられる具体的なデータを属性値といいます。例えば、「作成日時」という属性には、オブジェクトを作成した日付、例えば「1996年5月10日」などの属性値が与えられます。

これらの属性は、オブジェクトサーバによって管理されます。属性は、連携するアプリケーションプログラムの起動や、一般文書のバージョン管理などに使われ、Document Manager の操作の基盤になります。また、これらの属性値をキーにして、一般文書を検索することもできます。

連携するアプリケーションプログラムが属性を参照する場合は、属性ファイルを使うことができます。属性ファイルとは、オブジェクトサーバに格納されている属性情報が複写されたファイルです。

属性には、次の2種類があります。

システム定義属性

Document Manager によって定義されている属性です。

ユーザ定義属性

ユーザが任意に定義できる属性です。

それぞれの属性について次に説明します。

(2) システム定義属性

オブジェクトごとに付けられるシステム定義属性を次に示します。

(a) 一般文書データベースの属性

一般文書データベースのシステム定義属性を次の表に示します。

表 2-2 一般文書データベースのシステム定義属性

属性	意味
文書データベース ID	一般文書データベースを指す固有の識別子
文書データベース名	一般文書データベースの名称
所有者ユーザ名	所有者のユーザ ID
所有者アクセス権	所有者のアクセス権の種類
グループアクセス権	グループのアクセス権の種類

属性	意味
全ユーザアクセス権	全ユーザのアクセス権の種類
作成日時	作成した日時
作成者名	作成時に設定する作成者に関する情報
更新日時	更新した日時
更新者ユーザ名	更新したユーザのユーザ ID
上位文書データベース ID	上位一般文書データベースの一般文書データベース ID
上位文書データベース名	上位一般文書データベースの一般文書データベース名
AP 識別子	AP 情報管理ファイルに記述されている AP 識別子
文書ひな形ファイルサイズ	一般文書ひな形ファイルのファイルサイズ
文書ひな形ファイル名	一般文書ひな形ファイルのファイル名
文書ひな形ファイルバージョン番号	一般文書ひな形ファイルのバージョン番号
TS 使用フラグ	全文検索サーバ使用の有無を示すフラグ
TS 情報 ID	TS 管理ファイルに記述されている TS 情報 ID
コメント	ユーザの作成したコメント

(b) 一般文書の属性

一般文書のシステム定義属性を次の表に示します。

表 2-3 一般文書のシステム定義属性

属性	意味
文書 ID	一般文書を指す固有の識別子
文書名	一般文書の名称
文書データベース ID	一般文書を作成した一般文書データベース ID
文書データベース名	一般文書を作成した一般文書データベース名
所有者ユーザ名	所有者のユーザ ID
所有者アクセス権	所有者のアクセス権の種類
グループアクセス権	グループのアクセス権の種類
全ユーザアクセス権	全ユーザのアクセス権の種類
作成日時	作成した日時
作成者名	作成時に設定する作成者に関する情報
更新日時	更新した日時
更新者ユーザ名	更新したユーザのユーザ ID
文書配布フラグ	一般文書配布状況を示すフラグ

2. 一般文書データベースでの文書の管理

属性	意味
文書実体ファイルサイズ	一般文書実体ファイルのファイルサイズ
文書実体ファイル名	一般文書実体ファイルのファイル名
文書バージョン番号	一般文書実体ファイルのバージョン番号
TS 情報 ID	一般文書を登録した TS 情報 ID
TS 文書 ID	全文検索用文書 ID
コメント	ユーザの作成したコメント

(c) フォルダの属性

フォルダのシステム定義属性を次の表に示します。

表 2-4 フォルダのシステム定義属性

属性	意味
フォルダ ID	フォルダを指す固有の識別子
フォルダ名	フォルダの名称
所有者ユーザ名	所有者のユーザ ID
所有者アクセス権	所有者のアクセス権の種類
グループアクセス権	グループのアクセス権の種類
全ユーザアクセス権	全ユーザのアクセス権の種類
作成日時	作成した日時
作成者名	作成時に設定する作成者に関する情報
更新日時	更新した日時
更新者ユーザ名	更新したユーザのユーザ ID
所属文書 ID リスト	フォルダに所属する文書 ID のリスト
上位フォルダ ID	上位フォルダのフォルダ ID
下位フォルダ ID リスト	下位フォルダのフォルダ ID のリスト
文書実体格納ディレクトリ	文書を格納するディレクトリパス
コメント	ユーザの作成したコメント

注 フォルダ名に半角コンマを使用すると、障害が発生する機能があります。このため、フォルダ名に半角コンマを使用しないでください。使用した場合に発生する障害については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

(d) 分類索引の属性

分類索引のシステム定義属性を次の表に示します。

表 2-5 分類索引のシステム定義属性

属性	意味
分類 ID	分類を指す固有の識別子
分類名	分類の名称
所有者ユーザ名	所有者のユーザ ID
所有者アクセス権	所有者のアクセス権の種類
グループアクセス権	グループのアクセス権の種類
全ユーザアクセス権	全ユーザのアクセス権の種類
作成日時	作成した日時
作成者名	作成時に設定する作成者に関する情報
更新日時	更新した日時
更新者ユーザ名	更新したユーザのユーザ ID
所属文書 ID リスト	分類に所属する文書 ID のリスト
上位分類 ID	上位分類の分類 ID
下位分類 ID リスト	下位分類の分類 ID のリスト
コメント	ユーザの作成したコメント

注 分類名に半角コンマを使用すると、障害が発生する機能があります。このため、フォルダ名に半角コンマを使用しないでください。使用した場合に発生する障害については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

(3) ユーザ定義属性

システム定義属性に追加して、ユーザが任意に定義する属性をユーザ定義属性といいます。システム定義属性以外の属性を検索条件にして、一般文書を検索する場合は、一般文書データベースにユーザ定義属性を定義しておきます。

例えば、「議事録」という一般文書データベースに「開催日」というユーザ定義属性を追加しておきます。すると、一般文書データベース「議事録」で作成された一般文書には、「開催日」という属性に「1997年12月8日」などの属性値（日付）を設定できます。これによって、「1997年12月8日に開催した会議の議事録」などの条件で一般文書を検索できます。

(a) ユーザ定義属性の属性型

ユーザ定義属性として定義できる属性型を次の表に示します。

表 2-6 ユーザ定義属性として定義できる属性型

属性名	属性型	属性検索
ユーザが指定した属性名 ¹	文字列型 (STRING)	
	固定長文字列型 (FIXED_STRING) ²	
	整数型 (INT)	
	日付型 (TIME)	
	オブジェクト型 (OBJECT) ³	×
	オブジェクトリスト型 (OBJECT_LIST) ³	×

(凡例)

：属性検索の条件として指定できる項目

×：属性検索の条件として指定できない項目

注 1 指定できる属性名には、次の制限があります。

- ・1～63バイトで指定します。
- ・属性名として使用できるのは、次に示す文字です。
- ・1バイトコードの<英大文字>、<英小文字>、<数字>、「_」(アンダースコア)
- ・2バイトコードの文字(ただし、空白を除く)
- ・「IS_」又は「_」(アンダースコア)で始まる名称は、使用できません。

注 2 1～255の間で定義可能。

ただし、固定長文字列型の文字列データには、文字列の終わりを示す NULL 文字が含まれます。このため、実際に格納できるデータの最大長は定義サイズよりも1バイト少なくなります。

注 3 オブジェクト型及びオブジェクトリスト型の属性は、Groupmax Integrated Desktop 及び Document Manager Client から定義及び参照できません。

(b) ユーザ定義属性を定義するときの注意事項

ユーザ定義属性を定義するときの注意事項を次に示します。

一般文書データベース内(上位一般文書データベースを含む)で、ユーザ定義属性の属性名が重複しないようにしてください。

ユーザ定義属性は、下位一般文書データベース又は一般文書が登録されている一般文書データベースには定義できません。

ユーザ定義属性が定義されている一般文書データベースに下位一般文書データベースを作成した場合は、すべてのユーザ定義属性が下位一般文書データベースに引き継がれます。

2.2.5 アクセス権の管理

ここでは、Document Manager のアクセス権の種類と管理方法について説明します。

(1) アクセス権を設定するための基礎知識

ここでは、Document Manager で扱うアクセス権の概要について説明します。

(a) Document Manager でのアクセス権

文書を共有化すると、情報を公開する範囲を決めたり、文書を参照するユーザを限定したりする必要があります。文書を参照したり更新したりできる権利を、アクセス権といいます。したがって、アクセス権が設定されていないユーザは、文書などを参照したり更新したりできません。

(b) アクセス権を設定できる単位

アクセス権は、「どのオブジェクト」に対して「だれに」「どんな権限」を与えるのかを設定します。

(c) アクセス権を設定できるオブジェクト

アクセス権は、一般文書、フォルダ、分類索引及び一般文書データベースに設定できません。例えば、文書 A をだれに見せてよいか、だれに更新させてよいかなどを設定します。

Document Manager データベースには、すべてのユーザにすべてのアクセス権が設定されています。したがって、特定のユーザに特定のアクセス権を与えることはできません。

(d) 使用者の種類

Document Manager では、「だれに」アクセス権を与えるかを設定するために、ユーザを次の 3 種類に分けます。この種類ごとにアクセス権を設定します。なお Document Manager 管理者は、アクセス権の設定内容に関係なく、すべての操作ができます。

所有者

オブジェクト（文書、フォルダ、分類索引及び一般文書データベース）を所有しているユーザ。

グループ

ユーザ情報を Groupmax 全体で一元管理している場合は、Groupmax Address に設定されているグループ（最上位組織、組織及びグループから選択）及び Document Manager のローカルグループ情報ファイルに設定されているグループ。

ユーザ情報を Document Manager 単独で管理している場合は、グループ登録ファイルに設定されているグループ。

なお、グループを構成するメンバには、複数の最上位組織、組織、グループ、ローカルグループ及びユーザを指定できます。また、それぞれのメンバに対してアクセス権を設定できます。このように複数のグループやユーザに対して設定するアクセス権を、複数グループアクセス権といいます。複数グループアクセス権については、「2.2.5 (4) 複数グループアクセス権」を参照してください。

全ユーザ

Document Manager を使用できるすべてのユーザ。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

(e) アクセス権を設定できるユーザ

一般文書、フォルダ、分類索引及び一般文書データベースにアクセス権を設定及び変更できるユーザは、Document Manager 管理者及びそのオブジェクトの所有者だけです。

(2) アクセス権の種類と許可される操作

ここでは、アクセス権の種類と許可される操作について、オブジェクトごとに説明します。

(a) 一般文書のアクセス権

Groupmax Integrated Desktop でのアクセス権

Groupmax Integrated Desktop での、一般文書のアクセス権と許可される操作について、次の表に示します。

表 2-7 一般文書のアクセス権の種類と許可される操作 (Groupmax Integrated Desktop を使用する場合)

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
参照	属性と文書実体ファイルの参照、文書の検索
編集	参照権で許可される操作及び属性の変更、文書実体ファイルの更新
すべて	編集権で許可される操作及び一般文書の削除

(凡例)

- : すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また、このアクセス権が設定されている場合、アクセス権の設定対象である文書自体が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

新規に一般文書を登録又は作成したユーザが、その一般文書の所有者になります。また、一般文書を格納するフォルダのアクセス権の状態が一般文書に引き継がれます。さらに、一般文書を登録又は作成するには、一般文書が属する一般文書データベース及びフォルダに対して文書作成権、下位作成権、編集権又はすべての権限が必要です。なお、一般文書作成時のアクセス権は、環境設定ファイルで定義しておくこともできます。この場合、一般文書のアクセス権は、一般文書が属するフォルダから継承されません。環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

Document Manager Client でのアクセス権

Document Manager Client での、一般文書のアクセス権と許可される操作について、次の表に示します。

表 2-8 一般文書のアクセス権の種類と許可される操作 (Document Manager Client を使用する場合)

アクセス権の種類	許可される操作
読み出し	属性と文書実体ファイルの参照, 文書の検索
書き込み	属性の変更, 実体ファイルの更新
削除	文書の削除

新規に一般文書を登録又は作成したユーザが, その一般文書の所有者になります。また, 一般文書を格納するフォルダのアクセス権の読み出し権, 書き込み権及び削除権の状態が文書に引き継がれます。

さらに, 一般文書を登録又は作成するには, 一般文書が属する一般文書データベース及びフォルダに対して読み出し権及び文書作成権が必要です。

なお, 一般文書作成時のアクセス権は, 環境設定ファイルで定義しておくこともできます。この場合, 一般文書のアクセス権は, 一般文書が属するフォルダから継承されません。環境設定ファイルについては, 「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(b) 一般文書データベースのアクセス権

Groupmax Integrated Desktop でのアクセス権

Groupmax Integrated Desktop での一般文書データベースのアクセス権と許可される操作について, 次の表に示します。

表 2-9 一般文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作 (Groupmax Integrated Desktop を使用する場合)

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
参照	属性及び文書ひな形の参照, 一般文書データベースの参照, 所属する文書の検索
文書作成	参照権で許可される操作及び一般文書の作成
下位作成	文書作成権で許可される操作及び下位一般文書データベースの作成
編集	下位作成権で許可される操作及び属性及び文書ひな形の変更
すべて	編集権で許可される操作及び一般文書データベースの削除

(凡例)

- : すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また, このアクセス権が設定されている場合, アクセス権の設定対象である一般文書データベース自体が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

Document Manager Client でのアクセス権

Document Manager Client での一般文書データベースのアクセス権の種類と許可され

2. 一般文書データベースでの文書の管理

る操作について、次の表に示します。

表 2-10 一般文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作（Document Manager Client を使用する場合）

アクセス権の種類	許可される操作
読み出し	属性及び文書ひな形の参照，一般文書データベースの参照，所属する文書の検索
書き込み	属性及び文書ひな形の更新
削除	一般文書データベースの削除
作成	下位一般文書データベースの作成
文書作成	新規文書の作成

ある一般文書データベースに設定したアクセス権は、下位一般文書データベースを作成したときに引き継がれます。例えば、システム文書データベースの下に新しく作成した一般文書データベースは、システム文書データベースのアクセス権を引き継ぎます。したがって、Document Manager の運用形態や一般文書データベースの共有の度合いなどを考慮して、所有者又は Document Manager 管理者がアクセス権を変更してください。

なお、システム文書データベースの所有者は、Document Manager 管理者です。所有者である Document Manager 管理者には、すべてのアクセス権が与えられます。また、Document Manager 管理者以外のユーザには、システム文書データベースに対して次のアクセス権が与えられます。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合
下位作成権が与えられます。

Document Manager Client から操作する場合
読み出し権，作成権及び文書作成権が与えられます。

Document Manager 管理者以外のユーザに一般文書データベースを作成させたくない場合、該当するユーザの下位作成権又は作成権を削除する必要があります。システム文書データベースに対するアクセス権の設定については、「5.9 Document Manager の環境の初期化」を参照してください。

(c) フォルダのアクセス権

Groupmax Integrated Desktop でのアクセス権
Groupmax Integrated Desktop でのフォルダのアクセス権と許可される操作について、次の表に示します。

表 2-11 フォルダのアクセス権の種類と許可される操作（Groupmax Integrated Desktopを使用する場合）

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
参照	属性の参照，下位フォルダの参照，格納されている文書の検索
文書作成	参照権で許可される操作及び文書の新規作成
下位作成	文書作成権で許可される操作及び下位フォルダの作成
編集	下位作成権で許可される操作及び属性の変更
すべて	編集権で許可される操作及びフォルダの削除

（凡例）

-：すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また、このアクセス権が設定されている場合、アクセス権の設定対象であるフォルダ自身が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

Document Manager Client でのアクセス権

Document Manager Client でのフォルダのアクセス権と許可される操作について、次の表に示します。

表 2-12 フォルダのアクセス権の種類と許可される操作（Document Manager Clientを使用する場合）

アクセス権の種類	許可される操作
読み出し	属性の参照，下位フォルダの参照，格納されている文書の検索
書き込み	属性の変更
削除	フォルダの削除
作成	下位フォルダの作成
文書作成	フォルダへの文書の登録

あるフォルダに設定したアクセス権は、下位フォルダに引き継がれます。したがって、Document Manager の運用形態やフォルダの共有の度合いなどを考慮して、所有者又は Document Manager 管理者がアクセス権を変更してください。

（d）分類索引及び分類のアクセス権

Groupmax Integrated Desktop でのアクセス権

Groupmax Integrated Desktop での分類索引及び分類のアクセス権と許可される操作について、次の表に示します。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

表 2-13 分類索引及び分類のアクセス権の種類と許可される操作 (Groupmax Integrated Desktop を使用する場合)

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
参照	属性の参照, 下位分類の参照, リンクされている文書の検索
文書リンク	参照権で許可される操作及び分類索引及び分類への文書のリンク
下位作成	文書リンク権で許可される操作及び下位分類の作成
編集	下位作成権で許可される操作及び属性の変更
すべて	編集権で許可される操作及び分類索引又は分類の削除

(凡例)

- : すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また、このアクセス権が設定されている場合、アクセス権の設定対象である分類索引又は分類自体が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

Document Manager Client でのアクセス権

Document Manager Client での分類索引及び分類のアクセス権と許可される操作について、次の表に示します。

表 2-14 分類索引及び分類のアクセス権の種類と許可される操作 (Document Manager Client を使用する場合)

アクセス権の種類	許可される操作
読み出し	属性の参照, 下位分類の参照, リンクされている文書の検索
書き込み	属性の変更
削除	分類索引又は分類の削除
作成	下位分類の作成
文書リンク	分類索引への文書の登録

新規に分類索引を作成したときには、所有者とグループには次のようにアクセス権が与えられます。

所有者

すべての権限が与えられます。

グループ

アクセス権は与えられません。

全ユーザ

全ユーザには次のようにアクセス権が与えられます。

- Groupmax Integrated Desktop から操作する場合
下位作成権が与えられる

- Document Manager Client から操作する場合
読み出し権、書き込み権及び文書リンク権が与えられる

なお、ある分類索引に設定したアクセス権は、下位分類に引き継がれます。また、ある分類に設定したアクセス権も、下位分類を作成したときに引き継がれます。したがって、Document Manager の運用形態や分類索引の共有の度合いなどを考慮して、所有者又は Document Manager 管理者がアクセス権を変更してください。

(3) Groupmax Integrated Desktop から設定する特殊なアクセス権

通常、Groupmax Integrated Desktop から設定するアクセス権は、詳細なアクセス権限を用途ごとにまとめた集合アクセス権です。Groupmax Integrated Desktop からは、この集合アクセス権では設定できないような特殊なアクセス権を設定できます。例えば、分類索引に対して、「一般ユーザには、文書の検索と下位分類の作成を許可する」というようなアクセス権を設定する場合に利用できます。操作方法については、Groupmax Integrated Desktop の文書管理のオンラインヘルプを参照してください。

(4) 複数グループアクセス権

(a) 複数グループアクセス権とは

アクセス権は、一つのグループに対して設定するか又は複数のグループにまとめて設定できます。この機能を複数グループアクセス権といいます。

複数グループアクセス権は、最大 50 個のグループに対して設定できます。

なお、複数グループアクセス権の参照及び更新には、バージョン 05-xx 以降の Groupmax Integrated Desktop を使用してください。03-xx 以前のバージョンの Groupmax Integrated Desktop 及び Document Manager Client からは、参照及び更新できません。

(b) Document Manager サーバで運用するアクセス権の管理方式

Document Manager で運用するアクセス権には、一つのグループに対して設定するアクセス権と、複数グループアクセス権機能を使用して複数のグループに設定するアクセス権の 2 種類があり、どちらかを選択できます。Document Manager をインストールした状態では、一つのグループに対して設定する方式が設定されています。複数グループアクセス権を設定して Document Manager を運用する場合には、次の設定が必要です。

環境設定ファイルで、「複数グループアクセス権」に「use」を設定する。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

複数グループアクセス権で使用するエリアが定義されていることを確認する。

複数グループアクセス権を管理するためには、専用のエリアが必要です。エリアの名称などについては、「5.5 オブジェクトサーバでの環境設定」を参照してください。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

複数グループアクセス権情報出力・更新ユティリティを実行する。

複数グループアクセス権情報出力・更新ユティリティについては、「8.9 複数グループアクセス権情報を出力又は更新する (ISdefmga)」を参照してください。

(c) 複数グループアクセス権の対象になるグループを構成するメンバ

複数グループアクセス権では、グループを構成するメンバとして次のメンバを指定できます。

Groupmax Address に設定されているグループ (最上位組織、組織及びグループ) 及びユーザ

Document Manager のローカルグループ情報ファイルに設定されているグループ

複数グループアクセス権では、これらのメンバに対してアクセス権が設定できます。なお、ローカルグループ情報ファイルについては、「付録 D ローカルグループの登録」を参照してください。

(d) 複数グループアクセス権を設定できるオブジェクト

複数グループアクセス権は、次のオブジェクトに設定できます。

フォルダ

分類索引

一般文書データベース

ただし、一般文書データベースに設定すると操作性能が劣化するため、設定しないことをお勧めします。

なお、一般文書に対して、複数グループアクセス権は設定できません。

(e) 複数グループアクセス権を使用した場合の一般文書のアクセス権

複数グループアクセス権を使用した場合、一般文書に対してアクセス権を設定することはできません。一般文書に対して設定していたアクセス権は無効になります。複数グループアクセス権を使用した場合、一般文書のアクセス権は格納先のフォルダに設定されているアクセス権の状態を引き継ぎます。一般文書の格納先フォルダに設定されているアクセス権は、そのフォルダを操作するときのアクセス権です。ただし、「所有者名」については情報を引き継ぎません。したがって、複数グループアクセス権を使用している場合、一般文書を操作するユーザが操作対象の一般文書の所有者か所有者以外であるかによって、ユーザに与えられるアクセス権が異なります。なお、一般文書の所有者は、文書のプロパティから確認できます。

複数グループアクセス権を使用している場合の一般文書の操作

- 操作するユーザが一般文書の所有者である場合
一般文書の格納先フォルダに設定されたアクセス権が、一般文書の所有者に与えられます。
- 操作するユーザが一般文書の所有者以外の場合
一般文書の格納先フォルダに設定されたアクセス権が与えられます。

フォルダ「議事録」の所有者が「ユーザ A」、フォルダ「議事録」に属する文書「議事録 1」の所有者が「ユーザ B」である場合を例にして説明します。

フォルダ「議事録」に設定された所有者のアクセス権が「すべて」である場合、フォルダの所有者である「ユーザ A」及び文書「議事録 1」の所有者である「ユーザ B」は、「議事録 1」に対して削除などの操作ができます。そのほかのユーザが「議事録 1」を操作する場合は、全ユーザ、グループ、複数グループを対象に指定されているアクセス権に従って操作できます。

なお、複数グループアクセス権を使用している場合に、一般文書のアクセス権を操作しようとした場合、Document Manager Client では、アクセス権がない旨のメッセージが表示されます。また、Groupmax Integrated Desktop では、文書のアクセス権が無効である旨のメッセージが表示されます。

(f) 複数グループアクセス権の運用上の注意事項

一般文書データベースへの複数グループアクセス権の設定は控えてください。一般文書データベースに複数グループアクセス権を設定すると、検索や文書の作成など、一般文書データベースのアクセス権がチェックされるすべての操作の性能が劣化します。フォルダに対して詳細にアクセス権を設定して運用することをお勧めします。

複数グループアクセス権は、性能を十分に考慮して、最小限に設定するようにしてください。

複数グループアクセス権を設定して運用すると、複数グループアクセス権を管理するための情報が作成されます。この情報は、複数グループアクセス権を設定したフォルダ、分類索引及び一般文書データベースを削除するときまで削除されません。したがって、複数グループアクセス権を設定して運用した後でアクセス権管理方式を複数グループアクセス権を使用しない方式に変更しても、この情報は削除されません。このため、アクセス権の管理法式を「複数グループアクセス権 一つのグループに対応するアクセス権 複数グループアクセス権」という順序で変更した場合は、以前の管理情報を基に、複数グループアクセス権が設定されます。

一つのアクセス権チェック対象に対して、複数のグループでアクセス権を設定されている場合、次の順序でアクセス権が決定されます。なお、途中で必要なアクセス権が見つかった場合、以降のアクセス権は参照されません。

1. 所有者に設定されているアクセス権
2. 全ユーザに設定されているアクセス権
3. グループと複数グループに設定されている権限のうち、ユーザの所属するメンバに設定されているアクセス権の論理和

文書配布機能を使用するときに、配布先サーバのアクセス権管理が複数グループアクセス権である場合、配布された文書のアクセス権は、配布先サーバのフォルダに指定されているアクセス権に依存して決定されます。したがって、次のことを注意してください。

- 配布元サーバと配布先サーバのフォルダ体系は同一にしてください。
- フォルダ名称は重複しないようにしてください。
- 配布先サーバのフォルダのアクセス権は参照だけにしてください。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

なお、配布先サーバに配布した文書を更新しても、配布元サーバには反映されません。

Document Manager サーバでは、グループアクセス権と複数グループアクセス権の重複チェックは行いません。したがって、複数グループアクセス権が設定されているフォルダ、分類索引及び一般文書データベースに対してグループのアクセス権を設定、変更する場合、設定済みの複数グループアクセス権と重複していないかどうか、ユーザが確認してください。

(5) 排他制御とアクセス権

(a) Groupmax Integrated Desktop での排他制御

一般文書に設定されているアクセス権によって排他モードが異なります。

編集権がないと、一般文書を編集できません。

ほかのユーザの排他モードと自分の持つアクセス権によって、文書を使用するときの排他モードが異なります。設定される排他モードとアクセス権との関係について、次の表に示します。

表 2-15 設定される排他モードとアクセス権の関係 (Groupmax Integrated Desktop を使用した場合)

排他モードの設定	自分	参照	参照	参照	編集	編集	編集
	他のユーザ	-	参照	編集	-	参照	編集
文書に設定されている自分のアクセス権	参照権				×	×	×
	編集権						×
	すべて						×

(凡例)

：文書を参照モードで使用できることを示します。

：文書を編集モードで使用できることを示します。

×：文書を使用できないことを示します。

-：文書を使用していないことを示します。

注 特殊なアクセス権で編集権だけを設定した場合は、参照及び更新ともできません。

(b) Document Manager Client での排他制御

一般文書に設定されているアクセス権によって排他モードが異なります。

読み出し権及び書き込み権がないと、一般文書を更新できません。なお、アクセス権に削除権が設定されているユーザは、排他モードに関係なく、一般文書を削除できます。

ほかのユーザの排他モードと自分の持つアクセス権によって、文書を使用するときの排他モードが異なります。設定される排他モードとアクセス権との関係について、次の表に示します。

表 2-16 設定される排他モードとアクセス権との関係 (Document Manager Client を使用した場合)

排他モードの設定	自分	参照	参照	参照	更新	更新	更新	自動設定	自動設定	自動設定
	他のユーザ	-	参照	更新	-	参照	更新	-	参照	更新
文書に設定されている自分のアクセス権	読み出し権だけ				×	×	×			
	書き込み権だけ	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	読み出し権及び書き込み権						×			

(凡例)

: 文書を参照モードで使用できることを示します。

: 文書を編集モードで使用できることを示します。

× : 文書を使用できないことを示します。

- : 文書を使用していないことを示します。

2.3 一般文書の検索

この節では、一般文書を検索するときの仕組みや、検索方法の種類について説明します。また、全文検索サーバとの関係についても説明します。

2.3.1 検索の種類

一般文書を検索するには、大きく分けて四つの検索方法があります。

フォルダ検索

フォルダの階層構造をたどって、目的の一般文書を絞り込んでいく方法です。

条件検索

一般文書に含まれる単語を検索の条件にしたり、一般文書に付けられている属性を条件にしたりして検索する方法です。

分類索引検索

分類索引の階層構造をたどって、目的の一般文書を絞り込んでいく方法です。

論理演算検索

検索の結果得られる集合を論理演算して、目的の一般文書を絞り込んでいく方法です。

2.3.2 検索の方法

ここでは、一般文書の検索の方法について説明します。

(1) フォルダ検索

フォルダはディレクトリを使用したファイル管理のような働きをします。フォルダをたどりながら、下位フォルダに格納されている一般文書の一覧を表示できます。

一般文書は、どれか一つのフォルダに格納されます。したがって、フォルダの階層構造をたどることで、属性の適切な値や、条件にする単語が思い付かなくても一般文書を絞り込んで検索できます。

(2) 条件検索

一般文書に付けられている様々な情報を検索条件として、目的の文書を検索できます。条件検索を実行する場合は、次に示す情報を検索条件として指定できます。これらの条件は組み合わせて指定できるので、複合的な検索条件を指定した文書の検索ができます。

(a) 一般文書が格納されているフォルダを検索条件にする

一般文書が格納されているフォルダを検索条件とした検索ができます。例えば、「フォルダ『勤労課』に格納された一般文書を探す」のような検索ができます。

(b) 一般文書に付けられている属性を検索条件にする

Document Manager によって付けられた属性やユーザが定義した属性を条件として検索

できます。例えば、「鈴木さんが作成した一般文書を探す」のような検索ができます。また、「1998年1月20日から1998年2月19日までに作成された一般文書を探す」のように、属性の範囲を指定した検索もできます。

(c) 一般文書中のキーワードを検索条件にする

一般文書に含まれる単語を条件にして検索できます（全文検索）。例えば、「『オープンシステム』という単語が含まれる一般文書を探す」のように検索する方法です。

全文検索をする前に

全文検索するには、Document Manager サーバと全文検索サーバとを連携する必要があります。連携するための環境設定については、「5.8 全文検索サーバと連携するための環境設定」を参照してください。

全文検索するには、Document Manager データベースと全文検索サーバのテキストデータベースの両方に文書を登録します。Document Manager データベースには、一般文書の実体と属性が格納されます。また、全文検索サーバのテキストデータベースには、一般文書から抽出したテキストデータが格納されます。したがって、Wordなどで作成した一般文書からテキストデータを格納する場合は、あらかじめテキストデータを抽出しておいてください。なお、テキスト自動抽出機能を使用すると、文書を登録するときに自動的に一般文書からテキストファイルを抽出することができます。テキスト自動抽出機能については、「5.8.5 テキスト自動抽出機能」を参照してください。

全文検索の種類

全文検索には、次の2種類の方法があります。

- 簡易条件検索

全文検索では、一般文書に含まれる単語をキーワードにして検索します。このキーワードを、検索タームといいます。例えば「『新製品』という単語が現れる一般文書を検索する」という場合は、「新製品」が検索タームになります。また、「『最先端技術』及び『半導体』の両方の単語が含まれる一般文書を検索する」のように検索タームの論理積での検索もできます。さらに、「『新人教育資料』又は『新人育成計画書』のうちどちらかの単語が含まれる一般文書を検索する」のように、検索タームの論理和での検索もできます。

- 同義語・異表記展開検索

検索タームの同義語及び異表記の単語をキーワードにして検索する方法です。

同義語・異表記展開で指定できる展開モードは、使用する全文検索サーバによって異なります。

それぞれの展開モードについて説明します。

同義語展開

検索タームと、その同義語を条件にして検索します。検索タームを「コンピュータ」として同義語も一緒に検索すると、「電子計算機」「パソコン」などの同義語を含む一般文書も検索されます。ただしこの場合、全文検索サーバで、「電子計算機」「パソコン」が「コンピュータ」と同義語であると定義した同義語辞書を設定しておく必要があります。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

アルファベット異表記展開

検索タームと、アルファベット異表記を条件にして検索します。「DATA」を検索タームとすると、アルファベットの異表記の「Data」「data」なども検索されます。異表記は全文検索サーバの辞書によって設定されています。なお、アルファベット展開できる文字は、全角の英字だけです。

片仮名異表記展開

検索タームと、片仮名異表記を条件にして検索します。「バイオリン」を検索タームにすると、片仮名異表記の「ヴァイオリン」なども検索されます。

全角・半角異表記展開

検索タームと、全角・半角異表記を条件にして検索します。「Text」を検索タームとすると、「Text」なども検索されます。

OCR 異表記展開

検索ターム又は検索タームの OCR 認識文字を含む文書を検索します。「日」を検索タームとすると、「日」、「目」又は「臼」も検索されます。

全文検索の注意事項

- Document Manager データベースに登録されていても、テキストデータベースに登録されていない一般文書は、全文検索できません。
- TS 管理ファイルがない場合は、全文検索はできません。TS 管理ファイルについては、「5.8 全文検索サーバと連携するための環境設定」を参照してください。
- 全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用する場合は、Document Manager のサーバで一般文書の最新のバージョンを削除すると、Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースから対応するテキストデータが削除されます。この場合、該当するテキストデータが無い状態になるので、該当する文書を全文検索できません。文書の最新バージョンを削除した場合は、サーバから文書を一度取り出して、テキストデータを抽出してからサーバに保存し直してください。なお、AP 情報管理ファイルの関連ファイルに、テキストファイルを指定しておくこと、Document Manager データベースにテキストファイルを残しておくことができます。
- 全文検索サーバを使用する場合は、全文検索サーバを起動しておいてください。また、テキストファイルを格納するテキストデータベースもオープンしておいてください。全文検索サーバの起動方法及びテキストデータベースをオープンする方法は、使用する全文検索サーバによって異なります。全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用する場合は、マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」を参照してください。全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用する場合は「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。
- 全文検索条件を指定する場合は、できるだけフォルダ又は分類索引を指定した検索条件と組み合わせるようにしてください。全文検索条件だけで検索すると、登録件数によっては時間が掛かる場合があります。

(d) 分類索引への一般文書のリンクを検索条件にする

一般文書を登録した分類を条件にして検索できます。例えば「分類索引『AV 機器』に登録した一般文書を探す」のような検索ができます。また、一回の検索で複数の分類を指定できます。例えば「分類索引『組織』の『営業第1課』と、分類索引『電気製品』の『ステレオ』の両方に登録した文書を探す」、又は「分類索引『組織』の『営業第1課』若しくは分類索引『電気製品』の『ステレオ』のどちらかに登録した文書を探す」のような検索ができます。

(e) 一般文書が管理されている一般文書データベースを検索条件にする

一般文書データベースを複数作成して運用している場合は、文書が管理されている一般文書データベースを検索条件にして、文書を検索できます。例えば「文書データベース『営業日報』で管理している一般文書を探す」のような検索ができます。

(f) 検索条件を複合的に指定した文書の検索の例

複合的な検索条件を指定した文書の検索例を示します。

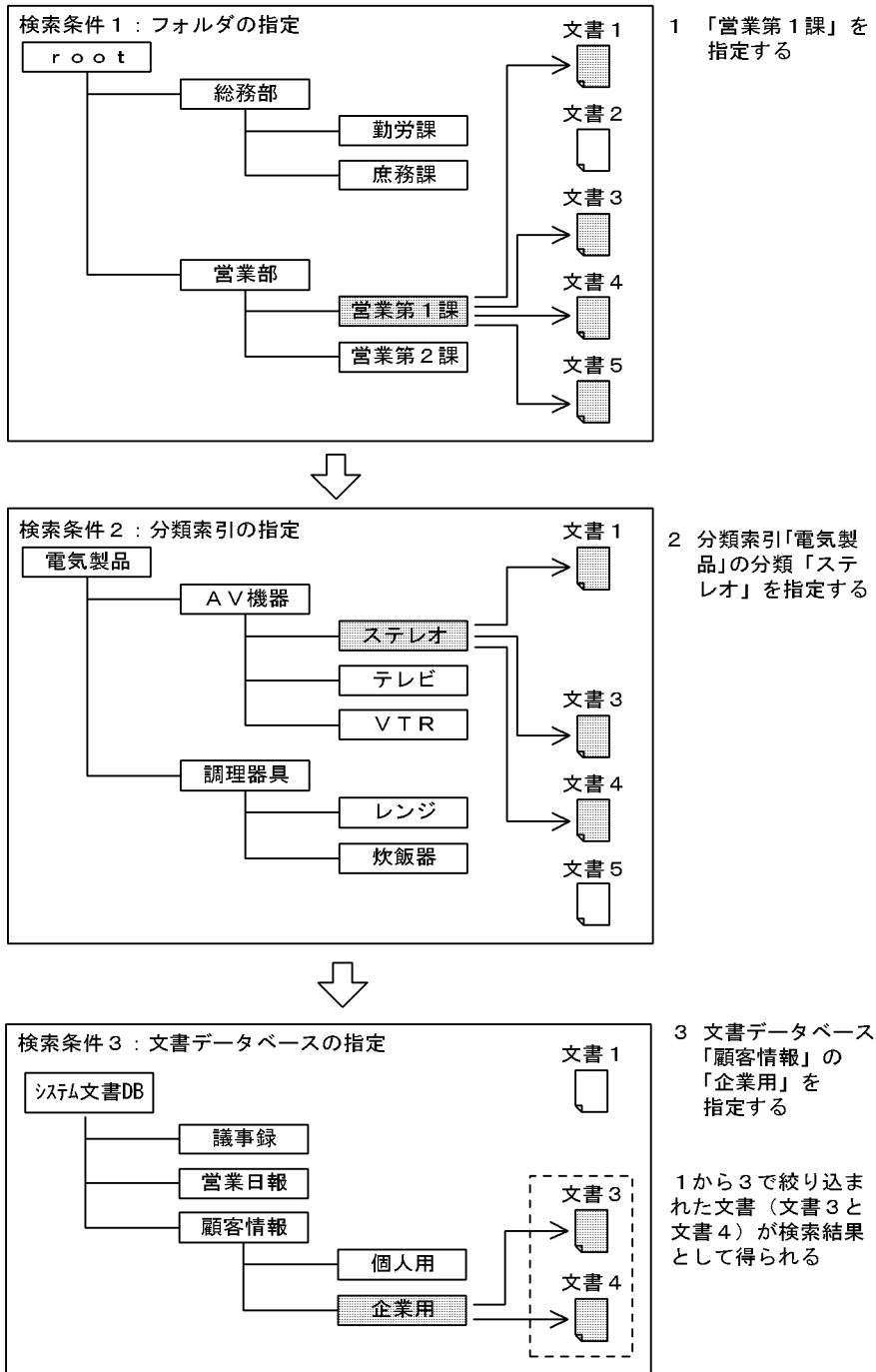
図 2-5 にフォルダ、分類索引及び一般文書データベースを使った検索例を示します。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

図 2-5 分類索引、フォルダ及び一般文書データベースを使った検索例

(例)

「営業第1課のだれかが書いた、ステレオに関する企業用の顧客情報」を検索する場合



(3) 分類索引検索

分類索引をたどりながら一般文書を探す方法を、分類索引検索といいます。分類索引検索では、一つの分類を下位にたどって一般文書を絞り込みます。

また、分類索引検索では、拡張文書参照モードを使用できます。拡張文書参照モードは、条件検索で分類索引への一般文書のリンクを検索条件にして検索した場合にも使用できます。

拡張文書参照モードとは

分類索引検索で一般文書を検索する場合は、拡張文書参照モードを使用できます。拡張文書参照モードとは、分類索引検索で一般文書を検索する場合に、一般文書及び一般文書が属するフォルダや一般文書データベースのアクセス権とは関係なく、分類索引（分類）に登録されているすべての一般文書を参照できるモードです。ただし、拡張文書参照モードの場合も、分類索引検索で指定する分類索引（分類）には、参照権（読み出し権）が必要です。分類索引（分類）に参照権（読み出し権）が与えられていないユーザは、その分類索引（分類）に登録されている一般文書を検索できません。

拡張文書参照モードの運用例

拡張文書参照モードでは、一般文書と一般文書が属するフォルダ及び一般文書データベースに対して参照権（読み出し権）を持たないユーザでも、その文書が分類索引（分類）に登録されていれば、分類索引検索で検索できます。したがって、通常、特定のユーザだけが参照できる一般文書に対して、ほかのユーザも参照できるようになります。

拡張文書参照モードを使用する場合の運用例を次に示します。

(例)

フォルダ「議事録」に属する一般文書は、営業1課のユーザだけが参照できるようにする。ただし、分類索引「営業地区支店」に登録されている一般文書については、営業2課のユーザも分類索引検索できるようにする。

なお、分類索引「営業地区支店」に対しては、すべてのユーザが一般文書を登録できるようにする。

拡張文書参照モードで上記のような運用をする場合、アクセス権は次のように設定します。

1. すべての一般文書データベースには、すべてのユーザにすべての権限を与える。
2. フォルダ「議事録」に対しては、営業1課のユーザにだけ参照権（読み出し権）を与える。そのほかのユーザには、アクセス権を与えない。
3. 分類索引「営業地区支店」には、営業1課及び営業2課のユーザにだけ、参照権（読み出し権）及び文書リンク権を与える。それ以外のユーザ（全ユーザ）には、文書リンク権だけを与える。
4. 営業1課のユーザは、フォルダ「議事録」に属する一般文書のうち、営業2課のユーザに検索させてもよい一般文書だけを分類索引「営業地区支店」に登録する。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

この例のように、拡張文書参照モードでは、一般文書及び一般文書が属するフォルダ及び一般文書データベースのアクセス権の制限を受けない、柔軟な分類索引検索ができます。

拡張文書参照モードの設定方法

拡張文書参照モードは、環境設定ファイルで定義します。環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(4) 論理演算検索

Document Manager での一般文書の検索は、一般文書を集合化するという考え方に基づいています。例えば、A という条件で一般文書を検索するとします。この A という条件に該当する一般文書を検索結果として、一つの集合とします。このように検索で得られる集合を検索結果集合といいます。

条件検索及びフォルダ検索で得た検索結果集合同士を論理演算して検索する方法を、論理演算検索といいます。論理演算検索の例を示します。

1. 「オープンシステム」という検索タームで全文検索した結果
2. 作成者が鈴木である一般文書を属性検索した結果
3. 1 と 2 の集合の論理積 (AND 論理演算) の一般文書を検索する

論理演算検索で、論理和と論理積を組み合わせて検索する場合は、2 回以上に分けて検索してください。

2.4 分類索引帳を利用した文書共用

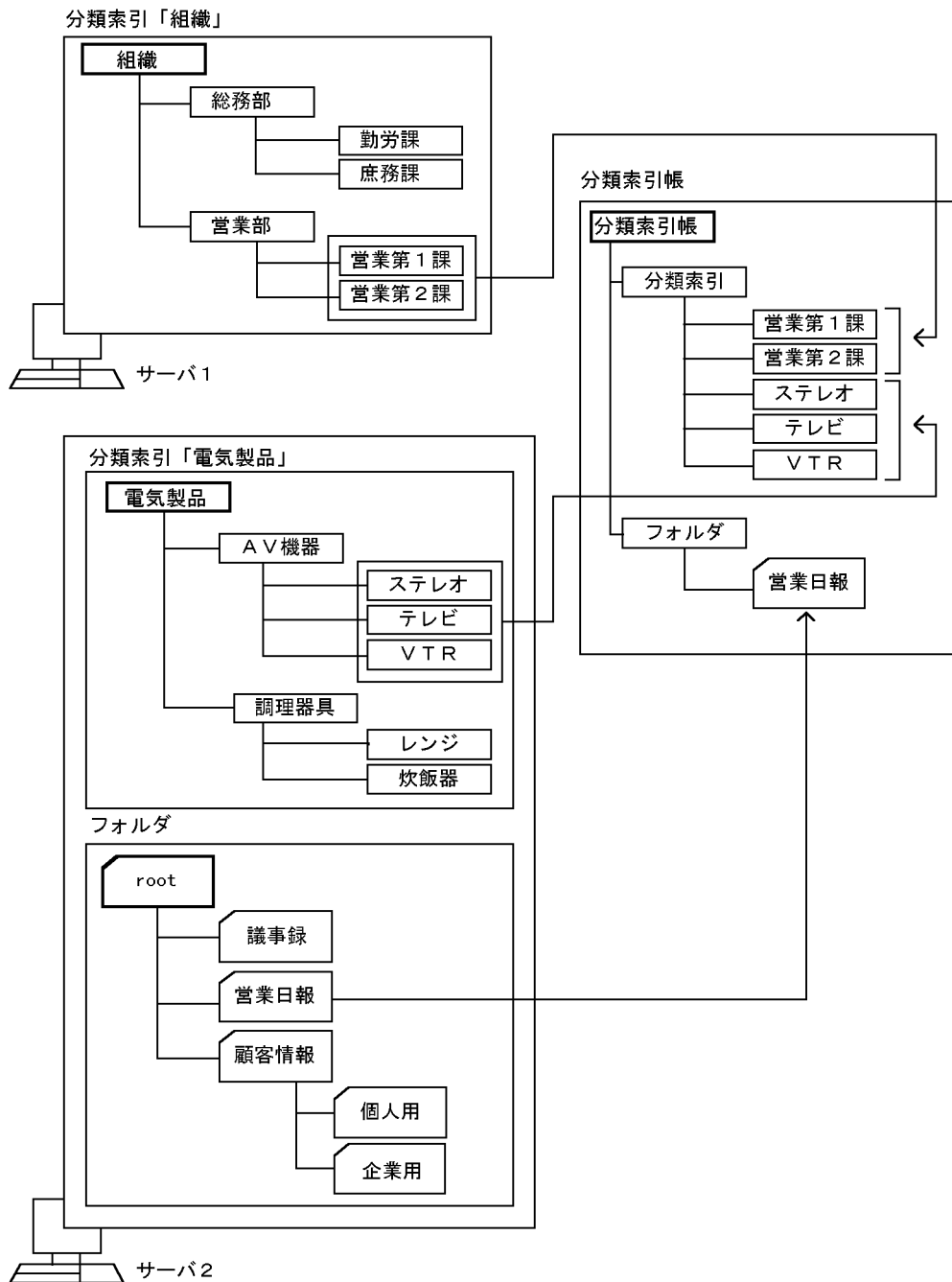
この節では、分類索引帳の機能と分類索引帳を利用した文書共用について説明します。

2.4.1 分類索引帳とは

分類索引帳とは、フォルダや分類索引の位置情報をユーザの利用目的に合わせて編集したファイル(.cip)です。フォルダや分類索引を利用するときと同様に、所属する(リンクしている)文書の一覧を表示したり、文書を編集したり、削除したりできます。分類索引帳には、同一サーバ内のフォルダ、分類索引だけではなく、異なるサーバで管理しているフォルダ、分類索引の位置情報も登録できます。分類索引帳は、Groupmax Integrated Desktop から作成します。分類索引帳の作成例を図 2-6 に示します。

2. 一般文書データベースでの文書の管理

図 2-6 分類索引帳の作成例



なお、分類索引帳の作成方法については、Groupmax Integrated Desktop の文書管理のオンラインヘルプを参照してください。

2.4.2 分類索引帳を利用したユーザ間の文書共有

分類索引帳は、オブジェクトの位置情報を編集したファイルです。Document Manager を利用するすべてのユーザが、利用環境、業務内容などを考慮して作成できます。また、作成した分類索引帳をメールなどでほかのユーザに配布すれば、クライアントの環境での文書共有が容易になります。

2.5 文書配布機能による複数サーバでの文書共用

この節では、文書配布機能の概要及び文書配布機能を使用する場合の管理方法について説明します。

2.5.1 文書配布機能とは

(1) 文書配布機能の概要

Document Manager では、あるサーバで管理している一般文書の複製を別のサーバに配布することによって複数のサーバ間で共用できます。この機能を文書配布機能といいます。

文書配布機能では、圧縮した一般文書も配布できます。これによって、ファイルの転送時間を短縮できます。

文書配布機能の利点を次に示します。

(a) 特定サーバへのアクセスの集中を緩和できる

Document Manager では、複数のサーバに複数のクライアントというシステム構成での運用が考えられます。それぞれのサーバには、利用目的ごとに文書が保存されています。このような状況では、特定のサーバにアクセスが集中することが考えられます。文書配布機能を利用して、アクセスが集中する文書を各サーバへ配布するとサーバの性能低下を防げます。

(b) 文書の更新は配布元のサーバだけで済む

複数のサーバ間で文書の共有ができなければ、必要な文書は各サーバで管理しなければなりません。文書が大量になる程、メンテナンスに使う時間は増え、資源も有効に利用できません。

しかし、文書によってはユーザ間での共有を目的としている文書、つまり参照だけの文書があります。このような文書は、あるサーバで一括管理し、ほかのサーバには必要に応じて、文書配布機能を使用して配布します。文書配布機能を使用して各サーバに配布される文書は、配布元のサーバのコピーです。したがって、必要なときに配布元のサーバで1回文書を更新すればよいことになります。

(2) 文書配布機能による文書の配布

(a) 配布の仕組み

文書配布機能では、文書を配布する側のサーバを配布元サーバといい、文書を配布される側のサーバを配布先サーバといいます。

文書を配布するには、配布元サーバで管理している文書のうち、配布する文書をグルー

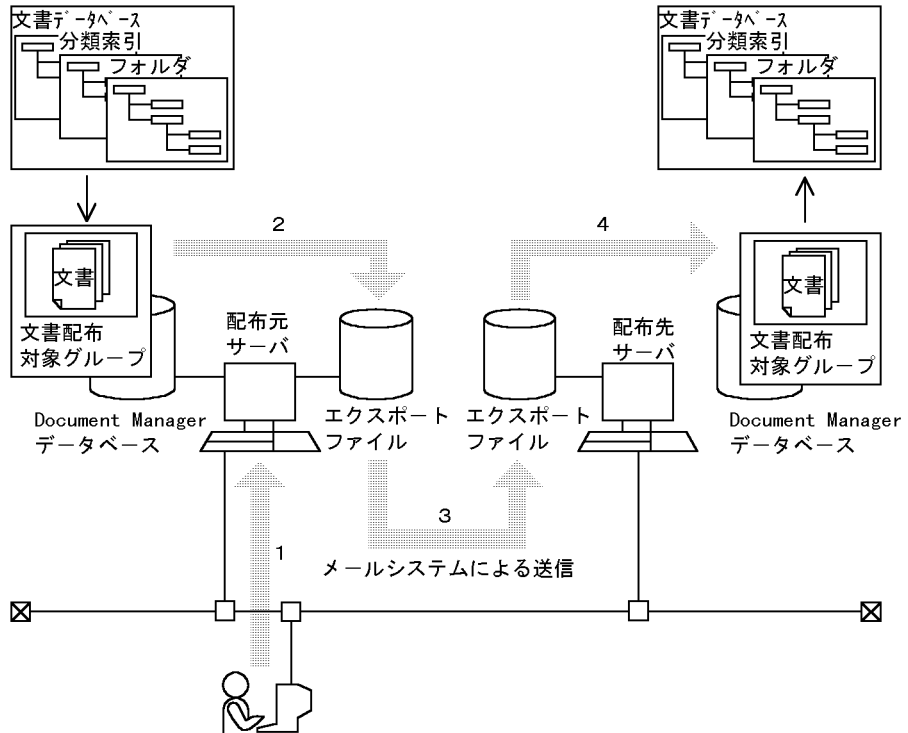
プ化しておきます。このグループを文書配布対象グループといいます。

配布元サーバは、ある文書配布対象グループに対してユーザの配布要求があると、該当する文書実体ファイルとそれに関連するファイルを Document Manager データベースから抽出し、配布用のファイルを作成します。この配布用のファイルをエクスポートファイルといいます。エクスポートファイルは、メールシステムによって、配布元サーバから配布先サーバへと送信されます。

配布先サーバは、配布されたエクスポートファイルから文書実体ファイルを取り出し、配布元サーバ側と同じ名称の一般文書データベースに文書を格納します。同様に、配布元サーバ側と同じ名称のフォルダ及び分類索引にも文書を登録します。

サーバ間での文書配布の仕組みについて、図 2-7 に示します。

図 2-7 サーバ間での文書配布の仕組み



- 1 ユーザが文書を配布する要求を出す
- 2 配布元サーバは、文書配布対象グループに含まれる文書（文書実体ファイル及び関連ファイル）をDocument Managerデータベースから抽出し、エクスポートファイルを作成する
- 3 配布元サーバは、エクスポートファイルをメールシステムによって配布先サーバに送信する
- 4 配布先サーバは、エクスポートファイルから文書を取り出し、配布元サーバ側と同じ名称の文書データベースに登録する

2. 一般文書データベースでの文書の管理

(b) 配布の対象

文書配布機能によって配布できるのは、一般文書だけです。フォルダ、分類索引及び文書データベースなどの文書の分類体系及びフォーム文書は配布できません。

なお、一般文書は圧縮した状態でも配布できます。

前回配布要求したバージョン（版）より現在のバージョンの方が大きい場合、存在する最も新しいバージョン、かつ、前回配布要求したバージョンより大きいバージョンを配布します。

(c) 配布の単位

文書を配布する場合、文書配布対象グループが配布の単位となります。配布元サーバで管理している文書のうち、配布する文書を文書配布対象グループとしてグループ化しておきます。

文書配布対象グループは、1サーバ内に複数、作成できます。また、配布先のサーバは、文書配布対象グループごとに設定できます。

文書配布対象グループの作成は、次の2通りの方法があります。

Document Manager のユティリティを使って作成する方法

1. 文書配布対象グループ操作ユティリティを使って、文書配布対象グループのグループ名や配布先サーバなどを決定します。
文書配布対象グループ操作ユティリティについては、「8.13 文書配布対象グループの一覧表示、作成又は削除 (ISgrpert)」を参照してください。また、既に作成した文書配布対象グループに配布先サーバを追加又は削除する場合は、配布先サーバ追加・削除ユティリティを使用します。配布先サーバ追加・削除ユティリティについては、「8.15 配布先サーバの追加又は削除 (ISaddsrv)」を参照してください。
2. 文書配布対象グループ更新用として作成した一般文書データベース、分類索引又はフォルダに文書を追加します。
文書を追加する例については、この項の「(d) 配布対象にする文書の追加及び削除」を参照してください。
3. 配布文書追加・削除ユティリティを実行して、文書配布対象グループに文書を追加します。
配布文書追加・削除ユティリティについては、「8.16 文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)」を参照してください。

Document Manager Client で作成する方法

Document Manager Client から、文書配布対象グループを作成します。Document Manager Client からの操作については、マニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

(d) 配布対象にする文書の追加及び削除

配布文書追加・削除ユティリティを使うと、一般文書データベース、分類索引又はフォ

ルダに登録されている文書を、文書配布対象グループに登録して配布できます。

文書配布対象グループに文書を追加又は削除するには、文書配布対象グループ更新用として作成した一般文書データベース、分類索引又はフォルダに文書を追加又は削除します。次に、配布文書追加・削除ユティリティを実行し、文書配布対象グループの更新及び文書の配布をします。

文書配布対象グループに文書を追加する例を示します。

1. 「配布用文書」という分類索引をあらかじめ作成しておく
2. 文書配布対象グループに所属するすべての文書を、先に作成した分類索引「配布用文書」にリンクする
3. 文書配布対象グループに文書を追加する場合は、分類索引「配布用文書」に文書を追加する
4. システム管理者が配布文書追加・削除ユティリティを実行する
5. 文書配布対象グループに文書が追加され、文書が配布される

配布文書追加・削除ユティリティについては、「8.16 文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)」を参照してください。

(e) 配布対象の抽出とエクスポートファイルの作成

Document Manager Client 又は配布文書追加・削除ユティリティを使った文書の配布要求があると、配布元サーバは該当する文書を文書データベースから抽出し、次のファイルで構成されるエクスポートファイルを作成します。×××の部分には、文書配布対象グループ名にタイムスタンプが付加された文字列です。タイムスタンプは、エクスポートファイル作成時の年月日時分秒が YYYYMMDDhhmmss の形式で付加されます。

配布用定義ファイル (×××.con)

配布対象となっているすべての文書の、ファイル情報などが格納されているファイルです。配布先サーバ側では、このファイルの情報を基にエクスポートファイルを Document Manager データベースに取り込みます。

配布用文書ファイル (×××.doc)

配布対象となっているすべての文書の、文書実体ファイル、関連ファイル及びテキストファイルのデータを統合したファイルです。

配布用属性ファイル (×××.arf)

配布対象となっているすべての文書の、属性ファイルを統合したファイルです。

エクスポートファイルは、一つの文書配布対象グループに対する 1 回の配布要求ごとに、1 組作成されます。作成される場所は、配布元サーバの作業ディレクトリ (/usr/infoshare/replica/export/(文書配布グループのオブジェクト ID)) の下です。

なお、配布対象の文書中にバージョン管理されている文書が含まれている場合、最も新しいバージョンの文書を対象にエクスポートファイルが作成されます。また、エクスポートファイルを作成済みの文書配布対象グループに対して、再度配布要求をした場合、前回のエクスポートファイル作成時から更新された文書 (1) 又は削除された文書 (

2. 一般文書データベースでの文書の管理

2) だけが抽出されます。

注 1 編集モードで取り出し、登録した文書を指します。

注 2 バージョンのみの削除ではなく、文書実体ファイルと属性を含む文書の削除を指します。

(f) エクスポートファイルの配布

メールシステムによる送受信

Document Manager サーバとメールシステムの間でのエクスポートファイルの受け渡しには、文書配布送受信デーモンという Document Manager の機能（プロセス）を使用します。配布元サーバで作成されたエクスポートファイルは、文書配布送受信デーモンによって、メールシステムへと渡されます。メールシステムに渡されたエクスポートファイルは、配布先のサーバの送受信デーモンによって、配布先サーバの作業ディレクトリ下に格納されます。こうして配布されたエクスポートファイルは、配布先サーバによって、Document Manager データベースに取り込まれます。

なお、メールシステムを起動していない状態で文書を配布要求した場合、エクスポートファイルは作成されますが、配布されません。この場合は、FTP（File Transfer Protocol、ファイル転送プロトコル）や CMT（カセット磁気テープ）などで配布してください。この方法での配布については、「メールシステムと連携していない場合の配布」を参照してください。

また、文書配布送受信デーモンが起動していない状態で文書を配布要求した場合、配布要求は受け付けられますが、エクスポートファイルは作成されません。この場合は、文書配布送受信デーモンを起動したときにエクスポートファイルが作成されます。

メールシステムと連携していない場合の配布

Document Manager サーバがメールシステムと連携していない場合は、FTP や CMT などによって文書を配布することもできます。この場合は、次の手順で文書を配布します。

1. FTP や CMT などによって、配布元サーバの作業ディレクトリから配布先サーバの作業ディレクトリにエクスポートファイルを複写する。
2. 配布先サーバでインポート機能ユティリティを実行し、エクスポートファイルを Document Manager データベースに取り込む。

インポート機能ユティリティについては、「8.12 文書配布情報ファイルの取り込み (ISimport)」を参照してください。

(g) 配布した文書の状態の表示

メールシステムと連携して文書配布を行う場合、文書の配布状態表示ユティリティを使用できます。

文書の配布状態表示ユティリティを使用すると、配布した文書（エクスポートファイル）の配布状態（配信中、取り込み成功、取り込み失敗）を配布元サーバから確認できます。文書の配布状態表示ユティリティについては、「8.17 文書の配布状態表示 (ISrpstat)」を参照してください。

また、配布先でエラーが発生した場合、エラーの要因を取り除いた後に文書再配布ユティリティを使用すると、文書を再配布できます。文書再配布ユティリティについては、「8.18 文書の再配布機能 (ISrprsnd)」を参照してください。

また、環境設定ファイルでの定義によって、文書配布が正常終了したことを確認した時点で、エクスポートファイルを自動的に削除できます。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(3) 配布された文書に対する操作

文書配布機能によって、配布先サーバに配布された文書を配布文書といいます。これに対し、配布元サーバの文書をオリジナル文書といいます。

配布文書に対しては、次に示す操作だけを実行できます。

文書の検索

文書の読み込み

ただし、Document Manager 管理者は、上記の操作以外に配布文書を削除することもできます。

2.5.2 文書配布機能に関する管理

(1) 文書配布機能を使用する場合の環境設定

文書配布機能を使用する場合は、次に示す環境設定が必要です。

(a) 文書配布機能の実行環境の作成

文書配布機能を使用する場合は、初めに、文書配布機能ユティリティを実行しておく必要があります。文書配布機能ユティリティを実行すると、文書配布機能を使用するための実行環境が Document Manager データベースに追加されます。また、次の二つのディレクトリが作成されます。

配布元サーバの作業ディレクトリ

配布先サーバの作業ディレクトリ

文書配布機能ユティリティについては、「8.6 文書配布機能の実行環境作成 (ISreplica)」を参照してください。

(b) メールシステムと連携するための設定

メールシステムによって文書を配布する場合は、次の二つの定義が必要です。

連携サーバ設定ファイル

連携サーバ設定ファイルは、文書配布機能による文書の送受信で、連携するサーバの情報を記述するファイルです。メールシステムによって文書を配布できるのは、この

2. 一般文書データベースでの文書の管理

ファイルに記述されているサーバだけです。連携サーバ設定ファイルについては、「5.7.2 文書配布機能を使用するための環境設定」を参照してください。

環境設定ファイルでの定義

環境設定ファイルでは、メールシステムにログインするときのユーザ ID などの定義をします。環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(c) 全文検索サーバと連携している場合の設定

配布先サーバ側で、全文検索サーバと連携した全文検索を実行する場合は、文書と一緒にテキストファイルも配布する必要があります。そのため、配布元サーバの AP 情報管理ファイルに、次に示すファイルの定義を記述してください。

テキストファイルの定義

全文検索サーバにテキストファイルを登録するために必要です。

文書関連ファイルの定義

テキストファイルを文書と一緒に配布するために必要です。

この定義がない場合、テキストファイルは、全文検索サーバへの登録後に Document Manager データベースから削除されます。そのため、テキストファイルを文書と一緒に配布できません。なお、この定義をする前に作成した文書は、テキストファイルが Document Manager データベースから削除されているため、テキストファイルを再度作成する必要があります。

AP 情報管理ファイルについては、「5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定」を参照してください。

(d) 圧縮した文書を配布するための環境設定

圧縮した文書を配布するには、環境設定ファイルでの定義が必要です。環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(e) 文書の配布状態管理ユティリティを使用するための環境設定

文書の配布状態管理ユティリティを使用するには、環境設定ファイルでの定義が必要です。環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(2) 文書配布の手順

文書配布機能によって文書を配布する場合は、次の手順で実行します。

1. メールシステムの起動

Groupmax Mail を起動します。Groupmax Mail の起動については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

2. Document Manager サーバの起動

Document Manager サーバを起動します。Document Manager の起動については、「6.1 サーバの起動」を参照してください。

3. 文書配布送受信デーモンの起動

文書配布送受信デーモン起動ユーティリティで文書配布送受信デーモンを起動します。文書配布送受信デーモンの起動については、「8.7 文書配布送受信デーモンの起動 (ISreplicastart)」を参照してください。

4. 文書配布対象グループの作成

配布したい文書を文書配布対象グループとして作成しておきます。文書配布対象グループの作成は、次の2通りの方法があります。

- Document Manager のユーティリティを使用する方法

文書配布対象グループ操作ユーティリティと、配布文書追加・削除ユーティリティを使って作成します。各ユーティリティの使用方法については、「2.5.1 文書配布機能とは」を参照してください。各ユーティリティの文法については、「8.13 文書配布対象グループの一覧表示、作成又は削除 (ISgrpcrt)」及び「8.16 文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)」を参照してください。

- Document Manager Client を使用する方法

Document Manager Client を使用して作成する方法については、マニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

5. 文書の配布

文書配布対象グループの文書を配布します。文書の配布は、次の2通りの方法があります。

- Document Manager のユーティリティを使用する方法

配布文書追加・削除ユーティリティを実行して、文書を配布できます。配布文書追加・削除ユーティリティについては、「8.16 文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)」を参照してください。

- Document Manager Client を使用する方法

Document Manager Client から配布する文書を選択して配布できます。Document Manager Client からの操作については、マニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

(3) 文書配布の記録と管理

文書の配布状態管理機能

文書の配布状態管理機能は、文書の配布状態を配布元サーバで管理して、文書の配布状態（配信中、取り込み成功、取り込み失敗）の表示やサーバ指定での再配布を可能にすることで、配布中の運用を容易にするための機能です。文書の配布状態管理機能については、「7.13 文書の配布状態管理機能に関する運用」を参照してください。

文書配布ログ

2. 一般文書データベースでの文書の管理

文書配布機能による文書の配布では、文書の配布に関する情報（配布日時、サーバ名、配布対象グループ名など）を文書配布ログとして出力します。文書配布ログは、配布元サーバでのエクスポートファイルの作成時、及び配布先サーバでのエクスポートファイルの取り込み時に、それぞれファイルに出力されます。このファイルを文書配布ログファイルといいます。

文書配布ログファイル及びその運用方法については、「7.8 文書配布ログに関する運用」を参照してください。

（4）文書配布対象グループに関する情報表示

定義した文書配布対象グループの一覧、文書配布対象グループに登録されている文書の更新状態、配布回数などの一覧を表示できます。文書配布対象グループの文書を配布するかどうか判断する場合や文書の状態を確認したい場合、文書配布対象グループの情報を参照すると便利です。文書配布対象グループに関する情報は、文書配布対象グループ情報の表示ユティリティを使用して出力します。文書配布対象グループ情報の表示ユティリティについては、「8.14 文書配布対象グループ情報の表示 (ISgrpinf)」を参照してください。

（5）運用上の注意事項

フォーム文書は配布できません。

フォルダ、分類索引などの文書の分類体系及び文書データベースは配布できません。配布元サーバと配布先サーバ間では、あらかじめ、同じ名称及び属性の一般文書データベース、同じ名称の分類索引及びフォルダを作成しておく必要があります。名称が同じでも、属性が異なる一般文書データベースに対しては、文書を配布できません。同じ名称の分類索引がない場合は、該当する文書はリンクされません。同じ名称のフォルダが存在しない場合は、最上位フォルダの直下のデフォルトフォルダに格納されます。

配布先サーバに同じ名称の一般文書データベースが複数ある場合、文書は、オブジェクト ID が最も小さい一般文書データベースに格納されます。また、同じ名称のフォルダ及び分類索引が複数ある場合も、オブジェクト ID が最も小さいフォルダ及び分類索引に登録されます。

配布元サーバで作成されたエクスポートファイルは、対応する文書配布対象グループを解除するまで削除されません。そのため、システム管理者は、不要なエクスポートファイルを配布元サーバの作業ディレクトリから削除してください。

配布先サーバでエラーが発生した場合は、エラーメッセージファイルにエラー情報が出力されます。エラー要因を取り除いてからインポート機能ユティリティを実行してください。又は、エラーメッセージファイルと配布先サーバの作業ディレクトリにあるエクスポートファイルを削除した後、配布元サーバからの操作をやり直してください。

配布元サーバと配布先サーバ間では、AP 情報管理ファイルの内容を統一しておいてください。サーバ間で AP 情報管理ファイルが統一されていないと、配布文書からア

アプリケーションを起動できない場合があります。AP 情報管理ファイルについては、「5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定」を参照してください。

メールシステムの混雑を避けるなどの理由で、配布要求時以外の任意の時間に文書を配布する場合は、オペレーティングシステムのスケジュール機能を使用して、任意の時刻に配布文書追加・削除ユティリティを実行してください。この場合、Document Manager Client からの文書の配布はしないでください。

複数のサーバから文書を配布される配布先サーバでは、配布文書の配布元サーバが識別できるように、配布元サーバごとにフォルダを作成して、配布文書を登録することをお勧めします。

複数グループアクセス権でアクセス権管理を運用している場合は、「2.2.5(4)(f) 複数グループアクセス権の運用上の注意事項」を参照してください。

エクスポートファイルのファイルサイズが2ギガバイトを超えると、配布先サーバでエラーになります。このような場合は、エクスポートファイルのファイルサイズが2ギガバイトを超えないようにフォルダを分割してください。

エクスポートファイルをファイル転送する場合は、バイナリモードでファイル転送してください。

半角コンマを含む名称の分類・分類索引又はフォルダに正しく登録されている文書を配布すると、配布先サーバで分類・分類索引又はフォルダに正しく登録できません。詳細については、「付録L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

3

フォーム文書データベース での文書の管理

この章では、フォーム文書データベースでの文書の管理方法について説明します。

3.1 フォーム文書

3.2 フォーム文書データベース

3.1 フォーム文書

この節では、フォーム文書の概要と管理方法について説明します。

3.1.1 フォーム文書の概要

ここでは、フォーム文書の概念について説明します。

(1) フォーム文書とは

フォーム文書は、Groupmax Form で作成した定形文書（フォーム）を基にして作成した文書データに、Document Manager での属性を追加した文書です。

フォーム文書は、フォーム文書データベースで管理されます。

(2) フォーム文書のアクセス権

新規にフォーム文書を登録又は作成したユーザが、そのフォーム文書の所有者になります。フォーム文書はフォーム文書データベースのアクセス権によって制御されます。

3.1.2 フォーム文書の管理

(1) フォーム文書データベースを使用した文書管理

フォーム文書は、基になるフォームが登録されているフォーム文書データベースで管理されます。フォーム文書データベースは業務内容に応じて作成できますので、文書の形式を意識することなく使用できます。フォーム文書データベースについては、「3.2 フォーム文書データベース」を参照してください。

(2) 排他制御

フォーム文書の排他制御は、一般文書と同じです。排他制御については「2.1 一般文書」を参照してください。

(3) フォーム文書の属性

フォーム文書のシステム定義属性は、フォームの項目に指定できます。フォーム文書のシステム定義属性を次の表に示します。

表 3-1 フォーム文書のシステム定義属性

属性	意味
フォーム文書名 ^{1, 2}	フォーム文書の名称
フォーム文書データベース名	フォーム文書を作成したフォーム文書データベース名
フォーム文書通番 ²	フォーム文書データベース内のフォーム文書の通番

属性	意味
作成日時 ²	作成した日時
作成者名 ^{1, 2}	作成時に設定する作成者に関する情報
更新日時 ²	更新した日時
フォーム定義名 ²	フォーム文書を作成したフォーム定義名
コメント ^{1, 2}	ユーザの作成したコメント

注 1 Groupmax Form から属性値を更新できます。

注 2 フォーム文書を一覧表示するときの表示条件として設定できます。また、Groupmax Form を利用してデータを集計するときの検索対象として指定できます。

3.2 フォーム文書データベース

ここでは、フォーム文書データベースの概要と管理について説明します。

3.2.1 フォーム文書データベースの概要

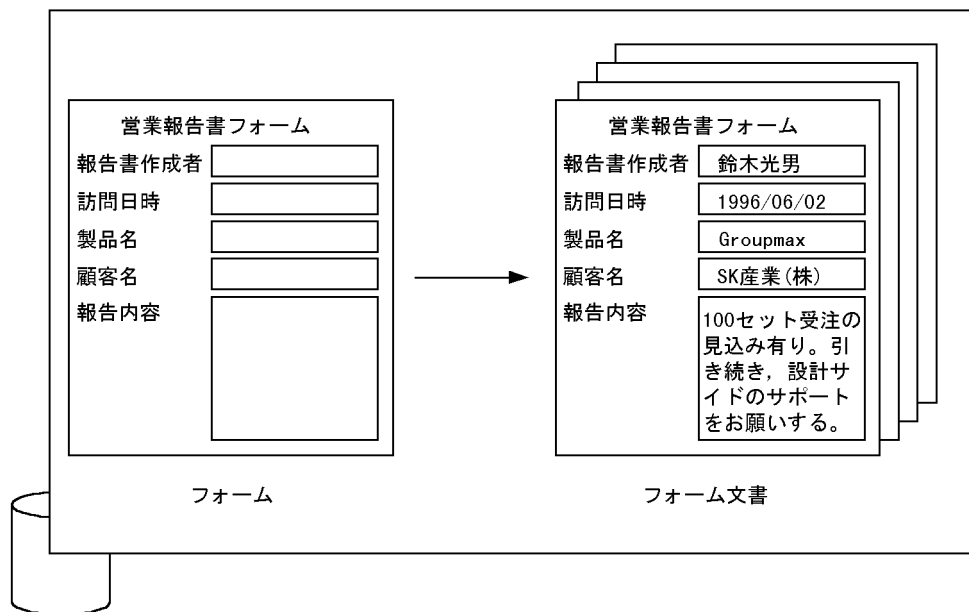
ここでは、フォーム文書データベースの概要について説明します。

(1) フォーム文書データベースとは

フォーム文書データベースは、「顧客管理データベース」「製品仕様 Q&A データベース」など、目的に応じて作成する業務指向データベースです。フォーム文書データベースには、Groupmax Form で作成したフォームを登録します。例えば「顧客管理データベース」の場合「営業報告書」というフォームを登録して、「顧客名」「訪問日時」などのデータを入力できるようにします。このフォーム上にデータを入力して作成されたものを、フォーム文書といいます。フォーム上にデータを入力することで、文書の形式を意識することなく、一定の形式で情報を蓄積できます。

フォーム文書データベースの概要を、図 3-1 に示します。

図 3-1 フォーム文書データベースの概要



フォーム文書データベース

(2) フォーム文書データベースの機能

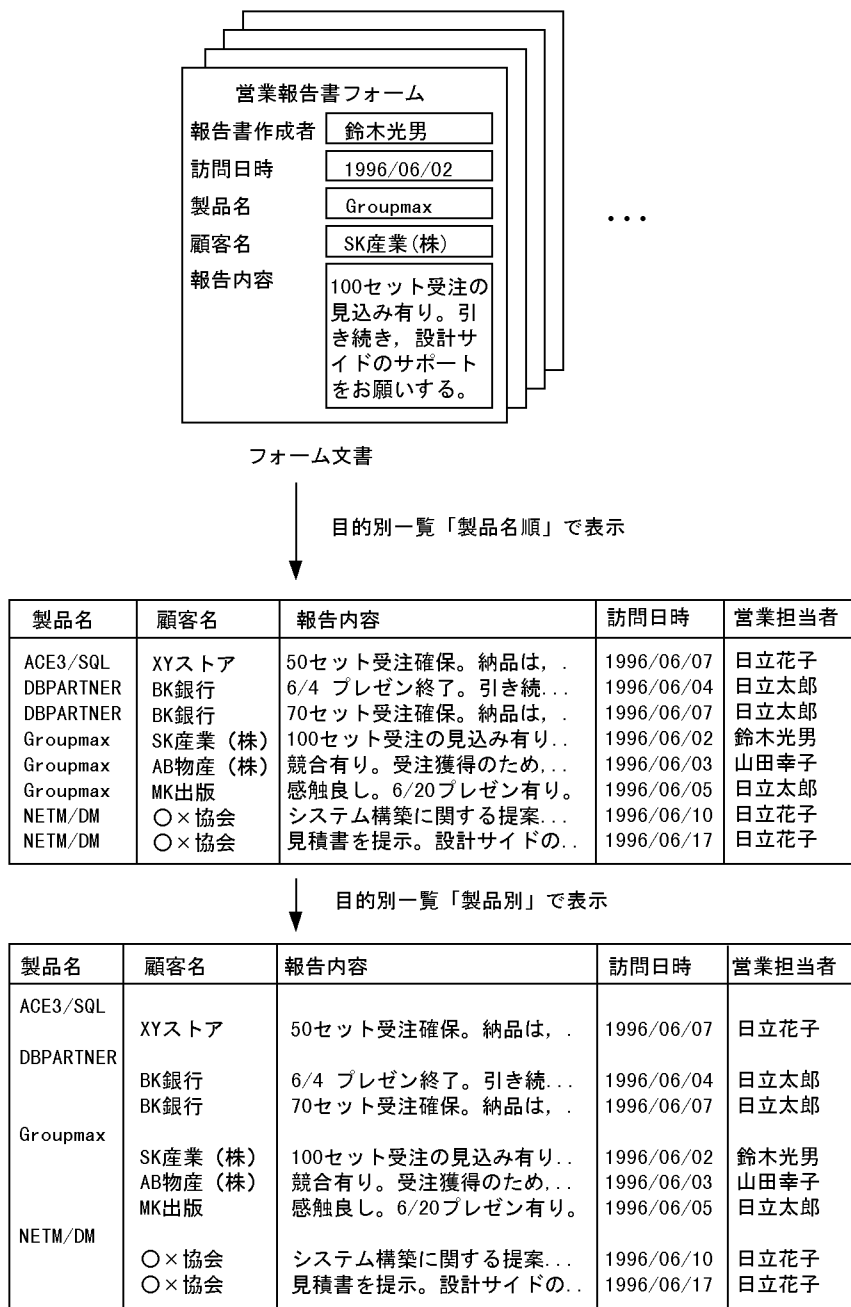
(a) 目的に応じて文書の一覧を作成する

フォーム文書データベースに格納されたフォーム文書は、目的に応じて定義した形式で一覧表示できます。この表示形式を、目的別一覧といいます。目的別一覧を使うと、指定した項目をソートして表示したり、同じデータがある場合は重複排除して表示したりできます。さらに、関連のある文書にインデントを付けて階層形式で表示できます。また、アクセス権の設定によって、参照できる目的別一覧を制御できます。

目的別一覧の表示例を図 3-2 に示します。

3. フォーム文書データベースでの文書の管理

図 3-2 目的別一覧の表示例



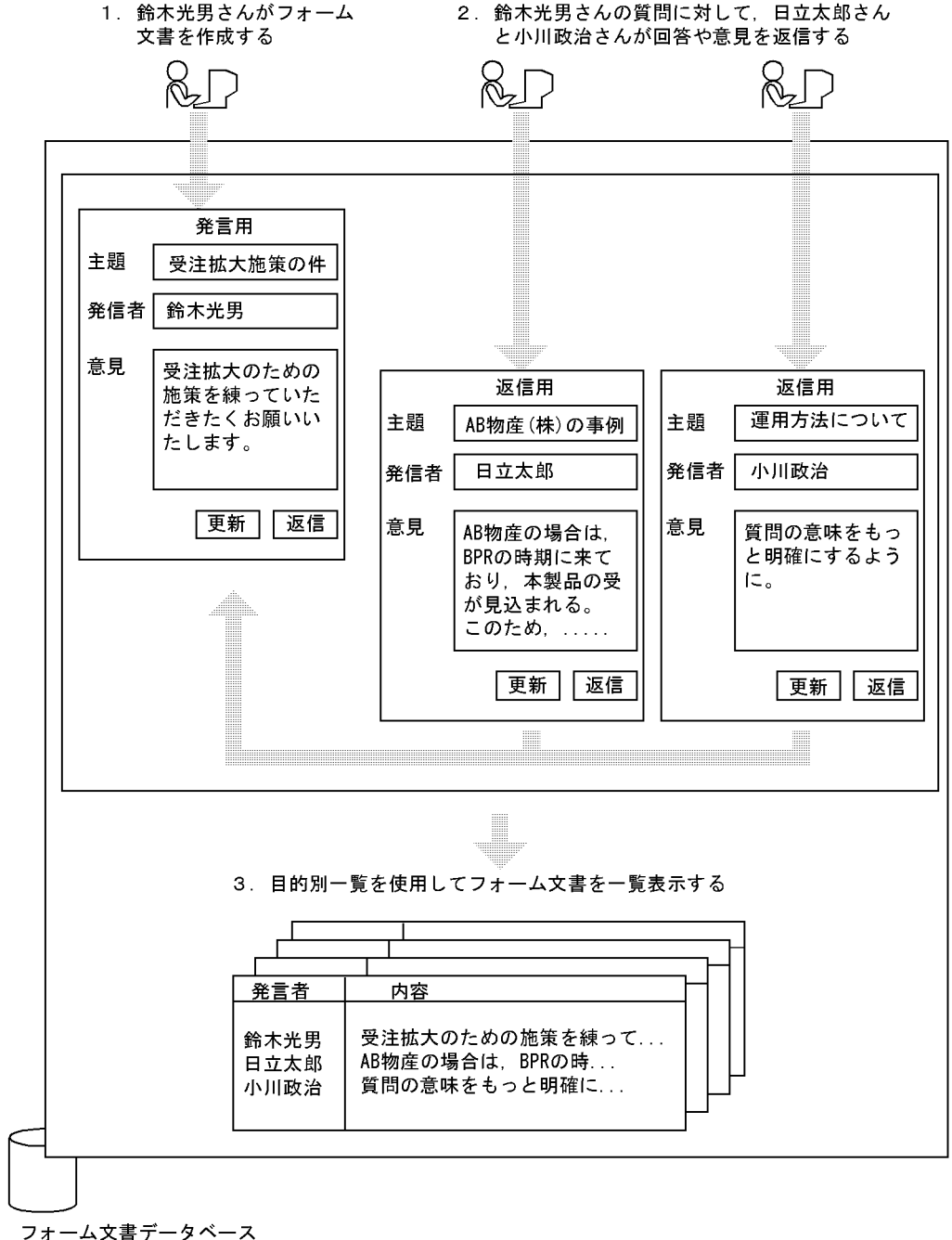
(b) 登録されたフォーム文書への返信を作成して意見交換する

フォーム文書データベースでは、あるフォーム文書に対して意見や回答を作成して意見を交換する電子会議ができます。コメントは、事前に登録した返信用のフォームを使って作成し、基になるフォーム文書と同じフォーム文書データベースに登録します。基に

なるフォーム文書とそれに対する返信は、階層表示することで関連性が分かります。

フォーム文書とそれに対するコメントの表示例を図 3-3 に示します。

図 3-3 フォーム文書と返信の例



3. フォーム文書データベースでの文書の管理

(c) データを集計する

フォーム文書データベースに登録されているフォーム文書から、特定のデータを集計して表示できます。フォーム文書データベースのデータを集計するときには、集計フォームを使用します。特定のデータを集計するためには、あらかじめ Groupmax Form のスクリプト (@ 業務文書入力コマンド) を使用してフォームを設計しておきます。この集計フォームに定義されたスクリプトに従って、データが集計されます。なお、集計の対象となる項目の属性型によって検索機能が異なります。集計フォームを利用した属性型別の検索機能について、表 3-2 に示します。

表 3-2 集計フォームを利用した属性型別の検索機能一覧

比較演算子	Document Manager での属性型			
	数値型	日付型	可変長文字列型	固定長文字列型
完全一致 (=)			×	
一致しない()			×	
部分一致	×	×	1	2
含まない	×	×	×	2
~より小さい(<)			×	
~より大きい(>)			×	
~以上()			×	
~以下()			×	

(凡例)

○ : 検索できる。

× : 検索できない。

注 集計フォームを設計するとき、Groupmax Form のスクリプトで複数の条件式を記述する場合に、すべての条件式の中で使用する論理演算子は論理和又は論理積のどちらかに統一してください。混在している場合は、実行時エラーとなります。

注 1 ワイルドカードを指定して検索できません。すべて不特定箇所にある文字列だけ検索できます。したがって、Groupmax Form からの検索に使用する条件式でメタキャラクタは使用できません。

注 2 ワイルドカードを指定して検索できます。したがって、Groupmax Form からの検索に使用する条件式でメタキャラクタを使用できます。

例えば、製品の受注管理をするフォーム文書データベースを考えます。このフォーム文書データベースに登録される受注データは、図 3-4 のような「受注伝票フォーム」を基に作成できます。

図 3-4 受注伝票フォームの例

受注伝票フォーム	
営業担当	<input type="text"/>
製品名	<input type="text"/>
受注数	<input type="text"/>
顧客名	<input type="text"/>
受付日	<input type="text"/>

このフォーム文書データベースで管理されているフォーム文書を、目的別一覧を利用して一覧表示してみます。

図 3-5 目的別一覧「顧客別」で一覧表示したフォーム文書の例

顧客名	製品名	受注数	受付日
XYストア	ACE3/SQL	260	1997/04/05
	Groupmax	752	1997/04/25
	NETM/DM	129	1997/04/17
BK銀行	DBPARTNER	286	1997/02/04
	Groupmax	154	1997/03/27
SK産業（株）	DBPARTNER	136	1997/02/04
	Groupmax	387	1997/03/27

さらに、このようなデータが登録されているフォーム文書データベースに対して、集計フォームを起動させることで、特定の製品の総受注数が集計できます。データの集計例を、図 3-6 に示します。

図 3-6 データの集計例

製品別受注状況		
製品名	顧客名	受注数
Groupmax	XYストア	752
Groupmax	BK銀行	154
Groupmax	SK産業（株）	387
合計		1293

注 集計フォームに定義されているスクリプトに従って、データが集計される。

集計結果として出力されるファイルは、一般文書として保存できます。例に挙げた製品の受注管理をするフォーム文書データベースから、期ごとの製品別の総受注数を集計して、結果を一般文書として一つのフォルダで管理するような運用も考えられます。

3. フォーム文書データベースでの文書の管理

データの集計に利用する集計フォームには、データを集計するときの条件を Groupmax Form のスクリプトを使用して記述しておく必要があります。なお、集計フォームに定義されているスクリプトの内容によって、集計対象となるデータが異なります。

データの集計対象となるフォーム文書データベースが指定されている場合

集計フォームが登録されているフォーム文書データベースのデータではなく、スクリプトの定義に従ってデータを集計します。例えば、フォーム文書データベース「受注管理」に登録されているフォーム文書を一覧表示している場合でも、起動する集計フォームに集計対象とするフォーム文書データベース「発注管理」が指定されていれば、フォーム文書データベース「発注管理」を対象として、データを集計します。なお、スクリプトの定義によっては、複数のフォーム文書データベースのデータも集計できます。

データの集計対象となるフォーム文書データベースが指定されていない場合

選択中のフォーム文書データベースから、集計フォームに定義されたスクリプトに従ってデータを集計します。

3.2.2 フォーム文書データベースの管理

ここでは、フォーム文書データベースの管理について説明します。

(1) フォーム文書データベースの属性

(a) システム定義属性

フォーム文書データベースの属性について、表 3-3 に示します。

表 3-3 フォーム文書データベースのシステム定義属性

属性	意味
フォーム文書データベース ID	フォーム文書データベースを指す固有の識別子
フォーム文書データベース名	フォーム文書データベースの名称
所有者ユーザ名	所有者のユーザ ID
所有者アクセス権	所有者のアクセス権の種類
グループアクセス権	グループのアクセス権の種類
全ユーザアクセス権	全ユーザのアクセス権の種類
作成日時	作成した日時
作成者名	作成時に設定する作成者に関する情報
更新日時	更新した日時
更新者ユーザ名	更新したユーザのユーザ ID
フォーム定義	フォーム文書データベースに定義されたフォーム定義情報

属性	意味
目的別一覧定義	フォーム文書データベースに定義された目的別一覧定義情報
コメント	ユーザの作成したコメント

(b) ユーザ定義属性

目的別一覧などを利用して、フォーム文書を一覧表示する場合、フォーム文書データベースに定義されているユーザ定義属性を利用できます。

Document Manager からの属性定義

フォームの項目名に対して、ユーザ定義属性を追加してください。ただし、サンプルとして提供されているフォーム文書データベースの定義情報を利用する場合は、ユーザ定義属性を追加する必要はありません。ユーザ定義属性は、フォーム文書を一覧表示するときの表示項目として利用できます。

フォーム文書データベースのユーザ定義属性について、表 3-4 に示します。

表 3-4 フォーム文書データベースのユーザ定義属性

属性名	属性型	備考
ユーザが指定した属性名 ¹	文字列型 (STRING)	可変長文字列型
	固定長文字列型 ² (FIXED_STRING)	1 ~ 255 バイトの間で定義可能
	整数型 (INT)	-
	日付型 (TIME)	-

注 1 指定できる属性名には、次の制限があります。

- ・1 ~ 50 バイトで指定します。
- ・属性名として使用できるのは、次に示す文字です。
 - ・1 バイトコードの < 英大文字 > , < 英小文字 > , < 数字 > , 「_」(アンダースコア)
 - ・2 バイトコードの文字 (ただし、空白を除く)
 - ・「IS_」又は「_」(アンダースコア) で始まる名称は、使用できません。

注 2 固定長文字列型の文字列データには、必ず文字列の終わりを示す null 文字が含まれますので、実際に格納できるデータの最大長は定義サイズから 1 バイト少なくなります。

登録するフォームから属性を自動的に取り込む

Groupmax Form で作成したフォームをフォーム文書データベースに登録するときに、フォームの各項目に対応する属性をフォーム文書データベースのユーザ定義属性として登録できます。この機能は、Groupmax Integrated Desktop のバージョンが 02-30 以降の場合に使用できます。ただし、Document Manager で定義できる属性名だけ取り込みます。なお、Groupmax Form で定義できない属性 (日時型など) については、Document Manager から追加してください。フォーム上の項目の属性型と Document

3. フォーム文書データベースでの文書の管理

Manager での属性型の対応について、表 3-5 に示します。

表 3-5 フォーム上の属性型と Document Manager での属性型の対応

フォーム上の属性型		Document Manager での属性型
文字型		文字列型 (STRING) ¹
		固定長文字列型 (FIXED_STRING)
数値型 (小数やパック形式なども含む)		固定長文字列型 (FIXED_STRING) ²
リッチテキスト ³		添付ファイル
		文字列型 (STRING) ⁴
電子印データ ³		添付ファイル
明細項目 ⁵	数値型	添付ファイル
		固定長文字列型 (FIXED_STRING) ²
	文字型	添付ファイル
		文字列型 (STRING) ¹
		固定長文字列型 (FIXED_STRING) ²

注 1 Groupmax Form で定義した項目けた数に対し、NULL 文字 1 バイト分を自動的に追加して定義されます。そのため、255 けた以上の項目を定義した場合、文字列型 (可変長文字列型) として扱われます。

注 2 フォーム上は、数値型属性として小数やパック形式を扱えます。ただし、Document Manager 上では、対応する属性型がないため、Groupmax Form で定義した項目けた数に対し、次に示す規則に従い自動的に固定長文字列型として取り込みます。

・小数を含まない場合

項目けた数 + 2 (NULL 文字、負の符号の文字列長を含む)

・小数を含む場合

項目けた数 + 3 (NULL 文字、負の符号の文字列長、小数点の文字列長を含む)

・小数けたあり、整数けたなしの場合

項目けた数 + 4 (NULL 文字、負の符号の文字列長、小数点の文字列長、整数部 '0' の文字列長を含む)

したがって、必要に応じて、フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスで属性型を変更してください。

注 3 Groupmax Form のバージョンが 02-20 以前である場合、フォーム文書の項目として表示できません。

注 4 リッチテキストから切り出したテキストデータです。フォーム文書を一覧表示するときの表示データとして使用できます。

注 5 Groupmax Form のバージョンが 02-31 以前である場合、フォーム文書の項目として表示できません。フォーム上での明細項目は、ファイル形式で格納します。ただし、明細項目の 1 行目のデータは、通常の数値、文字、日時の型に格納されます。したがって、1 行目のデータだけ目的別一覧で表示したり、文書一覧の表示条件にしたりできます。

(2) アクセス権の種類と許可される操作

ここでは、アクセス権の種類と許可される操作について、オブジェクトごとに説明します。

(a) フォーム文書データベースのアクセス権

フォーム文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作について、次の表に示します。

表 3-6 フォーム文書データベースのアクセス権の種類と許可される操作

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
参照	属性の参照、フォーム定義及び目的別一覧定義の参照、目的別一覧の表示、フォーム文書の参照
編集	参照権で許可される操作、属性の変更、フォーム定義及び目的別一覧定義の更新、フォーム文書の更新
文書作成	フォーム文書の作成、フォーム定義及び目的別一覧定義の作成
すべて	フォーム文書データベースに関するすべての操作

(凡例)

- : すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また、このアクセス権が設定されている場合、アクセス権の設定対象であるフォーム文書データベース自体が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

新規にフォーム文書データベースを作成したときは、システム文書データベースのアクセス権を引き継ぎます。したがって、Document Manager の運用形態やフォーム文書データベースの共有の度合いなどを考慮して、所有者又は Document Manager 管理者がアクセス権を変更してください。なお、アクセス権の変更は、Groupmax Integrated Desktop で行ってください。

フォーム文書データベースに設定したアクセス権は、そのフォーム文書データベースに属するフォーム文書を操作するときのアクセス権として利用されます。ただし、フォーム文書の所有者アクセス権の所有者には、フォーム文書データベースの所有者ではなく、フォーム文書の作成者が適用されます。

(b) フォーム定義のアクセス権

フォーム定義のアクセス権の種類と許可される操作について、次の表に示します。

表 3-7 フォーム定義のアクセス権の種類と許可される操作

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
すべて	フォーム定義の参照

3. フォーム文書データベースでの文書の管理

(凡例)

- :すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また、このアクセス権が設定されている場合、アクセス権の設定対象であるフォーム定義自体が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

なお、デフォルトとして、フォーム文書データベースのアクセス権を引き継ぎます。また、定義したユーザとは関係なく、所有者はフォーム文書データベースの所有者となります。所有者は、フォーム文書データベースの所有者以外に変更できません。

(c) 目的別一覧定義のアクセス権

目的別一覧定義のアクセス権の種類と許可される操作について、次の表に示します。

表 3-8 目的別一覧定義のアクセス権の種類と許可される操作

アクセス権の種類	許可される操作
なし	-
すべて	目的別一覧の参照

(凡例)

- :すべての操作を許可しない。

注 グループのアクセス権としては設定できません。また、このアクセス権が設定されている場合、アクセス権の設定対象である目的別一覧定義自体が Groupmax Integrated Desktop の画面上に表示されません。

なお、デフォルトとして、フォーム文書データベースのアクセス権を引き継ぎます。また、定義したユーザとは関係なく、所有者はフォーム文書データベースの所有者となります。所有者は、フォーム文書データベースの所有者以外に変更できません。

4

Document Manager の操作環境の構築

この章では、文書データベース、フォルダ、分類索引及び文書配布機能の構築について説明します。また、Document Manager の使用例についても説明します。

4.1 一般文書を管理するための操作環境の設計と運用

4.2 フォーム文書を管理するための操作環境の設計と運用

4.3 Document Manager の使用例

4.1 一般文書を管理するための操作環境の設計と運用

この節では、一般文書を管理するための操作環境を設計するときに考慮していただきたい点及びクライアントからの一般文書データベース、フォルダ、分類索引及び文書配布機能の定義、変更などについて説明します。

4.1.1 一般文書を管理するためのオブジェクトについて

一般文書を管理するために必要なオブジェクトは次のとおりです。

一般文書データベース

フォルダ

これらのオブジェクトは Groupmax Integrated Desktop 又は Document Manager Client から定義、変更します。

また、必要に応じて分類索引を定義します。複数サーバを利用して文書を共用する場合は、文書配布機能を利用して、文書の共用を図ると便利です。

4.1.2 一般文書データベースの設計

ここでは、一般文書データベースを設計するときに考慮する点について説明します。

(1) システム文書データベースだけで運用する

文書に対してユーザ定義属性などを設定しない場合、新たに一般文書データベースを定義する必要はありません。この場合、システム文書データベースだけで運用します。必要ならば、管理する文書に共通する属性を、ユーザ定義属性としてシステム文書データベースに定義します。

(2) 管理する文書の種類と定義する属性を考える

Document Manager で管理する文書の種類と、文書にどのような属性を追加すると便利なのかを考えます。Document Manager で管理する文書と定義する属性の例を、表 4-1 に示します。

表 4-1 Document Manager で管理する文書の種類と定義する属性の例

文書の種類	定義する属性の例
技術論文	技術名、参考文献
研究資料	研究テーマ
製品の設計書	開発完了日

文書の種類	定義する属性の例
提案書	提案先, 競合先
議事録	開催日, 出席者

(3) アクセス権による一般文書データベースの運用方法を考える

一般文書データベースにはアクセス権を設定できます。一般文書データベースの利用目的や共有の度合いに応じて、アクセス権を設定して運用することをお勧めします。

システム文書データベースだけで運用する場合でも、下位文書データベースを定義して運用する場合でも、すべてのユーザにすべての権限を与えておきます。操作に関する制限は、フォルダと文書のアクセス権で行うことをお勧めします。

一般文書データベースのアクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

(4) 全文検索サーバとの連携

一般文書データベースの文書を全文検索の対象とする場合は、一般文書データベースごとに全文検索サーバとの連携を指定します。全文検索サーバとの連携については、「5.8 全文検索サーバと連携するための環境設定」を参照してください。

4.1.3 一般文書データベースの定義と変更

ここでは、GUI から一般文書データベースを定義及び変更する操作の概要について説明します。なお、操作方法の詳細については、Groupmax Integrated Desktop のオンラインヘルプ又はマニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

(1) 一般文書データベースの定義の流れ

一般文書データベースの定義の流れについて説明します。一般文書データベースを定義する前には、利用環境や業務内容を考慮して、計画的に設計しておくことをお勧めします。

1. 一般文書データベースを新規作成します
2. 必要に応じて、ユーザ定義属性を追加します。
3. 必要に応じて、属性値及びアクセス権を変更します。
4. 不要な一般文書データベースは削除します。

(2) 一般文書データベースの新規作成

一般文書データベースは用途に合わせて複数作成できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は [共用キャビネットの文書データベース管理] ウィンドウで作成します。Document Manager Client から操作する場合は「新規文書 DB の作成」

4. Document Manager の操作環境の構築

ダイアログボックスで作成します。ただし、通常は、システム文書データベースだけで運用することをお勧めします。この場合、フォルダを詳細に設計して、文書管理の効率化を図ります。

(3) 一般文書データベースの属性の追加

一般文書データベースへ属性を追加できます。ユーザ定義属性は、Groupmax Integrated Desktop の一般文書データベースのプロパティダイアログボックス又は、Document Manager Client の「文書 DB 属性」ダイアログボックスで追加します。

追加した属性は、登録した文書に引き継がれます。一般文書データベースから引き継いだ属性に対して、文書ごとに属性値を設定すれば、検索するときの検索条件が増えることとなります。

例えば、議事録を作成するときには、会議の開催日や出席者を明確にしておく必要があります。これらの情報を文書ごとに設定する場合に、一般文書データベースに属性を追加します。なお、次に示すような一般文書データベースには属性を追加できません。

既に文書が登録されている一般文書データベース

下位文書データベースを持つ上位文書データベース

したがって、ユーザ定義属性は、一般文書データベースを定義するときに追加することをお勧めします。また、すべての一般文書データベースに共通する属性は、システム文書データベースに対してあらかじめ定義しておくことで便利です。ただし、上位文書データベースから引き継いだ属性は削除できないので、計画的に設計してください。

なお、ユーザ定義属性として指定できる属性名には次の制限があります。

1 ~ 63 バイトで指定します。

属性名として使用できるのは、次に示す文字です。

- 1 バイトコードの < 英大文字 > , < 英小文字 > , < 数字 > , 「_」(アンダースコア)
- 2 バイトコードの文字 (ただし、空白を除く)

「IS_」又は「_」(アンダースコア)で始まる名称は、使用できません。

また、整数型、日時型及び固定長文字列型の属性は、インデクスを付加することによって、属性検索を高速化できます。ただし、インデクスを付加すると、文書の更新処理に掛かる時間や、オブジェクトサーバの環境設定で定義する Document Manager のインデクス用エリアの容量に影響します。このため、運用上検索対象になる属性に対してだけ、計画的にインデクスを付加することをお勧めします。

(4) 一般文書データベースの属性の変更

一般文書データベースに付けられている属性値を、変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、一般文書データベースのプロパティダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合は「文書 DB 属性」ダイアログボックスから変更できます。属性値を変更できる属性を表 4-2 及び表 4-3

に示します。

表 4-2 属性値を変更できる一般文書データベースの属性 (Groupmax Integrated Desktop の場合)

属性	意味
名前 ¹	一般文書データベースの名称
作成者	一般文書データベースの作成者
所有者 ²	一般文書データベースの所有者
アプリケーション (AP 情報識別子)	一般文書データベースのアプリケーション情報
全文検索データベース	所属する文書を登録する全文検索サーバの全文検索 DB 名

注 1 [名前の変更] ダイアログボックスから変更できます。

注 2 アクセス権ダイアログボックスから変更できます。

表 4-3 属性値を変更できる一般文書データベースの属性 (Document Manager Client の場合)

属性	意味
名前	一般文書データベースの名称
作成者	一般文書データベースの作成者
所有者 ¹	一般文書データベースの所有者
アプリケーション名 (AP 情報識別子)	一般文書データベースのアプリケーション情報
文書ひな形ファイル名 ²	文書ひな形ファイル
TS サーバ DB (TS 情報 ID)	所属する文書を登録する全文検索サーバの全文検索 DB 名

注 1 「文書 DB アクセス権」ダイアログボックスから変更できます。

注 2 「ファイルの一覧」ダイアログボックスから変更できます。

(5) 一般文書データベースのアクセス権の変更

一般文書データベースのアクセス権を変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、アクセス権ダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合は「文書 DB アクセス権」ダイアログボックスから変更します。システム文書データベースだけで運用している場合でも、複数定義して運用している場合でも、すべてのユーザにすべての権限を与えておきます。

なお、これらのダイアログボックスから一般文書データベースの所有者を変更できます。

(6) 一般文書データベースの削除

不要になった一般文書データベースは削除できます。Groupmax Integrated Desktop が

4. Document Manager の操作環境の構築

ら操作する場合は、[共用キャビネットの文書データベース管理] ウィンドウで削除します。Document Manager Client から操作する場合は [文書 DB] ウィンドウで削除します。ただし、次に示すような一般文書データベースは削除できません。

文書が登録されている一般文書データベース

作業領域に文書ひな形を取り出している一般文書データベース

下位文書データベースを持つ上位文書データベース

システム文書データベース

4.1.4 フォルダの設計

ここでは、フォルダを設計するときに考慮する点について説明します。

(1) どのようなフォルダを定義するのかを考える

まず、文書を管理するフォルダ体系を考えます。しかし、ディレクトリを定義するときと同様に、フォルダを定義するときも、体系や名称を決定するような規則性はありません。例えば、次のようなフォルダ定義が考えられます。

文書の種類をキーにしてフォルダを構築する

このようなフォルダには、同じ種類の文書が格納できます。例えば、議事録を格納するためのフォルダ「議事録」には、予算会議、工程会議及びグループミーティングなど、様々な会議の議事録だけを格納できます。更に詳細なフォルダ体系を定義すれば、議事録の種類ごとに格納することもできます。

月や期などの期間ごとのフォルダを構築する

このようなフォルダには、月や期ごとに発行する文書を格納できます。例えば、収支報告書や営業報告書を、月別に分類することなどが考えられます。文書の種類を表したフォルダの下位フォルダとして定義すると効果的です。

組織体系をキーにしてフォルダを構築する

このようなフォルダには、文書の種類に関係なく部署内で共有する文書が格納できます。例えば、ほかの部署への文書公開というような運用が考えられます。ただし、あまり下位の組織までフォルダとして表現すると、階層が深くなり過ぎます。したがって、分類索引を使用して文書へのリンクを綿密に設定しておくのが効果的です。

改変禁止モードを設定したフォルダを構築する

改変禁止モードを設定したフォルダに登録された文書は、フォルダや一般文書データベース、文書に設定されたアクセス権に関係なく、文書の内容及び属性の更新、削除ができません。例えば、決裁書のように改ざんされては困る文書を管理するフォルダとして、改変禁止モードを設定したフォルダを適用する運用が考えられます。改変禁止モードを設定したフォルダから別のフォルダへ文書をコピーして、新規文書として再利用できます。

管理する文書は、Document Manager を利用する人の業種や部門によって異なります。

したがって、通常の業務でどのような文書を作成して、管理しているのかを十分考慮して、体系的にフォルダを定義しておくことをお勧めします。ただし、Document Manager は文書を共有するためのプログラムですから、利用者全員がどんな文書を格納しているフォルダなのか分かるような、一般的な名称を付けることをお勧めします。

(2) 文書実体ファイルの格納ディレクトリを考える

フォルダごとに、文書実体ファイルのサーバ側の格納ディレクトリを指定できます。フォルダを定義するときに、Document Manager 管理者が指定してください。文書実体ファイル格納ディレクトリは、フォルダに格納する文書数や文書の容量を考慮して指定してください。この指定がない場合は、上位フォルダで指定されたディレクトリを文書実体ファイル格納ディレクトリとします。したがって、文書実体ファイル格納ディレクトリを指定しないでフォルダを定義した場合は、すべての文書実体ファイルが同じディレクトリに格納されることになります。

なお、文書実体ファイル格納ディレクトリにはルート (/) ファイルシステム以外のファイルシステムを指定することをお勧めします。

また、格納先のディスク容量が一杯になった場合は、文書実体ファイル格納ディレクトリ変更ユーティリティを使用して、文書実体ファイル格納ディレクトリを変更できます。文書実体ファイル格納ディレクトリ変更ユーティリティについては「8.28 文書実体ファイル格納ディレクトリの変更 (ISchfldr)」を参照してください。

(3) アクセス権によるフォルダの運用方法を考える

フォルダごとにアクセス権を設定できます。あるフォルダに設定したアクセス権は、下位フォルダに引き継がれます。Document Manager の運用形態やフォルダの共有の度合いなどを考慮してアクセス権を変更してください。

例えば、一般ユーザにはフォルダの参照と文書の作成だけを許可して運用します。この場合は、すべてのユーザに読み出し権と文書作成権を与えます。なお、フォルダのアクセス権は下位フォルダへ引き継がれます。したがって、最上位フォルダに下位フォルダを作成する前に、最上位フォルダに対して、各下位フォルダに共通するアクセス権を設定しておくと便利です。

フォルダのアクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

(4) 改変禁止モードによるフォルダの運用方法を考える

フォルダごとに改変禁止モードを設定できます。改変禁止モードは、決裁書や規則集など不用意に更新、改ざん、削除されては困る文書を管理するフォルダに対して設定すると便利です。ただし、次に示すフォルダには設定できません。

最上位フォルダ

デフォルトフォルダ

改変禁止モードが設定されていない下位フォルダを持つ上位フォルダ

4. Document Manager の操作環境の構築

改変禁止モードは、作成した下位フォルダに引き継がれます。したがって、フォルダ体系を新規に定義する場合は、「改変禁止モードを設定するフォルダの階層」と「通常の状態で使用するフォルダの階層」と体系を分けて管理者が構築することをお勧めします。既に文書が格納されているフォルダに、改変禁止モードを設定すると、今まで文書を更新できていたユーザが、文書を更新できなくなりますので注意してください。

また、改変禁止モードが設定されたフォルダのアクセス権のうち、「グループ」と「全ユーザ」の権限を次のように制御してください。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合

1. アクセス権ダイアログボックスで、[特殊] ボタンをクリックします。
2. [特殊なアクセス権の設定] ダイアログボックスで、「下位作成」のチェックボックスが選択されていない状態にしてください。

Document Manager Client から操作する場合

「フォルダアクセス権」ダイアログボックスで、「作成」のチェックボックスが選択されていない状態にしてください。

補足説明

改変禁止モードは、Document Manager 管理者が設定した「改変禁止フォルダ管理者」も設定できます。ただし、改変禁止モードを設定するフォルダに対して「編集権」が必要です。

4.1.5 フォルダの定義と変更

ここでは、GUI からフォルダを定義及び変更する操作の概要について説明します。なお、操作方法については、Groupmax Integrated Desktop のオンラインヘルプ又はマニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

(1) フォルダの定義の流れ

フォルダの定義の流れについて説明します。フォルダを定義する前には、利用環境や業務内容を考慮して、計画的に設計しておくことをお勧めします。

1. フォルダを新規作成します。
2. 必要に応じて、属性及びアクセス権を変更します。
3. 不要なフォルダは削除します。

(2) フォルダの新規作成

フォルダは最上位フォルダの下位に複数作成できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合はフォルダは [フォルダの新規作成] ダイアログボックスで作成します。Document Manager Client から操作する場合は [フォルダの新規作成] ダイアログボックスで作成します。どのようなフォルダを定義するのか、またどのような体系を構成するのか、必ず設計しておきます。なお、フォルダの階層は、最上位フォルダを含め

て10階層まで作成できます。

また、ディスク容量を考慮して、各フォルダに格納する文書の文書実体ファイル格納ディレクトリを指定します。文書実体ファイル格納ディレクトリを指定を省略すると、上位フォルダに指定した文書実体ファイル格納ディレクトリを引き継ぎます。

(3) フォルダの属性の変更

フォルダを新規に定義したとき Document Manager によって設定された属性値を変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、フォルダのプロパティダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合は「フォルダ属性」ダイアログボックスから変更します。属性値を変更できる属性を表 4-4 に示します。

表 4-4 属性値を変更できるフォルダの属性

属性	意味
名前 ^{1 2}	フォルダの名称
作成者	フォルダの作成者
所有者 ³	フォルダの所有者

注 1 Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は [名前の変更] ダイアログボックスから変更できます。

注 2 名前に半角コンマは使用しないでください。使用した場合に発生する障害については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

注 3 Groupmax Integrated Desktop から操作する場合はアクセス権ダイアログボックスから変更できます。Document Manager Client から操作する場合は「フォルダアクセス権」ダイアログボックスから変更できます。

(4) フォルダのアクセス権の変更

フォルダのアクセス権を変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、アクセス権ダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合は [フォルダアクセス権] ダイアログボックスから変更します。

あるフォルダの下位に定義したフォルダは、上位フォルダのアクセス権を引き継ぎます。例えば、最上位フォルダの下位に定義したフォルダには、最上位フォルダに設定されているアクセス権と同じアクセス権が設定されています。したがって、フォルダを定義したら、各フォルダの運用方法に応じてアクセス権を変更することをお勧めします。

なお、これらのダイアログボックスからフォルダの所有者を変更できます。また、Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、改変禁止モードもこのダイアログボックスから設定します。ただし、改変禁止フォルダ管理者が改変禁止モードを設定するためには、フォルダに対して編集権が必要になります。改変禁止フォルダ管理者に編集権を与えるには次のような方法があります。

4. Document Manager の操作環境の構築

改変禁止フォルダ管理者を、そのフォルダの所有者とする。

改変禁止フォルダ管理者が、フォルダを作成する。

改変禁止フォルダ管理者を含んだグループを定義して、グループに対して編集権を与える。

(5) フォルダの削除

不要になったフォルダは削除できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、Groupmax Integrated Desktop の主画面で削除します。Document Manager Client から操作する場合は「フォルダ」ウィンドウで削除します。ただし、次に示すようなフォルダは削除できません。

最上位フォルダ

デフォルトフォルダ

下位フォルダを持つ上位フォルダ

文書が格納されているフォルダ

4.1.6 分類索引の設計

Document Manager で管理している文書は、分類索引に登録（リンク）できます。文書を分類索引に登録しておく目的の文書が検索しやすくなります。例えば「ある文書を検索したいが文書名や作成者など具体的な検索条件が思い出せない」といった場合でも、思いつく限りのあいまいな記憶を頼りに、管理している大量な文書を絞り込みます。文書がリンクされていると思われる分類を複数選択して、文書を絞り込んだり、分類索引のツリーをたどりながら目的の文書を検索したりできます。

企業や組織単位で Document Manager を利用する場合、分類索引を綿密に設計しておくことが重要になってきます。次に、分類索引を設計するときに考慮する点について説明します。

(1) 文書を分類する観点を考慮する

通常の業務で作成、管理される文書は様々な内容で書かれています。フォルダに格納した文書の中でも、関連製品ごとや管理部署ごとに更に分類できます。例えば、議事録を考えます。議事録は様々な会議の記録ですから、会議の議題ごとに分類できます。予算の検討会議の議事録は、「組織構成」を表した分類索引の「経理課」や会議の種類を表した分類索引の「予算検討会議」などにリンクさせておくことが考えられます。分類索引の設計例と各分類索引に対してリンク付けられると思われる文書の例を、表 4-5 に示します。

表 4-5 分類索引の設計例とリンクさせる文書の例

分類索引の例	リンクさせる文書の例
製品 - PC 周辺機器 - システム装置 - ディスプレイ - プリンタ	・製品仕様書 ・設計書 ・取扱説明書 ・製品カタログ ・製品改善提案書 など
組織構成 - 総務部 - 経理課 - 人事課 - 勤労課	・社員データ管理表 ・給与明細書 ・社内報 ・旅費精算書 ・勤休表 など
業種別取引先 - 出版社 - AB 出版 - CD 書房 - 商社 - EF 商事 - GH 商事	・顧客への提案書 ・顧客情報 ・収支報告書 ・販売予実績表 ・見積書 ・製品納品書 ・契約書 など
営業地区支店 - 東京地区 - 新宿支店 - 渋谷支店 - 銀座支店	

(2) 分類索引の構造を考慮する

分類索引は、最上位分類と複数の下位分類で構成されます。一つの分類索引は下位分類へ向かっていくに従って分類の観点が明確になっていくように設計します。例えば、営業地区の支店を表す分類索引を構築する場合、東京地区の営業支店の下位に「名古屋支店」を作成するのは一般的ではありません。

したがって、上位分類と下位分類の関連性が明確になるように設計してください。また、Document Manager の利用者全員が分かるような一般的な名称を付けることも大切です。

(3) アクセス権による分類索引及び分類の運用

分類索引にはアクセス権を設定できます。最上位分類に設定したアクセス権は、下位分類に引き継がれます。また、ある分類に設定したアクセス権も、下位分類を作成したときに引き継がれます。したがって、分類索引には、下位分類を作成する前に、最上位分類に対して、下位分類に共通なアクセス権を設定しておくとう便利です。

例えば、会社や組織内で共通して利用する分類索引については、一般ユーザが分類索引の体系を変更できないように操作を制限する必要があります。この場合、一般ユーザには分類索引の参照と分類索引への文書のリンクだけを許可して運用します。アクセス権として、全ユーザに対して文書リンク権を与えるとよいでしょう。

分類索引のアクセス権については、「2.2.5 アクセス権の管理」を参照してください。

4.1.7 分類索引の定義と変更

ここでは、GUI から分類索引を定義及び変更する操作の概要について説明します。なお、操作方法の詳細については、Groupmax Integrated Desktop のオンラインヘルプ又はマニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

(1) 分類索引の定義の流れ

分類索引の定義の流れについて説明します。分類索引を定義する前には、利用環境や業務内容を考慮して、計画的に設計しておくことをお勧めします。

1. 分類索引を新規作成します。
2. 必要に応じて、分類索引の属性及びアクセス権を変更します。
3. 不要な分類索引は削除します。

(2) 分類索引の新規作成

分類索引を定義するときは、まず最上位分類を定義します。次に、最上位分類の下位に分類を定義していきます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は [共用キャビネットの分類索引] ウィンドウで作成します。Document Manager Client から操作する場合は、分類索引（最上位分類）は、「新規分類索引の作成」ダイアログボックスで定義します。下位分類は、「新規分類の作成」ダイアログボックスから定義します。どのような分類索引を定義するのか、またどのような体系を構成するのか、必ず設計しておきます。

(3) 分類索引の属性を変更する

分類索引（最上位分類）を新規に定義したときに Document Manager によって設定された属性値を変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、分類索引のプロパティダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合は「分類索引属性」ダイアログボックスで変更します。属性値を変更できる属性を表 4-6 に示します。

表 4-6 属性値を変更できる分類索引（最上位分類）の属性

属性	意味
名前 ^{1 2}	分類索引（最上位分類）の名称
作成者	分類索引（最上位分類）の作成者
所有者 ³	分類索引（最上位分類）の所有者

注 1 Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は [名前の変更] ダイアログボックスか

ら変更できます。

注 2 名前に半角コンマは使用しないでください。使用した場合に発生する障害については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

注 3 Groupmax Integrated Desktop から操作する場合はアクセス権ダイアログボックスから変更できます。Document Manager Client から操作する場合は「分類索引アクセス権」ダイアログボックスから変更できます。

また、最上位分類の下位に定義した分類に設定されている属性値も変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、分類のプロパティダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合は「分類属性」ダイアログボックスから変更できます。属性値を変更できる属性を表 4-7 に示します。

表 4-7 属性値を変更できる分類の属性

属性	意味
名前 ¹	分類の名称
作成者	分類の作成者
所有者 ²	分類の所有者

注 1 Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は [名前の変更] ダイアログボックスから変更できます。

注 2 Groupmax Integrated Desktop から操作する場合はアクセス権ダイアログボックスから変更できます。Document Manager Client から操作する場合は「分類アクセス権」ダイアログボックスから変更できます。

(4) 分類索引のアクセス権を変更する

分類索引（最上位分類）及び分類のアクセス権を変更できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合はアクセス権ダイアログボックスで変更します。Document Manager Client から操作する場合、分類索引（最上位分類）のアクセス権は、「分類索引アクセス権」ダイアログボックスから変更します。分類のアクセス権は、「分類アクセス権」ダイアログボックスから変更します。

ある分類の下位に定義した分類は、上位分類のアクセス権を引き継ぎます。例えば、最上位分類の下位に定義した分類には、最上位分類に設定されているアクセス権と同じアクセス権が設定されています。したがって、分類を定義したら、各分類の運用方法に応じてアクセス権を変更することをお勧めします。

(5) 分類索引の削除

分類索引はユーザの利用環境や業務体系などに合わせて定義しておく便利です。しかし、組織改正や業務体系の変更によって、不要となった分類索引は削除できます。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は [共用キャビネットの分類索引] ウィンドウで削除します。Document Manager Client から操作する場合、分類は「分類索引」ウィンドウから削除します。分類索引（最上位分類）は「分類索引一覧」ウイン

4. Document Manager の操作環境の構築

ドウから削除します。ただし、次に示す分類は削除できません。

下位分類を持つ上位分類

文書がリンクされている分類

4.1.8 分類索引帳の定義と運用

分類索引帳とは、フォルダや分類索引の位置情報をユーザの利用目的に合わせて編集したファイルです。分類索引帳は、Groupmax Integrated Desktop から作成します。

例えば、同じ業務を担当するユーザは、共通のフォルダや分類索引を参照することが考えられます。したがって、共通して参照するフォルダや分類索引の位置情報を定義した分類索引帳を作成して配布することで、フォルダや分類索引を使用して文書を検索する作業が省け、業務効率の向上を図れます。

なお、分類索引帳の作成方法については、Groupmax Integrated Desktop のオンラインヘルプを参照してください。

4.1.9 文書配布機能によるサーバの運用

文書配布機能は、ネットワーク上に複数のサーバがある場合に利用します。例えば、本社のサーバを共通サーバとして、各拠点のサーバを部門サーバとして、Document Manager を運用しているような場合は、アクセスの集中によるサーバの性能低下を防いだり、共有財産としての文書のメンテナンスに費やす時間や人的資源を節約できます。

複数サーバで Document Manager を運用する場合は、共通サーバと部門サーバというような分類を明確にして、文書も共通サーバから配布する文書と各部門サーバで独自に管理する文書に分類して管理することをお勧めします。

4.1.10 配布する文書の種類

組織内では様々な文書を管理しています。大きく次のように分類できます。

組織内で共有する文書

個人で管理する文書

文書配布対象グループとして定義する文書は、組織内で共有する文書が適しています。組織内で共有する文書は、一般のユーザが更新する必要のない文書、すなわち参照を目的とした文書です。このような文書は特定のサーバで管理して、必要に応じてグルーピングして、配布すると効率的です。

例えば、次に示すような文書を配布することが考えられます。

社内規則

期ごとの営業報告

収支報告書

社員名簿

対外的な発表用資料（カタログ，製品の説明資料など）

4.1.11 文書配布対象グループの操作

ここでは、文書配布対象グループの作成、削除及び配布について説明します。なお、操作方法の詳細については、「8.16 文書配布対象の追加又は削除（ISadddoc）」及び「8.13 文書配布対象グループの一覧表示、作成又は削除（ISgrpert）」を参照してください。

（1）文書配布グループの作成

文書配布対象グループは、文書配布対象グループ操作ユティリティを使用して作成します。文書配布対象グループの作成方法については「8.13 文書配布対象グループの一覧表示、作成又は削除（ISgrpert）」を参照してください。

（2）文書の配布

文書配布対象グループを作成した後、配布文書追加・削除ユティリティを使用して文書配布対象グループとしてサーバに配布する文書を追加します。また、既存の文書配布対象グループの文書は必要に応じて、更新したり削除したりできます。メールシステムと連携していれば、配布文書追加・削除ユティリティの実行後、すぐに配布されます。また、文書配布対象グループとして定義した文書が、配布元で更新された場合も、配布文書追加・削除ユティリティを実行すれば再配布されます。なお、オペレーティングシステムのスケジューリング機能を利用して配布文書追加・削除ユティリティを実行すると、定期的に特定のフォルダ、一般文書データベース、分類に登録されている文書を配布できます。文書配布対象グループへの文書の追加及び削除については「8.16 文書配布対象の追加又は削除（ISadddoc）」を参照してください。

また、文書配布対象グループだけ定義して、サーバの送信デーモンを起動していなければ、文書情報（エクスポートファイル）だけが作成されます。この、エクスポートファイルを、FTP や CMT を使用して、各サーバに配布することもできます。

ただし、配付先サーバにバージョンが 02-10 以前のサーバがある場合は、データを圧縮したエクスポートファイルは配布しないでください。データを圧縮したエクスポートファイルを配布すると、02-10 以前のサーバでは取り込めません。したがって、配布した文書は配付先で参照できません。

（3）配布先サーバの追加・削除

文書配布対象グループに配布先サーバを追加又は削除する場合には、配布先サーバ追加・削除ユティリティを使用します。配布先サーバを追加すると、追加したサーバには文書配布グループ文書内のすべての文書が配布されます。配布先サーバを削除する場合、オプション指定によって既に配布された文書を削除することができます。次の文書配布

4. Document Manager の操作環境の構築

時からそのサーバに文書は配布されません。文書配布対象グループの配布先サーバの追加又は削除については、「8.15 配布先サーバの追加又は削除 (ISaddsrv)」を参照してください。

(4) 文書配布対象グループ情報の表示

文書配布対象グループに登録された文書や配布先サーバを一覧で表示することができます。また、文書の更新状態や配布回数の情報を表示することができます。文書配布対象グループ情報の表示については「8.14 文書配布対象グループ情報の表示 (ISgrpinfo)」を参照してください。

(5) 配布状態の確認

メールシステムと連携している場合は、配布状態を確認できます。配布した文書の状態を表示するには、配布状態表示ユーティリティを使います。文書の配布状態表示ユーティリティについては、「8.17 文書の配布状態表示 (ISrstat)」を参照してください。

また、配布先でエラーが発生した場合に、エラー要因を取り除いた後の再配布には、文書再配布ユーティリティを使います。文書再配布ユーティリティについては、「8.18 文書の再配布機能 (ISrpsnd)」を参照してください。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(6) 文書配布対象グループの削除

文書配布対象グループは文書配布対象グループ作成・削除ユーティリティを使用して削除できます。文書配布対象グループ内の文書を削除する場合は、配布文書追加・削除ユーティリティを使用します。なお、文書配布対象グループを削除しても配布先の配布文書は削除されません。配布先の不要な配布文書は、配布先サーバ追加・削除ユーティリティの機能を使用するか、又は Groupmax Integrated Desktop, Document Manager Client から削除するようにしてください。配布先サーバ追加・削除ユーティリティについては、「8.15 配布先サーバの追加又は削除 (ISaddsrv)」を参照してください。

(7) Document Manager Client から文書配布機能を利用する

Document Manager Client から文書配布対象グループを作成したり、削除したりできません。詳細については、マニュアル「Windows 3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。

4.2 フォーム文書を管理するための操作環境の設計と運用

この節では、フォーム文書を管理するための操作環境を設計するときに考慮していただきたい点及びクライアントからのフォーム文書データベースの定義、変更などについて説明します。

4.2.1 フォーム文書データベースの設計

ここでは、フォーム文書データベースを設計するときに考慮する点について説明します。

(1) サンプルデータベースをカスタマイズする

Document Manager には、幾つかのフォーム文書データベースの定義情報がサンプルとして提供されています。この定義情報を利用すれば、必要に応じて、提供されているフォームや目的別一覧をカスタマイズして、適用業務に合ったフォーム文書データベースが定義できます。

(2) 適用業務を決める

フォーム文書データベースを設計するときは、フォーム文書データベースをどのような業務の効率化のために使用するのが決定します。次のような業務への適用が考えられます。

営業日報の管理

毎日の営業活動の報告書を作成して管理するためのフォーム文書データベースを定義します。現在の状況や顧客へどのような提案をしているのかといった報告、受注獲得のための戦略などについてデータを集めます。また、この報告書を見た人からのコメントをもらったり、上司からの具体的な指示をもらうためにも使用できます。情報のタイムリーな共有とコミュニケーションの円滑化が図れます。

ディスカッション

ディスカッションするための電子会議室を定義します。ある製品の改善をするような場合、開発部署以外の人からも広く意見を求めることは、とても重要です。各部門で使用してもらった結果の蓄積や質問などを登録して運用します。

各種申請書の処理

保養所などの福利厚生施設の予約申請をするため、フォーム文書データベースを定義します。電話で予約する手間を省けますし、申請書を紙で提出する煩わしさもなくなります。申請を受け付ける部署では、電話での対応や申請書を管理する手間が省けます。申請後は、状況を確認するためにこのフォーム文書データベースの内容を参照するだけです。

(3) 利用するフォームを設計する

次に、適用業務に必要なフォーム（営業日報のフォーマットや申請書など）を設計します。フォームは、Groupmax Form を使って定義します。例えば、営業日報ならば、次のようなフォームを設計します。

図 4-1 営業日報のフォームの設計例

営業日報	
報告書作成者	<input type="text"/>
訪問日時	<input type="text"/>
製品名	<input type="text"/>
顧客名	<input type="text"/>
報告内容	<input type="text"/>

また、ディスカッション用のフォーム文書データベースには、発言するためのフォームとその発言に対する意見を入力するためのフォームが必要になります。

図 4-2 ディスカッション用のフォームの設計例

発言用	
主題	<input type="text"/>
発言者	<input type="text"/>
意見	<input type="text"/>
<input type="button" value="更新"/> <input type="button" value="返信作成"/>	

返信用	
主題	<input type="text"/>
発言者	<input type="text"/>
意見	<input type="text"/>
<input type="button" value="更新"/> <input type="button" value="返信作成"/>	

注 発言用のフォームは、問題提起などをするときに使用します。返信用のフォームは、発言用のフォームで作成されたフォーム文書に対して意見を書くときに使用します。フォームを定義するときには、この二つのフォーム間の親子関係をスクリプトで指定しておく必要があります。

発言に対する意見を入力するために、発言用のフォームに返信用のフォーム文書の作成を指示するボタンなどを、定義しておくと便利です。なお、各フォーム間の関連は、Groupmax Form のスクリプトを使用して定義してください。また、フォームのフィー

ルドに定義されている属性は、フォーム文書データベースのユーザ定義属性として追加されます。フォームで定義する属性と Document Manager で管理する属性とのマッピングを考慮して設計することをお勧めします。

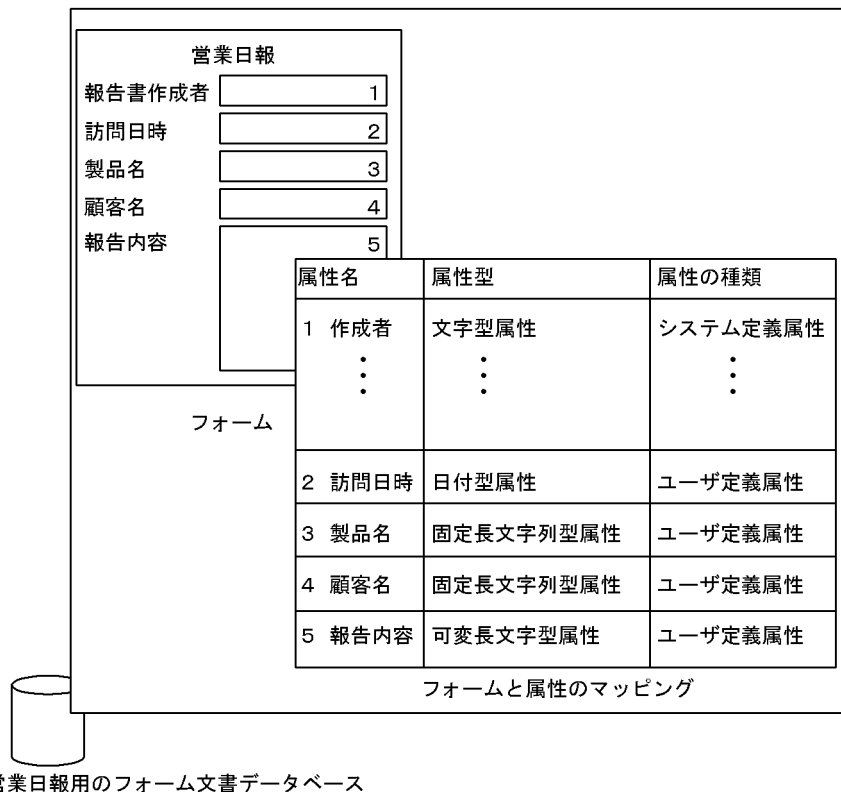
フォーム文書データベースに登録されているフォーム文書から、特定のデータを集計して表示するような場合は、集計フォームを作成します。例えば、製品の受注管理をするフォーム文書データベースには、月の総受注数が集計できるような集計フォームを作成しておくとう便利です。データを集計するための条件は、Groupmax Form のスクリプトを使用して定義します。

(4) 追加する属性を決定する

フォーム文書データベースには、Document Manager が設定するシステム定義属性のほかにユーザ定義属性を追加します。ただし、フォーム文書データベースにフォームに登録するときに、フォームの項目に定義されている属性をユーザ定義属性として追加できます。フォームから取り込まれたユーザ定義属性は、フォーム文書を一覧表示するときの、表示項目として利用できます。

フォームとユーザ定義属性の関係を図 4-3 に示します。

図 4-3 フォームとユーザ定義属性の関係



4. Document Manager の操作環境の構築

なお、フォームから取り込んだ属性以外にも、フォーム文書データベースに追加する属性があるかどうかを検討してください。特に、次の点に注意してください。

(a) フォームに定義されていない属性を追加する場合

フォームには定義されていないが、Document Manager の運用上、必要な属性があれば、追加してください。ただし、既にフォーム文書が登録されているフォーム文書データベースに対しては、属性を追加できません。したがって、将来的な属性の拡張などを考慮して、ユーザ定義属性を追加します。

また、Groupmax Form では扱えない属性（日付型など）は、必要に応じてユーザ定義属性としてフォーム文書データベースに追加してください。

(b) Groupmax Form で文字列属性を定義してある場合

Groupmax Form で文字列属性を定義した場合は、Document Manager がバイト数によって可変長文字列型属性又は固定長文字列型属性として定義します。定義するバイト数が 255 バイト以下の場合は、固定長文字列型属性、255 バイトを超える場合は、可変長文字列型属性として定義されます。Document Manager によって自動的に変換された属性型とは異なる属性型を定義する場合は、定義内容を変更してください。

(c) Groupmax Form で数値型属性を定義してある場合

Groupmax Form で数値型属性を定義してあるフィールドは、小数やパック形式のデータを扱えます。ただし、フォームから属性を取り込む場合は、Document Manager は固定長文字列属性として定義します。したがって、必要に応じて、整数型などの属性型に変更してください。

(5) 目的別一覧を決定する

フォーム文書を作成するためのフォームを設計したら、そのフォームに定義した項目に従って、フォーム文書の一覧の表示形式を指定します。目的別一覧は、フォーム文書の一覧をどのように表示させるかによって複数定義できます。目的別一覧を決定する場合は、次に示す項目について決定します。

(a) 目的別一覧定義名の決定

フォーム文書の一覧を、どのような観点から表示する目的別一覧なのか決定します。例えば、営業日報を管理するフォーム文書データベースの場合、次のような目的別一覧が考えられます。

製品別

取り扱う製品に関する文書ごとに分類して表示するための目的別一覧

担当者

営業担当者ごとに文書を分類して表示するための目的別一覧

(b) 表示一覧の決定

定義したフォームを基に、フォーム文書データベースの内容を表示するための表示項目を決定します。また、項目の表示順序についても決定します。

(c) 表示項目の表示形式の決定

各表示項目に対する詳細情報を決定します。

表示項目に対するタイトルの決定

各表示項目に対して、属性名とは異なる名称を設定するかどうか決定します。例えば、「作成日時」という属性名に対して、フォーム文書の一覧を表示するときに、「報告書作成日時」という別名を設定できます。

重複を排除して表示する項目の決定

フォーム文書は同じフォームを基に作成します。したがって、同じ項目に対して同じデータが入力されている場合もあります。例えば、営業日報を考えてみます。同じ人が複数の営業日報を作成した場合、「担当者」を入力する項目があれば、異なる文書でも「担当者」に同じデータが入ります。このような場合、「担当者」という表示項目に対して、重複を排除して表示するための定義をしておく、担当者ごとに文書を分類して表示できます。ただし、重複を排除して表示するための定義をしなくても、フォーム文書データベースは利用できる、必要に応じて定義してください。

階層表示させる項目の決定

ディスカッション用のフォーム文書データベースのように、管理するフォーム文書に親子関係がある場合、インデントを付けて表示させる項目を決定します。例えば、新規に登録した発言に対して、意見を述べた場合、意見として登録したフォーム文書にインデントを付けて表示させる場合に指定します。

ソートキーの決定

フォーム文書を一覧表示するときに、ソートキーとして使用する項目を決定します。なお、重複を排除して表示するための定義をした表示項目は、ソートキーとして扱われます。

(d) 表示条件の決定

目的別一覧に対して、属性値を利用したフォーム文書の表示条件をあらかじめ定義できます。例えば、フォーム文書の作成日時を限定して一覧を表示するといった設定ができます。なお、表示条件を定義しなくてもフォーム文書の一覧を表示した後で、同じ条件を指定した文書の絞り込みができます。

(6) アクセス権による運用を考える

フォーム文書の管理では、フォーム文書データベース、目的別一覧及びフォーム定義にアクセス権を設定できます。それぞれのアクセス権の運用について考えます。

なお、それぞれのアクセス権についての詳細は、「3.2.2 フォーム文書データベースの管理」を参照してください。

4. Document Manager の操作環境の構築

(a) フォーム文書データベースのアクセス権による運用

フォーム文書データベースに設定されたアクセス権は、登録するフォーム文書、目的別一覧及びフォーム定義に引き継がれます。したがって、定義したフォーム文書データベースの利用目的や共用の度合い、所属するフォーム文書に設定するアクセス権などを考慮して、アクセス権を変更することをお勧めします。

例えば、営業日報を管理するフォーム文書データベースを運用する場合、営業部に所属するユーザには、営業日報の作成と更新を許可して、一般のユーザには参照だけを許可するようなアクセス権の設定が考えられます。この場合は、グループ「営業部」に対して編集権を与えて、「全ユーザ」には参照権を与える運用方法が考えられます。

(b) フォーム定義のアクセス権による運用

フォーム定義に設定するアクセス権は、それぞれのフォーム定義の利用目的を考慮して設定することをお勧めします。

例えば、営業日報を作成するためのフォーム定義を運用する場合、営業部に所属するユーザにはそのフォーム定義の参照を許可して、一般のユーザには許可しないようなアクセス権の設定が考えられます。この場合は、グループ「営業部」に対してすべてのアクセス権を与えて、「全ユーザ」にはアクセス権を与えないように設定する運用方法が考えられます。

(c) 目的別一覧のアクセス権による運用

目的別一覧に設定するアクセス権は、目的別一覧の利用目的を考慮して設定することをお勧めします。

例えば、営業日報の項目を表示する目的別一覧を作成した場合、この目的別一覧の参照を営業部に所属するユーザだけに許可するような設定が考えられます。この場合は、グループ「営業部」に対してすべてのアクセス権を与えて、「全ユーザ」にはアクセス権を与えないように設定する運用方法が考えられます。

(7) フォームと目的別一覧の組み合わせによるフォーム文書一覧の表示

一つのフォーム文書データベースには、複数のフォームを登録できます。また、目的別一覧も用途によって複数定義できます。それぞれのフォーム及び目的別一覧の定義とアクセス権の設定によって、フォーム文書を一覧表示する方法を増やせます。

例えば、人事データを管理するフォーム文書データベースでは、データを管理する側のユーザと一般のユーザとで参照を許可するデータを限定する運用が考えられます。このような場合、参照するデータの範囲をフォームと目的別一覧の定義によって変えることができます。人事データ管理用のフォーム文書データベースに登録するフォームの作成例を図 4-4 に示します。

図 4-4 人事データ管理用のフォームの作成例

管理者用フォーム

氏名	<input type="text"/>
所属	<input type="text"/>
内線番号	<input type="text"/>
連絡先	<input type="text"/>
資格取得状況	<input type="text"/>
評価	<input type="text"/>

<アクセス権の設定>

所有者：すべて
 グループ（人事部）：すべて
 全ユーザ：なし

一般ユーザ用フォーム

氏名	<input type="text"/>
所属	<input type="text"/>
内線番号	<input type="text"/>

<アクセス権の設定>

所有者：すべて
 グループ（人事部）：すべて
 全ユーザ：すべて

管理者用のフォームには、必要な情報がすべて表示されるように定義しておきます。一般ユーザ用のフォームには、「氏名」、「所属」及び「内線番号」だけが表示されるように定義しておきます。この二つのフォームをフォーム文書データベースに登録することで、フォーム文書を開いたときのデータの参照範囲を限定できます。すなわち、管理者グループに所属するユーザには、「管理者用フォーム」及び「一般ユーザ用フォーム」に対してアクセス権が与えられているので、どちらかのフォームを選択して文書を開けます。一方、一般のユーザは「一般ユーザ用フォーム」にだけアクセス権が与えられているため、「一般ユーザ用フォーム」を利用して文書を開くことになります。ただし、必ず図に示すようにフォームに対するアクセス権を設定しておかなければ、すべてのデータが参照できます。

次に、定義したフォームに対応する目的別一覧を考えます。二つのフォームを比較すると、一般ユーザ用のフォームには「連絡先」、「資格取得状況」及び「評価」という項目がありません。すなわち、目的別一覧を使用してフォーム文書を一覧表示する場合でも、これらのデータは表示しないように設定する必要があるわけです。したがって、それぞれのフォームに対応する目的別一覧を定義しておけば、フォーム文書を一覧表示する場合でも、データの参照範囲を限定できます。この例では、表 4-8 及び表 4-9 に示すような目的別一覧の定義が考えられます。

表 4-8 管理者が使用できる目的別一覧「管理者用」の定義例

表示項目（表示順）	タイトル	表示形式	ソート
所属	所属	重複排除	昇順
氏名	氏名	-	昇順
内線番号	内線	-	-
連絡先	連絡先	-	-

4. Document Manager の操作環境の構築

表示項目（表示順）	タイトル	表示形式	ソート
資格取得状況	資格	-	-
評価	評価	-	-

注 「管理者用フォーム」と同じアクセス権を設定してください。

表 4-9 一般ユーザが使用できる目的別一覧「一般ユーザ用」の定義例

表示項目（表示順）	タイトル	表示形式	ソート
所属	所属	重複排除	昇順
氏名	氏名	-	昇順
内線番号	内線	-	-

注 「一般ユーザ用フォーム」と同じアクセス権を設定してください。

また、目的別一覧には文書の絞り込み条件を定義できます。例えば、「役員以上の情報は公開しない」といった条件を与えておけば、さらに詳細な人事データの参照と保護ができます。

このように、フォーム、目的別一覧及びそれぞれのアクセス権の細かい定義によって、文書一覧の表示方法を増やすことができます。なお、フォーム文書データベースの属性を更新する権限を持つユーザは、フォームや目的別一覧に設定されているアクセス権を変更できます。必ず、フォーム文書データベース自体の運用方法とアクセス権の設定を考慮しながら、フォームや目的別一覧を定義することをお勧めします。

4.2.2 フォーム文書データベースの定義と変更

ここでは、GUI からフォーム文書データベースを定義及び変更する操作の概要について説明します。なお、操作方法の詳細については、Groupmax Integrated Desktop のオンラインヘルプを参照してください。

(1) フォーム文書データベースの定義の流れ

フォーム文書データベースの定義の流れについて説明します。フォーム文書データベースを定義する前には、利用環境や業務内容を考慮して、計画的に設計しておくことをお勧めします。

1. Groupmax Form でフォームファイルを作成します。
2. フォーム文書データベースを新規作成します。
サンプルとして提供されているフォーム文書データベースの定義情報を利用することもできます。
3. フォーム文書データベースにフォームを定義します。
4. フォームから読み込まれたユーザ定義属性を確認します。必要に応じて、ユーザ定義

属性を追加，削除します。

5. 必要に応じて，目的別一覧を定義します。
6. 必要に応じて，属性値，アクセス権を変更します。
7. 不要なフォーム文書データベースは削除します。

(2) フォームファイルの作成

適用業務に必要なフォームを作成します。フォームファイルは，Groupmax Form を利用して作成します。ディスカッション用に，発言用，返信用といったフォームを作成する場合は，フォーム間の連携をスクリプトで定義しておきます。フォームファイル名は，拡張子を含めて 64 バイト以内で指定してください。フォーム作成の詳細については，マニュアル「Groupmax Form Version 6 ユーザーズガイド」を参照してください。

(3) フォーム文書データベースの新規作成

適用業務ごとにフォーム文書データベースを定義できます。フォーム文書データベースは，[フォーム文書データベースの新規作成] ダイアログボックスで作成します。サンプルデータベースを利用して，新規作成することもできます。

(4) フォーム文書データベースのフォームの定義

フォームは [フォーム定義の設定] ダイアログボックスから定義します。[フォーム定義の設定] ダイアログボックスは，フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスの「フォーム定義」タブから表示させます。一つのフォーム文書データベースに，用途に合わせて複数定義できます。

(a) [フォーム定義の設定] ダイアログボックスから指定する項目

[フォーム定義の設定] ダイアログボックスから，次の項目を指定します。

フォーム定義名

登録するフォームに対する名称を 50 バイト以内で指定します。例えば，営業日報を作成するためのフォームを登録する場合は，「営業日報作成用フォーム」といった名前を付けます。フォーム定義名に使用できる文字の規則については，「付録 E Document Manager に登録できるファイルの規則」に準じてください。

フォームファイル

フォーム文書データベースに登録するフォームファイルを指定します。

種別

登録するフォームの用途に従って，「新規」，「応答」又は「集計」のどれかを指定します。

フォームファイルから属性定義を自動追加

登録するフォームファイルに定義されている属性情報を，フォーム文書データベースのユーザ定義属性として取り込む場合に指定します。

(b) 注意事項

複数のフォームを登録する場合の注意

ディスカッション用のフォーム文書データベースなどを定義する場合、発言用、返信用といったフォームファイルを登録することが考えられます。このような場合、フォーム間の関連は、Groupmax Form のスクリプトを使用して定義してください。

バージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop を使用する場合の注意

バージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop を使用する場合、フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスからは、アクセス権のあるフォーム定義しか見えません。したがって、バージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop からフォーム定義を追加及び更新するときには、フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスからは参照できないフォームが登録されている場合があります。このため、アクセス権のない登録済みのフォーム定義と同じ名称のフォーム定義を追加しようとした場合や、フォーム定義数の上限値を超えて登録しようとした場合、バージョン 02-xx クライアントでは「サーバに保存していません」というエラーメッセージが表示されますので、ご注意ください。

なお、フォーム定義の追加及び更新は、バージョン 03-xx の Groupmax Integrated Desktop で実行することをお勧めします。

(5) ユーザ定義属性の確認

フォーム文書データベースに登録したフォームファイルから、属性を取り込んだ場合は、取り込まれた属性情報に誤りがいないか必ず確認してください。必要に応じて、フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスの「属性定義」のタブから属性を追加、削除してください。

なお、指定できる属性名には次の制限があります。

1 ~ 50 バイトで指定します。

属性名として使用できるのは、次に示す文字です。

- 1 バイトコードの < 英大文字 > , < 英小文字 > , < 数字 > , 「_」(アンダースコア)
- 2 バイトコードの文字 (ただし、空白を除く)

「IS_」又は「_」で始まる名称は、使用できません。

注意事項

フォーム上には、通常は参照できない項目が定義されている場合があります。このような項目に定義された属性が、Document Manager に取り込まれる場合があります。したがって、フォーム文書データベースの運用上、必要ない属性は削除すると良いでしょう。

なお、フォームファイルから属性情報を取り込まない場合は、フォームの各項目に対応した属性を、フォーム文書データベースのユーザ定義属性としてすべて追加してください。

また、整数型、日時型及び固定長文字列型の属性は、インデクスを付加することによって、属性検索を高速化できます。ただし、インデクスを付加すると、文書の更新処理に掛かる時間や、オブジェクトサーバの環境設定で定義する Document Manager のインデクス用エリアの容量に影響します。このため、運用上検索対象になる属性に対してだけ、計画的にインデクスを付加することをお勧めします。

フォーム文書の属性に対するインデクスの付加は、Groupmax Integrated Desktop から実行してください。

(6) フォーム文書データベースの目的別一覧の定義

[目的別一覧定義の設定] ダイアログボックスから、フォーム文書の一覧の表示形式を指定するための目的別一覧を定義します。[目的別一覧定義の設定] ダイアログボックスはフォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスの「目的別一覧定義」のタブから表示させます。一つのフォーム文書データベースに、用途に合わせて複数定義できます。定義する目的別一覧の表示項目に対して、次の項目を指定します。

(a) [目的別一覧定義の設定] ダイアログボックスから指定する項目

[目的別一覧定義の設定] ダイアログボックスから、次の項目を指定します。

目的別一覧定義名

定義する目的別一覧の名称を 50 バイト以内で指定します。目的別一覧定義名に使用できる文字の規則については、「付録 E Document Manager に登録できるファイルの規則」に準じてください。

表示一覧

フォーム文書を一覧表示するときの表示項目と表示順序を指定します。

詳細情報

各表示項目の詳細情報を設定します。設定できる項目は次のとおりです。

タイトル

各表示項目に対して、属性名とは異なる名称を設定できます。ここで設定した名称が、文書一覧の表示項目となります。

表示形式

各表示項目の表示形式を指定できます。指定をしない場合は、「-」（ハイフン）を選択します。

- 重複排除

ある表示項目に同じデータが入っている場合、重複するデータの表示を制限する項目に対して指定します。

- 階層

インデントを付ける表示項目に対して定義します。Q&A やディスカッションをするためのフォーム文書データベースの目的別一覧には、必ず定義することをお勧めします。

ソート

4. Document Manager の操作環境の構築

フォーム文書を昇順又は降順にソートするためのソートキーに定義します。
ソートの対象にしない項目には「-」を指定します。

表示幅

表示項目の表示幅を定義します。

表示条件の設定

定義した表示一覧、詳細情報に対して、属性値を利用したフォーム文書の絞り込み条件を設定できます。[表示条件の設定] ダイアログボックスから設定してください。

(b) 注意事項

目的別一覧を定義しないで運用する場合の注意

目的別一覧を定義しない場合は、フォーム文書のシステム定義属性のうち、フォーム文書通番、作成日時、作成者名、更新日時及びフォーム定義名を基にフォーム文書が一覧表示されます。ただし、目的別一覧定義に対して表示条件を設定した場合、その定義は、02-30 以前の Groupmax Integrated Desktop では使用できません。

バージョン 03-xx 及びバージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop を使用する場合の注意

バージョン 03-xx 及びバージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop を使用する場合、フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスから、次に示す目的別一覧定義は参照できません。

- バージョン 03-xx の Groupmax Integrated Desktop を使用する場合
目的別一覧の表示条件に OR 条件が設定されている目的別一覧定義
- バージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop を使用する場合
目的別一覧の表示条件に OR 条件が設定されている目的別一覧定義
アクセス権がない目的別一覧定義

したがって、バージョン 03-xx 及びバージョン 02-xx の Groupmax Integrated Desktop から目的別一覧定義を追加及び更新するときには、フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスからは参照できない目的別一覧が定義されている場合があります。このため、参照できない登録済みの目的別一覧定義と同じ名称の目的別一覧定義を追加しようとした場合や、目的別一覧定義数の上限値を超えて登録しようとした場合、バージョン 03-xx 及びバージョン 02-xx クライアントでは「サーバに保存していません」というエラーメッセージが表示されますので、ご注意ください。

目的別一覧定義の追加及び更新は、バージョン 05-xx 以降の Groupmax Integrated Desktop で実行することをお勧めします。

(7) フォーム文書データベースの属性の変更

フォーム文書データベースに付けられている属性値を変更できます。属性値を変更できる属性を表 4-10 に示します。

表 4-10 属性値を変更できるフォーム文書データベースの属性

属性	意味
名前 ¹	フォーム文書データベースの名称
作成者 ²	フォーム文書データベースの作成者
所有者 ³	フォーム文書データベースの所有者

注 1 [名前の変更] ダイアログボックスから変更できます。

注 2 フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスの「一般」のタブから変更できません。

注 3 アクセス権の設定ダイアログボックスから変更できます。

(8) フォーム文書データベースのアクセス権の変更

フォーム文書データベース，目的別一覧及びフォーム定義に対するアクセス権は変更できます。アクセス権は，アクセス権ダイアログボックスから変更します。フォーム文書データベース，目的別一覧及びフォーム定義を定義したら，運用方法に応じてアクセス権を変更することをお勧めします。

(9) フォーム文書データベースの削除

不要になったフォーム文書データベースは削除できます。フォーム文書データベースは [共用キャビネットの文書データベース管理] ウィンドウから削除します。ただし，文書が登録されているフォーム文書データベースは削除できません。

4.3 Document Manager の使用例

この節では、Document Manager の使用例を示します。

4.3.1 一般文書データベースを使用した文書管理の例

ここでは、会議資料と議事録を管理する場合のフォルダと分類索引の構築例及びアクセス権の設定例を示します。

なお、フォルダ及び分類索引の体系、一般文書データベースの設定及びアクセス権は、Document Manager の利用環境を考慮して、Document Manager 管理者又は管理者によって権限を与えられたユーザが計画的に設計することをお勧めします。

(1) 一般文書データベースの設定例

一般文書データベースは、必要に応じて複数定義して運用できます。例えば、様々な種類の文書を一つのサーバで管理する場合は、文書の種類ごとに一般文書データベースを作成します。作成した一般文書データベースに対して、管理する文書に固有の属性を定義しておくことで便利ですが、

ただし、ここでは会議資料と議事録を管理するので、新規に一般文書データベースを作成しないで、システム文書データベースだけで運用します。この場合、システム文書データベースは次のように設定します。

全文検索サーバとの連携を指定する

文書を検索するとき、文書中の単語をキーワードにして全文検索をするために指定します。

すべてのユーザにすべてのアクセス権を設定する

すべてのユーザが文書を登録できるように設定します。一般文書データベースを複数作成して運用する場合も、同じようにアクセス権を設定することをお勧めします。なお、文書の検索や登録に関する操作の制限は、フォルダと文書のアクセス権で制御します。

ユーザ定義属性として「開催日」と「出席者」を定義する

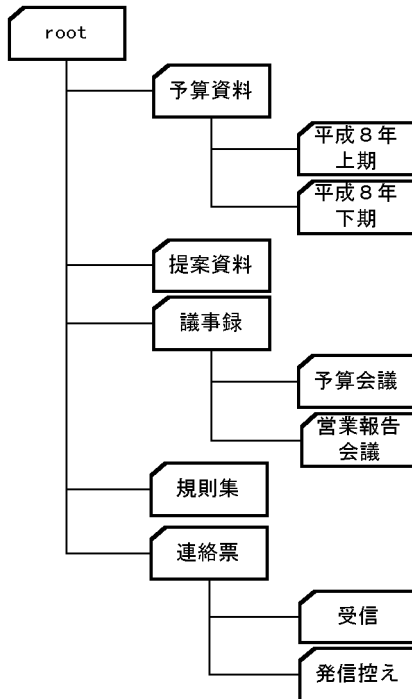
登録する文書に対して「開催日」と「出席者」という属性値を与えて管理するために定義します。文書を検索するときの検索条件としても使用できます。

(2) フォルダの構築例とアクセス権の設定例

(a) フォルダの構築例

フォルダの構築例を図 4-5 に示します。

図 4-5 フォルダの構築例



フォルダ「予算資料」の下位フォルダ「平成8年上期」と「平成8年下期」には、それぞれの期に開催された会議の資料を登録します。

フォルダ「提案資料」には、顧客に提出した提案資料を登録します。

フォルダ「議事録」の下位フォルダ「予算会議」と「営業報告会議」には、それぞれの会議の議事録を登録します。

フォルダ「決裁書」には、上長の承認済みの決裁書を登録します。

フォルダ「連絡票」の下位フォルダ「受信」には、メールやワークフローで受信した連絡票を登録します。「発信控え」には、発信した連絡票の控えを登録します。

また、フォルダは必要に応じて追加します。例えば、課内で開催する会議の議事録を管理するためにフォルダ「議事録」の下位フォルダ「課内会議」を追加します。

(b) アクセス権の設定例

Document Manager の基本的なアクセス権の運用方法として、次のような方法が考えられます。

一般文書データベースに対しては、すべてのユーザにすべての権限を与える。

フォルダに対しては、より詳細にグループや全ユーザに対するアクセス権を設定する。

文書の参照や更新については、文書ごとにアクセス権を設定して管理する。

4. Document Manager の操作環境の構築

ここでは、システム文書データベースだけで、すべてのユーザにすべてのアクセス権を設定して運用するので文書の登録や検索に関する操作は、フォルダのアクセス権で制御します。例えば、すべてのユーザに文書の登録、検索及び参照を許可する場合は、次のようにアクセス権を設定します。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合

- 全ユーザに、文書作成権を与える。

Document Manager Client から操作する場合

- 全ユーザに、読み出し権と文書作成権を与える。

また、文書の登録に関する操作は部員だけに限定して、部外者には文書を参照だけを許可する場合は、次のようにアクセス権を設定します。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合

- グループを指定して、文書作成権を与える。
- 全ユーザには参照権だけを与える。又は、拡張文書参照モードを使用する。

Document Manager Client から操作する場合

- グループを指定して、読み出し権と文書作成権を与える。
- 全ユーザには読み出し権だけを与える。又は、拡張文書参照モードを使用する。

(c) 改変禁止モードの設定

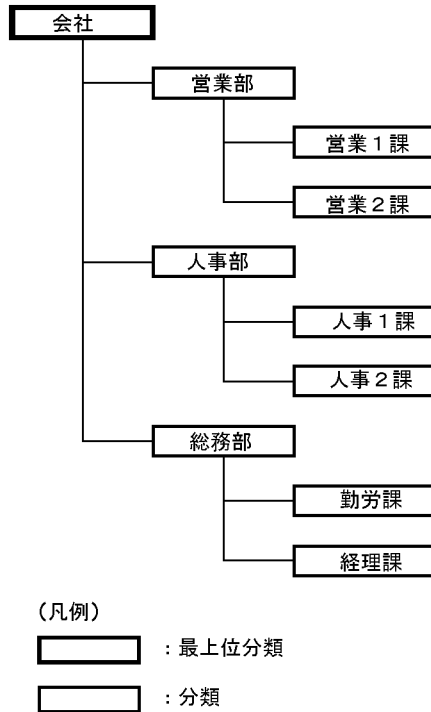
フォルダ「決裁書」は、不用意な文書の更新や改ざん、削除を防止するため、改変禁止モードを設定して運用します。

(3) 分類索引の構築例とアクセス権の設定例

(a) 分類索引の構築例

会社組織を表した分類索引と会議の中心となるプロジェクトを表した分類索引を定義します。分類索引の構築例を図 4-6 及び図 4-7 に示します。

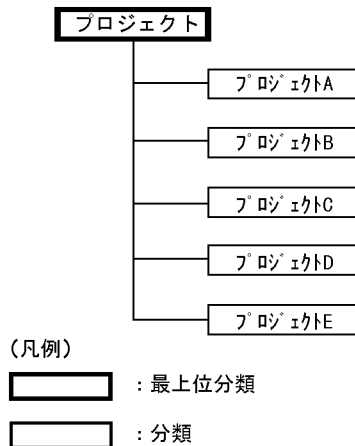
図 4-6 分類索引の構築例（会社組織）



文書は、それぞれの会議の開催元の部署名の分類にリンクさせます。例えば、営業1課が開催した営業報告会議の議事録と会議資料は、分類「営業1課」にリンクさせます。

4. Document Manager の操作環境の構築

図 4-7 分類索引の構築例（プロジェクト）



例えば、進行中のプロジェクトごとに開催される工程会議の議事録や会議資料は、そのプロジェクト名の分類にリンクさせます。

分類索引を定義するときは、Document Manager で管理する文書が多重的にリンクされるように設計することをお勧めします。

(b) アクセス権の設定例

すべてのユーザに文書のリンク、分類索引検索及び参照を許可する場合は、次のようにアクセス権を設定します。

全ユーザに、文書リンクを与える

分類索引又は分類を限定して特定のユーザに、文書のリンク及び分類索引検索を許可する場合は次のようにアクセス権を設定します。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合

- グループを指定して、文書リンク権を与える。
- 全ユーザには参照権だけを与える。又は、拡張文書参照モードを使用する。

Document Manager Client から操作する場合

- グループを指定して、読み出し権と文書リンク権を与える。
- 全ユーザには読み出し権だけを与える。又は、拡張文書参照モードを使用する。

(4) 管理する文書について

文書の編集や更新などの操作については、文書ごとにアクセス権を設定して制御します。

例えば、特定のユーザには、文書の編集、更新を許可して、そのほかのユーザには文書の参照だけを許可する場合は、次のようにアクセス権を設定します。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合

- グループを指定して、編集権を与える。
- 全ユーザには参照権だけを与える。又は、拡張文書参照モードを使用する。

Document Manager Client から操作する場合

- グループを指定して、読み出し権と書き込み権を与える。
- 全ユーザには読み出し権だけを与える。又は、拡張文書参照モードを使用する。

なお、改変禁止モードを設定しているフォルダ「決裁書」に登録されている文書は、アクセス権に関係なく、編集、削除などの操作はできません。

4.3.2 フォーム文書データベースを使用した文書管理の例

ここでは、営業日報を管理するフォーム文書データベースの設定例を示します。

なお、フォーム文書データベースの設定及びアクセス権は、Document Manager の利用環境を考慮して、Document Manager 管理者又は管理者によって権限を与えられたユーザが計画的に設計することをお勧めします。

(1) フォーム文書データベースの設定例

フォーム文書データベースは、適用業務に合わせて定義して運用できます。例えば、営業日報の管理やディスカッション用のデータベースを構築します。ここでは、営業日報を管理するための「営業日報」データベースを運用します。

(a) 使用するフォーム

「営業日報」データベースに定義するフォームを、Groupmax Form で作成しておきます。ここで使用するフォームの例を図 4-8 に示します。

図 4-8 「営業日報」データベースに定義するフォームの例

営業日報	
報告書作成者	<input type="text"/>
訪問日時	<input type="text"/>
製品名	<input type="text"/>
顧客名	<input type="text"/>
報告内容	<input type="text"/>

4. Document Manager の操作環境の構築

(b) ユーザ定義属性

フォームから取り込んだ属性以外には、属性を追加しないで運用します。なお、フォームから取り込んだ属性は、Document Manager 側で表 4-11 に示すような属性型として扱われることとします。

表 4-11 フォーム文書データベースに読み込まれる属性型

属性名	属性型	フォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスでの指定方法
訪問日時	固定長文字列型	固定長文字型
顧客名、製品名	固定長文字列型	固定長文字型
報告内容	可変長文字列型	文字型

ただし、「訪問日時」が定義されているフィールドには、日付を入力するので、Groupmax Integrated Desktop のフォーム文書データベースのプロパティダイアログボックスから、属性型を「日付型」に変更します。

(c) 目的別一覧の定義

フォーム文書データベース内の文書を表示するときの、目的別一覧を定義します。ここでは、次の二つの目的別一覧を定義します。

製品別

取り扱う製品で文書を分類して表示するための目的別一覧の定義例を、表 4-12 に示します。

表 4-12 目的別一覧「製品別」の定義例

表示項目（表示順）	タイトル	表示形式	ソート
製品名	製品名	重複排除	昇順
顧客名	ユーザ	-	昇順
訪問日時	訪問日	-	降順
報告書作成者	営業担当	-	-
報告内容	報告内容	-	-

担当者別

営業担当者ごとに文書を分類して、更に担当製品ごとに文書を分類して表示するための目的別一覧の定義例を、表 4-13 に示します。

表 4-13 目的別一覧「担当者及び製品別」の定義例

表示項目（表示順）	タイトル	表示形式	ソート
報告書作成者	営業担当	重複排除	昇順
製品名	製品名	重複排除	昇順

表示項目（表示順）	タイトル	表示形式	ソート
顧客名	ユーザ	-	-
訪問日時	訪問日	-	降順
報告内容	報告内容	-	-

（２）アクセス権の設定例

営業日報を管理するフォーム文書データベースには、営業部に所属するユーザだけが、文書を登録できるようにアクセス権を設定して運用します。次のようにフォーム文書データベースのアクセス権を設定します。なお、この場合は、目的別一覧及びフォーム定義へのアクセス権は変更しません。

所有者

「すべて」を設定します。

グループ

「組織」の「営業部」に対して「編集」を設定します。

全ユーザ

「参照」を設定します。

5

Document Manager の環境設定

この章では、Document Manager を起動する前に必要な環境設定について説明します。

-
- 5.1 環境設定の流れ

 - 5.2 環境を設定する前の準備

 - 5.3 組み込み

 - 5.4 オペレーティングシステムでの環境設定

 - 5.5 オブジェクトサーバでの環境設定

 - 5.6 Groupmax Address での環境設定

 - 5.7 Document Manager での環境設定

 - 5.8 全文検索サーバと連携するための環境設定

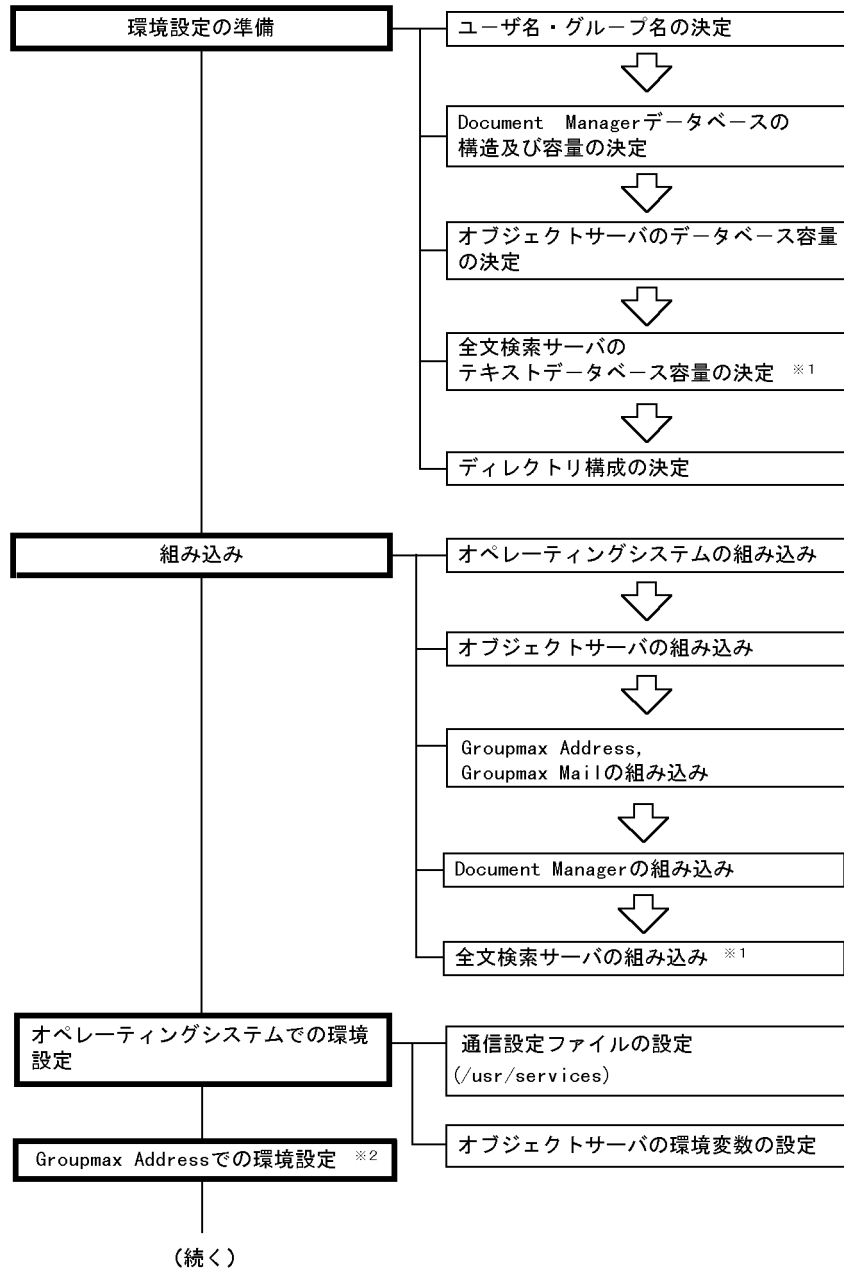
 - 5.9 Document Manager の環境の初期化
-

5.1 環境設定の流れ

この節では、Document Manager の環境設定の流れについて説明します。

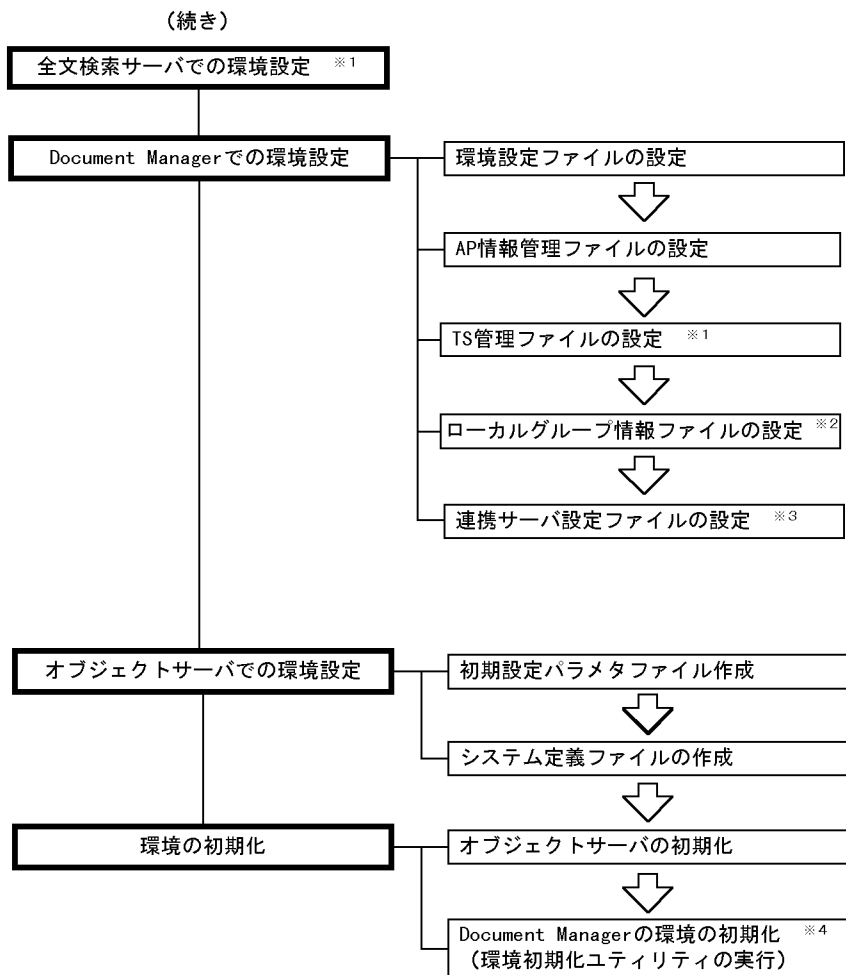
Document Manager の環境を設定する順序を、図 5-1、5-2 に示します。

図 5-1 Document Manager の環境設定の流れ (1/2)



5. Document Manager の環境設定

図 5-2 Document Manager の環境設定の流れ (2/2)



注※1 全文検索サーバと連携する場合に必要な環境設定です。

注※2 Groupmax Addressと連携して次の機能を使用する場合に必要な環境設定です。
・Groupmax全体でのユーザ情報の一元管理
・ログイン先のサーバの切り替え

注※3 メールシステムと連携して、文書を配布する場合に必要な環境設定です。

注※4 Document Managerの環境を初期化する前に、オブジェクトサーバを起動してください。

5.2 環境を設定する前の準備

ここでは、Document Manager の環境を設定する前の準備について説明します。

5.2.1 Document Manager を使用するユーザ及びグループの決定

Document Manager を使用するユーザを決定します。同様に、Document Manager を使用するグループ及びグループに所属するユーザを決定します。

Document Manager を使用するユーザやグループに関する情報は、次のどちらかの方法で管理します。

Groupmax 全体で一元管理する方法

Groupmax のアプリケーションプログラム間で、ユーザやグループに関する情報を一元管理する方法です。この場合、Groupmax 全体のユーザ情報やグループ（組織）情報は、Groupmax Address に設定します。

また、Groupmax 全体で管理する最上位組織、組織及びグループ（組織）以外に、Document Manager サーバ単独で管理するグループも設定できます。このグループをローカルグループといいます。ローカルグループを設定すると、Groupmax のグループ（組織）だけでは実現できないような、きめ細かいグループ管理ができます。ローカルグループは、Document Manager のローカルグループ情報ファイルに設定します。

Document Manager サーバ単独で管理する方法

Document Manager サーバ単独でユーザやグループに関する情報を管理する方法です。この場合、ユーザ情報及びグループ情報は、UNIX のファイルに設定します。

上記のどちらの方法でユーザやグループに関する情報を管理するかは、環境設定ファイルで定義します。

5.2.2 データベースの構造の決定

ここでは、Document Manager と関連プログラムのデータベースの構造の決定について説明します。

(1) Document Manager データベースの構成の決定

Document Manager で使用するフォルダ、分類索引及び文書データベースの構成を決定します。

(2) オブジェクトサーバのデータベース容量の決定

文書の属性を管理するための、オブジェクトサーバのデータベースの容量を決定します。

(3) 全文検索サーバのテキストデータベース容量の決定

全文検索する場合、テキストデータを格納するテキストデータベースの容量を決定します。

5.2.3 ディレクトリ構成の決定

これまでに決定した内容を基に、次のディレクトリに割り当てるファイルシステムを決定します。

Document Manager サーバシステムディレクトリ (/usr/infoshare)

Document Manager サーバ作業領域ディレクトリ (/usr/infoshare/export)

Document Manager サーバ文書実体ファイル格納ディレクトリ (/usr/infoshare/doc)

全文検索サーバのテキストデータベース

ファイルシステムを決定する場合には、次のことに注意してください。

- バックアップを容易にするためや、将来の拡張性を確保するために、それぞれを別のファイルシステムにすることをお勧めします。
- 同時ログインするユーザ数に応じて、十分なスワップエリアを確保してください。

5.3 組み込み

ここでは、Document Manager の前提プログラム、関連プログラム及び Document Manager の組み込みについて説明します。

5.3.1 Document Manager の前提プログラム及び関連プログラム

Document Manager を組み込む前に、表 5-1 に示したプログラムを組み込んでください。前提プログラムの組み込みについては、マニュアル「HI-UX/WE2 システム管理 導入・保守編」を参照してください。

表 5-1 Document Manager の前提プログラム及び関連プログラム

ソフトウェア名	バージョン	機能	区分
HP-UX	10.20 又は 11.0	Document Manager の稼働に必要なオペレーティングシステム	1
AIX 5L	5.1 又は 5.2		
Groupmax Object Server Version 6	06-00 以降	Document Manager データベースの共用に必要なプログラム (オブジェクトサーバ)	2
Groupmax High-end Object Server Version 6	06-00 以降		
Bibliotheca/TS-SS 又は Bibliotheca/TextSearch-Server	02-01 以降	全文検索をする場合に必要プログラム	3
Bibliotheca/TS-DT 又は Bibliotheca/TextSearch-Dictionary	01-00	全文検索をする場合に必要プログラム	4
Bibliotheca2 TextSearch Server Version 2	02-10 以降	全文検索をする場合に必要プログラム	3
Bibliotheca2 TextSearch Server Library for Document Manager	02-00-/A 以降		
Bibliotheca2 TextSearch Dictionary	01-00	全文検索をする場合に必要プログラム	4
Groupmax Mail Server Version 6	06-00 以降	文書配布機能を使用する場合に必要なプログラム	
Groupmax Address Server Version 6	06-00 以降	ユーザ情報を一元管理する場合に必要なプログラム	
Groupmax Agent Server Version 5 及び Groupmax Agent - Application Version 5	05-00 以降	イベント通知機能を使用して、一般文書の登録監視をする場合に必要プログラム	
Document Filter for Text Search	02-00 以降	テキスト自動抽出機能を使用する場合に必要なプログラム	

5. Document Manager の環境設定

ソフトウェア名	バージョン	機能	区分
Millemasse/FS for Groupmax	02-03 以降	Millemasse/FS と連携して文書を削除する場合に必要な機能	
Groupmax Document Manager - Filtering Server Version 6	06-50 以降	テキスト自動抽出サーバ機能を利用する場合に必要なプログラム	
Groupmax Server - Scan Version 6	06-00-/A 以降	ウイルスチェック機能を利用する場合に必要なプログラム	

(凡例)

： Document Manager の稼働に必要なプログラム (前提プログラム)

： 必要に応じて組み込むプログラム (関連プログラム)

注 ユーザ情報を一元管理する環境を利用して、Groupmax Address Server Version 5 のプログラムを削除した後再度組み込む場合、Document Manager のプログラムも削除した後、再度組み込んでください。

注 1 オペレーティングシステムには、HI-UX/WE2/BASE、HP-UX 又は AIX のどれかを選んでください。

注 2 オブジェクトサーバには、Groupmax Object Server Version 6 又は Groupmax High-end Object Server Version 6 のどちらかを選んでください。

注 3 全文検索をする場合には、Bibliotheca/TS 又は Bibliotheca2 TextSearch のどちらかを選んでください。

注 4 全文検索で、検索タームと検索タームの同義語を含む文書を検索する場合 (同義語展開) に御利用ください。

5.3.2 Document Manager の組み込み

オペレーティングシステムの標準組み込み機能によって、Document Manager を組み込んでください。オペレーティングシステムの標準組み込みについては、マニュアル「HI-UX/WE2 システム管理 導入・保守編」を参照してください。

5.4 オペレーティングシステムでの環境設定

5.4.1 通信設定ファイルの設定

この節では、オペレーティングシステムでの環境設定について説明します。

(1) ホスト名の設定

Document Manager サーバを運用するマシンでは、オペレーティングシステムの環境設定で登録するホスト名を 8 バイト以内にしてください。

(2) 通信設定ファイルの設定

Document Manager では、ネットワーク環境に TCP/IP を使用しています。このため、通信設定ファイル (/etc/services) に、Document Manager 用の設定が必要です。システム管理者は、通信設定ファイルに次の内容を設定してください。

形式

サービス名 ポート番号/プロトコル名

オペランド

サービス名

「infoshare」と記述します。

ポート番号

「40005」と記述します。

プロトコル名

「tcp」と記述します。

記述例

infoshare 40005/tcp

(3) Groupmax Address と連携する場合のオペレーティングシステムの設定に関する注意

バージョン 01-xx ~ 06-xx のクライアントが混在する環境で、ドメイン名を使用する場合は、ドメイン名の最初のピリオドまでを 8 バイト以内とし、重複しないようにしてください。

IP アドレスの解決ができるように、オペレーティングシステムの環境設定 (hosts ファイル, TCP/IP の設定) 及び DNS サーバの設定をしておいてください。

5.4.2 オブジェクトサーバの環境変数の設定

オブジェクトサーバのシステム管理者は、各自の環境にオブジェクトサーバの環境変数を設定してください。オブジェクトサーバの環境変数については、マニュアル

5. Document Manager の環境設定

「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

5.4.3 環境変数の設定

Groupmax Document Manager の環境変数を設定します。環境変数は、「.profile」, 「.login」などのファイルで設定すると便利です。

(a) 内容及び記述形式

環境変数の内容及び記述形式を次に示します。

LANG : 使用言語

使用する言語環境を指定します。

HI-UX/WE2 及び HP-UX の場合

省略又は次に示す言語環境以外を指定すると「C」が仮定されます。

ja_JP.SJIS : 日本語

C : 英語

AIX の場合

Ja_JP : 日本語

省略又は Ja_JP 以外 : 英語

(b) 記述例

B シェル及び C シェルでの環境変数の記述例を次に示します。

B シェルの場合

```
LANG=ja_JP.SJIS
```

```
export LANG
```

C シェルの場合

```
setenv LANG ja_JP.SJIS
```

5.5 オブジェクトサーバでの環境設定

Document Manager は Document Manager データベースを構築するためにオブジェクトサーバを使用します。なお、オブジェクトサーバの環境設定の詳細については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。ここでは、オブジェクトサーバとして Groupmax Object Server Version 6 を使用した場合のファイルの指定について説明します。

なお、Groupmax サーバ環境設定ファイルを使った環境設定もできます。Groupmax サーバ環境設定ファイルについては、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

5.5.1 初期設定パラメタでの指定

(1) 初期設定パラメタファイルの指定例

初期設定パラメタファイルは、データベースの初期設定情報を記述するファイルです。初期設定パラメタファイルの指定例は、サンプルファイルとして提供されています。初期設定パラメタファイルの作成時には、必要に応じてサンプルファイルをコピーし、利用してください。

ここでは、サンプルファイルを例にして、初期設定パラメタファイルの指定について図 5-3 で説明します。なお、サンプルファイルでは次に示すデータベース環境を前提にしています。

設定項目		設定数
一般文書データベース		50
一般文書		5,000 (1 文書データベース当たり 100 文書)
分類索引 (最上位分類)		5
分類		200 (1 分類当たり 100 文書)
フォーム文書データベース		50
フォーム文書データベースに追加するユーザ定義属性	整数型	2
	文字列型	1
	日時型	2
	固定長文字列型	9
フォーム文書		5,000
登録ユーザ数		100
バージョン数		2
使用中文書		10 (1 ユーザ当たり)

図 5-3 初期設定パラメタの指定例

```

1  [ area -n master -u MASTER -s 50
    [ file -n /usr/OMSDB/master_dir -i 2
2  [ area -n datadir -u DATADIR -s 50
    [ file -n /usr/OMSDB/data_dir -i 1
3  [ area -n dictionary -u DICTIONARY -s 8
    [ file -n /usr/OMSDB/dictionary -i 124
4  [ area -n oidindex -u OIDINDEX -s 32
    [ file -n /usr/OMSDB/oidindex -i 41
5  [ area -n IS_system_area -u USER -s 1
    [ file -n /usr/OMSDB/user_db_1 -i 175
    [ area -n IS_class_area_1 -u USER -s 32
    [ file -n /usr/OMSDB/user_db_2 -i 233
    [ area -n IS_string_area_1 -u USER -s 1
    [ file -n /usr/OMSDB/user_db_3 -i 568
    [ area -n IS_string_area_2 -u USER -s 1
    [ file -n /usr/OMSDB/user_db_4 -i 568
6  [ area -n IS_version_area -u USER -s 190
    [ file -n /usr/OMSDB/version_db -i 1
    [ area -n IS_users_area -u USER -s 26
    [ file -n /usr/OMSDB/users_db -i 1
7  [ area -n IS_index_1_area_1 -u INDEX -s 1
    [ file -n /usr/OMSDB/index_1 -i 3444
    [ area -n IS_index_2_area_1 -u INDEX -s 1
    [ file -n /usr/OMSDB/index_2 -i 3444
8  [ area -n IS_version_index -u INDEX -s 32
    [ file -n /usr/OMSDB/version_index -i 2
    [ area -n IS_users_index -u INDEX -s 32
    [ file -n /usr/OMSDB/users_index -i 4
9  [ area -n IS_group_area -u USER -s 72
    [ file -n /usr/OMSDB/group_db -i 1

```

1. マスタディレクトリ用のエリア（名称 master）と、そのエリア中のファイル（名称 /usr/OMSDB/master_dir）を定義する。（例題の 1 ~ 2 行目）
2. データディレクトリ用のエリア（名称 datadir）と、そのエリア中のファイル（名称 /usr/OMSDB/data_dir）を定義する。（例題の 3 ~ 4 行目）
3. ディクショナリ用のエリア（名称 dictionary）と、そのエリア中のファイル（名称 /usr/OMSDB/dictionary）を定義する。（例題の 5 ~ 6 行目）

4. OID インデクス用のエリア（名称 oidindex）と、そのエリア中のファイル（名称 /usr/OMSDB/oidindex）を定義する。（例題の 7 ~ 8 行目）
5. ユーザデータベース用のエリアと、そのエリア中のファイルを定義する。（例題の 9 ~ 16 行目）

エリア名とファイル名の対応を次に示します。

エリア名	エリア中のファイル名
IS_system_area_1	/usr/OMSDB/user_db_1
IS_class_area_1	/usr/OMSDB/user_db_2
IS_string_area_1	/usr/OMSDB/user_db_3
IS_string_area_2	/usr/OMSDB/user_db_4

6. Document Manager 管理データベース用のエリアと、そのエリア中のファイルを定義する。（例題の 17 ~ 20 行目）

エリア名とファイル名の対応を次に示します。

エリア名	エリア中のファイル名
IS_version_area	/usr/OMSDB/version_db
IS_users_area	/usr/OMSDB/users_db

7. インデクス用のエリアと、そのエリア中のファイルを定義する。（例題の 21 行目 ~ 24 行目）

エリア名とファイル名の対応を次に示します。

エリア名	エリア中のファイル名
IS_index_1_area_1	/usr/OMSDB/index_1
IS_index_2_area_1	/usr/OMSDB/index_2

8. Document Manager 管理インデクス用のエリアと、そのエリア中のファイルを定義する。（例題の 25 行目 ~ 28 行目）

エリア名とファイル名の対応を次に示します。

エリア名	エリア中のファイル名
IS_version_index	/usr/OMSDB/version_index
IS_users_index	/usr/OMSDB/users_index

9. 複数グループアクセス権管理データベース用のエリアと、そのエリア中のファイルを定義する。（例題 29 行目 ~ 30 行目）

エリア名とファイル名の対応を次に示します。

5. Document Manager の環境設定

エリア名	エリア中のファイル名
IS_group_area	/usr/OMSDB/group_db

なお、この定義は、複数グループアクセス権を使用する場合にだけ必要です。

注 この五つのエリアは、一般文書データベース 50、フォーム文書データベース 50 ごとに算出した値です。一般文書データベース、フォーム文書データベースを更に追加する場合は、これらの合計数の 100 ごとに値を算出し、定義を追加してください。

(2) 初期設定パラメタの定義項目

初期設定パラメタのうち、Document Manager で固有の設定値について説明します。

(a) エリアの定義数

Document Manager では、エリアの定義数が次のように定められています。ほかのエリアについては、オブジェクトサーバの規則に従ってください。

表 5-2 エリアの定義数

エリアの用途	定義数
ユーザデータベース	3 以上
インデクス	2 以上
Document Manager 管理データベース	2
Document Manager 管理インデクス	2
複数グループアクセス権管理データベース	1

注 複数グループアクセス権を使用する場合にだけ必要です。

注 1 ユーザデータベースのエリアとインデクス用のエリアは、合わせて 82 個以下にしてください。

注 2 エリアの定義数が次に示す値の場合、環境初期化ユティリティを実行するとエラーになりません。

ユーザデータベース用のエリアの定義数が 2 以下の場合

インデクス用のエリアの定義数が 1 以下の場合

(b) エリアの名称の規則

Document Manager では、エリアの名称に次のような規則があります。ほかのエリアの名称については、オブジェクトサーバの規則に従ってください。

表 5-3 エリアの名称の規則

エリアの用途	規則	指定数
ユーザデータベース	IS_system(半角)で始まる 1 ~ 30 バイトの文字列	1
	IS_class(半角)で始まる 1 ~ 30 バイトの文字列	1 以上
	IS_string(半角)で始まる 1 ~ 30 バイトの文字列	
インデクス	IS_index_1(半角)で始まる 1 ~ 30 バイトの文字列	1 以上
	IS_index_2(半角)で始まる 1 ~ 30 バイトの文字列	
Document Manager	IS_version_area (固定)	1
管理データベース	IS_users_area (固定)	
Document Manager	IS_version_index (固定)	
管理インデクス	IS_users_index (固定)	
複数グループアクセス権管理データベース	IS_group_area (固定)	1

注 各エリアのエリア名に上記以外の名称を付けて初期化しても、該当するエリアとして使用できません。また、上記の規則に従ったエリアがない場合、環境初期化ユティリティを実行するとエラーになります。

注 複数グループアクセス権を使用する場合にだけ必要です。

(c) エリアのセグメントサイズ

Document Manager では、エリアのセグメントサイズが、次のように定められています。

これ以外の値を指定すると、ディスクの使用効率が下がり、ディスク容量が不当に増加する場合があります。

表 5-4 エリアのセグメントサイズ

エリアの用途		セグメントサイズ
ユーザデータベース	IS_system で始まるエリア	1
	IS_class で始まるエリア	32
	IS_string で始まるエリア	1
インデクス	IS_index_1 及び IS_index_2 で始まるエリア	1

5.5.2 システム共通定義ファイルでの指定

システム共通定義ファイル (\$XODDIR/conf/xodrc) は、オブジェクトサーバのシステムに共通する定義情報を記述するファイルです。システム共通定義ファイルの指定例は、サンプルファイルとして提供されています。

5. Document Manager の環境設定

ここでは、サンプルファイルを例にして、システム共通定義ファイルの指定について説明します。

(1) システム共通定義ファイルの指定例

システム共通定義ファイルのサンプルファイルを次に示します。

```
set dbm_master = /sample/document_db/master_dir
#resipool -n IS_user_class -m 8 -u USER
#resiobj -s schema -t GIS_meta_root_doc_class
```

(2) システム共通定義ファイルの定義項目

システム共通定義ファイルの各パラメタについて説明します。

dbm_master

初期設定パラメタファイルで、マスタディレクトリとして指定したファイル名を指定します。

resipool

Document Manager データベースの一部（文書データベース情報）を共用メモリ上に常駐化させる場合に指定するパラメタです。

resipool パラメタには、常駐化ページプールを指定します。resipool パラメタの形式を次に示します。

```
resipool -n 常駐ページプール名 ¥
          -m 常駐ページプール数 ¥
          -u 常駐ページプールの用途
```

常駐ページプール名

常駐ページプールの名称を指定します。任意の名称を指定できます。

常駐ページプール数

常駐ページプールの個数を指定します。一般文書データベース、フォーム文書データベースの合計数 100 ごとに 8 個指定します。

常駐ページプールの用途

「USER」固定です。

resiobj

Document Manager データベースの一部（文書データベース情報）を共用メモリ上に常駐化させる場合に指定するパラメタです。

resiobj パラメタには、常駐するオブジェクトのタイプを指定します。resiobj パラメタの形式を次に示します。

```
resiobj -s スキーマ名 ¥
         -t 常駐化するオブジェクトのタイプ名
```

スキーマ名

Document Manager の環境初期化ユーティリティで指定した、Document Manager データベース名を指定します。

常駐化するオブジェクトのタイプ名

「GIS_meta_root_doc_class」固定です。

lck_limit

Document Manager を使用する環境に必要な最大同時排他要求数として、32767 を指定します。なお、lck_limit パラメタはサンプルファイルには記述されていないので、必要に応じて記述してください。

trn_tran_process_count

同時にログインするユーザ数を指定します。なお、trn_tran_process_count 句はサンプルファイルには記述されていないので、必要に応じて記述してください。

(3) 注意事項

- サンプルファイルでは、resipool パラメタ及び resiobj パラメタがコメント行になっています。これは、Document Manager の環境を初期化をする前に、resipool パラメタ及び resiobj パラメタを指定してオブジェクトサーバを起動すると、常駐スキーマ名の指定誤りエラーになるためです。したがって、resipool パラメタ及び resiobj パラメタの前の「#」は、Document Manager の環境初期化ユーティリティを実行した後に削除してください。
- システム共通定義ファイルの各パラメタの指定が有効になるのは、パラメタ指定後に初めてオブジェクトサーバを起動した時です。オブジェクトサーバの起動中にシステム共通定義ファイルを書き替えた後、その指定を有効にしたい場合は、オブジェクトサーバを再起動してください。

5.6 Groupmax Address での環境設定

Groupmax Address と連携して次に示す機能を使用する場合、Groupmax Address での環境設定が必要です。

5.6.1 Document Manager サーバ情報の一元管理

Document Manager サーバの情報を Groupmax Address 上に構築して一元管理します。これによって、クライアントからログインする際、ログイン先のサーバを選択できます。

(1) Document Manager 用サーバの登録

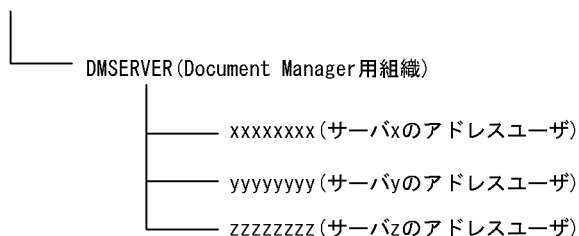
Document Manager サーバの情報を一元管理するには、Groupmax Address で、Document Manager サーバをアドレスユーザとして擬似的に登録する必要があります。

Document Manager サーバの登録方法を、次に示します。

1. 最上位組織 Groupmax_system 下に、組織 ID DMSERVER という組織を登録する
最上位組織 Groupmax_system は、Groupmax Address で事前に組み込まれているサーバ管理用の最上位組織です。この最上位組織下に、Groupmax クライアントを利用するユーザ及び組織体系とは異なる組織として、Document Manager サーバ管理用の組織を登録します。組織 ID は、「DMSERVER」で登録します。
2. Document Manager サーバをアドレスユーザとして登録する
Document Manager サーバの管理を目的として、1. で登録した組織「DMSERVER」に対して、Document Manager サーバごとに一つのアドレスユーザを擬似的に登録します。登録した各アドレスユーザは、それぞれ一つの Document Manager サーバに対応します。
Document Manager サーバ対応のアドレスユーザとして、最大 250 台の Document Manager サーバを登録できます。
Groupmax Address での定義例を次の図に示します。

図 5-4 Groupmax Address での Document Manager 用アドレスユーザの定義例

Groupmax_system(Groupmax Addressの「システム最上位組織」)



3. サーバ一覧更新ユティリティを実行する

Document Manager サーバ対応のアドレスユーザを登録した後、サーバー一覧更新ユティリティを実行します。サーバー一覧更新ユティリティについては、「8.31 サーバ情報一覧の更新 (ISmksvls)」を参照してください。

(2) Document Manager サーバ管理用の組織の定義

Document Manager サーバ管理用の組織の定義項目は次のとおりです。

タイプ

アドレス組織又はアドレス帳組織で定義します。

組織 ID

「DMSERVER」と定義します。

日本語名

任意で定義します。

上位組織 ID

Groupmax Address のシステム最上位組織 (Groupmax_system) の組織 ID を定義します。

(3) Document Manager サーバ対応のアドレスユーザの定義

Document Manager サーバ対応のアドレスユーザの定義項目は次のとおりです。

タイプ

アドレスユーザで定義します。

ユーザ ID

8 バイト以内の <英数字> で定義します。Document Manager サーバは最大 250 台まで定義できます。

ニックネーム

メールの宛先として 128 バイト以内で定義します。

日本語名

任意で定義します。

所属組織 ID

「DMSERVER」と定義します。

ホームサーバ名

Document Manager サーバのドメイン名又はホスト名を定義します。

メール属性

登録するアドレスユーザを文書配布機能のメール送受信時の宛先として利用する場合は、「メール属性あり」と指定してください。この場合は、連携サーバ設定ファイルのメール ID に、このアドレスユーザのユーザ ID を記述してください。

登録するアドレスユーザを文書配布機能のメール送受信時の宛先として利用しない場

5. Document Manager の環境設定

合は、「メール属性なし」と指定してください。

Document Manager のホームサーバ
設定しないでください。

5.6.2 Groupmax 全体でのユーザ情報の一元管理

(1) ユーザ情報の一元管理

Groupmax Address では、Groupmax の各アプリケーションプログラムのユーザ情報や組織情報を一元管理できます。Groupmax Address にユーザ情報や組織情報を登録すれば、同じ情報を Document Manager でも利用できます。また、Groupmax Address のグループ機能では、組織を超えたユーザや、複数の組織をまとめて一つのグループにできます。これらのユーザ、組織、グループの単位で、Document Manager で管理するアクセス権を設定できます。なお、グループにはアドレス帳組織を含めることはできません。

ユーザ、組織及びグループの定義方法については、マニュアル「Groupmax Address/ Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

(2) 組織の定義

Document Manager を利用するユーザが所属する組織は、アドレス組織又はアドレス帳組織です。

(3) ユーザの定義

Document Manager を利用できるユーザは、アドレスユーザだけです。Document Manager のホームサーバに、ログイン対象の Document Manager サーバのドメイン名又はホスト名を記述してください。

(4) グループの定義

Document Manager を利用するユーザ及び組織をまとめて、グループを作成します。

(5) 注意事項

(a) 兼任ユーザの扱い

Groupmax Address で指定した兼任ユーザに対応していません。

5.6.3 ログイン先のサーバの切り替え

Groupmax Integrated Desktop では、Groupmax Address に登録した Document Manager サーバ情報を利用して、ログインするサーバを切り替えられます。Document Manager Client では、ユーザごとのログイン先のサーバとして Groupmax Address に最大 5 サーバを登録できます。Groupmax Address での環境設定については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照し

てください。

5.7 Document Manager での環境設定

ここでは、Document Manager で必要な環境設定について説明します。

5.7.1 Document Manager の使用環境の設定

ここでは、Document Manager の使用環境の設定について説明します。

(1) 環境設定ファイルの作成

(a) 環境設定ファイルとは

Document Manager を使用する環境を定義するファイルを、環境設定ファイル (`/usr/infoshare/etc/config`) といいます。システム管理者は、Document Manager を使用する環境の定義を環境設定ファイルに記述します。

環境設定ファイルはサンプルファイル (`/usr/infoshare/sample/config`) が提供されていますので、コピーして使用してください。

(b) 環境設定ファイルの記述形式

環境設定ファイルの記述形式を、次に示します。

形式

```
FileSharing=nouse
[ UserConfirmation=Local | GroupAddress ]
[ System_Administrator=Document Manager管理者ユーザ名 ]
[ SessionTimeOut=セッションのタイムアウト時間 ]
[ TransportTimeOut=ファイル転送中のセグメント受信監視時間 ]
[ DocCreatorName=LoginName | NickName | JapaneseName ]
[ account_log=use | nouse ]
[ account_log_file_size=アクセスログファイルサイズ ]
[ bib_ts=BIB | BIB2 | nouse ]
[ max_version=最大バージョン数 ]
[ access_check=use | nouse ]
[ MailConnection=GroupMail | nouse ]
[ MailUserID=メールID ]
[ Replica_TS_regist=auto | manual ]
[ replica_log_file_size=文書配布ログファイルのサイズ ]
[ doc_owner_perm=文書の所有者アクセス権の初期値 | nouse ]
[ doc_group_perm=文書のグループアクセス権の初期値 | nouse ]
[ doc_everyone_perm=文書の全ユーザアクセス権の初期値 | nouse ]
[ doc_access_option=use | nouse ]
[ TsCheck=use | nouse ]
[ ViewCreatePerm=Administrator | Everyone ]
[ InheritMVLlink=Inherit | Ignore | Custom ]
[ DocCompress=use | nouse ]
[ ReplicaCompressSend=use | nouse ]
[ UtilityCertification=yes | no ]
[ LoginUserLimit=多重ログイン数 ]
[ ServerDef=File | GroupAddress ]
[ FsckDbBothCheck=use | nouse ]
```



```
[ FreezeFolderAdmin=改変禁止フォルダ管理者ユーザid ]
[ ServerID=サーバ識別子 ]
[ SyncWrite=use | nouse ]
[ ReplicaDeliveryManage=use | nouse ]
[ ExportFileDelete=use | nouse ]
[ MultiGrpAccessCtl=use | nouse ]
[ AppNotification=use | nouse ]
[ TextAutoExtract=use | nouse ]
[ DocumentNameExtensionOption=use | nouse ]
[ MoveDocInherit=use | nouse ]
[ Bib2tsExtrnlLibOption=use | nouse ]
[ TextAutoExtractTimeOut=テキスト自動抽出のタイムアウト時間 ]
[ ImportInherit=use | nouse ]
[ ExportReplicaDoc=use | nouse ]
[ UtilityTSRegist=manual | auto ]
[ ReplicaInherit=nouse | attr ]
```

オペランド

FileSharing=nouse

LAN 上でのファイル共有の方法を記述します。「nouse」を指定してください。

UserConfirmation=Local | GroupAddress

ユーザ情報の管理方法を記述します。

- Local

UNIX のファイル (/etc/passwd 及び /etc/group) のユーザ情報を利用する場合に記述します。

- GroupAddress

Groupmax Address で一元管理している、Groupmax 共通のユーザ情報を利用する場合に記述します。

System_Administrator=Document Manager 管理者ユーザ名

Document Manager 管理者のユーザ名を指定します。System_Administrator 句を省略した場合は、「system」が仮定されます。なお、指定するユーザ名は、利用するユーザ情報の種類に応じて次のどちらかに設定されていなければなりません。

- Groupmax Address のユーザ情報

Groupmax 共通のユーザ情報を利用する場合に記述します。

- /etc/passwd ファイル

UNIX のユーザ情報を利用する場合に記述します。

SessionTimeOut= セッションのタイムアウト時間

ログインユーザが一定時間操作しない場合にセッションをキャンセルする監視時間を分単位で記述します。時間は 10 ~ 120 の符号なし整数で指定します。時間を省略した場合は、時間監視をしません。

TransportTimeOut= ファイル転送中のセグメント受信監視時間

クライアントからファイル転送中の後続セグメントの送受信を受け付けなかった場合にセッションを強制的にキャンセルする監視時間を秒単位で指定します。

5. Document Manager の環境設定

指定できる範囲は 60 ~ 600 です。省略した場合は、60 が仮定されます。

DocCreatorName=LoginName|NickName|JapaneseName

オブジェクトを作成した場合に、作成者として登録される情報を記述します。ただしこの指定は、UserConfirmation=GroupAddress の場合だけ有効です。

- LoginName
オブジェクトの作成者をログインユーザ名にする場合に記述します。
- NickName
オブジェクトの作成者をニックネームにする場合に記述します。
- JapaneseName
オブジェクトの作成者を日本語名にする場合に記述します。

account_log=use|nouse

アクセスログの取得の有無を記述します。

- use
アクセスログを取得する場合に記述します。
- nouse
アクセスログを取得しない場合に記述します。

account_log_file_size= アクセスログファイルサイズ

アクセスログを出力するファイルのサイズをメガバイト単位で指定します。出力先のファイルは次のとおりです。

- /usr/infoshare/spool/aclog
- /usr/infoshare/spool/aclog.bak

サイズは 1 ~ 99 の符号なし整数で指定します。サイズを省略した場合は、1 が仮定されます。ただし、この指定は、account_log=use の場合だけ有効です。

bib_ts=BIB|BIB2|nouse

Document Manager と全文検索サーバを連携した、全文検索の使用の有無を記述します。

- BIB
全文検索サーバとして Bibliotheca/TS と連携して、全文検索をする場合に記述します。また、Document Manager Version2.0 以前で、既に bib_ts=use と記述している場合は bib_ts=BIB と同じ意味になります。
- BIB2
全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch と連携して、全文検索をする場合に記述します。
- nouse

全文検索サーバを連携しない場合に記述します。

max_version= 最大バージョン数

サーバで管理する一般文書のバージョンの数を記述します。

- 最大バージョン数

一般文書及び文書ひな形一つ当たりのバージョンの最大値を指定します。最大バージョン数は 0, 又は 2 から 99 まで記述できます。最大バージョン数を省略した場合及び 1 を指定した場合は, 2 が仮定されます。また, 0 を指定した場合は, システム環境が許すかぎりバージョン数は制限されません。

`access_check=use|nouse`

オブジェクトを操作するとき, クライアントで設定したアクセス権を有効にするか無効にするかを記述します。ただし, ログイン時のユーザ ID の認証は対象になりません。

- use
クライアントで設定したアクセス権を有効にします。
- nouse
クライアントで設定したアクセス権をすべて無効にします。したがって nouse と記述すると, アクセス権の有無に関係なくオブジェクトを操作できません。

`MailConnection=GroupMail|nouse`

文書配布機能を使用してエクスポートファイルを配布先サーバに配布するときに, Groupmax Mail を使用するかどうかを記述します。MailConnection 句は, 配布元及び配布先の両方のサーバで設定します。

- GroupMail
エクスポートファイルの配布に Groupmax Mail を使用する場合に記述します。
- nouse
文書配布機能を使用しない場合, 又はメールシステムを使用しないでエクスポートファイルを配布する場合に記述します。
なお, この指定をした場合, 文書配布対象グループに設定されている配布先サーバの情報は, すべて無効になります。

`MailUserID= メール ID`

文書配布機能を使用して Groupmax Mail によって一般文書を配布する場合, 文書配布送受信デーモンが Groupmax Mail にログインするときのユーザ ID を指定します。ユーザ ID には, 必ず文書配布機能専用の ID を指定してください (ここで指定した ID に対する, 文書配布関連以外のメール文書はすべて削除されます)。

指定するユーザ ID は, Groupmax Mail に登録されていなければなりません。また, ユーザ ID として ' _ ' は, 使用できません。

MailConnection=GroupMail の場合, MailUserID 句は, 配布元及び配布先の両方のサーバで必ず指定しなければなりません。

`Replica_TS_regist=auto|manual`

文書配布機能を使用して一般文書と一緒にテキストファイルを配布する場合に, 配布先サーバでのテキストファイルの登録方法を記述します。

Replica_TS_regist 句は, 配布先サーバで設定します。

5. Document Manager の環境設定

- auto

テキストファイルを自動的に全文検索サーバへ登録する場合に記述します。
テキストファイルの登録先は、TS 管理ファイル (/usr/infoshare/etc/
bibts.config) の先頭に記述されているテキストデータベースになります。
なお、この指定をした場合、文書配布機能で配布されたテキストファイルだけではなく、全文検索サーバに未登録のテキストファイルがすべて登録されるので注意してください。

- manual

テキストファイルを自動的に全文検索サーバへ登録しない場合に記述します。

replica_log_file_size= 文書配布ログファイルのサイズ

文書配布機能によって一般文書を配布したときにログが出力される、文書配布ログファイルのサイズをメガバイト単位で指定します。指定できる範囲は、1 から 99 までです。省略した場合は、1 が仮定されます。

replica_log_file_size 句は、配布元及び配布先の両方のサーバで設定します。

doc_owner_perm= 文書の所有者アクセス権の初期値 |nouse

一般文書を作成したときに、一般文書の所有者アクセス権の初期値をどのように設定するかを記述します。

- 文書の所有者アクセス権の初期値

一般文書の所有者アクセス権を、一般文書が属するフォルダから継承しない場合に、アクセス権の初期値を指定します。アクセス権の初期値は、次に示す半角の <英小文字> を並べて記述します。

r : 初期値として、読み出し権を与えます。

w : 初期値として、書き込み権を与えます。

e : 初期値として、削除権を与えます。

n : 初期値として、アクセス権を与えません。この指定は、単独で記述します。ほかのアクセス権の指定と並べて記述することはできません。

(例) 一般文書の所有者アクセス権の初期値として、読み出し権及び書き込み権を設定する場合

```
doc_owner_perm=rw
```

- nouse

一般文書の所有者アクセス権を、一般文書が属するフォルダから継承する場合に記述します。

doc_group_perm= 文書のグループアクセス権の初期値 |nouse

一般文書を作成したときに、一般文書のグループアクセス権の初期値をどのように設定するかを記述します。

- 文書のグループアクセス権の初期値

一般文書のグループアクセス権を、一般文書が属するフォルダから継承しない場合に、アクセス権の初期値を指定します。ただし、一般文書が属するフォルダにグループアクセス権が設定されていない場合は、この指定は無効です。アクセス権の初期値は、次に示す半角の <英小文字> を並べて記述し

ます。

r：初期値として、読み出し権を与えます。

w：初期値として、書き込み権を与えます。

e：初期値として、削除権を与えます。

n：初期値として、アクセス権を与えません。この指定は、単独で記述します。ほかのアクセス権の指定と並べて記述することはできません。

(例) 一般文書のグループアクセス権の初期値として、読み出し権及び書き込み権を設定する場合

```
doc_group_perm=rw
```

- nouse

一般文書のグループアクセス権を、一般文書が属するフォルダから継承する場合に記述します。

doc_everyone_perm= 文書の全ユーザアクセス権の初期値 |nouse

一般文書を作成したときに、一般文書の全ユーザアクセス権の初期値をどのように設定するかを記述します。

- 文書の全ユーザアクセス権の初期値

一般文書の全ユーザアクセス権を、一般文書が属するフォルダから継承しない場合に、アクセス権の初期値を指定します。アクセス権の初期値は、次に示す半角の<英小文字>を並べて記述します。

r：初期値として、読み出し権を与えます。

w：初期値として、書き込み権を与えます。

e：初期値として、削除権を与えます。

n：初期値として、アクセス権を与えません。この指定は、単独で記述します。ほかのアクセス権の指定と並べて記述することはできません。

(例) 一般文書の全ユーザアクセス権の初期値として、読み出し権及び書き込み権を設定する場合

```
doc_everyone_perm=rw
```

- nouse

一般文書の全ユーザアクセス権を、一般文書が属するフォルダから継承する場合に記述します。

doc_access_option=use|nouse

分類索引検索時に、拡張文書参照モードで一般文書を検索するかどうかを記述します。

- use

分類索引検索時に、拡張文書参照モードで一般文書を検索します。

- nouse

分類索引検索時に、拡張文書参照モードで一般文書を検索しません。

TsCheck=use|nouse

5. Document Manager の環境設定

全文検索をするときに一般文書データベースの属性の全文検索情報をチェックする場合に指定します。

- use
全文検索情報が設定されていない一般文書データベースがある場合は、全文検索時にエラーとする場合に指定します。
- nouse
全文検索情報が設定されていない一般文書データベースがあっても、全文検索を続行する場合に指定します。なお、デフォルトは「nouse」です。nouseを指定して、検索対象のすべての一般文書データベースに全文検索情報が設定されていない場合、検索結果の件数は0件になります。

ViewCreatePerm=Administrator|Everyone

最上位分類を作成できるユーザの種類を指定します。

- Administrator
最上位分類を作成するユーザを Document Manager 管理者だけに限定する場合に指定します。
- Everyone
すべてのユーザに最上位分類を作成できる権限を与える場合に指定します。

InheritMVILink=Inherit|Ignore|Custom

文書を複写するときに分類索引へのリンクを複写するかどうかを指定します。

- Inherit
文書を複写するときに、分類索引へのリンクを複写します。
- Ignore
文書を複写するときに、分類索引へのリンクを複写しません。
- Custom
文書を複写するときに、分類索引へのリンクを複写するかどうかはクライアントの設定に依存します。

DocCompress=use|nouse

文書ファイルを圧縮するかどうかを指定します。

- use
文書ファイルを圧縮します。
- nouse
文書ファイルを圧縮しません。

ReplicaCompressSend=use|nouse

文書配布時に、文書ファイルを圧縮するかどうかを指定します。

- use
文書配布時に、文書ファイルを圧縮します。
- nouse
文書配布時に、文書ファイルを圧縮しません。

UtilityCertification=yes|no

ユーティリティ実行時に Document Manager 管理者のパスワードチェックの入力を必要とするかどうかを指定します。

- yes
ユーティリティ実行時に Document Manager 管理者のパスワードチェックの入力を必要とします。
- no
ユーティリティ実行時に Document Manager 管理者のパスワードチェックの入力を必要としません。

LoginUserLimit= 多重ログイン数

サーバで管理する同一ユーザのログインできる数を記述します。

多重ログイン数

同一ユーザがログインできる数を指定します。多重ログイン数は 1 から 10 まで記述できます。多重ログイン数を省略した場合、ログインの数は制限されません。なお、Document Manager 管理者及びゲストログインの場合は、ログインの数は制限されません。

ServerDef=File|GroupAddress

文書配布機能使用時に、連携するサーバの情報を Groupmax Address での定義を利用するか連携サーバ設定ファイルを使用するかどうかを指定します。

- File
連携サーバ設定ファイルを定義して連携するサーバの情報を使用します。
- GroupAddress
Groupmax Address の Document Manager サーバ情報を定義して、連携するサーバの情報を使用します。

FsckDbBothCheck=use|nouse

ファイル整合性ユーティリティで、文書実体ファイルとオブジェクトサーバとの整合をとるときの実行モードを指定します。

- use
「オブジェクトサーバ上に属性がなく、文書実体ファイルはある不整合のチェック」及び「文書実体ファイルが存在しないのに、属性がオブジェクトサーバ上に存在する不整合のチェック」をします。
- nouse
「オブジェクトサーバ上に属性がなく、文書実体ファイルはある不整合のチェック」だけをします。

FreezeFolderAdmin= 改変禁止フォルダ管理者ユーザ ID

改変禁止フォルダの管理者を指定します。

ServerID= サーバ識別子

文書配布元サーバを識別する ID 又は文書配布元サーバのホスト名を 8 バイト以内で指定します。設定されていない場合はホスト名が使用されます。

SyncWrite=use|nouse

5. Document Manager の環境設定

Document Manager のデータ更新時に、データを格納するディスクに同期書き込みを行うかどうかを指定します。同期書き込みを行うと、データ更新時の信頼性が高くなります。

- use
同期書き込みを行います。
- nouse
同期書き込みを行いません。

ReplicaDeliveryManage=use|nouse

文書の配布状態管理機能を使用するかどうかを指定します。文書の配布状態管理機能を使用すると、文書の配布状態表示ユティリティによる配布状態の表示、文書の配布状態表示ユティリティによる文書の再配布、及び ExportFileDelete オプションの指定によるエクスポートファイルの自動削除を行うことができます。なお、文書の配布状態管理機能を使用する場合には、メール連携を行う必要があります。

- use
文書の配布状態管理機能を使用します。
- nouse
文書の配布状態管理機能を使用しません。

ExportFileDelete=use|nouse

文書の配布状態管理機能を使用する場合に、正常に配布が完了したエクスポートファイルを自動で削除するかどうかを指定します。エクスポートファイルの自動削除機能を使用すると、ディスクの圧迫を抑止することができます。

- use
エクスポートファイルの自動削除機能を使用します。
- nouse
エクスポートファイルの自動削除機能を使用しません。

MultiGrpAccessCtl=use|nouse

アクセス権管理方法を複数グループアクセス権で行うかどうかを指定する。

- use
アクセス権管理方法を複数グループアクセス権で運用する。
- nouse
アクセス権管理方法を従来のアクセス権で運用する。

AppNotification=use|nouse

イベント通知機能を使用するかどうかを指定する。

- use
イベント通知機能を使用する。
- nouse
イベント通知機能を使用しない。

TextAutoExtract=use|nouse

テキストの自動抽出機能を使用するかどうかを指定する。

- use
テキストの自動抽出機能を使用する。
- nouse
テキストの自動抽出機能を使用しない。

DocumentNameExtensionOption=use|nouse

Document Manager に文書を登録するとき、文書名称の長さを 63 バイトから 80 バイトに拡張して使用するかどうか指定します。

- use
文書名称長を 80 バイトに拡張して使用する。
- nouse
文書名称長を 80 バイトに拡張しません。

MoveDocInherit=use|nouse

文書移動時に、移動元の文書の更新日時、更新者名の属性値を移動先文書に引き継ぐかどうかを指定します。

- use
移動先文書に引き継ぎます。
- nouse
移動先文書に引き継ぎません。

Bib2tsExtrnlLibOption=use|nouse

全文検索で OCR 拡張辞書を使用するかどうかを指定します。

- use
OCR 拡張辞書を使用します。
- nouse
OCR 拡張辞書を使用しません。

TextAutoExtractTimeOut= テキスト自動抽出のタイムアウト時間

テキスト自動抽出時のタイムアウト時間を秒単位で指定します。指定できる範囲は 5 ~ 3600 です。省略した場合はテキスト自動抽出時のタイムアウトを行いません。

ImportInherit=use|nouse

エクスポートユーティリティで抽出した文書をサーバに取り込む場合、作成日時、更新日時、更新者の属性値を抽出元から抽出先に引き継ぐかどうかを指定します。

- use
属性値を引き継ぎます。
- nouse
属性値を引き継ぎません。

ExportReplicaDoc=use|nouse

フォルダ単位のエクスポート時に配布された文書を抽出対象とするかどうかを指定します。

5. Document Manager の環境設定

本指定は抽出元サーバで指定します。

- use

配布された文書を抽出対象とします。この場合、抽出された配布文書はインポート時には配布文書としては登録されず、ローカル文書として登録されます。このため、本機能を配布文書のバックアップ取得等の目的で使用することはできません。

- nouse

配布された文書は抽出対象外とします。

UtilityTSRegist=manual|auto

配布文書又は抽出した文書をサーバに取り込む (ISimport) 場合に、テキストファイルを全文検索サーバに登録するかどうかを指定します。なお、配布文書又は抽出した文書をサーバに取り込む (ISimport) 場合にテキストファイルを全文検索サーバに登録するとき、テキストファイルを文書関連ファイルとして抽出元サーバに格納しておく必要があります。

- manual

テキストファイルを全文検索サーバに登録しません。

- auto

テキストファイルを全文検索サーバに登録します。

ReplicaInherit=nouse|attr

配布文書の登録時に、配布元文書の作成日時、更新日時、更新者名の属性値を引き継ぐかどうかを指定します。

- nouse

配布元文書の作成日時、更新日時、更新者名の属性値を引き継ぎません。

- attr

配布元文書の作成日時、更新日時、更新者名の属性値を引き継ぎます。既に配布済み文書については、配布元文書が更新されて再配布された時に引き継がれます。また、全文検索機能を使用して「UtilityTSRegist」に「manual」を指定している場合、ユティリティ (ISsync) を使用してテキストファイルを登録すると、配布文書の更新日時及び更新者名はユティリティ実行日時及び Document Manager 管理者ユーザ名になります。このため、全文検索機能を使用して配布元文書の更新日時及び更新者名を引き継ぐ場合は、「UtilityTSRegist」に「auto」を指定してください。

(c) 記述例

```
FileSharing=nouse ...1  
bib_ts=use ...2  
max_version=2 ...3
```

1. LAN 上でのファイル共有の方法を設定する
2. 全文検索サーバを連携して全文検索をする
3. サーバで管理される一般文書のバージョン数を 2 に設定する

5.7.2 文書配布機能を使用するための環境設定

ここでは、文書配布機能を使用して Groupmax Mail で文書を配布する場合の環境設定について説明します。

(1) 連携サーバ設定ファイルでの定義を基に文書を配布する場合

(a) 連携サーバ設定ファイルとは

連携サーバ設定ファイルは、文書配布機能による文書の送受信で、連携するサーバの情報を記述するファイルです。

連携サーバ設定ファイルはサンプルファイルが提供されていますので、複写して使用してください。

(b) 環境設定ファイルでの設定

連携サーバ設定ファイルに記述されたサーバに文書を配布する場合、環境設定ファイルの「文書配布用連携サーバ取得方法」に「File」を指定します。

(c) 連携サーバ設定ファイルの記述形式

連携サーバ設定ファイルの記述形式を次に示します。

格納先

/usr/infoshare/etc/sv_info

形式

サーバメール ID : サーバ識別子 : IP アドレス : 別名

オペランド

サーバメール ID

Groupmax Mail に登録している配布先サーバのユーザ ID を 8 バイト以内で指定します。

サーバ識別子

配布先サーバを限定する ID 又は配布先サーバのホスト名を 8 バイト以内で指定します。

IP アドレス

配布先サーバの IP アドレスを 15 バイト以内で指定します。

別名

配布先サーバの別名を 38 バイト以内で指定します。別名には、覚え書きとして任意の名称が付けられます。ただし、「:」は使用できません。

規則

- 指定内容に誤りがある場合は、すべての指定内容が無効になります。
- 複数のサーバを記述する場合は、1 行に 1 サーバずつ記述します。ただし、空行は入れないでください。1 サーバの情報は、80 バイト以内（改行文字を除く）で指定

5. Document Manager の環境設定

してください。

- 行の区切りは、改行文字です。
- 行の 1 文字目が「#」の場合、その行はコメント行になります。
- 各項目は省略できません。

記述例

```
host1:sv_01:195.70.135.11:IS_server1
host2:sv_02:195.70.135.12:IS_server2
```

注意事項

連携サーバ設定ファイルの内容を変更した場合、すぐにはその内容は有効になりません。変更した内容は、次回、Document Manager サーバを起動したときに有効になります。

(2) Groupmax Address での定義を基に文書を配布する場合

Groupmax Address での定義を基に、文書を配布できます。この場合、Groupmax Address に登録した Document Manager 用組織「DMSERVER」の下に定義したサーバに文書が配布されます。この場合、連携サーバ設定ファイルを定義する必要はありません。

(a) 環境設定ファイルでの設定

Groupmax Address での定義を基に文書を配布する場合、環境設定ファイルの「文書配布用連携サーバ取得方法」に「GroupAddress」を指定します。環境設定ファイルについては、「5.7.1 Document Manager の使用環境の設定」を参照してください。なお、連携サーバ設定ファイルは、`/usr/infoshare/adm/sv_info` に作成されます。

(b) サーバ一覧更新ユティリティの実行

環境設定ファイルで Groupmax Address での定義を基に文書を配布する設定をした後、サーバ一覧更新ユティリティを実行します。サーバ一覧更新ユティリティについては、「8.31 サーバ情報一覧の更新 (ISmksvls)」を参照してください。

(3) 注意事項

バージョン 02-20 以前に文書配布機能を使用していたサーバで、取得する連携サーバの情報を連携サーバ設定ファイルでの定義から Groupmax Address での定義に変更する場合は、次に示す手順が必要となります。

1. 配付先及び配布元の文書配布機能を停止する。
2. 配布元の Document Manager サーバを停止する。
3. 配布元の Document Manager サーバで環境設定ファイルの「文書配布用連携サーバ取得方法」の指定を「GroupAddress」に変更する。
4. 使用していたメールシステムユーザ ID を DMSERVER (Document Manager 用組織)

に移動する。

移動したメールシステムユーザ ID のホームサーバ名は、文書を受信する Document Manager サーバにしてください。

移動したメールシステムユーザ ID のホームサーバ名を変更した場合は、配付先サーバで文書配布対象グループを再作成してください。このとき、文書配布対象グループのホスト名は、移動したメールシステムユーザ ID のホームサーバ名を指定してください。

5. 配布元でサーバー一覧更新ユティリティの実行後、Document Manager サーバを起動する。
6. 配付先及び配布元の文書配布機能を開始する。

5.7.3 イベント通知機能を使用するための環境設定

ここでは、イベント通知機能を使用するための環境設定について説明します。

(1) イベント通知機能とは

イベント通知機能とは、あらかじめ定義しておいた事象（イベント）が発生したときに、Document Manager と連携するアプリケーションプログラム（Groupmax Agent）に対してイベントが発生したことを通知する機能です。

(2) Groupmax Agent へのイベント通知

イベント通知機能を使用すると、Document Manager データベースに新規登録、移動又は複写されるなどのイベントが発生した一般文書を監視することができます。例えば、指定されたフォルダに一般文書が追加されたときに、メールを送信したり、メッセージを表示したり又はユーザプログラムを起動したりすることができます。

(3) 環境設定

イベント通知機能を使用するには、環境設定ファイルでのイベント通知機能の項目設定とイベント通知リストファイルの作成が必要です。環境設定ファイルの設定については、「5.7.1 Document Manager の使用環境の設定」を参照してください。また、Groupmax Agent を使用して、サーバエージェントを定義、生成しておく必要があります。Groupmax Agent については、マニュアル「Groupmax Agent Version 5 システム管理者ガイド」及びマニュアル「Groupmax Agent Version 5 エージェント作成ガイド」を参照してください。

イベント通知リストファイルの作成方法は、次のとおりです。

(a) イベント通知リストファイルの格納先

`/usr/infoshare/etc/apnotify.txt`

(b) ファイル形式

イベント通知リストファイルに指定するイベントコードと形式を示します。

CRT_DOC_OBJ

クライアント、又はユーザプログラムによって、一般文書を新規作成したときにイベント通知する場合に指定します。

CRT_DOC_OBJ_UTL

一括登録ユティリティ及び文書抽出・取り込みユティリティによって一般文書を新規登録したときに、イベント通知する場合に指定します。なお、配布文書を取り込むユティリティは含みません。

CRT_DOC_OBJ_REP

文書配布機能によって一般文書を新規登録したときに、イベント通知する場合に指定します。

COPY_DOC_OBJ

クライアント又はユーザプログラムによって一般文書が複写されたときに、イベント通知する場合に指定します。

MOVE_DOC_OBJ

クライアント又はユーザプログラムによって一般文書を移動されたときに、イベント通知する場合に指定します。

MOVE_DOC_OBJ_REP

文書配布機能によって一般文書が移動後に登録されたときに、イベント通知する場合に指定します。配布元サーバで文書の移動後に文書を登録してバージョンが上がった場合、文書配布機能によって配布先サーバでも文書は移動後に登録されます。ただし、この文書は、配布対象として定義されている必要があります。

(4) 注意事項

イベント通知機能を使用している場合、関連プログラムのインストールやアンインストールは、Document Manager の停止時に行ってください。また、関連プログラムをアンインストールした場合は、イベント通知をしないように設定してください。

環境設定でイベント通知機能を使用すると定義していても、イベント通知リストファイルを作成していない場合は、この機能は使用できません。

イベントコード CRT_DOC_OBJ_UTL, CRT_DOC_OBJ_REP, MOVE_DOC_OBJ_REP をイベント通知リストファイルに指定している場合、一括登録ユティリティ、文書配布機能又は文書抽出・取り込みユティリティを使用すると、大量のイベント通知が発行されることがあります。ユティリティなどによるイベント通知を抑止したい場合は、これらのイベントコードを指定しないでください。

行末は行末コードを指定してください。また、イベントコードの前後に空白(1バイト, 2バイト)は指定できます。

行の先頭又は行の途中に # を指定すると、その行の # から行末までがコメントになります。

イベント通知リストファイルは、インストール時には作成されませんので必要に応じて作成してください。

5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定

ここでは、Document Manager とほかのアプリケーションプログラムとを連携して使用するための環境設定について説明します。

(1) AP 情報管理ファイル

AP 情報管理ファイルは、一般文書の作成や登録に使用するアプリケーションプログラムを管理するためのファイルです。AP 情報管理ファイルは、サーバ上で管理されていません。

一般文書は次のように、複数のファイルから構成されている場合があります。

メールで送信された添付ファイルなど、一つの一般文書が複数のファイルから構成される場合

全文検索サーバと連携する場合（一般文書は文書実体ファイルとテキストファイルに分割されて管理される）

サーバは、一つの一般文書が複数のファイルに分割されているとき、同じ一般文書に関連するファイルを統括して管理します。一つの一般文書に関連するファイル名は、AP 情報管理ファイルに記述しておきます。AP 情報管理ファイルに記述された同じ一般文書に関連するファイルは、作業領域に一緒に取り出されたり更新されたりします。また、編集した一般文書をサーバに登録する場合も、AP 情報管理ファイルの内容に従って登録されます。

(a) 関連ファイルの一括管理

一般文書には、実体が格納されたファイルのほかに、属性が記述されたファイルやテキストデータが抽出されたファイルなどがあります。AP 情報管理ファイルでは、一般文書に関連するこれらのファイルを一括して管理します。ファイルの種類を、次に示します。これらのファイルを使用する場合は、ファイル名などを AP 情報管理ファイルに記述しておきます。

登録用属性ファイル

一般文書の属性を記述するファイルです。

参照用属性ファイル

一般文書の属性が記述されているファイルです。オブジェクトサーバに格納されている属性を参照するために使用します。

5. Document Manager の環境設定

テキストファイル

ユーザが文書から抽出したテキストデータを格納するファイルです。全文検索サーバと連携して全文検索する場合に必要です。

文書データベース関連ファイル

一般文書データベースに登録されている文書ひな形に関連するファイルです。

文書関連ファイル

一般文書に関連する情報が記述されているファイルです。

文書データベース従属ファイル

一般文書データベースの文書ひな形を登録する時に、存在や更新時刻が一般文書データベースの更新時刻以降であることを検査するためのファイルです。

文書従属ファイル

一般文書を登録する時に、存在や更新時刻が一般文書の更新時刻以降であることを検査するファイルです。

(b) アクションの起動

「文書を開く」など、アプリケーションプログラムに対する処理を、アクションといいます。一般文書を作業領域に取り出したり、Document Manager データベースに登録したりするときなどに、どのようなアクションを実行するかを AP 情報管理ファイルに記述します。

クライアント上のほかのプログラムとは、Windows の DDE (Dynamic Data Exchange) 機能を使ってデータのやり取りをしています。この DDE 機能のどのようなメッセージをどのパスに渡すかなどの情報を AP 情報管理ファイルに記述します。

なお、アクションの内容は、一般文書データベースと一般文書それぞれに記述します。

(2) AP 情報管理ファイルの記述形式

AP 情報管理ファイルの記述形式を、次に示します。

(a) 格納先

AP 情報管理ファイルの格納先は次の通りです。

```
/usr/infoshare/etc/ap.config
```

(b) 形式

```
<AP 情報>'改行文字' [<AP 情報>'改行文字'...] ]
```

```
<AP 情報>::=<AP 識別名>:<AP 識別子>: [ <登録用属性ファイル> ]:
```

```
    [ <参照用属性ファイル> ]:
```

```
    [ <テキストファイル> ]:
```

```
    [ <文書データベース関連ファイルリスト> ]:
```


〔<文書関連ファイルリスト>〕:

〔<文書データベース従属ファイルリスト>〕:

〔<文書従属ファイルリスト>〕:

〔<文書データベースアクション定義リスト>〕:

〔<文書アクション定義リスト>〕

<AP 識別名>

AP 名を識別する文字列を、1 ~ 63 バイト以内で指定します。アプリケーションプログラムを特定しないで文書の拡張子から起動する場合（フリーアクション）も、任意の名称（例えば Free）で記述してください。

- AP 名は、AP 情報管理ファイル内で重複しないようにしてください。
- 文字列には 1 バイトコード（ただし、空白「0x20」及び制御コード「0x00 ~ 0x1F, 0x7F ~ 0xFF」を除く）、2 バイトコード（ただし、空白を除く）を使用できます。

<AP 識別子>

AP 情報を示す識別子を、1 ~ 60000 までの符号なし整数で指定します。

- AP 識別子は、AP 情報管理ファイル内で重複しないようにしてください。
- AP 識別子 0 は、システムで予約されているため使用できません。
- AP 識別子 60000 は、あらかじめ定義されているフリーアクションのデフォルトとして使用されています。

<登録用属性ファイル>

登録用属性ファイルの名称を指定します。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字> 及び外字は使用できません。

<参照用属性ファイル>

参照用属性ファイルの名称を指定します。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字> 及び外字は使用できません。

<テキストファイル>

全文検索サーバのテキストデータベースに登録する、テキストファイルの名称を指定します。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字> 及び外字は使用できません。

<文書データベース関連ファイルリスト>

<文書データベース関連ファイルリスト> :: =

{ <文書データベース関連ファイル>

```
[, <文書データベース関連ファイル> ... ]  
| %ALL [, <文書データベース関連ファイル> ... ]}
```

<文書データベース関連ファイル>

一般文書データベースに登録されている文書ひな形と共にサーバに格納されるファイルの名称を指定します。

%ALL

Windows の形式に従ったすべてのファイルを対象とする場合に指定します。ただし、テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルは、%ALL の対象に含まれません。テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルを対象としたい場合は、記述形式に従ってそれぞれのファイル名を指定してください。

この指定をした場合、クライアントからサーバへの文書の保存時に、「起動ファイル」を指定しない運用ができます。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字>及び外字は使用できません。

<文書関連ファイルリスト>

<文書関連ファイルリスト> :: =

```
{ <文書関連ファイル> [, <文書関連ファイル> ... ]  
| %ALL [, <文書関連ファイル> ... ]}
```

<文書関連ファイル>

一般文書と共に格納されるファイルの名称を指定します。

%ALL

Windows の形式に従ったすべてのファイルを対象とする場合に指定します。ただし、テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルは、%ALL の対象に含まれません。テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルを対象としたい場合は、記述形式に従ってそれぞれのファイル名を指定してください。

この指定をした場合、クライアントからサーバへの一般文書の保存時に、「起動ファイル」を指定しない運用ができます。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字>及び外字は使用できません。

<文書データベース従属ファイルリスト>

<文書データベース従属ファイルリスト> :: =

```
{ <文書データベース従属ファイル>  
[, <文書データベース従属ファイル> ... ]  
| %ALL [, <文書データベース従属ファイル> ... ]}
```

<文書データベース従属ファイル>

テキストファイル名及び文書データベース関連ファイルリスト内のファイル名を指定します。ここで指定したファイル名は、一般文書を登録、又は作業領域

への取り出し又は削除時に、存在や更新日時が検査されます。

%ALL

Windows の形式に従ったすべてのファイルを対象とする場合に指定します。ただし、テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルは、%ALL の対象に含まれません。テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルを対象としたい場合は、記述形式に従ってそれぞれのファイル名を指定してください。

この指定をした場合、クライアントからサーバへの文書の保存時に、「起動ファイル」を指定しない運用ができます。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字>及び外字は使用できません。

<文書従属ファイルリスト>

```
<文書従属ファイルリスト> ::=
{ <文書従属ファイル> [, <文書従属ファイル> ... ]
| %ALL {, <文書従属ファイル> ... } }
```

<文書従属ファイル>

テキストファイル名及び文書関連ファイルリスト内のファイル名を指定します。一般文書を作業領域に取り出したり、作業領域から削除する時に、ここで指定したファイル名の存在や更新日時が検査されます。

%ALL

Windows の形式に従ったすべてのファイルを対象とする場合に指定します。ただし、テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルは、%ALL の対象に含まれません。テキストファイル、参照用属性ファイル及び登録用属性ファイルを対象としたい場合は、記述形式に従ってそれぞれのファイル名を指定してください。

この指定をした場合、クライアントからサーバへの一般文書の保存時に、「起動ファイル」を指定しない運用ができます。

- ファイル名の形式は、Windows の形式に従ってください。
- ファイル名には、「¥」、「/」、<英大文字>及び外字は使用できません。

<文書データベースアクション定義リスト>

```
<文書データベースアクション定義リスト> ::=
{ <アクション定義> [, <アクション定義> ] }
```

<文書アクション定義リスト>

```
<文書アクション定義リスト> ::=
{ <アクション定義> [, <アクション定義> ] }
<アクション定義> ::=
"<アクション名>"=<アクション情報><アクション実行位置>
"<アクション名>"
```

実行するアクション名を識別するための文字列を、1 ~ 63 バイト以内で指定します。アクション名は重複しないようにしてください。アクション名に指定できる文字は、次のとおりです。

- 1 バイトコードの文字（ただし、空白（0x20）及び制御コード（0x00 ~ 0x1F, 0x7F ~ 0xFF）を除く）
- 2 バイトコードの文字（ただし、空白を除く）

<アクション情報>

<アクション情報> ::= { "<コマンド>" | "<DDE>" | "<フリーアクション>" }

<コマンド>

実行するコマンドを表す文字列を、1 ~ 255 バイト以内で指定します。

- 文字列には、文書実体ファイル名などをマクロで指定して、対応する文字列に変換できます。したがって、文字列の長さは、このマクロで変換した後の値になります。文字列内で指定できるマクロは、次のとおりです。
%wf::= クライアントの作業領域上の文書実体ファイル、又は文書ひな形ファイルのフルパス名に変換されます。
%uf::= サーバ上の作業領域上の文書実体ファイル名又は文書ひな形ファイルのフルパス名に変換されます。
%IS_object_name:: = 文書名に変換されます。
- 制御コード（0x00 ~ 0x1f 及び 0x7f）は使用できません。
- 使用できる文字及び内容は、コマンドを実行するオペレーティングシステムの規則に従ってください。
- コマンドの文字列に「"」を使用する場合は、「%"」と指定してください。
- コマンドの文字列に「%」を使用する場合は、「%%」と指定してください。

<DDE>

<DDE> ::= { <アプリケーション名> | <トピック名> } '0x20' <アイテム文字列>

<アプリケーション名> <トピック名> <アイテム文字列>

DDE での情報を表す文字列を指定します。文字列の長さは、合計で 1 ~ 255 バイト以内で指定してください。詳細については、Word 又は Excel などのアプリケーションプログラムのマニュアルを参照してください。

- 文字列には、文書実体ファイル名などをマクロで指定して、対応する文字列に変換できます。したがって、文字列の長さは、このマクロで変換した後の値になります。文字列内で指定できるマクロは、<コマンド>のマクロと同じです。
- 制御コード（0x00 ~ 0x1f 及び 0x7f）は使用できません。
- 使用できる文字及び内容は、コマンドを実行するオペレーティングシステムの規則に従ってください。
- コマンドの文字列に「"」を使用する場合は、「%"」と指定してください。
- コマンドの文字列に「%」を使用する場合は、「%%」と指定してください。

< フリーアクション >

< フリーアクション > ::= { < オープンフリーアクション >
| < 印刷フリーアクション > }

フリーアクションは、アクション実行で起動するアプリケーションプログラムを特定しないで、Document Manager に自動的に選択させる場合に指定します。この場合、Document Manager は、文書実体ファイルの拡張子を基にアプリケーションプログラムを起動します。

起動するアプリケーションプログラムは、Windows の登録情報データベースに登録されている必要があります。

< オープンフリーアクション >

< オープンフリーアクション > ::= .open %wf

アプリケーションプログラムをオープンする場合に指定します。

< 印刷フリーアクション >

< 印刷フリーアクション > ::= .print %wf

アプリケーションプログラムで印刷処理する場合に指定します。

各フリーアクションの文字列には、文書実体ファイル名などをマクロで指定して、対応する文字列に変換できます。したがって、文字列の長さは、このマクロで変換した後の値になります。文字列内で指定できるマクロは、次のとおりです。

%wf ::= クライアントの作業領域の文書実体ファイル又は文書ひな形ファイルのフルパス名に変換されます。

< アクション実行位置 >

< アクション実行位置 > ::= on-client

アクションをクライアントで実行する場合に指定します。

(c) 注意事項

ファイル名に「*」(0x2a) が記述された場合、「*」で記述された部分は、文書ひな形ファイル名又は文書実体ファイル名の拡張子を除いた部分に変換されます。

行の先頭に「#」(0x23) を記述すると、その行は行端までコメントになります。

改行文字 (0x0a) の前に「¥」(0x5c) を記述すると、次行に内容が継続されます。

AP 情報管理ファイルに「:」(0x3a) 又は「,」(0x2c) を記述する場合は、「¥:」又は「¥,」と記述してください。

AP 情報管理ファイルの記述に誤りがあった場合の動作は保証されません。

一般文書は一般文書データベースで保持される AP 識別子に基づいて管理されています。したがって、AP 識別子に関する情報を削除したり変更したりすると、正常に動作しなくなる場合があります。AP 識別子に関する情報を修正する場合は、すべてのユーザの作業領域からすべての文書を削除し、更に全文検索サーバに対する未登録文書がないことを確認してから実施してください。

(d) 記述例

AP 情報管理ファイルの記述例を示します。

Word の記述例

```
WORD:1:::*.txt:::*.txt:¥
"OPEN"="WINWORD|SYSTEM[FILEOPEN .NAME=%"wf%"] "on-client:¥
"OPEN"="WINWORD|SYSTEM[FILEOPEN .NAME=%"wf%"] "on-client
```

(意味)

WORD...AP 識別名

1...AP 識別子

次のファイルは省略されています。

- ・登録用属性ファイル
- ・参照用属性ファイル

.txt...テキストファイル (の部分は文書名の拡張子を除いた部分に置き換える)

次のファイルは省略されています。

- ・文書データベース関連ファイル
- ・文書関連ファイル
- ・文書データベース従属ファイル

.txt...文書従属ファイル (の部分は文書名の拡張子を除いた部分に置き換える)

OPEN...アクション名

WINWORD...アプリケーション名

SYSTEM...トピック名

FILEOPEN .NAME=%"wf%"...アイテム文字列 (%wf は文書実体ファイル名に置き換える)

on-client...アクション実行位置

(アクション名以下は、一般文書データベースと一般文書に対してそれぞれ定義する)

Excel の記述例

```
Excel:3:::¥
"OPEN"="EXCEL|SYSTEM[OPEN(%"wf%")] "on-client:¥
"OPEN"="EXCEL|SYSTEM[OPEN(%"wf%")] "on-client
```

文書の関連ファイルの数を特定しないで、かつ文書の拡張子から起動する場合 (フリーアクション) の記述例

```
Free-multi:11:::%ALL:%ALL:::¥
"OPEN"=".open %wf" on-client,¥
"PRINT"=".print %wf" on-client:¥
"OPEN"=".open %wf" on-client,¥
"PRINT"=".print %wf" on-client
```

(意味)

Free-multi...AP 識別名

11...AP 識別子

次のファイルは省略されています。

- ・登録用属性ファイル

- ・参照用属性ファイル
- ・テキストファイル
- ・文書データベース従属ファイル
- ・文書従属ファイル

OPEN...アクション名

.open %wf...オープンフリーアクション（%wf は文書実体ファイル名に置き換える）

on-client...アクション実行位置

PRINT...アクション名

.print %wf...印刷フリーアクション（%wf は文書実体ファイル名に置き換える）

on-client...アクション実行位置

（オープンフリーアクション及び印刷フリーアクションは、一般文書データベースと一般文書に対してそれぞれ定義する）

文書の関連ファイルの数を特定しないで、文書の拡張子から起動する場合（フリーアクション）で、かつテキストファイルを全文検索対象とする場合の記述例

```
Free-multi-with-TS:12::*.txt:%ALL:%ALL::*.txt:¥
```

```
"OPEN"=".open %wf" on-client,¥
```

```
"PRINT"=".print %wf" on-client:¥
```

```
"OPEN"=".open %wf" on-client,¥
```

```
"PRINT"=".print %wf" on-client
```

（意味）

Free-multi-with-TS...AP 識別名

12...AP 識別子

次のファイルは省略されています。

- ・登録用属性ファイル
- ・参照用属性ファイル
- ・文書データベース従属ファイル

OPEN...アクション名

.open %wf...オープンフリーアクション（%wf は文書実体ファイル名に置き換える）

on-client...アクション実行位置

PRINT...アクション名

.print %wf...印刷フリーアクション（%wf は文書実体ファイル名に置き換える）

on-client...アクション実行位置

（オープンフリーアクション及び印刷フリーアクションは、一般文書データベースと一般文書に対してそれぞれ定義する）

5.7.5 Groupmax Address を使用しない場合の環境設定

ここでは、Groupmax Address を使用しない場合の環境設定について説明します。なお、Groupmax 全体でユーザ情報を一元管理する場合、この環境設定は不要です。

5. Document Manager の環境設定

(1) ユーザの登録

Document Manager を使用するユーザを、UNIX のファイルに登録します。なお、Document Manager 管理者¹ のユーザ名は、環境設定ファイルで任意に変更できます。

ユーザの登録方法及び UNIX のファイルの記述形式については、「付録 C Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録」を参照してください。

(2) グループの登録

Document Manager を使用するユーザのグループを、UNIX のファイルに登録します。

グループの登録方法及び UNIX のファイルの記述形式については、「付録 C Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録」を参照してください。

(3) パスワードの登録

UNIX のファイルに登録したユーザにパスワードを設定します。パスワードの設定は、UNIX の `passwd` コマンドで設定します。

1. Document Manager の起動後に Document Manager データベースを管理するユーザです。「system」は Document Manager 管理者のユーザ名のデフォルトです。

5.8 全文検索サーバと連携するための環境設定

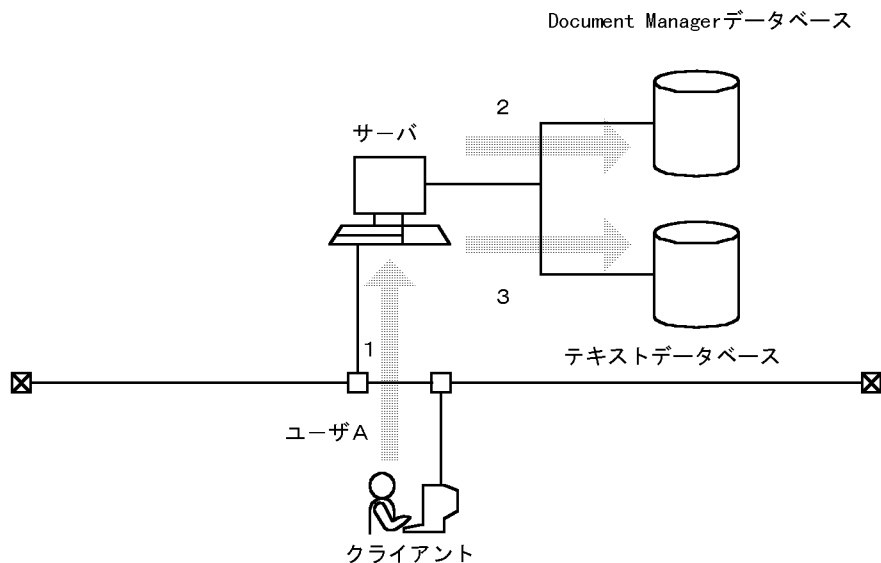
この節では、全文検索サーバと連携するときの環境設定の方法について説明します。

5.8.1 Document Manager の文書と全文検索サーバとの関係

全文検索サーバと連携すると、文書に含まれる単語をキーワードにした全文検索ができます。全文検索するには、全文検索サーバにテキストデータベースを作成します。このテキストデータベースには、文書から抽出したテキストデータを基に、全文検索するための情報を格納します。なお、全文検索できる文書は、一般文書だけです。

Document Manager と全文検索サーバの関係を、図 5-5 に示します。なお、図 5-5 では、Document Manager のクライアントから全文検索サーバに文書を登録するときの動きを示します。

図 5-5 Document Manager と全文検索サーバの関係（文書を登録する場合）



- 1 クライアントから文書を登録する要求がサーバに出される
- 2 Document Manager データベースにアクセスして、該当する文書を探して登録する
(Document Manager データベースには、文書の実体が格納される)
- 3 テキストデータベースにアクセスして、該当する文書を探して登録する
(テキストデータベースには、抽出したテキストデータや全文検索するための情報が格納される)

5.8.2 Document Manager の環境への登録

全文検索サーバと連携するための環境設定の手順を次に示します。

1. 環境設定ファイルへの登録
2. TS 管理ファイルへの登録
3. AP 情報管理ファイルへの登録
4. 文書データベースの属性値の設定

(1) 環境設定ファイルへの登録

環境設定ファイルは、サーバの動作環境を定義するファイルです。全文検索サーバと連携する場合は、環境設定ファイルに、全文検索サーバを使用することを定義します。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

(2) TS 管理ファイルへの登録

(a) TS 管理ファイルとは

TS 管理ファイルは、全文検索に使用するテキストデータベースの情報を管理します。TS 管理ファイルはサンプルファイルが提供されていますので、複写して使用してください。

(b) TS 管理ファイルの格納先と記述形式

TS 管理ファイルの格納先と記述形式について説明します。

格納先

/usr/infoshare/etc/bibts.config

形式

<TS 管理ファイル>::=<TS 情報>'0x0a'

<TS 情報>::=<TS 管理情報名>:<TS 情報 ID>:<Infoshare 識別子>:<全文検索サーバ名>:<テキストデータベース名>

指定内容

<TS 管理情報名>

TS 管理情報を識別するための名称を、1 ~ 63 バイトで指定します。TS 管理情報とは、全文検索サーバのテキストデータベースを表します。

文字列の形式は、次のとおりです。

- 1 バイトコードの文字（ただし、制御コード「0x00 ~ 0x20, 0x7F ~ 0xFF」を除く）
- 2 バイトコードの文字（ただし、空白を除く）

<TS 情報 ID>

TS 管理情報を示す識別子を、1 ~ 60000 の符号なし整数で指定します。

0 は TS 管理情報がないこととしてシステムで予約されているため、使用できま

せん。

<Infoshare 識別子 >

全文検索サーバとして Bibliotheca/TS と連携する場合は、テキストデータベースに登録してある Infoshare 識別子を指定します。Infoshare 識別子は、<英数字>の1～8バイトで指定します。

Infoshare 識別子は、Bibliotheca/TS が、テキストデータベースを使用するユーザを検査するために使用します。したがって、登録されていない識別子を指定すると、Bibliotheca/TS を使用できません。

全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch と連携する場合は、「IS」と指定してください。ただし、全文検索サーバを Bibliotheca/TS から Bibliotheca2 TextSearch に移行する場合は、Bibliotheca/TS と連携していたときの Infoshare 識別子をそのまま御使用ください。

<全文検索サーバ名 >

連携する全文検索サーバのホスト名称を、1～255バイトで指定します。

<テキストデータベース名 >

全文検索サーバに指定したテキストデータベースの名称を、1～36バイトで指定します。

注意事項

- TS 管理ファイルに記述される <TS 情報 ID> は、文書の属性として格納されます。また、この <TS 情報 ID> を基にして、全文検索が実行されます。したがって、TS 管理ファイルの <TS 情報 ID> を削除したり、<テキストデータベース名>を文書の登録後に変更した場合は、正常に検索されないことがあります。
- 一つの全文検索サーバを共有する複数の Document Manager サーバがある場合、TS 管理ファイルは、同じ内容で記述してください。
- 行の先頭に「#」(0x23)を記述すると、その行の行端までコメントになります。
- 行末(0x0a)の前に「¥」(0x5c)を記述すると、次行に内容が継続されます。
- 「:」(0x3a)又は「,」(0x2c)を記述する場合は、「¥:」又は「¥,」と記述してください。
- 全文検索サーバを使用する場合、Document Manager サーバがインストールされているマシンとは、別のマシンに構築した全文検索サーバと連携できます。複数の Document Manager サーバから、一つの全文検索サーバを使用する場合、各 Document Manager サーバのノード ID が重複しないように設定してください。
注 ノード ID は、オブジェクトサーバのデータベースを識別するために使用する ID です。オブジェクトサーバの初期化コマンド(xodinit)を実行するときに指定します。ノード ID についての詳細は、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

記述例

TS 管理ファイルの記述例を示します。

```
TSDB1:1:IS:ServerX:TSDB1
```

(3) AP 情報管理ファイルへの登録

全文検索サーバのテキストデータベースには、テキストデータを登録して全文検索しています。テキストデータを格納するためのテキストファイルの名称は、AP 情報管理ファイルに定義しておきます。

また、文書配布機能で文書と一緒にテキストファイルを配布する場合は、文書関連ファイルにもテキストファイルの名称を定義しておきます。この定義がない場合、テキストファイルは全文検索サーバへの登録後に Document Manager データベースから削除されます。そのため、テキストファイルを文書と一緒に配布できません。

なお、この定義をする前に作成した文書は、テキストファイルが Document Manager データベースから削除されています。したがって、テキストファイルを再度作成する必要があります。

AP 情報管理ファイルについては、「5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定」を参照してください。

(4) 一般文書データベースの属性値の設定

全文検索の対象にする一般文書データベースに属性値を設定します。属性値の設定は、Groupmax Integrated Desktop 又は Document Manager Client で行います。

Groupmax Integrated Desktop から操作する場合

全文検索の対象にする一般文書データベースのプロパティダイアログボックスで設定します。

- 全文検索データベースに「1 - (テキストデータベース名)」を設定する
- アプリケーション名に、(3) で定義した AP 情報管理ファイルのアプリケーションを選択する。なお、標準で提供される「12 - Free-multi-with-TS」も使用できます。

Document Manager Client から操作する場合

全文検索の対象にする一般文書データベースの「文書 DB 属性」ダイアログボックスで設定します。

- TS サーバ DB 名に「1 - (テキストデータベース名)」を設定する
- アプリケーション名に、(3) で定義した AP 情報管理ファイルのアプリケーションを選択する。なお、標準で提供される「12 - Free-multi-with-TS」も使用できます。

複数の一般文書データベースを対象にして全文検索する場合、この属性値が設定されていない一般文書データベースが一つでもあると、全文検索できないことがあります。なお、環境設定ファイルの TsCheck オプションを nouse で指定すると、属性に関係なく全文検索できます。環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

全文検索する場合は、システムで提供しているシステム文書データベースの属性値を設定し、以降一般文書データベースでの設定を変えないで使用してください。システ

ム文書データベースへの属性の設定の方法については、「5.9 Document Manager の環境の初期化」を参照してください。

(5) 注意事項

全文検索サーバと連携する場合の注意事項を示します。

ほかのユーザが次の処理をしているときは、全文検索サーバへの文書の登録及び全文検索はできません。

- テキストデータベースの詰め替え（コンデンス）
- テキストデータベースの再構成

全文検索サーバに文書を登録する時、全文検索サーバに障害が発生した場合は、登録しようとした文書を TS 未登録の文書とします。

テキストデータベースに登録できるテキストファイルの最大サイズは、982,974 バイトです。

5.8.3 全文検索サーバでの環境設定

Document Manager と全文検索サーバを連携する場合、全文検索サーバでの環境設定が必要です。環境の設定方法は、使用する全文検索サーバによって異なります。全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用する場合は、マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」を参照して設定方法を確認してください。全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用する場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照して設定方法を確認してください。

環境設定の方法を次に示します。

(1) テキストデータベースの作成

Document Manager で使用するテキストデータベースを、全文検索サーバに作成します。テキストデータベースの作成方法を次に示します。

(a) Bibliotheca/TS を使用する場合

DB 構造定義ファイルへの定義

全文検索サーバの DB 構造定義ファイルに、Document Manager 用のテキストデータベースを定義します。DB 構造定義ファイルは、テキストデータベースの構造を定義するためのファイルです。

記述例を次に示します。

```
db テキストデータベース名
maxentry 定義可能文書数
for IS Infoshare 識別子
```

DBmake コマンドの実行

ユーティリティコマンドの DBmake を実行して、テキストデータベースを作成します。

(b) Bibliotheca2 TextSearch を使用する場合

マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

(2) 同義語辞書の作成

(a) Bibliotheca/TS を使用する場合

同義語を条件にして全文検索する場合、同義語辞書を作成しておく必要があります。ただし、全文検索するときと同義語を条件としない場合は、同義語辞書を作成する必要はありません。

同義語辞書ソースファイル

全文検索サーバの同義語辞書ソースファイルに、同義語を定義します。

DICmake コマンドの実行

ユティリティコマンドの DICmake を実行して、同義語辞書を作成します。

(b) Bibliotheca2 TextSearch を使用する場合

マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

5.8.4 全文検索サーバと連携するときの文書の操作

ここでは、全文検索サーバと連携するときの、文書の操作について説明します。

(1) テキストファイルの作成

AP 情報管理ファイルに定義したテキストファイル名で、テキストファイルを作成します。

テキストファイルは、次のどれかの方法で作成してください。

テキスト自動抽出機能を使用する方法

テキスト自動抽出機能については、「5.8.5 テキスト自動抽出機能」を参照してください。

Word のカスタマイズマクロなどを使用する方法

Word のカスタマイズマクロに、テキストデータを抽出する操作及び抽出するファイルの名称を明示しておきます。さらに、これらのカスタマイズマクロを使って、テキストデータを抽出しておきます。

アプリケーションプログラムのテキストファイルを書き出す機能を使用する方法

これらの方法によってテキストデータを抽出することで、テキストデータベースに格納できます。AP 情報管理ファイルにファイル名を定義していないと、該当する文書はテキストデータベースに登録されないため、全文検索の対象になりません。

(2) テキストデータベースへの文書の登録

サーバに文書を保存する時に、テキストデータベースにも文書を登録します。

(3) Bibliotheca2 TextSearch と連携するときの注意

Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースには、一般文書の最新バージョンに対応するテキストデータだけが格納されます。このため、バージョンを管理している Document Manager サーバで最新のバージョンを削除すると、Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースでは文書の最新バージョンに対応していたテキストデータが削除されます。この場合、文書に対応するテキストデータがない状態になるので、該当する文書を全文検索することはできません。文書の最新バージョンを削除した場合は、サーバから文書を一度取り出して、テキストデータを抽出してからサーバに保存し直してください。なお、AP 情報管理ファイルの関連ファイルに、テキストファイルを指定しておくこと、Document Manager データベースにテキストファイルを残しておくことができます。

文書の検索や登録などを実行する場合は、まず全文検索サーバを起動してください。また、テキストファイルを格納するテキストデータベースをオープンしておいてください。全文検索サーバの起動方法及びテキストデータベースをオープンする方法は、使用する全文検索サーバによって異なります。全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用している場合は、マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」を参照してください。また、全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用している場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

5.8.5 テキスト自動抽出機能

ここでは、テキストデータベースに登録するテキストファイルを自動的に抽出する機能（テキスト自動抽出機能）について説明します。

テキスト自動抽出機能には、次の 3 種類の機能があります。

文書を登録又は一括登録する時に、文書実体ファイルとして登録するファイルから自動的にテキストを抽出してテキストファイルを作成し、テキストデータベースに登録する機能

登録するファイルからのテキストの抽出には Document Filter for Text Search を使用します。

文書配布機能やエクスポートユティリティ（ISexport コマンド）を使用して Document Manager データベースの文書を抽出する時に、抽出する文書に対応するテキストをテキストデータベースから抽出する機能

Document Manager サーバとは別サーバ上にある Groupmax Document Manager - Filtering Server を使用してテキストを抽出する機能

Document Manager サーバとは別サーバ上にある Groupmax Document Manager -

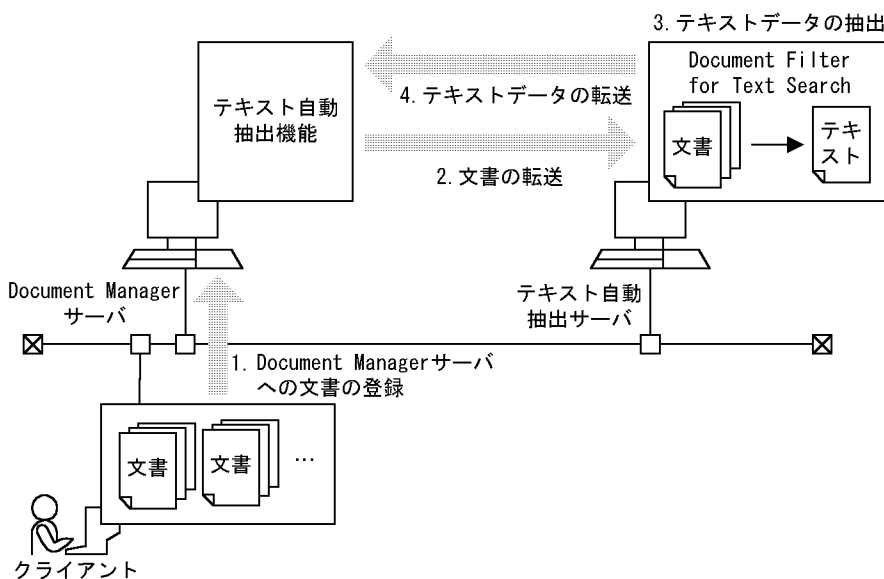
5. Document Manager の環境設定

Filtering Server をテキスト自動抽出サーバといいます。テキスト自動抽出サーバを使用するには、テキスト自動抽出サーバに次の OS 及びプログラムが組み込まれていることが前提となります。

- Windows 2000 又は Windows NT
- Document Filter for Text Search 02-00 以降 (Windows 版)
- Groupmax Document Manager - Filtering Server

一つの Document Manager サーバに対して、一つのテキスト自動抽出サーバを設定できます。テキスト自動抽出サーバを使用したテキスト抽出の処理の流れを次の図に示します。

図 5-6 テキスト自動抽出サーバを使用したテキスト抽出の処理の流れ



図中の 1 ~ 4 について説明します。

1. クライアントから Document Manager サーバに文書を登録します。
2. 登録された文書は、テキスト自動抽出機能によって、テキスト自動抽出サーバに転送されます。
3. テキスト自動抽出サーバで、文書からテキストが抽出されます。
4. 抽出されたテキストデータは、Document Manager サーバに転送されます。

テキスト自動抽出サーバでのテキスト抽出の実行モードは、同期モード又は非同期モードのどちらかを選択できます。

同期モード

テキスト自動抽出サーバから Document Manager サーバへのテキストデータの転送が終了した後、文書が登録されます。

非同期モード

Document Manager サーバからテキスト自動抽出サーバへ文書の転送が終了した後、文書が登録されます。

なお、テキスト自動抽出サーバの実行モードと、クライアントでの全文検索のモードの両方が同期モードの場合は、テキストファイルの登録・削除ユティリティ (IStssync) を実行する必要はありません。それ以外の場合は、テキストファイルの登録・削除ユティリティ (IStssync) を定期的に行って、テキストファイルを登録又は削除する必要があります。また、テキスト自動抽出サーバの実行モードが非同期の場合に、全文検索対象テキストの抽出処理が失敗したときは文書を再登録する必要があります。

テキスト自動抽出機能を使用する場合に設定又は編集が必要なファイルは次の二つです。

環境設定ファイル

抽出対象リストファイル

なお、テキスト自動抽出サーバを使用する場合は、テキスト抽出管理ファイルの編集も必要です。

(1) テキスト自動抽出機能の設定

テキスト自動抽出機能を使用するには、環境設定ファイルで次の項目を設定する必要があります。なお、環境設定ファイルでの設定の詳細については、「5.7

DocumentManager での環境設定」を参照してください。

TextAutoExtract

テキスト自動抽出機能を使用するかどうかを設定します。

TextAutoExtractTimeOut

テキスト自動抽出処理のタイマ監視時間を設定します。テキスト自動抽出サーバを使用する場合、テキスト自動抽出サーバのタイムアウト時間は、(テキスト自動抽出処理のタイマ監視時間 + 900) 秒になります。なお、テキスト自動抽出サーバを非同期モードで使用する場合、テキスト自動抽出処理機能にタイマ監視を設定することをお勧めします。

(2) 抽出対象リストファイルの編集

抽出対象リストファイルでは、テキストの抽出方法を指定します。

(a) 格納先

抽出対象リストファイルの格納先を示します。

```
/usr/infoshare/etc/attxtlst.txt
```

(b) 指定内容

抽出対象リストファイルには、使用する機能に対応するイベントコードを指定します。指定できるイベントコードは次の2種類です。

REGIST

文書を登録又は一括登録する時に、登録する文書の文書実体ファイルからテキストファイルを抽出する場合に指定します。

抽出には、Document Filter for Text Search を使用します。

EXPORT

文書配布機能又はエクスポートユティリティ (ISexport コマンド) を実行する時に、テキストデータベースから既に登録されているテキストを抽出する場合に指定します。

(3) テキスト抽出管理ファイルの編集

テキスト抽出管理ファイルでは、テキスト自動抽出サーバのホスト名や実行モードなどを指定します。なお、このファイルを編集する際は、DocumentManager サーバを停止させてください。

(a) 格納先

テキスト抽出管理ファイルの格納先を示します。

```
/usr/infoshare/etc/autotxt.cfg
```

(b) 指定内容

テキスト抽出管理ファイルに指定する内容を次に示します。

ServerName

テキスト自動抽出サーバのホスト名、又は IP アドレスを指定します。255 バイト以内で指定してください。

PortNumber

テキスト自動抽出サーバが使用するポート番号を 1 ~ 65535 の範囲で指定してください。なお、指定を省略した場合、テキスト自動抽出サーバはポート番号 (22289) を仮定して動作します。

Mode

テキスト抽出処理の実行モードを指定します。

- Sync
同期モードで抽出します。
- NoSync
非同期モードで抽出します。

LogFileSize

DocumentManager サーバ及びテキスト自動抽出サーバに出力されるアクセスログファイルのサイズの上限を、0 ~ 99 (単位: メガバイト) の範囲で指定します。なお、0 を指定した場合は、アクセスログファイルは出力されません。また、範囲外の値や指定を省略した場合は 1 が仮定されます。

(c) 指定例

```
ServerName = HOST01
PortNumber = 22289
Mode = Sync
LogFileSize = 10
```

(4) テキスト自動抽出サーバの運用方法 (AIX 及び HP-UX の場合)

テキスト自動抽出サーバの運用方法について説明します。なお、テキスト自動抽出サーバとして使用できるサーバには、オペレーティングシステムに Windows 2000 又は Windows NT を使用していることが前提となります。

(a) ポート番号の設定方法

テキスト自動抽出サービスに、「22289」以外のポート番号を設定する場合、「C:\¥winnt¥system32¥drivers¥etc」の services ファイルに次の記述を追加してください。なお、「C:」は OS がインストールされているドライブ名です。

infosharefilter ポート番号 /tcp

なお、指定を省略した場合、テキスト自動抽出サーバはポート番号 (22289) を仮定して動作します。ただし、この場合、ポート番号 (22289) を既にほかの製品が使用しているとエラーが発生します。

(b) 起動方法

テキスト自動抽出サーバの起動手順を次に示します。

1. テキスト自動抽出サーバを組み込んだサーバに、システム管理者でログインします。
2. スタートメニューから、「設定」 - 「コントロールパネル」 - 「サービス」を選択します。
「サービス」ダイアログボックスが表示されます。
3. 「サービス」ダイアログボックスのリストから、「Document Manager Text Extract Service」を選択して、「開始」ボタンをクリックします。
テキスト自動抽出サーバが起動します。

(c) 終了方法

テキスト自動抽出サーバの終了手順を次に示します。

1. テキスト自動抽出サーバを組み込んだサーバに、システム管理者でログインします。
2. スタートメニューから、「設定」 - 「コントロールパネル」 - 「サービス」を選択します。
「サービス」ダイアログボックスが表示されます。
3. 「サービス」ダイアログボックスのリストから、「Document Manager Text Extract Service」を選択して、「停止」ボタンをクリックします。
テキスト自動抽出サーバが終了します。

(5) テキスト自動抽出サーバのアクセスログファイルの取得

テキスト自動抽出サーバのアクセスログは、Document Manager サーバへのテキストデータの転送が完了したタイミングで出力されます。アクセスログファイルのサイズの上限は、サービス起動時に、テキスト抽出管理ファイルに指定されている値がサービス停止時まで有効になります。そのため、アクセスログファイルのサイズの上限を変更する場合は、テキスト自動抽出サーバを再起動する必要があります。

(a) 出力先

アクセスログは次の二つのファイルに出力されます。

アクセスログファイル
(インストールディレクトリ) %spool%\autotxtlog

アクセスログバックアップファイル
(インストールディレクトリ) %spool%\autotxtlog.bak

autotxtlog のファイルサイズが、テキスト抽出管理ファイルで指定したサイズの上限を超えると、KIIS2003-I のメッセージをイベントビューアに出力します。その後、autotxtlog を autotxtlog.bak にリネームします。autotxtlog.bak は、1 世代分だけ作成されます。

autotxtlog の使用容量が 80%、90%、95%、99% を超えた場合は、KIIS2004-I のメッセージをイベントビューアに出力します。この状態で処理を続行すると、autotxtlog を autotxtlog.bak にリネームして、古い autotxtlog.bak に上書きします。したがって、autotxtlog.bak に必要なアクセスログが残っている場合は、このメッセージが出力された時点で任意のファイルに退避してください。

(b) 出力形式

アクセスログは次のどちらかの形式で出力されます。

YYYY/MM/DD HH:MM:SS AAA.AAA.AAA.AAA BBBBBB CCC...C

YYYY/MM/DD HH:MM:SS AAA.AAA.AAA.AAA [DDDDDDDDDD] EEEEEEE FFF...F

YYYY/MM/DD HH:MM:SS

DocumentManager サーバへのテキストデータの転送が完了した年月日及び時刻が表示されます。

AAA.AAA.AAA.AAA

「***.***.***.***」が固定で表示されます。

BBBBBB

テキスト抽出処理の実行モードが表示されます。

- Sync : 同期モード
- NoSync : 非同期モード

CCC...C

テキスト抽出処理を実行された文書のファイル名が表示されます。

DDDDDDDDDD

メッセージ番号が表示されます。

EEEEEE

テキスト抽出処理の実行モードが表示されます。実行のモードが不明の場合、「*****」が表示されます。

- Sync : 同期モード
- NoSync : 非同期モード

FFF...F

テキスト抽出処理を実行された文書のファイル名が表示されます。ファイル名が不明の場合、「*****」が表示されます。

(c) 出力例

アクセスログファイルの出力例を次に示します。

```
2001/04/16 12:13:43 ***.***.***.*** Sync test1.doc
2001/04/16 12:13:43 ***.***.***.*** NoSync test2.xls
2001/04/16 12:13:43 ***.***.***.*** [KIIS2003-E] Sync 作業報告書
.doc
2001/04/16 12:13:43 ***.***.***.*** [KIIS2003-E] **** *****
```

(6) 注意事項

テキスト自動抽出機能を使用する場合、抽出対象となるファイルは主ファイルだけです。関連ファイルの自動抽出は行いません。したがって、関連ファイルだけで構成された文書に対してはテキスト自動抽出が行われません。

環境設定ファイルでテキスト自動抽出機能を使用する定義をして、抽出対象リストファイルを作成しなかった場合、REGIST と EXPORT の両方を指定したものと仮定されて、テキスト自動抽出が実行されます。

テキスト自動抽出機能を使用する場合は、十分なハードディスクの容量を確保するように、注意してください。

クライアントで文書を圧縮する指定をしている場合、テキスト自動抽出機能は実行されません。

イベントコードに REGIST を指定してテキスト自動抽出機能を使用する場合、文書の登録と同時にテキストの抽出、登録も実行されるため、テキスト自動抽出機能を使用しない場合に比べて文書の登録に時間が掛かります。

DocumentManager サーバを停止後、テキスト自動抽出サーバを停止してください。

テキスト自動抽出サーバを非同期モードで使用する場合、DocumentManager サーバを停止後、DocumentManager サーバのマシン上で、テキスト自動抽出サーバインタ

5. Document Manager の環境設定

フェースプロセス (IStsextSV) が終了していることを OS の ps コマンドなどで確認してください。その後、テキスト自動抽出サーバを停止してください。

イベントコードに REGIST を指定した場合、テキスト自動抽出機能では、Document Filter for Text Search (HI-UX/WE2 版又は HP-UX 版) を使用します。また、テキスト自動抽出サーバを使用する場合、テキスト自動抽出機能では、テキスト自動抽出サーバ上の Document Filter for Text Search (Windows 版) を使用します。このため、テキストを抽出できるファイル形式については、Document Filter for Text Search のサポートしている範囲に従います。ただし、HI-UX/WE2 版及び HP-UX 版の Document Filter for Text Search と、Windows 版の Document Filter for Text Search とではサポートする文書の種類が異なります。

HI-UX/WE2 版及び HP-UX 版の Document Filter for Text Search がバージョン 02-00 時点でサポートしている文書の種類を表 5-5 に、Windows 版の Document Filter for Text Search がバージョン 02-10 時点でサポートしている文書の種類を表 5-6 に示します。

表 5-5 HI-UX/WE2 版及び HP-UX 版の Document Filter for Text Search がバージョン 02-00 時点でサポートしている文書の種類

種類	バージョン
RTF	1.5
Word	Word 95, Word 97, Word 98
Excel	Excel 95, Excel 97
PowerPoint	PowerPoint 95, PowerPoint 97
一太郎	Version 8
Lotus 1-2-3	R5J, 1-2-3 97
PDF	1.2

表 5-6 Windows 版の Document Filter for Text Search がバージョン 02-10 時点でサポートしている文書の種類

種類	バージョン
RTF	1.5
Word	Word 95, Word 97, Word 98, Word 2000
Excel	Excel 95, Excel 97, Excel 2000
PowerPoint	PowerPoint 95, PowerPoint 97, PowerPoint 2000
一太郎	Version 8, Version 9
Lotus 1-2-3	R5J, 1-2-3 97
PDF	1.2

5.9 Document Manager の環境の初期化

この節では、Document Manager の環境の初期化と、初期化後に必要な環境設定について説明します。

5.9.1 オブジェクトサーバの初期化

Document Manager の環境を初期化する前に、オブジェクトサーバの初期化をする必要があります。オブジェクトサーバの初期化については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

5.9.2 Document Manager の初期化と Document Manager データベースの作成

Document Manager の環境設定が終了したら、Document Manager の環境を初期化します。このとき、Document Manager データベースが作成されます。

Document Manager の環境の初期化は、環境初期化ユーティリティを使用します。環境初期化ユーティリティについては、「8.3 Document Manager の環境の初期化 (ISinitdb)」を参照してください。

なお、環境初期化ユーティリティを実行する前に、オブジェクトサーバを起動しておいてください。オブジェクトサーバの起動については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

さらに、ほかのプログラムと連携するときの環境の初期化については、「7.12 ほかのプログラムと連携するときの運用」を参照してください。

(1) 最上位フォルダ及びシステム文書データベースへのアクセス権の設定

Document Manager の環境を初期化し、Document Manager データベースを作成した直後は、最上位フォルダ及びシステム文書データベースに対するアクセス権が次のように設定されています。

Document Manager 管理者（所有者）

すべてのアクセス権が与えられています。ただし、システム文書データベースは削除できません。

Document Manager 管理者以外のユーザ

- Groupmax Integrated Desktop から操作する場合
下位作成権が与えられています。
- Document Manager Client から操作する場合
読み出し権、作成権及び文書作成権が与えられています。

5. Document Manager の環境設定

Document Manager 管理者以外のユーザにフォルダ又は一般文書データベースを作成させたくない場合、Document Manager 管理者は、最上位フォルダ及びシステム文書データベースに対する「全ユーザ」のアクセス権を変更します。Groupmax Integrated Desktop から操作する場合は、参照権又は文書作成権を設定します。Document Manager から操作する場合は、作成権を削除します。ただし、システム文書データベースに対する参照権又は読み出し権は削除しないでください。参照権（読み出し権）のないユーザは、Document Manager にログインできません。

(2) システム文書データベースへの属性値の設定

システム文書データベースは、下位に作成する一般文書データベースの基になります。したがって、一般文書データベースに共通となる属性は、システム文書データベースに設定することをお勧めします。

(3) 文書配布機能の実行環境の作成

文書配布機能を使用する場合は、はじめに、文書配布機能ユティリティを実行しておきます。文書配布機能ユティリティを実行すると、文書配布機能を使用するための実行環境が Document Manager データベースに追加されます。また、次の二つのディレクトリが作成されます。

配布元サーバの作業ディレクトリ

配布先サーバの作業ディレクトリ

6

サーバの起動と終了

この章では、Document Manager サーバの起動と終了の方法について説明します。

6.1 サーバの起動

6.2 サーバの終了

6.1 サーバの起動

この節では、サーバの起動方法について説明します。

6.1.1 サーバの起動手順

ここでは、前提プログラムと Document Manager サーバを起動する手順について説明します。

1. オブジェクトサーバの起動

起動方法については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

2. 全文検索サーバの起動

全文検索サーバと連携する場合は、全文検索サーバを起動しておきます。

全文検索サーバは、オブジェクトサーバの起動後に起動してください。また、全文検索サーバを再起動する場合は、オブジェクトサーバを再起動してから実行してください。

起動方法は、使用する全文検索サーバによって異なります。全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用している場合は、マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」を参照してください。全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用している場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

3. Groupmax Address 及び Groupmax Mail の起動

Groupmax Address 及び Groupmax Mail と連携する場合は、Groupmax Address 及び Groupmax Mail を起動しておきます。起動方法については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

4. Document Manager サーバの起動

5. 文書配布受信デーモンの起動

文書配布機能を使用する場合は、Document Manager サーバ起動後に、文書配布受信デーモンと文書配布受信デーモンを起動します。

6.1.2 サーバの起動方法

ここでは、サーバの起動方法について説明します。

(1) Document Manager サーバの起動方法

(a) Document Manager サーバを起動するコマンド

Document Manager サーバを起動するには、Document Manager 起動ユーティリティを実行します。Document Manager 起動ユーティリティについては、「8.4 Document

Manager の起動 (ISstart)」を参照してください。

(b) Document Manager サーバの起動手順

Document Manager サーバを起動するには、ワークステーションを起動した時にコマンドを入力します。コマンドの入力方法を説明します。

1. root 権限で、UNIX にログインする
2. 次の形式で入力する。

```
#cd /usr/infoshare/bin  
# ./ISstart
```

3. Document Manager サーバが起動すると、メッセージが表示される

(2) 文書配布送受信デーモンの起動方法

文書配布送受信デーモンを起動するには、文書配布送受信デーモン起動ユーティリティを実行します。文書配布送受信デーモン起動ユーティリティについては、「8.7 文書配布送受信デーモンの起動 (ISreplicastart)」を参照してください。

(3) 注意事項

Groupmax Mail で文書を配布する場合は、文書配布送受信デーモンを起動する前に、Groupmax Mail サーバを起動してください。Groupmax Mail の起動前に文書配布送受信デーモンを起動して文書の配布要求を出した場合は、文書配布送受信デーモンによってエクスポートファイルは作成されますが、送信されません。ただし、その後 Groupmax Mail サーバを起動すると、エクスポートファイルは送信されます。

6.2 サーバの終了

ここでは、サーバの終了方法について説明します。

6.2.1 サーバの終了手順

ここでは、前提プログラムと Document Manager サーバを終了する手順について説明します。

1. 文書配布送受信デーモンの終了
文書配布機能を使用して、サーバ間で文書を共有している場合は、まず文書配布送受信デーモンと文書配布受信デーモンを終了します。
2. Document Manager サーバの終了
なお、文書配布送受信デーモンは、必ず Document Manager サーバを終了する前に終了してください。
3. Groupmax Address 及び Groupmax Mail の終了
Groupmax Address 及び Groupmax Mail と連携している場合は、Groupmax Address 及び Groupmax Mail を終了します。メールシステムと連携して、文書配布機能を使用している場合には、文書配布送受信デーモン終了後に終了します。終了方法については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。
4. 全文検索サーバと連携している場合は、Document Manager を終了してから、全文検索サーバを終了します。
終了方法は、使用する全文検索サーバによって異なります。全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用している場合は、マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」を参照してください。全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用している場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。
5. オブジェクトサーバの終了
終了方法については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

6.2.2 サーバの終了方法

ここでは、サーバの終了方法について説明します。

(1) 文書配布送受信デーモンの終了方法

文書配布送受信デーモンを終了するには、文書配布送受信デーモン終了ユティリティを実行します。文書配布送受信デーモン終了ユティリティについては、「8.8 文書配布送受信デーモンの終了 (ISreplicastop)」を参照してください。

(2) Document Manager サーバの終了

(a) Document Manager サーバの終了方法

Document Manager の終了方法には、次の二つの方法があります。

計画終了

強制終了

計画終了

計画終了は、実行中の処理を待って、Document Manager サーバを終了する方法です。計画終了をしている間は、新たなログインの要求は受け付けません。また、計画終了が完了していない場合は、ユーザの判断で強制終了できます。

強制終了

強制終了は、Document Manager サーバを強制的に終了する方法です。Document Manager データベースの更新中に強制終了すると、Document Manager データベースに障害が起きる場合があるため、注意してください。

(b) Document Manager サーバを終了するコマンド

Document Manager サーバを終了するには、Document Manager 終了ユーティリティを使用します。Document Manager 終了ユーティリティについては、「8.5 Document Manager の終了 (ISstop)」を参照してください。

(c) Document Manager サーバの終了手順

Document Manager サーバを終了するには、コマンドを入力して終了します。コマンドを入力する方法を説明します。

1. すべてのクライアントを終了する
2. root 権限で、UNIX にログインする

3. 次の形式で入力する

```
#cd /usr/infoshare/bin  
# ./ISstop
```

4. Document Manager サーバが終了すると、メッセージが表示される

7

システムの運用

システムを保守するには、データのバックアップを取得したり、保守情報を出力したりする操作が必要です。また、Document Manager データベースを正常に操作するための運用も必要です。この章では、Document Manager のシステムの運用と保守について説明します。

-
- 7.1 バックアップの取得方法

 - 7.2 特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録

 - 7.3 フォルダ、分類索引体系の抽出と登録

 - 7.4 文書の一括登録

 - 7.5 フォーム文書の移行

 - 7.6 一般文書の圧縮

 - 7.7 アクセスログに関する運用

 - 7.8 文書配布ログに関する運用

 - 7.9 ファイルの整合性に関する運用

 - 7.10 作業領域の運用

 - 7.11 テキストファイルに関する運用

 - 7.12 ほかのプログラムと連携するときの運用

 - 7.13 文書の配布状態管理機能に関する運用
-

7.1 バックアップの取得方法

ファイルに障害が起きたときのために、各種ファイルのバックアップを定期的にとることをお勧めします。この節では、バックアップの対象となるファイルと、バックアップの取得方法を説明します。

バックアップの対象となるファイルのうち、同期を取る必要のあるものを示します。これらのファイルは、同時にバックアップを取るなど、情報間の同期がずれないように気を付けて扱ってください。

なお、バックアップは、Document Manager、オブジェクトサーバ及び全文検索サーバを停止して取得してください。

7.1.1 Document Manager のファイル

バックアップの取得が必要な Document Manager のファイルは次のとおりです。

`/usr/infoshare` 中のファイル及びディレクトリ

Document Manager 文書実体ファイル

システム管理者が指定したフォルダごとの文書実体ファイル格納ディレクトリ下のファイルです。

7.1.2 オブジェクトサーバのファイル

オブジェクトサーバのデータベース

初期設定パラメタファイルの中で定義したファイルです。オブジェクトサーバのデータベース構成変更ユーティリティを実行している場合、構成変更パラメタファイルの中で定義したファイルもバックアップの対象になります。

なお、文書データベースの削除又はユーザ定義属性を削除した後に、オブジェクトサーバのファイルのバックアップを取得すると、データベースの使用効率が上がります。

7.1.3 全文検索サーバのファイル

全文検索サーバのテキストデータベース

テキスト DB ディレクトリ（テキストデータベースを格納するディレクトリパス）下にあるファイルです。

バックアップの取得方法は、使用する全文検索サーバによって異なります。全文検索サーバとして `Bibliotheca/TS` を使用する場合は、マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」を参照してください。また、全文検索サーバとして `Bibliotheca2 TextSearch` を使用する場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

7.1.4 バックアップの取得例

Document Manager のファイルのバックアップは、tar コマンドなど OS のコマンドを使って取得します。次に tar コマンドの指定例を示します。

(例)

```
tar cvf バックアップ先デバイス名 /usr/infoshare
```

7.2 特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録

この節では、特定のフォルダに格納されている文書を抽出して、その文書を再び登録する機能を使用した運用について説明します。

7.2.1 特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録とは

特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録には、特定のフォルダに格納されている文書をまとめて抽出する機能と、抽出した文書を再び Document Manager サーバに登録する機能を使用します。

これらの機能によって、次のような運用ができます。

特定のフォルダの文書を抽出することで、フォルダ単位にバックアップを取得する。
また、その文書を再び同じ Document Manager サーバに登録し直すことで、そのフォルダをリストアする
ただし、バックアップを取得した文書とリストアした文書で、文書 ID は変更されません。

大規模システムで運用している Document Manager のデータを複数のサーバに分割して管理することにした場合に、フォルダ単位に文書を抽出して、それぞれのサーバに登録する

なお、抽出する文書が格納されていた Document Manager サーバを、抽出元サーバといいます。また、抽出した文書に登録する Document Manager サーバを、登録先サーバといいます。

7.2.2 特定のフォルダに格納されている文書の抽出と登録の操作

特定のフォルダに格納されている文書を抽出して、登録する操作について説明します。ここでは、抽出元サーバと登録先サーバが同じ場合と異なる場合について、それぞれ説明します。また、登録が失敗した場合の対処についても説明します。

(1) 抽出元サーバと登録先サーバが同じ場合の操作手順

抽出元サーバと登録先サーバが同じサーバの場合、次の手順で文書を抽出、登録します。

1. 文書を抽出するフォルダのオブジェクト識別子を指定してエクスポートユティリティ (ISexport コマンド) を実行する
指定されたディレクトリ又はスプールディレクトリ下にエクスポートファイルが作成されます。エクスポートユティリティについては、「8.20 特定のフォルダに格納さ

れている文書を抽出して登録する (ISexport 及び ISimport)」を参照してください。

2. 文書を登録するフォルダのオブジェクト識別子及び手順 1. で作成したエクスポートファイルを指定して、インポートユティリティ (ISimport コマンド) を実行する
インポートユティリティについては、「8.20 特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する (ISexport 及び ISimport)」を参照してください。
3. 文書が正常に登録されているか確認する
エクスポートファイルが存在するディレクトリに拡張子が .msg のファイルが作成されている場合、エラーが発生しています。この場合は、「(3) 文書登録時にエラーが発生した場合の操作手順」を参照して、文書を再登録する必要があります。

(2) 抽出元サーバと登録先サーバが異なる場合の操作手順

抽出元サーバとは別のサーバに抽出した文書を登録する場合、次の手順で文書を抽出、登録します。

1. 文書を抽出するフォルダのオブジェクト識別子を指定してエクスポートユティリティ (ISexport コマンド) を実行する
指定されたディレクトリ又はスプールディレクトリ下にエクスポートファイルが作成されます。エクスポートユティリティについては、「8.20 特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する (ISexport 及び ISimport)」を参照してください。
2. 登録先サーバで抽出元サーバと同じ階層のフォルダに文書を登録する場合は、登録先サーバに抽出元サーバと同じ階層のフォルダ、文書データベース又は分類索引 (分類) を作成する
3. 登録先サーバの任意のディレクトリ又はスプールディレクトリ下に、手順 1. で作成したエクスポートファイルを複写する
4. 文書を登録するフォルダのオブジェクト識別子及び手順 1. で作成したエクスポートファイルを指定して、インポートユティリティ (ISimport コマンド) を実行する
インポートユティリティについては、「8.20 特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する (ISexport 及び ISimport)」を参照してください。
このとき、手順 2. で抽出元サーバと同じ名称のフォルダを登録先サーバに作成した場合は、そのフォルダに文書が登録されます。また、登録先サーバに抽出元サーバと同一名称のフォルダが存在しない場合は、最上位フォルダの直下のデフォルトフォルダに文書が登録されます。
5. 文書が正常に登録されているか確認する
エクスポートファイルが存在するディレクトリに拡張子が .msg のファイルが作成されている場合、エラーが発生しています。この場合は、「(3) 文書登録時にエラーが発生した場合の操作手順」を参照して、文書を再登録する必要があります。

(3) 文書登録時にエラーが発生した場合の操作手順

- (1) 又は (2) の手順に従って文書を登録した後で、エクスポートファイルがあったディ

7. システムの運用

レクトリにエラーメッセージファイル（拡張子が .msg のファイル）が存在する場合、文書登録時にエラーが発生しています。この場合、登録されていない文書があります。

エラーが発生した場合は、次の手順に従って、文書を再度登録してください。これによって、登録されなかった文書だけが登録できます。

1. 拡張子が .msg のファイルの内容を参照して、エラーの要因を取り除く
2. エクスポートファイルと同一ディレクトリに作成されている拡張子が .cob のファイルの拡張子を、.con に変更する
3. 登録対象フォルダのオブジェクト識別子と手順 2. で拡張子を変更したファイルを定義ファイルとして指定して、インポートユティリティを実行する

(4) 注意事項

抽出の対象になる文書は、最新バージョンの文書だけです。

抽出及び登録する対象になるのは一般文書だけです。フォーム文書、一般文書データベース、フォーム文書データベース、フォルダ、分類索引、及び文書配布対象グループは対象になりません。

抽出した文書を別のサーバに登録する場合、登録先のサーバには、次の階層やデータベースを事前に作成しておく必要があります。

- 抽出対象フォルダ下のフォルダ階層と同じ名称のフォルダ階層
同じ名称のフォルダが存在しない場合は、最上位フォルダの直下のデフォルトフォルダに文書が登録されます。
- 抽出された文書群が登録されている分類索引と同じ名称の分類索引階層
同じ名称の分類索引が存在しない場合は、該当する文書はリンクされません。
- 同じ名称及びユーザ定義属性を保持する一般文書データベース
名称が同じでも、属性が異なる一般文書データベースに対しては、文書を登録できません。

抽出した文書を登録する時に同時に全文検索用テキストファイルを全文検索サーバに登録したい場合は、全文検索用テキストファイルを文書関連ファイルとして抽出元サーバに格納しておくか、又はテキスト自動抽出機能を使用してエクスポートファイル作成時にテキストデータベースから既に登録されているテキストを抽出する必要があります。

抽出した文書を登録するときに、同時にテキストファイルを全文検索サーバに登録したい場合は、テキストファイルを文書関連ファイルとして抽出元サーバに格納しておくか、又は、テキスト自動抽出機能を使用してエクスポートファイル作成時にテキストデータベースから既に登録されているテキストを抽出する必要があります。

抽出した文書を登録するときに同時に全文検索用テキストファイルを全文検索サーバに登録したい場合、又は登録先サーバの文書の更新日時や更新者を抽出元と一致させたい場合は、環境設定ファイルの Replica_TS_regist(テキストファイル登録方法)に auto を指定してください。

ただし、auto を指定すると、文書を登録するときの性能が manual を指定した場合に

比べて劣る可能性があります。

なお、manual を指定した場合は、抽出後に全文検索用テキスト登録・削除ユティリティを実行して全文検索用テキストファイルを全文検索サーバに登録する必要があります。

DAT、CMT などのリムーバブルディスクに対して、オペレーティングシステムのファイルシステムを経由しないファイルの抽出、登録はしません。

文書を登録する Document Manager サーバに、同じ名称の文書データベース若しくは分類索引が存在する場合、又は指定したフォルダの階層以下に同じ名称のフォルダが存在する場合は、それぞれオブジェクト識別子の値が最も小さい文書データベース、フォルダ又は分類索引に文書が登録されます。

文書のオブジェクト識別子の値は抽出元と登録先で異なります。このため、登録先で分類索引帳を再作成したり、文書への URL を変更する必要があります。また、OBJECT 型及び OBJECT_LIST 型のユーザ定義属性については、登録先の値には NULL が設定されます。

エクスポートファイルのファイルサイズが 2 ギガバイトを超えると、インポートユティリティ (ISimport コマンド) でエラーになります。このような場合は、エクスポートファイルのファイルサイズが 2 ギガバイトを超えないようにインポートユティリティ (ISimport コマンド) を実行してください。

エクスポートファイルをファイル転送する場合は、バイナリモードでファイル転送してください。

分類索引・分類又はフォルダの名称に半角コンマが含まれている場合、正しく文書を抽出及び登録することはできません。発生する障害及び対処方法については、「付録 L

分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

7.3 フォルダ，分類索引体系の抽出と登録

この節では、既存の Document Manager から一般文書に関するフォルダや分類索引の定義情報（どのようなフォルダや分類索引の体系が定義されているか）を抽出する方法及び抽出した定義情報を別サーバに登録する方法について説明します。

7.3.1 フォルダ，分類索引体系の抽出と登録とは

新規に Document Manager サーバを構築する場合、フォルダや分類索引などの体系を手動で作成すると、非常に多くの時間を必要とします。このような場合に、既存の Document Manager サーバからフォルダや分類索引の体系を抽出し、抽出した定義情報を利用して登録することで、新規に Document Manager サーバを構築する場合などの作業を軽減できます。また、定義情報を形式に従って作成することで任意の体系を一括で登録することができます。Document Manager は定義情報抽出と登録に関する次の機能を提供します。

(1) 定義情報抽出機能

既存の Document Manager サーバで定義されているフォルダや分類索引の体系情報（定義情報）を抽出する機能です。定義情報は csv 形式のファイル（定義情報ファイル）に出力されます。なお、ネットワーク環境で複数の Document Manager サーバを運用している場合でも、ネットワーク上のどの Document Manager サーバからでも定義情報は抽出できます。

(2) 定義情報登録機能

定義情報抽出機能で抽出した定義情報を、別の Document Manager サーバに登録する機能です。定義情報ファイルを編集して任意の定義情報を登録することもできます。なお、ネットワーク環境で複数の Document Manager サーバを運用している場合でも、ネットワーク上のどの Document Manager サーバへも定義情報を登録できます。

(3) 定義情報複写機能

定義情報の抽出元サーバと登録先サーバを指定して、抽出元サーバの定義情報を複写する機能です。

7.3.2 ユティリティの実行

定義情報抽出、登録及び複写は、定義の抽出・登録ユティリティ（IScpdef コマンド）を使用します。オプションの組み合わせによって、定義情報の抽出、登録又は複写機能を選択します。定義の抽出・登録ユティリティの文法については、「8.19 フォルダ，分類索引体系の抽出及び登録（IScpdef）」を参照してください。

7.3.3 定義情報ファイルの形式と編集

定義の抽出・登録ユーティリティを実行すると、指定した Document Manager サーバの定義情報が csv 形式のファイルとして出力されます。定義情報の登録先サーバで任意の定義情報を追加する場合は、出力された定義情報ファイルを編集してください。また、ここで説明する定義情報ファイルの形式に従って作成した定義情報ファイルを利用して、別サーバに定義情報を登録することもできます。

ここでは、定義情報ファイルの出力（記述）形式、規則、属性情報の指定形式について説明します。

(1) 定義情報ファイルの出力（記述）形式

定義情報ファイルは、「定義情報」と「属性情報」で構成されます。出力（記述）形式は次のとおりです。

オブジェクトの定義情報

定義種別 <タブ> 定義階層 <改行>

オブジェクトの属性情報

<タブ> 属性種別 <タブ> 属性情報 <改行>

(2) 定義情報ファイルの記述規則

定義情報ファイルを作成、編集する場合は、次に示す規則に従ってください。

定義種別と定義階層をタブで区切って記述します。一つのオブジェクトの定義情報を一行で記述してください。

オブジェクトの定義情報に属性を設定する場合は、定義情報を記述した次の行から属性種別と属性情報をタブで区切って記述します。行の先頭にはタブを挿入してください。

(3) オブジェクトの定義情報の出力（記述）形式

オブジェクトの定義情報は次の形式で指定します。

定義種別 <タブ> 定義階層 <改行>

(a) 定義種別

定義種別には、定義するオブジェクトに従って表 7-1 に示す文字列を指定します。

表 7-1 定義種別の一覧

定義種別	指定する文字列
フォルダ	FOLDER
分類索引	VIEW
一般文書データベース	DOCDB

7. システムの運用

(b) 定義階層

各定義をタブで区切って定義階層を記述します。

(4) オブジェクトの属性情報の出力（記述）形式

オブジェクトの属性情報は次の形式で指定します。

<タブ> 属性種別 <タブ> 属性情報 <改行>

(a) 属性種別

属性種別には、定義するオブジェクトに対して設定する属性に従って表 7-2 に示す文字列を指定します。

表 7-2 属性種別の一覧

属性種別	指定する文字列
所有者名	OWNER_NAME
所有者アクセス権	OWNER_PERM
全ユーザアクセス権	EVERYONE_PERM
グループアクセス権	GROUP_PERM
ユーザ定義属性	USER_ATTR

(b) 属性情報

指定した属性種別に従って定義する属性に対する属性値を、次に示す形式に従って指定します。

属性種別が「OWNER_NAME」の場合の記述形式

<タブ>属性種別<タブ>所有者種別<タブ>所有者名<改行>
所有者種別には、属性値としてログインユーザ名を指定する場合は、
「LOGIN_NAME」と指定します。ニックネームを指定する場合は、
「NICK_NAME」と指定します。

所有者名には、指定した所有者種別に従って、オブジェクトの所有者となるユーザのログインユーザ名又はニックネームを指定します。

なお、所有者名に指定したユーザが存在するかどうかについては、Document Manager はチェックしません。

属性種別が「OWNER_PERM」又は「EVERYONE_PERM」の場合の記述形式

<タブ>属性種別<タブ>設定するアクセス権<改行>

属性種別が「GROUP_PERM」の場合の記述形式

<タブ>属性種別<タブ>設定するアクセス権<タブ>グループ種別<タブ>グループ名<改行>
設定するアクセス権には、表 7-3 に示すアクセス権の種類を表す文字を指定します。

表 7-3 アクセス権の種類を表す文字

アクセス権の種類	アクセス権の種類を示す文字	備考
参照	R	-
編集	W	-
削除	D	-
文書作成	C	一般文書データベースの属性情報の場合に指定できる
文書リンク	L	分類索引及び分類、フォルダの属性情報の場合に指定できる
下位作成	S	-
設定なし	N	-
全アクセス権	A	-

指定するアクセス権は、並べて記述します。例えば、参照権限と編集権限をオブジェクトに設定する場合は、「RW」と並べて記述します。また、「全アクセス権(A)」と「なし(N)」が同時に指定されている場合は、最初に記述されていた文字に対応するアクセス権が設定されます。例えば、「AN」と指定した場合は、そのオブジェクトに対してすべてのアクセス権が設定されることになります。

属性種別が「GROUP_PERM」の場合は、設定するアクセス権の種類とアクセス権を設定するグループ種別を指定して、グループ種別に対応するグループ名を属性値として指定します。グループ種別には、表 7-4 に示すグループ種別を示す文字列を指定します。

表 7-4 グループ種別を示す文字列

グループ種別	グループ種別を示す文字
最上位組織	COMPANY,C
組織	ORGANIZATION,O
グループ	TEAM,T
Groupmax 用グループ	MANUAL,M
ローカルグループ	LOCALGROUP,L
なし	NONE,N

なお、グループ名に指定したグループが存在するかどうかについては、Document Manager はチェックしません。

属性種別が「USER_ATTR」の場合の記述形式

<タブ>属性種別<タブ>属性名<タブ>属性型 [<タブ>検索キー付加フラグ [<タブ>属性長]] <改行>

ユーザ定義属性については、「2.2.4(3) ユーザ定義属性」を参照してください。設定する内容は、表 7-5 に従って指定します。

表 7-5 ユーザ定義属性の指定方法

属性型	属性型に指定する文字列	検索キー付加フラグ 1	属性長に指定できる値 2
文字列型	STRING	×	×
固定長文字列型	FIXED_STRING		1 ~ 255
符号付整数型	INT		×
日時型	TIME		×
オブジェクト型	OBJECT	×	×
オブジェクトリスト型	OBJECT_LIST	×	×

1 :

× : 指定不可

: 以下の何れかの文字列を指定する。また、省略時は、NOT_SET_INDEX を仮定する。

SET_INDEX : 検索キー定義

NOT_SET_INDEX : 検索キー未定義

2 :

× : 指定不可

また、指定時は、' ¥0 ' を含む長さを指定する。

7.3.4 ログ情報の取得

定義情報の抽出・登録ユティリティを実行するときには、オプションの指定によって定義情報の登録状況を、ログとして取得できます。ログは次のファイルに出力されます。

```
/usr/infoshare/spool/IScndef.log
```

なお、既にログファイルが存在する場合は、IScndef.bak という名前でバックアップファイルを作成後、新規に IScndef.log を作成してログを出力します。出力されるログメッセージの一例を次に示します。

```
Information: 定義種別 ( 定義階層 )created.
```

指定された定義を作成しました。

```
Information: 定義種別( 定義階層 )create process skipped.Because specified 定義種別 is already exist.
```

指定された定義は既に存在するので、作成処理をスキップしました。

```
Warning: 定義種別 ( 定義階層 )create process skipped.Because specified path ( 該当定義階層 )is not valid.
```

該当定義階層が特定できないので、作成処理をスキップしました。

- Warning: define type invalid. line_no : 行番号
行番号に示す入力定義の定義種別の指定が不正です。
- Warning: define name length invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す定義の定義名長が不正です。
- Warning: define name invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す定義が不正です。
- Warning: folder define class over limit.
行番号とカラム番号に示す定義のフォーマットが不正です。
- Warning: folder define class over limit define (定義階層) line_no : 行番号
行番号に示すフォルダの定義は、フォルダの階層の最大値を超えています。
- Warning: define not specified. line_no : 行番号
行番号に示す定義には、定義名が指定されていません。
- Warning: owner name type invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す所有者種別が不正です。
- Warning: owner name length invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す所有者名の長さが不正です。
- Warning: group type invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示すグループの種別が不正です。
- Warning: group name length invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示すグループ名の長さが不正です。
- Warning : access type invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示すアクセス権の種別が不正です。
- Warning : attribute define duplication error. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す属性の指定が重複しています。
- Warning : attribute name invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す属性名が不正です。
- Warning: attribute type invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す属性型が不正です。
- Warning: index flag invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す検索キー付加フラグが不正です。
- Warning: attribute length invalid. line_no : 行番号 column_no : カラム番号
行番号とカラム番号に示す属性長が不正です。

7. システムの運用

Warning : document database too many attribute. 定義種別 (定義階層)
定義階層に示す文書データベースに作成できる属性数が限界値を超えました。

Warning : attribute name duplication error. attribute_name: 属性名
属性名に示す属性名の指定が重複しています。

7.3.5 一般文書データベース体系移行時の注意事項

一般文書データベース体系を移行する場合、定義の抽出・登録ユティリティ (IScpdef コマンド) で抽出する定義情報以外に、次の情報が必要です。

- アプリケーションプログラムの情報 (AP 識別子)
- 全文検索データベースの情報 (TS 情報 ID)
- ユーザ定義属性の情報

このため、一般文書データベース体系を移行する場合は、定義の抽出・登録ユティリティを実行する以外に、移行先のサーバでこれらの情報の設定、追加を実行する必要があります。

(1) AP 識別子及び TS 情報 ID の設定

AP 識別子及び TS 情報 ID は、一般文書データベースを登録した後で、登録した一般文書データベースに対して Groupmax Integrated Desktop 又は Document Manager Client から設定してください。

(2) ユーザ定義属性の追加

ユーザ定義属性は、IScpdef コマンドの -h オプションに ATTRIBUTE を指定するか、移行先の一般文書データベースに対して、Groupmax Integrated Desktop 又は Document Manager Client から追加してください。

(a) システム文書データベースの直下にだけ一般文書データベースが作成されている場合

1. システム文書データベースにユーザ定義属性が設定されている場合は、定義の抽出・登録ユティリティ (IScpdef コマンド) を実行する前にシステム文書データベースのユーザ定義属性を追加する
この時、追加する順序は抽出元サーバと同じ順序にしてください。
2. 定義の抽出・登録ユティリティ (IScpdef コマンド) を実行して、一般文書データベースを登録する
定義の抽出時に IScpdef コマンドの -h オプションに ATTRIBUTE を指定することにより、抽出元のユーザ定義属性を移行対象にできます。

7.4 文書の一括登録

この節では、ユーザの管理する文書を Document Manager データベースに一括して登録する機能について説明します。

7.4.1 文書の一括登録とは

ほかのアプリケーションプログラムで作成した文書を、まとめて Document Manager データベースに登録することを、文書の一括登録といいます。この機能を使うと、文書を一度に Document Manager データベースに登録できます。また、Document Manager の導入前に Word などで作成した文書を、まとめて登録できます。一括登録できる文書は、一般文書だけです。

Document Manager データベースに一括登録できる内容を次に示します。

文書の登録

ユーザが管理する既存の文書を、Document Manager データベースに登録します。

分類索引への登録

文書を一括登録するとき分類索引又は分類を指定すると、分類索引に文書に登録できます。

関連ファイルの登録

文書関連ファイルも、文書と一緒に Document Manager データベースに登録できます。

テキストファイルのテキストデータベースへの登録

文書から抽出したテキストファイルをテキストデータベースに登録できます。

7.4.2 文書の一括登録の操作

(1) 文書を一括登録するには

文書を一括登録する手順を次に示します。

1. 登録用属性ファイルを作成する
2. 定義ファイルを作成する
3. ISregist コマンドを実行する

なお、文書に登録する文書データベースには、必ず AP 識別子を設定しておいてください。

(2) 文書の一括登録に使用するファイルとコマンド

ここでは、文書の一括登録に必要なファイルと、使用するコマンドの概要を説明します。

7. システムの運用

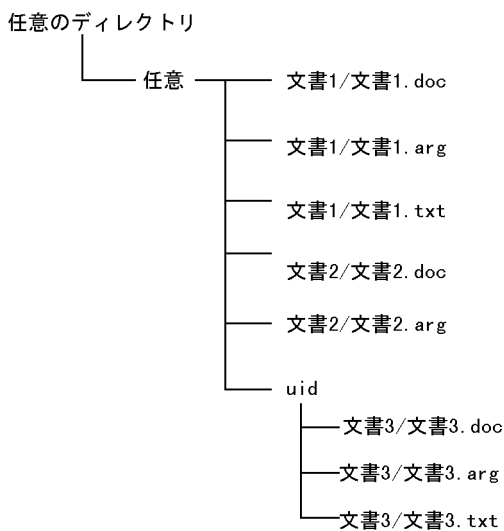
(a) 登録用属性ファイルの作成

ほかのアプリケーションプログラムで作成した文書は、属性が付いていないため Document Manager データベースに登録できません。そこで、作成した文書に属性を付ける必要があります。

文書の属性は、登録用属性ファイルに記述します。登録用属性ファイルは、文書格納ディレクトリに作成します。文書格納ディレクトリは、文書、登録用属性ファイル、関連ファイルなど、文書に関連するファイルを格納するディレクトリです。

文書格納ディレクトリの例を、図 7-1 に示します。

図 7-1 文書格納ディレクトリの例



文書格納ディレクトリは、任意のディレクトリに作成してください。ただし、登録文書ごとにディレクトリを分けることをお勧めします。

また、文書実体ファイル名及び登録用属性ファイル名に使用できる文字の規則を次に示します。

文書実体ファイル名には、次の名称及び文字は指定できません。

- 「IS_」及び「_」(アンダースコア)で始まる名称

登録用属性ファイル名には、UNIX で使用できる文字を指定してください。

次に、登録用属性ファイルの定義例を示します。

(例 1)

文書 1 をフォルダ「平成 8 年上期」、一般文書データベース「顧客情報」下に登録する場合の登録用属性ファイルの例

図 7-2 登録用属性ファイルの例

2	IS_object_name	STRING	BASE	RW	SEL_OK	1	...	1	
	文書 1							2	登録する文書の文書名
3	IS_class_id	CLASS	BASE	RO	SEL_NO	1	...	3	
	C0020000000002B3							4	文書を登録する文書データベースID
4	IS_class_name	STRING	BASE	RO	SEL_NO	1	...	5	
	顧客情報							6	文書を登録する文書データベース名
2000	IS_folder_list	FOLDER_LIST	DOC	RO	SEL_NO	1	...	7	
	root, 平成8年上期, C0000000000003AF							8	文書を登録するフォルダ名及びフォルダID

1. 登録する文書の文書名に関する属性
2. 登録する文書の文書名に関する属性値
3. 文書を登録する文書データベース ID に関する属性
4. 文書を登録する文書データベース ID に関する属性値
5. 文書を登録する文書データベース名に関する属性
6. 文書を登録する文書データベース名に関する属性値
7. 文書を登録するフォルダに関する属性
8. 文書を登録するフォルダに関する属性値

注 文書データベース ID は、Document Manager Client の文書 DB 属性ダイアログボックスで参照してください。

この例は、文書 1 に対する登録用属性ファイルの記述例です。この例では、文書 1 をフォルダ「平成 8 年上期」、一般文書データベース「顧客情報」に所属させることを示しています。なお、一括登録する文書すべてに対して、それぞれ登録用属性ファイルが必要です。

(b) 定義ファイルの作成

登録用属性ファイルを作成した後、定義ファイルを作成します。定義ファイルには、登録する文書の文書名及び登録用属性ファイルの文書名を記述します。定義ファイルは、Document Manager サーバから参照できる場所に作成してください。

定義ファイルの作成例を次に示します。

図 7-3 定義ファイルの作成例

```

regist doc_file_name=文書1/文書1.doc }
      arg_file_name=文書1/文書1.arg } 1
regist doc_file_name=文書2/文書2.doc }
      arg_file_name=文書2/文書2.arg } 2
regist doc_file_name=文書3/文書3.doc }
      arg_file_name=文書3/文書3.arg } 3

```

この例の 1 では、登録用属性ファイル「文書 1.arg」に記述した文書データベースに、文

7. システムの運用

書「文書 1.doc」の文書を作成して、Document Manager データベースに登録することを示しています。

同様に、2 では文書「文書 2.doc」、3 では「文書 3.doc」に関して記述しています。

(c) 一括登録ユーティリティの実行

文書を一括登録するには、一括登録ユーティリティを実行します。一括登録ユーティリティを実行すると、文書格納ディレクトリから、定義ファイルに定義した文書を一括登録します。

一括登録ユーティリティの入力例を、次に示します。

```
ISregist -d /usr/infoshare/tmp ...1
         -f /tmp/regist_file ...2
```

1. 文書格納ディレクトリの指定
2. 定義ファイル名の指定

(3) 文書を一括登録する時に分類索引に登録するには

ここでは、文書を一括登録する時に分類索引に登録する操作を説明します。

(a) 登録用属性ファイルの作成

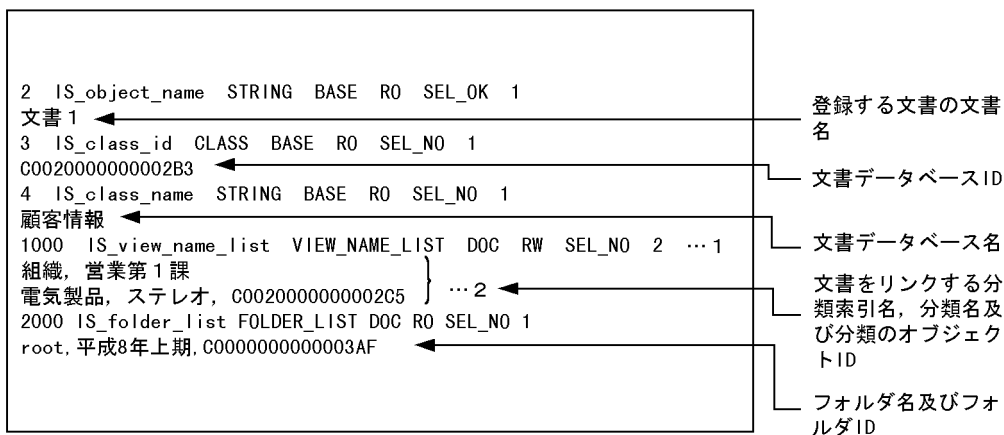
文書を一括登録する際に、登録用属性ファイルに、文書をリンクする分類索引名及び分類名を記述します。

登録用属性ファイルの記述例を示します。

(例 2)

文書 1 を分類索引に登録する場合の登録用属性ファイルの例

図 7-4 文書を分類索引に登録する場合の登録用属性ファイルの例



1. 文書を登録する分類索引に関する属性
2. 文書を登録する分類索引に関する属性値

この例では、文書 1 を組織分類索引の分類「営業第 1 課」、及び電気製品分類索引の分類「ステレオ」にリンクすることを示します。

分類索引名及び分類名を記述するときの注意事項を次に示します。

1. 一つの分類索引に同じ名称の分類が複数ある場合は、分類 ID を指定してください。分類索引に同じ分類名が複数ある場合、分類 ID を省略すると、すべての同じ分類名の分類に文書をリンクします。なお、分類 ID は、分類属性ウィンドウで参照できません。
2. 1 文書の登録で指定できる分類の数は、4095 以内です。

(b) 定義ファイルの作成

文書の一括登録と同様に、定義ファイルを作成します。

(c) 一括登録ユティリティの実行

文書の一括登録と同様に、一括登録ユティリティを実行して、文書を一括登録します。

(4) 関連ファイルを一括登録するには

関連ファイルを文書とともに一括登録する操作は、「(1) 文書を一括登録するには」と同じです。

ただし、次の点に注意してください。

1. 関連ファイルを文書格納ディレクトリに格納する
一括登録する関連ファイルは、文書と同じディレクトリに格納してください。
2. 関連ファイルの名称を AP 情報管理ファイルに記述する
文書を登録する一般文書データベースの AP 識別子に対応する AP 情報管理ファイルに、関連ファイル名を記述してください。
AP 情報管理ファイルについては、「5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定」を参照してください。
3. テキストファイルを登録する場合は、文書を登録する一般文書データベースに TS 情報 ID を設定しておいてください。なお、TS 情報 ID は TS 管理ファイル (/usr/infoshare/etc/bibts.config) で定義しておく必要があります。また、使用する全文検索サーバによって、環境設定ファイル (/usr/infoshare/etc/config) の bib_ts オペランドの設定内容は異なります。全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用している場合は、BIB を設定してください。全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用している場合は、BIB2 を設定してください。
4. 上記 1 及び 2 の条件を満たさない場合、関連ファイルは登録されません。また、1、2 及び 3 の条件を満たさない場合、テキストファイルは登録されません。どちらの場合も文書も登録されません。
5. テキストデータベースにテキストファイルを登録する場合、Document Manager 管理

7. システムの運用

者として登録されているユーザが作成したすべての TS 未登録の文書が登録されるので注意してください。

6. 文書を登録する一般文書データベースの AP 識別子に対応する AP 情報管理ファイルに、文書従属ファイルの指定があっても、一括登録時には更新日時は検査されません。
7. 全文検索サーバに登録する文書と登録しない文書を、同じ一般文書データベースに対して同時に一括登録する場合、文書従属ファイルとしてテキストファイルが指定されている AP 識別子は指定しないでください。
文書従属ファイルにテキストファイルの指定がない場合、テキストファイルの存在は検査されないで、文書だけが登録されます。

7.4.3 登録用属性ファイル

登録用属性ファイルは、文書の属性を記述するためのファイルです。登録用属性ファイルの形式については、「付録 B 属性ファイル」を参照してください。

ここでは、文書の一括登録の際に必要な項目について説明します。

(1) 登録用属性ファイルの必要項目

登録用属性ファイルは、文書格納ディレクトリに作成します。登録用属性ファイルに定義する項目を、次の表に示します。

表 7-6 登録用属性ファイルに定義する項目

属性名	必要可否	説明
文書名		必ず指定する。
文書データベース ID		必ず指定する。
文書データベース名		指定すると、文書データベース ID と照合される。文書データベース ID と文書データベース名が一致しない場合は、エラーになる。
所有者名		指定すると、文書の登録後に変更される。
作成者名		指定すると、文書の登録後に変更される。
コメント		指定すると、文書の登録後に変更される。
分類索引名		指定すると、文書と分類索引をリンクする。
フォルダ名		指定したフォルダに文書が登録される。指定しない場合、文書はデフォルトのフォルダに登録される。フォルダ ID の指定を省略すると、同じフォルダ名が複数ある場合には、フォルダ ID が最も小さいフォルダに登録される。
ユーザ定義属性		指定すると、ユーザ定義属性の属性値が設定される。

(凡例)

- ：必ず指定する。
- ：必要に応じて指定する。

注 上記以外の属性を定義しても、属性は変更されません。ただし、存在しない属性や誤った属性を指定すると、エラーになります。したがって、必要のない項目は指定しないでください。

登録用属性ファイルを作成するには、次の方法があります。

登録用属性ファイルの形式に従って作成する

他文書の参照用属性ファイルを複写して作成する

(2) 登録用属性ファイルの作成

(a) 登録用属性ファイルの形式に従って作成する

「付録 B 属性ファイル」の形式に従って、登録用属性ファイルを作成する方法です。このうち、文書の一括登録に必要な項目だけを定義します。

定義例を次に示します。なお、定義例での数字の項目については、各属性で共通の内容です。

図 7-5 登録用属性ファイルの定義例

1	2	3	4	5	6	7	
2	IS_object_name	STRING	BASE	RW	SEL_OK	1	} 文書名
	文書1	...	8				
3	IS_class_name	CLASS	BASE	RO	SEL_NO	1	} 文書データベースのオブジェクトID
	C0020000000002B3						
4	IS_class_name	STRING	BASE	RO	SEL_NO	1	} 文書データベース名※1
	顧客情報						
6	IS_owner_name	STRING	BASE	RO	SEL_NO	1	} 所有者名※2
	suzuki						
12	IS_creator_name	STRING	BASE	RW	SEL_OK	1	} 作成者名※2
	suzuki						
31	IS_comment	STRING	DOC	RW	SEL_OK	1	} コメント※2
	コメント						
1000	IS_view_name_list	VIEW_NAME_LIST	DOC	RW	SEL_NO	2	} 分類索引名及び分類名※3
	組織, 営業第1課						
	電気製品, ステレオ						
2000	IS_folder_list	FOLDER_LIST	DOC	RO	SEL_NO	1	} フォルダ名※4
	root, 平成8年上期, C000000000003AF						
30000	USER_STRING	STRING	USER	RW	SEL_OK	1	} ユーザ定義属性※2※5
	ユーザ定義属性						

注 図中の数字は、それぞれ次の属性を示します。

1. 属性識別子
2. 属性名
3. 属性型
4. 属性種類
5. 属性アクセス権
6. 属性検索権
7. 属性値情報行数

7. システムの運用

8. 属性値

注 1 文書データベース名を指定すると、文書データベース ID と照合されます。文書データベース ID と文書データベース名の内容が一致しない場合は、エラーになります。

注 2 指定すると、文書の登録後に指定した内容に変更されます。

注 3 分類索引名及び分類名を指定すると、文書とリンクさせます。

注 4 フォルダ名を指定すると、文書を指定したフォルダに登録します。指定しない場合、文書はデフォルトのフォルダに登録します。また、指定した内容に誤りがある場合、文書はデフォルトのフォルダに登録します。

注 5 ユーザ定義属性を指定する場合は、次の点に注意してください。

- 指定するユーザ定義属性は、登録先の一般文書データベースに追加されている必要があります。また、指定する属性名及び属性型の両方が、登録先の一般文書データベースに追加した属性と一致していなければなりません。
- 属性識別子には、任意の値を指定できます（参照用属性ファイルにユーザ定義属性を出力する場合は、30000 以降の値が出力されます）。
- オブジェクトリスト型の属性値を指定する場合、Document Manager の環境に存在するオブジェクト ID を指定しなければなりません。
- ユーザ定義属性は、複数個、指定できます。ただし、同じ属性名を重複して指定することはできません。

登録用属性ファイルの形式及び内容については、「付録 B 属性ファイル」を参照してください。

(b) 他文書の参照用属性ファイルを複写して作成する

既に Document Manager データベースに登録されている文書の参照用属性ファイルを複写して、登録用属性ファイルを作成する方法です。

参照用属性ファイルから登録用属性ファイルを作成する定義例を次に示します。

図 7-6 参照用属性ファイルから登録用属性ファイルを作成する定義例

1 IS_object_id OBJECT BASE RO SEL_NO 1 C0020000000002A4	}	文書ID※ ¹
2 IS_object_name STRING BASE RW SEL_OK 1 文書1		
3 IS_class_id CLASS BASE RO SEL_NO 1 C0020000000002B3	}	2. 文書データベースID※ ¹
4 IS_class_name STRING BASE RO SEL_NO 1 顧客情報		
6 IS_owner_name STRING BASE RO SEL_NO 1 suzuki	}	4. 所有者名
11 IS_create_time TIME BASE RO SEL_OK 1 773891535 1995/07/11-12:52:15		
12 IS_creator_name STRING BASE RW SEL_OK 1 suzuki	}	4. 作成者名
13 IS_modify_time TIME BASE RO SEL_OK 1 773891535 1995/07/11-12:13:41		
:		
30 IS_ts_document_id INT DOC RO SEL_NO 1 -1	}	TS文書ID※ ¹
31 IS_comment STRING DOC RW SEL_OK 1 コメント		
1000 IS_view_name_list VIEW_NAME_LIST DOC RW SEL_NO 2 組織, 営業第1課 電気製品, ステレオ	}	6. 分類索引名及び分類名
2000 IS_folder_list FOLDER_LIST DOC RO SEL_NO 1 root, 平成8年上期, C0000000000003AF		
30000 USER_STRING STRING USER RW SEL_OK 1 ユーザ定義属性	}	5. ユーザ定義属性※ ²

(参照用属性ファイルの修正内容)

1. 文書名を、登録する文書の名称に変更します。
2. 文書を登録する文書データベースIDに変更します。
3. 必要があれば修正します。修正すると、2で指定した文書データベースIDと照合されます。文書データベースIDと文書データベース名の内容が一致しない場合は、エラーになります。文書データベース名を照合する必要がない場合は、削除してください。
4. 必要があれば修正します。修正すると、変更した内容で一括登録されます。削除すると、Document Manager 管理者のユーザID及びユーザ名になります。
5. 必要があれば修正します。修正すると、変更した内容で一括登録されます。一括登録する必要がない場合は削除してください。
6. 文書を分類索引にリンクする場合は、分類索引名及び分類名を追加してください。

注 1 修正しても属性は変更されません。ただし、存在しない属性や誤った属性を指定すると、エラーになります。したがって、必要のない属性を指定したり修正したりしないでください。

7. システムの運用

注 2 ユーザ定義属性を指定する場合は、次の点に注意してください。

- 指定するユーザ定義属性は、登録先の一般文書データベースに追加されている必要があります。また、指定する属性名及び属性型の両方が、登録先の一般文書データベースに追加した属性と一致していなければなりません。
- 属性識別子には、任意の値を指定できます（参照用属性ファイルにユーザ定義属性を出力する場合は、30000 以降の値が出力されます）。
- オブジェクトリスト型の属性値を指定する場合、Document Manager の環境に存在するオブジェクト ID を指定しなければなりません。
- ユーザ定義属性は、複数個、指定できます。ただし、同じ属性名を重複して指定することはできません。

(3) 登録用属性ファイルの作成時の注意事項

表 7-5 で挙げた項目以外の属性を指定しても、属性は変更されません。ただし、存在しない属性や誤った属性を指定すると、エラーになります。したがって、必要のない項目は指定しないでください。

同じ属性が指定された場合、エラーになります。

行の先頭に # (0x23) を記述すると、その行は行端までコメントになります。ただし、属性型の情報と属性値の情報との間にはコメントは記述できません。記述した場合は、属性値とみなされます。

クライアントで参照用属性ファイルから登録用属性ファイルを作成すると、定義例のように表示されません。これは、参照用属性ファイルの改行コード ('0x0a') と、クライアントの改行コード ('0x0d'0x0a') が異なるためです。このため、参照用属性ファイルは、サーバ側で編集することをお勧めします。

分類索引、分類又はフォルダの名称に半角コンマが含まれている場合、正しく文書を登録することができません。発生する障害及び対処方法については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

7.4.4 定義ファイル

定義ファイルには、一括登録する文書の名称と登録用属性ファイルの名称を指定します。ここでは、定義ファイルの形式について説明します。

(1) 定義ファイルの形式

```
{regist doc_file_name=文書実ファイル名  
  arg_file_name=登録用属性ファイル名}...
```

(a) regist パラメタ

regist パラメタは、一括登録する文書の数だけ、繰り返して指定します。繰り返す数に制限はありません。

(b) doc_file_name 句

文書格納ディレクトリ中の文書実体ファイル名を指定します。なお、文書実体ファイル名には、次の名称及び文字は指定できません。

「IS_」及び「_」(アンダースコア)で始まる名称

英大文字

= (0x3D)

(c) arg_file_name 句

文書格納ディレクトリ中の登録用属性ファイル名を指定します。なお、登録用属性ファイル名には、UNIX で使用できる文字を使用してください。

(2) 注意事項

文書の一括登録を実行する場合は、オブジェクトサーバの最大同時排他要求数を超えないように注意してください。最大同時排他要求数は、システム共通定義ファイルで定義します。

1 行に複数の句は記述できません。

一つの句を改行して記述できません。

行の先頭に半角の # を記述すると、その行はコメントとして扱われます。

登録対象の文書データベースの AP 情報で %ALL 指定が記述されている場合、doc_file_name 句で指定したファイルが存在するディレクトリ内の全ファイルが文書に登録されます。したがって、このような場合は、文書対応にディレクトリを分けてください。

(3) 定義例

定義ファイルの記述例を次に示します。

文書 1 の登録

```
regist doc_file_name=文書1/文書1.doc
      arg_file_name=文書1/文書1.arg
```

文書 2 の登録

```
regist doc_file_name=文書2/文書2.doc
      arg_file_name=文書2/文書2.arg
```

文書 3 の登録

```
regist doc_file_name=文書3/文書3.doc
      arg_file_name=文書3/文書3.arg
```

7.5 フォーム文書の移行

この節では、フォーム文書データベースに登録されているフォーム文書を、ほかのフォーム文書データベースに移行する方法について説明します。

7.5.1 フォーム文書の移行とは

フォーム文書の移行とは、既存のフォーム文書データベースに登録されているフォーム文書及び添付ファイルを、別のフォーム文書データベースに登録し直すことです。移行先のフォーム文書データベースは、移行元と同じサーバ及び異なるサーバのどちらでも可能です。

フォーム文書の移行には、フォーム文書抽出ユティリティ (ISexform コマンド) とフォーム文書取り込みユティリティ (ISimform コマンド) を使用します。移行する際、まず、フォーム文書抽出ユティリティで、移行元のフォーム文書データベースのフォーム文書の移行情報を任意のディレクトリに抽出します。その後、フォーム文書取り込みユティリティで、移行先のフォーム文書データベースに、抽出した移行情報を取り込みます。

フォーム文書抽出ユティリティについては、「8.21 フォーム文書の抽出 (ISexform)」を、フォーム文書取り込みユティリティについては、「8.22 フォーム文書の取り込み (ISimform)」を参照してください。

この機能は、例えば、02-10 以前のバージョンの Document Manager を使用して作成したフォーム文書データベースのフォーム文書を、固定長文字列型の属性を設定できる 02-20 以降のバージョンの Document Manager のフォーム文書データベースに移行する場合などに使用できます。

7.5.2 フォーム文書の移行で移行できる情報

フォーム文書の移行では、次の情報だけが移行できます。

- フォーム文書データベースに登録されているフォーム文書
- 移行するフォーム文書の添付ファイル

したがって、移行先のフォーム文書データベースや、フォーム文書データベースに定義するフォーム定義は、あらかじめ移行先に作成しておく必要があります。

7.5.3 フォーム文書を移行するための準備

フォーム文書をユティリティによって移行する前に、移行先のフォーム文書データベースに次の準備をしてください。

(a) フォーム定義の定義

移行元のフォーム文書データベースに定義されているフォーム定義と同じ名称のフォーム定義を、移行先のフォーム文書データベースにすべて定義してください。ただし、移行元に存在しない名称のフォーム定義を移行先のフォーム文書データベースに追加してもかまいません。

(b) 属性名の定義

移行元のフォーム文書データベースに定義されているユーザ定義属性の属性名と同じ名称の属性を、移行先のフォーム文書データベースにすべて定義してください。ただし、属性の並び順は異なってもかまいません。また、移行元に存在しない名称の属性定義を、移行先のフォーム文書データベースに追加してもかまいません。

(c) 属性型の定義

移行元と移行先のフォーム文書データベースで、同じ名称の属性の型は、すべて同一にしておく必要があります。

また、文字列型と固定長文字列型の区別はされません。これらは同じ型とみなされます。

7.5.4 フォーム文書の移行手順

フォーム文書は、次の手順で移行します。

1. 移行先のフォーム文書データベースを作成する
このとき、「7.5.3 フォーム文書を移行するための準備」で説明した準備をしてください。
2. ほかのユーザが Document Manager にログインしている場合は、ログアウトさせる
3. 移行元フォーム文書データベースがあるサーバ上で、フォーム文書抽出ユティリティを実行して、移行元のフォーム文書データベースに登録されているフォーム文書の情報を作業用ディレクトリに出力する
フォーム文書抽出ユティリティの実行方法については、「8.21 フォーム文書の抽出 (ISexform)」を参照してください。
4. 移行先フォーム文書データベースがあるサーバ上で、フォーム文書取り込みユティリティを実行して、移行先のフォーム文書データベースにフォーム文書を作成する
フォーム文書取り込みユティリティの実行方法については、「8.22 フォーム文書の取り込み (ISimform)」を参照してください。

! 注意事項

移行元と別のサーバのフォーム文書データベースに、フォーム文書を作成する場合は、手順 3. で作成した作業用ディレクトリ下のすべての情報を移行先サーバに転送しておいてください。また、転送先のディレクトリは、あらかじめ空にしておいてください。

7.5.5 フォーム文書に移行する場合の注意事項

移行元の属性値の長さが、移行先の属性の定義長より長い場合は、超えた部分を切り捨てて処理が継続されます。このとき、警告メッセージが出力されます。

移行元のフォーム文書データベースに、返信元文書が存在しない文書がある場合、移行先のフォーム文書データベースで、システムが文書通番を一つ割り当てて使用します。移行元のフォーム文書データベースに、返信元文書が存在しない文書が複数あっても、システムで使用する文書の通番は一つだけです。

7.6 一般文書の圧縮

この節では、一般文書の圧縮と、圧縮したファイルの管理について説明します。

7.6.1 一般文書の圧縮とは

一般文書を圧縮して管理できます。圧縮することで、一般文書を格納するためのディスク容量を節約できます。さらに、圧縮した一般文書を文書配布機能で配布するとき、ファイルの転送時間を短縮できます。

圧縮できるファイルの種類は次のとおりです。

文書実体ファイル

関連ファイル

参照用属性ファイル

ただし、テキストファイルは圧縮できません。

さらに、次のファイルは圧縮できません。

文書ひな形ファイル

フォーム文書

フォーム文書の添付ファイル

フォームの定義ファイル

(1) 一般文書の圧縮の操作

一般文書は、サーバ及びクライアントの両方から圧縮の指示ができます。クライアントで文書の圧縮及び圧縮の解除をすると、サーバでの負荷を軽減できます。ただし、クライアントマシンの処理能力によっては処理に時間を要する場合があります。したがって、一般文書はなるべくサーバ側で圧縮し、必要に応じてクライアントで圧縮してください。

(a) サーバでの一般文書の圧縮

一般文書を圧縮するかどうかは、環境設定ファイルに指定します。

環境設定ファイルの DocCompress(文書ファイル圧縮モード)に use を指定すると、一般文書は次のように圧縮されます。

新規文書を作成するとき、文書ひな形を基に作成した一般文書は、圧縮して格納されます。

作業領域から Document Manager サーバにファイルを登録する場合は、ファイルを圧縮して格納します。

ただし、Document Manager サーバから作業領域に一般文書を取り出す場合は、圧縮されたファイルは伸長されます。

7. システムの運用

(b) クライアントでの一般文書の圧縮

Groupmax Integrated Desktop のメニューから圧縮を指定した場合、一般文書はクライアントで圧縮してサーバに格納されます。

Groupmax Integrated Desktop のメニューから圧縮の解除を指定した場合、一般文書は圧縮した状態で取り出された後、クライアントで圧縮解除されます。

(2) 既存の一般文書の圧縮

Document Manager データベースに格納されている既存の一般文書を圧縮するには、文書ファイル圧縮ユティリティを使用します。文書ファイル圧縮ユティリティについては、「8.24 文書の圧縮 (IScomprs)」を参照してください。

(3) 圧縮されたファイルの伸長

圧縮されて Document Manager データベースに格納されている一般文書を伸長するには、文書ファイル圧縮解除ユティリティを使用します。文書ファイル圧縮解除ユティリティについては、「8.25 文書の圧縮の解除 (ISexpand)」を参照してください。

7.6.2 文書配布時の一般文書の圧縮

圧縮した一般文書を、文書配布機能で配布できます。

(1) 文書配布時の文書実体ファイルの圧縮の指定

文書配布時に配布する一般文書を圧縮するかどうかは、環境設定ファイルに指定します。

環境設定ファイルの ReplicaCompressSend (文書配布時の文書ファイル圧縮モード) に use を指定すると、文書は圧縮して配布されます。

(a) 作成されるエクスポートファイル

環境設定ファイルの ReplicaCompressSend (文書配布時の文書ファイル圧縮モード) に use が指定されていると、エクスポートファイルは文書実体ファイルを圧縮した状態で作成されます。

環境設定ファイルの DocCompress (文書ファイル圧縮モード) に use が指定されていても、ReplicaCompressSend (文書配布時の文書ファイル圧縮モード) に nouse が指定されていると、エクスポートファイルは文書実体ファイルを伸長した状態で作成されます。

(b) 配布された文書の圧縮

配布されたエクスポートファイルと、配布先サーバでの環境設定ファイルの設定によって、配布先サーバに文書が登録されるときの状態が異なります。エクスポートファイルの状態及び配布先サーバでの環境設定ファイルの設定と、登録される文書の圧縮の状態を、表 7-6 に示します。

表 7-7 エクスポートファイルの状態及び配布先サーバでの設定と登録される一般文書の圧縮の状態

エクスポートファイルの状態	配布先サーバでの環境設定ファイルの設定	
	DocCompress (文書ファイル圧縮)=use	DocCompress (文書ファイル圧縮)=nouse
圧縮された状態		
圧縮されていない状態		×

(凡例)

：一般文書は圧縮された状態で登録される。

×：一般文書は伸長された状態で登録される。

注 一度参照してチェックインすると、一般文書は伸長されます。

(2) 注意事項

配布先サーバに、バージョン 02-10 以前のサーバがある場合は、データを圧縮したエクスポートファイルは配布しないでください。データを圧縮したエクスポートファイルを配布すると、02-10 以前のサーバでは取り込めません。したがって、配布した文書は配布先で参照できません。

7.7 アクセスログに関する運用

Document Manager では、ログインやログアウト、及び一般文書の操作時の情報をアクセスログとして出力します。この節では、アクセスログが出力されるログファイルと、その運用について説明します。

7.7.1 アクセスログの取得

ここでは、アクセスログで取得される情報について説明します。

(1) アクセスログで出力される情報

アクセスログは、ログイン、ログアウト及び一般文書の操作時の情報です。アクセスログを参照すると、システムの使用状況や、一般文書のアクセス頻度などが確認できます。アクセスログで示される情報は、次のとおりです。

ログイン時の情報

ログアウト時の情報

一般文書の実体を作成した時の情報

一般文書の実体を登録した時の情報

一般文書の実体を削除した時の情報

一般文書の実体を作業領域に取り出した時の情報

一般文書の実体を作業領域から削除した時の情報

一般文書のバージョンを削除した時の情報

一般文書のバージョンを作業領域に取り出した時の情報

一般文書を Groupmax WWW から参照したときの情報

一般文書の実体を複写した時の情報

一般文書の実体を移動した時の情報

フォーム文書を作成した時の情報

フォーム文書を取得した時の情報

フォーム文書を更新した時の情報

フォーム文書を削除した時の情報

フォーム文書を編集モードで取り出した時の情報

フォーム文書の編集モードでの取り出しを解除した時の情報

これらの情報は、操作が正常終了した場合だけログファイルに出力されます。

なお、ログファイルの内容は Excel などの表計算ソフトウェアで参照できます。

(2) アクセスログの取得の仕組み

(a) アクセスログを出力するファイル

アクセスログは、次の二つのファイルに出力されます。

アクセスログファイル ¹
/usr/infoshare/spool/aclog

アクセスログバックアップファイル ²
/usr/infoshare/spool/aclog.bak

注 1 以降、このファイルを「/aclog」と呼びます。

注 2 以降、このファイルを「/aclog.bak」と呼びます。

/aclog が一杯になると、/aclog.bak にバックアップが取得されます。バックアップの処理では、/aclog.bak に /aclog の内容が複写されます。その後、/aclog の内容は消去されます。

バックアップの取得後、/aclog の使用容量が 80% を超えた場合は、段階的にメッセージが表示されます。この状態で処理を続行すると、/aclog.bak に /aclog の内容が複写されます。したがって、/aclog.bak に必要なアクセスログが残っている場合は、このメッセージが出力された時点で任意のファイルに退避してください。

また、Document Manager サーバの停止中に、アクセスログを任意のファイルに退避すると、新たにアクセスログを取得できます。この操作方法を次に示します。

1. /aclog を任意のファイルに退避する

2. /aclog を削除する

新たに /aclog にアクセスログが出力されます。

(b) 環境設定ファイルでの定義

アクセスログを取得する場合には、環境設定ファイルで定義する必要があります。また、ログファイルサイズもこのファイルで定義します。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

フォルダ情報のアクセスログを取得したい場合は、アクセスログリストファイルのテキストを作成してください。

アクセスログリストファイルの作成方法は、次のとおりです。

アクセスログリストファイルの格納先
/usr/infoshare/etc/acloglst.txt

ファイル形式

アクセスログリストに指定するイベントコードと形式を示します。

7. システムの運用

/usr/infoshare/etc/acloglst.txt

LOGIN

LOGOUT

CRT_DOC_OBJ

:

:

TAB_DELIMITER

FOLDER_INFO

LOGIN

ログインしたことの表示を取得するときに指定します。

LOGOUT

ログアウトしたことの表示を取得するときに指定します。

CRT_DOC_OBJ

一般文書の実体を作成したことの表示を取得するときに指定します。

REG_DOC_OBJ

一般文書の実体を登録したことの表示を取得するときに指定します。

DEL_DOC_OBJ

一般文書の実体を削除したことの表示を取得するときに指定します。

ACT_DOC_OBJ

一般文書の実体を作業領域に取り出したことの表示を取得するときに指定します。

DACT_DOC_OBJ

一般文書の実体を作業領域から削除したことの表示を取得するときに指定します。

DEL_DOC_OBJ_VER

一般文書のバージョンを削除したことの表示を取得するときに指定します。

ACT_DOC_OBJ_VER

一般文書のバージョンを作業領域に取り出したことの表示を取得するときに指定します。

REFER_DOC_OBJ

Groupmax WWW クライアントから一般文書を参照したときのログ情報を取得するときに指定します。

COPY_DOC_OBJ

一般文書の実体を複写したときのログ情報を取得するときに指定します。

MOVE_DOC_OBJ

一般文書の実体を移動したときのログ情報を取得するときに指定します。

CRT_FORM_DOC

フォーム文書の作成に成功した時のログ情報を取得するときに指定します。

GET_FORM_DOC

フォーム文書の取得に成功した時のログ情報を取得するときに指定します。

MOD_FORM_DOC

フォーム文書の更新に成功した時のログ情報を取得する場合に指定します。

DEL_FORM_DOC

フォーム文書の削除に成功した時のログ情報を取得する場合に指定します。

LOCK_FORM_DOC

フォーム文書の編集モードでの取り出し成功時のログ情報を取得する場合に指定します。

UNLOCK_FORM_DOC

フォーム文書の編集モードでの取り出し解除成功時のログ情報を取得する場合に指定します。

TAB_DELIMITER

区切り文字にタブコードを使用することを指定します。

FOLDER_INFO

一般文書进行操作するとき、フォルダ情報の表示を取得するときに指定します。

注意事項

- 行末は改行コードを指定してください。また、イベントコードの前後に空白（1バイト，2バイト）は指定できます。
- 行の先頭，又は行の途中に#を指定すると，その行の#から行端までコメントになります。
- イベントコードの指定を誤った場合，又はアクセスログリストファイルに何も指定していない場合は，REFER_DOC_OBJ から FOLDER_INFO のイベントコードを除いた環境設定ファイルで定義されているアクセスログが出力されます。
- アクセスログリストファイルは，インストール時に作成されませんので必要に応じて作成してください。

(c) 注意事項

Document Manager サーバの起動中に，/aclog を参照できます。ただし，ログファイルの更新や削除をした場合の動作は保証されません。

7.7.2 アクセスログの出力形式

(1) ログイン又はログアウト時の出力形式

ログイン又はログアウト時の情報を出力する形式を示します。

Infoshare YYYY/MM/DD hh:mm:ss AA...AA

MM...MM UU...UU

(は、イベントコードで TAB_DELIMITER を指定すると，1バイト以上の半角の空白が水平タブとして出力されます。)

Infoshare

プログラムコードです。Document Manager で取得した情報であることを示しま

7. システムの運用

す。

YYYY/MM/DD

イベントコードに示される操作があった年月日を示します（半角英数字 10 けた）。

hh:mm:ss

イベントコードに示される操作があった時刻を示します（半角英数字 8 けた）。

AA...AA

イベントコードです。どの時点のアクセスログであるかを次の内容で表示します。

LOGIN

ログインしたことを示します。

LOGOUT

ログアウトしたことを示します。

MM...MM

イベントコードに示される操作を実行したサーバのホスト名を示します（半角英数字 8 けた）。

UU...UU

イベントコードに示される操作をしたユーザ名を示します（半角英数字 8 けた）。

(2) 一般文書の操作時の出力形式

一般文書の操作時の情報を出力する形式を示します。

Infoshare YYYY/MM/DD hh:mm:ss AA...AA

MM...MM UU...UU II...II NN...NN VV...VV

FF...FF TT...TT

(は、イベントコードで TAB_DELIMITER を指定すると、1 バイト以上の半角の空白が水平タブとして出力されます。)

Infoshare

プログラムコードです。Document Manager で取得した情報であることを示します。

YYYY/MM/DD

イベントコードに示される操作があった年月日を示します（半角英数字 10 けた）。

hh:mm:ss

イベントコードに示される操作があった時刻を示します（半角英数字 8 けた）。

AA...AA

イベントコードです。どの時点のアクセスログであるかを次の内容で表示します。

CRT_DOC_OBJ

一般文書の実体を作成したことを示します。

REG_DOC_OBJ

一般文書の実体を登録したことを示します。

DEL_DOC_OBJ

一般文書の実体を削除したことを示します。

ACT_DOC_OBJ

一般文書の実体を作業領域に取り出したことを示します。

DACT_DOC_OBJ

一般文書の実体を作業領域から削除したことを示します。

DEL_DOC_OBJ_VER

一般文書のバージョンを削除したことを示します。

ACT_DOC_OBJ_VER

一般文書のバージョンを作業領域に取り出したことを示します。

REFER_DOC_OBJ

Groupmax WWW クライアントから一般文書を参照したことを示します。

COPY_DOC_OBJ

一般文書の実体を複写したことを示します。

MOVE_DOC_OBJ

一般文書の実体を移動したことを示します。

MM...MM

イベントコードに示される操作を実行したサーバのホスト名を示します（半角英数字 8 けた）。

UU...UU

イベントコードに示される操作をしたユーザ名を示します（半角英数字 8 けた）。

II...II

イベントコードに示される操作の対象になったオブジェクトの ID（文書 ID）を示します（半角英数字 16 けた）。

NN...NN

イベントコードに示される操作の対象になったオブジェクトの名称（文書名）を示します（半角で 63 文字）。

VV...VV

イベントコードに示される操作の対象になった一般文書のバージョン番号を示します（半角英数字）。ただし、この項目は、一般文書のバージョンを操作した場合だけ出力されます。

FF...FF

7. システムの運用

イベントコードに示される操作の対象になった一般文書のフォルダ ID を示します
(半角英数字)

TT...TT

イベントコードに示される操作の対象になった一般文書のフォルダ名を示します
(半角英数字)

(3) フォーム文書の操作時の出力形式

フォーム文書の操作時の情報を出力する形式を示します。

Infoshare YYYY/MM/DD hh:mm:ss AA...AA

MM...MM UU...UU II...II NN...NN VV...VV

(は、イベントコードで TAB_DELIMITER を指定すると、1 バイト以上の半角の空白が水平タブとして出力されます。)

Infoshare

プログラムコードです。Document Manager で取得した情報であることを示します。

YYYY/MM/DD

イベントコードに示される操作があった年月日を示します (半角英数字 10 けた)

hh:mm:ss

イベントコードに示される操作があった時刻を示します (半角英数字 8 けた)

AA...AA

イベントコードです。どの時点のアクセスログであるかを次の内容で表示します。

CRT_FORM_DOC

フォーム文書を作成したことを示します。

GET_FORM_DOC

フォーム文書を取得したことを示します。

MOD_FORM_DOC

フォーム文書を更新したことを示します。

DEL_FORM_DOC

フォーム文書を削除したことを示します。

LOCK_FORM_DOC

フォーム文書の編集モードでの取り出しに成功したことを示します。

UNLOCK_FORM_DOC

フォーム文書の編集モードでの取り出し解除に成功したことを示します。

MM...MM

イベントコードに示される操作を実行したサーバのホスト名を示します（半角英数字 8 けた）。

UU...UU

イベントコードに示される操作をしたユーザ名を示します（半角英数字 8 けた）。

II...II

イベントコードに示される操作の対象になったフォーム文書の文書通番を示します（半角英数字）。

NN...NN

イベントコードに示される操作の対象になったフォーム文書データベース ID を示します（半角英数字）。

VV...VV

イベントコードに示される操作の対象になったフォーム文書データベース名を示します（半角で 63 文字）。

7.8 文書配布ログに関する運用

Document Manager では、文書配布機能での、文書の配布に関する情報（配布日時、サーバ名、配布対象グループの ID など）を文書配布ログとして出力します。この節では、文書配布ログが出力されるログファイルと、その運用について説明します。

7.8.1 文書配布ログの取得

ここでは、文書配布ログで取得される情報について説明します。

(1) 文書配布ログで出力される情報

文書配布ログは、文書配布機能による文書の配布時の情報です。配布元サーバでのエクスポートファイルの作成時、及び配布先サーバでのエクスポートファイルの取り込み時に、それぞれ出力されます。文書配布ログを参照すると、文書配布機能による文書の配布状況を確認できます。

なお、ログファイルの内容は Excel などの表計算ソフトウェアで参照できます。

(2) 文書配布ログの取得の仕組み

(a) 文書配布ログを出力するファイル

文書配布ログは、エクスポートファイルの作成時に、配布元サーバに出力されます。また、エクスポートファイルの取り込み時に、配布先サーバに出力されます。

それぞれの場合に出力されるファイルを次に示します。

エクスポートファイルの作成時に出力するファイル（配布元サーバ）

- 配布元文書配布ログファイル
/usr/infoshare/spool/explog
- 配布元文書配布ログバックアップファイル
/usr/infoshare/spool/explog.bak

エクスポートファイルの取り込み時に出力するファイル（配布先サーバ）

- 配布先文書配布ログファイル
/usr/infoshare/spool/implog
- 配布先文書配布ログバックアップファイル
/usr/infoshare/spool/implog.bak

配布元サーバ及び配布先サーバのどちらの場合も、文書配布ログファイルが一杯になると、文書配布ログバックアップファイルにバックアップが取得されます。バックアップの処理では、初めに文書配布ログファイルの内容が文書配布ログバックアップファイルに複写されます。その後、文書配布ログファイルの内容は消去されます。

バックアップの取得後、文書配布ログファイルの使用容量が 80%を超えた場合は、段階的にメッセージが表示されます。この状態で処理を続けると、文書配布ログファイルの

内容が文書配布ログバックアップファイルに複写されます。そのため、文書配布ログバックアップファイルに必要な情報が残っている場合は、このメッセージが表示された時点で任意のファイルに退避してください。

また、Document Manager サーバの停止中に、文書配布ログを任意のファイルに退避すると、新たに文書配布ログを取得できます。この操作方法を次に示します。

1. 文書配布ログファイルを任意のファイルに退避する
2. 文書配布ログファイルを削除する
文書配布ログファイルが新規に作成され、文書配布ログが出力されます。

(b) 環境設定ファイルでの定義

文書配布ログを取得する場合には、環境設定ファイルで定義する必要があります。また、ログファイルサイズもこのファイルで定義します。

環境設定ファイルについては、「5.7 Document Manager での環境設定」を参照してください。

7.8.2 文書配布ログの出力形式

文書配布ログファイルの出力形式を次に示します。なお、配布元サーバと配布先サーバのどちらに出力する場合も、形式は同じです。

Infoshare YYYY/MM/DD hh:mm:ss MM...MM UU...UU

II...II NN...NN LL...LL

Infoshare

プログラムコードです。Document Manager で取得した情報であることを示します。

YYYY/MM/DD

配布元サーバの場合は、エクスポートファイルの作成年月日を示します。配布先サーバの場合は、エクスポートファイルの取り込み日付を示します。どちらの場合も半角英数字 10 けたです。

hh:mm:ss

配布元サーバの場合は、エクスポートファイルの作成時刻を示します。配布先サーバの場合は、エクスポートファイルの取り込み時刻を示します。どちらの場合も半角英数字 8 けたです。

MM...MM

文書配布ログを出力したサーバのホスト名を示します（半角英数字 8 文字）。

UU...UU

エクスポートファイルの作成及び取り込みを実行したユーザ名を示します（半角英

7. システムの運用

数字 8 文字)。

II...II

エクスポートファイルの作成及び取り込みの対象となった、文書配布対象グループのオブジェクト ID を示します (半角英数字 16 けた)。

NN...NN

エクスポートファイルの作成及び取り込みの対象となった、文書配布対象グループのオブジェクト名を示します (半角で 63 文字)。

LL...LL

メール連携機能を使用するとき、配布元で出力するログの場合は、配布先のサーバのメール ID を示します。配布先で出力するログの場合は、配布元のサーバのメール ID を示します。

7.9 ファイルの整合性に関する運用

この節では、Document Manager データベースに登録されている文書の整合を取る方法について説明します。

ファイルの整合を取るには、ファイル整合性ユティリティを使用してください。

ファイル整合性ユティリティについては、「8.10 ファイルの整合 (ISfsck)」を参照してください。

また、Document Manager データベースの文書の状態と作業領域のディレクトリの整合を取るには、サーバ作業領域チェックユティリティを使用します。サーバ作業領域チェックユティリティについては、「8.11 サーバ作業領域のチェック (ISdirchk)」を参照してください。

7.9.1 全文検索サーバのテキストデータベースとの文書の整合性

全文検索サーバと連携する場合、文書は Document Manager データベースとテキストデータベースの両方に登録します。しかし、障害が原因で、テキストデータベースに登録された文書が Document Manager データベースには存在しない場合があります。これは、Document Manager 又はオブジェクトサーバで発生する障害が原因です。この状態のとき、Document Manager データベースとテキストデータベースの整合は取れていません。

例えば、文書の全バージョン数が全文検索サーバで指定した定義可能数に達していないのに、文書を全文検索サーバに登録できない場合は、整合が取れていません。

このような場合は、ファイル整合性ユティリティで `-t` オプションを指定して実行してください。これによって、Document Manager データベースに存在しないでテキストデータベースに存在する文書が、テキストデータベースから削除されます。

7.9.2 サーバとクライアントの作業領域間の文書の整合性

一人のユーザが一つの文書を複数のクライアントで操作すると、サーバとクライアントの作業領域で不整合が起きることがあります。

次に例を示します。

(例)

1. ユーザ A が、クライアント CL1 で文書 X を更新する
2. ユーザ A が、クライアント CL2 で文書 X を削除又は作業領域から削除する

このような操作では、サーバ及びクライアント CL2 の作業領域から文書 X は削除され

7. システムの運用

ます。しかし、クライアント CL1 の作業領域には文書 X が残り、サーバの作業領域と整合が取れなくなります。

この場合は、次のように対処してください。

1. 作業領域から文書を削除して不整合になった場合は、文書の残っているクライアント（例ではクライアント CL1）の作業領域から文書を削除してください。作業領域に残った文書が必要な場合は、必要な文書を一度ほかのディレクトリに退避してください。その後、文書を作業領域に取り出して、退避した文書に置き換えてサーバに保存してください。
2. 文書を削除して不整合になった場合は、新規文書を作成し、作業領域に残った文書をファイル一覧で指定して取り込んでください。

なお、クライアントの作業領域にない文書がサーバの作業領域にある場合、クライアントの作業領域とサーバの作業領域の整合を取る必要があります。この場合、チェックアウトして文書进行操作するか、又は文書を作業領域から削除する操作をしてください。

7.9.3 文書の状態と作業領域との整合性

「文書を開く」などの操作によって文書が作業領域に転送されると、オブジェクトサーバ上に、文書が作業領域に取り出されているという状態が記憶されます。

しかし、ディスク障害などが発生すると、作業領域を削除して再作成する場合があります。このような場合、取り出された文書は作業領域から削除されます。しかし、オブジェクトサーバ上では、「文書が作業領域に取り出されている」と記憶されたままになっている場合があります。この場合、文書の状態と作業領域の状態の整合が取れていません。

この場合の整合を取るには、ファイル整合性ユティリティで `-w` オプションを指定して実行してください。これによって、作業領域に存在しないのに「作業領域に取り出されている」と記憶されている文書の状態が、「作業領域に存在しない」という状態に変更されます。

また、文書を作業領域に取り出すと、サーバの作業領域には取り出した文書ごとにディレクトリが作成されます。このディレクトリと Document Manager データベースの文書の状態に不整合が発生する場合があります。

この場合には、サーバ作業領域チェックユティリティを実行して、文書の状態とサーバの作業領域のディレクトリの整合を取ってください。これによって、作業領域にディレクトリが存在しないのに「作業領域に取り出されている」と記憶されている文書の状態が、「作業領域に存在しない」という状態に変更されます。また、「作業領域に存在しない」という状態の文書に対応するディレクトリがサーバの作業領域に存在する場合は、そのディレクトリが削除されます。

7.9.4 オブジェクトサーバとの整合性

Document Manager での文書は、文書実体ファイルを格納する領域と、属性を格納する領域で管理されています。属性を管理する領域は、オブジェクトサーバ上に作成されず。

しかし、障害などが原因で、文書実体ファイルが存在する文書の属性が、オブジェクトサーバに存在しない場合があります。反対に、文書実体ファイルが存在しない文書の属性が、オブジェクトサーバに存在する場合があります。このような状態のとき、文書実体ファイルと、オブジェクトサーバで管理されている属性の整合は取れていません。

文書実体ファイルとオブジェクトサーバ上の属性との整合を取るには、ファイル整合性ユーティリティを使用します。

新規文書の作成中に、Document Manager 又はオブジェクトサーバが異常終了した場合は、文書の整合が取れていないことがあります。この場合はできるだけ、ファイル整合性ユーティリティを実行してください。

また、一般文書にファイルが一つも登録されていない場合、ファイル整合性ユーティリティで一般文書に対応する文書実体ディレクトリは削除されます。このとき「(2) 文書実体ファイルが存在しない場合の対処」に示す整合性ログファイルにログを出力します。

(1) オブジェクトサーバ上に文書の属性が存在しない場合の対処

オブジェクトサーバ上に属性が存在しないのに、文書実体ファイルは存在するという不整合が生じる場合があります。この場合は、ファイル整合性チェックユーティリティで `-d` オプションを指定して実行してください。これによって、属性が存在しない文書は、Document Manager データベースから削除されます。

(2) 文書実体ファイルが存在しない場合の対処

文書実体ファイルが存在しないのに、属性がオブジェクトサーバに存在する不整合が生じる場合があります。この場合は、次のように対処してください。

1. 環境設定ファイルに `FsckDbBothCheck=use` を指定する
2. ファイル整合性チェックユーティリティで `-d` オプションを指定して実行する

これによって、整合が取れていない文書の文書実体ファイル格納ディレクトリが修復されます。ただし、アプリケーションプログラムでユーザが作成した文書実体ファイル自体は修復されません。

ファイル整合性チェックユーティリティを実行して、文書実体ファイルが存在しない不整合が検出された場合は、次のように対処してください。

1. 文書実体ファイルが存在しない文書があったことを示すメッセージがイベントログに出力されるので確認する。
2. 詳細情報として整合性ログファイル (`/usr/infoshare/spool/fsckinf.txt`) が出力されるので確認する。整合性ログファイルでは、最後に実行した修復状態だけが保持されま

7. システムの運用

す。

3. 必要に応じて、不整合が生じた文書を再登録するか又は削除する。

整合性ログファイルの形式を示します。

AA...AA UU...UU II...II NN...NN

AA...AA

要因コードを示します。内容は次のとおりです。

INV_DB

オブジェクト（フォルダ、一般文書データベース、一般文書、フォーム文書データベース及びフォーム文書）に対応する文書実体ディレクトリが存在しないのに、オブジェクトの属性がオブジェクトサーバに存在する不整合が生じていることを示します。

NO_FILE

一般文書にファイルが一つも登録されていないため、一般文書に対応する文書実体ディレクトリを削除したことを示します。

UU...UU

オブジェクトの所有者のユーザ名を示します（半角で8文字）。

II...II

オブジェクトのIDを示します（半角で16文字）。

NN...NN

オブジェクトの名称を示します（半角で63文字）。

ここには一般文書、フォルダなどの名前が出力されます。

7.10 作業領域の運用

ここでは、作業領域の運用と注意事項について説明します。

7.10.1 作業領域と文書

(1) 文書のチェックアウト

文書の実体が格納されている Document Manager データベースから文書を作業領域に複写することをチェックアウトといいます。文書をチェックアウトすると、文書を参照したり編集したりできます。

また、文書をチェックアウトしたときには、文書に関連するファイルも同時に作業領域に取り出されます。ただし、文書を作業領域に取り出すとき、文書に書き込み権又は編集権がない場合は、作業領域の文書を編集できません。

さらに、文書のアクセス権を変更した場合、その文書を再度チェックアウトしないと、作業領域にある文書のアクセス権は変更できません。

文書をチェックアウトする場合、作業領域上に対応するユーザのディレクトリがない場合は、自動的に作成されます。また、作成されたディレクトリは、該当するユーザだけにアクセス権が自動的に与えられます。

(2) 文書のチェックイン

Document Manager データベースに文書を登録することを、チェックインといいます。

一度チェックアウトした文書は、チェックイン又はログアウトするまで作業領域に残ります。したがって不要になった文書は適時作業領域から削除してください。作業領域から文書を削除すると、文書に対応するディレクトリ以下のすべてのディレクトリと文書が作業領域から削除されます。

なお、ログアウト時に Document Manager によって作業領域から文書を削除するかどうかは、クライアントで定義します。

7.10.2 作業領域の運用上の注意

(1) サーバとクライアントの作業領域の不整合

作業領域間で不整合が生じた場合は、「7.9.2 サーバとクライアントの作業領域間の文書の整合性」を参照してください。

(2) データベースと作業領域の不整合

Document Manager データベースの文書の状態と作業領域の文書の状態、及び作業領域に作成されたディレクトリの状態とで不整合が発生した場合は、「7.9.3 文書の状態と作業領域との整合性」を参照してください。

(3) 登録されているユーザと作業領域の不整合

サーバの作業領域に、Groupmax Address、又は UNIX のファイル (/etc/passwd) に登録されていないユーザ用のディレクトリが存在するなど、ユーザとサーバの作業領域のディレクトリに不整合が発生した場合は、サーバ作業領域チェックユーティリティを使用して不要なディレクトリを削除する必要があります。サーバ作業領域チェックユーティリティについては、「8.11 サーバ作業領域のチェック (ISdirchk)」を参照してください。

(4) ファイル転送中の障害

ファイル転送中に障害が発生した場合の対処を示します。

1. チェックアウト時は、ファイルを分割して転送しています。分割されたファイルは、転送されるごとにクライアントの作業領域に書き込まれます。チェックアウト中に障害が発生した場合、クライアントの作業領域の内容が不正になっています。この場合、エラーの要因を取り除いてから再度チェックアウトしてください。
2. チェックイン時は、ファイルを分割して転送しています。分割されたファイルは、転送されるごとにサーバの作業領域に書き込まれます。アップロード中に障害が発生した場合、サーバの作業領域の内容が不正になっています。この場合、エラーの要因を取り除いてから再度チェックインしてください。

(5) ログアウト時の作業領域からの文書の削除

Word などのアプリケーションプログラム上で文書を開いたままログアウトすると、サーバの作業領域からは文書は削除されますが、クライアントの作業領域からは文書が削除されません。したがって、クライアントの作業領域には文書が残り、サーバの作業領域と整合が取れなくなります。

作業領域間で不整合が生じた場合は、「7.9.2 サーバとクライアントの作業領域間の文書の整合性」を参照してください。

(6) 文書実体ファイル名を変更した場合の注意事項

アプリケーションプログラムで文書実体ファイル名を変更した文書进行操作する場合は、一度サーバに保存してから再度作業領域に取り出してください。

7.11 テキストファイルに関する運用

この節では、全文検索に使用するテキストファイルの運用について説明します。

7.11.1 テキストファイルの登録と削除

ここでは、全文検索サーバにテキストファイルを登録又は削除する方法について説明します。

(1) テキストファイルの登録方法

テキストファイルを全文検索サーバに登録するには、次の方法があります。

(a) Groupmax Integrated Desktop を使用する場合

文書を登録する時に「全文検索登録」を指定して、文書の登録と同時に全文検索サーバにテキストファイルを登録する

一度テキストファイルを含む文書を Document Manager へ登録した後、全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティの SYNC オプションを使って、全文検索サーバへテキストファイルを登録する

Groupmax Integrated Desktop を使用してテキストファイルを登録する方法については、Groupmax Integrated Desktop のオンラインヘルプを参照してください。全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティについては、「8.26 テキストファイルの登録又は削除 (IStssync)」を参照してください。

(b) Document Manager Client を使用する場合

文書を更新した時に「TS サーバへの登録」を指定して、文書の更新と同時に全文検索サーバにテキストファイルを登録する

一度テキストファイルを含む文書を Document Manager へ登録した後、「TS サーバ未登録文書一覧」ダイアログボックスから全文検索サーバにテキストファイルを登録する

一度テキストファイルを含む文書を Document Manager へ登録した後、全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティの SYNC オプションを使って、全文検索サーバへテキストファイルを登録する

Document Manager Client を使用してテキストファイルを登録する方法については、マニュアル「Windows3.1 Groupmax Document Manager Version2.0 ユーザーズガイド」を参照してください。全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティについては、「8.26 テキストファイルの登録又は削除 (IStssync)」を参照してください。

(c) テキストファイルを登録できなかった場合の対処

障害などで全文検索サーバにテキストファイルを登録できなかった場合は、障害の要因

7. システムの運用

を取り除いた後、次のどちらかの方法で登録してください。

Document Manager Client の「TS サーバ未登録文書一覧」ダイアログボックスで「登録」ボタンを選択する

全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの SYNC オプションを実行する

ただし、テキストファイルのサイズに不正があったり、テキスト中に登録できない文字が含まれている場合は、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティを実行しても登録できません。この場合は、次のように対処してください。

1. 次のどちらかの操作をする

- Document Manager Client の「TS サーバ未登録文書一覧」ダイアログボックスで、不正のあったテキストファイルを選択して、「削除」ボタンを選択する
- 全文検索登録対象外ファイルを作成する。その後、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの CANCEL オプションを実行する

これによって、文書を登録するとき、不正のあったテキストファイルを全文検索サーバに登録しないように設定できます。

2. 登録できなかったテキストファイルから障害の要因を取り除く
3. 障害を取り除いたテキストファイルと文書を再登録する

(2) テキストファイルの削除方法

Groupmax Integrated Desktop 又は Document Manager Client で文書を削除しても、テキストファイルは全文検索サーバから削除されません。

この場合は、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの SYNC オプションを実行してください。これによって、全文検索サーバに残っている全ユーザ分のテキストファイルが削除されます。

7.11.2 ユティリティを使用したテキストファイルの登録と削除

ここでは、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティを使った、テキストファイルの登録と削除について説明します。全文検索用テキスト登録・削除ユティリティについては、「8.26 テキストファイルの登録又は削除 (IStssync)」を参照してください。

(1) 全文検索用テキスト登録・削除ユティリティ

全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの SYNC オプションを実行すると、全文検索サーバにテキストファイルを登録できます。また、Document Manager データベースから削除した文書のテキストファイルを、全文検索サーバから削除できます。

(2) テキストファイルの登録に失敗した場合

(a) テキスト登録エラーログファイルとは

テキストファイルの登録に失敗した場合は、テキスト登録エラーログファイル（/usr/infoshare/spool/tssynlog.txt）にエラーの要因などが出力されます。テキスト登録エラーログファイルは、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティを実行するたびに、最新状態が出力されます。

全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの実行後にテキスト登録エラーログファイルが出力されている場合は、次の操作をしてください。

1. テキスト登録エラーログファイルに記述された障害要因を取り除く
2. 必要に応じて、Groupmax Integrated Desktop 又は Document Manager Client から再登録する

テキスト登録エラーログファイルに出力したエラーのうち、テキストサイズの不正や、テキスト中に登録できない文字が含まれている場合は、次の操作をして、テキストファイルを全文検索サーバの登録対象から除外してください。

1. テキスト登録エラーログファイルを、全文検索登録対象外ファイル（/usr/infoshare/spool/tscancel.txt）に複写する
2. 複写後、全文検索サーバに登録しない文書だけが残るように全文検索登録対象外ファイルを編集する
3. 全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの CANCEL オプションを実行する

(b) テキスト登録エラーログファイルの形式

テキスト登録エラーログファイルの形式を次に示します。

AA...AA UU...UU II...II NN...NN

AA...AA

エラー要因コードです。次の内容で表示します。

INV_SIZE

登録するテキストファイルが、最大サイズを超えています。全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの CANCEL オプションを実行して、テキストファイルを修正した後、再登録してください。

INV_CODE

登録するテキストファイルに登録できない文字が含まれています。全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの CANCEL オプションを実行して、テキストファイルを修正した後、再登録してください。

TS_ERROR

全文検索サーバでエラーが発生しています。イベントログに出力されたエラーの要因を取り除いた後、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティを実行してください。

7. システムの運用

UU...UU

エラーになった文書を登録又は削除したユーザ名を示します（半角英数字 8 けた）。

II...II

エラーになった文書の文書 ID を示します（半角英数字 16 けた）。

NN...NN

エラーになった文書の文書名を示します（半角で 63 けた）。

7.12 ほかのプログラムと連携するときの運用

この節では、Document Manager とほかのプログラムを同じ環境で使用する場合の運用について説明します。Document Manager と同じ環境を使用するプログラムには、次の二つがあります。

Groupmax Address/Mail

Groupmax Workflow

(1) ほかのプログラムと同じ環境を使用するときの、オブジェクトサーバでの環境設定

Document Manager とほかのプログラムを同じ環境で使用するには、それぞれで使用するエリアをオブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義します。初期設定パラメタについては、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。ただし、初期設定パラメタの Document Manager での固有の設定値については、「5.5 オブジェクトサーバでの環境設定」を参照してください。

また、次の場合には、オブジェクトサーバの機能を使用して、ほかのプログラムで使用するエリアの定義を追加します。

Document Manager の環境設定後にほかのプログラムを導入する場合

ほかのプログラムの環境設定後に Document Manager を導入する場合

オブジェクトサーバについては、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

(2) Document Manager とほかのプログラムの環境の初期化

Document Manager とほかのプログラムを同じ環境で使用する場合の、初期化の手順を説明します。環境に応じて初期化の手順が異なりますので、適切な手順を参照してください。

表 7-8 環境の初期化の手順

Document Manager の初期化	ほかのプログラムの初期化	参照する手順
×	×	手順 1
×		手順 2
	×	手順 3
		手順 4

(凡例)

○：初期化されている。

×：初期化されていない。

7. システムの運用

(a) 手順 1 : Document Manager 及びほかのプログラムとも初期化されていない場合

この手順は、Document Manager とほかのプログラム (Groupmax Address/Mail 及び Groupmax Workflow) を同時に導入した場合などに適用します。すべてのプログラムが初期化されていない場合の、初期化の手順を示します。

1. オブジェクトサーバの環境を初期化する

ただし、Document Manager 及びほかのプログラムで使用するエリアを、オブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義しておいてください。

2. Document Manager の環境を初期化する (環境初期化ユティリティの実行)

3. ほかのプログラム (Groupmax Address/Mail 及び Groupmax Workflow) の環境を初期化する

Groupmax Address/Mail の初期化については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。また、Groupmax Workflow の初期化については、マニュアル「Groupmax Workflow Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

2 と 3 は順不同です。ただし、初期化するときのデータベース名称は共通にしてください。

(b) 手順 2 : Document Manager は初期化されていないが、ほかのプログラムは初期化されている場合

この手順は、ほかのプログラム (Groupmax Address/Mail 及び Groupmax Workflow) の導入後に Document Manager を導入する場合などに適用します。

1. オブジェクトサーバのファイルのバックアップを取得する

Document Manager を初期化する前に、オブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義したファイルのバックアップを取得してください。Document Manager の初期化時にエラーが発生した場合は、バックアップしたファイルから回復した後、エラーの要因を取り除いて再実行してください。

2. Document Manager の環境を初期化する (環境初期化ユティリティの実行)

ただし、初期化する前に、Document Manager 及びほかのプログラムで使用するエリアを、オブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義しておいてください。定義していない場合は、オブジェクトサーバの機能を使用して定義を追加してください。初期化するときのデータベース名称 (スキーマ名称) は、既にオブジェクトサーバに定義されているものと同じ名称を指定してください。

(c) 手順 3 : Document Manager は初期化されているが、ほかのプログラムは初期化されていない場合

この手順は、Document Manager の導入後にほかのプログラム (Groupmax Address/Mail 及び Groupmax Workflow) を導入する場合などに適用します。

1. オブジェクトサーバのファイルのバックアップを取得する

ほかのプログラムを初期化する前に、オブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義したファイルのバックアップを取得してください。ほかのプログラムの初期化時にエラーが発生した場合は、バックアップしたファイルから回復した後、エラーの要因を取り除いて再実行してください。

2. ほかのプログラム（Groupmax Address/Mail 及び Groupmax Workflow）の環境を初期化する

ほかのプログラムを初期化するときのデータベース名称には、Document Manager の初期化時に指定した Document Manager データベース名称を指定してください。

ただし、初期化する前に、Document Manager 及びほかのプログラムで使用するエリアを、オブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義しておいてください。定義していない場合は、オブジェクトサーバの機能を使用して定義を追加してください。

(d) 手順 4：Document Manager 及びほかのプログラムとも初期化されている場合

この手順は、環境を再構築する場合などに適用します。この手順で初期化すると、既に構築されているすべての環境が初期化されるので注意してください。

1. オブジェクトサーバの環境を初期化する
2. Document Manager の環境を初期化する
3. ほかのプログラムの環境（Groupmax Address/Mail 及び Groupmax Workflow）を初期化する

2 及び 3 は順不同です。

7.13 文書の配布状態管理機能に関する運用

7.13.1 文書の配布状態管理機能

文書の配布状態（配信中、取り込み成功、取り込み失敗）を配布元サーバで管理し、配布状態の表示やサーバ指定でのエクスポートファイルの再配布を行うことができます。配布先で異常が発生し、エラーメッセージファイルが作成されている場合には、メッセージファイルを配布先サーバから自動的に取得でき、配布元で配布先のエラー原因を究明することができます。

この機能は、文書配布をメールシステムと連携して行う場合に使用できます。ftp などによって手動の配布を行う場合には適用されません。

（1）文書の配布状態の受け渡しの仕組み

文書の配布状態の受け渡しは、メールを使用して配布先サーバの文書配布受信デーモンが送付し、配布元サーバの文書配布受信デーモンが受け取ります。このため、配布元サーバ、配布先サーバそれぞれで、文書配布送受信デーモンを起動しておく必要があります。

（2）文書の配布状態表示

文書の配布状態表示は、文書の配布状態表示ユーティリティ（ISrpsstat コマンド）を使用して、コンソール又はファイルに出力することができます。不要になった配布状態を初期化する場合にも、このユーティリティを使用します。文書の配布状態表示ユーティリティについては、「8.17 文書の配布状態表示（ISrpsstat）」を参照してください。

（3）文書の再配布

配布が異常終了している場合、原因を取り除いた後に、該当する配布先サーバ指定で文書の再配布を行うことができます。文書の再配布は、文書再配布機能ユーティリティを使用して行います。文書再配布機能ユーティリティについては、「8.18 文書の再配布機能（ISrprsnd）」を参照してください。

7.13.2 エクスポートファイルの自動削除機能

文書の配布状態管理機能を使用すると、環境設定ファイルでの定義によってすべての配布先サーバに正常に配布が完了した時点で、該当するエクスポートファイルを自動的に削除することができます。

7.13.3 環境設定

文書の配布状態管理機能及びエクスポートファイルの自動削除機能を使用する場合、環境設定ファイルで定義する必要があります。環境設定ファイルについては「5.7

Document Manager での環境設定」を参照してください。文書の配布状態管理機能の設定は、配布元サーバ、配布先サーバそれぞれで必要です。

7.13.4 運用手順

次に、文書の配布状態管理機能を使用した運用手順を示します。

1. 配布文書追加・削除ユーティリティ (ISadddoc コマンド)、配布先サーバ追加又は削除ユーティリティ (ISaddsrv コマンド)、又は 16 ビットクライアントで、文書を配布します。
2. 文書の配布状態表示ユーティリティ (ISrpstat コマンド) で、配布状態を確認します。
3. 配布先で異常が発生し、配布先サーバのシステムログ又はメッセージファイルが添付されている場合は、該当メッセージファイルを参照して原因を究明し、エラーを取り除きます。
4. 文書再配布機能ユーティリティ (ISrpsnd コマンド) を使用して、異常が発生した配布先サーバに文書を再配布します。
5. 文書の配布状態表示ユーティリティ (ISrpstat コマンド) を使用して、配布状態を確認します (異常が発生した場合は、3 から作業を行います)。
6. 配信中、再配信中、又は取り込み失敗の配布状態がなくなった時点で、不要となった配布状態を文書の配布状態表示ユーティリティ (ISrpstat コマンド) を使用して初期化します。

7.13.5 注意事項

配布情報を、文書の配布状態表示ユーティリティ (ISrpstat コマンド) で初期化する場合、該当する文書配布対象グループの情報に「配信中」「再配信中」「取り込み失敗」の配布状態がないことを確認の上で実行してください。これらの状態が存在する状態で初期化を行うと、配信中又は配布済みの情報を管理できなくなり、再配布ができなくなります。

原則として、文書の配布状態管理機能を使用する場合は、すべてのサーバを同時期に対応バージョンにバージョンアップする必要がありますが、システム運用の都合などによって一時的に不整合が生じた場合には、次の現象となります。

- 配布元サーバが、対応バージョンで、配布先サーバが、非対応バージョンの場合、該当サーバの状態が「配信中」のまま変更されません。該当サーバへの配布が正常に行われたかどうかは、配布先サーバで配布ログを用いて確認してください。また、この場合エクスポートファイルの自動削除機能は使用できません。
非対応のサーバを対応バージョンにバージョンアップする場合には、その時点での配布が正常に完了していることを確認した後で、配布情報を初期化してから実行してください。
- 配布先サーバが、対応バージョンで、配布元サーバが、非対応バージョンの場合、配布状態を配布元サーバで確認できません。
配布元では、配布先から配布終了のメールを受けるごとに「KIIS311-E Document Manager サーバでエラーが発生しました。要因：31007」が出力されます。

7. システムの運用

エクスポートファイルの自動削除機能を使用している場合でも、以前の配布回で文書配布が取り込み失敗で終了していると、エクスポートファイルは削除されません。

エクスポートファイルの自動削除機能を使用している場合、正常終了した配布の再配布はできません。

配布状態が「配信中」又は「再配信中」のまま、状態が変わらない場合は、次に示す内容を確認してください。

- 配布元サーバ、配布先サーバの文書配布送受信デーモンが起動されているか
- 配布元サーバ、配送元サーバのメールシステムが起動されているか
- 配布先サーバの環境設定で、文書の配布状態管理機能が設定されているか

8

Document Manager で使用するユティリティ

この章では、Document Manager の運用コマンドの文法について説明します。

-
- 8.1 運用コマンド一覧

 - 8.2 運用コマンドの文法

 - 8.3 Document Manager の環境の初期化 (ISinitdb)

 - 8.4 Document Manager の起動 (ISstart)

 - 8.5 Document Manager の終了 (ISstop)

 - 8.6 文書配布機能の実行環境作成 (ISreplica)

 - 8.7 文書配布送受信デーモンの起動 (ISreplicastart)

 - 8.8 文書配布送受信デーモンの終了 (ISreplicastop)

 - 8.9 複数グループアクセス権情報を出力又は更新する (ISdefmga)

 - 8.10 ファイルの整合 (ISfsck)

 - 8.11 サーバ作業領域のチェック (ISdirchk)

 - 8.12 文書配布情報ファイルの取り込み (ISimport)

 - 8.13 文書配布対象グループの一覧表示、作成又は削除 (ISgrpct)

 - 8.14 文書配布対象グループ情報の表示 (ISgrpinfo)

 - 8.15 配布先サーバの追加又は削除 (ISaddsrv)

8. Document Manager で使用するユティリティ

-
- 8.16 文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)

 - 8.17 文書の配布状態表示 (ISrpstat)

 - 8.18 文書の再配布機能 (ISrpsnd)

 - 8.19 フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録 (IScpdef)

 - 8.20 特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する (ISexport
及び ISimport)

 - 8.21 フォーム文書の抽出 (ISexport)

 - 8.22 フォーム文書の取り込み (ISimport)

 - 8.23 文書の一括登録 (ISregist)

 - 8.24 文書の圧縮 (IScomprs)

 - 8.25 文書の圧縮の解除 (ISexpand)

 - 8.26 テキストファイルの登録又は削除 (ISsync)

 - 8.27 フォルダの一覧表示 (ISlsfldr)

 - 8.28 文書実体ファイル格納ディレクトリの変更 (ISchfldr)

 - 8.29 フォルダ階層の移動 (ISmvfldr)

 - 8.30 文書一覧の表示 (ISlsdoc)

 - 8.31 サーバ情報一覧の更新 (ISmksvls)

 - 8.32 ログインユーザ数の表示 (ISuserls)

 - 8.33 分類索引の一覧表示 (ISlsview)

 - 8.34 TS 文書 ID 変換テーブルの生成 (ISidsidtbl) (HI-UX/WE2 又は HP-UX
の場合)

 - 8.35 ローカルグループ情報のキャッシュ化 (ISlgrpcc)

 - 8.36 文書をフォルダ, 一般文書データベース, 分類索引, 分類又は文書単
位で一括して移動する (ISmvdoc)

 - 8.37 文書をフォルダ, 一般文書データベース, 分類索引, 分類又はフォー
ム文書データベースごと一括して削除する (ISdelidx)

 - 8.38 ユーザ ID, グループ ID を一括して変更する (ISchusrid)

 - 8.39 フォルダ名称一括変更 (ISchflnm)

 - 8.40 運用コマンド実行時の注意事項

8.41 リターンコード一覧

8.1 運用コマンド一覧

Document Manager の運用コマンドの一覧を、表 8-1 に示します。

表 8-1 Document Manager の運用コマンド一覧

機能	コマンド	コマンド名称	Document Manager サーバの動作中に実行する	Document Manager サーバの停止中に実行する
Document Manager の環境の初期化	ISinitdb	環境初期化ユティリティ	×	
Document Manager の起動	ISstart	Document Manager 起動ユティリティ	×	
Document Manager の終了	ISstop	Document Manager 終了ユティリティ		×
文書配布機能の実行環境	ISreplica	文書配布機能ユティリティ	×	
文書配布送受信デーモン起動	ISreplicastart	文書配布送受信デーモン起動ユティリティ		×
文書配布送受信デーモン終了	ISreplicastop	文書配布送受信デーモン終了ユティリティ		×
複数グループアクセス権情報を出力又は更新する	ISdefmga	複数グループアクセス権情報出力・更新ユティリティ	×	
ファイルの整合	ISfsck	ファイル整合性ユティリティ		×
サーバ作業領域のチェック	ISdirchk	サーバ作業領域チェックユティリティ		
文書配布情報ファイルの取り込み	ISimport	インポート機能ユティリティ		×
文書配布対象グループの一覧表示，作成又は削除	ISgrpert	文書配布対象グループ操作ユティリティ		×
文書配布対象グループ情報の表示	ISgrpinf	文書配布対象グループ操作ユティリティ		×
配布先サーバの追加又は削除	ISaddsrv	配布先サーバ追加・削除ユティリティ		×

機能	コマンド	コマンド名称	Document Manager サーバの動作中に実行する	Document Manager サーバの停止中に実行する
配布対象の文書の追加又は削除	ISadddoc	配布文書追加・削除ユーティリティ		×
文書の配布状態表示	ISrpstat	文書配布状態表示ユーティリティ		×
文書の再配布	ISrprsnd	文書再配布機能ユーティリティ		×
フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録	IScpdef	フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録ユーティリティ		×
定義の抽出及び登録	IScpdef	定義の抽出及び登録ユーティリティ		×
特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する	ISexport	エクスポート機能ユーティリティ		×
フォーム文書の抽出	ISsexform	フォーム文書のエクスポート機能ユーティリティ		×
フォーム文書の取り込み	ISimform	フォーム文書のインポート機能ユーティリティ		×
文書の一括登録	ISregist	一括登録ユーティリティ		×
文書の圧縮	IScomprs	文書圧縮ユーティリティ		×
文書の圧縮の解除	ISexpand	文書の圧縮解除ユーティリティ		×
テキストファイルの登録又は削除	ISstsync	テキストファイルの登録・削除ユーティリティ		×
文書実体ファイル格納ディレクトリの一覧表示	ISlsfldr	文書実体ファイル格納ディレクトリの一覧表示ユーティリティ		×
文書実体ファイル格納ディレクトリの変更	ISchfldr	文書実体ファイル格納ディレクトリ変更ユーティリティ		×
フォルダ階層の移動	ISmvfldr	フォルダ階層移動ユーティリティ		×

8. Document Manager で使用するユティリティ

機能	コマンド	コマンド名称	Document Manager サーバの動作中に実行する	Document Manager サーバの停止中に実行する
文書一覧の表示	ISlsdoc	文書一覧表示ユティリティ		
サーバ情報一覧の更新	ISmksvls	サーバ一覧更新ユティリティ		
ログインユーザ数の表示	ISuserls	ログインユーザ数表示ユティリティ		×
分類索引の一覧表示	ISlsview	分類索引一覧表示ユティリティ		×
TS 文書 ID 変換テーブルの生成 (HI-UX/WE2 又は HP-UX の場合)	IStsidtbl	TS 文書 ID 変換テーブルユティリティ		×
ローカルグループ情報のキャッシュ化	ISlgrpcc	ローカルグループ情報のキャッシュ化ユティリティ		
文書をフォルダ、一般文書データベース、分類索引、分類又は文書単位で一括して移動する	ISmvdoc	文書一括移動ユティリティ		×
文書をフォルダ、一般文書データベース、分類索引、分類又はフォーム文書データベース単位で一括して削除する	ISdelidx	文書一括削除ユティリティ		×
ユーザ ID、グループ ID を一括変更する	ISchusrid	ユーザ ID、グループ ID 一括変更ユティリティ	×	
フォルダ名称を一括変更する	ISchflnm	フォルダ名称一括変更ユティリティ		×

(凡例)

：実行できる。

×：実行できない。

注 1 Document Manager のコマンドは、オブジェクトサーバが動作しているときに実行してください。

注 2 コマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

8.2 運用コマンドの文法

8.2.1 運用コマンドの指定方法

Document Manager の運用コマンドの指定方法を説明します。

(1) コマンドの入力方法

Document Manager の運用コマンドは、シェルに入力して実行します。

(2) コマンドの記述形式

コマンドの記述形式を次に示します。

コマンド名 [オプション ...] [コマンド引数 ...]

(例)

```
$ cmd -n -o 99 server1
cmd : コマンド名
-n, -o 99 : オプション
server1 : コマンド引数
```

(a) コマンド名

コマンド名は、実行するコマンドのファイル名称です。スーパーユーザだけが、これらのファイルにアクセスできます。

(b) オプション

オプションの入力方法を次に示します。

なお、次の説明中に使用する「\$」はシェルのプロンプト、「cmd」はコマンド名称を表します。

オプションの形式

オプションはマイナス記号(-)で始まる文字列で、場合によっては一つの引数をとります。

形式 1: - オプションフラグ

形式 2: - オプションフラグ フラグ引数

(凡例)

オプションフラグ: 1文字の英文字。大文字と小文字は区別されます。

フラグ引数: オプションフラグに対する引数です。

オプションの指定規則

- フラグ引数をとらないオプションフラグは、一つのマイナス記号の後にまとめて指定できます。

(例)

次の二つは同じ意味です。

8. Document Manager で使用するユティリティ

```
$ cmd -a -b -c
```

```
$ cmd -abc
```

フラグ引数をとるオプションフラグのフラグ引数は、省略できません。

- オプションフラグとフラグ引数の間には、空白又はタブが必要です。

(例)

誤: \$ cmd -f

正: \$ cmd -f

- フラグ引数中に空白を含める場合は、前後を引用符 (") で囲まなければなりません。

(例)

オプションフラグ: f

フラグ引数: 1 2

```
$ cmd -f "1 2"
```

- 同じオプションフラグを 2 回以上指定できません。

(例)

誤: \$ cmd -a 1 -a 2

- オプションは、コマンド引数の前に指定しなければなりません。

(例)

オプションフラグ a が引数をとらない場合、file 及び -b はコマンド引数とみなされます。

```
$ cmd -a file -b
```

- 二つのマイナス記号は、オプションの終わりを示します。

(例)

-b はコマンド引数とみなされます。

```
$ cmd -a -- -b
```

- マイナス記号だけのオプションは入力できません。

(例)

- は、コマンド引数とみなされます。

```
$ cmd -
```

(c) コマンド引数

コマンド引数は、コマンドの操作対象を表します。

8.2.2 運用コマンドの実行結果

Document Manager の運用コマンドを実行したときに返される、実行結果のコードの意味は「8.41 リターンコード一覧」を参照してください。

8.3 Document Manager の環境の初期化 (ISinitdb)

ISinitdb (環境初期化ユティリティ)

形式

ISinitdb -o

{ Document Manager データベース名称 | 他プログラムのデータベース名称 }

機能

Document Manager の環境を初期化します。初期化するとき、Document Manager データベースが作成されます。

オプション

-o Document Manager データベース名称

サーバに作成する Document Manager データベースの名称を指定します。Document Manager データベース名称を指定するときの規則を示します。

Document Manager データベース名称に使用できる文字は、次のとおりです。

- 1 バイトコードの < 英大文字 > , < 英小文字 > , < 数字 > 及び 「 _ 」 (アンダースコア)
- 空白以外の 2 バイトコード

Document Manager データベース名称は、63 バイト以内で指定してください。

「 IS_ 」, 「 _ 」 (アンダースコア) で始まる名称及び 「 M A S T E R 」 は使用できません。

-o 他プログラムのデータベース名称

Groupmax Address/Mail 又は Groupmax Workflow の環境が既に初期化されている場合、そのプログラムを初期化したときのデータベース名称を指定します。Groupmax Address/Mail の環境の初期化については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。また、Groupmax Workflow の環境の初期化については、マニュアル「Groupmax Workflow Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

ただし、Groupmax Address/Mail 又は Workflow の環境が既に初期化されている場合、Document Manager の環境を初期化する前に、オブジェクトサーバのファイルのバックアップを取得するなどの手順が必要です。Groupmax Address/Mail 又は Groupmax

Workflow と同じ環境を使用する場合の初期化の手順及び運用については、「7.12 ほかのプログラムと連携するときの運用」を参照してください。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドは、環境を初めて定義したときに一度だけ実行できます。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバを起動しておいてください。オブジェクトサーバの起動については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバの環境変数 XODDIR 及び XODCONFPATH を設定する必要があります。オブジェクトサーバの環境変数については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

このコマンドは、Document Manager サーバを起動する前に実行してください。

環境を再構築する場合は、次の手順でファイルを初期化してください。

1. オブジェクトサーバのデータベース初期化ユティリティ xodbinit を実行する

2. /usr/infoshare/doc/* を削除する

```
rm -rf /usr/infoshare/doc/*
```

フォルダごとに指定したディレクトリがある場合は、指定したディレクトリの下を削除してください。

3. /usr/infoshare/export/users/* を削除する

```
rm -rf /usr/infoshare/export/users/*
```

4. オブジェクトサーバを起動して、!Sinitdb を実行する

1, 2 及び 3 の後、クライアントの作業領域をすべて削除して、その後 4 でファイルを初期化してください。

また、文書配布機能を使用する場合は、次の手順で文書配布作業用ディレクトリを削除してください。

```
rm -rf /usr/infoshare/replica
```

既に Groupmax Address/Mail 又は Groupmax Workflow の環境が初期化されている場合は、このコマンドを実行する前に必ずオブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義したファイルのバックアップを取得してください。このコマンドの実行中にエラーが発生した場合は、バックアップしたファイルから回復してください。

Groupmax Address/Mail 又は Groupmax Workflow と同じ環境を使用する場合の初期化の手順については、「7.12 ほかのプログラムと連携するときの運用」を参照してください。

8.4 Document Manager の起動 (ISstart)

ISstart(Document Manager 起動ユティリティ)

形式

```
ISstart [ -c | -v | -f out_message_file ]
```

機能

Document Manager サーバを起動します。

また、Document Manager サーバの出力するメッセージの出力先を指定します。

オプション

-c

Document Manager が出力するメッセージの出力先を /dev/console とします (デフォルト)。

-v

Document Manager が出力するメッセージの出力先を標準出力及び標準エラー出力とします。

-f out_message_file

Document Manager が出力するメッセージの出力先を out_message_file (指定したファイル) とします。このオプションを指定する場合は、必ず out_message_file で指定するファイルのパスが存在していることを確認してください。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、及び Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合) を起動しておいてください。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバの環境変数 XODDIR 及び XODCONFPATH を設定する必要があります。オブジェクトサーバの環境変数については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

このコマンドのオプションで -f を指定した場合、既に out_message_file で指定したファイルが存在するときは、上書きされます。

8.5 Document Manager の終了 (ISstop)

ISstop(Document Manager 終了ユティリティ)

形式

ISstop [-f] [-c 監視回数]

機能

Document Manager サーバを終了させます。

オプション

省略

実行中の処理の終了を待って、Document Manager サーバを終了させます（計画終了）。計画終了している間は、新たなログインの要求は受け付けません。また、計画終了が完了しない場合は、ユーザの判断で強制終了できます。

-f

Document Manager サーバを強制的に終了させます（強制終了）。データベースの更新中に強制終了すると、データベースに障害が起こる場合があるため、注意してください。

-c 監視回数

1 秒間隔で、指定された監視回数まで Document Manager の終了状態を監視します。監視回数を経過しても Document Manager サーバが終了しなかった場合は、強制終了します。監視回数の指定できる範囲は、5 ~ 600 です。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

データの更新中にこのコマンドによって強制終了を実行した場合、更新対象のデータが不整合な状態になり、データの修復が必要になる場合があります。不整合なデータが要因となって障害が発生する場合は、システムが出力するメッセージに従って対処してください。

8.6 文書配布機能の実行環境作成 (ISreplica)

ISreplica(文書配布機能ユーティリティ)

形式

ISreplica

機能

文書配布機能を使用するための実行環境を Document Manager データベースに追加します。また、次の二つのディレクトリを作成します。

配布元サーバの作業ディレクトリ

配布先サーバの作業ディレクトリ

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバを起動しておいてください。オブジェクトサーバの起動については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバの環境変数 XODDIR 及び XODCONFPATH を設定する必要があります。オブジェクトサーバの環境変数については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

このコマンドは、Document Manager サーバを起動する前に実行してください。

オブジェクトサーバをほかのプログラム (Groupmax Mail 又は Groupmax Workflow) と共用している場合は、そのプログラムのサーバを起動する前に実行してください。

このコマンドを実行する前に必ずオブジェクトサーバの初期設定パラメタに定義したファイルのバックアップを取得してください。このコマンドの実行中にエラーが発生した場合は、バックアップしたファイルから回復してください。

配布元サーバの作業ディレクトリ及び配布先サーバの作業ディレクトリが既にある場合は、このコマンドを実行する前に削除してください。

8.7 文書配布送受信デーモンの起動 (ISreplicastart)

ISreplicastart(文書配布送受信デーモン起動ユティリティ)

形式

ISreplicastart [-v | -f out_message_file]

[-s 送信デーモンの文書配布要求監視時間]

[-r 受信デーモンの受信メール監視時間]

機能

GroupmaxMail と連携して文書を配布するために、文書配布送信デーモン及び文書配布受信デーモンをそれぞれ起動します。

また、Document Manager サーバの出力するメッセージの出力先を指定します。

オプション

-v

Document Manager が出力するメッセージの出力先を標準出力及び標準エラー出力とします (デフォルト)。

-f out_message_file

Document Manager が出力するメッセージの出力先を out_message_file (指定したファイル) とします。このオプションを指定する場合は、必ず out_message_file で指定するファイルのパスが存在していることを確認してください。

-s 送信デーモンの文書配布要求監視時間

送信デーモンが文書配布要求を監視する間隔を秒で指定します。指定できる範囲は、1 ~ 600 です。省略した場合は、5 が仮定されます。

-r 受信デーモンの受信メール監視時間

受信デーモンが受信メールを監視する間隔を秒で指定します。指定できる範囲は、1 ~ 600 です。省略した場合は、5 が仮定されます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

Document Manager サーバの起動前にこのコマンドを実行しても文書配布送受信デーモンは起動しません。

メールシステムで文書配布文書を配布する場合は、このコマンドを実行する前に、メールシステムを起動してください。メールシステムの起動前にこのコマンドを実行し、文書の配布要求をした場合、文書配布送信デーモンによってエクスポートファイルは作成されますが、送信されません。ただし、その後メールシステムを起動すると、エクスポートファイルは送信されます。

このコマンドのオプションで `-f` を指定した場合、既に `out_message_file` で指定したファイルが存在するときは、上書きされます。

8.8 文書配布送受信デーモンの終了 (ISreplicastop)

ISreplicastop(文書配布送受信デーモン終了ユティリティ)

形式

ISreplicastop [-f]

機能

文書配布送受信デーモンを終了します。

オプション

-f

文書配布送受信デーモンを強制的に終了させます (強制終了)。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

8.9 複数グループアクセス権情報を出力又は更新する (ISdefmga)

ISdefmga (複数グループアクセス権情報出力・更新ユティリティ)

形式

ISdefmga [-v|-u] [-o 出力ファイル名称] [-i 入力ファイル名称]

機能

データベースに複数グループアクセス権管理機能で使用する情報を追加定義します。(タイプ定義, 属性定義, 拡張関連の設定を行います。)

また, 環境設定ファイルで複数グループアクセス権を使用する設定をした場合に, 設定済みの複数グループアクセス権の情報をファイルに出力したり, 更新したりします。

オプション

省略

複数グループアクセス権管理機能で使用する情報(タイプ定義, 属性定義, 拡張関連)をデータベースに追加定義します。複数グループアクセス権を使用する環境を初めて定義したときに, オプションを省略してこのコマンドを一度だけ実行できます。複数グループアクセス権をしようする環境の設定手順については, 「2.2.5(4)(b)

DocumentManager サーバで運用するアクセス権の管理方式」を参照してください。

-v

設定済みの複数グループアクセス権設定情報を, -o オプションで指定したファイルに出力する場合に指定します。

-u

設定済みの複数グループアクセス権の設定を, -i オプションで指定したファイルの内容に従って, 更新又は削除する場合に指定します。処理結果は, -o オプションで指定したファイルに出力されます。

-o 出力ファイル名称

-v オプションと合わせて指定する場合は, 設定済みの複数グループアクセス権の設定情報を出力するファイルのファイル名称をフルパスで指定します。

-u オプションと合わせて指定する場合は, 更新又は削除処理の処理結果を出力するファイルのファイル名称をフルパスで指定します。

8. Document Manager で使用するユティリティ

-i 入力ファイル名称

-u オプションと合わせて指定します。複数グループアクセス権設定を更新するための更新情報を記述したファイルのファイル名称をフルパスで指定します。-u オプションを指定しないでこのオプションを指定した場合、指定は無視されます。

出力形式

-o オプションに指定したファイルに出力される内容について説明します。

出力される内容は、-v オプションを指定した場合と -u オプションを指定した場合で異なります。

(a)-v オプションを指定した場合

設定済みの複数グループアクセス権設定情報が出力されます。

出力項目を次に示します。それぞれのカラムはタブ (0x0a) で区切られて出力されます。

表 8-2 複数グループアクセス権設定情報の出力項目

出力項目	説明
オブジェクト種別	アクセス権を設定したオブジェクトの種別が出力されます。出力される種別を次に示します。 <ul style="list-style-type: none">• FL: フォルダ• MV: 分類索引又は分類• CL: 一般文書データベース
オブジェクト ID	オブジェクトの ID が出力されます。
オブジェクトの名称	フォルダ、分類索引・分類又は一般文書データベースの名称が出力されます。
グループ種別	アクセス権を設定したグループの種別が出力されます。出力される種別を次に示します。 <ul style="list-style-type: none">• C: 最上位組織• O: 組織• T: Groupmax Address のグループ• M: Windows NT で作成する Groupmax 用グループ• L: ローカルグループ• U: ユーザ
グループ ID	グループの ID が出力されます。
アクセス権	アクセス権の種類が出力されます。出力される種類を次に示します。 <ul style="list-style-type: none">• R: 参照• W: 更新• D: 削除• C: 作成• S: 下位オブジェクトの作成• L: リンクの設定• A: フルコントロール

なお、グループ種別、グループ ID 及びアクセス権は、そのオブジェクトに対して設定されている情報の数だけ繰り返して出力されます。

出力例を次に示します。

図 8-1 複数グループアクセス権設定情報の出力例

```
FL C00D0000000000DF root
FL C00D0000000000E0 default
FL C00D0000000000173 Folder          C HITACHI R O KSKG      RW
MV C00D0000000000175 View           C HITACHI R T GRP01    A
MW C00D0000000000178 Index          L @GROUP1 A U TT0001   A
CL C00D0000000000FD システム文書DB
```

(b)-u オプションを指定した場合

複数グループアクセス権の更新又は削除処理の処理結果が出力されます。

処理結果に応じて出力される情報を次に示します。

フォーマット不正の場合

format error : line=XXX

- XXX : エラーになった入力ファイルの行番号

更新情報がない場合

cannot find update information : XXX[YYY]

- XXX : オブジェクトの名称
- YYY : オブジェクト ID

指定したオブジェクトが存在しない場合

cannot find object : XXX[YYY]

- XXX : オブジェクトの名称
- YYY : オブジェクト ID

指定したオブジェクトの種別が不正な場合

invalid object type : XXX[YYY]

- XXX : オブジェクトの名称
- YYY : オブジェクト ID

複数グループアクセス権の更新が成功した場合

update multi-group perm : XXX[YYY]

- XXX : オブジェクトの名称
- YYY : オブジェクト ID

複数グループアクセス権の削除が成功した場合

delete multi-group perm : XXX[YYY]

8. Document Manager で使用するコティリティ

- XXX : オブジェクトの名称
- YYY : オブジェクト ID

入力ファイルの記述形式

-u オプションを指定した時に -i オプションに指定する入力ファイルの記述形式について説明します。

入力ファイルの記述形式は、-v オプションを指定した場合に出力されるファイル形式と同じです。

ただし、1 バイト目に「#」を指定した行は、コメント行として扱われます。また、一つのオブジェクトに設定されている複数グループアクセス権をすべて削除したい場合は、一目のグループ種別に「X」を指定してください。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンド実行する前に、オブジェクトサーバを起動しておいてください。

-u オプションおよび -v オプションを指定しない場合（データベースに複数グループアクセス権管理機能で使用する情報を追加定義する場合）、DocumentManager サーバの停止中にこのコマンドを実行してください。また、オブジェクトサーバを他のプログラム（Groupmax Address/Mail, Groupmax Workflow）と共用している場合は、そのプログラムの停止中に実行してください。

-u オプションまたは -v オプションを指定する場合、DocumentManager サーバの起動、停止のどちらの状態でもこのコマンドを実行できます。ただし、-u オプションを指定する場合は、検索結果などに影響が出ることがあるため、できるだけ DocumentManager サーバが停止した状態でこのコマンドを実行してください。

このコマンド実行前には、データベースのバックアップを必ず取得しておいてください。エラーが発生した場合、バックアップからデータベースを回復し、障害を取り除いた上で、このコマンドを再実行してください。

8.10 ファイルの整合 (ISfsck)

ISfsck (ファイル整合性ユティリティ)

形式

ISfsck [-t|w|d]

機能

Document Manager データベースとテキストデータベースに登録されている文書の整合を取ります。

文書実体ファイルの文書の状態と作業領域の文書の状態の整合を取ります。

文書実体ファイルとオブジェクトサーバとの整合を取ります。

オプション

-t

Document Manager データベースと、テキストデータベースの文書の整合を取ります。Document Manager データベースに存在しない文書が、テキストデータベースに存在する場合は、テキストデータベースの文書が削除されます。

-w

文書実体ファイルの文書の状態と、作業領域の文書の状態の整合を取ります。作業領域に存在しないのに文書実体ファイルでは「作業領域に取り出されている」となっている文書を、「作業領域には存在しない」という状態に変更します。

-d

文書実体ファイルと、オブジェクト管理ファイルの文書の整合を取ります。オブジェクトサーバに存在しない文書が、文書実体ファイルに存在する場合は、文書実体ファイルの文書が削除されます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

オプションをすべて省略すると、「ISfsck -twd」が仮定されます。また、オプションは同時に指定できます。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

全文検索サーバと連携している場合は、Document Manager サーバを起動した後、全文検索サーバを起動してください。また、テキストファイルを格納しているテキストデータベースをオープンしておいてください。

8. Document Manager で使用するユティリティ

全文検索サーバのテキストデータベースを複数の Document Manager サーバで使用するときは、ノード ID を指定してください。ノード ID は、オブジェクトサーバの環境を構築するときに指定します。このときノード ID は、重複しないように指定してください。ノード ID が指定されていなかったり、重複するノード ID が指定されている場合は、必要な文書が削除されることがあります。

ISfsck コマンドを実行すると、Document Manager 管理者のユーザ名で Document Manager サーバにログインします。

ファイル整合性ユティリティを実行して、文書実体ファイルが存在しない不整合が検出された場合は、次のように対処してください。

1. 文書実体ファイルが存在しない文書があったことを示すメッセージがシステムログに出力されるので確認する
2. 詳細情報として整合性ログファイルが出力されるので確認する。整合性ログファイルでは、最後に実行した修復状態だけが保持されます。ただし、アプリケーションプログラムでユーザが作成した文書実体ファイル自体は修復されません。整合性ログファイルについては、「7.9.4 オブジェクトサーバとの整合性」を参照してください。
3. 必要に応じて、不整合が生じた文書を再登録するか又は削除する

8.11 サーバ作業領域のチェック (ISdirchk)

ISdirchk (サーバ作業領域チェックユティリティ)

形式

ISdirchk

```
-o {WORK | DB | BOTH | DEACT}
[-u ユーザ名 | -U] [-m ログ出力ファイル名] [-v] [-d]
```

機能

サーバの作業領域には、Groupmax Address と連携している場合は Groupmax Address に登録されているユーザごとに、Groupmax Address と連携していない場合は UNIX のユーザ登録ファイルに登録されているユーザごとに、ディレクトリが作成されます。このコマンドを実行すると、登録されているユーザとサーバの作業領域のディレクトリを比較して、登録されていないユーザ又は既に削除されたユーザのディレクトリを削除します。

また、ユーザが文書を作業領域に取り出すときには、サーバの作業領域のユーザごとに作成されたディレクトリ下に、文書ごとのディレクトリが作成されます。サーバの作業領域のディレクトリの状態と Document Manager データベースの文書の状態に不整合が発生している場合は、このコマンドによって不要なディレクトリや情報を削除できます。

さらに、指定したユーザの作業領域の文書を強制的に削除することもできます。

オプション

```
-o {WORK | DB | BOTH | DEACT}
```

サーバ作業領域チェックユティリティで実行する操作を指定します。次のどれかを必ず指定してください。

なお、どのオプションを指定しても、登録されているユーザとサーバの作業領域のディレクトリとの整合は取ります。登録されていないユーザのディレクトリがある場合は、そのディレクトリを削除します。

WORK

サーバの作業領域に文書ごとに作成されているディレクトリの状態を、Document Manager データベースの文書の状態に合わせます。Document Manager データベースに「文書が作業領域に取り出されている」という情報がない文書に対してサーバの作業領域にディレクトリが存在する場合は、そのディレクトリを削除します。

DB

8. Document Manager で使用するユティリティ

Document Manager データベースの文書の状態を、サーバの作業領域に作成されているディレクトリの状態に合わせます。サーバの作業領域にディレクトリが存在しない文書に対して Document Manager データベースに「文書が作業領域に取り出されている」という情報が記憶されている場合は、その情報を削除して、「作業領域に存在しない」という状態に変更します。

BOTH

「WORK」を指定した場合の処理を実行した後で、「DB」を指定した場合の処理を行います。

DEACT

指定したユーザが作業中の文書を、サーバの作業領域から削除します。同時に編集モードで取り出された文書の排他制御を解除します。このオプションを指定する場合は、必ず、`-u` オプションで対象となるユーザを指定するか又は `-U` オプションを指定してください。

`-u` ユーザ名

指定したユーザについてだけ、`-o` オプションで指定した処理を実行します。なお、「DEACT」を指定した場合は、必ずこのオプション又は `-U` オプションを指定してください。

ユーザ名は、次の規則に従って指定してください。

Groupmax Address と連携する場合

Groupmax Address のユーザ名の規則に従ってください。詳細はマニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

Groupmax Address と連携しない場合

UNIX のユーザ名の規則に従ってください。詳細は、「付録 C Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録」を参照してください。

`-U`

`-o` オプションで DEACT を指定した場合に、すべてのユーザの作業中文書を削除するときに指定します

`-m` ログ出力ファイル名

ユティリティの実行結果ログを出力するファイル名をフルパスで指定します。省略した場合は、`/usr/infoshare/spool` に `dirchk.txt` として出力されます。なお、このファイルはユティリティを実行するごとに上書きされます。

`-v`

ユティリティの実行結果ログを標準出力にも出力します。

-d

整合性チェック結果の詳細情報を出力する場合に指定します。詳細情報は、-m オプション及び -v オプションの指定に従って出力されます。出力される内容は次のとおりです。なお、それぞれのカラムは半角スペース（0x20）で区切られています。

表 8-3 詳細情報として出力される内容

出力項目	説明
オブジェクト ID	文書又は文書データベースのオブジェクト ID が出力されます。
オブジェクトの名称	[] で囲まれた文字列が出力されます。
作業領域に取り出した時刻	文書又は文書データベースを作業領域に取り出した時刻が、「YYYY/MM/DD-hh:mm:ss」形式で出力されます。不明な場合は「0000/00/00-00:00:00」が出力されます。-o オプションに WORK を指定した場合も、「0000/00/00-00:00:00」が出力されます。
バージョン番号	作業領域に取り出した文書又は文書データベースのバージョン番号が出力されます。不明な場合は -1 が出力されます。-o オプションに WORK を指定した場合も、-1 が出力されます。
オブジェクト種別	オブジェクトの種別が出力されます。出力される種別を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • CLASS：文書データベース • DOC：文書 • unknown：不明、又は -o オプションに WORK を指定している場合
排他モード	排他モードが出力されます。出力されるモードを次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • READ：参照モード • WRITE：編集モード unknown：不明、又は -o オプションに WORK を指定した場合
整合性	整合性の状態が出力されます。出力される状態を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • TRUE：整合 • FALSE：不整合 • unknown：不明

出力例を次に示します。

8. Document Manager で使用するユティリティ

図 8-2 詳細情報の出力例

C00D0000000000DF	[全文検索DB]	2000/11/15-12:30:00	1	CLASS	READ	TRUE
C00D0000000000E0	[テスト文書]	2000/12/01-13:59:12	2	DOC	WRITE	FALSE
C00D000000000173	[議事録]	0000/00/00-00:00:00	-1	unknown	unknown	unknown
C00D00000000015B	[見積り依頼]	0000/00/00-00:00:00	-1	unknown	unknown	TRUE

ユティリティ実行結果ログの出力形式

ユティリティ実行結果ログは、次の形式で出力されます。なお、実行結果ログの先頭行には、ファイルの作成開始日時が出力され、最終行にはファイルの作成終了日時が出力されます。

(出力形式)

```
#ISdirchk LOG FILE : ログファイル作成開始日時
User ID = aaaaaaaaa(no user)
Directory = /usr/infoshare/export/users/aaaaaaaa
Work Document = b
Inconsist Work Document = c
Activate Information = d
Inconsist Activate Information = e
Delete UserID (aaaaaaaa) Directory
ffff..ffff
#ISdirchk LOG FILE END : ログファイル作成終了日時
```

```
#ISdirchk LOG FILE : ログファイル作成開始日時
ログファイルの作成を開始した日時が出力されます。
```

```
UserID=aaaaaaaa (no user)
チェック対象のユーザ名が出力されます。なお、このユーザ名が Groupmax
Address , 又は UNIX のユーザ登録ファイルに登録されていない場合は、ユーザ名
に続けて (no user) と出力されます。
```

```
Directory =/usr/infoshare/export/users/aaaaaaaa
チェック対象のユーザ ID に対応するサーバの作業領域のディレクトリのパスが出力
されます。
```

```
Work Document = b
-o オプションに WORK , BOTH 又は DEACT を指定した場合に出力されます。
「Directory」に取り出されている文書の総数 (存在するディレクトリ数) が出力さ
れます。
```

```
Inconsist Work Document = c
-o オプションに WORK 又は BOTH を指定した場合に出力されます。
Document Manager データベースに「作業領域に存在しない」と記憶されているの
に、サーバの作業領域にディレクトリが存在する文書数が出力されます。
```

Activate Information = d

・o オプションに DB, BOTH 又は DEACT を指定した場合に出力されます。

Document Manager データベースに「文書が作業領域に取り出されている」と記憶されている文書の総数が出力されます。

Inconsist Activate Information = e

・o オプションに DB 又は BOTH を指定した場合に出力されます。

サーバの作業領域にディレクトリが存在しないのに、Document Manager データベースに「文書が作業領域に取り出されている」と記憶されている文書数が出力されます。

Delete UserID(aaaaaaaaa) Directory

Groupmax Address, 又は UNIX のユーザ登録ファイルに登録されていないユーザ名に対応するディレクトリを、削除する場合に出力されます。

ffff...ffff

ログファイル内の任意の位置にメッセージが出力されます。これらのメッセージが出力された場合は、不要なディレクトリが削除されていない場合がありますので、メッセージに対処してから、再度ユティリティを実行してください。

それぞれのメッセージの要因と対処を示します。

unknown file or directory:XX, skipped.

Document Manager が作成したのではないと思われるディレクトリ又はファイルが存在します。このディレクトリ又はファイルを削除又は退避した後で、再度サーバ作業領域チェックユティリティを実行してください。

textsearch information exist. continue.

全文検索サーバに反映されていない情報があります。全文検索用テキスト登録・削除ユティリティを実行した後で、再度サーバ作業領域チェックユティリティを実行してください。

remove error:XX, skipped.

ファイル又はディレクトリの削除に失敗しました。原因を調査して取り除いてから、再度サーバ作業領域チェックユティリティを実行してください。

directory is not empty:XX, skipped.

ディレクトリが空ではありません。Document Manager が作成したのではないディレクトリ若しくはファイルがあるか、又はディレクトリ若しくはファイルの削除に失敗していますので、それぞれに対処してください。

#ISdirchk LOG FILE END: (ログファイル作成終了日時)

ログファイルの作成が終了した日時が出力されます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、及び Groupmax Address サーバ

8. Document Manager で使用するユティリティ

(Groupmax Address と連携している場合) を起動しておいてください。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバの環境変数 XODDIR 及び XODCONFPATH を設定する必要があります。オブジェクトサーバの環境変数については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

このコマンドを実行しても、不要なディレクトリが削除されない場合は、実行結果ログファイルに出力されたメッセージを参照して対処してから、再度実行してください。

8.12 文書配布情報ファイルの取り込み (ISimport)

ISimport (インポート機能ユティリティ)

形式

ISimport [-f 定義ファイル名]

機能

文書配布機能を使用している場合に、配布先サーバの作業ディレクトリ下にあるエクスポートファイルを Document Manager データベースに取り込みます。

オプション

-f 定義ファイル名

取り込むエクスポートファイルの配布用定義ファイル(文書配布対象グループ名+タイムスタンプ.con)の名称を指定します。省略した場合は、配布先サーバの作業ディレクトリ下にあるすべてのエクスポートファイルが対象になります。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、全文検索サーバ (Bibliotheca/TS 又は Bibliotheca2 TextSearch と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

このコマンドを実行する前に、ISreplica コマンドを実行して文書配布機能の実行環境を作成しておいてください。

このコマンドを実行する前に、取り込みたいエクスポートファイルを配布先サーバの作業ディレクトリ下にコピーしておいてください。

エラーが発生した場合は、エラーメッセージファイルにエラーが出力されます。

8.13 文書配布対象グループの一覧表示，作成 又は削除 (ISgrpct)

ISgrpct (文書配布対象グループの操作ユティリティ)

形式

ISgrpct

```
{-l | -h 配布先サーバー一覧を表示する文書配布対象グループ名称 |  
  -H 配布先サーバー一覧を表示する文書配布対象グループ ID } |  
{-g 作成する文書配布対象グループ名称  
  [-s 配布先サーバーの識別子を指定したファイル名] } |  
{-e 削除する文書配布対象グループ名称 |  
  -E 削除する文書配布対象グループ ID }
```

機能

文書配布機能で使用する文書配布対象グループと関連情報を一覧表示します。また、文書配布対象グループを作成したり、既に作成されている文書配布対象グループを削除します。

オプション

文書配布対象グループの一覧表示系，作成系及び削除系のオプションが指定できます。一回のコマンドの実行に対して，どれか一つのオプションを指定できます。

一覧表示系のオプション

文書配布対象グループに関する情報を一覧表示するオプションです。次に示すオプションのうち，一度に指定できるのは一つだけです。

- l
作成されているすべての文書配布対象グループの名称と文書配布対象グループ ID をコンソールに出力します。
- h 配布先サーバー一覧を表示する文書配布対象グループ名称
指定した文書配布対象グループに設定されている配布先サーバーのサーバ識別子一覧をコンソールに出力します。
- H 配布先サーバー一覧を表示する文書配布対象グループ ID
指定した文書配布対象グループ ID に対応する文書配布対象グループに設定されている配布先サーバーのサーバ識別子一覧をコンソールに出力します。

作成系のオプション

文書配布対象グループを作成するときに指定するオプションです。

- g 作成する文書配布対象グループ名称
作成する文書配布対象グループの名称を指定します。名称は、63 バイト以内で指定してください。
- s 配布先サーバの識別子を指定したファイル名
配布先サーバの識別子を記述したファイルの名称を指定します。ファイル名は、絶対パスで指定してください。このオプションの指定を省略した場合は、配布先サーバは設定されません。
また、配布先サーバの識別子を指定するファイルは、次の形式で記述してください。

```
配布先サーバのサーバ識別子 a
配布先サーバのサーバ識別子 b
      ⋮
配布先サーバのサーバ識別子 n
```

(凡例) : 改行

なお、ファイルに記述する配布先サーバの識別子は、連携サーバ設定ファイルの内容に合わせてください。

削除系のオプション

文書配布対象グループを削除するときに指定するオプションです。

- e 削除する文書配布対象グループ名称
削除する文書配布対象グループの名称を指定します。同じ名称の文書配布対象グループが複数ある場合は、最初に作成された文書配布対象グループが削除されます。
- E 削除する文書配布対象グループ ID
指定した文書配布対象グループ ID に対応する文書配布対象グループを削除します。

文書配布対象グループに関する情報の出力形式

一覧表示系のオプションを指定したときに出力される文書配布対象グループに関する情報の出力形式について説明します。

- l オプション指定時の文書配布対象グループ情報の出力形式
一つの文書配布対象グループに対して、一行表示します。表示形式は次のとおりです。

出力形式

```
文書配布対象グループ名      文書配布対象グループ ID
```

文書配布対象グループ名

先頭から 60 バイトまで出力されます。文書配布対象グループ名が 60 バイト以下の場合には、残りの部分には空白が挿入されます。

半角の空白が三つ挿入されます。

文書配布対象グループ ID

文書配布対象グループ ID (16 バイト) が出力されます。

出力例

文書配布対象グループ 1 C000000000000001

-h , -H オプション指定時の文書配布対象グループ情報の出力形式

-l オプションを指定したときに出力される文書配布対象グループ情報を一行目に出
力します。二行目以降に、指定した文書配布対象グループに設定されている配布先サ
ーバのサーバ識別子をすべて出力します。

出力形式

文書配布対象グループ名 文書配布対象グループの ID
配布先サーバのサーバ識別子 , ...

文書配布対象グループ名

先頭から 60 バイトまで出力されます。文書配布対象グループ名が 60 バイト以
下の場合は、残りの部分には半角の空白が挿入されます。

半角の空白が三つ挿入されます。

文書配布対象グループ ID

文書配布対象グループ ID (16 バイト) が出力されます。

二行目の先頭に半角の空白が三つ挿入されます。

サーバ名 , ...

指定した文書配布対象グループに設定されている配布先サーバのサーバ識別子
をすべて出力します。サーバ識別子が 8 バイト以下の場合、残りの部分には
半角の空白が挿入されます。サーバ識別子は「,」で区切られます。

出力例

文書配布対象グループ 1 C000000000000001
server01,server02,server03,server04

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ
(Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動
しておいてください。

-s オプションで指定するファイル名に記述する配布先サーバのサーバ識別子は、連携
サーバ設定ファイルのサーバ名にも記述しておいてください。

8.14 文書配布対象グループ情報の表示 (ISgrpinf)

ISgrpinf(文書配布対象グループ操作ユティリティ)

形式

ISgrpinf

```
[ -t | { { -g 文書配布対象グループ名称 | -G 文書配布対象グループ ID }
{ -u | -r | -c } { {d 文書データベース ID | -i 分類 ID | -f フォルダ ID } } } ]
[ -o 出力ファイル名称 ]
```

機能

作成されている文書配布対象グループの一覧を表示します。

指定した文書配布対象グループに定義されている文書の更新情報を表示します。文書配布対象グループ内で更新されている文書や、追加された文書が分かります。

指定した文書配布対象グループに定義されている文書の一覧を表示します。

オプション

-t

文書配布対象グループの名称とオブジェクト ID 及び、文書数、配布先数をコンソールに出力します。

-g 文書配布対象グループ名称

情報を表示する文書配布対象グループの名称を指定します。

同一の文書配布対象グループが複数存在する場合は、最初に作成した文書配布対象グループを処理の対象とします。

-G 文書配布対象グループ ID

情報を表示する文書配布対象グループのオブジェクト ID を指定します。

-u

指定された文書配布対象グループの更新文書情報（追加文書数、更新文書数、削除（無効）文書数、全登録文書数、配布先サーバー一覧）をコンソールに出力します。

8. Document Manager で使用するユティリティ

-r

指定された文書配布対象グループに登録された文書に変更があるかどうかをコマンドリターン値で返します。

50

変更文書なし

51

変更文書あり

-c

指定された文書配布対象グループに登録された文書の一覧（文書名，文書 ID，更新状態，配布回数，配布日時）をフォルダ単位にコンソールに出力します。

-d 文書データベース ID

新しく追加する文書を検索する文書データベースの，文書データベース ID を指定します。指定した文書データベースより下位の文書データベースも検索対象となります。

-i 分類 ID

新しく追加する文書を検索する分類索引の，分類 ID を指定します。指定した分類索引より下位の分類索引も検索対象となります。

-f フォルダ ID

新しく追加された文書を検索するフォルダのフォルダ ID を指定します。指定したフォルダより下位のフォルダも検索対象となります。

-o 出力ファイル名称

指定された情報をファイル出力する場合に出力するファイルを，フルパスで指定します。既に存在する場合は，ファイルを .bak ファイルに変更後，ファイルを作成します。

また，-r オプション指定時は，指定できません。

出力形式

文書配布対象グループに関する情報を表示する場合，-o オプションを指定しないと，情報はコンソールに出力されます。-o オプションを指定すると引数に指定したファイルに情報を出力します。ここでは，表示する情報の形式について，コンソールに出力される場合とファイルに出力される場合に分けて説明します。

文書配布対象グループを一覧表示する場合の出力形式

文書配布対象グループを一覧表示する場合の出力形式について説明します。

コンソールに出力する場合

一つの文書配布対象グループに対して，表 8-4 に示す情報を一行で表示します。

表 8-4 文書配布対象グループを一覧表示する場合の表示項目（コンソールへの出力）

カラム番号	表示項目	説明
1 ~ 40	文書配布対象グループ名称	文書配布対象グループ名の先頭 40 バイトが出力（左詰め）されます。
41	空白（スペース）	-
42 ~ 57	文書配布対象グループのオブジェクト ID	文書配布対象グループ ID が 16 バイトで出力されます。
58	空白（スペース）	-
59 ~ 69	登録文書数	文書配布対象グループに定義されている文書数が最大 10 バイトで出力（右詰め）されます。
70	空白（スペース）	-
71 ~ 77	登録サーバ数	配布先サーバとして登録されているサーバ数が最大 3 バイトで出力（右詰め）されます。

表示例を図 8-3 に示します。

図 8-3 文書配布対象グループの一覧表示例

Group Name	GroupID	Doc Num	SeverNum
文書配布対象グループ 1	C000000000000001	100	3
文書配布対象グループ 2	C000000000000002	10	0
文書配布対象グループ 3	C000000000000003	2100	10

ファイルに出力する場合

一つの文書配布対象グループに対して、表 8-5 に示す情報を指定したファイルに出力します。

表 8-5 文書配布対象グループを一覧表示する場合の表示項目（ファイルへの出力）

表示項目	説明
文書配布対象グループ名称	文書配布対象グループ名が最大 63 バイトで出力されます。
タブ	-
文書配布対象グループのオブジェクト ID	文書配布対象グループ ID が 16 バイトで出力されます。
タブ	-
登録文書数	文書配布対象グループに定義されている文書数が最大 10 バイトで出力されます。

8. Document Manager で使用するユティリティ

表示項目	説明
タブ	-
登録サーバ数	配布先サーバとして登録されているサーバ数が最大 3 バイトで出力されます。

文書配布対象グループの文書更新情報を表示する場合の出力形式

文書配布対象グループの文書更新情報を表示する場合の出力形式について説明します。

コンソールに出力する場合

一つの文書配布対象グループに対して、n 行を表示します。表示形式を表 8-6 に示します。

表 8-6 文書配布対象グループの文書更新情報を表示する場合の表示項目（コンソールへの出力）

コラム番号	表示項目	説明
1 ~ 24	情報名	各情報名が最大 21 バイトで出力（左詰め）されます。出力される情報名を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • Group Name : 文書配布対象グループ名 • Group ID : 文書配布対象グループ ID • Server Count : 配布先サーバ数 • Server Name : 配布先サーバ名 • All Document Count : 全登録文書数 • Add Document Count : 追加文書数 • Update Document Count : 更新文書数 • Delete Document Count : 削除文書数（無効文書数）
25	空白（スペース）	-
26	=	-
27	空白（スペース）	-
28 ~ 68	情報数又は情報文字列	文書配布対象グループ名などの各情報名に対する具体的な情報が最大 40 バイト（左詰め）で出力されます。

表示例を図 8-4 に示します。

図 8-4 文書配布対象グループの文書更新情報の表示例

```

-----
Group Name                = 文書配布対象グループ 1
Group ID                  = C0000000000000001
Server Count              = 3
Server Name                = Server001
                           = Server002
                           = Server003
All Document Count        = 100
Add Document Count        = 10
Update Document Count     = 10
Delete Document Count     = 10
-----

```

ファイルに出力する場合

一つの文書配布対象グループに対して、表 8-7 に示す情報を指定したファイルに出力します。

表 8-7 文書配布対象グループの文書更新情報を表示する場合の表示項目（ファイルへの出力）

表示項目	説明
情報名	各情報名が最大 21 バイトで出力されます。出力される情報名を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • Group Name：文書配布対象グループ名 • Group ID：文書配布対象グループ ID • Server Count：配布先サーバ数 • Server Name：配布先サーバ名 • All Document Count：全登録文書数 • Add Document Count：追加文書数 • Update Document Count：更新文書数 • Delete Document Count：削除文書数（無効文書数）
タブ	-
情報数又は情報文字列	文書配布対象グループ名などの各情報名に対する具体的な情報が出力されます。

文書配布対象グループの文書一覧を表示する場合の出力形式

指定された文書配布対象グループに登録された文書の一覧を、フォルダごとに出力します。フォルダ及び文書は、オブジェクト ID 順に出力されます。また、削除文書については削除文書一覧としてフォルダとは別に出力されます。

コンソールに出力する場合

指定した文書配布対象グループに定義されている文書の一覧を出力する場合は、フォルダ単位のヘッダ情報に続いて、文書の一覧情報を出力します。なお、削除文書の一覧を出力する場合は、ヘッダ情報が異なります。ヘッダ情報の出力形式を表 8-8、文書一覧の出力形式を表 8-9 に示します。

8. Document Manager で使用するコティリティ

表 8-8 フォルダ単位に出力されるヘッダ情報の出力形式（コンソールへの出力）

コラム番号	表示項目	説明
1 ~ 20	フォルダ識別子	ヘッダ情報が 20 バイトで出力されます。出力されるヘッダ情報を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • *Folder* : フォルダに含まれる文書一覧を出力する場合のヘッダ情報 • *Delete Document* : 削除文書の一覧を出力する場合のヘッダ情報
21	空白（スペース）	削除文書の一覧では出力されません。
22 ~ 61	フォルダ名称	フォルダ名の先頭 40 バイトが出力（左詰め）されます。ただし、削除文書の一覧では出力されません。
62	空白（スペース）	削除文書の一覧では出力されません。
63 ~ 80	フォルダオブジェクト ID	フォルダ ID が 16 バイトで出力されます。ただし、削除文書の一覧では出力されません。

表 8-9 文書の一覧の出力形式（コンソールへの出力）

コラム番号	表示項目	説明
1 ~ 40	文書名	文書名の先頭 40 バイトが出力（左詰め）されます。削除文書一覧の場合は、「*」で出力されます。
41	空白（スペース）	-
42 ~ 57	文書 ID	文書 ID が 16 バイトで出力されます。
58	空白（スペース）	-
59 ~ 66	更新状態	文書の状態を示す文字列が 8 バイトで出力（左詰め）されます。出力される文書の状態を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • Add : 追加された文書 • Modify : 更新済みの文書 • Neutral : 更新されていない文書 • Delete : 削除された文書
67	空白（スペース）	-
68 ~ 86	配布日付	文書の配布日付が、「YYYY/MM/DD-HH:MM:SS」形式（19 バイト）で出力されます。削除文書、配布先サーバなし、メールシステムと連携していない場合又は追加文書の場合、「****/**/****:***:***」が出力されます。
87	, (カンマ)	-
88 ~ 97	配布回数	文書の配布回数が最大 10 バイトで出力（右詰め）されます。削除文書の場合「*」、配布先サーバなし、メールシステムと連携していない場合又は新規文書の場合「0」が出力されます。

表示例を図 8-5 に示します。

図 8-5 文書配布対象グループの文書一覧の表示例

```

*DELETE DOCUMENT*
+Document Name -----,Document ID ----,Status -,Distribute Time----,Count --
*
* ,C000000000000000A,Delete ,***/**/**-**-**:**,*
*FOLDER*           ,フォルダ 1           ,C0000000000000004
+Document Name -----,Document ID ----,Status -,Distribute Time----,Count --
文書1              ,C0000000000000005,Modify ,1999/01/05-21:17:30, 1
文書2              ,C0000000000000006,Neutral ,1999/01/05-21:17:30, 1
文書3              ,C0000000000000007,Delete ,1999/01/05-21:17:30, 1
文書4              ,C0000000000000008,Add    ,***/**/**-**-**:**,* 0
    
```

ファイルに出力する場合

一つの文書配布対象グループに対して、表 8-10 に示すヘッダ情報と表 8-11 に示す文書の一覧情報を指定したファイルに出力します。

表 8-10 フォルダ単位に出力されるヘッダ情報の出力形式（ファイルへの出力）

表示項目	説明
フォルダ識別子	ヘッダ情報が 20 バイトで出力されます。出力されるヘッダ情報を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> *Folder* フォルダに含まれる文書一覧を出力する場合のヘッダ情報 *Delete Document* 削除文書の一覧を出力する場合のヘッダ情報
タブ	削除文書の一覧では出力されません。
フォルダ名称	フォルダ名が最大 63 バイトで出力されます。 ただし、削除文書の一覧では出力されません。
タブ	削除文書の一覧では出力されません。
フォルダオブジェクト ID	フォルダ ID が 16 バイトで出力されます。 ただし、削除文書の一覧では出力されません。

表 8-11 文書の一覧の出力形式（ファイルへの出力）

表示項目	説明
文書名称	文書名が最大 63 バイトで出力されます。削除文書一覧の場合は、「*」が出力されます。
タブ	-
文書 ID	文書 ID が 16 バイトで出力されます。
タブ	-
更新状態	文書の状態を示す文字列が最大 7 バイトで出力されます。出力される文書の状態を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> Add：追加された文書 Modify：更新済みの文書 Neutral：更新されていない文書 Delete：削除された文書
タブ	-

8. Document Manager で使用するユティリティ

表示項目	説明
配布日付	文書の配布日付が、「YYYY/MM/DD-HH:MM:SS」形式（19 バイト）で出力されます。削除文書、配布先サーバなし、メールシステムと連携していない場合又は追加文書の場合、「****/**/****:***:***」が出力されます。
タブ	-
配布回数	文書の配布回数が最大 10 バイトで出力されます。 削除文書の場合「*」、配布先サーバなし、メールシステムと連携していない場合又は新規文書の場合「0」が出力されます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

文書配布対象グループ名称には、完全一致名称を指定してください。

文書の一覧をコンソールに出力する場合、文書配布対象グループに 100 件以上の文書が存在すると、応答メッセージで表示するかしないかを確認します。

表示される新規文書数は、文書配布対象グループへ登録対象の件数であり、全文書件数には含まれません。また、オプションの `-i`、`-d`、`-f` のどれかが指定された場合だけ有効な件数が表示されます。

文書配布対象グループ中の文書一覧の表示で出力される配布日時、配布回数に関する情報は、配布先サーバを登録した文書配布対象グループに対してメールシステムと連携して配布した場合だけ表示されます。

8.15 配布先サーバの追加又は削除 (ISaddsrv)

ISaddsrv (配布先サーバ追加・削除ユティリティ)

形式

ISaddsrv

{-g 文書配布対象グループ名称 | -G 文書配布対象グループ ID}

{-a | -e [-i] | -m}

[-s 配布先サーバのサーバ識別子を指定したファイル名称]

機能

配布先サーバ追加・削除ユティリティは、既存の文書配布対象グループに配布先サーバを追加又は削除するユティリティです。配布先サーバを追加した場合は、追加したサーバに文書配布対象グループの文書を配布します。

オプション

-g 文書配布対象グループ名称

配布先サーバを追加又は削除する文書配布対象グループの名称を指定します。同じ名称の文書配布対象グループが複数ある場合は、最初に作成した文書配布対象グループが対象になります。

-G 文書配布対象グループ ID

配布先サーバを追加又は削除する文書配布対象グループ ID を指定します。

-a

文書配布対象グループに配布先サーバを追加登録します。その後、追加した配布先サーバに対して、文書配布対象グループ内のすべての文書を配布します。

-e

文書配布対象グループから配布先サーバを削除します。

-i

配布先サーバを削除する場合に、文書削除情報を作成して、削除する配布先サーバに配布します。

-m

既に登録されている配布先サーバに対して、文書配布対象グループ内のすべての文書を

再配布します。

-s 配布先サーバの識別子を指定したファイル名称

追加又は削除する配布先サーバの識別子を記述したファイルの名称を指定します。-a オプションを指定してこのオプションの指定を省略した場合は、エクスポートファイルだけが作成されます。

ファイル名は、ドライブ名から指定してください。

配布先サーバの識別子を指定するファイルは、次の形式で記述します。

```
配布先サーバのサーバ識別子 a  
配布先サーバのサーバ識別子 b  
      ⋮  
配布先サーバのサーバ識別子 n
```

(凡例) : 改行

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

文書配布対象グループ名称には、完全一致名称を指定してください。

配布先サーバを追加する場合に、配布先サーバの追加後の文書の配布でエラーが発生したときは、-m オプションを指定して文書配布対象グループ中の全文書を再配布してください。全文書を配布しないと、追加した配布先サーバと配布元サーバの文書の整合が取れていない状態になります。

配布先サーバを追加する場合、その時点で最新の文書が追加したサーバに配布されません。このため、次の文書配布時に、追加した配布先サーバで配布文書が既に存在するというメッセージが出力されることがあります。

配布先サーバを削除する場合に、該当サーバを連携サーバから削除するときには、連携サーバから削除する前に、このコマンドを実行してください。また、Groupmax Address と連携している場合は、Groupmax Address の Document Manager サーバ管理用組織から削除する前に、このコマンドを実行してください。

-a、-e、-m オプションのどれも指定しなかった場合は、-a オプションが仮定されません。

エクスポートファイルだけを作成したい場合には、-s オプションを省略して実行します。-a オプション又は -m オプションを指定すると、全文書追加情報のエクスポートファイルを作成します。-e オプションと -i オプションを指定すると、全文書削除情報のエクスポートファイルを作成します。

なお、`-s` オプションを省略した場合、エクスポートファイルは配布されません。
また、`-e` オプションで全文書削除情報のエクスポートファイルを作成する場合には、同時に `-i` オプションを指定しないと、パラメタエラーになります。

8.16 文書配布対象の追加又は削除 (ISadddoc)

ISadddoc(配布文書追加・削除ユティリティ)

形式

ISadddoc { -g 文書配布対象グループ名称 | -G 文書配布対象グループ ID }

{ -d 文書データベース ID | -i 分類 ID | -f フォルダ ID }

機能

配布文書追加・削除ユティリティは、一般文書データベース、分類索引又はフォルダに追加又は削除した文書を調べて、文書配布対象グループを更新するユティリティです。文書配布対象グループを更新した後、このグループに属する文書を配布します。オペレーティングシステムのスケジューリング機能と組み合わせて、定期的に文書配布対象グループの更新と文書の配布ができます。

オプション

-g 文書配布対象グループ名称

文書を追加又は削除する文書配布対象グループの名称を指定します。同じ文書配布対象グループが複数ある場合は、最初に作成した文書配布対象グループに文書が追加又は削除されます。

-G 文書配布対象グループ ID

文書を追加又は削除する文書配布対象グループ ID を指定します。

-d 文書データベース ID

文書配布対象グループに追加又は削除する文書が格納された一般文書データベースの文書データベース ID を指定します。指定した一般文書データベースに下位一般文書データベースがある場合は、そこに格納されている文書も追加又は削除の対象になります。

-i 分類 ID

文書配布対象グループに追加又は削除する文書がリンクされた分類索引の分類 ID を指定します。指定した分類索引に下位分類がある場合は、そこに格納されている文書も追加又は削除の対象になります。

-f フォルダ ID

文書配布対象グループに追加又は削除する文書が格納されたフォルダのフォルダ ID を指

定します。指定したフォルダに下位フォルダがある場合は、そこに格納されている文書も追加又は削除の対象になります。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、メールシステム (メールシステムと連携して文書を配布する場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

文書配布対象グループ名称には、完全一致名称を指定してください。

本コマンドで、一度、文書配布対象グループに追加した文書は、その後、本コマンドで指定したフォルダから別のフォルダに移動したり、本コマンドで指定した分類索引からリンクを解除しても、文書が削除しない限り、文書配布対象グループに属します。

8.17 文書の配布状態表示 (ISrpstat)

ISrpstat(文書の配布状態表示ユティリティ)

形式

ISrpstat

{-v | -i}

[-f]

{-g 文書配布対象グループ名称 | -G 文書配布対象グループ ID }

{-m 配布先サーバのメールアドレス ID | -s 配布先サーバのサーバ識別子 }

[-c 表示する状態の指定]

[-o 出力ファイル名称]

機能

文書の配布状態をコンソール又はファイルに出力します。配布元サーバで配布した文書の配布状態を確認できます。

また、配布完了を確認後の不要となった文書の配布情報を初期化します。

オプション

-v

配布状態をコンソールに出力します。

-i

文書の配布情報を初期化します。なお、このオペランドを指定する場合はグループ名も必ず指定します。

-f

文書の配布情報の初期化時に、メッセージによる確認をしないで、強制的に初期化します。

-g 文書配布対象グループ名称

配布状態の出力又は文書の配布情報の初期化の対象となる文書配布対象グループの名称を指定します。

配布状態を出力する場合、文書配布対象グループ名称又は文書配布対象グループ ID の指

定がないとすべての配布対象グループを指定したと仮定します。

-G 文書配布対象グループ ID

配布状態の出力又は文書の配布情報の初期化の対象となる文書配布対象グループ ID を指定します。

配布状態を出力する場合、文書配布対象グループ名称又は文書配布対象グループ ID の指定がないとすべての配布対象グループを指定したと仮定します。

-m 配布先サーバのメールアドレス ID

配布状態の出力の対象となる配布先サーバのメールアドレスを指定します。複数のメールアドレスを指定する場合には「,」で区切ります。指定がない場合はすべての配布先サーバが指定されたと仮定します。このオペランドは、配布状態の出力の場合だけ指定できません。

-s 配布先サーバのサーバ識別子

配布状態の出力の対象となる配布先サーバのサーバ識別子を指定します。複数のサーバ識別子を指定する場合には「,」で区切ります。指定がない場合はすべての配布先サーバが指定されたと仮定します。このオペランドは、配布状態の出力の場合だけ指定できません。

-c 表示する状態の指定

表示の対象となる状態を文字列で指定します。複数指定する場合は各状態の文字を並べて指定します。指定がない場合はすべての状態を指定したと仮定します。

このオペランドは、配布状態の出力の場合だけ指定できます。

D：配信中

R：再配信中

S：取り込み成功（正常）

W：取り込み成功（警告有り）

F：取り込み失敗

-o 出力ファイル名称

配布状態をファイルに出力する場合の出力ファイル名を指定します。ファイル名はフルパスで指定してください。

出力形式

出力情報は CSV 形式で出力します。

ファイル指定での出力時はカンマをタブに置き換えます。また、情報の後部の半角スペースは出力しません。

8. Document Manager で使用するユティリティ

ヘッダは 1 グループに対して一回出力します。タイトル行と配布内容は配布回数分出力します。

<ヘッダ>

```
Group△Name△△△△△△, 文書配布対象グループ名称
Group△Object△ID△, 文書配布対象グループID
```

<配布内容タイトル>

```
Times△△△△△△△△△△△△, 配布回数
Distribute△Time△, 配布日時
```

<配布内容>

```
Mail△ID△△△△△△Server△ID△△△△△△Status△△△△△△△△Import△Time△△△△△△△△△△△△Detail△△△△△△△△
-----
メールユーザID , サーバID , 配布状態 , 配布完了日時 , 付加情報
```

<各詳細>

文書配布対象グループ名

Group Name (16 バイト) に継続してカンマの区切りの後から文書配布対象グループ名が「」で囲まれて表示されます。

文書配布対象グループ ID

Group Object ID (16 バイト) に継続してカンマの区切りの後から文書配布対象グループ ID (16 バイト) が表示されます。

配布回数

Times (16 バイト) に継続してカンマの区切りの後から配布回数が 10 進数で表示されます。

配布日時

Distribute Time (16 バイト) に継続してカンマの区切りの後から配布日時が YYYY/MM/DD-HH:MM:SS (20 バイト) の形式で表示されます。

メールユーザ ID

配布先サーバに対応するメールユーザ ID が「」で囲まれて表示されます。12 バイトに満たない場合は「」の後に半角スペースが付加されます。

サーバ ID

配布先サーバ識別子が「」で囲まれて表示されます。
8 バイトに満たない場合は「」の後に半角スペースが付加されます。

配布状態

次のどれかの配布状態が表示されます。

- "Delivery" : 配信中
- "Retry" : 再配信中
- "Success" : 取り込み成功 (正常)
- "Warning" : 取り込み成功 (警告有り)
- "Failed" : 取り込み失敗

配布完了日時

配布完了日時が YYYY/MM/DD-HH:MM:SS (20 バイト) の形式で表示され
ます。

付加情報

配布先サーバでメッセージファイルが出力されている場合は "MsgFile" が出力され
ます。

注意事項

文書の配布情報を初期化する場合は、必ずすべての配布が正常に終了していることを
確認の上で実行してください。配布が正常に終了していない状態で初期化を行うと、
配布中の情報を管理できなくなり、再配布が行えなくなります。

次に示す状態のときは、該当サーバの状態が配信中、又は再配信中のままとなります。

- 配布先が「文書の配布状態管理機能」に対応していないバージョンの Document
Manager サーバの場合
- 配布先で「文書の配布状態管理機能」を使用する設定になっていない場合
- 配布先、配布元の文書配布受信デーモンが起動されていない場合
- 配布先、配布元のメールサーバが起動していない場合

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ
(Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動
しておいてください。

文書配布対象グループ名称には完全一致名称を指定してください。

-v, -i がどれも省略された場合には、-v の配布状態の出力が仮定されます。

ファイルに出力する場合に既に存在するファイルが指定されるとファイルのバック
アップを取得後 (.bak ファイルにリネーム)、上書きします。

付加情報に MsgFile が出力されている場合は配布先で発生したエラーの情報がメッ
セージファイルとして下記ディレクトリに格納されています。メッセージファイルの
内容を確認して、エラーの原因を取り除き、必要に応じて文書再配布機能ユティリ
ティを実行してください。

<メッセージファイル格納先ディレクトリ>

8. Document Manager で使用するユティリティ

/usr/infoshare/replica/export/ 文書配布対象グループ名 / 文書配布対象
グループ ID/ メールユーザ ID/ 配布回数 (8 バイト固定).msg

8.18 文書の再配布機能 (ISrpsnd)

ISrpsnd (文書再配布機能ユティリティ)

形式

ISrpsnd

{ -g 文書配布対象グループ名称 | -G 文書配布対象グループ ID }

[{ -m 配布先サーバのメールユーザ ID | -s 配布先サーバのサーバ識別子 }]

[-t 配布回数]

機能

文書の配布状態管理機能を使用している場合に、文書の配布が失敗しているサーバに対して、障害を取り除いた後の再配布を行います。

オプション

-g 文書配布対象グループ名称

文書再配布の対象となる文書配布対象グループの名称を指定します。

-G 文書配布対象グループ ID

文書再配布の対象となる文書配布対象グループ ID を指定します。

-m メールユーザ ID

文書再配布の対象となる配布先サーバのメールユーザを指定します。複数のメールユーザを指定する場合には「,」で区切ります。指定がない場合はすべての配布先サーバが指定されたと仮定します。

-s 配布先サーバのサーバ識別子

文書再配布の対象となる配布先サーバのサーバ識別子を指定します。複数のサーバ識別子を指定する場合には「,」で区切ります。指定がない場合はすべての配布先サーバが指定されたと仮定します。

-t 配布回数

文書再配布の対象となる配布回数（文書の配布状態表示で表示される配布回数）を指定します。

省略した場合は最後に配布したエクスポートファイルを配布対象とします。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、メールシステム (メールシステムと連携して文書を配布する場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

文書配布対象グループ名称には完全一致名称を指定してください。

配布回数及び配布先サーバの指定 (メールユーザ ID、又は配布先サーバのサーバ識別子) を省略した場合は、最後に配布したエクスポートファイルを文書配布対象グループ中のすべてのサーバに配布します。

エクスポートファイルの自動削除機能を使用している場合には、正常に配布された配布回のエクスポートファイルを再送することはできません。

8.19 フォルダ，分類索引体系の抽出及び登録 (IScpdef)

IScpdef (フォルダ，分類索引体系の抽出及び登録)

形式

IScpdef

```
{ [-s 抽出元サーバ識別子 ]-o 出力ファイル名 |
[-t 登録先サーバ識別子 ]-i 入力ファイル名 |
-s 抽出元サーバ識別子 -t 登録先サーバ識別子 }
[-k 定義種別 [-v 分類 ID]]
[-r]
[-c]
[-h 引き継ぎ情報]
```

機能

フォルダ，分類索引，一般文書データベースの体系（定義）を定義情報ファイル（csv 形式のファイル）に抽出します。また，抽出した定義情報ファイルをもとにフォルダ，分類索引，一般文書データベースの体系をサーバに登録します。抽出元サーバと登録先サーバを指定することで，定義情報を複写，登録することもできます。

オプション

-s 抽出元サーバ識別子

定義の抽出元となるサーバ識別子を指定します。省略した場合は，コマンドを実行したサーバが指定されます。

-t 登録先サーバ識別子

定義の登録先となるサーバ識別子を指定します。省略した場合は，コマンドを実行したサーバが指定されます。

-o 出力ファイル名

抽出した定義を出力するファイルを絶対パスで指定します。既に存在する場合は，バックアップファイル（出力ファイル名 .bak）作成後，出力ファイルを作成します。

8. Document Manager で使用するユティリティ

-i 入力ファイル名

登録する定義を入力するファイルを絶対パスで指定します。

-k 定義種別

抽出及び登録の対象となる定義種別を次の文字列で指定します。複数の指定をする場合は「,」で区切って指定します。省略した場合は FOLDER となります。

FOLDER

フォルダ

VIEW

分類索引

DOCDB

一般文書データベース

-v 分類 ID

抽出及び登録する定義の種別が分類索引の場合、抽出する分類 ID を指定します。このオプションを省略した場合は、すべての分類索引を対象とします。複数の指定をする場合は「,」で区切って指定します。

-r

定義登録時に登録定義の登録状況（実行結果）をログ出力します。次に示すファイルにログ情報を出力します。

スプールディレクトリ ¥IScpdef.log

既にファイルが存在する場合は、バックアップファイル（IScpdef.bak）作成後、ファイルを作成します。

-c

定義指定でエラーが発生した場合、エラーの発生した定義をスキップして後続の定義の処理をします。

-h 引き継ぎ情報

定義抽出時に定義と共に抽出する情報を指定します。

複数の指定をする場合は「,」で区切って指定します。

ACCESS

アクセス権（所有者名、所有者アクセス権、グループアクセス権、全ユーザアクセス権）

ATTRIBUTE

属性（ユーザ定義属性）

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

登録先サーバの同一階層に同一名称の定義が存在する場合、該当する定義を作成しません。また、該当する定義階層下への定義追加も行いません。登録先サーバの同一階層に同一名称の定義が重複しないように定義を変更してから再実行してください。

-v オプション指定時、分類索引の重複チェックは行いません。このため、同一オブジェクトが重複して指定されると、該当する分類索引の処理を重複して実行します。

定義登録時に定義チェックでエラーが発生すると処理を中断します。定義にエラーがあった場合でも継続する定義を続行して登録したい場合には -c オプションを指定してください。

定義登録中にエラーが発生した場合、エラー発生前までに登録した定義は削除されません。

定義登録でエラーとなり、定義登録がスキップされた場合、当該定義への引継ぎ情報も設定されません。

定義階層の指定で存在しないパスは、すべて作成されます。このときアクセス権指定をしている場合には、すべて同一のアクセス権が設定されます。

定義種別又は属性種別に誤りがある場合、前の行で記述されている定義は登録されません。正しい定義種別又は属性種別に修正して再実行してください。

定義の抽出・登録機能で処理できる最大階層数は 64 です。

フォルダ登録時の定義階層の最大値階層数は 10 です。10 階層を超える定義は登録されません。

定義登録機能で入力となる定義に定義階層の最大数を超過している定義があると、定義登録を行わないで処理を終了します。定義抽出機能及び定義複写機能の場合は、定義階層の最大数を超過している階層を検出した時点で処理を終了します。

アクセス権の指定がない定義は、上位定義のアクセス権が継承されます。

アクセス権を指定する場合には、設定するアクセス権種別（所有者名、所有者アクセス権、グループアクセス権、全ユーザアクセス権）をすべて指定してください。指定していない定義は設定されません。

抽出元サーバでデフォルトフォルダ名が変更されている場合、登録先サーバではユーザ作成フォルダとして変更されたフォルダ名で登録されます。この場合、登録後に登録先サーバの該当するフォルダを削除して、デフォルトフォルダを抽出元のデフォルトフォルダ名に変更します。

大量の定義を定義登録又は定義複写する場合、メモリ不足になる場合があります。この場合、定義種別ごとに登録するか、定義を分割して登録してください。複写の場合には、代わりに定義抽出と定義登録を組み合わせる実行してください。

ログの定義階層表示の最大長は 2,048 バイトです。定義階層数が多くなると階層の出

8. Document Manager で使用するユティリティ

力が途中までになることがあります。

引き継ぎ情報（-h オプション）に ATTRIBUTE を指定して作成された出力ファイルは、06-52 以降の Document Manager にしか指定できません。

定義抽出登録機能で処理できるユーザ定義属性の最大数（上位文書データベースから引き継いだユーザ定義属性を含む）は 128 です。

8.20 特定のフォルダに格納されている文書を抽出して登録する (ISexport 及び ISimport)

この節では、特定のフォルダに格納されている文書を抽出して (エクスポートユティリティの実行)、別サーバに登録する (インポートユティリティの実行) 方法について説明します。

ISexport (文書を抽出するエクスポートユティリティ)

形式

ISexport

- f エクスポートファイル名称
- o 抽出対象フォルダのフォルダ ID
- [-s]

機能

任意のフォルダ下の文書群をまとめて抽出します。

オプション

- f エクスポートファイル名称

作成するエクスポートファイル名称 (拡張子は不要) を指定します。作成するエクスポートファイルはパス名で指定できます。ファイル名だけを指定した場合、スプールディレクトリ直下にエクスポートファイルを作成します。ただし、既に同一名称のエクスポートファイルが指定したディレクトリ (ファイル名を指定した場合はスプールディレクトリ) 下に存在する場合はエラーになります。

- o フォルダ ID

抽出対象の文書群が格納されているフォルダのフォルダ ID を指定します。指定したフォルダ及びその下位フォルダに格納されている文書群を抽出対象とします。

-s

- o オプションで指定されたフォルダ直下の文書だけを抽出対象とします。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドで抽出した文書群を登録するサーバには、同一名称のフォルダ階層及び一般文書データベースが存在する必要があります。

抽出対象が格納されているフォルダ階層のフォルダ名称は、重複しないことをお勧めします。同一の名称が存在する場合、インポートユティリティで対象外のフォルダに文書が登録される可能性があります。

抽出元サーバ又は登録先サーバの分類索引、分類又はフォルダの名称に半角コンマが含まれている場合、正しく文書を取り込むことができません。発生する障害及び対処方法については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

ISimport (配布文書又は抽出した文書を取り込むインポートユティリティ)

形式

ISimport

[-f ファイル名]

[-r { Replica | Folder }]

[-i 登録対象のフォルダ ID]

機能

文書配布機能を使用している場合に、配布先サーバの文書配布ディレクトリにあるエクスポートファイルを Document Manager データベースに取り込みます。また、エクスポートユティリティ (ISexport) を使って抽出した任意のフォルダ下の文書群を、任意の Document Manager サーバに登録します。

オプション

-f ファイル名

取り込むエクスポートファイルの配布用定義ファイル (文書配布対象グループ名 + タイムスタンプ .con), 又は登録用定義ファイル (エクスポートファイル名 .con) の名称を指定します。省略した場合は、条件に応じて次に示すディレクトリ下のすべてのエクスポートファイルを取り込みます。

-r Replica 指定時又は -r 省略時

インポートディレクトリ (/usr/infoshare/replica/import) 下のエクスポートファイルを取り込みます。

-r Folder 指定時

登録するエクスポートファイルの名称を絶対パスで指定します。ファイル名だけを指定した場合、スプールディレクトリ (/usr/infoshare/spool) 下のエクス

ポートファイルを取り込みます。

-r 登録方法

文書の登録方法を指定します。-r が省略された場合、登録方法は Replica とみなされます。

Replica

エクスポートファイルから文書を登録します。登録された文書は配布文書として扱われるため、削除、更新はできません。文書配布機能を使用して作成されたエクスポートファイルを取り込む場合は、必ずこのオプションを指定してください。

Folder

エクスポートファイルから指定フォルダ下に文書の一括登録を行います。エクスポートユティリティ (ISexport) と組み合わせて使用する場合は必ずこのオプションを指定してください。

-i 登録対象のフォルダ ID

登録対象のフォルダ ID を指定します。指定されたフォルダ下のフォルダ階層に文書を一括登録します。エクスポートユティリティ (ISexport) と組み合わせて使用する場合は、必ずこのオプションを指定してください。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

登録対象の文書データベースは、抽出元サーバと同一の名称及び属性にしてください。

抽出及び登録対象のフォルダ階層のフォルダ名称は、重複しないことをおすすめします。同一の名称が存在する場合、フォルダ ID が最も小さいフォルダに登録され、該当するフォルダが存在しない場合はシステムで提供するフォルダ (デフォルトフォルダ) に登録されるので、対象外のフォルダに文書が登録される可能性があります。

エクスポートユティリティ (ISexport コマンド) を使用して作成された登録用属性ファイル (エクスポートファイル) には、文書のアクセス権限情報が格納されているため、このコマンドを実行して文書の一括登録を行うと抽出元の文書のアクセス権を継承できます。したがって、登録先サーバに抽出元サーバと同一のユーザ、グループ及び組織などを作成しておく必要があります。これらが作成されていない場合、該当文書の参照、更新ができなくなる可能性があります。

抽出元サーバ又は登録先サーバの分類索引、分類又はフォルダの名称に半角コンマが含まれている場合、正しく文書を取り込むことができません。発生する障害及び対処方法については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

8.21 フォーム文書の抽出 (ISexform)

ISexform (フォームのエクスポート機能ユティリティ)

形式

ISexform

- f フォーム文書データベース名
- d 移行情報出力ディレクトリ名

機能

移行対象となるフォーム文書データベースに登録されているフォーム文書の移行情報を作業用のディレクトリに抽出します。

オプション

- f フォーム文書データベース名

移行元のフォーム文書データベースの名称を指定します。

- d 移行情報出力ディレクトリ名

フォーム文書移行情報を出力するためのディレクトリの名称を指定します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

移行情報出力ディレクトリは、空のディレクトリを指定してください。

ほかのユーザが Document Manager サーバにログインしている場合は、このコマンドは実行できません。サーバからログアウトさせてから、実行してください。

8.22 フォーム文書の取り込み (ISimform)

ISimform(フォーム文書インポート機能ユティリティ)

形式

ISimform

- f フォーム文書データベース名
- d 移行情報出力ディレクトリ名

機能

作業用ディレクトリに出力されたフォーム文書の移行情報を基に、移行先のフォーム文書データベースにフォーム文書を取り込みます。

オプション

- f フォーム文書データベース名

移行先のフォーム文書データベースの名称を指定します。

- d 移行情報出力ディレクトリ名

フォーム文書移行情報を出力したディレクトリの名称を指定します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

ほかのユーザが Document Manager サーバにログインしている場合は、このコマンドは実行できません。サーバからログアウトさせてから、実行してください。

ISimform コマンドによるフォーム文書の移行では、フォーム文書は、すべて新規に作成されます。このため、同一のフォーム文書移行情報を使って、複数回 ISimform コマンドを実行した場合は、上書きされないで別文書として登録されます。

8.23 文書の一括登録 (ISregist)

ISregist (一括登録ユティリティ)

形式

ISregist -d 文書格納ディレクトリ -f 定義ファイル名

機能

ユーザの管理する文書を一括して、Document Manager データベースに登録します。一括登録できる文書は、一般文書だけです。

オプション

-d 文書格納ディレクトリ

文書、登録用属性ファイル及び関連ファイルを格納した、文書格納ディレクトリを指定します。文書格納ディレクトリは、フルパス名で指定してください。

-f 定義ファイル名

登録する文書実体ファイル及び登録用属性ファイル名を指定した定義ファイル名を指定します。定義ファイル名は、フルパス名で指定してください。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、全文検索サーバ (Bibliotheca/TS 又は Bibliotheca2 TextSearch と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

文書格納ディレクトリは、任意のディレクトリの下に作成してください。

テキストデータベースにテキストファイルを登録する場合、Document Manager 管理者のユーザ名で作成した文書で全文検索サーバに未登録の文書もすべて登録されるので注意してください。

このコマンドの起動時、文書を登録する一般文書データベースに定義されている文書ひな形は取り込みません。また、同じく一般文書データベースに定義されているアプリケーションプログラムは起動されません。

一つの分類索引に同じ名称の分類が複数ある場合は、分類 ID を登録用属性ファイルに指定してください。分類索引に同じ分類名が複数ある場合、分類 ID を省略すると、すべての同じ分類名の分類に文書をリンクします。登録用属性ファイルについては、「7.4 文書の一括登録」及び「付録 B 属性ファイル」を参照してください。また、

分類 ID は、分類属性ウィンドウで参照できます。

一文書の登録で指定できる分類索引の数は 4,095 です。

一文書の登録に使用する文書実体ファイル、登録用属性ファイル及び関連ファイルは、すべて同じディレクトリの下に作成してください。

関連ファイルを登録する場合、文書を登録する一般文書データベースの AP 識別子に対応する AP 情報管理ファイルに、関連ファイル名を記述しておいてください。

テキストファイルを登録する場合、文書を登録する一般文書データベースに TS 情報 ID を設定してください。

文書を一括登録したとき、作成日時と更新日時の間には若干の差が生じることがあります。

文書の一括登録で発生したエラーは、ISregist コマンド用出力メッセージファイルに出力されます。ただし、ファイルに出力できない場合は、サーバのコンソールに出力されます。したがって、文書の一括登録でエラーが発生した場合は、ISregist コマンド用出力メッセージファイルの内容を調査してください。なお、ISregist コマンド用出力メッセージファイルは、ISregist コマンドを実行するたびに初期化されます。このため、ファイルの内容が必要な場合は、任意のファイルに退避させてください。

抽出元サーバ又は登録先サーバの分類索引、分類又はフォルダの名称に半角コンマが含まれている場合、正しく文書を取り込むことができません。発生する障害及び対処方法については、「付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害」を参照してください。

8.24 文書の圧縮 (IScomprs)

IScomprs(文書圧縮ユティリティ)

形式

IScomprs [-f フォルダのオブジェクト ID]

機能

Document Manager データベースに格納されている一般文書を圧縮します。

オプション

-f フォルダのオブジェクト ID

圧縮する一般文書が属するフォルダのオブジェクト ID を 16 進文字列で指定します。ここで指定したフォルダの下位にあるフォルダ及び一般文書がすべて圧縮されます。省略すると、Document Manager データベースに格納されているすべての一般文書が圧縮されます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

このコマンドを実行する前に、環境設定ファイルで `DocCompress = use` を指定してください。

このコマンドの実行性能は、文書実体ファイルのサイズに比例します。したがって、圧縮の対象になる文書実体ファイルサイズの合計値が大きいと、非常に時間を要する場合があります。この場合は、必要に応じて、下位フォルダから順番にコマンドを実行してください。なお、一つのフォルダの直下にある文書の文書実体ファイルのサイズの合計値が大きい場合は、一時的にフォルダを分割してコマンドを実行してください。

8.25 文書の圧縮の解除 (ISexpand)

ISexpand(文書の圧縮解除ユティリティ)

形式

ISexpand [-f フォルダのオブジェクト ID]

機能

Document Manager データベースに格納されている一般文書の圧縮を解除して伸長します。

オプション

-f フォルダのオブジェクト ID

圧縮を解除する一般文書が属するフォルダのオブジェクト ID を 16 進文字列で指定します。ここで指定したフォルダの下位にあるフォルダ及び一般文書の圧縮がすべて解除されます。省略すると、Document Manager データベースに格納されているすべての一般文書の圧縮が解除されます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

このコマンドの実行性能は、文書実体ファイルのサイズに比例します。したがって、圧縮解除の対象になる文書実体ファイルサイズの合計値が大きいと、非常に時間を要する場合があります。この場合は、必要に応じて、下位フォルダから順番にコマンドを実行してください。なお、一つのフォルダの直下にある文書の文書実体ファイルのサイズの合計値が大きい場合は、一時的にフォルダを分割してコマンドを実行してください。

8.26 テキストファイルの登録又は削除 (IStssync)

IStssync(テキストファイルの登録・削除ユティリティ)

形式

```
IStssync [-a {SYNC|CANCEL|CANCELF}]
```

機能

全文検索サーバにテキストファイルを登録します。また、Document Manager データベースから削除された文書のテキストファイルを、全文検索サーバから削除します。オペレーティングシステムのスケジューリング機能と組み合わせて、定期的にテキストファイルを登録又は削除できます。

さらに、登録するテキストファイルに不正がある場合は、不正のあるテキストファイルを全文検索サーバに登録しないよう設定できます。

オプション

```
-a { SYNC|CANCEL|CANCELF }
```

全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの動作を指定します。-a オプションを省略した場合は、SYNC が仮定されます。

SYNC

全文検索サーバにテキストファイルを登録します。また、文書を削除するとき、全文検索サーバから削除されなかったテキストファイルを削除します。

CANCEL

全文検索サーバに未登録のテキストファイルを全文検索サーバに登録できないように設定します。テキスト自動抽出サーバの設定が非同期モードで抽出されたテキストファイルは対象外となります。ただし、このオペランドを実行する前に「IStssync -a SYNC」を実行した場合、抽出処理が終了していたテキストファイルについては対象となります。

CANCELF

全文検索サーバに未登録のテキストファイルを全文検索サーバに登録できないように設定します。テキスト自動抽出サーバの設定が非同期モードで抽出されたテキストファイルも対象となります。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、全文検索サーバ (Bibliotheca/TS 又は Bibliotheca2 TextSearch と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。また、テキストファイルを格納するデータベースをオープンしておいてください。

このコマンドは、Document Manager サーバを停止後、テキスト自動抽出サーバを停止して、Document Manager サーバを再起動してから実行してください。

SYNC オプションを指定した場合は、全文検索サーバに登録できなかったテキストファイルの一覧を、テキスト登録エラーログファイルに出力します。

CANCEL オプション及び CANCELF オプションを指定する場合は、全文検索登録対象外ファイルを作成してください。

環境設定ファイルの bib_ts オペランドに、全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用している場合は BIB を指定してください。全文検索サーバとして Bibliotheca2 TextSearch を使用している場合は BIB2 を指定してください。

このコマンドは、夜間など、比較的サーバの負荷が少ないときに実行するようにしてください。

8.27 フォルダの一覧表示 (ISlsfldr)

ISlsfldr(フォルダの一覧表示ユティリティ)

形式

ISlsfldr -o 出力ファイル名称

{ -f {LIST|INDENT|TREE|CHFLNM} }

{ -v }

{ -p }

{ -n フォルダ変更名称の接頭辞 }

機能

文書実体ファイル格納ディレクトリの名称をファイルに出力します。ディレクトリ名は、フォルダごとに出力できます。

オプション

-o 出力ファイル名称

文書実体ファイル格納ディレクトリの一覧を出力するファイル名を指定します。ファイル名はフルパスで指定してください。ファイル名だけを指定した場合は、ISlsfldr の存在するディレクトリ下に出力されます。

-f {LIST|INDENT|TREE|CHFLNM}

ファイルに出力するときの形式を指定します。形式には、LIST、INDENT、TREE 及び CHFLNM の 4 種類があります。-f オプションを省略した場合は、LIST が仮定されます。

LIST

Document Manager データベース上のすべての文書の文書実体ファイル格納ディレクトリ名称が、リスト（箇条書き）形式で出力されます。重複しているディレクトリ名は一つ目だけが出力されます。出力順序は ASCII コード順です。

(出力例)

```
/usr/infoshare/doc  
/usr/kaihatsu/doc  
/usr/kaihatsulg/doc
```

INDENT

Document Manager データベース上のすべての文書の文書実体ファイル格納ディレ

クトリ名称を、フォルダごとに階層的に出力します。出力される形式は次のとおりです。

フォルダのオブジェクトID フォルダ名
<文書実体ファイル格納ディレクトリ>

注 文書実体ファイル格納ディレクトリは< >で囲まれ、先頭に 4 バイトの半角の空白 (0x20) が付与されて出力されます。

(出力例)

```
C000000000000001 root
  </usr/infoshare/doc>
    C000000000000003 開発部
      </usr/kaihatsu/doc>
        C000000000000004 開発第1グループ
          </usr/kaihatsulg/doc>
    C000000000000002 default
  </usr/infoshare/doc>
```

TREE

Document Manager データベース上のすべての文書の文書実体ファイル格納ディレクトリ名称を、けい線を使ってフォルダごとに階層的に出力します。

(出力例)

```
C000000000000001 root
</usr/infoshare/doc>
| - - C000000000000003 開発部
|   </usr/kaihatsu/doc>
|   | - - C000000000000004 開発第1グループ
|   |   </usr/kaihatsulg/doc>
| - - C000000000000002 default
|   </usr/infoshare/doc>
```

CHFLNM

フォルダ名称一括変更ユティリティで使用するフォルダ名称マッピングファイルを作成します。出力される形式は次のとおりです。

フォルダのオブジェクトID<タブ>フォルダの変更名称<タブ>既存のフォルダ名称

注 フォルダの変更名称情報は 1 行で構成されています。

フォルダのオブジェクト ID, フォルダの変更名称, 既存のフォルダ名称は, タブ文字 (0x09) で区切られます。

フォルダの変更名称は, フォルダ変更名称の接頭辞 (固定長 5 バイト) + 10 桁の数値で構成します。

(出力例)

```
C000000000000001<タブ>DOCUM0000000001<タブ>root
C000000000000002<タブ>DOCUM0000000002<タブ>開発部
C000000000000003<タブ>DOCUM0000000003<タブ>開発部 1 グループ
C000000000000004<タブ>DOCUM0000000004<タブ>開発部 2 グループ
C000000000000005<タブ>DOCUM0000000005<タブ>開発部 3 グループ
C000000000000006<タブ>DOCUM0000000006<タブ>開発部 4 グループ
```

8. Document Manager で使用するユティリティ

-v

このコマンドの開始、終了及びエラーの発生時にメッセージを出力する場合に指定してください。

-p

このコマンドの処理が終了したときに、「なにかキーを押してください」というメッセージを出力して、キーが押されるまで処理を一時的に停止する場合に指定します。

-n フォルダ変更名称の接頭辞

-f オプションで CHFLNM を指定した場合、フォルダの変更名称の接頭辞を 5 文字指定します。フォルダの変更名称の接頭辞に使用できる文字は、半角の英大文字のみとします。省略すると、フォルダの変更名称の接頭辞として、DOCUM を設定します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

8.28 文書実体ファイル格納ディレクトリの変更 (ISchfldr)

ISchfldr(文書実体ファイル格納ディレクトリ変更ユティリティ)

形式

ISchfldr -f フォルダのオブジェクト ID

-d 変更先ディレクトリ

[-t]

機能

指定したフォルダに属する一般文書を、指定したディレクトリに変更します。

オプション

-f フォルダのオブジェクト ID

文書実体ファイル格納ディレクトリを変更する一般文書が属するフォルダのオブジェクト ID を指定します。

-d 変更先ディレクトリ

変更先のディレクトリ名をフルパスで指定します。

-t

-f オプションで指定したフォルダ及びその下位フォルダに属するすべての一般文書の文書実体ファイル格納ディレクトリを変更する場合に指定します。省略すると、-f オプションで指定したフォルダに属する一般文書の文書実体ファイル格納ディレクトリだけを変更します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

変更先ディレクトリはあらかじめ作成しておいてください。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

8. Document Manager で使用するユティリティ

このコマンド実行後、文書実体ファイル格納ディレクトリは、(変更先ディレクトリ) /doc となります。なお、/doc は、Document Manager が自動的に作成します。

変更先のディスクの容量が満杯の場合などで、このコマンドが異常終了した場合は、再実行の前に次の手順で変更途中のディレクトリを削除してください。なお、スプールディレクトリ (/usr/infoshare/spool) 下に chdirerr が存在しない場合は、次の手順は不要です。

```
cd /usr/infoshare/spool
chmod +x chdirerr
chdirerr
rm chdirerr
```


8.29 フォルダ階層の移動 (ISmvfldr)

ISmvfldr(フォルダ階層の移動ユティリティ)

形式

ISmvfldr -f 移動対象フォルダのオブジェクト ID -n 移動先の親フォルダのオブジェクト ID

機能

指定したフォルダ以下のフォルダ階層を移動先フォルダの下位に移動します。

オプション

-f 移動対象フォルダのオブジェクト ID

移動対象のフォルダのオブジェクト ID を指定します。

-n 移動先の親フォルダのオブジェクト ID

移動先フォルダのオブジェクト ID を指定します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

ほかのユーザがログインしているときは実行できません。

-f オプション、-n オプションで指定するフォルダのオブジェクト ID は、クライアントや ISlsfldr コマンドを使用してあらかじめ調べておくようにしてください。

8.30 文書一覧の表示 (ISlsdoc)

ISlsdoc (文書一覧表示ユティリティ)

形式

ISlsdoc

-o 出力ファイル名

-f フォルダ ID

[-s { SHALLOW | DEEP }]

[-t { BOTH | LOCAL | REPLICAS }]

機能

指定されたフォルダに格納されている文書の属性値の一覧を表示します。また、配布文書については、オリジナル文書の情報も出力します。

オプション

-o 出力ファイル名

文書一覧を出力するファイル名を指定します。ファイル名は絶対パスで指定します。ファイル名だけを指定した場合は、カレントディレクトリ下に出力します。出力するファイルと同じ名称のファイルがある場合は、上書きします。

-f フォルダ ID

文書一覧を出力する文書が格納されたフォルダのフォルダ ID を指定します。

-s { SHALLOW | DEEP }

指定されたフォルダとその階層下のフォルダに格納されている文書の文書一覧を表示するかどうかを指定します。このオプションを省略した場合、「SHALLOW」が仮定されません。

SHALLOW

階層下のフォルダに格納されている文書は出力しません。

DEEP

階層下のフォルダに格納されている文書も出力します。

-t { BOTH | LOCAL | REPLICAS }

表示する文書の文書種別を指定します。このオプションを省略した場合、「BOTH」が仮

定されます。

BOTH

すべての文書種別の文書を表示する。

LOCAL

ローカル文書を表示する。

REPLICA

配布文書を表示する。

出力形式

フォルダ情報

文書の一覧を表示する対象となるフォルダに関する情報を出力します。表示項目は次のとおりです。各表示項目は、タブで区切られて出力されます。

フォルダ識別子

「*Folder*」と出力します。

フォルダ名称

指定したフォルダの名称を最大 63 バイトで出力します。

フォルダ ID

指定したフォルダの ID を 16 バイトで出力します。

文書一覧情報

各フォルダに格納されている文書の一覧を出力します。文書一覧情報の出力形式を表 8-12 に示します。なお、ヘッダ情報及びヘッダ情報に対応する表示項目は、タブで区切られて出力されます。

表 8-12 文書一覧情報

ヘッダ情報	ヘッダに対応する表示項目	説明
'IS_object_id'	文書 ID	文書 ID が 16 バイトで出力されます。
'IS_object_name'	文書名	文書名が最大 63 バイトで出力されます。
'IS_class_id'	文書データベース ID	文書が所属する一般文書データベースの ID が 16 バイトで出力されます。
'IS_class_name'	文書データベース名	文書が所属する一般文書データベース名が最大 63 バイトで出力されます。
'IS_owner_name'	所有者名	文書の所有者名が最大 8 バイトで出力されま す。
'IS_create_time'	作成日時	文書の作成日時が、「YYYY/MM/ DD-HH:MM:SS」の形式で 19 バイトで出力さ れます。
'IS_creator_name'	作成者名	文書の作成者名が最大 255 バイトで出力されま す。

8. Document Manager で使用するユティリティ

ヘッダ情報	ヘッダに対応する表示項目	説明
'IS_modify_time'	更新日時	文書の更新日時が、「YYYY/MM/DD-HH:MM:SS」の形式で 19 バイトで出力されます。
'IS_modifier_name'	更新者名	文書の更新者名が最大 8 バイトで出力されます。
'IS_replica_flag'	文書配布フラグ	コマンドを実行したサーバに存在する文書か、又は配布文書かを示すフラグが 1 バイトで出力されます。出力されるフラグを次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> • 0 又は 1 : コマンドを実行したサーバに存在する文書 • 2 : 配布文書
'IS_file_size'	文書実体ファイルサイズ	文書実体ファイルのサイズが最大 10 バイトで出力されます。
'IS_file_name'	文書実体ファイル名	文書実体ファイル名が最大 128 バイトで出力されます。
'IS_version_no'	文書実体ファイルバージョン番号	文書実体ファイルのバージョン番号が最大 10 バイトで出力されます。
'IS_ts_id'	TS 情報 ID	文書の TS 情報 ID が最大 10 バイトで出力されます。
'IS_ts_document_id'	TS 文書 ID	文書の TS 文書 ID が最大 10 バイトで出力されます。
'IS_comment'	コメント	文書に対するコメントが最大 7,167 バイトで出力されます。 改行コードは空白に変換されます。
'IS_folder_id'	所属フォルダ ID	文書が格納されているフォルダのフォルダ ID が 16 バイトで出力されます。
'IS_doc_lock_user'	更新中ユーザ名	現在、文書を更新中のユーザ名が最大 8 バイトで出力されます。
'Document Type'	文書種別	コマンドを実行したサーバに存在する文書の場合は「LOCAL」、配布文書の場合は「REPLICA」が出力されます。
'Original ID'	オリジナル文書の文書 ID	オリジナル文書の文書 ID が 16 バイトで出力されます。コマンドを実行したサーバに存在する文書の場合は出力されません。
'Server Name'	配布元サーバ名	配布文書の配布元サーバ名が最大 8 バイトで出力されます。 コマンドを実行したサーバに存在する文書の場合は出力されません。

ヘッダ情報	ヘッダに対応する表示項目	説明
'Distribute Count'	配布回数	配布文書の配布回数が最大 10 バイトで出力されます。 コマンドを実行したサーバに存在する文書の場合は出力されません。
'Distribute Time' '	配布日時	配布文書の配布日時が、「YYYY/MM/DD-HH:MM:SS」形式で 19 バイトで出力されます。 コマンドを実行したサーバに存在する文書の場合は出力されません。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドは Document Manager サーバが起動中でも実行できますが、Groupmax の運用時間外に実行してください。

8.31 サーバ情報一覧の更新 (ISmksvls)

ISmksvls (サーバ一覧更新ユティリティ)

形式

ISmksvls

機能

Groupmax Address で保持しているサーバ一覧情報を読み込んで管理ファイルを作成し、Document Manager サーバで管理します。既に管理ファイルが作られている場合は、コマンドの実行後に管理ファイルの内容が更新されます。

オペレーティングシステムのスケジューリング機能と組み合わせて、定期的にサーバ一覧情報を更新できます。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

次の場合には、必ずサーバ一覧更新ユティリティを実行してください。

- Document Manager サーバ対応のアドレスユーザを Groupmax Address に登録又は変更したとき
- Document Manager サーバ対応のアドレスユーザごとに設定するドメイン名又はサーバ名を変更したとき
- バージョン 02-00 以前の Document Manager からバージョン 02-10 以降にバージョンアップ又はリビジョンアップしたとき
- バージョン 02-xx からバージョン 03-xx 以降のものにバージョンアップしたとき

Groupmax Address での定義を基に文書を配布する場合、サーバ一覧更新ユティリティ実行後、Document Manager サーバを再起動してください。

8.32 ログインユーザ数の表示 (ISuserls)

ISuserls(ログインユーザ数表示ユティリティ)

形式

ISuserls

機能

Document Manager サーバにログインしているユーザをコンソールに表示します。表示される形式は次のとおりです。

(表示例)

API service mode

```
-----
UserName      LoginTime      IP_Address      SessionID
UUUUUUUU      YYYY/MM/DD hh:mm:ss  AAAAAAAAAAAAAAA  ssss
```

:

Utility or V1 API service mode

```
-----
UserName      LoginTime      IP_Address      ProcessID
UUUUUUUU      YYYY/MM/DD hh:mm:ss  AAAAAAAAAAAAAAA  PPPPPPPP
```

:

```
MaxLoginUser      = MMMM
LoginSessionCount = LLLL
SystemLoginUserCount = SSSS
GuestLoginUserCount = GGGG
```

(説明)

UUUUUUUU : ユーザ ID (8 バイト)

YYYY/MM/DD hh:mm:ss : ログイン開始時間 (19 バイト)

AAAAAAAAAAAAAAAA : IP アドレスの文字列 (15 バイト)

PPPPPPPP : プロセス ID (8 バイト)

ssss : セッション ID (4 バイト)

MMMM : 最大ログインユーザ数 (4 バイト)

LLLL : 現在の全ログインユーザ数 (4 バイト)

SSSS : Document Manager 管理者のログインユーザ数 (4 バイト)

GGGG : ゲストログインユーザ数

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

8. Document Manager で使用するユティリティ

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

環境設定ファイルの LoginUserLimit オペランドで同一ユーザが複数ログインを指定した場合、複数表示されません。

表示結果のプロセス ID を使用して、プロセスを切断した場合、当該プロセス ID で実行しているセッションのトランザクションは保証されません。

8.33 分類索引の一覧表示 (ISlsview)

ISlsview (分類索引一覧表示ユーティリティ)

形式

ISlsview

```
-o 出力ファイル名称
[-m {分類 ID|ALL}]
[-f {INDENT|TREE}]
[-v]
[-p]
```

機能

分類索引の一覧を階層的にファイルに出力します。

オプション

-o 出力ファイル名称

分類索引の階層一覧を出力するファイル名を指定します。ファイル名はフルパスで指定してください。ファイル名だけを指定した場合は、ISlsview.exe の存在するディレクトリ下に出力されます。

-m {分類 ID|ALL}

ファイルに出力する分類索引又は分類の分類 ID, 又は ALL を指定します。ALL を指定すると、すべての分類索引を出力します。-m オプションを省略した場合は ALL となります。

-f {INDENT|TREE}

ファイルに出力するときの形式を指定します。形式には、INDENT と TREE の 2 種類があります。-f オプションを省略した場合は TREE となります。

INDENT

指定された分類索引の一覧を 4 バイトの半角の空白で階層を付けて出力します。出力される形式は、次のとおりです。

分類索引又は分類の分類 ID, 分類索引又は分類の名称

(出力例)

```
000000C015050000 VIEW_001
```

8. Document Manager で使用するユティリティ

```
000000C018050000 INDEX_001_001
000000001B050000 INDEX_001_002
000000C01D050000 INDEX_001_003
000000C01F050000 INDEX_001_004
000000C021050000 INDEX_001_005
000000C023050000 INDEX_001_006
000000C025050000 INDEX_001_007
000000C027050000 INDEX_001_008
000000C029050000 INDEX_001_009
000000C02B050000 INDEX_001_010
```

TREE

指定された分類索引をけい線による木構造で階層を示して出力します。出力される形式は、次のとおりです。

分類索引又は分類の分類 ID, 分類索引又は分類の名称

(出力例)

```
000000C015050000 VIEW_001
| - 000000C018050000 INDEX_001_001
| - 000000C01B050000 INDEX_001_002
| - 000000C01D050000 INDEX_001_003
| - 000000C01F050000 INDEX_001_004
| - 000000C021050000 INDEX_001_005
| - 000000C023050000 INDEX_001_006
| - 000000C025050000 INDEX_001_007
| - 000000C027050000 INDEX_001_008
| - 000000C029050000 INDEX_001_009
| - 000000C02B050000 INDEX_001_010
```

-v

このコマンドの開始, 終了及びエラーの発生時にメッセージを出力する場合に指定してください。

-p

このコマンドの処理が終了したときに、「なにかキーを押してください」というメッセージを出力して, キーが押されるまで処理を一時的に停止します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは, スーパーユーザだけです。

分類索引の階層が 234 階層を超える場合, 235 階層以上の情報は出力されません。分類索引の階層が 234 階層を超えた場合は, 「... 分類索引情報は 235 階層以上出力できません。」と出力されます。235 階層以上の情報を出力する場合は, 234 階層目の分類を指定して, 再度このコマンドを実行することで出力できます。

(出力例)

```
000000C0650F0000 VIEW_001
  000000C0670F0000 INDEX_001_001
    :
      :
        000000C06A0F0000 INDEX_001_001_001
```

8. Document Manager で使用するユティリティ

... 分類索引情報は235階層以上出力できません。

8.34 TS 文書 ID 変換テーブルの生成 (IStsidtbl)(HI-UX/WE2 又は HP-UX の場 合)

IStsidtbl (TS 文書 ID 変換テーブルユティリティ)

形式

IStsidtbl

機能

全文検索処理で使用する TS 文書 ID 変換テーブルを生成します。

注意事項

このコマンドを使用できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバ、Groupmax Address サーバ (Groupmax Address と連携している場合)、全文検索サーバ (Bibliotheca/TS 又は Bibliotheca2 TextSearch と連携している場合)、及び Document Manager サーバを起動しておいてください。

このコマンドは、全文検索サーバとして Bibliotheca/TS を使用している場合にだけ有効です。

環境設定ファイルの bib_ts オペランドに BIB を指定してください。

8.35 ローカルグループ情報のキャッシュ化 (ISlgrpcc)

ISlgrpcc (ローカルグループ情報のキャッシュ化ユティリティ)

形式

ISlgrpcc

-o {CHECK|UPDATE}]

[-m 出力ファイル名称]

機能

ローカルグループ情報ファイルの内容をチェックしキャッシュ情報を作成・更新します。ただし、修正を行った場合にサーバへ反映されるのは Document Manager サーバの再起動後となります。

オプション

-o {CHECK|UPDATE}]

CHECK

ローカル情報ファイルをチェックします。

UPDATE

CHECK 処理を実行後、エラーが無ければローカルグループ情報キャッシュを更新します。

-m 出力ファイル名称

コマンド実行結果ログを出力するファイル名をフルパスで指定します。指定されない場合は /usr/infoshare/spool/lgrpcc.txt という名称で出力されます。ファイルはコマンド実行時のファイル出力のタイミングで上書きされます。

注意事項

このコマンドを使用できるのは、スーパーユーザだけです。

キャッシュ情報は作成直後にサーバに反映するのではなく、次回起動時に反映します。サーバ起動時に KHIS215-W メッセージが出力された場合、ローカルグループ情報ファイルに変更された内容は反映されていません。

キャッシュ情報を削除する場合は、サービス停止後、/usr/infoshare/shared/lgrpcc.dat

8. Document Manager で使用するユティリティ

と `/usr/infoshare/shared/lgrpc.new` を削除してください。

運用例

運用例を次に示します。

`/usr/infoshare/etc/localgrp` を修正します。

ローカルグループ情報コンパイラによりキャッシュ情報を作成します。キャッシュ情報は `/usr/infoshare/shared/lgrpc.new` として保存されます。

サービスを再起動します。キャッシュ情報作成後、サービス再起動までにローカルグループ情報ファイルを更新した場合、KIIS215-W メッセージが出力されます。

8.36 文書をフォルダ，一般文書データベース，分類索引，分類又は文書単位で一括して移動する (ISmvdoc)

ISmvdoc (文書一括移動ユティリティ)

形式

ISmvdoc

```
{ -f 移動元フォルダ ID |
  -c 移動元一般文書データベース ID |
  -v 移動元分類 ID |
  -d 移動対象文書 ID }
-t 移動先フォルダ ID

[-s]
```

機能

フォルダ，一般文書データベース，分類索引・分類，又は文書単位で，移動先フォルダに文書を一括して移動します。

オプション

-f 移動元フォルダ ID

移動対象文書の移動元フォルダ ID を指定します。

-c 移動元一般文書データベース ID

移動対象文書の移動元一般文書データベースの文書データベース ID を指定します。

-v 移動元分類索引・分類 ID

移動対象文書の移動元分類索引又は分類の分類 ID を指定します。

-d 移動対象文書 ID

移動対象文書の移動元文書 ID を指定します。

-t 文書移動先フォルダ ID

移動対象文書の移動先フォルダのフォルダ ID を指定します。

8. Document Manager で使用するコティリティ

-s

移動元に指定されたフォルダ，一般文書データベース，又は分類索引・分類の直下に格納された文書だけを移動対象とする場合に指定します。

注意事項

このコマンドを使用できるのは，スーパーユーザだけです。

コマンドを実行する前に，オブジェクトサーバ，Groupmax Address サーバ（Groupmax Address と連携している場合），Document Manager サーバを起動しておく必要があります。

他のユーザが Document Manager サーバにログインしている場合は，このコマンドは実行できません。サーバからログアウトさせてから，実行してください。

-f, -c, -v, -d, 又は -t で指定する各 ID は，クライアントや各コマンド（ISlsfldr 等）を使用してあらかじめ調べておく必要があります。

8.37 文書をフォルダ，一般文書データベース，分類索引，分類又はフォーム文書データベースごと一括して削除する (ISdelidx)

ISdelidx (文書一括削除ユティリティ)

形式

```
ISdelidx
{-f フォルダ ID | -c 一般文書データベース ID
|-v 分類 ID | -m フォーム文書データベース ID }
[-n] [-s] [-p]
```

機能

指定したフォルダ，一般文書データベース，分類索引，分類又はフォーム文書データベースと，そこに登録されている文書を一括して削除します。

オプション

- f フォルダ ID
削除するフォルダのフォルダ ID を指定します。
- c 一般文書データベース ID
削除する一般文書データベースの文書データベース ID を指定します。
- v 分類 ID
削除する分類索引又は分類の分類 ID を指定します。
- m フォーム文書データベース ID
削除するフォーム文書データベースのフォーム文書データベース ID を指定します。
- n
削除対象に登録されている文書が参照モード又は編集モードで取り出されている場合もその文書を削除するときに指定します。このオプションを省略した場合，参照モード又は編集モードで取り出されている文書は削除されません。
ただし，-m オプションを指定した場合は，このオプションの指定と関係なく，参照モード又は編集モードで取り出されているフォーム文書は削除されません。
また，-v オプションを指定して -s オプションを省略した場合に，同時にこのオプションを指定すると，このオプションの指定は無効になります。

8. Document Manager で使用するユティリティ

-s

削除対象として分類 ID を指定した場合に、その分類に登録された文書も削除する場合に指定します。このオプションを省略した場合、文書は削除されずにリンクだけが削除されます。

このオプションは、-v オプションを指定した場合だけ有効です。

-p

このコマンドの実行中に出力される確認メッセージを出力しない場合に指定します。

注意事項

このコマンドを使用できるのは、スーパーユーザだけです。

他のユーザが Document Manager サーバにログインしている場合は、このコマンドは実行できません。サーバからログアウトさせてから、実行してください。

8.38 ユーザ ID , グループ ID を一括して変更する (ISchusrid)

ISchusrid (ユーザ ID , グループ ID 一括変更ユティリティ)

形式

```
ISchusrid
  {-u ユーザ情報マッピングファイル
  -g グループ情報マッピングファイル |
  -u ユーザ情報マッピングファイル |
  -g グループ情報マッピングファイル}
  -o 出力ファイル
  [ -k ]
```

機能

フォルダ, 一般文書データベース, 分類索引・分類, フォーム文書データベース及び全一般文書, フォーム文書に指定されている所有者, 作成者, 更新者のユーザ ID, グループ ID をマッピングファイルで指定されたユーザ ID, グループ ID に一括変換します。ただし, 既存のオブジェクトにユーザ ID, 及びグループ ID が指定されていない場合は変換しません。また, マッピングファイル中に存在しない場合, 所有者, 更新者のユーザ ID はシステム管理者の ID に変更し, 作成者のユーザ ID 及びグループ ID は変更しません。

オプション

- u ユーザ情報マッピングファイル
変換するユーザのマッピングを格納したファイルをフルパスで指定します。
- g グループ情報マッピングファイル
変換するグループのマッピングを格納したファイルをフルパスで指定します。
- o 出力ファイル
変更したオブジェクト情報を出力するファイル名をフルパスで指定します。
- k
システム中で, グループ ID が重複している場合に指定します。このオプションを指定した場合, グループ情報マッピングファイルの記述方法が異なります。

マッピングファイルの記述形式

(a) ユーザ情報マッピングテーブルの記述方式

形式

<ユーザ情報> '改行文字' [<ユーザ情報> '改行文字' ...]
 <ユーザ情報> : := <変更前ユーザ ID> , <変更後ユーザ ID>

指定内容

<変更前ユーザ ID>

変更前のユーザ ID の文字列を 1 ~ 8 バイト以内で指定します。ただし、ワイルドカード指定はできません。

<変更後ユーザ ID>

変更後のユーザ ID の文字列を 1 ~ 8 バイト以内で指定します。ただし、ワイルドカード指定はできません。

記述例

ユーザ情報マッピングファイルの記述例を示します。

```
USR_K001,USR_C111
USR_K002,USR_C112
USR_K003,USR_C113
```

(a) グループ情報マッピングテーブルの記述方式

形式

<グループ情報> '改行文字' [<グループ情報> '改行文字' ...]
 <グループ情報> : := <変更前グループ ID> , <変更後グループ ID>

指定内容

<変更前グループ ID>

- システム中のグループ ID がユニークである場合
 変更前のグループ ID の文字列を 1 ~ 8 バイト以内で指定します。ただし、ワイルドカード指定はできません。
- システム中のグループ ID に同一名称がある場合
 組織を識別するための組織種別子をグループ ID の文字列の先頭に付け加えます。
 変更前のグループ ID の文字列を組織種別子を含めて 2 ~ 9 バイト以内で指定します。ただし、ワイルドカード指定はできません。オプションには -k を指定します。

組織種別	組織種別子	形式
最上位組織	C	C グループ ID
上位組織	O	O グループ ID
グループ	T	T グループ ID
ローカルグループ	L	L グループ ID

<変更後グループ ID>

- システム中のグループ ID がユニークである場合
変更後のグループ ID の文字列を 1 ~ 8 バイト以内で指定します。ただし、ワイルドカード指定はできません。
- システム中のグループ ID に同一名称がある場合
組織を識別するための組織種別子をグループ ID の文字列の先頭に付け加えます。
変更前のグループ ID の文字列を組織種別子を含めて 2 ~ 9 バイト以内で指定します。ただし、ワイルドカード指定はできません。オプションには -k を指定します。

組織種別	組織種別子	形式
最上位組織	C	C グループ ID
上位組織	O	O グループ ID
グループ	T	T グループ ID
ローカルグループ	L	L グループ ID

記述例

グループ情報マッピングファイルの記述例を示します。

- システム中のグループ ID がユニークである場合 (-k 指定なし)

```
GRP_1, GRP_A
GRP_111, GRP_AAA
```

- システム中のグループ ID に同一名称がある場合 (-k 指定あり)

```
OGRP_111, OGRP_AAA
LGRP_1111, LGRP_AAAA
TGRP_1111, TGRP_XXXX
```

出力形式

```
#ログ出力時間 : Tue Oct 23 12:55:30 2001

タイプ名[GIS_meta_root_doc_class]
oid[c00100000000203] offset[ 80] 変更前[ A99005] 変更後[ 1037254]
oid[c00100000000203] offset[ 140] 変更前[ A99005] 変更後[ 1037254]
.
.
.
タイプ名[システム文書DB]
oid[c00100000000091b] offset[ 80] 変更前[ A00111] 変更後[ system]
oid[c00100000000094d] offset[ 80] 変更前[ A94111] 変更後[ system]
oid[c00100000000094d] offset[ 140] 変更前[ A94111] 変更後[ system]
K11S888-W ユーザID・グループID一括変更ユティリティは不正を検出しましたが、処理を続行します。
タイプ名: XXXXX オブジェクトID: XXXXX offset: XXX
変更前ユーザ/グループID: XXX 変更後ユーザ/グループID: XXX
関数名: XXX 理由コード: XXX 付加情報1: XXX 付加情報2: XXX
oid[c00100000000095d] offset[ 140] 変更前[ A90341] 変更後[10375311]
K11S669-I ユーザID・グループID一括変更ユティリティは終了しました。[状態: 警告]
#ログ終了時間 : Tue Oct 23 13:53:00 2001
```

タイプ名

変更する属性のオブジェクトを格納したタイプ

oid[]

8. Document Manager で使用するユティリティ

データベース、フォルダ、文書のオブジェクト ID

offset[]

オブジェクトの先頭から変更する属性までのオフセット

変更前 []

変更前のユーザ ID 又はグループ ID

変更後 []

変更後のユーザ ID 又はグループ ID

出力ファイルには、オブジェクトの変更前の属性値と変更後の属性値を出力します。

このコマンド実行結果は、イベントビューア、標準出力及び出力ファイルの最終行に出力します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンドを実行する前には、Document Manager のファイル、及びオブジェクトサーバファイルのバックアップを必ず取得してください。メッセージ ID

「KIIS973-E」のエラーが発生した場合、バックアップから Document Manager のファイル、及びオブジェクトサーバファイルを回復し、障害を取り除いた上で、このコマンドを再実行してください。

このコマンドを実行する前に、オブジェクトサーバをユティリティモードで起動してください。

このコマンドを実行する前に、Document Manager サーバを停止してください。

文書配布機能を使用している場合、すべての文書の配布状態の確認をし、文書の配布完了を確認後、このコマンドを実行してください。

文書配布機能を使用している場合、Groupmax Mail に登録している配布先サーバのユーザ ID をユーザ情報マッピングファイルに記述してください。

このコマンドを実行した後は、コマンド実行前のエクスポートファイルをインポート機能ユティリティで取り込まないでください。

このコマンドはサーバ内の作業中文書が存在しない環境で実行する必要があります。そのため、Groupmax Integrated Desktop から作業中文書として取り出しているすべての文書を、作業領域から削除してください。Groupmax Integrated Desktop の作業領域に作業中文書が残っている場合、このコマンド実行後、Groupmax Integrated Desktop の作業中文書が参照できなくなり、またその作業中文書は、編集モードで取り出せなくなります。その回避策として、サーバ作業領域チェックユティリティを使用することでサーバ内の作業領域に存在する作業中文書が削除できます。しかし、Groupmax Integrated Desktop とサーバ間で整合性が取れなくなり、Groupmax Integrated Desktop の作業領域に不要文書が残ります。また、変更後のユーザ ID が、変更前のユーザ ID と一致した場合、クライアントの作業領域にサーバへは登録不可

能な作業中文書が不要文書として残ります。その場合、Groupmax Integrated Desktop からその作業中文書を削除してください。

このコマンドを実行した後に、全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティを実行すると、このコマンド実行前のユーザで作成した「全文検索に未登録のテキストファイル」が、全文検索サーバに登録されます。

グループ情報マッピングファイルで組織種別子を指定する場合、変更前グループ ID と変更後グループ ID の組織種別子が同じでなければなりません。

Document Manager 管理者名をこのコマンドで変更する場合は、このコマンド実行前に環境設定ユーティリティで Document Manager 管理者名を変更しておいてください。

出力ファイルのサイズは大きくなるが見込まれます。出力ファイルは、ディスク容量の余裕のあるパスを指定してください。

マッピングファイルには、改行キーを含めて 1 行 40 バイト以内で記述してください。

マッピングファイルに記述したユーザ ID 又はグループ ID に対しては、妥当性チェックは実行されません。このため、システムに存在しないユーザ ID を設定してもエラーにはならないで、所有者又は更新者が不明の文書となります。このとき、クライアントでは、ユーザ属性情報がアスタリスクで表示されます。

このコマンドを再実行する場合は、このコマンド実行前にサーバ作業領域チェックユーティリティを実行し、整合性が取れた状態を確認しておいてください。

8.39 フォルダ名称一括変更 (ISchflnm)

この節では、フォルダ名称を、マッピングファイルに従って一括変更するユティリティの機能及び起動方法について説明します。

ISchflnm (フォルダ名称一括変更ユティリティ)

形式

ISchflnm

-m { ID | NAME }

-i フォルダ名称マッピングファイル

-o 出力ファイル

機能

フォルダ名称をマッピングファイルで指定されたフォルダ名称に一括変更します。ただし、マッピングファイル中に存在しない場合、フォルダ名称は変更しません。

オプション

-m { ID | NAME }

-i で指定するフォルダ名称マッピングファイルをもとにフォルダ名称を変更します。このオプションは省略することができません。

ID

フォルダのオブジェクト ID をもとに、フォルダ名称を変更します。

フォルダのオブジェクト ID は、フォルダの一覧表示ユティリティの出力ファイル、または、クライアントのフォルダのプロパティから参照することができます。

NAME

フォルダ名称をもとに、フォルダ名称を変更します。

-i フォルダ名称マッピングファイル

変更するフォルダ名称のマッピングを格納したファイル名称を指定します。ファイル名は絶対パスで指定します。

-o 出力ファイル

このユティリティが出力するエラーの内容を格納するファイル名称を指定します。ファイル名は絶対パスで指定します。

ファイル名が既に存在した場合は、エラーとなります。このユティリティが正常終了し

た場合は、出力ファイルは作成しません。

フォルダの名称規則

指定できるフォルダ名称は、コントロールコード ('0x00' ~ '0x1f', '0x7f' ~ '0xa0', '0xe0' ~ '0xff') 以外の 1 バイトコードと 2 バイトコードの文字とします。

'IS_', 及び '_' で始まるフォルダ名は使用できません。

半角又は全角の空白だけの名称は使用できません。

名称の前後の空白は削除されます。

マッピングファイルの記述形式

マッピングファイルは、1 行を 1 レコード (改行キーを含めて 192 バイト以内) として、以下の形式で記述します。

ID を指定した場合の記述形式

形式

```
<フォルダ名称変更情報> '改行文字' [ <フォルダ名称変更情報> '改行文字' ... ]
<フォルダ名称変更情報> ::= <フォルダのオブジェクト ID> タブ <変更後フォルダ
名称> [ タブ <コメント> ]
```

指定内容

```
<フォルダのオブジェクト ID>
    変更するフォルダのオブジェクト ID を半角の 16 進文字列 (16 バイト) を指定
    します。英字は大文字, 小文字のどちらでも使用できます。

<変更後フォルダ名称>
    変更後のフォルダ名称を, 1 ~ 63 バイト以内で指定します。

<コメント>
    変更前のフォルダ名称を, 1 ~ 63 バイト以内で指定します。
```

記述例

```
C000000000036FDB<タブ>システム部1課<改行>
C000000000036FDC<タブ>システム部2課<改行>
C000000000036FDD<タブ>システム部3課<タブ>設計部3課からシステム部3課に変
更<改行>
```

NAME を指定した場合の記述形式

形式

```
<フォルダ名称変更情報> '改行文字' [ <フォルダ名称変更情報> '改行文字' ... ]
<フォルダ名称変更情報> ::= [ <コメント> ] タブ <変更前フォルダ名称> タブ <
変更後フォルダ名称>
```

指定内容

```
<コメント>
```

8. Document Manager で使用するユティリティ

コメントを 1 ~ 63 バイト以内で指定します。

<変更前フォルダ名称>

変更前のフォルダ名称を, 1 ~ 63 バイト以内で指定します。

<変更後フォルダ名称>

変更後のフォルダ名称を, 1 ~ 63 バイト以内で指定します。

記述例

<タブ> 設計部 1 課 <タブ> システム部 1 課 <改行>

<タブ> 設計部 2 課 <タブ> システム部 2 課 <改行>

設計部 3 課からシステム部 3 課に変更 <タブ> 設計部 3 課 <タブ> システム部 3 課 <改行>

出力形式

```
** ISchflnm, option[AAAA], state[BBBBBB] **
Line Number, Error Code, Contents
CCCCCCCCC, DDDDDDDDD, EEEEEEEEEEE...E
```

AAAA : -m オプションで指定した内容 (最大 4 バイト : 左詰め)

ID : -m オプションで ID を指定

NAME : -m オプションで NAME を指定

BBBBBB : エラー検知時の処理状態を示す (最大 6 バイト : 左詰め)

CHECK : マッピングファイルのチェック処理

CHANGE : フォルダ名称の変更処理

CCCCCCCCC : マッピングファイルの行数 (最大 10 バイト : 右詰め)

DDDDDDDDDD : 理由コード (最大 10 バイト : 右詰め)

EEEEEEEEEEEE...E : フォルダ名称変更情報 (最大 255 バイト : 左詰め)

表 8-13 理由コード一覧

理由コード	内容	対処	備考
47001	フォルダ名称が不正です。	フォルダ名称が, フォルダ名称規則に合っているか見直してください。	
47002	フォルダ名称長が超過しています。	フォルダ名称長を, 63 バイト以内で指定してください。	
47003	フォルダのオブジェクト ID が不正です。	半角の 16 進文字列を指定してください。	
47004	フォルダのオブジェクト ID の長さが超過しています。	フォルダのオブジェクト ID の長さを, 16 バイトで指定してください。	

理由コード	内容	対処	備考
47005	記述形式が誤っています。	該当行を見直してください。	
47006	フォルダのオブジェクト ID が重複しています。	該当行又は、該当行より上の重複したフォルダのオブジェクト ID の行を見直してください。	
47007	変更後フォルダ名称が、同一マッピングファイル上の変更前フォルダ名称にも指定されています。	変更後フォルダ名称は、同一マッピングファイル上の変更前フォルダ名称に指定できません。	
47008	変更前フォルダ名称が、その他の行の変更前フォルダ名称にも指定されています。	変更前フォルダ名称は、その他の行の変更前フォルダ名称に指定できません。	
47009	コメントの長さが超過しています。	コメントの長さを、63 バイト以内で指定してください。	
47101	変更前フォルダ名称が、Document Manager に登録されていません。	変更前フォルダ名称を見直してください。	1
4010 4011	Document Manager サーバが起動していません。	Document Manager サーバが起動されているか確認してください。	
4059 4060	メモリが不足しています。	メモリ所要量を見直してください。	
4064	フォルダのオブジェクト ID が存在しません。	フォルダのオブジェクト ID を見直してください。	1
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。	
4078	フォルダのオブジェクト ID ではありません。	フォルダのオブジェクト ID を見直してください。	1
上記以外	-	サーバにメッセージが出力されている場合は、出力されているメッセージの障害を取り除いてください。サーバにメッセージが出力されていない場合は、システム管理者に連絡してください。	

注 1 該当行のフォルダ名称の変更処理はスキップされ、次の行の変更処理を行います。

出力ファイルには、コマンド実行時のエラー内容を出力します。

注意事項

このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

このコマンド実行前には、Document Manager のファイル、及びオブジェクトサーバのファイルのバックアップを必ず取得してください。メッセージ ID 「KHIS674-I」、 「KHIS675-I」、または「KHIS977-E」以外のメッセージで終了した場合は、バックアップから Document Manager のファイル、及びオブジェクトサーバのファイルを回復

8. Document Manager で使用するユティリティ

し、障害を取り除いた上で、このコマンドを再実行してください。

ほかのユーザが Document Manager サーバにログインしている場合は、このコマンドは実行できません。サーバからログアウトさせてから、実行してください。

オプションで ID を指定する場合の注意事項

- マッピングファイルに指定するフォルダのオブジェクト ID は、重複して指定できません。
- マッピングファイルに指定するフォルダのオブジェクト ID には、Document Manager に存在しないフォルダのオブジェクト ID を指定しないでください。

オプションで NAME を指定する場合の注意事項

- マッピングファイルの変更後フォルダ名称は、同一マッピングファイル上の変更前フォルダ名称に指定できません。
- マッピングファイルの変更前フォルダ名称は、その他の行の変更前フォルダ名称に指定できません。
- マッピングファイルの変更前フォルダ名称には、Document Manager に存在しないフォルダ名称を指定しないでください。
- Document Manager に重複したフォルダ名称が存在する場合、重複した内の一つのフォルダ名称のみ変更されます。またどのフォルダ名称が変更されるかは、不定です。Document Manager に重複したフォルダ名称が存在する場合は、オプションの ID をご使用ください。

8.40 運用コマンド実行時の注意事項

Document Manager が提供する運用コマンドを処理するときの注意事項を次に示します。

Document Manager の運用コマンドの処理中に kill コマンドを実行したり、ターミナルウィンドウを終了したりする方法でプロセスを強制終了しないでください。kill コマンドでプロセスを強制終了させた場合、オブジェクトサーバが停止していないことを確認してください。オブジェクトサーバが停止している場合には、オブジェクトサーバ及び Groupmax のサーバシステムで稼働するすべてのプログラムを再起動してください。

Document Manager の運用コマンドの実行中に割り込みを要求（キーボードから [Ctrl] + [C] を入力、又は kill コマンドで SIGINT シグナルを送信）しても割り込み要求は無視されます。

8.41 リターンコード一覧

Document Manager が提供する運用コマンドを実行したときのリターンコード一覧を表 8-14 に示します。

表 8-14 リターンコード一覧

リターンコード	内容
0	正常終了
1	異常終了
11	aclog 不正
12	ISlsfldr.txt 不正
14	aclogEOF
15	aclog 終了
16	全アクセス情報なし
20	パラメタ不正
21	スーパーユーザでない
22	コマンド二重起動
23	環境不正
24	I/O エラー
25	容量不足
26	レコードなし
27	レコードフォーマット不正
30	メモリ不足
32	Document Manager サーバ起動中
33	Document Manager 又は関連プログラムが未起動
34	他ユーザがログイン中
40	入力データ不正 (入力データ解析エラー)
50	配布グループの更新文書チェック時, 変更文書なし
51	配布グループの更新文書チェック時, 変更文書あり
60	カンマチェック時, 名称不正
255	内部矛盾
上記以外	異常終了

9

障害対策

この章では、Document Manager に障害が起きたときの対処方法について説明します。

9.1 障害が発生してから正常に戻るまでの流れ

9.2 障害の要因の確認

9.3 障害への対処

9.4 障害からの回復

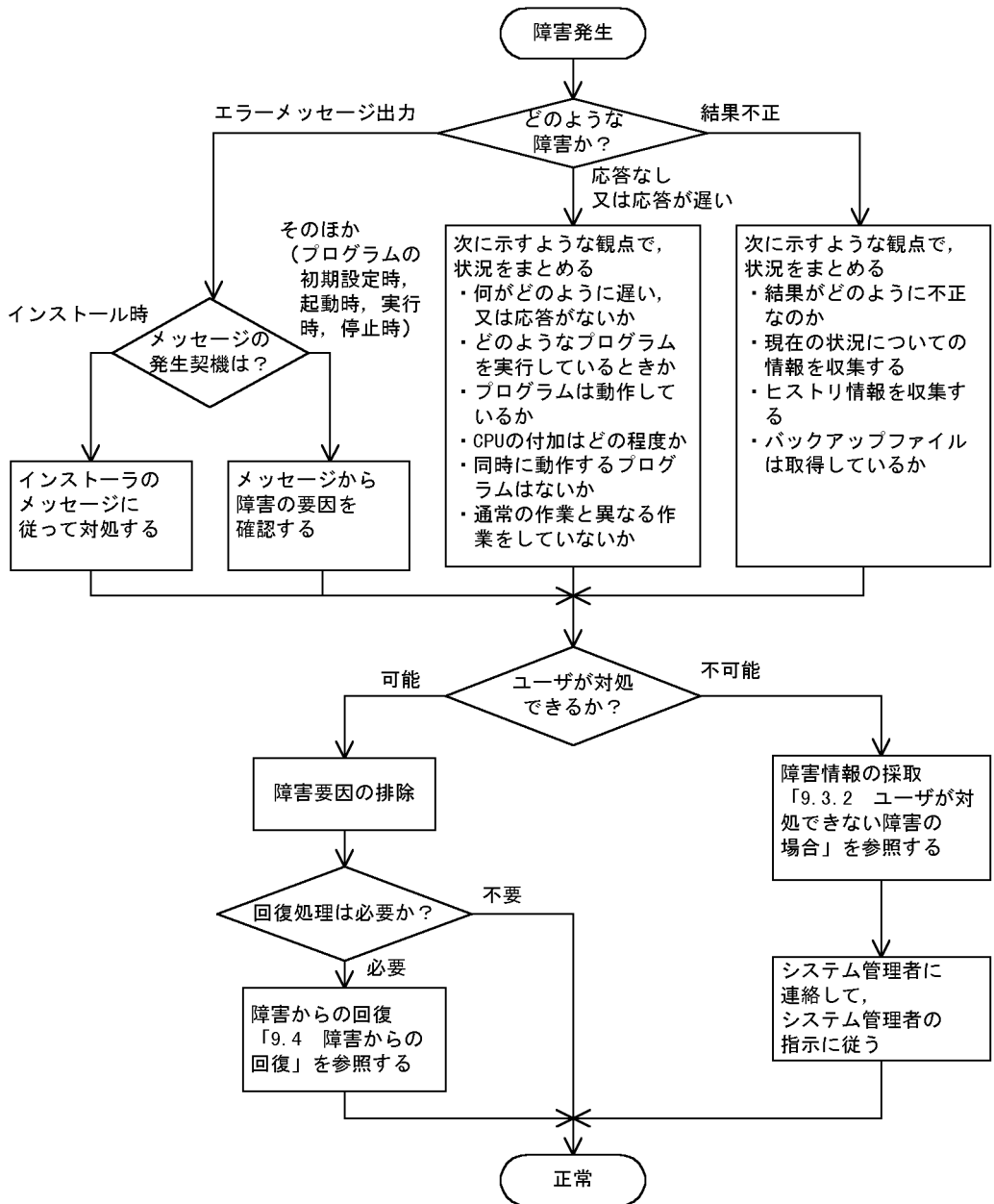
9.5 環境設定時の障害対策

9.1 障害が発生してから正常に戻るまでの流れ

この節では、Document Manager に障害が発生してから正常に戻るまでの流れについて説明します。

システムに障害が発生してから正常に戻るまでの作業の流れを、図 9-1 に示します。

図 9-1 障害が発生してから正常に戻るまでの作業の流れ



9.2 障害の要因の確認

この節では、Document Manager で障害が発生した場合に、要因を確認する方法について説明します。

9.2.1 障害の要因の確認手順

障害の要因を確認するには、障害が発生したプログラムが何かを知る必要があります。どのプログラムで発生した障害かは、次の内容から判断します。

メッセージは出力されたか

どのような状況で障害が発生したか

どのようなメッセージ ID のメッセージが出力されたか

それぞれについて説明します。

9.2.2 メッセージが出力されずにシステムが停止した場合

メッセージが表示されずにシステムが停止した場合、オペレーティングシステムの障害である可能性があります。この場合は、オペレーティングシステムのマニュアルを参照して対処してください。

9.2.3 Document Manager 組み込み時に障害が発生した場合

Document Manager 組み込み時に障害が発生した場合は、Document Manager のインストールプログラムに障害が発生した可能性があります。インストールプログラムに障害が発生した場合は、インストーラのメッセージが出力されます。

この場合は、インストーラのメッセージに従って、対処してください。

9.2.4 「KFXO」で始まるメッセージが出力された場合

「KFXO」で始まるメッセージが出力された場合は、オブジェクトサーバで障害が発生しています。この場合は、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照して、障害の要因を確認してください。

9.2.5 「KIIS」で始まるメッセージが出力された場合

「KIIS」で始まるメッセージが出力された場合は、Document Manager で障害が発生しています。Document Manager の環境設定、起動時又は起動中に障害が発生した場合に、このメッセージが出力されます。この場合は、「付録 I メッセージ」を参照して、障害の要因を確認してください。

また、出力されたメッセージから、発生した障害が次のどちらかを確認してください。

ユーザが対処できる要因で発生した障害

ユーザの環境設定や運用が誤っているために発生した障害です。「付録I メッセージ」の「対処」に従って、ユーザが対処できます。

ユーザが対処できない要因で発生した障害

「付録I メッセージ」の「対処」に「システム管理者に連絡してください」とあるメッセージが出力された場合は、ユーザが対処できない障害が発生しています。この場合は、障害情報を採取した上で、システム管理者に連絡する必要があります。

9.3 障害への対処

この節では、Document Manager で発生した障害への対処について説明します。

9.3.1 ユーザが対処できる障害の場合

環境設定や運用を誤ったために障害が発生した場合は、正しい環境設定や運用で Document Manager を起動し直してください。出力されたメッセージの意味については、「付録 I メッセージ」を参照してください。

9.3.2 ユーザが対処できない障害の場合

ユーザが対処できない障害が発生した場合は、システム管理者に連絡する必要があります。「付録 I メッセージ」を参照して「システム管理者に連絡してください」とある場合は、システム管理者に連絡してください。

システム管理者に連絡する場合は、障害が発生した時点の障害情報を採取しておく必要があります。

次に、採取しておく必要がある情報の内容と採取方法について説明します。

(1) 採取しておく情報の種類

採取しておく必要がある情報を次に示します。

操作手順の記録

メッセージ

アクセスログ（環境設定でアクセスログを出力する設定をしている場合）

文書配布ログ（文書配布機能を使用している場合）

文書配布エラーメッセージファイル（文書配布機能を使用している場合）

配布先の文書配布エラーメッセージファイル（文書配布機能と文書の配布状態管理機能を使用している場合）

環境設定ファイル

AP 情報管理ファイル

TS 情報管理ファイル（全文検索機能を使用している場合）

連携サーバ管理ファイル

サーバ情報管理ファイル

トレースファイル

ローカルグループファイル（ローカルグループを設定して運用している場合）

イベント通知リストファイル

(2) 採取方法

それぞれの情報の採取方法について説明します。

(a) 操作手順の記録

障害が発生するまでの詳細な操作手順を記録して、どのような状況で発生した障害かを明確にしておく必要があります。

障害が発生した画面のハードコピーや、操作内容の詳細なメモなどを取るようにしてください。

(b) メッセージ

障害が発生したときに出力された Document Manager 及びオブジェクトサーバのメッセージを採取します。採取する内容は、障害の要因によって異なりますので、メッセージの要因から次のどちらを採取するかを判断してください。

Document Manager サーバ又はオブジェクトサーバで障害が発生した場合システムログファイルを取得してください。

- HI-UX/WE2 の場合 :

`/usr/adm/syslogfile`

- HP-UX 又は AIX の場合 :

`/var/adm/syslog/syslog.log`

Document Manager で使用するユティリティで障害が発生した場合次のファイルを取得してください。

`/usr/infoshare/spool/ ユティリティ名 + .msg`

(c) アクセスログ

環境設定で、アクセスログを出力する設定をしている場合は、次の三つのファイルを取得してください。

(アクセスログファイル)

- `/usr/infoshare/spool/aclog`
- `/usr/infoshare/spool/aclog.bak`

(アクセスログ定義ファイル)

- `/usr/infoshare/etc/acloglst.txt`

(d) 文書配布ログ

文書配布機能を使用している場合は、次の四つのファイルを取得してください。

(エクスポートログファイル)

- `/usr/infoshare/spool/explog`
- `/usr/infoshare/spool/explog.bak`

9. 障害対策

(インポートログファイル)

- /usr/infoshare/spool/implog
- /usr/infoshare/spool/implog.bak

(e) 文書配布エラーメッセージファイル

文書配布機能を使用している場合は、次のファイルを取得してください。

(エラーメッセージファイル)

- /usr/infoshare/spool/ 文書配布対象グループ名 YYYYMMDDhhmmss.msg

(f) 配布先の文書配布エラーメッセージファイル

文書配布機能を使用している場合に、文書の配布状態管理機能を合わせて使用しているときには、次のファイルを取得してください。

(配布先のエラーメッセージファイル)

- /usr/infoshare/replica/export/ 文書配布対象グループ名 / 文書配布対象グループ ID / メールユーザ ID / 配布回数 (8 バイト固定 .msg)

(g) 環境設定ファイル

次のファイルを取得してください。

/usr/infoshare/etc/config

(h) AP 情報ファイル

次のファイルを取得してください。

/usr/infoshare/etc/ap.config

(i) TS 情報管理ファイル

全文検索機能を使用している場合は、次のファイルを取得してください。

/usr/infoshare/etc/bibts.config

(j) 連携サーバ管理ファイル

次の四つのファイルを取得してください。

/usr/infoshare/etc/sv_info

/usr/infoshare/adm/sv_info

/usr/infoshare/adm/dmsvlist.dat

/usr/infoshare/adm/dnslist.dat

(k) サーバ情報管理ファイル

次のファイルを取得してください。

/usr/infoshare/adm/isinit

(l) トレースファイル

トレースファイルはメモリ内で管理していますので、サーバ異常終了時に出力される core ファイルを取得してください。

/usr/infoshare/core

(m) ローカルグループファイル

ローカルグループファイルを使用して運用している場合は、次のファイルを取得してください。

/usr/infoshare/etc/localgrp

(n) イベント通知リストファイル

イベント通知機能を使用している場合は、次のファイルを取得してください。

/usr/infoshare/etc/apnotify.txt

9.4 障害からの回復

この節では、障害から回復する方法について説明します。

9.4.1 Document Manager サーバで障害が発生した場合の回復方法

Document Manager のサーバ機能及び各種ユティリティに障害が発生した場合は、メッセージに出力された障害の要因を取り除いてから、Document Manager を再起動してください。

9.4.2 オブジェクトサーバで障害が発生した場合の回復方法

オブジェクトサーバで障害が発生した場合は、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照して、障害に対処した上で回復してください。

9.4.3 セッション異常終了時の回復方法

クライアントとのセッションが異常終了した場合は、メッセージを基に障害の要因を取り除いた後で、再度クライアントから Document Manager にログインしてください。

編集中の文書については、作業領域の状態を確認してください。作業領域の文書が破壊されている場合は、再度 Document Manager サーバから文書を取り出して、作業するようにしてください。

9.5 環境設定時の障害対策

この節では、Document Manager の環境設定時に発生しやすい障害への対策について説明します。なお、Document Manager の環境設定についての詳細は、「5. Document Manager の環境設定」を参照してください。

9.5.1 Document Manager サーバの環境設定時に障害が発生した場合

ここでは、Document Manager の環境設定をしているときに障害が発生した場合の対処について説明します。

環境設定を次の各段階に分けて、それぞれの場合について説明します。

1. オブジェクトサーバのデータベースの初期設定
2. オブジェクトサーバの起動
3. Document Manager の初期設定
4. オブジェクトサーバの再起動
5. Document Manager の起動
6. Document Manager 文書配布送受信デーモンの起動（文書配布機能を使用する場合）

(1) オブジェクトサーバのデータベース初期設定時に障害が発生した場合

次の手順で対処してください。

1. オブジェクトサーバの初期設定パラメータを見直してください。
2. オブジェクトサーバの初期設定が正常に終了すると、初期設定パラメータで指定したファイルが既に作成されています。オブジェクトサーバのデータベースを再度初期設定する場合は、これらのファイルをすべて削除してください。
3. オブジェクトサーバのデータベースの初期設定を再実行してください。

(2) オブジェクトサーバの起動時に障害が発生した場合

出力されたメッセージを基に、障害の要因を取り除いて、再起動してください。

なお、初期設定後、最初にオブジェクトサーバを起動するときに、データベース常駐指定の警告メッセージが出力されます。このメッセージは異常を知らせるものではありませんので、そのまま環境設定を続けてください。

(3) Document Manager の初期設定時に障害が発生した場合

次の手順で対処してください。

1. 出力されたメッセージを基に、障害の要因を取り除いてください。

9. 障害対策

2. Document Manager の初期設定で次のディレクトリが既に作成されている場合は、ディレクトリを削除してください。
 - 文書実体ファイル格納ディレクトリ
/usr/infoshare/doc/*
 - 作業領域ディレクトリ
/usr/infoshare/export/users/*
 - 文書配布ディレクトリ
/usr/infoshare/replica

注意 上記ディレクトリを外付けディスクなどにシンボリック・リンクしている場合、lost+found が存在している可能性があります。この場合、lost+found は削除しないでください。
3. 障害の要因を基に、オブジェクトサーバのデータベースの初期設定又はオブジェクトサーバの起動からやり直してください。

(4) オブジェクトサーバを再起動するときに障害が発生した場合

オブジェクトサーバのシステム共通定義ファイルを見直してください。詳細については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

(5) Document Manager の起動時に障害が発生した場合

出力されたメッセージを基に、「付録 I メッセージ」を参照して、障害の要因を取り除いてください。

(6) Document Manager 文書配布送受信デーモンの起動時に障害が発生した場合

出力されたメッセージを基に、「付録 I メッセージ」を参照して、障害の要因を取り除いてください。

9.5.2 クライアントからサーバにログインできない場合

ここでは、Document Manager の環境設定後に、クライアントから Document Manager サーバにログインできない場合の対処方法について説明します。

(1) Document Manager サーバの状態の確認

Document Manager が起動しているか、又は障害が発生していないかを確認してください。Document Manager が起動していない場合は、起動してください。障害が発生している場合は、障害の要因を取り除いてから、Document Manager を起動してください。

(2) Groupmax Address の確認 (Groupmax Address と連携する場合)

ログインできないユーザ及びユーザが所属する組織が所属するすべてのサーバの

Groupmax Address が起動しているか、及び障害が発生していないかを確認してください。

Groupmax Address が起動していない場合は、Groupmax Address を起動してください。Groupmax Address に障害が発生している場合は、障害の要因を取り除いてから、Groupmax Address を起動してください。Groupmax Address の起動方法及び障害発生時の対処方法については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

(3) 通信環境の設定内容の確認

(a) クライアントでの通信環境の設定内容の確認

次の二点を確認してください。

Groupmax 統合セットアップのサーバの設定内容、及びサーバのホスト名は正しいか
IP アドレスが hosts ファイルに登録されているか、又は DNS でアドレスが解決されるように設定されているか

(b) サーバの通信環境の設定内容の確認

services ファイル及び hosts ファイルの設定内容を確認してください。

これらのファイルは次のディレクトリに格納されています。

(services ファイル)

- /etc/services

(hosts ファイル)

- /etc/hosts

(4) ユーザ情報の確認

(a) ユーザ認証方法の確認

環境設定で、ユーザの認証方法を正しく設定しているかを確認してください。

(b) ユーザ ID の確認

Groupmax Address と連携している場合は、Groupmax Address にユーザ ID が登録されていることを確認してください。確認方法については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

9.5.3 文書配布送受信デーモンが起動しない場合

文書配布送受信デーモンが起動しない場合の対処方法について説明します。

9. 障害対策

(1) サーバ環境の確認

次の内容を確認して、対処してください。

文書配布機能を使用するための設定をして環境初期化ユティリティを実行しているか
連携サーバ設定ファイルを正しく作成しているか

(2) Groupmax Address 及び Groupmax Mail の確認

Document Manager の環境設定で、「メール連携システム」に「GroupMail」を指定している場合は、次の内容を確認して、対処してください。

環境設定の「メールシステムユーザ ID」に Groupmax Address で指定した Document Manager 用アドレスユーザが正しく設定されているか

配布元サーバ及び配布先サーバのメールサーバが起動しているか、及び障害が発生していないか

メールサーバが起動していない場合は、起動してください。障害が発生している場合は、障害の要因を取り除いてから、起動してください。

メールサーバの起動方法、及び障害発生時の対処方法については、マニュアル「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。

付録

付録 A	Document Manager のディレクトリ構成
付録 B	属性ファイル
付録 C	Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録
付録 D	ローカルグループの登録
付録 E	Document Manager に登録できるファイルの規則
付録 F	全文検索サーバと連携する場合の注意
付録 G	異なるバージョンが混在する環境を使用する場合の注意
付録 H	テキストデータベースの移行 (HI-UX/WE2 又は HP-UX の場合)
付録 I	メッセージ
付録 J	フォルダ名称が重複した環境における文書のサーバ移行例
付録 K	エリア再構成時の分割手順
付録 L	分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害
付録 M	ウィルスチェック機能の使用 (HP-UX の場合)
付録 N	用語解説

付録 A Document Manager のディレクトリ構成

付録 A.1 Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成

Document Manager を組み込んで作成されるファイルおよびディレクトリ構成を、次の図に示します。

図 A-1 Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成 (1/3)

```

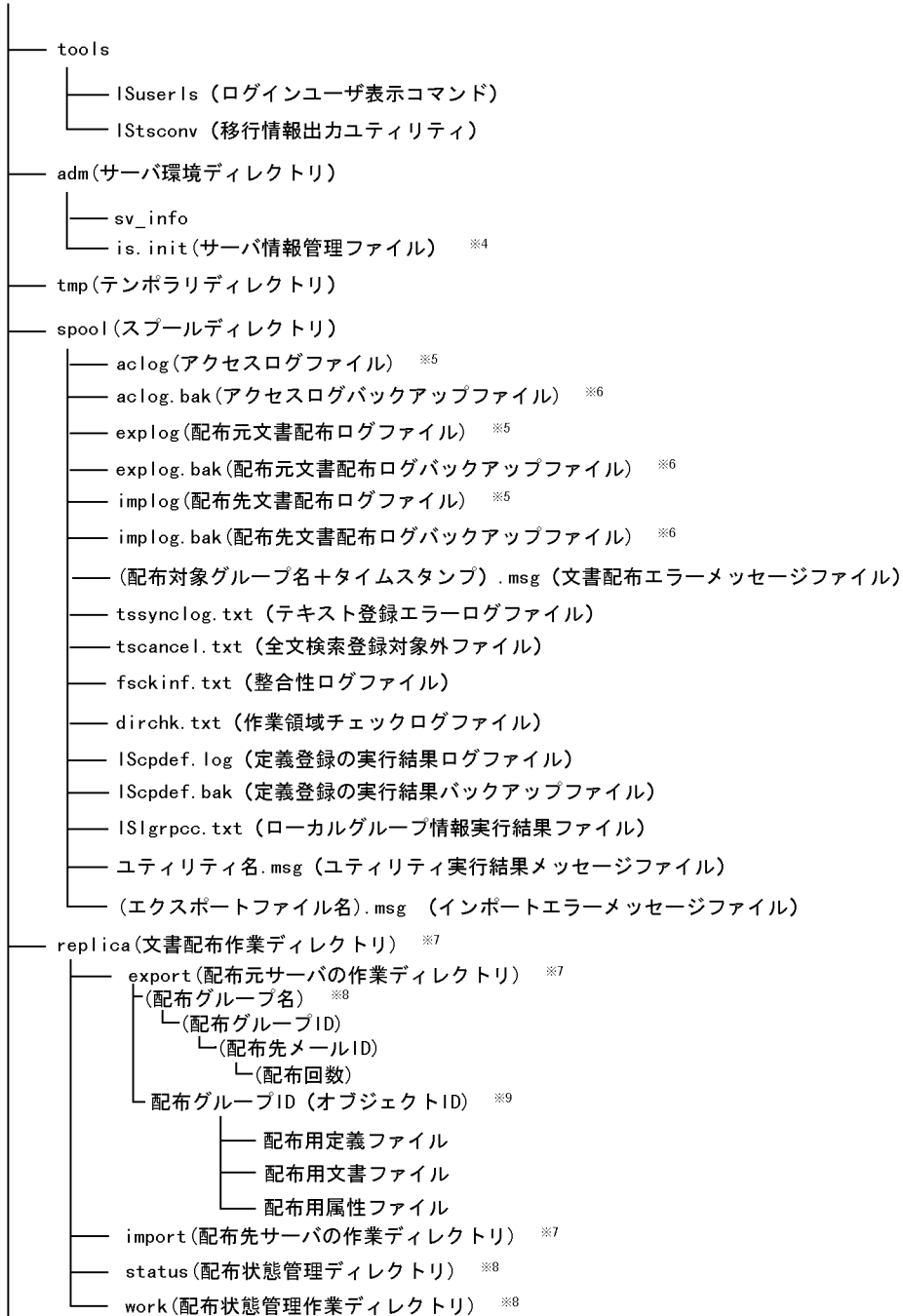
/usr/infoshare
├── bin(実行形式ファイル格納ディレクトリ)
│   ├── ISstart(Document Manager起動ユーティリティ)
│   ├── ISstop(Document Manager終了ユーティリティ)
│   ├── ISserver(サーバ監視プロセス)
│   ├── ISsesmgr(セッションサービス監視プロセス)
│   ├── ISsessSV(セッションサービスプロセス)
│   ├── ISsess(セッションプロセス)
│   ├── ISbaseSV(ベースサービスプロセス)
│   ├── ISbasehd(ベースサービス監視プロセス)
│   ├── IStimeSV(タイマ監視プロセス)
│   ├── ISftpserv(転送サービスプロセス)
│   ├── ISinitdb(環境初期化ユーティリティ)
│   ├── ISfsck(ファイル整合性ユーティリティ)
│   ├── ISregist(一括登録ユーティリティ)
│   ├── ISreplica(文書配布機能ユーティリティ)
│   ├── ISimport(インポート機能ユーティリティ)
│   ├── ISreplicastart(文書配布送受信デーモン起動ユーティリティ)
│   ├── ISreplicastop(文書配布送受信デーモン終了ユーティリティ)
│   ├── ISadddoc(配布文書追加・削除ユーティリティ)
│   ├── IStsidtbl(TS文書ID変換テーブル生成ユーティリティ)
│   ├── ISmksvls(サーバー一覧更新ユーティリティ)
│   ├── ISsend(送信デーモンプロセス)
│   ├── ISreceive(受信デーモンプロセス)
│   ├── ISschfldr(文書実体ファイル格納ディレクトリ変更ユーティリティ)
│   ├── ISlsfldr(文書実体ファイル格納ディレクトリの一覧表示ユーティリティ)
│   ├── ISrport(文書配布対象グループの操作ユーティリティ)
│   ├── IScomprs(文書圧縮ユーティリティ)
│   ├── ISexpand(文書の圧縮解除ユーティリティ)
│   ├── ISstsync(テキストファイルの登録・削除ユーティリティ)
│   ├── ISdirchk(サーバ作業領域チェックユーティリティ)
│   ├── ISaddsrv(配布先サーバ追加・削除ユーティリティ)
│   ├── ISrpsnd(文書の再配布機能ユーティリティ)
│   ├── ISrpsstat(文書の配布状態表示ユーティリティ)
│   ├── ISgrpinf(文書の配布対象グループ操作ユーティリティ)
│   ├── IScpdef(定義の抽出及び登録ユーティリティ)
│   ├── ISexport(エクスポート機能ユーティリティ)
│   ├── ISexform(フォーム文書エクスポート機能ユーティリティ)
│   ├── ISimform(フォーム文書インポート機能ユーティリティ)
│   ├── ISlsdoc(文書一覧表示ユーティリティ)
│   ├── ISlsview(分類索引一覧表示ユーティリティ)
│   ├── ISmvfldr(フォルダ階層移動ユーティリティ)
│   └── ISdefmga(複数グループアクセス権初期設定ユーティリティ)
├── etc(環境ファイル格納ディレクトリ)
│   ├── config(環境設定ファイル) ※1
│   ├── ap.config(AP情報管理ファイル) ※1
│   ├── bibts.config(TS管理ファイル) ※1
│   ├── sv_info(連携サーバ設定ファイル) ※1
│   ├── attxtlst.txt(抽出対象リストファイル) ※2
│   ├── autotxt.cfg(テキスト抽出管理ファイル) ※3
│   ├── localgrp(ローカルグループ情報ファイル) ※1
│   ├── aaloglst.txt(アクセスログリストファイル) ※1
│   └── apnotify.txt(イベント通知リストファイル) ※1

```

(続く)

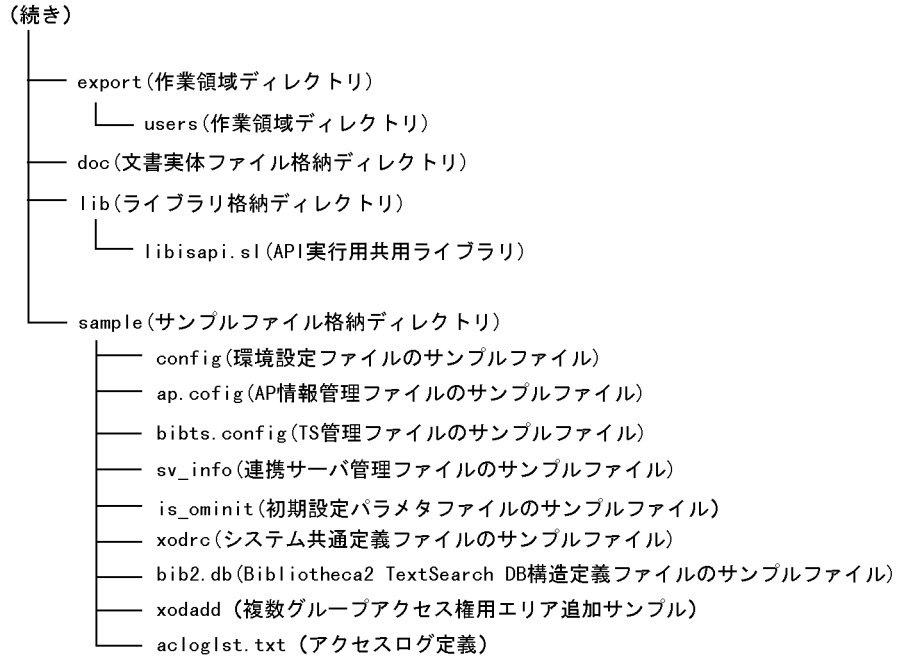
図 A-2 Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成 (2/3)

(続き)



(続く)

図 A-3 Document Manager で作成されるファイルとディレクトリ構成 (3/3)

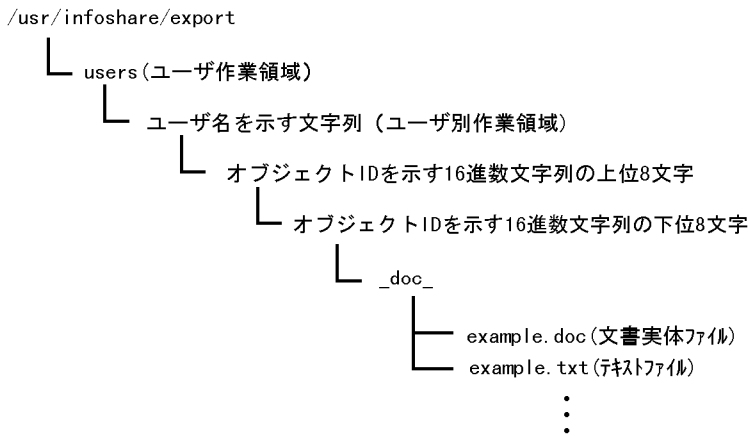


- 注※1 インストール時には作成されません。ISinitdbコマンド実行前に作成してください。
- 注※2 インストール時には作成されません。Isexportコマンド又はISregistコマンド実行前に作成してください。
- 注※3 インストール時には作成されません。Istssyncコマンド実行前に作成してください。
- 注※4 インストール時には作成されません。ISinitdbコマンド実行時に作成されます。
- 注※5 インストール時には作成されません。ログを初めて出力するときに作成されます。
- 注※6 インストール時には作成されません。ログファイル満杯時に作成されます。
- 注※7 インストール時には作成されません。ISreplicaコマンド実行時に作成されます。
- 注※8 インストール時には作成されません。配布状態管理機能使用時に作成されます。
- 注※9 インストール時には作成されません。ISadddocコマンド実行時に作成されます。

付録 A.2 Document Manager の作業領域のディレクトリ構成

Document Manager サーバの作業領域のディレクトリ構成を次の図に示します。

図 A-4 サーバの作業領域のディレクトリ階層



注 このディレクトリ階層は、文書名又は文書ひな形名の拡張子を除いた部分を「example」とした場合の例です。

付録 B 属性ファイル

ここでは、属性ファイルの概要および形式について説明します。属性ファイルは、一般文書だけを対象にします。

(1) 属性ファイルとは

文書に付けられた属性は、オブジェクトサーバに格納されます。オブジェクトサーバから必要な属性を複製したファイルを、属性ファイルといいます。属性ファイルは、文書実体ファイル格納ディレクトリに格納されます。

属性ファイルには、次の2種類があります。

参照用属性ファイル

登録用属性ファイル

(a) 参照用属性ファイル

オブジェクトサーバに格納されている属性を参照するために使用します。参照用属性ファイルを使用する場合は、AP 情報管理ファイルに参照用属性ファイル名を記述しておきます。AP 情報管理ファイルでの参照用属性ファイル名の記述例を、次に示します。

```
WORD:1::*.arf:*.txt::::*.txt:¥
"OPEN"="WINWORD|SYSTEM [FILEOPEN .NAME=%"wf%"] "on-client:¥
"OPEN"="WINWORD|SYSTEM [FILEOPEN .NAME=%"wf%"] "on-client
```

*arfの部分が参照用属性ファイル名の指定です。*の部分は文書名の拡張子を除いた部分に置き換えられます。AP 情報管理ファイルについては、「5.7.4 アプリケーションプログラムと連携するための環境設定」を参照してください。

これによって、文書を作業領域に取り出したとき、参照用属性ファイルが自動的に作業領域に作成されます。文書を作業領域に取り出すごとに、属性が参照用属性ファイルに書き出されます。

参照用属性ファイルの形式は、「(2) 属性ファイルの形式」に従ってください。

(b) 登録用属性ファイル

登録する文書の属性を記述するために使用します。例えば、クライアントのDDE機能を使ってファイルをサーバへ保存する場合に、属性などの登録に使用します。

登録用属性ファイルは、文書を取り出した作業領域に作成してください。

登録用属性ファイルを作成する形式は、「(2) 属性ファイルの形式」に従ってください。また、参照用属性ファイルを複製して作成することもできます。

(2) 属性ファイルの形式

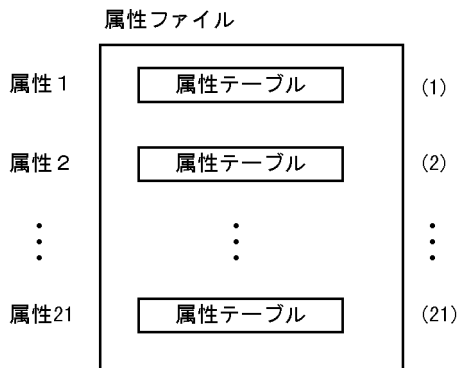
属性ファイルの形式を次に示します。形式は、参照用属性ファイルおよび登録用属性ファイルで共通です。

(a) 属性ファイルの構成

属性ファイルは、属性テーブルという形式が集まって構成されています。各属性の情報は、属性テーブルの形式で格納されています。

属性ファイルの構成を、図 B-1 に示します。

図 B-1 属性ファイルの構成



注 括弧付きの数字は、表 B-1 の項番と対応しています。

(b) 属性テーブルの形式

```
AAAAA  1 BB...BB  1 CC...CC  1 DD...DD  1 EE  1 FF...FF  1 G
HH...HH
```

(凡例)

1 行目：属性型の情報を示します。

2 行目：属性値の情報を示します。

AAAAA：属性識別子

BB...BB：属性名

CC...CC：属性型

DD...DD：属性種類

EE：属性アクセス権

FF...FF：属性検索権

G：属性値情報行数

HH...HH：属性値

：改行コードを示します。参照用属性ファイルでは、改行コードが '0x0a' で出力されます。登録用属性ファイルでは、改行コードとして '0x0a' または '0x0d'0x0a' のどちらかを使用できます。

文字列属性値が複数行にわたる場合、改行コードは次のようになります。

- 参照用属性ファイル

クライアントから属性値を設定した場合、クライアントの改行コードは '0x0d'0x0a' のため、属性値中の改行コードも '0x0d'0x0a' になります。

(例)

属性が 3 行にわたる場合

HH...HH'0x0d'0x0a'

HH...HH'0x0d'0x0a'

HH...HH'0x0a'

登録用属性ファイルで属性値を設定した場合、改行コードは、登録用属性ファイルに記述したコードになります。

- 登録用属性ファイル

登録用属性ファイルに設定した属性値をクライアントで表示する場合は、改行コードに '0x0d'0x0a' を使用してください。改行コードに '0x0d'0x0a' を使用しないと、正しく表示されません。

(c) 属性ファイルでの属性の並び

属性ファイルでの属性の並びを、文書の場合を表 B-1、文書データベースの場合を表 B-2 に示します。なお、表中の項番は、図 B-1 の数字に対応しています。

参照用属性ファイルでは、属性は表中の項番の順で出力されます。

登録用属性ファイルを作成する場合、各属性に対応する項目は固定です。したがって、表 B-1 および表 B-2 の内容に従って各属性の項目を記述してください。

表 B-1 属性ファイルでの属性の並び（一般文書の場合）

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
1	文書 ID	1	IS_object_id	OBJECT	BASE	RO	SEL_NO	1	オブジェクト属性値	16	
2	文書名	2	IS_object_name	STRING	BASE	RW	SEL_OK	1	文字列属性値	1 ~ 803	4

付録B 属性ファイル

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
3	文書データベースID	3	IS_class_id	CLASS	BAS E	RO	SEL_NO	1	文書データベース属性値	16	5
4	文書データベース名	4	IS_class_name	STRING	BAS E	RO	SEL_NO	1	文字列属性値	1 ~ 63	5
5	予約項目1	5	IS_owner_uid	UID	BAS E	RO	SEL_NO	1	ユーザ識別子属性値	1 ~ 14	5
6	所有者名	6	IS_owner_name	STRING	BAS E	RO	SEL_OK	1	ユーザ名属性値	1 ~ 8	5
7	作成日時	11	IS_create_time	TIME	BAS E	RO	SEL_OK	1	日時属性値	21 ~ 30	
8	作成者名	12	IS_creator_name	STRING	BAS E	RW	SEL_OK	1 ~ 127	文字列属性値	1 ~ 255	
9	更新日時	13	IS_modify_time	TIME	BAS E	RO	SEL_OK	1	日時属性値	21 ~ 30	
10	予約項目1	14	IS_modifier_uid	UID	BAS E	RO	SEL_NO	1	ユーザ識別子属性値	1 ~ 14	
11	更新者名	15	IS_modifier_name	STRING	BAS E	RO	SEL_OK	1	ユーザ名属性値	1 ~ 8	

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
12	文書配布フラグ	18	IS_repl ca_ flag	INT	BAS E	RO	SEL _NO	1	符号付き整数属性値	1 ~ 10	
13	文書実体ファイルサイズ	21	IS_ file_ size	SIZE	DO C	RO	SEL _OK	1	サイズ属性値	1 ~ 10	
14	文書実体ファイル名	22	IS_ file_ nam e	STR ING	DO C	RO	SEL _OK	1	文字列属性値	1 ~ 255	
15	文書実体ファイルバージョン番号	23	IS_ vers ion_ no	VERS ION	DO C	RO	SEL _NO	1	バージョン属性値	1 ~ 10	
16	TS情報ID	25	IS_t s_ id	INT	DO C	RO	SEL _NO	1	符号付き整数属性値	1 ~ 10	
17	TS文書ID	26	IS_t s_ docu men t_ id	INT	DO C	RO	SEL _NO	1	符号付き整数属性値	1 ~ 10	
18	コメント	27	IS_ com men t	STR ING	DO C	RW	SEL _OK	1 ~ 3583	文字列属性値	1 ~ 7167	
19	フォルダ名	2000	IS_ folde r_ list	FOLD ER_ _LIST	DO C	RO	SEL _NO	1	フォルダ名称属性値	1 ~ 268	5
20	分類索引名	1000	IS_v iew_ nam e_ list	VIEW _ NAM E_ LIST	DO C	RW	SEL _NO	1 ~ 4095	分類索引名称リスト属性値	1 ~ 528	

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
21	ユーザ定義属性										
	文字列型	30000 ~	指定された属性名	STRING	USER	RW	SEL_OK	1 ~ 3583	文字列属性値	1 ~ 7167	
	整数型	30000 ~	指定された属性名	INT	USER	RW	SEL_OK	1	符号付き整数属性値	1 ~ 10	
	日時型	30000 ~	指定された属性名	TIME	USER	RW	SEL_OK	1	日時属性値	21 ~ 30	
	オブジェクト型 ²	30000 ~	指定された属性名	OBJECT	USER	RW	SEL_NO	1	オブジェクト属性値	16	
オブジェクトリスト型 ²	30000 ~	指定された属性名	OBJECT_LIST	USER	RW	SEL_NO	1 ~ 4095	オブジェクトリスト属性値	6		

(凡例)

：一括登録ユーティリティを実行する場合、登録用属性ファイルに必ず指定する項目。

：一括登録ユーティリティを実行する場合、登録用属性ファイルに任意に指定する項目。指定した場合、文書データベースIDと照合されます。文書データベースIDと文書データベース名の内容が一致しない場合は、エラーになります。

：登録用属性ファイルに任意で指定する項目。指定した場合、変更した内容で登録されます。

：登録用属性ファイルに指定しても変更されない項目。

注 文字列属性値は、クライアントでは255バイトまでしか表示できません。

注 1 システムで予約されている項目です。

注 2 クライアントからは設定できません。

注 3 環境設定ファイルで文書名称長を80バイトに拡張する指定を行っている場合に80バイトまで使用できます。

注 4 一括登録ユーティリティを実行する場合以外は、任意で指定します。指定した場合、変更した内容で登録されます。

注 5 一括登録ユーティリティを実行する場合以外は、指定しても変更できません。

注 6 $16 \times n + (n-1)$ で算出される値になります。

表 B-2 属性ファイルでの属性の並び（一般文書データベースの場合）

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
1	文書データベースID	1	IS_object_id	OBJECT	BASE	RO	SEL_NO	1	オブジェクト属性値	16	
2	文書データベース名	2	IS_object_name	STRING	BASE	RW	SEL_NO	1	文字列属性値	1 ~ 63	3
3	予約項目 ₁	5	IS_owner_uid	UID	BASE	RO	SEL_OK	1	ユーザ識別子属性値	1 ~ 14	4
4	所有者名	6	IS_owner_name	STRING	BASE	RO	SEL_NO	1	ユーザ名属性値	1 ~ 8	4
5	作成日時	11	IS_create_time	TIME	BASE	RO	SEL_NO	1	日時属性値	21 ~ 30	
6	作成者名	12	IS_creator_name	STRING	BASE	RW	SEL_OK	1 ~ 127	文字列属性値	1 ~ 255	
7	更新日時	13	IS_modify_time	TIME	BASE	RO	SEL_NO	1	日時属性値	21 ~ 30	
8	予約項目 ₁	14	IS_modifier_uid	UID	BASE	RO	SEL_NO	1	ユーザ識別子属性値	1 ~ 14	
9	更新者名	15	IS_modifier_name	STRING	BASE	RO	SEL_NO	1	ユーザ名属性値	1 ~ 8	

付録B 属性ファイル

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
10	文書配布フラグ	18	IS_repl ca_ flag	INT	BASE	RO	SEL _NO	1	符号付き整数 属性値	1 ~ 10	
11	上位文書データベースID ₂	21	IS_s uper_ clas s_ _id	CLAS S	CLASS	RO	SEL _NO	1	文書 データ ベース 属性値	16	
12	上位文書データベース名 ₂	22	IS_s uper_ clas s_ _na me	STRI NG	CLASS	RO	SEL _NO	1	文字列 属性値	1 ~ 63	
13	AP識別子	28	IS_ appl icati on_ i d	INT	DOC_ CLASS	RW	SEL _NO	1	符号付き整数 属性値	1 ~ 10	
14	文書ひな形ファイルサイズ	29	IS_f orm_ _size	SIZE	DOC_ CLASS	RO	SEL _NO	1	サイズ 属性値	1 ~ 10	
15	文書ひな形ファイル名	30	IS_f orm_ _na me	STRI NG	DOC_ CLASS	RO	SEL _NO	1	文字列 属性値	1 ~ 255	
16	文書ひな形バージョン番号	35	IS_ versi on_ _no	VERS ION	DOC_ CLASS	RO	SEL _NO	1	バー ジョン 属性値	1 ~ 10	

項番	内容	属性識別子	属性名	属性型	属性種類	属性アクセス権	属性検索権	属性値情報行数	属性値	長さ(バイト)	指定種別
17	TS 使用 フラ グ	37	IS_t s_ use_ flag	INT	DOC_ CLASS	RO	SEL _NO	1	真偽 属性値	1	
18	TS 情報 ID	38	IS_t s_id	INT	DOC_ CLASS	RO	SEL _NO	1	符号付 き整数 属性値	1 ~ 10	
19	コメ ント	39	IS_ com men t	STRI NG	DOC_ CLASS	RW	SEL _NO	1 ~ 35 83	文字列 属性値	1 ~ 7167	
20	予約 項目 1	40	IS_ hitfil e_ use_ flag	INT	DOC_ CLASS	RO	SEL _NO	1	真偽 属性値	1	

(凡例)

：一括登録ユーティリティを実行する場合、登録用属性ファイルに必ず指定する項目。

：一括登録ユーティリティを実行する場合、登録用属性ファイルに任意で指定する項目。指定した場合、文書データベース ID と照合されます。文書データベース ID と文書データベース名の内容が一致しない場合は、エラーになります。

：登録用属性ファイルに任意で指定する項目。指定した場合、変更した内容で登録されます。

：登録用属性ファイルに指定しても変更されない項目。

注 文字列属性値は、クライアントでは 255 バイトまでしか表示できません。

注 1 システムに予約されている項目です。

注 2 システム文書データベース以外の文書データベースの属性ファイルにだけ出力または記述します。

注 3 一括登録ユーティリティを実行する場合以外は、任意で指定します。指定した場合、変更した内容で登録されます。

注 4 一括登録ユーティリティを実行する場合以外は、指定しても変更されません。

(d) 属性の説明

属性識別子

属性識別子を示す 10 進文字列を出力または記述します。

属性名

属性名を示す文字列を出力または記述します。

属性型

属性型を示す次の文字列を出力または記述します。

- OBJECT : オブジェクト型

- STRING : 文字列型
- CLASS : 文書データベース型
- UID : ユーザ識別子型
- TIME : 日時型
- SIZE : サイズ型
- VERSION : バージョン型
- INT : 符号付き整数型
- VIEW_NAME_LIST : 分類索引名称リスト型
- FOLDER_LIST : フォルダ名称型
- OBJECT_LIST : オブジェクトリスト型

属性種類

属性の種類を示す次の文字列を出力または記述します。

- BASE : システム基本属性
- CLASS, DOC_CLASS : 文書データベース固有のシステム定義属性
- DOC : 文書固有のシステム定義属性
- USER : ユーザ定義属性

属性アクセス権

属性ファイルにアクセスできるかどうかを示す次の文字列を出力または記述します。

- RO : 属性の読み込みができる
- RW : 属性の読み書きができる

属性検索権

属性検索で条件として指定できるかどうかを示す次の文字列を出力または記述します。

- SEL_OK : 検索条件として指定できる
- SEL_NO : 検索条件として指定できない

属性値情報行数

属性値情報の行数を、10 進文字列で出力または記述します。

属性値を複数行指定する場合、改行文字分として最大 2 バイトが付加されます。したがって、属性値の長さには、この改行文字分を加えてください。

属性値

属性値の情報を示します。

- オブジェクト属性値
オブジェクト ID の属性値を、16 進文字列で出力または記述します。
- 文字列属性値
属性値を文字列で出力または記述します。ただし、オブジェクト名の属性値を記述する場合は、次の制限があります。
 - 1 バイトコードの文字（ただし、制御コード（0x00 ~ 0x20 および 0x7F ~ 0xFF）を除く）、および 2 バイトコードの文字（ただし、空白を除く）を使用できます。
 - 「IS_」および「_」（アンダースコア）で始まる名称は使用できません。なお、クライアントで表現できないコードを指定すると、GUI で正しく表示されない場合があ

ります。

- 文書データベース属性値
文書データベース ID の属性値を、16 進文字列で出力または記述します。
- ユーザ識別子属性値
< 整数型ダミー属性値 > < ユーザ名属性値 > の形式で出力または記述します。
 - 整数型ダミー属性値
1 ~ 5 バイトの任意の整数値を出力または記述します。
 - ユーザ名属性値
ユーザ名を示す文字列属性値を出力または記述します。Groupmax Address のユーザ ID の規則に従って記述してください。
- 日時属性値
< 整数日時属性値 > < 文字列日時属性値 > の形式で出力されます。
 - 整数日時属性値
日時が 1 ~ 10 バイトの 10 進文字列で出力されます。世界標準時 1970/01/01-00:00:00 からの経過秒数で示します。一括登録ユティリティを実行する場合、登録用属性ファイルには 0 を指定してください。
 - 文字列日時属性値
サーバのローカル時間が、YYYY/MM/DD-HH:MM:SS の形式で出力されます。
- サイズ属性値
サイズの属性値が、10 進文字列で出力されます。
- バージョン属性値
バージョン番号の属性値が、10 進文字列で出力されます。
- 符号付き整数属性値
属性値が符号付き 10 進文字列で出力されます。負数の場合だけ - が付きます。
- 分類索引名称リスト属性値
< 分類索引名属性値 > [, [< 分類名属性値 >] [, < 分類のオブジェクト属性値 >]] の形式で記述します。
 - 分類索引名属性値
分類索引名の属性値を 1 ~ 63 バイトの文字列で記述します。
 - 分類名属性値
分類名の属性値を 1 ~ 63 バイトの文字列で記述します。
 - 分類のオブジェクト属性値
分類のオブジェクト ID の属性値を、16 進文字列で記述します。
- フォルダ名称
< 最上位フォルダ名属性値 > [, < フォルダ名属性値 > [, < フォルダのオブジェクト属性値 >]] の形式で記述します。
 - 最上位フォルダ名属性値
最上位フォルダ名の属性値を 1 ~ 63 バイトの文字列で記述します。
 - フォルダ名属性値
フォルダ名の属性値を 1 ~ 63 バイトの文字列で記述します。

- フォルダのオブジェクト属性値
フォルダのフォルダ ID を 16 進文字列で出力または記述します。
- オブジェクトリスト属性値
<オブジェクト ID > [, <オブジェクト ID > ...] の形式で記述します。
- オブジェクト ID
オブジェクト ID の属性値を 16 進文字列で出力または記述します。

(e) 属性ファイルの作成例

登録用属性ファイルの作成例を次に示します。

```
2 IS_object_name STRING BASE RW SEL_OK 1  
文書  
3 IS_class_id CLASS BASE RO SEL_NO 1  
C0020000000002B3  
4 IS_class_name STRING BASE RO SEL_NO 1  
顧客情報
```

- 1 ~ 2 行目 : 文書名の属性
- 3 ~ 4 行目 : 文書データベース ID の属性
- 5 ~ 6 行目 : 文書データベース名の属性

(f) 属性ファイル作成時の注意事項

行の先頭に # (0x23) を記述すると、その行は行端までコメントになります。ただし、属性型の情報と属性値の情報との間にはコメントは記述できません。記述した場合は、属性値とみなされます。

登録用属性ファイル名には、オペレーティングシステムで使用できる文字を指定してください。

付録 C Groupmax Address を使用しない環境でのユーザ及びグループの登録

(1) ユーザの登録

Document Manager を使用するユーザを、Document Manager サーバ単独で管理する場合は、UNIX のファイル (`/etc/passwd`) にユーザを登録します。システム管理者は、ユーザの名称やユーザ ID を、このファイルに記述します。

(a) ユーザの登録方法

ユーザの登録方法を次に示します。

Document Manager の起動後に文書データベースを管理するユーザを、Document Manager 管理者とします。Document Manager 管理者として、次の登録をしてください。

ユーザ名

Document Manager の環境設定ファイル (`/usr/infoshare/etc/config`) の `System_Administrator` 句に、Document Manager 管理者として記述するユーザ (デフォルトは、"system")

ユーザ ID

100 ~ 59999 の任意の番号

グループ ID

10 ~ 59999 の任意の番号

Document Manager 管理者以外の一般ユーザのユーザ ID として、100 ~ 59999 の任意の番号を登録してください。

(b) ユーザの登録の注意事項

ユーザを登録する場合の注意事項を、次に示します。

ユーザ名は、8 バイト以内で指定してください。

パスワードは UNIX の `passwd` コマンドで設定してください。また、パスワードは、8 バイト以内の半角の <英小文字> および <数字> で指定してください。ただし、先頭の文字に <数字> は使用しないでください。

(2) グループの登録

Document Manager を使用するユーザのグループを、UNIX のファイル (`/etc/group`) に登録します。システム管理者は、ユーザの所属するグループ名称やグループ ID を、このファイルに記述します。

(a) グループの登録方法

Document Manager を使用するグループのグループ ID を登録してください。グループ ID には、10 ~ 59999 の任意の番号を指定してください。

(b) グループに所属するユーザ

グループに所属するユーザを、次に示します。

表 C-1 グループに所属するユーザ

グループ名	所属するユーザ
system	Document Manager 管理者
everyone	Document Manager 管理者を含む全ユーザ
その他	該当するグループの /etc/group ファイルのメンバエントリに含まれるすべてのユーザ

(c) グループ登録の注意事項

グループ名は、8 バイト以内で指定してください。

グループ ID が 0 のグループは、グループ名「system」としてみなされます。また、グループ ID が 1 のグループは、グループ名「everyone」としてみなされます。したがってグループ名「system」およびグループ名「everyone」を指定する必要はありません。

付録 D ローカルグループの登録

(1) ローカルグループ情報ファイルとは

Document Manager では、Groupmax 全体でのユーザの一元管理で使用されているグループ（組織グループ）のほかに、サーバ内だけで有効なグループも設定できます。このグループをローカルグループといいます。ローカルグループは、ローカルグループ情報ファイルに設定します。

ローカルグループを設定しておけば、Groupmax のグループだけでは実現できないような、きめ細かいグループ管理ができます。

ローカルグループを設定しておけば、Groupmax のグループ（組織）だけでは実現できないような、きめ細かいグループ管理ができます。

(2) ローカルグループ情報ファイルの定義項目

(a) 格納先

/usr/infoshare/etc/localgrp

(b) ローカルグループ情報ファイルの形式

グループ ID : G-ID : 所属情報

(c) 項目の説明

グループ ID

「@」で始まるグループ ID を 8 バイト以内で指定します。ただし、「@」だけを指定することはできません。使用できる文字は、半角の <英数字> です。

G-ID

G-ID を 60000 ~ 65534 の範囲で指定します。

所属情報

グループに所属するユーザ名またはグループ ID を、それぞれ次のように指定します。

- ユーザ名
ログインユーザ名の先頭に「U」を付加して、9 バイト以内で指定します。
- グループ ID
グループ ID の先頭に「G」を付加して、9 バイト以内で指定します。

所属情報の各項目は、「,」で区切って指定します。

(d) 規則

複数のグループ情報を記述する場合は、1 行に 1 グループずつ記述します。1 行に記述できるバイト数は、最大 1,024 バイトです。

各グループ情報は、グループ ID がアルファベット順（ <数字> , <英大文字> , <英小文字> の順）になるように記述してください。

行の区切りは、改行文字です。

各項目の文字列として、「,」または「:」は使用できません。

あるグループの所属情報にほかのグループを指定してグループ間に階層を持たせる場合、99 階層まで設定できます。ただし、グループ間の階層が深くなると、処理が遅くなる場合があるので注意してください。

グループの階層がループする（グループ同士が互いに含まれる）ような設定はできません。

所属情報には Groupmax のグループ（組織）を指定できません。

(e) 記述例

```
@Group1:60001:Usuzuki,G@Group2,G@Group3
@Group2:60002:Uhayashi,Usato
@Group3:60003:Uyamada,Uikeda,Ukimura
```

(f) 注意事項

ローカルグループ情報ファイルの内容を変更した場合、すぐにはその内容は有効になりません。変更した内容は、次回 Document Manager データベースを起動したときに有効になります。

(3) ローカルグループ情報のキャッシュ化

ローカルグループ情報キャッシュユーティリティを使用すると、ローカルグループ情報ファイルの内容のチェックと、キャッシュ情報の作成または更新ができます。ローカルグループ情報ファイルのキャッシュ情報を作成することによって、ローカルグループの一覧表示、参照および検索処理を速くすることができます。

ローカルグループ情報キャッシュユーティリティの使用方法については「8.35 ローカルグループ情報のキャッシュ化 (ISlgrpcc)」を参照してください。

付録 E Document Manager に登録できるファイルの規則

ここでは、Document Manager で登録できるファイルの規則について説明します。

(1) ファイル名の規則

Document Manager で使用できるファイル名の規則は次のとおりです。

(a) ファイル名の長さ

128 バイト以内（拡張子を含む）で指定できます。

(b) 使用できる文字

次の文字を除く半角文字および全角文字を使用できます。

? " / ¥ < > * | : 制御コード (0x00 ~ 0x1F, 0x7F)

次に示す文字列は、拡張子を除いた部分に使用しないでください。

con,aux,prn,nul,com1,com2,com3,com4,lpt1,lpt2,lpt3

空白で始まるまたは終わるファイル名は使用できません。

「is_」または「_」（アンダースコア）で始まるファイル名は使用できません。

「.」（ピリオド）で始まるまたは終わるファイル名は使用できません。

(2) ファイルの個数の規則

一文書を構成するファイルは、次のとおりです。これらのファイルは、一文書当たり合計で 64 個まで作成できます。

起動ファイル

文書データベース関連ファイル

文書関連ファイル

テキストファイル

登録用属性ファイル

参照用属性ファイル

(3) 注意事項

Groupmax Integrated Desktop から登録されたファイルを、Document Manager Client から操作するときの、ファイル名の変換規則を次に示します。

(a) 文字の変換の規則

次の文字はすべて「 」に変換されます。

. [] ; = , +

ただし、拡張子を区切る「.」(ピリオド)は除きます。

半角の空白は省略されます。

Document Manager データベース中には、半角英大文字のファイル名は半角英小文字のファイル名として格納されます。

(b) 文書実体ファイルの変換の規則

拡張子を除いた部分

Groupmax Integrated Desktop から登録されたファイルの先頭から 8 バイトに編集されます。ただし先頭から 8 バイト目が全角文字の 1 バイト目になっている場合は、先頭から 7 バイトが編集されます。また、ファイル名の拡張子以外の部分が 8 バイトまたはそれに満たない場合はそのまま適用されます。

拡張子

Groupmax Integrated Desktop から登録されたファイルの先頭から 3 バイトが編集されます。ただし先頭から 3 バイト目が全角文字の 1 バイト目になっている場合は、先頭から 2 バイトが編集されます。また、ファイル名の拡張子の部分が 3 バイトまたはそれに満たない場合はそのまま適用されます。

(c) 参照用属性ファイル及び関連ファイルの変換の規則

拡張子を除いた部分

Groupmax Integrated Desktop から登録されたファイルの先頭から 8 バイトに編集されます。ただし先頭から 8 バイト目が全角文字の 1 バイト目になっている場合は、先頭から 7 バイトが編集されます。また、ファイル名の拡張子以外の部分が 8 バイトまたはそれに満たない場合はそのまま適用されます。8 バイトに編集されたファイル名が拡張子を合わせてすでに存在するものと一致する場合は、編集後のファイル名の先頭 6 バイトに 2 バイトの通番が 16 進文字列 (00 ~ FF) で付加されます。ただし、先頭から 6 バイト目の全角文字の 1 バイト目になっている場合は、先頭から 5 バイトに 2 バイトの通番が付加されます。なお、ファイル名称の変換は、文書実体ファイル、参照用属性ファイル、関連ファイルの順番に行われます。

拡張子

Groupmax Integrated Desktop から登録されたファイルの拡張子の先頭から 3 バイトが編集されます。ただし先頭から 3 バイト目が全角文字の 1 バイト目になっている場合は、先頭から 2 バイトが編集されます。また、ファイル名の拡張子の部分が 3 バイトまたはそれに満たない場合はそのまま適用されます。

付録 F 全文検索サーバと連携する場合の注意

ここでは、全文検索サーバと連携する場合の注意事項について説明します。

(1) 全文検索サーバに登録できるテキストファイルの最大サイズ

全文検索サーバには、最大 982,974 バイトのテキストファイルに登録できます。

(2) 全文検索サーバに登録できるテキストファイル数

Bibliotheca2 TextSearch に登録できるテキストファイルの件数は、Bibliotheca2 TextSearch で作成したテキストデータベースの最大量に依存します。なお、Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースには、一般文書の最新バージョンに対応するテキストファイルだけを登録できます。

(3) 全文検索サーバに登録できる文字

Bibliotheca2 TextSearch に登録できる文字については、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

(4) Bibliotheca2 TextSearch Server Version 2 の起動とテキストデータベースのオープン

全文検索サーバを使用する場合、Bibliotheca2 TextSearch Server Version 2 を起動して、テキストデータベースをオープンしておく必要があります。Bibliotheca2 TextSearch Server Version 2 の起動方法およびテキストデータベースをオープンする方法については、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

(5) Document Manager データベースとテキストデータベースの同期

文書を作成したときに全文検索サーバへテキストファイルを登録しなかったり、システムが実行するテキストデータベースからの削除に失敗した場合、Document Manager データベースとテキストデータベースの同期が取れていません。この場合、全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティ (IStssync) を実行して、Document Manager データベースとテキストデータベースの同期を取ってください。全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティの使用方法については、「8.26 テキストファイルの登録又は削除 (IStssync)」を参照してください。

付録 G 異なるバージョンが混在する環境を使用する場合の注意

ここでは、異なるバージョンが混在する環境を使用する場合の注意事項について説明します。なお、バージョン 01-xx をバージョン 1、バージョン 02-xx をバージョン 2、バージョン 03-xx をバージョン 3、バージョン 05-xx をバージョン 5、バージョン 06-xx をバージョン 6 と呼びます。

(1) クライアントでの注意事項

フォルダは、バージョン 1 のクライアントからはビュー（分類索引）の一つとして見えます。バージョン 1 のクライアントから文書を登録すると、システムで提供するフォルダ（デフォルトフォルダ）に登録されます。したがって、ビューとして見えるフォルダを指定して文書を登録しても、指定したフォルダに文書は登録されません。

複数のユーザが一つのマシン上でバージョン 1 のクライアントを使用する場合、同じ作業領域を使用する場合があります。このため、文書を編集してもサーバに登録しないままログアウトすると、更新中の文書が削除される場合があります。このような環境の場合は、更新した文書をサーバに登録してからログアウトしてください。

バージョン 1 のクライアントからグループにアクセス権を設定するとき、組織、最上位組織およびグループ間で同じ名称がある場合は、組織、最上位組織、グループの順で、最初に該当したものがアクセス権として設定されます。

バージョン 2 のサーバに対してバージョン 1 のクライアントで文書を作成した場合、アクセス権は文書クラスではなく、フォルダから継承されます。

Groupmax Address を使用してユーザ情報を一元管理する場合、バージョン 1、バージョン 2、バージョン 3、バージョン 5 およびバージョン 6 のクライアントが混在する環境では、ドメイン名の付与に制限があります。ドメイン名の付与に関する制限については、「5.4 オペレーティングシステムでの環境設定」を参照してください。

(2) サーバでの注意事項

バージョン 1 のサーバからバージョン 2 のサーバへ文書を配布すると、配布された文書はデフォルトフォルダに格納されます。

Document Manager サーバから GroupInfoshare/Server には文書を配布できません。GroupInfoshare/Server を Document Manager サーバへバージョンアップしてください。

文書の配布状態管理機能を使用する場合に、配布先と配布元で、バージョン 03-10 以降（文書の配布状態管理機能対応）と以前のバージョン（文書の配布状態管理機能非対応）が混在する場合、次の現象となります。

- 配布元が、文書の配布状態管理機能対応バージョンで、配布先が、文書の配布状態管理機能非対応バージョンの場合

該当配布先サーバの配布状態は、配信中（Delivery）のままとなります。この場合、該当サーバへの配布が正常に行われたかどうかは、配布先で文書配布ログなどで確認してください。

配布先サーバを、文書の配布状態管理機能対応バージョンにバージョンアップする場合は、すべてのサーバの配布が正常に完了していることを確認し、文書の配布情報を初期化した後に行ってください。

- 配布元が、文書の配布状態管理機能非対応バージョンで、配布先が、文書の配布状態管理機能対応バージョンの場合

配布元で文書の配布状態を確認することはできません。配布元で配布先からの配布完了通知を受けるごとに、「KIIS306-W メールシステムとの連携に失敗しました。要因：3100700」を出力します。

付録 H テキストデータベースの移行 (HI-UX/WE2 又は HP-UX の場合)

全文検索サーバを Bibliotheca/TS から Bibliotheca2 TextSearch へ変更する場合、Bibliotheca/TS のテキストデータベースを Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースへ移行する必要があります。

テキストデータベースを移行する場合は、Document Manager で移行情報を出力 (移行情報出力ユティリティの実行) してから、Bibliotheca2 TextSearch のユティリティ (Bibliotheca2 TextSearch の移行ユティリティ) を実行します。ここでは、Document Manager で実行する移行情報出力ユティリティの機能とテキストデータベースの移行手順について説明します。

なお、テキストデータベースを移行する場合は、あらかじめ Bibliotheca2 TextSearch のディスク占有量およびメモリ所要量を確認し、システム資源を十分に確保してから移行作業を実施してください。

付録 H.1 移行情報出力ユティリティの機能

(1) 機能

一般文書の最新バージョンに対応するテキストデータベースに登録中の情報 (TS 情報) をファイルに出力します。実行時のメッセージ (エラーメッセージ含む) はコンソールおよびシステムログに出力されます。

(2) 起動方法

起動方法については、「付録 H.2 テキストデータベースの移行手順」を参照してください。

(3) 文法

(a) 形式

```
IStsconv [-o 出力先ディレクトリ]
```

(b) オプション

-o 出力先ディレクトリ

TS 情報出力ファイルの出力先ディレクトリをフルパス名で指定します。このオプションを省略すると、次のディレクトリに出力されます。

```
/usr/infoshare/spool
```

(c) 格納先

コマンドは次のディレクトリに格納されます。

/usr/infoshare/tools

(4) 出力ファイル

移行情報出力ユーティリティの実行結果として出力されるファイルは次のとおりです。

TS 情報出力ファイル名 :

IStsconv. 全文検索サーバ名 . テキストデータベース名 .dat

なお、ファイル名に含まれる全文検索サーバ名およびテキストデータベース名は、TS 管理ファイルに設定されている名称です。ただし、テキストデータベース名に「/」(スラッシュ)が含まれている場合は、「,」(コンマ)に置き換えてファイル名を作成します。

(5) 注意事項

移行情報出力ユーティリティは、スーパーユーザが実行してください。

このユーティリティは一般文書の最新バージョンに対応する TS 登録情報だけを移行します。したがって、ユーティリティを実行する前には、全文検索用テキスト登録・削除ユーティリティ (IStssync) を実行して、テキストデータベースへの登録待ち状態、削除待ち状態の文書をすべて登録または削除してください。ただし、文書の最新バージョンがテキストデータベースへの登録待ち状態の場合、移行後もその状態は有効になります。

このユーティリティは Document Manager サーバが停止、オブジェクトサーバが起動している状態で実行してください。

移行情報出力ユーティリティが正常終了し、TS 情報出力ファイルが出力された場合、メッセージにオブジェクトサーバのノード ID が出力されます。複数の Document Manager サーバから一つのテキストデータベースを共通で使用している場合は、各 Document Manager サーバに対応するノード ID が重複していないことを確認してください。ノード ID が重複している場合は、移行先のテキストデータベースを別々に作成して移行する必要があります。テキストデータベースを別々に作成して移行する方法については、「付録 H.3 テキストデータベースの移行パターン」を参照してください。

注 ノード ID は、オブジェクトサーバのデータベースを識別するために使用する ID です。オブジェクトサーバのデータベースの初期化コマンド (xodbinit) を実行するときに指定します。ノード ID についての詳細は、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

付録 H.2 テキストデータベースの移行手順

Bibliotheca/TS のテキストデータベースから Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースへの移行手順を次に示します。なお、テキストデータベースの移行作業は、スーパーユーザが実行してください。

(1) 準備作業

全文検索用テキスト登録・削除ユティリティ (IStssync) を実行して、テキストデータベースへの登録待ち状態、削除待ち状態の文書をすべて登録または削除してください。

全文検索用テキスト登録・削除ユティリティの使用方法については、「8.26 テキストファイルの登録又は削除 (IStssync)」を参照してください。

(2) バージョンアップ作業

次に、プログラムのバージョンアップを実行します。Groupmax Version2.0 を御使用の場合は、Groupmax Version 3 へバージョンアップして、Bibliotheca2 TextSearch をインストールしてください。Groupmax Version 3 を御使用の場合は、Bibliotheca2 TextSearch をインストールしてください。

(3) 移行作業

プログラムのバージョンアップ作業が終了したら、テキストデータベースの移行作業を実行します。Bibliotheca2 TextSearch の機能については、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。操作手順を次に示します。

操作手順

1. オブジェクトサーバを起動する
2. 移行情報出力ユティリティ (IStsconv) を実行する
エラー終了した場合は、障害の要因を取り除いた後、移行情報出力ユティリティを再実行してください。
3. Bibliotheca2 TextSearch Server Version 2 を起動する
4. 移行元の Bibliotheca/TS をインストールしたマシンが移行先の Bibliotheca2 TextSearch をインストールしたマシンと異なる場合、移行元の Bibliotheca/TS のテキスト DB 情報ディレクトリ (HI-UX/WE2 は /TSM, HP-UX 10.XX は /opt/bibss/DB) を移行先のマシンの同一パスにマウントするか、移行先のマシンの同一パスにコピー (tar コマンドでテープなどに吸い上げて移行先のマシンに展開) する
5. 移行情報出力ユティリティ (IStsconv) で出力した TS 情報出力ファイルを移行先のマシンの任意のディレクトリにコピーする
6. Bibliotheca2 TextSearch のユティリティコマンド (TS2DBmk) を使用して Document Manager 連携用のテキストデータベースを作成する
7. Bibliotheca2 TextSearch の移行ユティリティ (TS2DBIScv) を実行する
なお、移行ユティリティを実行する場合は、TS 情報出力ファイルと移行先の Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースの関係 (整合) を確認してください。テキストデータベースの移行パターンについては、「付録 H.3 テキストデータ

ベースの移行パターン」を参照してください。

移行ユティリティが異常終了した場合は、障害の要因を取り除いた後、操作 6 で作成したテキストデータベースを削除して、テキストデータベースの作成 (操作 6) から、やり直してください。

(4) Document Manager の設定変更

最後に、Document Manager の設定を変更します。操作手順を次に示します。

操作手順

1. Document Manager サーバの環境設定ファイルに設定されている bib_ts=BIB (または bib_ts=use) を bib_ts=BIB2 に変更する
2. テキストデータベースの移行に伴って全文検索サーバ名およびテキストデータベース名を変更する場合は、TS 管理ファイルの全文検索サーバ名およびテキストデータベース名を変更する
3. Document Manager サーバと Bibliotheca2 TextSearch の連携動作を確認する
確認後、Bibliotheca/TS のテキストデータベースが不要になったら、Bibliotheca/TS のユティリティコマンド (DBrm) を使用して削除します。また、Bibliotheca/TS がなければアンインストールしてください。

付録 H.3 テキストデータベースの移行パターン

Document Manager サーバと Bibliotheca/TS のテキストデータベースの連携パターンによって、Bibliotheca2 TextSearch のテキストデータベースへの移行方法が異なります。組み合わせには大きく次の二つのパターンがあります。

パターン 1：移行元の Bibliotheca/TS のテキストデータベースを一つの Document Manager サーバから使用している場合

パターン 2：移行元の Bibliotheca/TS のテキストデータベースを複数の Document Manager サーバから共通で使用している場合

図 H-1 にパターン 1 およびパターン 2 に対応したテキストデータベースの移行パターンを示します。

図 H-1 テキストデータベースの移行パターン

パターン	組み合わせの例			オブジェクトサーバのノードID	移行可否	注意事項
	Document Managerサーバ	Biblioteca/TSのテキストデータベース	移行先のBiblioteca2 TextSearchのテキストデータベース			
1	サーバ A サーバ B	TSDB1 TSDB2	BIB2DB1 BIB2DB2	-	可	-
2-1	サーバ A サーバ B	TSDB	BIB2DB1 BIB2DB2	-	可	※1
2-2	サーバ A サーバ B	TSDB1	BIB2DB1	サーバAとサーバBでノードIDが同じ	否 (パターン2-1で移行してください)	-
				サーバAとサーバBでノードIDが違う	可 (パターン2-1での移行も可能です)	※1 ※2 ※3

注 1 各 Document Manager サーバで出力する TS 情報出力ファイル名が同じ名称になる場合があります。TS 情報出力ファイルと移行元および移行先のテキストデータベースとの関係には十分注意してください。

注 2 すべての Document Manager サーバに対する移行は、必ず一連の作業として実行してください。ある Document Manager サーバに対する移行の後、一度運用に入り、その後でほかの Document Manager サーバの移行を実行すると、Document Manager サーバと Biblioteca2 TextSearch のテキストデータベースの間で不整合が発生する場合があります。また、一つの Document Manager サーバの移行が完了するごとに、移行先の Biblioteca2 TextSearch のテキストデータベースのバックアップを取得してください。移行が途中で失敗した場合は、バックアップを戻してからバックアップ取得時から再度移行作業を実行してください。

注 3 すべての Document Manager サーバに対する移行作業で、Biblioteca2 TextSearch の移行ユーティリティは同時に実行できません。各 Document Manager サーバに対する移行作業を繰り返し、一連の作業として実行してください。

付録I メッセージ

ここでは、Document Manager のメッセージを示します。まず、メッセージの形式およびマニュアルでの記述形式を説明します。

付録 I.1 メッセージの形式

システムが出力するメッセージは、メッセージ ID とそれに続くテキストから構成されます。メッセージの形式を次に示します。

```
KIIS nnnnn - Y メッセージテキスト pos_code : ZZZ
```

```
1 2 3          4          5
```

メッセージ ID

1. KIIS：メッセージを出力したプログラムが Document Manager であることを表します。
2. nnnnn：メッセージの番号です。Document Manager では 3 けた ~ 4 けたの固有の番号が付いています。
3. Y：メッセージの種類を表します。次にその意味を示します。
 - I：システムの動作を通知します。
 - W：処理は続行しますが、障害が発生したので警告します。
 - E：障害が発生したので、処理を中断します。
 - Q：処理を実行するかどうかユーザに確認します。
4. メッセージの内容を説明しています。
5. エラーの発生した位置コードを示します。このコードは、エラーメッセージまたはワーニングメッセージにだけ出力される保守情報です。なお、「pos_code」は固定で出力され、「ZZZ」はエラーが発生した位置によって異なって出力されます。

付録 I.2 マニュアルのメッセージの見方

このマニュアルでは、メッセージは番号順に並んでいます。各メッセージは、メッセージテキスト、要因、対処の順に説明してあります。

メッセージテキストの中の「XXX」などの文字は、メッセージ出力の状況によって変わる値です。説明が必要なものについては、メッセージテキストの後にその内容を示しています。

付録 I.3 メッセージ

```
K I I S 0 0 0 - I :
```

Document Manager サーバが開始中です。

K I I S 0 0 1 - I :

Document Manager サーバが開始しました。

K I I S 0 0 2 - I :

Document Manager サーバが終了中です。

K I I S 0 0 3 - I :

Document Manager サーバが終了しました。

K I I S 0 0 4 - I :

通信ポートの割り当てに失敗しました。Document Manager サーバを再起動します。

要因

通信ポート（サービス名「infoshare」に対応するポート）が使用できないため、通信ポートの割り当てに失敗しました。Document Manager サーバを再起動します。通信ポートの割り当てに3回失敗すると、Document Manager サーバの開始処理を終了します。

K I I S 0 0 5 - I :

アクセスログファイルが一杯になったため、バックアップ用ファイルにバックアップを取得します。

K I I S 0 0 6 - I :

アクセスログファイルの使用量がXX%を超えました。バックアップ用ファイルに必要なログが残っている場合は、退避してください。

要因

アクセスログファイルの使用量がメッセージ中に表示している使用率を超えました。使用率が80%、90%、95%、99%を超えたときにこのメッセージを出力します。

対処

アクセスログファイルがいっぱいになると、古いバックアップファイルを消去して、新しいバックアップファイルを作成するため、バックアップファイルに必要なログ情報が残っている場合は、退避してください。

K I I S 0 0 7 - I :

ISregistのフェーズ(XXX)を開始しました。開始日時:XXX

要因

- フェーズ(doc regist)の場合
Document Manager サーバへの文書の一括登録処理を開始しました。
- フェーズ(TS regist)の場合
全文検索サーバへの文書の登録処理を開始しました。
開始日時:曜日 月 日 TT:MM:SS 西暦
(例) SUN Nov 16 01:03:52 1995

対処

- フェーズ (doc regist) の場合
このメッセージの後にフェーズ (doc regist) の終了メッセージが表示されていない場合は、Document Manager サーバへの文書の一括登録処理は失敗しています。障害の要因を取り除いてユティリティを再実行してください。
- フェーズ (TS regist) の場合
このメッセージの後にフェーズ (TS regist) の終了メッセージが表示されていない場合は、全文検索サーバへの文書の登録処理は失敗しています。障害の要因を取り除いた後、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティ (IStssync) を実行して、全文検索サーバに未登録の文書を登録してください。

K I I S 0 0 8 - I :

ISregist のフェーズ (X X X) を終了しました。

終了日時 : X X X

要因

- フェーズ (doc regist) の場合
全文検索サーバへの文書の登録を除く、文書の一括登録処理を終了しました。
- フェーズ (TS regist) の場合
全文検索サーバへの文書の登録処理を終了しました。
終了日時 : 曜日 月 日 TT:MM:SS 西暦
(例) SUN Nov 16 01:03:52 1995

対処

- フェーズ (doc regist) の場合
このメッセージの前にエラーメッセージが表示されている場合は、登録に失敗した文書があります。障害の要因を取り除いた後、エラーメッセージで表示された文書だけを再度登録してください。
また、このメッセージの後で、フェーズ (TS regist) の開始メッセージが表示されないでエラーメッセージが表示された場合は、障害の要因を取り除いた後、全文検索用テキスト登録・削除ユティリティ (IStssync) を実行して、全文検索サーバに未登録の文書を登録してください。

K I I S 0 0 9 - I :

文書配布ログファイルが一杯になったため、バックアップ用ファイルにバックアップを取得します。

K I I S 0 1 0 - I :

文書配布ログファイルの使用量が X X % を超えました。バックアップ用ファイルに必要なログが残っている場合は、退避してください。

要因

文書配布ログファイルの使用量がメッセージ中に表示している使用率を超えました。使用率が 80% , 90% , 95% , 99% を超えたときにこのメッセージを出力します。

対処

ログファイルがいっぱいになると、古いバックアップファイルを消去して、新しいバックアップファイルを作成するため、バックアップファイルに必要なログ情報が残っている場合は退避してください。

K I I S 0 1 1 - I :

ユーザの操作がないため、セッションをキャンセルしました。

セッション名：X X X

要因

セッションのタイムアウト時間内にユーザの操作がなかったため、セッションをキャンセルしました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションをキャンセルされたユーザのユーザ名が表示されます。

対処

クライアントから再度ログインしてください。

なお、このメッセージが多数表示される場合は、セッションのタイムアウト時間が短過ぎます。セッションのタイムアウト時間を延長するか、または0（セッションキャンセルなし）を設定してください。

K I I S 0 1 2 - I :

文書を登録しました。

文書名：X X X

要因

文書一括登録ユーティリティ（ISregist）で、Document Manager サーバに対して文書登録が成功した文書を文書ごとに出力します。要因は、次の形式で表示されます。

- 文書名：文書登録が成功した文書名

K I I S 0 1 3 - I :

保守用情報 [X X X]=X X X

要因

ほかのメッセージを表示した後に、それに対する保守情報として表示されます。

対処

保守情報の内容と対処について次に示します。

保守情報	内容	対処
Cannot Load Library.	Document Manager サーバを起動するのに必要な共有ライブラリがありません。	ライブラリ名が libgadr2.sl の場合、Groupmax Address を組み込むかまたは環境設定にてユーザ認証を Local に設定した後、Document Manager サーバを再起動してください。
Login User Limited	ログインできるユーザ数を超えました。	最大ログインユーザ数および生成可能な最大プロセス数等の値を見直し、Document Manager サーバを再起動してください。

保守情報	内容	対処
[ISserver] = Recreated Base Service Process [ISserver] = Recreated Session Service Process	一定回数処理をしたサービスプロセスをリフレッシュのため再起動させています。その際に表示する情報です。	およそ1秒間隔で数10回程度本メッセージが出力されている場合は、本メッセージ前後に出力されているメッセージに従ってください。 定期的な出力の場合は問題ありません。
その他	-	必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 0 1 4 - I :

環境定義に誤りがあるため、デフォルト値を使用します。

環境定義：XXX デフォルト値：XXX 付加情報：XXX

要因

Document Manager の環境定義に誤りがあるため、デフォルト値を使用します。要因は、次の形式で表示されます。

- 環境定義：環境定義ファイル (config) で誤って定義した定義名が表示されます。
- デフォルト値：各環境定義のデフォルト値が表示されます。
- 付加情報：保守情報としてエラーのあった行が表示されます。環境定義ファイル (config) に記述した値が表示されます。

要因の形式の内容について次に示します。

環境定義	デフォルト値	付加情報
アクセスログリストファイル名称 (/usr/infoshare/etc/ acloglst.txt)	0xFF800000	エラーのあった行が表示されます。ただし、「0」が表示される場合は、メモリ不足などです。
イベント通知リストファイル名称 (/usr/infoshare/etc/ apnotify.txt)	0x00000000	エラーのあった行が表示されます。ただし、「0」が表示される場合は、メモリ不足などです。
環境設定オペランド名称 (例：bibts)	各オペランドのデフォルト値 (例：nouse)	環境設定ファイルに記述した値が表示されます。

K I I S 0 1 5 - I :

抽出サーバアクセスログファイルが一杯になったため、バックアップ用ファイルにバックアップを取得します。

K I I S 0 1 6 - I :

抽出サーバアクセスログファイルの使用量が XX% を超えました。バックアップ用ファイルに必要なログが残っている場合は、回避してください。

要因

抽出サーバアクセスログファイルの使用量がメッセージ中に表示している使用率を

超えました。使用率が 80%、90%、95%、99% を超えたときにこのメッセージを出力します。

対処

抽出サーバアクセスログファイルがいっぱいになると、古いバックアップファイルを消去して、新しいバックアップファイルを作成するため、バックアップファイルに必要なログ情報が残っている場合は、退避してください。

K I I S 1 0 0 - E :

Document Manager サーバの開始に失敗しました。

要因：XXX 理由コード：XXX

要因

Document Manager サーバの開始に失敗したため、処理を中止しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：障害の要因が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因	内容	対処
Already bind	すでに Document Manager が起動されています。	必要に応じて起動済みの Document Manager サーバを終了させてから再起動してください。
Initialize error	初期設定処理時にエラーが発生しました。	<ul style="list-style-type: none"> • 理由コードが 3015 の場合 Groupmax Address でのユーザ情報一元化登録の処理が実行されていません。ユーザ情報一元化登録の処理を実行してから Document Manager サーバを起動してください。ユーザ情報の一元化登録の処理は、ユーザおよび組織の両方を必ず実行してください。 • 上記以外の場合 このメッセージの前にほかのメッセージが表示されている場合は、表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。このメッセージの前にほかのメッセージが表示されていない場合は、システム管理者に連絡してください。
No memory	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
No service	サービス名 (infoshare) が services に登録されていません。	サービス名 (infoshare) が services に正しく登録されているか確認してください。
adm Path not exist	サーバ管理ディレクトリが存在していません。	Document Manager を再インストールしてください。

要因	内容	対処
Cannot read config	環境設定ファイル (config) が存在しないか、または内容が不正です。	環境設定ファイル (config) が存在するか、記述内容が正しいかを確認してください。
Permission denied	Document Manager サーバを起動したユーザが、システム管理者ではありません。	システム管理者が Document Manager サーバを起動してください。
Invalid option	不正な引数を指定して、Document Manager サーバを起動しています。	引数を指定しないで、Document Manager サーバを起動してください。
Cannot open .daemon_lockf.	Document Manager サーバの起動に必要なファイルが存在しません。	Document Manager を再インストールしてください。
Cannot open .daemonpid.	同上。	同上。
config not exist.	同上。	同上。
Cannot initialize RAS	同上。	同上。
X X X (ISSV011A)	同上。	同上。
Socket system call error.	システムコールでエラーが発生しました。	システムコールのリターンコード (errno) が表示されるので、障害の要因を取り除き、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。
Bind system call error.	同上。	同上。
Listen system call error.	同上。	同上。
sendmsg error	同上。	同上。
上記以外	-	<ul style="list-style-type: none"> 理由コードが 15028 の場合 Document Manager データベースのバージョンが不正です。バージョンアップユーティリティ (ISvup) を実行するか、または Document Manager データベースを再構築してください。 上記以外の場合 システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 1 - E :

Document Manager サーバ終了中に障害が発生しました。

要因 : X X X 理由コード : X X X

要因

Document Manager の終了に失敗したため、処理を中止しました。要因は、次の形式で表示されます。なお、メッセージの先頭に「ISserver : 」と表示される場合があります。

- 要因 : 障害の発生した要因が表示されます。
- 理由コード : 保守情報が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因	内容	対処
ISserver don't exist.	Document Manager サーバ はずでに停止しています。	-
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 2 - E :

オペレーティングシステムとのインタフェースでエラーが発生しました。

セッション名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

システムコールでエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 3 - E :

通信エラーが発生しました。

セッション名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

LAN での障害、またはクライアントの異常終了によって通信障害が発生しました。要因は、次の形式で表示されます。主な原因としては、セッション確立中にクライアントからの電源断が考えられます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：システムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。(内部的に決めた IP 通信のコード)

対処

要因の内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
232	セッション確立中にクライアントの電源断などによって、通信障害が発生しました。	クライアントから再度ログインしてください。ログインできない場合は、LAN 環境の障害と考えられます。コネクタなどが正しく接続されているか確認してください。
41019	タイマ監視プロセスがタイムアウトしました。	タイマ監視プロセスのタイマ監視時間を大きく設定し、Document Manager サーバを再起動してください。
上記以外	システムコールのリターンコード (errno) が表示されます。	クライアントから再度ログインしてください。ログインできない場合は、LAN 環境の障害と考えられます。コネクタなどが正しく接続されているか確認してください。

K I I S 1 0 4 - E :

メモリ不足が発生しました。

セッション名：XXX 領域種別：XXX 領域名：XXX 領域サイズ：XXX

要因

メモリ不足が発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 領域種別：プロセスローカルメモリの不足の場合は、LOCAL と表示されます。また、共有メモリの不足の場合は、SHARED と表示されます。
- 領域名：保守情報が表示されます。
- 領域サイズ：取得に失敗した領域サイズが表示されます。

対処

スワップエリアサイズを含めたメモリ容量を見直してください。

K I I S 1 0 5 - E :

ファイルシステムの容量が一杯です。

セッション名：XXX パス名称：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

ファイルシステムの容量がいっぱいです。要因は、次の形式で表示されます。

セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。

- パス名称：操作対象の絶対パス名が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

表示されたパスのファイルシステムの容量を見直してください。
 また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 6 - E :

ファイルシステムに入出力エラーが発生しました。

セッション名：XXX パス名称：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

- ファイルの入出力時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。
- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
 - パス名称：操作対象の絶対パス名が表示されます。
 - 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
 - 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
 - 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容に従ってください。理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
2	パス名に表示されたファイルまたはディレクトリが存在しません。	パス名に表示されたファイルまたはディレクトリを確認して、必要に応じてバックアップからの回復またはシステム管理者に連絡してください。
その他	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 7 - E :

ファイルシステムにエラーが発生しました。

セッション名：XXX パス名称：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

- ファイルシステムにエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。
- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- パス名称：操作対象の絶対パス名が表示されます。
 - 関数名：エラーが発生した関数名が表示されます。
 - 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
 - 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 8 - E :

オブジェクトサーバでエラーが発生しました。

関数名：X X X 位置コード：X X X OMS ERROR：X X X 付加情報：X X X

要因

オブジェクトサーバにアクセスしたときにエラーが発生しました。

要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：障害の発生した関数名が表示されます。
- 位置コード：保守情報が表示されます。
- OMS_ERROR：オブジェクトサーバのエラー値が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

要因に対する対処について次に示します。

OMS_ERROR	内容	対処
115	can not get mata class	Document Manager データベースの初期化が実行されていません。
17	can not connect Object Server	Document Manager データベースの初期化が実行されていません。
その他		Document Manager データベースの初期化が正しく実行されていない可能性があります。障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 0 9 - E :

サーバ情報管理ファイルに入出力エラーが発生しました。

セッション名：X X X 関数名：X X X 理由コード：X X X 付加情報：X X X

要因

次に示す三つの要因のうちどれかが考えられます。

- 環境初期化ユティリティを実行していない
- Document Manager が正常終了していない
- サーバ情報管理ファイルが存在していない

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 関数名：保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

- 環境初期化ユティリティを実行していない場合

Document Manager 環境の初期化を行っていないか、または環境初期化ユーティリティが正常終了していない可能性があります。文書実体格納ディレクトリ、作業領域格納ディレクトリおよびスプールディレクトリが存在する場合は、ディレクトリを削除した後、環境初期化ユーティリティを実行してください。

- サーバ情報管理ファイルが存在していない場合
Document Manager サーバを再起動してください。
- Document Manager が正常終了していない場合
Document Manager サーバを起動してください。

関数名、理由コード、付加情報およびその対処について次に示します。

関数名	理由コード	付加情報	対処
ISob_ext_sv_check_info_file	15027	-	サーバ情報管理ファイルが存在していません。Document Manager サーバを再起動してください。
その他	その他	その他	Document Manager サーバを再起動してください。

K I I S 1 1 0 - E :

オブジェクト操作時に予期しないエラーが発生しました。

セッション名: X X X オブジェクト ID: X X X 関数名: X X X 位置コード: X X X

理由コード: X X X 付加情報: X X X

要因

オブジェクト操作時に予期しないエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名: セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- オブジェクト ID: 操作対象のオブジェクト ID が表示されます。
- 関数名: 保守情報が表示されます。
- 位置コード: 保守情報が表示されます。
- 理由コード: 保守情報が表示されます。
- 付加情報: 保守情報が表示されます。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 1 - E :

作業領域が一杯です。

セッション名: X X X パス名称: X X X 関数名: X X X 理由コード: X X X

付加情報: X X X

要因

作業領域の容量がいっぱいです。要因は、次の形式で表示されます。

セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。

- パス名称：操作対象の絶対パス名が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

Document Manager クライアントから作業領域を削除するかまたはファイル容量を見直してください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 2 - E :

作業領域に入出力エラーが発生しました。

セッション名：XXX パス名称：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

作業領域にアクセス中、エラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- パス名称：操作対象の絶対パス名が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 3 - E :

作業領域にエラーが発生しました。

セッション名：XXX パス名称：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

作業領域にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- パス名称：操作対象の絶対パス名が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 4 - E :

オブジェクトサーバとの接続に失敗しました。

セッション名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

オブジェクトサーバとの接続に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5003	オブジェクトサーバが起動されていません。	オブジェクトサーバを起動後、再度 Document Manager サーバを起動してください。
5012	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
5017	環境定義に誤りがあります。	Document Manager を再インストールしてください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 5 - E :

オブジェクトサーバからの切り離しに失敗しました。

セッション名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

オブジェクトサーバとの切り離しに失敗しました。要因は、次の形式で表示されません。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5002	オブジェクトサーバでディスク容量が不足しました。	ディスク容量を見直してください。
5011	オブジェクトサーバでオブジェクト数またはタイプ定義数が制限値を超えました。	必要に応じて不要なオブジェクトを削除し再実行してください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 6 - E :

オブジェクトサーバのトランザクション開始時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

トランザクションの開始に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5012	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
5019	データベース名称（スキーマ名称）が不正です。	環境初期化ユティリティを実行してください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 7 - E :

トランザクションの終了時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

トランザクションの終了に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。

- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録 I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5002	オブジェクトサーバでディスク容量が不足しました。	ディスク容量を見直してください。
5011	オブジェクトサーバでオブジェクト数またはタイプ定義数が制限値を超えました。	必要に応じて不要なオブジェクトを削除し再実行してください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 8 - E :

オブジェクトサーバのタイプ定義操作時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

オブジェクトサーバのタイプ定義操作時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 関数名：保守情報が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：OMS_XXX のコードはオブジェクトサーバの詳細コードを表します。それ以外のコードは保守情報を表します。なお、オブジェクトサーバの詳細コードは、「付録 I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5000	オブジェクトサーバでデッドロックが発生しました。	再実行してください。
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5011	オブジェクトサーバで 1 スキーマ中に定義できるタイプ数が制限値を超えました。	必要に応じて不要な文書データベースを削除し再実行してください。
5022	この文書データベースにはすでに文書があります。	必要に応じて文書を削除し再実行してください。

理由コード	内容	対処
5035	オブジェクトサーバでロックリソースが不足しています。	オブジェクトサーバのシステム共通定義ファイル(xodrc)のlck_limit値を32767にしてください。
5038	オブジェクトサーバの1エリア内に定義できるタイプ数が制限値を超えました。	付加情報に出力された種類のエリアを追加し、再実行してください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 1 9 - E :

オブジェクトサーバのオブジェクト操作時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX オブジェクトID：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

オブジェクトサーバのオブジェクト操作時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- オブジェクトID：操作対象のオブジェクトサーバのオブジェクトIDが表示されます。
- 関数名：保守情報が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5000	オブジェクトサーバでデッドロックが発生しました。	再実行してください。
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5011	オブジェクトサーバでタイプ定義数が制限値を超えました。	必要に応じて不要な文書データベースを削除し再実行してください。
5012	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
5022	この文書データベースにはすでに文書があります。	必要に応じて文書を削除し再実行してください。

理由コード	内容	対処
5035	オブジェクトサーバでロックリソースが不足しています。	オブジェクトサーバのシステム共通定義ファイル (xodre) の lck_limit 値を 32767 にしてください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 2 0 - E :

オブジェクトサーバのデータベースに入出力エラーが発生しました。

セッション名: X X X オブジェクト ID: X X X 関数名: X X X 理由コード: X X X

付加情報: X X X

要因

オブジェクトサーバのデータベースにアクセス中、入出力エラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名: セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- オブジェクト ID: 操作対象のオブジェクトサーバのオブジェクト ID が表示されます。
- 関数名: エラーの発生した関数が表示されます。
- 理由コード: 理由コードが表示されます。
- 付加情報: オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録 I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 2 1 - E :

オブジェクトサーバのディクショナリに入出力エラーが発生しました。

セッション名: X X X 関数名: X X X 理由コード: X X X 付加情報: X X X

要因

オブジェクトサーバのディクショナリにアクセス中、エラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名: セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。

- 関数名：保守情報が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5000	オブジェクトサーバでデッドロックが発生しました。	再実行してください。
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5012	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
5034	Document Manager の環境初期化後、オブジェクトサーバのデータベースを初期化しています。	再度 Document Manager 環境を初期化する場合は、文書実体ファイル格納ディレクトリ、作業領域ディレクトリ、スプールディレクトリ、文書配布ディレクトリを削除後、環境初期化ユティリティを実行してください。
5035	オブジェクトサーバでロックリソースが不足しています。	オブジェクトサーバのシステム共通定義ファイル (xodrc) の lck_limit 値を 32767 にしてください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 2 2 - E :

オブジェクトが作成できません。

セッション名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

オブジェクトの作成に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5011	オブジェクトサーバでオブジェクト数が制限値を超えました。	必要に応じて不要な文書データベースを削除し再実行してください。

理由コード	内容	対処
5012	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 2 3 - E :

属性検索でエラーが発生しました。

セッション名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

属性検索でエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。詳細については、「付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード」を参照してください。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
5000	オブジェクトサーバでデッドロックが発生しました。	再実行してください。
5001	オブジェクトサーバで入出力エラーが発生しました。	障害の要因を取り除いてください。
5012	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
5033	属性検索条件が不正です。	クライアントにて拡張正規表現を使用して属性検索した時、指定に誤りがあった場合に発生します。正しい条件を指定して再実行するようにしてください。
5035	オブジェクトサーバでロックリソースが不足しています。	オブジェクトサーバのシステム共通定義ファイル(xodrc)のlck_limit値を32767にしてください。
上記以外	-	オブジェクトサーバの詳細コードを調査し、障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 2 4 - E :

全文検索サーバとの連携でシステムエラーが発生しました。

セッション名：XXX TS情報ID：XXX 要因：XXX 理由コード1：XXX

理由コード2：XXX

要因

次の処理中にシステムエラーが発生したため、処理を中止しました。

- 全文検索
- テキストデータベースへの文書の登録
ただし、エラーの発生した全文検索サーバへの登録は無効になります。
- テキストデータベースからの文書の削除
ただし、エラーの発生した全文検索サーバからの削除は無効になります。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- TS 情報 ID：TS 管理ファイルに記述されている TS 情報 ID が表示されます。
- 要因：要因コードが表示されます。
- 理由コード 1：全文検索サーバが Bibliotheca/TS の場合は、Bibliotheca/TS のライブラリ関数のエラーコードが表示されます。マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」で内容を確認してください。
- 全文検索サーバが Bibliotheca2 TextSearch の場合は、Bibliotheca2 TextSearch のメッセージ ID 部分が表示されます。マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」で内容を確認してください。
- 理由コード 2：保守情報が表示されます。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 2 5 - E :

全文検索サーバとの連携でエラーが発生しました。

セッション名：XXX TS 情報 ID：XXX 要因：XXX 理由コード：XXX

要因

次の処理中にエラーが発生したため、処理を中止しました。

- 全文検索
- テキストデータベースへの文書の登録
ただし、エラーの発生した全文検索サーバへの登録は無効になります。
- テキストデータベースからの文書の削除
ただし、エラーの発生した全文検索サーバからの削除は無効になります。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- TS 情報 ID：TS 管理ファイルに記述されている TS 情報 ID が表示されます。
- 要因：要因コードが表示されます。
- 理由コード：全文検索サーバが Bibliotheca/TS の場合は、Bibliotheca/TS のライブラリ関数のエラーコードが表示されます。マニュアル「HI-UX/WE2

Bibliotheca/TS」で内容を確認してください。全文検索サーバが Bibliotheca2 TextSearch の場合は、Bibliotheca2 TextSearch のメッセージ ID 部分が表示されます。マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」で内容を確認してください。

対処

要因コードの内容と対処について次に示します。

要因コード	内容	対処
11001	全文検索サーバとの接続に失敗しました。	理由コードで示される全文検索サーバの障害を取り除いてください。
11002	全文検索サーバのセッションの上限を超えました。	ほかのユーザの全文検索サーバに対する操作を中断後、再実行してください。
11003	全文検索サーバでメモリ不足が発生しました。	理由コードで示される全文検索サーバの障害を取り除いてください。
11004	全文検索サーバでの環境設定が不十分です。	理由コードで示される全文検索サーバの障害を取り除いてください。
11005	全文検索サーバのデータベースをユティリティコマンドで使用しています。	ユティリティコマンド終了後に再実行してください。
11006	検索対象のデータベースが全文検索サーバにありません。	TS 管理ファイルと全文検索サーバのデータベース構成との整合性を確認してください。
11007	条件式に誤りがあります。	全文検索条件式または検索タームを確認してください。
11008	全文検索サーバでメモリ不足が発生しました。	理由コードで示される全文検索サーバの障害を取り除いてください。
11009	全文検索サーバで内部テーブルがオーバーフローしました。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 同義語・異表記展開の展開モードの設定を変更してください。 2. 検索タームを短くするか、検索タームの数を減らしてください。
11010	TS 管理ファイルのテキストデータベース識別子が不正です。	TS 管理ファイルのテキストデータベース識別子を確認してください。
11011	<ul style="list-style-type: none"> • 文字成分表がメモリに常駐されていません。 • テキストまたは凝縮テキストがメモリに常駐されていません。 	全文検索サーバの起動パラメタを修正してください。
11013	指定されたデータベースは Document Manager サーバ専用ではありません。	TS 管理ファイルの内容を確認してください。
11014	定義可能文書数を超えました。	<ul style="list-style-type: none"> • 定義可能文書数 (maxentry 句) が 10 万件未満のとき、全文検索サーバの DBconf ユティリティコマンドで定義可能文書数を増やした後、再度登録してください。 • 定義可能文書数 (maxentry 句) が 10 万件のとき不要な文書やバージョンを削除するか、または ISfsck -t コマンドを実行してから、再度登録してください。

要因コード	内容	対処
11019	同義語辞書がテキストデータベースに作成されていません。	同義語展開を解除して再実行するか、または同義語辞書をテキストデータベースに作成してください。
11020	全文検索サーバのデータベースでディスク容量が足りません。	不要なファイルを削除するか、または別のドライブに移動させて、ディスクの空き領域を確保してから再実行してください。
12009	テキストデータベースに登録できない文字がテキストデータに混在しています。	データ転送中にテキストデータが不正となった可能性があるため、必要に応じて再登録してください。

さらに、Bibliotheca2 TextSearch Version 2 で使用される、代表的な理由コードの内容と対処について次に示します。該当する理由コードおよび対処が記載されていない場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」で内容を確認してください。

理由コード	内容	対処
- 110002	全文検索サーバ操作時にメモリ不足が発生しました。	スワップエリアサイズを含めたメモリ容量を見直してください。
- 120001	全文検索サーバのポート番号を取得できませんでした。	全文検索サーバのポート番号を services に登録してください。登録方法はマニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。
- 120002	全文検索サーバとの通信でエラーが発生しました。	次に示す確認を行ってください。 1. 全文検索サーバが正常にインストールされているか。 2. 全文検索サーバが正常に起動され、テキストデータベースがオープンされているか。 3. TS 管理ファイルの設定が正しいか（全文検索サーバ名、テキストデータベース名など） 4. 全文検索サーバが別サーバの場合、ネットワークが正常に動作し、通信経路が確保されているか。
- 120007	文書管理サーバが正しくインストールされていません。	文書管理サーバを再インストールし、再実行してください。
- 130002	全文検索サーバのホスト名が不正です。	TS 管理ファイルの全文検索サーバ名に記載されているサーバ名が、IP アドレスに対応付けられた名前として登録されているかどうか確認してください。

K I I S 1 2 6 - E :

全文検索又はテキストデータベースへの登録又は削除に失敗した文書があります。

セッション名：XXX 要因：XXX

要因

次の処理中にエラーが発生したため、処理を中止しました。

- 全文検索
- テキストデータベースへの文書の登録
ただし、エラーの発生した全文検索サーバへの登録は無効になります。
- テキストデータベースからの文書の削除
ただし、エラーの発生した全文検索サーバからの削除は無効になります。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 要因：要因コードが表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因コード	内容	対処
10000 12004 12005	Document Manager サーバでメモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
10007	条件式に誤りがあります。	全文検索条件式または検索タームを確認してください。
10010 12003 12006 12019	全文検索サーバに障害が発生しました。	このメッセージの前に出力されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。
10028	同義語辞書がテキストデータベースに作成されていません。	同義語展開を解除して再実行するか、または同義語辞書をテキストデータベースに作成してください。
12009	テキストファイル中に不正な文字があります。	テキストファイルの内容を確認してください。
12016	TS 管理ファイル中に TS 情報がありません。	TS 管理ファイルの内容を確認してください。
12024	ディスク容量が足りません。	サーバ環境ディレクトリ (adm) の存在するディスク容量を見直してください。
14062	Document Manager データベースへの TS 文書 ID の書き込み処理で障害が発生したため、登録対象のすべての文書のテキストデータベースへの登録に失敗しました。	再実行すれば正常に登録できる場合がありますので、必要に応じて再実行してください。また、Document Manager のスプールディレクトリ下に保守情報ファイル (debug_tsinfo) を出力します (すでに存在する場合は追加書きします)。このファイルを取得した後、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。なお、保守情報ファイルは不要になった時点で削除してください。

K I I S 1 2 7 - E :

TS 情報 ID (X X X) との連携に失敗しました。

要因

TS 文書 ID 変換テーブルの作成処理でエラーが発生したため、処理を中止しました。

- TS 情報 ID : TS 文書 ID 変換テーブルの作成に失敗した TS 情報 ID が表示されま
す。

対処

このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてから、
TS 文書 ID 変換テーブルユーティリティ (IStsidtbl) を再実行してください。

K I I S 1 2 8 - E :

TS 管理ファイルの解析に失敗しました。

セッション名 : X X X 要因 : X X X

要因

次の処理中にエラーが発生したため、処理を中止しました。

- TS 管理ファイルが壊れている
- メモリ不足発生時などの処理に失敗した

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名 : セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、
デモンブプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 要因 : 要因コードが表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因	内容	対処
12005	Document Manager サーバでメモリ 不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
12012	TS 管理ファイルが存在しないか、ま たは壊れています。	TS 管理ファイルを確認してください。
12013	TS 管理ファイル中にデータが存在し ないか、またはデータが不正です。	TS 管理ファイルを確認してください。
12015	TS 管理ファイル中に不正なデータが あります。	TS 管理ファイルの内容を確認してください。

K I I S 1 2 9 - E :

全文検索サーバから未定義のエラーが返されました。

セッション名 : X X X TS 情報 ID : X X X 要因 : X X X 理由コード 1 : X X X

理由コード 2 : X X X

要因

全文検索サーバのバージョンが新しいため、新しく追加されたエラーステータスが
未定義の状態になっています。したがって、次の処理を中止しました。

- 全文検索

- テキストデータベースへの文書の登録
ただし、エラーの発生した全文検索サーバへの登録は無効になります。
- テキストデータベースからの文書の削除
ただし、エラーの発生した全文検索サーバからの削除は無効になります。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- TS 情報 ID：TS 管理ファイルに記述されている TS 情報 ID が表示されます。
- 要因：保守情報が表示されます。
- 理由コード 1：保守情報が表示されます。
- 理由コード 2：全文検索サーバが Bibliotheca/TS の場合は、Bibliotheca/TS のライブラリ関数のエラーコードが表示されます。マニュアル「HI-UX/WE2 Bibliotheca/TS」で内容を確認してください。全文検索サーバが Bibliotheca2 TextSearch Version 2 の場合は、Bibliotheca2 TextSearch のメッセージ ID 部分が表示されます。マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」で内容を確認してください。

対処

理由コード 2 の内容を確認して、エラーの原因を取り除いてください。

K I I S 1 3 0 - E :

全文検索サーバのテキストデータベースの更新に失敗しました。

セッション名：XXX TS 情報 ID：XXX 要因：XXX 理由コード：XXX

要因

テキストデータベースの更新時に、メモリ不足またはディスク容量不足が発生したため、次の処理を中止しました。

- 全文検索
- テキストデータベースへの文書の登録
ただし、エラーの発生した全文検索サーバへの登録は無効になります。
- テキストデータベースからの文書の削除
ただし、エラーの発生した全文検索サーバからの削除は無効になります。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- TS 情報 ID：TS 管理ファイルに記述されている TS 情報 ID が表示されます。
- 要因：保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。

対処

全文検索サーバを再起動してください。

K I I S 1 3 2 - E :

Document Manager で使用するエリアが設定されていません。

セッション名：XXX 付加情報：XXX

要因

オブジェクトサーバの初期設定パラメタに Document Manager で使用するユーザ用またはインデクス用のエリアが指定されていません。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンブプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

オブジェクトサーバの初期設定パラメタを調査してください。

K I I S 1 3 5 - E :

Document Manager 環境初期化ユティリティ (ISinitdb) で作成した Document Manager データベースと Document Manager サーバのバージョンが不整合です。

要因

互換性のないバージョンの環境初期化ユティリティで作成した Document Manager データベースを使用して、Document Manager を起動しました。

対処

バージョンを確認してから環境初期化ユティリティを再実行するか、またはバージョンを確認してから Document Manager サーバを再起動してください。なお、環境初期化ユティリティを再実行する場合、Document Manager データベースが初期化されますので注意してください。

K I I S 1 3 6 - E :

定義ファイルの操作時にエラーが発生しました。

要因：XXX 付加情報：XXX

要因

定義ファイルの操作時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：障害の要因が表示されます。
- 付加情報：要因に対応した付加情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いた後、再度ユティリティを実行してください。

K I I S 1 3 7 - E :

文書の登録時にエラーが発生しました。

要因：XXX 文書名：XXX 属性ファイル名：XXX 付加情報：XXX

要因

文書の登録時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：障害の要因が表示されます。
- 文書名：登録できなかった文書名が表示されます。
- 属性ファイル名：登録できなかった文書の属性ファイル名が表示されます。
- 付加情報：要因に対応した付加情報が表示されます。

対処

要因および付加情報の内容と対処について次に示します。

なお、このメッセージが表示された場合は、オブジェクトサーバに存在しない文書が、文書実体ファイルに存在する場合があります。したがって、このメッセージが表示された場合は、ファイル整合性ユーティリティ (ISfsck -d) コマンドを実行してください。

要因	内容	対処
Cannot open doc dir. ¹	文書格納ディレクトリのオープンに失敗しました。	障害の要因を取り除いて、再実行してください。
Cannot open doc file.	文書のオープンに失敗しました。	障害の要因を取り除いて、エラーで表示された文書だけを再実行してください。
Cannot open arg file.	属性ファイルのオープンに失敗しました。	
Invalid file path.	ファイル名(パス付き)が1,023バイトを超えています。	正しいファイル名を指定して、エラーで表示された文書名だけを再実行してください。
Dir not equal.	文書ファイル名と登録用属性ファイル名が同じディレクトリにありません。	
Invalid arg file.	登録用属性ファイルの内容に誤りがあります。	付加情報に表示された障害の要因を取り除いて、エラーで表示された文書名だけを再実行してください。 付加情報 1: 属性名が不正です。 2: 属性値が不正です。 ² 3: 必要な項目が定義されていません。 4: 定義間の関連に不正があります。 5: 属性が重複しています。 6: 属性の型が不正です。 7: 必要な属性が定義されていません。
I/O error.	入出力エラーです。	このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いて、エラーで表示された文書名だけを再実行してください。
Nomem is-sv.	メモリ不足が発生しました。	このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いて、再実行してください。
NO resource.	オブジェクトサーバの資源が不足しました。	
No space.	容量が不足しました。	

要因	内容	対処
Max object.	オブジェクト数がオーバーしました。	
Deadlock error.	デッドロックが発生しました。	
Class object nothing.	文書データベースのオブジェクトIDが不正です。	属性ファイルを修正して、エラーで表示された文書名だけを再実行してください。
DB error. ¹	Document Manager データベースの操作時にエラーが発生しました。	このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いて再実行してください。
View regist error.	文書を分類索引に登録する時にエラーが発生しました。	このメッセージの前にほかのメッセージが表示されている場合は、メッセージの障害の要因を取り除いて、クライアントからエラーで表示された文書名だけを分類索引に登録してください。 このメッセージの前にほかのメッセージが表示されていない場合は、属性ファイルに誤りがあります。クライアントにエラーで表示された文書名だけを分類索引に登録してください。
Folder regist error.	登録用属性ファイルに指定されたフォルダに文書を登録できません。デフォルトフォルダに登録します。	登録用属性ファイルに誤りがあります。文書名に表示された文書だけをクライアントよりデフォルトフォルダから対象のフォルダに移動してください。
TS regist error. ¹	全文検索サーバへの登録に失敗しました。	このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いて、クライアントから TS 未登録の文書を登録してください。 この場合、Document Manager 管理者のユーザ名でログインしてください。
Invalid doc file name.	文書名が不正です。	文書名を変更して、文書名に表示された文書だけを再実行してください。
Not found relation or text file.	次の要因が考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 関連ファイルまたはテキストファイルが見つかりません。 テキストファイルが自動抽出できません。 	1, 2 または 3 の対処をした後、エラー表示された文書名だけを再実行してください。 <ol style="list-style-type: none"> 関連ファイルを文書格納ディレクトリにすべて作成するか、または AP 情報管理ファイルの関連ファイルの指定を変更する。 テキストファイルを文書格納ディレクトリに格納するか、または AP 情報管理ファイルのテキストファイルの指定を変更する。 テキストファイルが自動抽出できないときは、テキストファイルを文書格納ディレクトリに格納する。

要因	内容	対処
Not condition for regist TS.	文書データベースの TS 情報 ID が未設定か、または環境設定ファイルの bib_ts (全文検索機能の使用) に nouse が指定されています。	次の対処をした後、メッセージに表示された文書だけを再実行してください。 <ul style="list-style-type: none"> 文書データベースの TS 情報 ID の値が設定されていない場合は、設定してください。 環境設定ファイルの bib_ts (全文検索機能の使用) に nouse を指定している場合は、連携する全文検索サーバに対応した設定値を指定してください。なお、環境設定ファイルの変更内容を有効にするためには、Document Manager サーバの再起動が必要です。
Invalid apid.	文書データベースの AP 識別子が不正です。	文書を登録する文書データベースの AP 識別子を確認し、クライアントで 0 以外の使用する AP 識別子を設定した後、メッセージに表示された文書だけを再実行してください。
Invalid export file. ¹	登録用定義ファイルが不正です。	不要な登録用定義ファイルを削除してください。
Not found export file. ¹	文書登録に必要なファイルのうち登録用定義ファイル、登録用文書ファイルまたは登録用属性ファイルがありません。	存在しないファイルをコピーして、ユティリティを再実行してください。

注 1 文書名および属性ファイル名には、「*****」と表示されます。

注 2 次のどちらかの対策の実施が必要となるときもあります。

存在しない文書データベースまたは文書データベース以外のオブジェクト ID を指定した場合もこのエラーになります。このメッセージが出力された場合、オブジェクトサーバに存在しない文書が文書実体ファイルに存在する場合があります。したがって、このメッセージが出力された場合は、ファイル整合性ユティリティ (ISfsck) を -d オプションで実行してください。

環境設定ファイルの「DocumentNameExtensionOption」の設定が正しいかどうか確認してください。設定を修正した場合は、Document Manager サーバを再起動する必要があります。

K I I S 1 3 8 - E :

Address との連携でエラーが発生しました。

セッション名 : X X X 関数名 : X X X Address 情報 ID : X X X 詳細コード : X X X

要因

Address ライブラリをコールしたときに、エラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名 : セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、

デーモンプロセスは「*****」が表示されます。

- 関数名：エラーが発生した Groupmax Address の関数が表示されます。
- Address 情報 ID：Groupmax Address で出力されたエラーコードが表示されません。
- 詳細コード：Groupmax Address の詳細情報が表示されます。

対処

関数名および Address 情報 ID の内容と対処について示します。

関数名	Address 情報 ID	内容	対処
GSSGetIPAddr ess	- 1	次の要因が考えられます。 • gaddr.ini ファイルがありません。 • 記述内容に誤りがあります。	要因に応じて、次のどちらかの対処を実施してください。 • gaddr.ini ファイルを作成してください。 • 記述内容を正しくしてから、再度ログインしてください。
GSSGetUserInfoByUID2	5	セッションを利用するユーザが Groupmax Address に登録されていません。	セッション名に表示されるユーザが Groupmax Address に存在するかどうか確認してください。
その他	1	次の要因が考えられます。 • TCP/IP の環境が不正です。 • 連携先サーバの Groupmax Address が起動されていません。	要因に応じて、次のどちらかの対処を実施してください。 • TCP/IP の環境を見直してください。 • Groupmax Address を起動してください。
	2	連携先サーバに出力されているメッセージを参照してください。	メッセージの障害を取り除いてから、再度ログインしてください。
	その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 3 9 - E :

通信障害によりセッションが切断されました。

セッション名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

LAN での障害、またはクライアントの異常終了によって通信障害が発生しました。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザ名が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：システムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

クライアントから再度ログインしてください。ログインできない場合はシステム管理者に連絡してください。

関数名および理由コードの内容と対処について次に示します。

関数名	理由コード	内容	対処
その他	232	セッション確立中にクライアントの電源断などによって、通信障害が発生しました。	クライアントから再度ログインしてください。ログインできない場合はシステム管理者に連絡してください。
その他	-	-	クライアントから再度ログインしてください。ログインできない場合はシステム管理者に連絡してください。

K I I S 1 4 0 - E :

テキストファイルに登録できない文字が含まれているため、テキストデータベースへの登録に失敗しました。

セッション名：XXX 文書ID：XXX 文書名：XXX バージョン番号：XXX

要因

テキストデータベースに登録する文書のテキストファイルに登録できない文字が含まれているため、テキストデータベースへの登録に失敗しました。ただし、エラーが発生した文書以外の処理は続行します。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 文書ID：登録に失敗した文書のオブジェクトIDが表示されます。
- 文書名：登録に失敗した文書の名称が表示されます。
- バージョン番号：登録に失敗した文書のバージョン番号が表示されます。

対処

テキストファイルから登録できない文字を取り除いてから、再度登録してください。

K I I S 1 4 1 - E :

テキストファイルが最大サイズを超えているため、テキストデータベースへの登録に失敗しました。

セッション名：XXX 文書ID：XXX 文書名：XXX バージョン番号：XXX

要因

テキストデータベースに登録する文書のテキストファイルのサイズが982,974バイトを超えているため、登録に失敗しました。ただし、エラーが発生した文書以外の処理は続行します。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 文書ID：登録に失敗した文書のオブジェクトIDが表示されます。
- 文書名：登録に失敗した文書の名称が表示されます。
- バージョン情報：登録に失敗した文書のバージョン番号が表示されます。

対処

テキストファイルのサイズを小さくしてから、再度登録してください。

K I I S 1 4 2 - E :

複数グループアクセス権初期設定ユティリティを実行していないため複数グループアクセス権は使用できません。

要因

環境設定に複数グループアクセス権を使用するよう指定されていますが、実行するための初期設定がされていません。処理を中止しました。

対処

アクセス権の運用を複数グループアクセス権とする場合は、複数グループアクセス権初期設定ユティリティを実行してください。

アクセス権の運用を従来のアクセス権とする場合は、環境設定ファイルの「複数グループアクセス権」の値を "nouse" に変更した後、サーバを再起動してください。

K I I S 1 4 3 - E :

テキストデータベースからの削除に失敗しました。

セッション名：XXX 文書ID：XXX 文書名：XXX バージョン番号：XXX

TS 情報ID：XXX TS 文書ID：XXX 要因：XXX 理由コード：XXX

要因

テキストデータベースからの同期削除に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 文書ID：削除に失敗した文書のオブジェクトIDが表示されます。
- 文書名：削除に失敗した文書の名称が表示されます。
- バージョン番号：削除に失敗した文書のバージョン番号が表示されます。
- TS 情報ID：削除に失敗した文書のTS 情報IDが表示されます。
- TS 文書ID：削除に失敗した文書のTS 文書IDが表示されます。
- 要因：要因コードが表示されます。
- 理由コード：全文検索サーバ (Bibliotheca2 TextSearch Version 2) のメッセージIDの数字部分が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。ただし、該当する理由コードが表に記載されていない場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」で内容を確認してください。対処に従って障害の要因を取り除いた後、全文検索用登録・削除ユティリティを実行して、テキストデータベースに残ったテキストデータを削除してください。

理由コード	内容	対処
11004	全文検索サーバでの環境設定が不十分です。	理由コードに示される全文検索サーバの障害を取り除いてください。
12003	全文検索サーバに障害が発生しました。	このメッセージの前に出力されたメッセージの要因を取り除いてください。
12004	全文検索サーバでメモリ不足が発生しました。	メモリの所要量を見直してください。
12005	Document Manager サーバでメモリ不足が発生しました。	メモリの所要量を見直してください。
12006	全文検索サーバとの接続に失敗しました。	理由コードに示される全文検索サーバの障害を取り除いてください。
12016	TS 管理ファイルの中に TS 情報がありません。	TS 管理ファイルの内容を確認してください。
12019	全文検索サーバとのセッションの上限を超えました。	ほかのユーザの全文検索サーバに対する操作を中断してください。
13012	テキストデータベースからの削除対象にできませんでした。	ファイル整合性ユティリティを実行して、Document Manager データベースとテキストデータベースに登録されている文書の整合を取ってください。
上記以外	-	このメッセージの前に出力されたメッセージの要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

さらに、Bibliotheca2 TextSearch で使用される、代表的な理由コードの内容と対処について次に示します。該当する理由コードおよび対処が記載されていない場合は、マニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」で内容を確認してください。

理由コード	内容	対処
- 110002	全文検索サーバ操作時にメモリ不足が発生しました。	スワップエリアサイズを含めたメモリ容量を見直してください。
- 120001	全文検索サーバのポート番号を取得できませんでした。	全文検索サーバのポート番号を services に登録してください。登録方法はマニュアル「Bibliotheca2 TextSearch Version 2 システム管理者ガイド」を参照してください。

理由コード	内容	対処
- 120002	全文検索サーバとの通信でエラーが発生しました。	次に示す確認を行ってください。 1. 全文検索サーバが正常にインストールされているか。 2. 文検索サーバが正常に起動され、テキストデータベースがオープンされているか。 3. TS 管理ファイルの設定が正しいか(全文検索サーバ名、テキストデータベース名など)。 4. 全文検索サーバが別サーバの場合、ネットワークが正常に動作し、通信経路が確保されているか。
- 120007	文書管理サーバが正しくインストールされていません。	文書管理サーバを再インストールし、再実行してください。
- 130002	全文検索サーバのサーバ名が不正です。	TS 管理ファイルの全文検索サーバ名に記載されているサーバ名が、IP アドレスに対応付けられた名前として登録されているかどうか確認してください。

K I I S 1 4 4 - E :

環境定義の設定値に誤りがあります。

環境定義 : X X X 付加情報 : X X X

要因

Document Manager の環境定義に誤りがあります。要因は、次の形式で表示されません。

- 環境定義 : 環境設定ファイル (Config) で誤った定義をした定義名が表示されません。
- 付加情報 : 保守情報として、エラーのあった行が表示されます。さらに、環境設定ファイル (Config) に記述した値が表示されます。

対処

誤りのあった環境定義を再設定した後、Document Manager サーバを起動してください。

K I I S 1 4 5 - E :

イベント通知機能で使用するライブラリのロード時にエラーが発生しました

ライブラリ名 : X X X 関数名 : X X X 理由コード : X X X

要因

連携アプリケーションのライブラリのロード処理でエラーが発生しました。

要因は、次の形式で表示されます。

- ライブラリ名 : ロードに失敗したライブラリの名称が表示されます。
- 関数名 : エラーとなった関数名が表示されます。
- 理由コード : ライブラリのロード関数のエラーコードが表示されます。システムコールのリターンコード (errno) が表示されます。

対処

連携アプリケーションが正しくインストールされているか見直してください。
 イベント通知が不要な場合は、環境設定ファイルでイベント通知機能
 (AppNotification) を nouse にしてください。

K I I S 1 4 5 - E :

イベント通知機能で使用するライブラリのロード時にエラーが発生しました

ライブラリ名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

関数名：XXX 理由コード：XXX 詳細コード：XXX

要因

連携アプリケーションのライブラリでエラーが発生したため、イベント通知に失敗
 しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 文書名：イベント通知に失敗した文書名が表示されます。文書名が確定できない
 場合は "*" と表示されます。
- オブジェクト ID：イベント通知に失敗した文書のオブジェクト ID が表示されま
 す。
- 関数名：エラーとなった連携アプリケーションの関数名が表示されます。
- 理由コード：連携アプリケーションのエラーコードが表示されます。
- 詳細コード：連携アプリケーションの詳細情報が表示されます。

対処

関数名が AGda_ で始まる場合の理由コードと対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
2001	Groupmax Agent - Document Manager Server が起動していません。	Groupmax Agent - Document Manager Server を起動してください。
3001	Groupmax Agent - Document Manager Server でメモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
3002	Groupmax Agent - Document Manager Server でディスク容量不足が発生しまし た。	ディスク所要量を見直してください。
その他	-	システム管理者に連絡してください。

関数名が NIFS_ で始まる場合の理由コードと対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
2001	Millemasse/FS が起動していません。	Millemasse/FS を起動してください。
3001	Millemasse/FS でメモリ不足が発生しま した。	メモリの所要量を見直してください。
3002	Millemasse/FS で I/O エラーが発生しま した。	システム管理者に連絡してください。
その他	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 4 7 - E :

テキスト自動抽出機能で使用するライブラリのロード時にエラーが発生しました。

ライブラリ名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

要因

Document Filter for Text Search のライブラリのロード処理でエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- ライブラリ名：ロードに失敗したライブラリの名称が表示されます。
- 関数名：エラーとなった関数名が表示されます。
- 理由コード：ライブラリのロード関数のエラーコードが表示されます。システムコールのリターンコード (errno) が表示されます。

対処

Document Filter for Text Search が正しくインストールされているか見直してください。

テキスト自動抽出が不要な場合は、環境設定でテキスト自動抽出機能 (AutoTextExtract) を nouse にしてください。

K I I S 1 4 8 - E :

テキスト自動抽出時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX ファイル名：XXX

理由コード：XXX 詳細コード：XXX

要因

連携アプリケーションのライブラリでエラーが発生したため、イベント通知に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- ファイル名：テキスト自動抽出に失敗した文書名が表示されます。
- 理由コード：エラーコードが表示されます。
- 詳細コード：詳細情報が表示されます。

対処

理由コードと対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
44005	Document Filter for Text Search, または Document Manager Server でメモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
44011	OS でシステムリソース不足が発生しました。	詳細コードに errno または GetLastError() の返却値が設定されているため、その値から該当する OS のカーネル値を見直してください。
44013	Document Manager Server でディスク容量不足が発生しました。	ディスク所要量を見直してください。
その他	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 4 9 - E :

ローカルグループ情報キャッシュ操作時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX 付加情報：XXX

要因

ローカルグループ情報キャッシュの操作時にエラーが発生しました。

要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 付加情報：付加情報が表示されます。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 5 0 - E :

テキスト自動抽出サーバでのテキスト自動抽出時にエラーが発生しました。

セッション名：XXX ファイル名：XXX

理由コード：XXX 詳細コード：XXX 付加情報：XXX

要因

テキスト自動抽出サーバでのテキスト自動抽出時にエラーが発生したため、イベント通知に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- ファイル名：テキスト自動抽出に失敗した文書名が表示されます。
- 理由コード：エラーコードが表示されます。
- 詳細コード：詳細情報が表示されます。
- 付加情報：付加情報が表示されます。

対処

要因コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
44000	-	詳細コードが0で、付加情報が65の場合、回線断の可能性があるので見直してください。上記以外は、システム管理者に連絡してください。
44002	文書のサイズが0です。	文書を見直してください。
44003	文書に対する権限がありません。	文書の権限を見直してください。
44020	テキスト自動抽出サーバとの通信エラーが発生しました。	テキスト自動抽出サーバおよび通信環境を見直してください。
44021	テキスト抽出管理ファイル (autotxt.cfg) の形式が不正です。	テキスト抽出管理ファイル (autotxt.cfg) の形式を見直してください。
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 1 5 1 - E :

Server-Scan との連携でエラーが発生しました。

セッション名 : X X X 関数名 : X X X Server-Scan

情報 ID : X X X 詳細コード : X X X

要因

Server-Scan との連携でエラーが発生しました。要因は次の形式で表示されます。

- セッション名 : セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンブプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 関数名 : エラーの発生した Server-Scan の関数名が表示されます。
- Server-Scan 情報 ID : Server-Scan の関数のエラーコードが表示されます。
- 詳細コード : Server-Scan の関数の詳細コードが表示されます。

対処

関数名及び Server-Scan 情報 ID の内容と対処について次に示します。

関数名	Server-Scan 情報 ID	内容	対処
AVPInit	1	Server-Scan がインストールされていない。	Server-Scan をインストールしてください。
	その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。
AVPRequestClass	-1	Server-Scan でメモリ不足が発生しました。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
	-2	Server-Scan でディスク容量が不足しました。	ディスク容量を見直してください。
	1	Server-Scan がインストールされていない。	Server-Scan をインストールしてください。
	その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 0 1 - W :

文書データベースの削除後に無効なオブジェクトが残っています。

セッション名 : X X X 文書データベース ID : X X X 位置コード : X X X 理由コード : X X X

要因

オブジェクトサーバでのエラーのため、文書データベースの削除後に無効なオブジェクトが残っています。この文書データベースは以降使用できません。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名 : セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デモンブプロセスでは、「*****」が表示されます。

- 文書データベース ID：削除した文書データベースのオブジェクト ID が表示されます。
- 位置コード：保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。

対処

このメッセージが多発する場合は、システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 0 2 - W :

指定されたオブジェクトは存在しません。

セッション名：XXX オブジェクト ID：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

付加情報：XXX

要因

他ユーザがすでにオブジェクトを削除していますが、処理を続行します。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- オブジェクト ID：操作対象のオブジェクトサーバのオブジェクト ID が表示されます。
- 関数名：保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

K I I S 2 0 3 - W :

アクセスログの取得に失敗しました。

ログ情報：XXX

要因

アクセスログの取得に失敗しました。要因の内容は、このメッセージの前に表示されているメッセージに表示されます。

- ログ情報：取得に失敗したログが表示されます。

対処

アクセスログを取得する必要がない場合は、処理を続行してください。アクセスログを取得する必要がある場合は、このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。

K I I S 2 0 4 - W :

文書配布ログの取得に失敗しました。

ログ情報：XXX

要因

メッセージ中に示したログの取得に失敗しました。要因の内容は、このメッセージの前に表示されているメッセージに表示されます。

- ログ情報：取得に失敗したログが表示されます。

対処

ログを取得する必要がない場合は、そのまま処理を続行してください。ログを取得する必要があれば、このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。

K I I S 2 0 5 - W :

連携サーバ設定ファイルの読み出しに失敗しました。

理由コード：X X X 付加情報 1：X X X 付加情報 2：X X X

要因

連携サーバ設定ファイルがないか、連携サーバ設定ファイルの記述に誤りがあるか、または Groupmax Address サーバへの連携サーバに誤りがあります。要因は、次の形式で表示されます。

- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報 1：保守情報が表示されます。
- 付加情報 2：保守情報が表示されます。

対処

メール連携機能を使用して文書配布を行わない場合、そのまま処理を続行させてください。メール連携機能を使用する場合、次の環境を確認して、障害の要

因を取り除いてください。

- 文書配布用連携サーバ取得方法を Groupmax Address に設定している場合
Document Manager 用組織内にサーバが正しく登録されているか確認します。サーバ一覧更新コティリティを実行後、サーバを再起動します。
- 文書配布用連携サーバ取得方法を File に設定している場合
連携サーバ設定ファイルを確認して訂正後、サーバを再起動します。

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
30005	連携サーバ設定ファイルにサーバ情報が存在しません。	上記対処を実施してください。
30007	連携サーバ設定ファイルが存在しません。	上記対処を実施してください。
30004	メモリが不足しています。	メモリ所要量を見直してください。
その他	-	必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 0 6 - W :

メールシステムとの連携に失敗しました。

要因：X X X Y Y Y Z Z Z 関数名：WWW

要因

メールシステムとの連携に失敗しました。ただし、文書配布処理は続行されています。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：メールシステムで出力されたエラーの詳細情報を出力します。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。

対処

詳細情報を基に障害の要因を取り除いてください。詳細情報は、次の表を参照ください。表にない詳細情報が表示された場合は、システム管理者に連絡してください。

詳細情報	関数名	内容	対処
100 0 0	nxc_get_usrtByuid	メールシステムに登録されていないユーザ ID が指定されました。	このメッセージの後に出力されるメッセージで指定されたユーザ ID を表示します。このユーザ ID を基に、環境設定情報、連携サーバ設定ファイルの指定を見直してください。
31007 0 0	Isrm_receive_mail_check_body Isrm_receive_mail_check_env Isrm_receive_mail_check_ipm Isrm_receive_mail_check_ipm_rec	文書配布機能で使用できないメールを受信しました。	1. 文書配布送受信デーモン専用のメール ID を使用してください。 2. 環境設定情報を見直してください。
3 30028 0	SnxuaLogin	メール配布用のメールユーザのメールボックスが閉塞されています。	メールボックスの閉塞を解除した後、文書配布送受信デーモンを再起動してください。
3 30103 2	SnxuaSetAlert	セマフォ ID が存在しません。	メールサーバが起動しているか確認してください。
4 40002 0	SnxuaLogin	文書配布機能で使用できないメールを受信しました。	文書配布送受信デーモン専用のメール ID を使用してください。

K I I S 2 0 8 - W :

ローカルグループファイルの記述に誤りがあります。

セッション名：X X X グループ名：X X X 要因：X X X

要因

ローカルグループファイルの中にエラーを検出しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、デーモンプロセスでは「*****」が表示されます。
- グループ名：エラーが発生したローカルグループ名が表示されます。
- 要因：エラーが発生した要因が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因	内容	対処
LOOP GROUP	グループの階層がループしています。	最終行に改行コードがあるか、およびグループの階層がループしていないかを確認して、ローカルグループファイルを正しく記述してください。 その後、Document Manager サーバを再起動してください。
NO GROUP	存在しないグループが所属情報に記述されています。	
MAX HIERARCHY	グループの階層が最大値 99 を超えています。	
INVALID FORMAT	記述形式に誤りがあります。	

K I I S 2 0 9 - W :

TS 文書 ID 変換テーブルの処理でエラーが発生しました。

セッション名：XXX 要因：XXX 関数名：XXX 付加情報：XXX

要因

全文検索で TS 文書 ID 変換テーブルへアクセスした時にエラーが発生しました。全文検索で TS 文書 ID 変換テーブルを使用しないモードで続行されます。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザ名が表示されます。ただし、デモンプロセスでは、「*****」が表示されます。
- 要因：障害の要因が表示されます。
- 関数名：必要に応じて、エラーの発生した UNIX の関数名が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて、システムコールのリターンコード (errno) が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因	内容	対処
invalid file	次の要因が考えられます。 • TS 文書 ID 変換テーブルの内容が不正です。 • 指定された名称がディレクトリです。	ユティリティ IStsidtbl を実行して、TS 文書 ID 変換テーブルを作り直してください。
no more memory	メモリが確保できません。	メモリ所要量を見直してください。
system call error	システムコールでエラーが発生しました。メモリが確保できません。	関数名、付加情報を参照して障害の要因を取り除いてください。
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 1 0 - W :

組織情報の設定に誤りがあります。

セッション名：XXX 組織名：XXX 要因：XXX

要因

組織情報の設定に誤りがありましたが、エラーの発生した箇所は無視して処理を続行しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 組織名：エラーが発生した組織名が表示されます。
- 要因：障害の要因が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

要因	内容	対処
LOOP GROUP	組織の階層がループしています。	Groupmax Address に組織情報を正しく登録して、Document Manager サーバを再起動してください。

K I I S 2 1 2 - W :

パスワード有効期間が切れています。

セッション名：XXX 関数名：XXX Address 情報 ID：XXX 詳細コード：XXX

要因

パスワード有効期間が切れているため、ログインに失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：ログインを試みているユーザのユーザ ID が表示されます。
- 関数名：エラーとなった Groupmax Address の関数名が表示されます。
- Address 情報 ID：Groupmax Address のエラーコードが表示されます。
- 詳細コード：保守情報が表示されます。

対処

関数名、Address 情報 ID および詳細コードの内容と対処について次に示します。

関数名	Address 情報 ID	詳細コード	内容	対処
GSSRequest Certification2 GSSRequest Certification3	3	- 30000	パスワード有効期間が切れているため、ログインに失敗しました。	ログイン可能となるようにパスワードの変更またはパスワードの有効期間を延長してください。これらの詳細については、「Groupmax Address/Mail Version 6 システム管理者ガイド 基本操作編」を参照してください。
その他	その他	その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 1 3 - W :

XXX に YYY が存在しないため、ディレクトリを作成しました。

要因

実行時（起動時）に必要なディレクトリがないため、ディレクトリを作成しました。要因は、次の形式で表示されます。

- XXX：ディレクトリを作成したディレクトリが表示されます。
- YYY：作成したディレクトリが表示されます。

対処

YYY の内容と対処について次に示します。

YYY	内容	対処
etc	環境ファイル格納ディレクトリが存在していませんでした。	AP 情報管理ファイル、環境設定ファイル等を作成した後、Document Manager サーバを再起動してください。このディレクトリに必要なファイルについては、「付録 A Document Manager のディレクトリ構成」を参照してください。
doc	文書実体格納ディレクトリが存在していませんでした。	文書実體ファイルが不整合の可能性があります。バックアップから回復するか、またはファイル整合性チェックユーティリティを実行して、整合性を確保してください。
その他	サーバの開始に必要なディレクトリが存在していませんでした。	特に対処の必要はありません。そのまま御使用ください。

K I I S 2 1 4 - W :

テキストデータベースに登録するテキストファイルに登録できない文字が含まれているため、登録できない文字を削除しました。

セッション名：XXX 文書 ID：XXX 文書名：XXX バージョン番号：XXX

不正文字：XXX

要因

テキストデータベースに登録しようとしたテキストファイルに使用できない文字（不正文字）が含まれていたため、不正文字を削除して登録を実行しました。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：該当する処理を実行したユーザ名が表示されます。
- 文書 ID：不正文字を検出した文書オブジェクト ID が表示されます。
- 文書名：不正文字を検出した文書オブジェクト名が表示されます。
- バージョン番号：文書オブジェクトのバージョン番号が表示されます。
- 不正文字：見つかった不正文字のコード（最初に見つかったコードだけ）が表示されます。

対処

テキストファイル以外の形式のファイルを指定していないか確認した後、必要に応じて再登録を実行してください。

K I I S 2 1 5 - W :

ローカルグループファイルが更新されています。

付加情報：XXX

要因

ローカルグループファイル更新後にキャッシュ情報が再作成されていません。

- XXX：保守情報が表示されます。

対処

ローカルグループ情報キャッシュユティリティ (ISlgrpcc) を実行後、サーバを再起動してください。

K I I S 2 1 6 - W :

テキストファイルの自動抽出処理でタイムアウトが発生しました。

セッション名：XXX 文書名：XXX 主ファイル名：XXX

要因

テキストファイルの自動抽出処理でタイムアウトが発生しました。

- セッション名：セッションを使用しているユーザのユーザ名が表示されます。
- 文書名：テキストファイルの自動抽出を行った文書名が表示されます。
- 主ファイル名：テキストファイルの自動抽出対象となった主ファイルの名称が表示されます。

対処

- テキストファイル自動抽出機能の対象外の文書を登録した可能性があります。この場合、テキストファイルを手動で生成して登録してください。
- テキストファイル自動抽出機能の対象ファイルの場合、テキスト自動抽出に時間が掛かっている可能性が有ります。環境設定ファイルのタイムアウト値を見直してください。タイムアウト値を変更後、再登録してもこのメッセージが出力される場合は、システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 1 7 - W :

対象リストファイルの記述に不正があります。XXX 行目

要因：XXX

要因

対象リストファイルの記述に不正があります。

- 行目：対象リストファイルのエラーの発生した行数が表示されます。
- 要因：エラーの発生した要因が表示されます。

対処

障害の要因の内容と対処について次に示します。要因を取り除いた後、再実行してください。

要因	内容	対処
NO OBJECT	オブジェクトが存在しません。	対象リストファイルの該当箇所を見直してください。
INVALID FORMAT	文字列中に空白がある、又は文字列長が 16 バイトを超過しています。	対象リストファイルの該当箇所を見直してください。

要因	内容	対処
MAX STEP	1 行の文字数制限を超過しています。	1 行の文字数を 80 バイト以内にしてください。
NOT DOC OBJECT	文書オブジェクトではありません。	正しいオブジェクト ID を指定して再実行してください。

K I I S 2 1 8 - W :

環境変数 (X X X) が不正なため、ログの出力先を X X X に変更します。

要因

環境変数の指定内容に問題が発生しました。ログの出力先を標準値に設定して出力します。

- 環境変数：ログの出力先を変更するための環境変数が表示されます。
- ログの出力先パス名：標準のログ出力先パス名が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要なら Server - Scan 及び Document Manager サーバを再起動してください。

K I I S 3 0 0 - I :

Document Manager 文書配布送信デーモンを開始します。

K I I S 3 0 1 - I :

Document Manager 文書配布受信デーモンを開始します。

K I I S 3 0 2 - I :

Document Manager 文書配布送信デーモンが終了中です。

K I I S 3 0 3 - I :

Document Manager 文書配布受信デーモンが終了中です。

K I I S 3 0 4 - I :

Document Manager 文書配布送信デーモンが終了しました。

K I I S 3 0 5 - I :

Document Manager 文書配布受信デーモンが終了しました。

K I I S 3 0 6 - W :

メールシステムとの連携に失敗しました。

要因：X X X Y Y Y Z Z Z 関数名：WWW

要因

メールシステムとの連携に失敗しました。ただし、文書配布処理は続行されています。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：メールシステムで発生したエラーについて詳細情報が表示されます。
- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。

対処

詳細情報を基に障害を取り除いてください。詳細情報は、KIIS206-W のメッセージを参照してください。

K I I S 3 0 7 - W :

Document Manager 文書配布送信デーモンは既に起動されています。

K I I S 3 0 8 - W :

Document Manager 文書配布受信デーモンは既に起動されています。

K I I S 3 0 9 - E :

Document Manager 文書配布送信デーモンの起動に失敗しました。

要因 : X X X

要因

詳細情報に示した要因によって、Document Manager 文書配布送信デーモンの起動に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因 : 詳細情報を出力します。

対処

詳細情報を基に障害の要因を取り除いてください。詳細情報は、次の表を参照してください。

詳細情報	内容	対処
4011	Document Manager サーバが起動していません。	Document Manager サーバを起動した後、文書配布受信デーモン起動ユティリティを再度実行してください。
31001	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能設定ユティリティを実行した後、文書配布受信デーモン起動ユティリティを再実行してください。
31002	文書配布機能設定ユティリティが実行されていません。	
その他		システム管理者に連絡してください。

K I I S 3 1 0 - E :

Document Manager 文書配布受信デーモンの起動に失敗しました。

要因 : X X X

要因

詳細情報に示した要因によって、Document Manager 文書配布受信デーモンの起動に失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因 : 詳細情報を出力します。

対処

詳細情報を基に障害の要因を取り除いてください。詳細情報は、次の表を参照ください。

詳細情報	内容	対処
4011	Document Manager サーバが起動していません。	Document Manager サーバを起動した後、文書配布送受信デーモン起動ユーティリティを再度実行してください。
31002	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能設定ユーティリティを実行した後、文書配布送受信デーモン起動ユーティリティを再度実行してください。
31015	メールシステム連携用のファイルが設定されていません。	環境設定ファイルおよび連携サーバ設定ファイルに必要な項目を設定した後、文書配布送受信デーモン起動ユーティリティを再度実行してください。
その他		システム管理者に連絡してください。

K I I S 3 1 1 - E :

Document Manager サーバでエラーが発生しました。

要因：XXX

要因

Document Manager サーバでエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：Document Manager サーバから返却された詳細情報を出力します。

対処

要因および内容と対処について次に示します。

詳細情報	内容	対処
4011	サーバが起動していません。	サーバを起動して文書配布送受信デーモンを再起動してください。
4013 31011	オブジェクトを操作した時に、排他制御でほかのユーザとのデッドロックが発生しました。	時間を置いてから、再度実行してください。
4014	指定したサーバがありません。	通信環境を正しく設定した後、再度実行してください。
4015	サーバの IP アドレスを示すホストに接続できませんでした。	通信環境を正しく設定した後、再度実行してください。
4041 31004	次に示すどれかの要因のため、処理を中止しました。 1. サーバのディスク容量が不足しています。 2. 作業領域のファイルと Document Manager の管理ファイルに不整合が発生しました。 3. サーバのハードディスクに異常があります。	1. の要因に対しては、サーバのディスク容量を確保して再実行してください。 2. の要因に対しては、同じ操作を何回か実行してください。再度実行しても発生する場合はシステム管理者に連絡してください。 3. の要因に対しては、バックアップなどから回復してください。
4047	サーバから送信されたデータが大き過ぎるため、データの一部を表示できませんでした。	送信されたデータのうち、先頭部分だけ表示されます。表示されたデータの範囲で操作してください。

詳細情報	内容	対処
4060 31005	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	次のどちらかの方法で対処してください。 <ul style="list-style-type: none"> • サーバのメモリを消費しているプロセスを終了した後、再度実行する。 • 必要のない検索結果を削除した後、再度実行する。
4066 31014	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して、サーバの資源を確保した後、再度実行してください。
4099	サービス名が登録されていません。	サービス名を登録した後、再度実行してください。
4115	指定された Document Manager 管理者ユーザ名が登録されていません。	ユーザを登録するか、登録されているユーザ名を指定して再度実行してください。
4150	サーバがユティリティ等で占有されています。	時間を置いてから、再度実行してください。
4199	実行者がシステム管理者ではありません。	システム管理者が実行してください。
31002	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能の実行環境を作成して再実行してください。
31006	サーバのディスク容量が不足しています。	サーバのディスク容量を確保した後、再度実行してください。
31013	エクスポートファイルがありません。	エクスポートファイルを作成した後、再度実行してください。
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 3 1 2 - E :

続行不可能な障害が発生したため、Document Manager 文書配布送信デーモンを終了します。

要因

続行できない障害が発生しました。

対処

このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。

K I I S 3 1 3 - E :

続行不可能な障害が発生したため、Document Manager 文書配布受信デーモンを終了します。

要因

続行できない障害が発生しました。

対処

このメッセージの前に表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。

K I I S 3 1 4 - E :

オペレーティングシステムとのインタフェースでエラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

オペレーティングシステムとのインタフェースでエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- 付加情報：必要に応じて保守情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 3 1 5 - E :

サーバのインポート処理で3回エラーが発生しました。処理をスキップします。

インポートファイル名：XXX 要因1：XXX 要因2：XXX 要因3：XXX

保守情報1：XXX 保守情報2：XXX 保守情報3：XXX 付加情報1：XXX

付加情報2：XXX 付加情報3：XXX

要因

文書配布受信デモンは配布文書の取り込み処理に失敗した場合、3回リトライします。3回リトライしても取り込み処理に失敗するとこのメッセージが出力されます。要因は、次の形式で3回分表示されます。

- インポートファイル名：エラーの発生したエクスポートファイル名が表示されません。
- 要因1～3:n回目の処理失敗の詳細情報が表示されます。
- 保守情報1～3:n回目の処理失敗の保守情報が表示されます。
- 付加情報1～3:n回目の処理失敗の付加情報が表示されます。

対処

保守情報の内容と対処について次に示します。

保守情報	内容	対処
ISRM0804	配布先サーバのスプールディレクトリにエラーメッセージが出力されません。	エラーメッセージファイルに出力されているメッセージの障害を取り除いてからインポート機能ユティリティを実行してください。
その他のコード	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 3 3 0 - E :

文書配布機能ユティリティを実行していないため文書配布機能は使用できません。

要因

文書配布機能の実行環境を作成しないで文書配布機能を使用しました。

対処

環境初期化ユティリティを実行して、文書配布機能の実行環境を作成してから文書配布機能を使用してください。

K I I S 3 3 1 - E :

配布文書の作成に必要なファイルがありません。

要因

配布文書の作成に必要なファイルのうち、配布用定義ファイル、配布用文書ファイルまたは配布用属性ファイルがありません。

対処

エクスポート時に作成されたファイルから必要なファイルをコピーして、インポート機能ユティリティを実行してください。

K I I S 3 3 2 - W :

配布文書を登録する文書データベース又は分類索引がありません。

要因：X X X 名称：X X X 付加情報：X X X

要因

配布文書を登録する文書データベースまたは分類索引がないため、文書の登録ができませんでした。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：CLASS（文書データベース）か VIEW（分類索引）のどちらかが表示されます。
- 名称：文書データベースまたは分類索引名称が表示されます。
- 付加情報：要因が CLASS（文書データベース）のときは「日付」、要因が VIEW（分類索引）のときは「文書名 日付 保守情報」が表示されます。

対処

文書が必要な場合、文書データベースまたは分類索引を作成してインポート機能ユティリティを実行してください。システムは当該エラー以外の文書は登録します。

K I I S 3 3 3 - W :

エクスポートファイル中の文書が配布文書より古いため登録処理をスキップします。

文書データベース名称：X X X 文書名称：X X X 配布元文書 ID：X X X

配布元文書バージョン：X X X 文書 ID：X X X 文書バージョン：X X X

要因

エクスポートファイル中の文書のバージョンが配布文書より古いため、当該文書の登録処理をスキップします。次の理由が発生原因として挙げられます。

- 最新でないエクスポートファイルを登録しようとした
- 当該エクスポートファイルを作成した後に文書を更新し、異なる文書配布対象グループですでに配布している

要因は、次の形式で表示されます。

- 文書データベース名称：文書が属する文書データベースの名称が表示されます。
- 文書名称：登録されなかった文書の名称が表示されます。

- 配布元文書 ID：配布元の文書の文書 ID が表示されます。
- 配布元文書バージョン：配布元の文書のバージョンが表示されます。
- 文書 ID：配布文書の文書 ID が表示されます。
- 文書バージョン：配布文書のバージョンが表示されます。

K I I S 3 3 4 - E :

エクスポートファイルの形式が不正であるため、当該エクスポートファイルの取り込み処理を終了します。

配布用定義ファイル名称：X X X

要因

Document Manager で作成したエクスポートファイルでないため、当該エクスポートファイルの取り込み処理を終了しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 配布用定義ファイル名称：取り込み処理を中止した配布用定義ファイルの名称を表示します。

対処

不正な配布用定義ファイルを削除してください。

K I I S 3 3 5 - W :

文書が存在しないため、エクスポートファイルの作成処理を中止しました。

種別：X X X 名称：X X X ファイル名：X X X

要因

文書の存在しないフォルダ、文書データベース、または分類索引が指定されました。

- 種別：エラーが発生した資源を示すコードが表示されます。

Folder：フォルダ

Database：文書データベース

View：分類索引

- 名称：エラーが発生したフォルダ、文書データベース、または分類索引の名称が表示されます。
- ファイル名：作成しようとしたエクスポートファイルの名称が表示されます。

対処

該当するフォルダ、文書データベース、または分類索引の下に文書を作成した後、再度エクスポートユティリティ (ISexport コマンド) を実行してください。

K I I S 3 3 6 - W :

文書を登録するためのエクスポートファイルがありません。

要因

指定されたディレクトリ下に該当するエクスポートファイルがありません。または、指定されたエクスポートファイルはエクスポートユティリティ (ISexport コマンド) で作成されたファイルではありません。

対処

次の対処をした後、再度インポートユティリティ (ISimport コマンド) を実行して

ください。

- -f オプションに正しくエクスポートファイルが格納されているディレクトリの絶対パスを指定してください。ファイル名だけを指定する場合、該当するエクスポートファイルのスプールディレクトリの下にコピーしてください。
- エクスポートユーティリティ (ISexport コマンド) で作成されたエクスポートファイルを指定してください。

K I I S 3 3 7 - W :

環境設定でメール連携、または、配布状態管理機能の使用が設定されていないため、配布状態管理機能は使用できません。

要因

環境設定で「メール連携メールシステム名称」または「文書の配布状態管理機能の使用」が定義されていないため、文書の配布状態管理機能は使用できません。

対処

環境設定で「メール連携メールシステム名称」および「文書の配布状態管理機能の使用」を定義してユーティリティを再実行してください。

K I I S 3 3 8 - W :

環境設定でメール連携が設定されていないため、配布状態管理機能は使用できません。

要因

環境設定で「メール連携メールシステム名称」が定義されていないため、文書の配布状態管理機能は使用できません。

対処

環境設定で「メール連携メールシステム名称」を定義してユーティリティを再実行してください。

K I I S 3 3 9 - W :

文書を登録するフォルダがありません。該当する文書をデフォルトフォルダに登録しました。

文書名称 : X X X 文書 ID : X X X 登録しようとしたフォルダ名称 : X X X

デフォルトフォルダ名 : X X X

要因

配布文書を登録するフォルダが存在しないため、デフォルトフォルダに登録しました。

- 文書名称 : エラーが発生した文書名が表示されます。
- 文書 ID : エラーが発生した文書の文書 ID が表示されます。
- 登録しようとしたフォルダ名称 : 文書を登録しようとしたフォルダ名が表示されます。
- デフォルトフォルダ名 : 文書を登録したデフォルトフォルダ名が表示されます。

対処

登録するフォルダを作成し、該当する文書を移動してください。

K I I S 3 4 0 - E :

メールシステムとの連携でエラーが発生し、3回の再試行を行いました但回復できませんでした。

文書配布受信デーモンを終了します。

要因

メールシステムとの連携でエラーとなりました。再試行による回復ができなかったため、文書配布受信デーモンを終了します。

対処

メールシステムのエラー要因を取り除き、文書配布受信デーモンを再起動してください。

K I I S 3 4 1 - W :

メールシステムが起動されていません。メールシステムの起動により、文書配布受信デーモンの処理を開始します。

要因

メールシステムが起動されていないため、文書配布受信処理を行うことができません。

対処

メールシステムを起動してください。

K I I S 5 0 0 - Q :

該当する文書配布対象グループの配布情報を初期化します。よろしいですか？ (y/n)

要因

文書配布情報の初期化が指定されました。初期化を行うかどうかの確認要求です。

対処

初期化を行う場合は「y」を、初期化を行わない場合は「n」を応答してください。

K I I S 5 0 1 - Q :

該当する文書配布対象グループの不要な配布情報を削除します。

よろしいですか？ (y/n)

要因

文書配布情報の不要な情報の削除が指定されました。

対処

文書配布情報の不要な情報を削除する場合は、「y」を応答してください。削除しない場合は「n」を応答してください。

K I I S 5 0 3 - Q :

入力 X X X 名 (Y Y Y) が登録先サーバの X X X 名 (Y Y Y) と一致していません。

以降の X X X 名を同一の定義と扱い、下位階層の定義を登録しますか？ (y/n)

要因

ルートフォルダまたは、システム文書データベース名が、抽出元サーバ(または指

定した定義)と登録先サーバで一致していません。

- XXX:一致しなかった定義種別が表示されます。
ROOTFOLDER:フォルダ
SYSTEM DOCUMENT DB:システム文書データベース
- YYY:該当する定義名が表示されます。

対処

該当定義を同一定義と定義登録を行う場合は「y」を応答してください。行わない場合は「n」を応答してください。

K I I S 5 0 4 - Q :

該当する文書が XXX 件あります。情報を表示しますか? (y/n)

要因

一覧表示しようとした文書の件数が 100 件以上あります。一覧表示するかどうかの確認メッセージです。

- XXX:文書件数が表示されます。

対処

一覧表示する場合は「y」を応答してください。一覧表示しない場合は「n」を応答してください。

K I I S 5 0 5 - Q :

指定したオブジェクトを削除します。よろしいですか? (y/n)

要因

指定したフォルダ,分類索引または文書データベースを削除するかどうかの確認メッセージです。

対処

削除する場合は「y」を応答してください。削除しない場合は「n」を応答してください。

K I I S 6 0 0 - I :

ユティリティ(XXX)を開始します。

K I I S 6 0 1 - I :

ユティリティ(XXX)を終了します。

K I I S 6 0 2 - I :

Document Manager サーバが異常終了したため,ユティリティ(XXX)を終了します。

要因

Document Manager サーバが異常終了したため,ユティリティを実行できませんでした。要因は,次の形式で表示されます。

- ユティリティ:ユティリティ名称が表示されます。

対処

Document Manager サーバの障害を取り除いた後,再度ユティリティを実行してく

ださい。

K I I S 6 0 3 - I :

ISfsc のフェーズ (X X X) を開始します。

要因

- -t を指定した場合、Document Manager データベースとテキストデータベースの文書の整合を取ります。Document Manager データベースに存在しない文書が、テキストデータベースに存在する場合は、テキストデータベースの文書が削除されます。この場合、メッセージには -t と表示されます。
- -w を指定した場合、文書実体ファイルの文書の状態と、作業領域の文書の状態の整合を取ります。作業領域に文書が存在しないのに文書実体ファイルでは、「作業領域に取り出されている」となっている文書を、「作業領域には存在しない」という状態に変更します。この場合、メッセージには、-w と表示されます。
- -d を指定した場合、オブジェクト管理ファイルの文書の整合を取ります。オブジェクト管理ファイルに存在しない文書が、文書実体格納ファイルに存在する場合は、文書実体格納ファイルの文書が削除されます。この場合、メッセージには -d と表示されます。

なお、-w と -d を同時に指定した場合、メッセージには -wd と表示されます。

K I I S 6 0 4 - I :

ISfsc のフェーズ (X X X) を終了します。

要因

ISfsc のフェーズが終了しました。なお、メッセージには、KIIS603-I で表示されたオプションが表示されます。

対処

このメッセージの前に異常を示すメッセージが表示されている場合は、表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。

異常を示すメッセージが表示されていない場合は、処理は正常に終了しています。

K I I S 6 2 1 - I :

Document Manager データベースの文書配布機能の追加を開始します。

K I I S 6 2 2 - I :

Document Manager データベースの文書配布機能の追加を終了します。

K I I S 6 2 3 - I :

文書配布対象グループ (X X X) を更新しました。

要因

- 文書配布対象グループ：更新した文書配布対象グループが表示されます。

K I I S 6 4 0 - I :

フォルダ (X X X) 下の文書ファイルを圧縮します。

要因

- フォルダ：圧縮対象となるフォルダ名が表示されます。

K I I S 6 4 1 - I :

フォルダ (X X X) 下の文書ファイルを圧縮しました。件数は、X X X 件です。

要因

- フォルダ：圧縮対象となったフォルダ名が表示されます。
- 件数：圧縮された文書数が表示されます。

K I I S 6 4 2 - I :

フォルダ (X X X) 下の文書ファイルを圧縮解除します。

要因

- フォルダ：圧縮解除対象となったフォルダ名が表示されます。

K I I S 6 4 3 - I :

フォルダ (X X X) 下の文書ファイルを圧縮解除しました。件数は、X X X 件です。

要因

- フォルダ：圧縮解除対象となったフォルダ名が表示されます。
- 件数：圧縮解除された文書数が表示されます。

K I I S 6 4 4 - I :

文書実体を (X X X) に移動しました。

要因

- X X X：移動した文書実体ディレクトリ名が表示されます。

K I I S 6 4 5 - I :

文書配布対象グループを作成しました。

K I I S 6 4 6 - I :

文書配布対象グループを削除しました。

K I I S 6 4 7 - I :

ISadmin のフェーズ (X X X) を開始します。

要因

稼働情報収集ユティリティの機能を実行します。

K I I S 6 4 8 - I :

ISadmin のフェーズ (X X X) を終了します。

要因

稼働情報収集ユティリティの機能を終了します。

K I I S 6 4 9 - I :

全文検索サーバに移行対象の文書がありませんでした。

要因

移行対象となる最新バージョンの文書に対するテキストデータが、全文検索サーバに1件も登録されませんでした。

K I I S 6 5 0 - I :

全文検索サーバの移行情報を出力しました。

出力先：X X X

要因

移行対象となる最新バージョンの文書に対する全文検索情報を TS 情報出力ファイルに出力しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 出力先：TS 情報出力ファイルの出力先が絶対パス名で表示されます。

K I I S 6 5 1 - I :

稼働中バックアップモードを設定しました。

K I I S 6 5 2 - I :

稼働中バックアップモードを解除しました。

K I I S 6 5 3 - I :

稼働中バックアップ時の一時退避ファイルを削除しました。

K I I S 6 5 6 - I :

フォルダ階層を移動しました。

移動対象フォルダ：X X X 移動先フォルダ：X X X

要因

フォルダ階層の移動処理が完了しました。

- 移動対象フォルダ：移動対象のフォルダ名称が表示されます。
- 移動先フォルダ：移動先のフォルダ名称が表示されます。

K I I S 6 6 0 - I :

抽出元サーバ定義 (X X X) の抽出を開始しました。

要因

抽出元サーバ定義の抽出を開始しました。

- X X X : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ

VIEW : 分類索引 / 分類

DOCDB : 文書データベース

K I I S 6 6 1 - I :

抽出元サーバ定義 (X X X) の抽出を終了しました。

要因

抽出元サーバ定義の抽出を終了しました。

- X X X : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ

VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

K I I S 6 6 2 - I :

定義ファイルへの定義 (X X X) 出力を開始しました。

要因

定義ファイルへの定義出力を開始しました。

- X X X : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ
VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

K I I S 6 6 3 - I :

定義ファイルへの定義 (X X X) 出力を終了しました。

要因

定義ファイルへの定義出力を終了しました。

- X X X : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ
VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

K I I S 6 6 4 - I :

登録先サーバ定義 (X X X) の取得を開始しました。

要因

登録先サーバ定義の取得を開始しました。

- X X X : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ
VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

K I I S 6 6 5 - I :

登録先サーバ定義 (X X X) の取得を終了しました。

要因

登録先サーバ定義の取得を終了しました。

- X X X : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ
VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

K I I S 6 6 6 - I :

定義 (X X X) の登録を開始しました。

要因

定義の登録を開始しました。

- XXX：定義種別が表示されます。
- FOLDER：フォルダ
- VIEW：分類索引/分類
- DOCDB：文書データベース

K I I S 6 6 7 - I :

定義 (XXX) の登録を終了しました。

要因

定義の登録を終了しました。

- XXX：定義種別が表示されます。
- FOLDER：フォルダ
- VIEW：分類索引/分類
- DOCDB：文書データベース

K I I S 6 6 8 - I :

ユーザID, グループID一括変更ユティリティは正常に終了しました。

K I I S 6 6 9 - I :

ユーザID, グループID一括変更ユティリティは正常に終了しました。[状態：警告]

K I I S 6 7 0 - I :

ユーザID, グループID一括変更ユティリティは正常に終了しました。[状態：異常]

K I I S 6 7 1 - I :

ユーザID, グループID一括変更ユティリティは1回以上の警告を出力し、処理が終了しました。警告の詳細情報に関しては出力ファイルを参照してください。

K I I S 6 7 2 - I :

Server-Scan のキューに、XXX 件登録しました。

要因

Server-Scan のキューに登録された文書数を表示します。

K I I S 6 7 3 - I :

対象リストファイルの記述に不正がありました。

記述不正の行を除いて、ウィルススキャンユティリティは処理を続行しました。

要因

対象リストファイルの記述に不正がありました。

記述不正の行を除いて、ウィルススキャンユティリティは処理を続行しました。

対処

Document Manager 起動時に指定したメッセージ出力先に

出力されたメッセージに従って、障害の要因を取り除いてください。

該当行だけを記述した対象リストファイルを指定して再度実行してください。

K I I S 7 0 0 - E :

続行できない障害が発生したためセッションを異常終了します。

セッション名：XXX 要因：XXX 理由コード：XXX

要因

続行できない障害が発生したため、セッションを異常終了します。要因は、次の形式で表示されます。

- セッション名：セッションを利用しているユーザのユーザ名が表示されます。ただし、セッション名が確定できていない場合は、「*****」またはプロセス名が表示されます。
- 要因：Document Manager サーバの障害箇所を特定する内部保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。

対処

このメッセージの前にメッセージが表示されている場合は、表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。

このメッセージの前にメッセージが表示されていない場合の要因および理由コードについて次に示します。

要因	理由コード	内容	対処
- - ISdi01A1 ISdi0111 ISdi0301 ISdi0401 ISdi7002 ISdof102	13005 14005 14000 14000 14000 14000 14000 13000	次の要因が考えられます。 • 文書実体ファイルとオブジェクトサーバの文書との整合が取れていません。 • 作業領域上のファイルとオブジェクトサーバの文書との整合が取れていません。	文書実体ファイル、オブジェクトサーバの文書および作業領域上のファイルを、同時にバックアップしたファイルと同じ状態に回復した後、再実行してください。
ISrps22 ISrps00	12 -	次の要因が考えられます。 • サーバとクライアントのバージョン・リビジョンの整合が取れていません。 • 通信エラーが発生しています。	バージョン・リビジョンを確認してください。 整合が取れていない場合は、動作できる組み合わせのバージョン・リビジョンのサーバとクライアントを組み込み直してください。または、クライアントのログイン画面で指定するサーバ名称に誤りがないか確認してください。 通信エラーの場合は、システム管理者に連絡してください。
上記以外	-	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 7 0 1 - E :

続行できない障害が発生したため、Document Manager サーバが異常終了します。

要因：XXX 理由コード：XXX

要因

続行できない障害が発生したため、Document Manager サーバを異常終了します。
要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：Document Manager サーバの障害箇所を特定する内部保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。

対処

このメッセージの前にメッセージが表示されている場合は、表示されているメッセージの障害の要因を取り除いてください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 7 0 2 - E :

ユティリティ (X X X) の実行中に障害が発生したため、実行を中止します。

要因：X X X 理由コード：X X X

要因

ユティリティの実行中に障害が発生したため、処理を中止します。障害の発生したユティリティは、メッセージ中に表示されています。また、要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：実行中止となった要因を示します。
 - doc_area：文書実体ファイル (/usr/infoshare/doc)
 - initial_data：サーバ情報管理ファイル (/usr/infoshare/adm)
 - XO...：オブジェクトサーバ
 - IS...：保守情報
 - config：環境定義ファイル内の記述誤り
- 理由コード：原因になったエラー種別が表示されます。障害の発生したユティリティが移行情報出力先ユティリティの場合、無条件に「0」が表示されます。
 - 0：サーバ名が不正
 - 65：データベース名称（スキーマ名称）が不正
 - 83：排他の取得・変更に失敗
 - 4099：services に Document Manager のサービス (infoshare 40005/tcp) の記述がない
 - 14003：入出力エラー
 - 23001：サーバでエラー発生
 - 29011：ファイル名称が不正
 - 29026：ファイルが不正
 - 上記以外：保守情報

対処

障害の要因を取り除いて、再実行してください。

障害の発生したユティリティが移行情報出力ユティリティの場合は、このメッセージの前に出力されたメッセージの要因を取り除いてください。

要因の内容と対処について次に示します。

要因	理由コード	内容	対処
ISusFO A3	-	アドレスユーザ以外が設定されています。	Groupmax Address での設定で Document Manager サーバ用ユーザとして設定した後、ユティリティを再実行してください。
ISvirsnc	4115	Document Manager 管理者ユーザ名が Groupmax Address に登録されていません。	環境定義ファイルに指定された Document Manager 管理者ユーザ名が Groupmax Address に登録されているかどうか確認してください。
	-	-	必要に応じて、システム管理者に連絡してください。
その他	-	-	必要に応じて、システム管理者に連絡してください。

K I I S 7 0 3 - E :

(X X X) の処理に失敗しました。

要因

ISfsck コマンドまたは ISstsidtbl コマンドの実行中にエラーが発生したため、処理を中止しました。

ISfsck コマンドの場合

- 全文検索サーバのテキストデータベースにある不要な文書を削除できませんでした (-t を指定した場合)。この場合、メッセージには -t と表示されます。
- 作業領域に存在しないのに文書実体格納ファイルでは「作業領域に取り出されている」となっている文書を、「作業領域には存在しない」という状態に変更できませんでした (-w を指定した場合)。この場合、メッセージには -w と表示されます。
- 文書実体格納ファイルにある不要な文書を、削除できませんでした (-d を指定した場合)。この場合、メッセージには -d と表示されます。

なお、-w と -d を同時に指定した場合、メッセージには -wd と表示されます。

ISstsidtbl の場合

- TS 文書 ID 変換テーブルの作成に失敗しました。この場合メッセージ中には ISstsidtbl と表示されます。

対処

このメッセージに表示されている障害の要因を取り除いて再実行してください。

K I I S 7 1 0 - E :

バージョンアップユティリティの実行に失敗しました。

要因

バージョンアップユティリティの処理中にエラーが発生したため、処理を中止しました。

対処

表示されているメッセージを参照して障害の要因を取り除き、再度バージョンアップユーティリティを実行してください。

K I I S 8 0 0 - W :

Document Manager サーバが起動されていないため、ユーティリティ (X X X) は実行できません。

要因

Document Manager サーバが起動されていません。

対処

Document Manager サーバ起動後、ユーティリティ (X X X) を実行してください。

K I I S 8 0 1 - W :

入力したパラメタに誤りがあるため、ユーティリティ (X X X) は開始できません。

要因

ユーティリティのパラメタに誤りがあるため、処理を中止しました。開始できなかったユーティリティの名称は、メッセージ中に表示されています。

対処

ユーティリティのパラメタを正しく入力して、再実行してください。

K I I S 8 0 2 - W :

Document Manager 環境は、既に初期化されています。

要因

環境初期化ユーティリティはすでに実行されていますが、再度実行されました。

対処

環境初期化ユーティリティを再実行する場合は、次の手順の後に実行してください。

1. オブジェクトサーバを初期化する
2. Document Manager のファイルを初期化する

K I I S 8 0 3 - W :

環境設定「全文検索機能の使用」に指定されている設定値で、この機能は実行できません。

要因

ファイル整合性ユーティリティ (ISfsck) を -t オプションで実行した場合

- 環境設定ファイルの bib_ts に nouse が指定されているため、-t オプションを実行できません。
- ファイル整合性ユーティリティで -t 以外のオプションを同時に指定している場合は、-t オプションを無視して実行します。

TS 文書 ID 変換テーブルユーティリティ (IStsidtbl) を実行した場合

- 環境設定ファイルの bib_ts に nouse または BIB2 が指定されているため、TS 文書 ID 変換テーブルユーティリティを実行できません。

対処

ファイル整合性ユティリティ (ISfsck) を -t オプションで実行した場合

- 使用する全文検索サーバが Bibliotheca/TS の場合は、BIB (または use) を指定してください。
- 使用する全文検索サーバが Bibliotheca2 TextSearch の場合は、BIB2 を指定してください。

TS 文書 ID 変換テーブルユティリティ (IStsidtbl) を実行した場合

- 使用する全文検索サーバが Bibliotheca/TS の場合は、BIB (または use) を指定してください。
- 使用する全文検索サーバが Bibliotheca2 TextSearch の場合は、TS 文書 ID 変換テーブルユティリティは使用できません

K I I S 8 0 4 - W :

ユティリティ (X X X) とサーバのプログラムのバージョンが一致していません。

要因

ユティリティとサーバのプログラムのバージョンが一致していません。

- X X X : ユティリティ名が表示されます。

対処

サーバのバージョンと一致したユティリティを起動してください。

K I I S 8 0 5 - W :

文書の一括登録処理中に、登録に失敗した文書があります。

要因

文書の一括登録の処理中に、サーバでエラーが発生しました。

対処

スプールディレクトリ下の文書一括登録ユティリティ用出力メッセージファイル (ISregist.msg) またはサーバのコンソールに出力したメッセージを調査して障害の要因を取り除いてください。

K I I S 8 0 6 - W :

データベース名称 (スキーマ名称) が不正か又は既に初期化されています。

既存名称 : X X X 要求名称 : X X X

要因

オブジェクトサーバのスキーマ名称と異なる名称が指定されています。または、すでに環境初期化ユティリティは実行されていますが、再度実行されました。要因は、次の形式で表示されます。

- 既存名称 : すでに登録されているデータベース名称が表示されます。
- 要求名称 : 環境初期化ユティリティで指定したスキーマ名称が表示されます。

対処

正しい名称を指定して再実行してください。または、次の手順で、環境初期化ユティリティを再実行してください。

1. オブジェクトサーバの環境を初期化する。

2. Document Manager の環境を初期化する。

K I I S 8 0 7 - W :

文書配布機能は、既に設定されています。

要因

文書配布機能ユティリティはすでに実行されていますが、再度実行しました。

K I I S 8 0 8 - W :

Document Manager 環境初期化ユティリティが実行されていないため、ユティリティ (X X X) は実行できません。

要因

環境初期化ユティリティが実行されていないため、ユティリティを実行できませんでした。実行できなかったユティリティの名称は、メッセージ中に表示されています。

- X X X : ユティリティ名が表示されます。

対処

環境初期化ユティリティを実行してください。

K I I S 8 1 0 - W :

Y Y Y (Z Z Z) に対応したユーザ情報が見つかりません。未使用ユーザとして Document Manager 管理者名で処理します。

要因 : X X X

要因

情報の削除などが原因で、ユーザ ID , グループ ID に対応したユーザ情報が取得できませんでした。要因は、次の形式で表示されます。

- Y Y Y : ID 種別が表示されます。

UID : ユーザ ID

GID : グループ ID

- Z Z Z : ID 番号が表示されます。
- 要因 : 保守情報が表示されます。

対処

未使用ユーザとして Document Manager 管理者名で処理しているので、必要に応じて Document Manager 管理者名をクライアントの画面から変更してください。また、サーバの作業領域に UID ディレクトリがある場合は削除してください。

K I I S 8 1 1 - W :

作業領域の削除処理で UID (Y Y Y) に対応したユーザ情報が見つかりません。

要因 : X X X

要因

情報の削除などが原因で、ユーザ ID が取得できませんでした。要因は、次の形式で表示されます。

- Y Y Y : ユーザ ID の ID 番号が表示されます。
- 要因 : 保守情報が表示されます。

対処

サーバの作業領域に UID ディレクトリがある場合は削除してください。

K I I S 8 1 2 - W :

連携サーバ設定ファイルに存在しないサーバのサーバ識別子 (X X X) が指定されています。

要因

連携サーバ設定ファイルに存在しない (連携していない) サーバのサーバ識別子が指定されました。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

対処

ユティリティコマンドの配布先サーバの識別子の指定, および連携サーバ設定ファイルの内容を確認して, 連携しているサーバのサーバ識別子を指定して再度実行してください。

K I I S 8 1 3 - W :

文書配布対象グループに追加登録しようとしたサーバ (X X X) は, 指定された文書配布対象グループに既に登録されています。

要因

追加登録しようとしたサーバは, 指定された文書配布対象グループに登録済みです。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

対処

追加しようとしたサーバのサーバ識別子を確認してください。

K I I S 8 1 4 - W :

文書配布対象グループから削除しようとしたサーバ (X X X) は, 指定された文書配布対象グループに登録されていません。

要因

削除しようとしたサーバは, 指定された文書配布対象グループに未登録です。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

対処

削除しようとしたサーバのサーバ識別子を確認してください。

K I I S 8 1 5 - W :

文書配布しようとしたサーバ (X X X) は, 指定された文書配布対象グループに登録されていません。

要因

文書配布しようとしたサーバは, 指定された文書配布対象グループに未登録です。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

対処

文書配布しようとしたサーバのサーバ識別子を確認してください。

K I I S 8 1 6 - W :

配布先サーバの識別子を指定したファイル中で、サーバ (X X X) の指定が重複しています。

要因

文書配布機能のユティリティで指定する配布先サーバの識別子を指定したファイル中で、サーバの指定が重複しています。重複した指定は、単独の指定とみなして処理を行います。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

K I I S 8 1 7 - W :

配布先サーバの識別子 (X X X) の指定が重複しています。

要因

文書配布機能のユティリティで指定する配布先サーバの識別子指定が重複しています。重複した指定は、一つにまとめて処理を行います。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

K I I S 8 1 8 - W :

配布先サーバのメールアドレス ID (X X X) の指定が重複しています。

要因

文書配布機能のユティリティで指定する配布先サーバのメールアドレス ID 指定が重複しています。重複した指定は、一つにまとめて処理を行います。

- X X X : メールアドレス ID が表示されます。

K I I S 8 1 9 - W :

指定された配布先サーバの識別子 (X X X) は、該当する文書配布対象グループの配布情報中に存在しません。

要因

文書配布機能のユティリティで指定する配布先サーバの識別子指定に該当する配布情報が存在しません。

- X X X : サーバ識別子が表示されます。

K I I S 8 2 0 - W :

指定された配布先サーバのメールアドレス ID (X X X) は、該当する文書配布対象グループの配布情報中に存在しません。

要因

文書配布機能のユティリティで指定する配布先サーバのメールアドレス ID 指定に該当する配布情報が存在しません。

- X X X : メールアドレス ID が表示されます。

K I I S 8 3 1 - W :

指定された文書データベースには文書が存在しません。

対処

文書の存在する文書データベースを指定して、再実行してください。

K I I S 8 3 2 - W :

指定された分類索引には文書が存在しません。

対処

文書の存在する分類索引を指定して、再実行してください。

K I I S 8 3 3 - W :

指定されたフォルダには文書が存在しません。

対処

文書の存在するフォルダを指定して、再実行してください。

K I I S 8 5 0 - W :

環境設定で「文書ファイルの圧縮」の指定 (DocCompress) に「use」が設定されていません。

要因

環境設定ファイルの DocCompress (文書ファイル圧縮モード) に「use」が指定されていないため、文書ファイル圧縮ユーティリティが実行できません。

対処

環境設定ファイルの DocCompress (文書ファイル圧縮モード) に「use」を指定して、文書ファイル圧縮ユーティリティを再実行してください。
また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 8 5 1 - W :

パラメタ (-f) で指定されたフォルダが存在しません。

要因

パラメタ (-f) で指定されたフォルダが存在しないため、ユーティリティが実行できません。

対処

パラメタ (-f) にフォルダのオブジェクト ID を指定してユーティリティを再実行してください。

K I I S 8 5 2 - W :

パラメタ (-f) で指定されたオブジェクトは、フォルダではありません。

要因

パラメタ (-f) で指定されたオブジェクトがフォルダではないため、ユーティリティが実行できません。

対処

パラメタ (-f) にフォルダのオブジェクト ID を指定してユーティリティを再実行してください。

K I I S 8 5 3 - W :

指定期日 (YYYYMMDD) のアクセスログがありません。

要因

指定期日のアクセスログがないため、ユティリティを実行できません。

対処

指定期日を見直して再度実行してください。

K I I S 8 5 4 - W :

指定期日 (YYYYMMDD) の全アクセス情報がありません。

要因

指定期日の全アクセス情報がないため、ユティリティを実行できません。

対処

指定期日の全アクセス情報を作成して再度実行してください。

K I I S 8 5 5 - W :

ファイル (X X X) がありません。

要因

必要なファイルがないため、ユティリティを実行できません。

- X X X : ファイル名が表示されます。

対処

必要なファイルを作成して再度実行してください。

K I I S 8 5 6 - W :

ファイル (X X X) が不正です。

要因

必要なファイルが不正なため、ユティリティを実行できません。

- X X X : ファイル名が表示されます。

対処

必要なファイルを再作成して再度実行してください。

K I I S 8 5 7 - W :

稼働中バックアップモードは既に設定されています。

要因

稼働中バックアップモードはすでに設定されています。

K I I S 8 5 8 - W :

複数グループアクセス権機能は既に設定されています。

要因

複数グループアクセス権機能はすでに設定されています。

K I I S 8 6 0 - W :

複数グループアクセス権機能は設定されていません。

要因

複数グループアクセス権機能は設定されていません。

K I I S 8 6 1 - W :

環境設定「ユーザ認証方法」に指定されている設定値で、この機能は実行できません。

要因

環境設定「ユーザ認証方法」の値に "Local" が指定されているため、この機能は実行できません。

対処

ユーザ認証を Groupmax Address サーバとする場合は、環境設定「ユーザ認証方法」の値を "GroupAddress" に変更した後、サーバを再起動して再度ユティリティを実行してください。

ユーザ認証を Groupmax Address サーバとしない場合は、ユティリティの実行は不要です。

K I I S 8 7 0 - W :

ユティリティ (X X X) の実行中に不整合を検出しました。

要因

ユティリティの実行中に不整合を検出しました。

- ユティリティ：ユティリティ名が表示されます。

対処

ユティリティが ISfsck の場合

整合性ログファイルの内容に従って、次のように対処してください。

1. 整合性ログファイルは、スプールディレクトリ下のファイル fsckinf.txt に出力されます。整合性ログファイルには、ユティリティを最後に実行したときの修復情報が出力されます。このファイルには、ユティリティで修復した整合の取れていないオブジェクト（フォルダ、一般文書データベース、一般文書、フォーム文書データベースおよびフォーム文書）の情報が格納されています。ただし、アプリケーションプログラムでユーザが作成した文書実体ファイル自体は修復されません。整合性ログファイルについては、「8.10 ファイルの整合 (ISfsck)」を参照してください。
2. 必要に応じて、不整合が生じた文書を再登録するかまたは削除してください。

ユティリティが ISdirchk の場合

実行結果ログファイルの内容に従って、次のように対処してください。

1. 実行結果ログファイルは、ユティリティ実行時にユーザが指定したファイル、またはスプールディレクトリ下のファイル dirchk.txt に出力されます。実行結果ログファイルには、ユティリティを最後に実行したときの実行結果が格納されています。実行結果ログファイルについては、「8.11 サーバ作業領域のチェック (ISdirchk)」を参照してください。
2. 必要に応じて、ユティリティ (ISstssync) を実行するか、ディレクトリ / ファイルを削除してください。

K I I S 8 7 1 - W :

全文検索情報が不正である文書があります。

ユティリティ名：XXX 文書 ID：XXX TS 情報 ID：XXX TS 文書 ID：XXX

要因

全文検索情報が不正である文書があります。ただし、エラーが発生した文書以外の処理は続行します。要因は、次の形式で表示されます。

- ユティリティ名：不正な文書を見つけたユティリティの名前が表示されます。
- 文書 ID：不正な文書の文書 ID が表示されます。
- TS 情報 ID：不正な文書の TS 情報 ID が表示されます。
- TS 文書 ID：不正な文書の TS 文書 ID が表示されます。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 8 8 0 - W :

入力された定義に誤りがあります。

要因：XXX 行番号：XXX カラム：XXX

要因

入力ファイルの定義の指定に誤りがあります。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：
 - define type invalid：定義種別が不正です。
 - define name length invalid：定義名の長さが不正です。
 - define name invalid：定義名が不正です。
 - define format invalid：定義フォーマットが不正です。
 - attribute value invalid：属性値が不正です。
 - define not specified：定義名がありません。
 - owner name type invalid：所有者名の種別が不正です。
 - owner name length invalid：所有者名が不正です。
 - group type invalid：グループ種別が不正です。
 - group name length invalid：グループ名の長さが不正です。
 - attribute define duplication error：属性定義が重複しています。
- 行番号：不正な行の番号が表示されます。
- カラム：不正なカラム位置が表示されます。

対処

要因に示される誤りを訂正してユティリティを再実行してください。

K I I S 8 8 1 - W :

登録しようとした XXX 定義中のパス (YYY) が、ユニークではありません。

このため、XXX (ZZZ) の作成処理をスキップしました。

要因

登録しようとした定義のパスはユニークでないため、定義を登録できません。

- XXX：定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ
VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

- Y Y Y : ユニークでない定義が表示されます。
- Z Z Z : 指定された定義が表示されます。

対処

登録するサーバの定義をユニークに変更してユティリティを再実行してください。

K I I S 8 8 2 - W :

指定されたオブジェクト ID (X X X) に該当する定義 (Y Y Y) は存在しません。

該当定義の処理をスキップしました。

要因

指定されたオブジェクト ID に対応する定義が存在しません。

- X X X : 指定されたオブジェクト ID が表示されます。
- Y Y Y : 定義種別が表示されます。

FOLDER : フォルダ
VIEW : 分類索引 / 分類
DOCDB : 文書データベース

対処

正しいオブジェクト ID を指定してユティリティを再実行してください。

K I I S 8 8 4 - W :

フォルダ階層数の限界値を越えているため、該当する定義を登録できません。

定義名 (X X X) 行番号 : (Y Y Y)

要因

指定された定義は階層数の限界値を超えています。

- X X X : エラーとなった定義名称が表示されます。
- Y Y Y : 定義の登録機能の場合、エラー行番号が表示されます。定義の複写機能の場合、常に 0 が表示されます。

対処

階層数を限界値内に変更してユティリティを再実行してください。

K I I S 8 8 5 - W :

フォーム文書データベースに文書が登録されていません。

要因

指定されたフォーム文書データベースにフォーム文書が登録されていません。

対処

フォーム文書が登録されているフォーム文書データベースを指定してユティリティを再実行してください。

K I I S 8 8 6 - W :

フォーム文書のデータの一部を切り捨てました。

文書通番：XXX 属性名：XXX

要因

移行前の属性値の長さが移行先の属性の定義長より長いため、超えた部分を切り捨てます。

- 文書通番：フォーム文書の文書通番が表示されます。
- 属性名：データの切り捨てが発生した属性名が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

K I I S 8 8 7 - W :

フォーム文書の添付ファイルの一部が移行できませんでした。

文書通番：XXX

要因

フォーム文書の添付ファイルの移行ができませんでした。

- 文書通番：フォーム文書の文書通番が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されますが表示されず。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 8 8 8 - W :

ユーザID、グループID一括変更ユティリティは不正を検出しましたが、処理を続行します。

タイプ名：XXX オブジェクトID：XXX offset：XXX

関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報1：XXX 付加情報2：XXX

要因

ユーザID・グループID一括変更ユティリティの実行中に不正を検出しましたが、処理を続行します。

- タイプ名：エラーが発生した時のタイプ名が表示されます。
- オブジェクトID：エラーが発生した時のオブジェクトIDが表示されます。
- offset：エラーが発生した時のオブジェクトの先頭から変更する属性までのオフセットが表示されます。
- 変更前ユーザ/グループID：変更前のユーザまたはグループIDが表示されます。
- 変更後ユーザ/グループID：変更後のユーザまたはグループIDが表示されます。
- 関数名：エラーが発生した関数が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報1：エラーが発生した関数のエラーコードが表示されます。
- 付加情報2：エラーが発生した関数のエラーナンバーが表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
45000	オブジェクトサーバの関数でエラーが発生しました。	関数名，付加情報を参照して障害の要因を取り除いてください。
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 8 8 9 - W :

出力ファイルの入出力でエラーが発生しました。

パス名称：X X X 関数名：X X X 理由コード：X X X 付加情報：X X X

要因

出力ファイルの入出力でエラーが発生しました。このメッセージ出力以降は，出力ファイルにメッセージを出力しません。

- パス名称：操作対象の絶対パスが表示されます。
- 関数名：エラーが発生した関数が表示されます。
- 理由コード：エラーが発生した関数のエラーナンバーが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

出力ファイルの出力情報が必要な場合は，バックアップから DocumentManager のファイル，およびオブジェクトサーバファイルを回復し，障害を取り除いた上で，このコマンドを再実行してください。

K I I S 9 0 0 - E :

オブジェクトサーバとの接続時にエラーが発生しました。

理由コード：X X X 付加情報：X X X

要因

オブジェクトサーバとの接続に失敗したため，ユティリティの実行を中止します。

要因は，次の形式で表示されます。

- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：オブジェクトサーバの詳細コードが表示されます。

対処

付加情報の内容についてオブジェクトサーバの詳細コードを調査し，障害の要因を取り除いて再実行してください。

K I I S 9 0 1 - E :

オブジェクトサーバの初期設定パラメタファイルに，Document Manager で使用するエリアが設定されていません。

要因

オブジェクトサーバの初期設定パラメタファイルに Document Manager で使用するユーザ用またはインデクス用エリアが指定されていないため，ユティリティの実行を中止しました。

対処

オブジェクトサーバの初期設定パラメタファイルを確認してください。

K I I S 9 0 2 - E :

メモリ不足が発生しました。

要因：XXX

要因

メモリ不足が発生したため、ユティリティの実行を中止しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：メモリ不足が発生した領域が表示されます。

LOCAL：プロセスローカルのメモリ不足

Groupbase：オブジェクトサーバのメモリ不足

対処

スワップエリアサイズを含めたメモリ所要量を見直してください。

K I I S 9 0 3 - E :

ディスクの容量が不足しました。

要因：XXX

要因

ディスクの容量がいっぱいのため、書き込みができません。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：ディスク容量の不足した領域が表示されます。

doc_area：文書実体ファイル (/usr/infoshare/doc)

initial_data：サーバ情報管理ファイル (/usr/infoshare/adm)

Groupbase：オブジェクトサーバのデータベース

対処

ディスク容量を見直してください。

K I I S 9 0 4 - E :

オブジェクトサーバのデータベースで入出力エラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX

要因

オブジェクトサーバのデータベースにアクセス中、エラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：保守情報
- 理由コード：保守情報

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 0 7 - E :

他のユーザが Document Manager サーバにログインしているため、ユティリティ (XXX) が実行できません。

要因

ユティリティコマンドは Document Manager サーバを占有するため、ログインができません。要因は、次の形式で表示されます。

- ユティリティ：ユティリティ名が表示されます。

対処

ほかのユーザがすべてログアウトした後、再度ユティリティを再実行してください。

K I I S 9 0 8 - E :

アプリケーション情報が AP 情報管理ファイルにないか、または AP 情報管理ファイルの情報取得時にエラーが発生したためユティリティ (X X X) の実行を中止します。

アプリケーション ID : X X X

要因

AP 識別子が AP 情報管理ファイルに定義されていないか AP 情報管理ファイルの情報取得時にエラーが発生しました。ユティリティの実行を中止します。要因は、次の形式で表示されます。

- ユティリティ：ユティリティ名が表示されます。
- アプリケーション ID：エラーが発生した AP 情報管理ファイルの AP 識別子が表示されます。

対処

このメッセージの前にメッセージが表示されている場合は、表示されているメッセージの障害を取り除いてください。

メッセージが表示されていない場合は、アプリケーション情報を AP 情報管理ファイルに定義してください。

K I I S 9 0 9 - E :

ユーザ情報更新中にエラーが発生しました。

要因：X X X ファイル名：X X X レコード番号：X X X 付加情報：X X X

要因

ユティリティでユーザ情報更新中にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：エラーが発生した要因が表示されます。
- ファイル名：エラー発生時に処理していたファイル名が表示されます。
- レコード番号：ファイルの中でエラーの発生した行番号が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

要因を基に障害を取り除きユティリティを再実行してください。

K I I S 9 1 0 - E :

サーバが起動されているため処理を中止します。

要因：X X X

要因

サーバが起動されているため、環境初期化ユティリティ、文書配布用環境初期化ユティリティまたは移行情報出力ユティリティが実行できません。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：処理の中止の要因となったサーバが表示されます。
 - server：Document Manager サーバ
 - send：文書配布送信サーバ
 - receive：文書配布受信サーバ

対処

環境初期化ユティリティ、文書配布用環境初期化ユティリティまたは移行情報出力ユティリティの実行が必要な場合は、処理の中止の要因となったサーバを停止してから、再実行してください。

K I I S 9 2 0 - E :

パラメタファイル名 X X X のオープンに失敗しました。

要因：X X X

要因

パラメタ（パラメタファイル名 X X X）のオープンに失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：エラーが発生した要因が表示されます。

対処

パラメタファイルの名称、格納場所、アクセス権を調査し、要因を取り除いた後で再実行してください。

K I I S 9 2 1 - E :

パラメタが不正です。X X X 行目

要因：X X X

要因

パラメタが不正です。要因は、次の形式で表示されます。

- X X X：不正のあるパラメタ行数が表示されます。

対処

不正の要因を取り除いて、再実行してください。

K I I S 9 3 1 - E :

オブジェクトサーバでエラーが発生しました。

X X X - (Y Y Y , n n n)

要因

オブジェクトサーバでエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- X X X：エラーが発生したファイル名が表示されます。
- Y Y Y：エラーコードが表示されます。

- n n n : エラー番号が表示されます。

対処

オブジェクトサーバのエラーの要因を取り除いた後、バックアップからデータベースを回復して、再実行してください。

K I I S 9 3 2 - E :

サーバ情報管理ファイル X X X のオープンに失敗しました。

要因 : X X X

要因

サーバ情報管理ファイルのオープンに失敗しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因 : エラーが発生した要因が表示されます。

対処

Document Manager データベース、メッセージ内容を保存して、システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 4 1 - E :

指定された文書配布対象グループは存在しません。

対処

正しい文書配布対象グループを指定して、再実行してください。

K I I S 9 4 2 - E :

指定された文書データベースは存在しません。

対処

正しい文書データベースを指定して、再実行してください。

K I I S 9 4 3 - E :

指定された分類索引またはフォルダは存在しません。

対処

正しい分類索引またはフォルダを指定して、再実行してください。

K I I S 9 4 4 - E :

文書配布対象グループの更新処理でエラーが発生しました。

関数名 : X X X 理由コード : X X X 付加情報 : X X X

要因

文書配布対象グループの更新処理でエラーが発生しました。要因は次の形式で表示されます。

- 関数名 : エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード : 理由コードが表示されます。
- 付加情報 : 保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
4066	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して、サーバの資源を確保してから、再実行してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
4184	環境設定のメール連携メールシステム名称が nouse にもかかわらず、-s オプションを指定してユティリティが実行されました。	文書配布機能で Groupmax Mail を使用しない場合は、-s オプションを指定しないでください。Groupmax Mail を使用する場合は、環境設定のメール連携メールシステム名称に「GroupMail」を指定して、サーバを再起動した後に再実行してください。
4198	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能の実行環境を作成後、再実行してください。
4202	サーバ情報一覧が存在しません。	サーバ情報一覧を作成後、再度ユティリティを実行してください。
その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 4 5 - E :

文書配布対象グループの指定に誤りがあります。

対処

正しい文書配布対象グループを指定して、再実行してください。

K I I S 9 4 6 - E :

オブジェクト ID の指定に誤りがあります。

対処

正しいオブジェクト ID を指定して、ユティリティを再実行してください。

K I I S 9 4 7 - E :

文書配布対象グループの作成処理でエラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

文書配布対象グループの作成処理でエラーが発生したため、ユティリティの実行を中止しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
4066	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して、サーバの資源を確保してから、再実行してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
4184	環境設定のメール連携メールシステム名称が nouse にもかかわらず、-s オプションを指定してユティリティが実行されました。	文書配布機能で Groupmax Mail を使用しない場合は、-s オプションを指定しないでください。Groupmax Mail を使用する場合は、環境設定のメール連携メールシステム名称に「GroupMail」を指定して、サーバを再起動した後に再実行してください。
4198	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能の実行環境を作成後、再実行してください。
4202	サーバ情報一覧が存在しません。	サーバ情報一覧を作成後、再度ユティリティを実行してください。
その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 4 8 - E :

文書実体の移動に失敗しました。

要因：X X X

要因

文書実体の移動に失敗しました。ユティリティの処理を中止します。要因は、次の形式で表示されます。

- 要因：文書実体の移動に失敗した要因が表示されます。

対処

要因コードの内容と対処について次に示します。ただし、要因コード 7 は複数の要因を含んでいるので、対処も内容ごとに分類して表示します。

要因コード	内容	対処
7	指定したフォルダが存在しません。	パラメタに指定したフォルダのオブジェクト ID が正しいか見直してください。
	変更先の文書格納ディレクトリが不正です。	パラメタに指定した移動先ディレクトリが存在しないか、またはパス名の長さが正しいかを見直してください。 なお、パラメタに指定するパス名の長さは 64 バイト以下にしてください。
	サーバのメモリ不足で実行できません。	スワップエリアサイズを含めたメモリ容量を見直してください。

要因コード	内容	対処
	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
その他	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 4 9 - E :

オブジェクト操作時に予期しないエラーが発生しました。

ユティリティ名：XXX オブジェクト ID：XXX 関数名：XXX 位置コード：XXX

理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

オブジェクトサーバ操作時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- ユティリティ名：エラーの発生したユティリティの名前が表示されます。
- オブジェクト ID：操作対象オブジェクトのオブジェクト ID が表示されます。
- 関数名：保守情報が表示されます。
- 位置コード：保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 5 0 - E :

ファイルの入出力時にエラーが発生しました。

ユティリティ名：XXX パス名：XXX 関数名：XXX

理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

ファイルの入出力時にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- ユティリティ名：エラーの発生したユティリティの名前が表示されます。
- パス名：操作対象の絶対パス名が表示されます。
- 関数名：保守情報が表示されます。
- 理由コード：保守情報が表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 5 1 - E :

Address との連携でエラーが発生しました。

ユティリティ名：XXX 関数名：XXX Address 情報 ID：XXX 詳細コード：XXX

要因

Groupmax Address ライブラリをコールしたときに、エラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- ユティリティ名：エラーの発生したユティリティの名前が表示されます。
- 関数名：エラーとなった Groupmax Address の関数名が表示されます。
- Address 情報 ID：Groupmax Address のエラーコードが表示されます。
- 詳細コード：Groupmax Address の詳細情報が表示されます。

対処

関数名および Address 情報 ID の内容と対処について示します。

関数名	Address 情報 ID	内容	対処
GSSGetUserInfoByUID2	1	次の要因が考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> • TCP/IP の環境が不正です。 • 連携サーバの Groupmax Address が起動されていません。 	要因に応じて、次のどちらかの対処を実施してください。 <ul style="list-style-type: none"> • TCP/IP の環境を見直してください。 • Groupmax Address を起動してください。
	2	連携サーバに出力されているメッセージを参照してください。	メッセージの障害を取り除いてから、再実行してください。
	その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 5 2 - E :

エクスポートファイルの作成、または、文書の配布処理でエラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

エクスポートファイルの作成、または文書の配布処理でエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバのメモリ不足で実行できません。	スワップエリアサイズを含めたメモリ容量を見直してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 5 3 - E :

サーバ指定数が制限値（250 サーバ）を超えました。

要因

サーバの指定数が 250 を超えています。251 以上のサーバは指定できません。

対処

ユティリティコマンドの配布先サーバの識別子指定，および連携サーバ設定ファイルを確認して再実行してください。

K I I S 9 5 4 - E :

指定されたエクスポートファイルは存在しません。

要因

指定された配布回数のエクスポートファイルは存在しません。

対処

正しい配布回数を指定して，ユティリティを再実行してください。

K I I S 9 5 5 - E :

連携サーバ情報の取得でエラーが発生しました。

関数名：X X X 理由コード：X X X 付加情報：X X X

要因

連携サーバ情報の取得でエラーが発生したため，ユティリティの実行を中止しました。要因は，次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
4066	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して，サーバの資源を確保した後，再実行してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
4184	環境設定のメール連携メールシステム名称が nouse にもかかわらず，-s オプションを指定してユティリティが実行されました。	文書配布機能で Groupmax Mail を使用しない場合は，-s オプションを指定しないでください。Groupmax Mail を使用する場合は，環境設定のメール連携メールシステム名称に「GroupMail」を指定し，サーバを再起動した後に再実行してください。
4198	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能の実行環境を作成後，再実行してください。

理由コード	内容	対処
4202	サーバ情報一覧が存在しません。	サーバ情報一覧を作成後、再度、ユティリティを実行してください。
その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 5 6 - E :

文書配布対象グループ情報の取得でエラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

文書配布対象グループ情報の取得でエラーが発生したため、ユティリティの実行を中止しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
4066	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して、サーバの資源を確保した後、再実行してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
4184	環境設定のメール連携メールシステム名称が nouse にもかかわらず、-s オプションを指定してユティリティが実行されました。	文書配布機能で Groupmax Mail を使用しない場合は、-s オプションを指定しないでください。Groupmax Mail を使用する場合は、環境設定のメール連携メールシステム名称に「GroupMail」を指定し、サーバを再起動した後に再実行してください。
4198	文書配布機能の実行環境が作成されていません。	文書配布機能の実行環境を作成後、再実行してください。
4202	サーバ情報一覧が存在しません。	サーバ情報一覧を作成後、再度、ユティリティを実行してください。
その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 5 7 - E :

文書配布対象グループから削除されたサーバに対して、文書の再配布を行なうことはできません。

要因

文書配布対象グループから削除されたサーバに対して、文書の再配布を行うことは

できません。

対処

必要に応じてサーバ追加機能で文書を配布してください。

K I I S 9 5 8 - E :

該当する配布回数の配布情報は存在しません。

要因

指定された配布回数の配布情報は存在しません。配布回数を省略している場合は、該当する文書配布対象グループに対する配布が行われていない状態です。

対処

必要に応じて文書を配布してください。

K I I S 9 5 9 - E :

ファイル指定に誤りがあります。

要因

ファイルの指定に誤りがあります。ファイル指定が長過ぎる、またはディレクトリを指定していることが考えられます。

対処

ファイル指定を確認、訂正した後、再度ユティリティを実行してください。

K I I S 9 6 0 - E :

入力となる定義が不正なため、定義登録処理を中断しました。

要因

入力となる定義が正しくありません。

対処

不正な定義を訂正して再実行してください。

K I I S 9 6 1 - E :

入力となる定義が実行可能な定義階層数の最大値（64）を越えているため、処理を続行出来ません。

要因

入力となる定義の階層が64階層を超えています。

対処

定義階層を64階層以内にして再実行してください。

K I I S 9 6 2 - E :

フォーム文書のエクスポート処理でエラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX

要因

フォーム文書のエクスポート処理中にエラーが発生しました。要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
4066	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して、サーバの資源を確保した後、再実行してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 6 3 - E :

フォーム文書のインポート処理でエラーが発生しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX

要因

フォーム文書のインポート処理中にエラーが発生しました。

要因は、次の形式で表示されます。

- 関数名：エラーの発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：理由コードが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コードの内容と対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
4060	サーバの実行に必要なメモリが確保できませんでした。	サーバのメモリを消費しているプロセスを終了して再実行してください。
4066	サーバの資源が不足しています。	サーバに出力されているメッセージを確認して、サーバの資源を確保した後、再実行してください。
4068	サーバの容量不足で実行できません。	ファイルシステムの容量を見直してください。
その他	このコードは保守情報です。	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 6 4 - E :

指定されたディレクトリが空ではありません。

パス名称：XXX

要因

パラメタ (-d) で指定されたディレクトリが空ではありません。

対処

空のディレクトリを指定して、再度ユティリティを実行してください。

K I I S 9 6 5 - E :

指定されたフォーム文書データベースは存在しません。

フォーム文書データベース名称 : X X X

要因

パラメタ (-f) で指定したフォーム文書データベースは存在しません。

対処

存在するフォーム文書データベースを指定して、再度ユティリティを実行してください。

K I I S 9 6 6 - E :

フォーム文書移行情報の内容が正しくありません。

ファイル名 : X X X 要因 : X X X レコード番号 : X X X 付加情報 : X X X

要因

フォーム文書移行情報の内容が正しくありません。

- ファイル名 : フォーム文書移行情報ファイル名称
- 要因 : 障害の要因が表示されます。
- レコード番号 : エラーが発生した行番号が表示されます。要因が NOFILE , NORECORD の場合は行番号に「0」が表示されます。
- 付加情報 : 要因が INVALIDATTRVALUE の場合、エラーが発生した属性名称が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

エラーが発生した行の定義を修正して、再度ユティリティを実行してください。

要因	内容	対処
NOFILE	フォーム文書移行情報ファイルがありません。	フォーム文書移行情報ファイルが存在するディレクトリを指定して、再実行してください。
NORECORD	フォーム文書移行情報ファイルに情報がありません。	ISexform コマンドで出力したフォーム文書移行情報ファイルを指定して、再実行してください。
DOCNUMBER	最大文書通番情報が不正です。	フォーム文書移行情報ファイルの最大文書通番情報が不正に書き換えられました。システム管理者に連絡してください。
INVALIDATTRVALUE	フォーム文書の属性値が不正です。	フォーム文書移行情報ファイルの属性値情報を不正に書き換えられました。システム管理者に連絡してください。

要因	内容	対処
INVALIDFORMAT	フォーム文書移行情報ファイルのフォーマットが不正です。	フォーム文書移行情報ファイルの形式を不正に書き換えられました。システム管理者に連絡してください。
INVALIDRECORDSIZE	フォーム文書移行情報ファイルのレコード長が不正です。	フォーム文書移行情報ファイルの形式を不正に書き換えられました。システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 6 7 - E :

インポート先のフォーム文書データベースの定義が正しくありません。

要因：XXX 定義名：XXX

要因

インポート先のフォーム文書データベースの定義が正しくありません。

- 要因：障害の要因が表示されます。
- 定義名：エラーが発生した定義名称が表示されます。

対処

要因の内容と対処について次に示します。

エラーが発生した行の定義を修正して、ユティリティを再実行してください。

要因	内容	対処
INVALIDATTRTYPE	属性の型が一致しません。	移行元と移行先の属性名と属性型を合わせて再実行してください。
NOATTR	属性名が存在しません。	インポート先のフォーム文書データベースの属性定義にエラーの発生した属性を定義して、再実行してください。
NOFORM	フォーム定義が存在しません。	インポート先のフォーム文書データベースのフォーム定義にエラーの発生したフォーム定義を定義して、再実行してください。

K I I S 9 6 8 - E :

フォルダ階層の移動時にエラーが発生しました。

理由コード：XXX

要因

フォルダ階層の移動処理でエラーが発生したため、ユティリティを中止します。要因は、次の形式で表示されます。

- 理由コード：フォルダ階層の移動処理のエラーコードが表示されます。

対処

理由コードと対処について次に示します。

理由コード	内容	対処
4042	移動先に指定したフォルダは移動対象に指定したフォルダの下位階層に存在するか、または移動対象と移動先のフォルダが同じです。	移動対象または移動先に指定したフォルダを確認してください。
4060	メモリ不足が発生しました。	メモリ所要量を見直してください。
4064	移動対象または移動先に指定されたフォルダが存在しません。	移動対象または移動先に指定したフォルダを確認してください。
4078	移動対象に指定された識別子に対応するオブジェクトはフォルダではありません。	移動対象に指定したフォルダを確認してください。
4215	移動先に指定された識別子に対応するオブジェクトはフォルダではありません。	移動先に指定したフォルダを確認してください。
4217	移動対象に指定したフォルダはルートフォルダまたはデフォルトフォルダです。	ルートフォルダとデフォルトフォルダは移動できません。
4219	生成可能なフォルダ階層数を超えました。	生成可能なフォルダ階層数に達しない範囲でフォルダを指定してください。
その他	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 6 9 - E :

作業領域の UID に対応したユーザ情報でエラーが発生しました。

パス名称 : X X X 変更パス名称 : X X X 関数名 : X X X

理由コード : X X X 付加情報 : X X X

要因

作業領域の UID に対応したユーザ情報でエラーが発生しました。

- パス名称 : 操作対象の絶対パスが表示されます。
- 変更パス名称 : 変更する絶対パスが表示されます。
- 関数名 : エラーが発生した関数名が表示されます。
- 理由コード : エラーが発生した関数のエラーナンバーが表示されます。
- 付加情報 : 保守情報が表示されます。

対処

関数名, 理由コードを参照して障害の要因を取り除いて再実行してください。また, 必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 9 7 0 - E :

Y Y Y マッピングファイルのオープンに失敗しました。

パス名称 : X X X 関数名 : X X X 理由コード : X X X 付加情報 : X X X

要因

マッピングファイルのオープンに失敗しました。

- Y Y Y : 「UserID」または「GroupID」が表示されます。

UserID：ユーザ情報マッピングファイル

GroupID：グループ情報マッピングファイル

- パス名称：操作対象の絶対パスが表示されます。
- 関数名：エラーが発生した関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーが発生した関数のエラーナンバーが表示されます。
- 付加情報：保守情報が表示されます。

対処

理由コード	内容	対処
2	指定したファイルが存在しません。	マッピングファイルの指定先が正しいか確認してください。
上記以外	-	障害の要因を取り除いてください。必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 9 7 2 - E :

Y Y Y マッピングファイルの記述が間違っています。X X X 行目

要因

- X X X 行目のマッピングファイルの記述が間違っています。
- X X X：行番号が表示されます。
- Y Y Y：「UserID」または「GroupID」が表示されます。

UserID：ユーザ情報マッピングファイル

GroupID：グループ情報マッピングファイル

対処

不正の要因を取り除いて、再実行してください。

K I I S 9 7 3 - E :

バックアップから Document Manager のファイル，及びオブジェクトサーバファイルを回復し，障害を取り除いた上で，本コマンドを再実行してください。

要因

Document Manager のファイル，またはオブジェクトサーバのファイル内でエラーが発生しました。

対処

バックアップから Document Manager のファイル，およびオブジェクトサーバのファイルを回復し，障害を取り除いた上で，このコマンドを再実行してください。

K I I S 9 7 4 - E :

ユーザ ID・グループ ID 一括変更ユティリティ実行中に障害が発生したため，処理を中止します。

タイプ名：X X X 属性名：X X X 関数名：X X X 理由コード：X X X

付加情報 1：X X X 付加情報 2：X X X

要因

ユーザ ID・グループ ID 一括変更ユティリティの実行中に障害が発生したため、処理を中止します。

- ・タイプ名：エラーが発生した時のタイプ名が表示されます。
- ・属性名：エラーが発生した属性名が表示されます。
- ・関数名：エラーが発生した関数名が表示されます。
- ・理由コード：保守情報が表示されます。
- ・付加情報 1：エラーが発生した関数のエラーコードが表示されます。
- ・付加情報 2：エラーが発生した関数のエラーナンバーが表示されます。

対処

理由コード	内容	対処
45000	オブジェクトサーバの関数でエラーが発生しました。	関数名、付加情報を参照して障害の要因を取り除いてください。
上記以外	-	システム管理者に連絡してください。

K I I S 9 7 5 - E :

文書再配布のクラスの取得に失敗しました。

要因：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX 付加情報：XXX

要因

文書再配布のクラスの取得に失敗しました。

- ・要因：次の要因が表示されます。

要因	内容
Initial_data	サーバ情報管理ファイル (/usr/infoshare/adm/is.init) が不正です。

- ・関数名：エラーが発生した関数名が表示されます。
- ・理由コード：保守情報が表示されます。
- ・付加情報：保守情報が表示されます。

対処

バックアップからサーバ情報管理ファイルを回復し、このコマンドを再実行してください。必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 9 7 6 - E :

管理者ユーザ名の名称長が 8 バイトを超えているため、処理を中止します。

要因

Document Manager 管理者ユーザ名の名称長が 8 バイトを超えているため、処理を中止します。

対処

環境設定ファイルの Document Manager 管理者ユーザ名を 8 バイト以内で設定してください。

K I I S 2 0 0 1 - I :

テキスト自動抽出サーバが開始しました。付加情報：X X X

要因

テキスト自動抽出サーバのサービスを開始しました。

- 付加情報：サービス開始情報が表示されます。

K I I S 2 0 0 2 - I :

テキスト自動抽出サーバが終了しました。

要因

テキスト自動抽出サーバのサービスを終了しました。

K I I S 2 0 0 3 - I :

抽出サーバアクセスログファイルが一杯になったため、バックアップ用ファイルにバックアップを取得します。

K I I S 2 0 0 4 - I :

抽出サーバアクセスログファイルの使用量が X X % を超えました。バックアップ用ファイルに必要なログが残っている場合は、退避してください。

要因

抽出サーバアクセスログファイルの使用量がメッセージ中に表示している使用率を超えました。使用率が 80%、90%、95%、99% を超えたときにこのメッセージを出力します。

対処

抽出サーバアクセスログファイルがいっぱいになると、古いバックアップファイルを消去して、新しいバックアップファイルを作成するため、バックアップファイルに必要なログ情報が残っている場合は、退避してください。

K I I S 2 1 0 1 - W :

レジストリよりポート番号の取得に失敗しました。付加情報：X X X

要因

レジストリからのポート番号の取得に失敗しましたが、ポート番号をデフォルト値 (22289) として、処理を続行します。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

K I I S 2 1 0 2 - W :

ファイルの削除に失敗しました。付加情報 1：X X X 付加情報 2：X X X

要因

DeleteFile() 関数でファイルの削除に失敗しました。

- 付加情報 1：ファイル名：抽出処理時のモードが表示されます。
- 付加情報 2：エラー情報が表示されます。

K I I S 2 1 0 4 - W :

テキストファイルの自動抽出処理でタイムアウトが発生しました。付加情報：XXX

要因

テキストファイルの自動抽出処理でタイムアウトが発生しました。

- 付加情報：「文書実体のファイル名：抽出処理時のモード」が表示されます。

対処

- テキスト自動抽出機能の対象外の文書を登録した可能性があります。この場合、テキストファイルを手動で生成して登録してください。
- テキストファイル自動抽出機能の対象ファイルの場合、テキスト自動抽出に時間が掛かっている可能性があります。タイムアウト値を見直してください。タイムアウト値を変更後、再登録してもこのメッセージを出力する場合は、システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 1 0 5 - W :

レジストリよりフィルター種別の取得に失敗しました。付加情報：XXX

要因

レジストリからフィルター種別の取得に失敗しましたが、処理を続行します。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

繰り返しこのメッセージが出力される場合、レジストリが壊れている可能性があるため、テキスト自動抽出サーバを再インストールしてください。

K I I S 2 1 0 6 - W :

スレッドの終了処理が失敗しました。付加情報：XXX

要因

テキスト自動抽出サーバの終了時にスレッドの終了処理に失敗しましたが、処理を続行します。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

K I I S 2 1 0 7 - W :

抽出サーバアクセスログファイルのバックアップファイルへの変更に失敗しました。

関数名：XXX 理由コード：XXX

ファイル名(変更前): XXX ファイル名(変更後): XXX

要因

抽出サーバアクセスログファイルのバックアップファイルへの変更に失敗しましたが、処理を続行します。

- 関数名：エラーとなった関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。
- ファイル名(変更前): 変更前のファイル名が表示されます。
- ファイル名(変更後): 変更後のファイル名が表示されます。

K I I S 2 1 0 8 - W :

getservbyname() 関数でエラーが発生しました。付加情報：%1

要因

getservbyname() 関数でエラーが発生しましたが、処理を続行します。

- 付加情報：エラー情報

対処

KIIS2001-I のメッセージで表示されたサービスのポート番号を変更する必要がある場合、障害の要因を取り除いて、再起動してください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 1 - E :

RegisterServiceCtrlHandler() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

RegisterServiceCtrlHandler() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 2 - E :

サービスの停止処理に失敗しました。付加情報：X X X

要因

サービスの停止処理に失敗しました。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 3 - E :

通信処理に失敗したため、サービスを停止しました。付加情報：X X X

要因

通信処理に失敗したため、サービスを停止しました。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 4 - E :

SetServiceStatus() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

SetServiceStatus() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 5 - E :

サービスの開始処理に失敗しました。付加情報：X X X

要因

- サービスの開始処理に失敗しました。
- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 6 - E :

SetEvent() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

- SetEvent() 関数でエラーが発生しました。
- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 7 - E :

socket() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

- socket() 関数でエラーが発生しました。
- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 8 - E :

CreateEvent() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

- CreateEvent() 関数でエラーが発生しました。
- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 0 9 - E :

_beginthreadex() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

- _beginthreadex() 関数でエラーが発生しました。
- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 0 - E :

CreateProcess() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

CreateProcess() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 1 - E :

WaitForMultipleObjects() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

WaitForMultipleObjects() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 2 - E :

TerminateProcess() 関数でエラーが発生しました。付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

TerminateProcess() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 3 - E :

setsockopt() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

setsockopt() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 4 - E :

bind() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

bind() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 5 - E :

listen() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

listen() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 6 - E :

accept() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

accept() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 7 - E :

WSAStartup() 関数でエラーが発生しました。付加情報 : X X X

要因

WSAStartup() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 8 - E :

Document Manager サーバからの要求の受信に失敗しました。付加情報 : X X X

要因

Document Manager サーバからの要求の受信に失敗しました。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 1 9 - E :

Document Manager サーバへのエラー情報の送信に失敗しました。

付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

Document Manager サーバへのエラー情報の送信に失敗しました。

- 付加情報 1 : 文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモードが表示されます。

- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 2 0 - E :

Document Manager サーバへのタイムアウト情報の送信に失敗しました。

付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

Document Manager サーバへのタイムアウト情報の送信に失敗しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

テキスト自動抽出機能の対象外の文書を送信された可能性があります。この場合、テキストファイルを手動で生成して登録してください。

テキストファイル自動抽出機能の対象ファイルの場合、テキスト自動抽出に時間が掛かっている可能性があります。タイムアウト値を見直してください。タイムアウト値を変更後、再登録してもこのメッセージを出力する場合は、システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 2 1 - E :

Document Manager サーバから文書実体ファイルの受信に失敗しました。

付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

Document Manager サーバから文書実体ファイルの受信に失敗しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 2 2 - E :

Document Manager サーバへのテキストファイルの送信に失敗しました。

付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

Document Manager サーバへのテキストファイルの送信に失敗しました。

- 付加情報 1 : 「テキストファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 2 3 - E :

Document Manager サーバへのテキスト抽出処理完了通知の送信に失敗しました。

付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

Document Manager サーバへのテキスト抽出処理完了通知の送信に失敗しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 2 4 - E :

Document Filter for Text Search がインストールされていません。付加情報 : X X X

要因

Document Filter for Text Search がインストールされていないため、処理を続行できません。

- 付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

Document Filter for Text Search をインストールして再実行してください。

K I I S 2 2 2 7 - E :

レジストリより環境設定情報の取得に失敗しました。付加情報 : X X X

要因

レジストリからの環境設定情報の取得に失敗しました。

付加情報 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 2 8 - E :

レジストリに設定されたフィルター種別が不正です。

要因

レジストリに設定されたフィルター種別が不正です。

対処

テキスト自動抽出サーバを再インストールしてください。

K I I S 2 2 2 9 - E :

レジストリに設定されたポート番号が不正です。

要因

レジストリに設定されたポート番号が不正なため、処理を続行できません。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 0 - E :

テキスト抽出プロセスの終了コードの取得に失敗しました。

付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

テキスト抽出プロセスの終了コードの取得に失敗しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

エラー情報に従って対処してください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 1 - E :

パイプ名の作成が失敗しました。付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

パイプ名の作成処理が失敗したため、処理を続行できません。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 2 - E :

CreateNamedPipe() 関数でエラーが発生しました。付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

CreateNamedPipe() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 5 - E :

テキスト自動抽出サーバが異常終了しました。付加情報 1 : X X X 付加情報 2 : X X X

要因

テキスト自動抽出サーバが異常終了しました。

- 付加情報 1 : 「文書実体のファイル名 : 抽出処理時のモード」が表示されます。
- 付加情報 2 : エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 6 - E :

Document Filter for Text Search のローディング時に環境変数の操作に失敗しました。

付加情報 : X X X

要因

Document Filter for Text Search のローディング時に環境変数の操作に失敗しました。

- 付加情報：関数名が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 7 - E :

メモリ不足が発生しました。サイズ：X X X

要因

メモリ不足が発生しました。

- サイズ：確保しようとしたサイズが表示されます。

対処

メモリ所要量を見直してください。

K I I S 2 2 3 8 - E :

GetCurrentDirectory() 関数でエラーが発生しました。付加情報：X X X

要因

GetCurrentDirectory() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 3 9 - E :

LoadLibrary() 関数でエラーが発生しました。付加情報 1：X X X 付加情報 2：X X X

要因

LoadLibrary() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 1：関数に指定した実行可能モジュール名称が表示されます。
- 付加情報 2：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 0 - E :

GetProcAddress() 関数でエラーが発生しました。付加情報 1：X X X 付加情報 2：X X X

要因

GetProcAddress() 関数でエラーが発生しました。

- 付加情報 1：関数に指定した実行可能モジュール名称，関数名が表示されます。
- 付加情報 2：エラー情報が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 1 - E :

Document Filter for Text Search のライブラリのロード時にエラーが発生しました。

付加情報 : X X X

要因

Document Filter for Text Search のライブラリのロード時にエラーが発生しました。

- 付加情報 : 関数名が表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 2 - E :

テキスト抽出プロセスでパラメタ不正が発生しました。

要因

テキスト抽出プロセスでパラメタ不正が発生しました。

対処

システム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 3 - E :

fopen() 関数でエラーが発生しました。理由コード : X X X

要因

fopen() 関数でエラーが発生しました。

- 理由コード : エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。詳細については、「付録 I.5 システムコールのリターンコード (errno)」を参照してください。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 4 - E :

open() 関数でエラーが発生しました。理由コード : X X X

要因

open() 関数でエラーが発生しました。

- 理由コード : エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。詳細については、「付録 I.5 システムコールのリターンコード (errno)」を参照してください。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 5 - E :

Document Filter for Text Search とのインタフェースでエラーが発生しました。

関数名 : X X X 理由コード : X X X 詳細コード : X X X

要因

Document Filter for Text Search とのインタフェースでエラーが発生しました。

- 関数名：関数名が表示されます。
- 理由コード：エラー情報が表示されます。
- 詳細コード：Document Filter for Text Search のリターンコードが表示されます。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 6 - E :

ファイルシステムの容量が一杯です。

パス名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

要因

ファイルシステムの容量がいっぱいです。

- パス名：パス名が表示されます。
- 関数名：関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。詳細については、「付録 I.5 システムコールのリターンコード (errno)」を参照してください。

対処

表示されたパスのファイルシステムの容量を見直してください。また、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 7 - E :

ファイルシステムに入出力エラーが発生しました。

パス名：XXX 関数名：XXX 理由コード：XXX

要因

ファイルシステムに入出力エラーが発生しました。

- パス名：パス名が表示されます。
- 関数名：関数名が表示されます。
- 理由コード：エラーとなったシステムコールのリターンコード (errno) が表示されます。詳細については、「付録 I.5 システムコールのリターンコード (errno)」を参照してください。

対処

表示されたパスのファイルまたはディレクトリを確認して、必要に応じてバックアップから回復するか、またはシステム管理者に連絡してください。

K I I S 2 2 4 8 - E :

通信設定ファイルに設定されたポート番号が不正です。

要因

通信設定ファイルに設定されたポート番号が不正なため、処理を続行できません。

対処

障害の要因を取り除いて、必要に応じてシステム管理者に連絡してください。

付録I.4 オブジェクトサーバの詳細コード

オブジェクトサーバの詳細コードは、Document Manager のメッセージに表示されるコードです。オブジェクトサーバの詳細コードを次の表に示します。メッセージの説明中に参照指示があったときには、次の表から対処を調べてください。

なお、表にない詳細コードについては、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

表I-1 オブジェクトサーバの詳細コード

コード	要因	ユーザの処置
-106	このサーバは起動していません。	システムが異常終了している場合は、異常終了時の対策をとってください。
-450	このリソースは使用中です。	操作を再実行してください。
-452	デッドロックが発生しました。	
-453	排他制御の待ち時間が経過して要求がキャンセルされました。	
-454	排他資源が不足しています。	システム共通定義の lck_limit の値を増やして、オブジェクトサーバを再起動してください。
-725	オブジェクトサーバが終了処理中 değildir。	オブジェクトサーバを再起動してください。
-726	このサービスを提供するプロセスがありません。	オブジェクトサーバが動作中でない場合は、動作してから操作を再実行してください。
-727	RPC 環境が開始されていません。	
-734	共用メモリを確保していません。	
-738	初期化できませんでした。	次のどれかの方法で対処してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・オブジェクトサーバが起動処理中の場合は、オブジェクトサーバが動作してから操作を再実行してください。 ・オブジェクトサーバのホームディレクトリを示す環境変数が正しいかどうか見直してください。 ・メモリ不足の場合は、不要なプロセスを終了させて、再実行してください。
-739	次の要因が考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> ・オブジェクトサーバが起動されていません。 ・ファイルシステム、メモリなどの資源不足によって接続できませんでした。 	オブジェクトサーバが動作中でない場合は、動作してから操作を再実行してください。動作中の場合は、ファイルおよびメモリ使用状況を調べ、不足していれば不要ファイルまたはプロセスを終了させてください。

コード	要因	ユーザの処置
-741	起動されているオブジェクトサーバの実行モードが違うため、バージョンアップユーティリティが実行できませんでした。	オブジェクトサーバを「utl」モードで起動してください。
-905	関数は不当なコンテキストです。	このプロセスを終了させて、再実行してください。
-906	リソースマネージャにエラーが発生しました。	メモリ不足のため、不要なプロセスを終了させて再実行してください。
-907	トランザクションマネージャにエラーが発生しました。	システム共通定義の trn_tran_process_count の値を増やして、オブジェクトサーバを再起動してください。
-1814	サーバが起動していません。	オブジェクトサーバが動作中でない場合は、動作してから操作を再実行してください。動作中の場合は、オブジェクトサーバのホームディレクトリを示す環境変数が正しいかどうか見直してください。
-1816	環境変数が設定されていません。	オブジェクトサーバのホームディレクトリを示す環境変数が正しいかどうか見直してください。
31030	フェッチ管理情報の割り当てに失敗しました。	不要なプロセスを終了させて、操作を再実行してください。
32002	ディクショナリ操作でキャッシュがいっぱいです。	
32003	スキーマ定義中にオブジェクト ID をすべて使用しました。	今後オブジェクトの生成はできません。オブジェクトの参照だけができます。
32005	ディクショナリ操作でメモリの割り当てに失敗しました。	不要なプロセスを終了させて、操作を再実行してください。
33001	ハッシュ登録時にメモリの割り当てに失敗しました。	操作を再実行してください。
33004	ハッシュディレクトリのサイズが大きくなり過ぎました。	
34001	検索処理用のメモリの割り当てに失敗しました。	
34511	SCB 領域のメモリ割り当てに失敗しました。	
34522	インデクス情報作成領域のメモリ割り当てに失敗しました。	
35001	システム作業領域の割り当てに失敗しました。	不要なプロセスを終了させて、操作を再実行してください。
36001	カーソル処理用のメモリ割り当てに失敗しました。	
40109	指定したオブジェクト ID がありません。	
		すでに削除されたオブジェクトのオブジェクト ID を指定していないか確認してください。

コード	要因	ユーザの処置
40110	PID 指定のオブジェクトがありません。	
40111	オブジェクト転送領域のメモリ割り当てに失敗しました。	不要なプロセスを終了させて、操作を再実行してください。
44110	Document Manager が、一つのプロセスから、90 個を超えたファイルにアクセスしました。	このエラーが多発する場合は、オブジェクトサーバの一つの初期設定パラメタでのファイル総数が 90 個以下になるように、オブジェクトサーバのデータベースをデータベース初期化ユーティリティで初期化し、再作成してください。
4xyyy(x, y は 0 ~ 9 のどれか)	オブジェクトサーバの格納制御でエラーが発生しました。または、オブジェクトサーバのオブジェクトの指定したパラメタに誤りがありました。	オブジェクトサーバのログメッセージを調査して、KF XO4xnnn(4x はコードと共通。n は 0 ~ 9 のどれか)のメッセージが出力されている場合は、そのメッセージの対処に従ってください。出力されている場合には、このコードの内容を記録して、システム管理者に連絡してください。
上記以外	-	データベースをそのままにして、システム管理者に連絡してください。

付録 I.5 システムコールのリターンコード (errno)

代表的なシステムコールのリターンコード (errno) 別の要因を次の表に示します。表にないリターンコードについては、使用している OS のマニュアルを参照してください。

表 I-2 システムコールのリターンコード (errno) 別の要因

リターンコード (errno)	要因
2	<ul style="list-style-type: none"> 指定されたパスまたはファイルがありません。 指定された関数がありません。 ファイルシステムの破壊を検知しました。
3	<ul style="list-style-type: none"> ファイルのアクセスに失敗しました。 指定された関数がありません。
5	指定されたデバイスの入出力に失敗しました。
6	<ul style="list-style-type: none"> デバイスが使用できません。 ファイルのオープンに失敗しました。 指定された関数がありません。
11	スレッドの生成に失敗しました。
12	メモリ不足が発生しました。
13	<ul style="list-style-type: none"> アクセス権がありません。 ファイルは書き込み禁止です。 ほかのユーザによって該当ファイルは暗号化されています。 ディレクトリまたはファイルの作成に失敗しました。 ファイルのロックに失敗しました。
14	<ul style="list-style-type: none"> メモリ破壊を検知しました。 メモリ不足が発生しました。

リターンコード (errno)	要因
17	指定されたファイルは、すでに作成されています。
19	指定されたドライブがありません。
21	<ul style="list-style-type: none">• ディレクトリの削除に失敗しました。• 指定されたものは、ディレクトリです。
22	<ul style="list-style-type: none">• 指定された資源に対する操作が不正です。資源はすでに削除されています。• ファイルポインタの設定に失敗しました。• シグナルの操作に失敗しました。
24	<ul style="list-style-type: none">• ファイルのオープンに失敗しました。• 共用ファイルのオープン数が多過ぎます。
27	セマフォの操作に失敗しました。
28	ディスクが満杯になりました。
上記以外	このメッセージの直前にメッセージが表示されている場合は、そのメッセージに従って対処してください。メッセージが表示されていない場合はシステム管理者に連絡してください。

付録 J フォルダ名称が重複した環境における文書のサーバ移行例

エクスポートユーティリティ (ISexport) の抽出対象でフォルダ名称が重複していた場合、インポートユーティリティ (ISimport) で対象外のフォルダに文書が登録されます。移行元サーバと同じ体系で文書を格納する場合は、以下に示すいずれかの手順が必要となります。

1. 抽出対象のフォルダ名称をクライアントで変更し、重複しないようにする。
2. フォルダ名称が重複しないように、抽出対象を複数回分けてエクスポートユーティリティを実行する。
3. フォルダ一覧表示ユーティリティとフォルダ名称一括変更ユーティリティを組み合わせ実行する。本手順により、容易にフォルダ名称をユニークにすることが可能です。
3. の手順について、以下に説明します。

移行元サーバ

1. Document Manager のファイル、及びオブジェクトサーバのファイルのバックアップを行います。
2. `ISlsfldr -o 出力ファイル -f CHFLNM -v`
フォルダ一覧表示ユーティリティを実行し、変更するフォルダ名称の一覧情報を取得します。
3. `ISchflnm -m ID -i 2. の出力ファイル`
出力ファイルに従って、フォルダ名称をユニークに変更します。
4. フォルダ体系、分類索引、一般文書データベースの体系を抽出します。
5. エクスポートユーティリティ (ISexport) を実行します。

サーバの移行後、フォルダ名称を元の名称に戻す場合は、以下を実行してください。

6. `ISchflnm -m NAME -i 2. の出力ファイル`

移行先サーバ

1. 移行元で取得したフォルダ体系、分類索引、一般文書データベースの体系を登録します。
2. Document Manager の環境を移行元サーバと合わせます。
3. 移行元サーバ 5. のエクスポートファイルをもとに、インポートユーティリティ (ISimport) を実行します。
4. `ISchflnm -m NAME -i 移行元サーバ 2. の出力ファイル`
移行元サーバの出力ファイルを使用して、Document Manager がユニークな名称に変

更したフォルダ名称を，元の名称に変更します。

5. Document Manager のファイル，及びオブジェクトサーバのファイルのバックアップを行います。

注意事項

移行先サーバ 5. の手順が終了するまで，フォルダの追加，変更，及び削除はしないでください。

付録 K エリア再構成時の分割手順

オブジェクトサーバの Groupmax サーバ環境設定などを使用して、Document Manager システムを再構成する場合、データベースエリアの見積もりの結果によっては、一部のエリアに対してエリアの追加が必要になる場合があります。また、すでにエリアが追加されている場合でも、各エリアのディスク容量見積もり値が異なる場合があります。そのため、エリアを分割して再構成することが必要になってきます。ここでは、エリア分割の手順を説明します。

(1) 構成変更時のエリア分割手順

Document Manager の再構成によって、エリアに対する追加が発生する場合のエリア分割の手順について説明します。

エリアの追加が発生する可能性があるのは次に示すエリアです。

- IS_class エリア
- IS_string エリア
- IS_index_1 エリア
- IS_index_2 エリア

これらのエリアは、分割されるエリアごとに IS_xxxx_1, IS_xxxx_2, IS_xxxx_3, ... のようにエリア名称を設定します (エリア追加していない場合, IS_xxxx_1 だけが存在します)。

(a) 既存の構成のエリアが一つの場合の手順

既存の構成にエリアが一つだけある場合、すでに構成されている該当エリア (IS_xxxx_1) のディスク容量と、再構成見積もりで算出される該当エリアの分割されたエリア (IS_xxxx_1) のディスク容量とを比較します。

再構成後の分割されたエリアのディスク容量が既存エリアのディスク容量より大きい場合

再構成見積もり後のディスク容量でオブジェクトサーバのエリア (IS_xxxx_1) の再作成ユティリティを実行して、該当エリア (IS_xxxx_1) を再作成します。そのほかのエリア (IS_xxxx_2 以降) は、オブジェクトサーバのエリアの追加ユティリティで分割数分のエリアを追加します。

再構成後の分割されたエリアのディスク容量が既存エリアのディスク容量より小さい場合

既存のエリア (IS_xxxx_1) は変更しません。オブジェクトサーバのエリアの追加ユティリティで既存エリア分を除く分割数分 (分割数 - 1) のエリア (IS_xxxx_2 以降) を追加します。

(b) 既存の構成のエリアが複数（追加済み）の場合の手順

既存の構成にエリアが複数存在する場合、すでに構成されている各該当エリア（IS_xxxx_1, IS_xxxx_2, ...）のディスク容量と、再構成見積もりで算出される各該当エリアの分割されたエリア（IS_xxxx_1, IS_xxxx_2, ...）のディスク容量とを比較します。

再構成後の各エリアのディスク容量が既存の各エリアのディスク容量より大きい場合
既存のエリアについては再構成見積もり後のディスク容量で、オブジェクトサーバのエリアの再作成ユティリティを実行して、各エリア（IS_xxxx_1, IS_xxxx_2, ...）を再作成します。そのほかのエリア（IS_xxxx_n以降）は、オブジェクトサーバのエリアの追加ユティリティで分割数分のエリアを追加します。

再構成後の分割されたエリアのディスク容量が既存エリアのディスク容量より小さい場合

既存のエリア（IS_xxxx_1, IS_xxxx_2, ...）は変更しません。オブジェクトサーバのエリアの追加ユティリティで、既存エリア分を除く分割数分（分割数 - n）のエリア（IS_xxxx_n以降）を追加します。

付録 L 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマを使用した場合に発生する障害

分類索引・分類・フォルダの名称に半角コンマ(,)を使用している場合、次の機能で障害が発生します。

文書配布機能

インポートユティリティ

一括登録ユティリティ

登録用属性ファイルによる属性登録機能

このため、分類索引・分類・フォルダの名称には半角コンマを使用しないでください。

半角コンマを使用した場合に発生する現象と、それに対する対策を次に示します。

表 L-1 分類索引・分類・フォルダの名称に半角コンマを使用した場合に発生する現象と対策

機能	発生条件	発生する現象	対策
文書配布機能	半角コンマを含む名称の分類(索引)に登録されている文書が配布対象の場合	配布先サーバでワーニングメッセージ(KIIS332-W)が出力され、その分類(索引)に文書が登録されません。	配布元サーバおよび配布先サーバで、該当する分類(索引)を半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、配布先サーバで登録されなかった文書を該当する分類(索引)に登録してください。
	半角コンマを含む名称のフォルダに登録されている文書が配布対象の場合	配布先サーバでワーニングメッセージ(KIIS339-W)が出力され、文書が配布先サーバのデフォルトフォルダに登録されます。	配布元サーバおよび配布先サーバで、該当するフォルダを半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、配布先サーバでデフォルトフォルダに登録された文書を、該当するフォルダに移動してください。
インポートユティリティ (ISimport)	半角コンマを含む名称の分類(索引)に登録されている文書が登録対象の場合	登録先サーバでエラーメッセージ(KIIS137-E)が出力され、その分類(索引)に文書が登録されません。	抽出元サーバおよび登録先サーバで、該当する分類(索引)を半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、登録先サーバで登録されなかった文書を該当する分類(索引)に登録してください。

機能	発生条件	発生する現象	対策
	半角コンマを含む名称のフォルダに登録されている文書が登録対象の場合	登録先サーバでワーニングメッセージ (KIIS339-W) が出力され、文書が登録先サーバのデフォルトフォルダに登録されます。	抽出元サーバおよび登録先サーバで、該当するフォルダを半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、登録先サーバでデフォルトフォルダに登録された文書を該当するフォルダに移動してください。
一括登録ユーティリティ (ISregist)	一括登録する文書の登録用属性ファイルに半角コンマを含む名称の分類 (索引) を指定した場合	エラーメッセージ (KIIS137-E) が出力され、その分類 (索引) に文書が登録されません。	分類 (索引) の名称を半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、登録されなかった文書を該当する分類 (索引) に登録してください。
	一括登録する文書の登録用属性ファイルに半角コンマを含む名称のフォルダを指定した場合	ワーニングメッセージ (KIIS339-W) が出力され、文書がデフォルトフォルダに登録されます。	フォルダを半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、デフォルトフォルダに登録された文書を該当するフォルダに移動してください。
登録用属性ファイルによる属性登録機能	登録用属性ファイルに半角コンマを含む名称の分類 (索引) を指定して属性登録した場合	属性登録に失敗します。	分類 (索引) および登録用属性ファイルに指定した分類 (索引) の名称を半角コンマを使用しない名称に変更してください。その後、登録されなかった文書の属性登録を実行してください。

付録 M ウィルスチェック機能の使用 (HP-UX の場合)

付録 M.1 ウィルスチェック機能とは

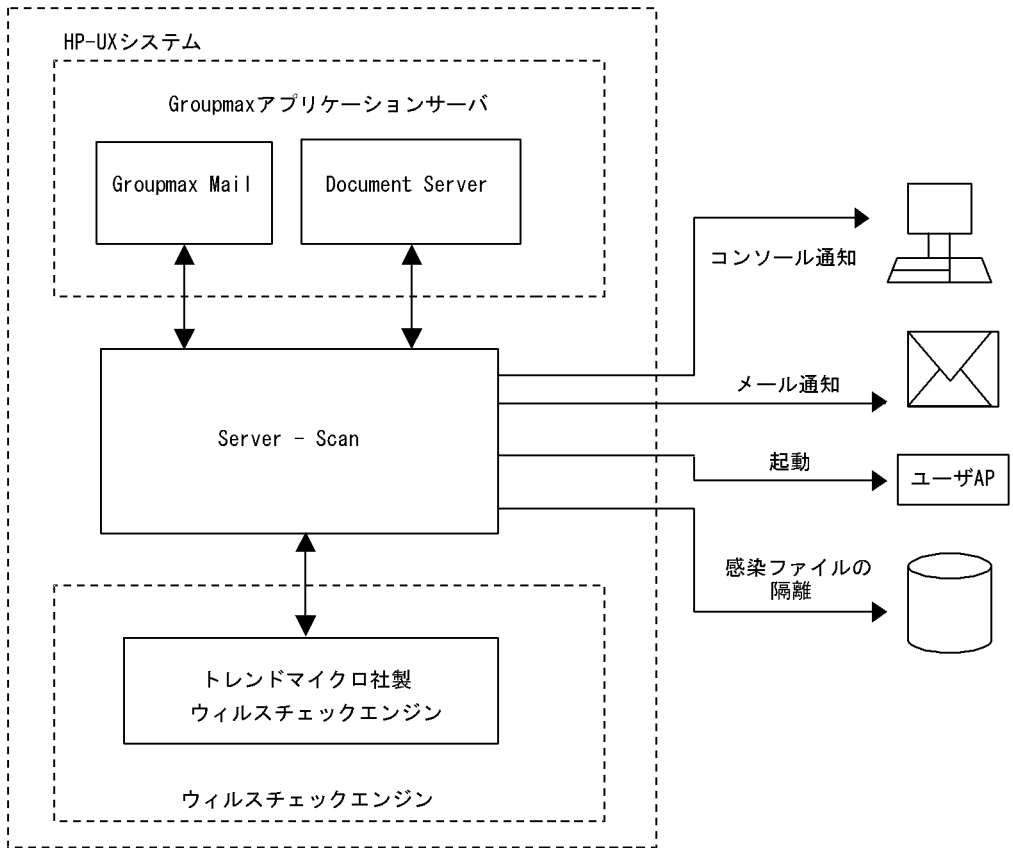
ウィルスチェック機能とは、Server-Scan を使用して、Document Manager に登録された文書に対して、ウィルスに感染したファイルの検出及びウィルスの除去を実行する機能のことです。

ウィルスチェック機能には、次の 2 種類のユティリティがあります。

- ウィルススキャンユティリティ
ウィルススキャンを実行します。
- ウィルススキャン整合性ユティリティ
障害が発生するなどの理由で、ウィルスチェック機能の実行中に Server-Scan が中断された場合に、文書の整合性を確保するために実行します。

ウィルスチェック機能を使用する場合のシステム構成の概要について、図 M-1 に示します。

図 M-1 システム構成の概要



この機能を使用する場合、次のプログラムがインストールされていることが前提です。

- Groupmax Server - Scan Version 6 06-00/A 以降

付録 M.2 環境設定

(1) Document Manager の環境設定

Document Manager に対するウィルススキャンの出力ファイルをデフォルトパス (/tmp 下) 以外に出力したい場合、Server - Scan を起動 (GSS_START コマンドを実行) する前に次の環境変数を設定してください。ただし、環境変数の内容不正及び環境変数の取得に失敗した場合は、デフォルトパスに出力されます。

環境変数名	設定内容
ISVIRSCN	Document Manager に対するウィルススキャンの実行結果リストの出力先ディレクトリのフルパス

(2) Server - Scan の環境設定

ウィルスに感染したファイルを削除するのか又は隔離するのかを、Server-Scan の環境設定で指定します。Document Manager は、Server-Scan での指定に従って、ウィルスに感染したファイル进行处理します。必要なファイルが削除されてしまうことを防ぐために、Server-Scan で「駆除」を指定することをお勧めします。Server-Scan での環境設定については、マニュアル「Groupmax Server - Scan Version 6」を参照してください。

Server-Scan での指定と Document Manager の処理との関係を表 M-1 に示します

表 M-1 Server-Scan での指定と Document Manager の処理との関係

Server-Scan の環境設定 (メール, 掲示板記事, 登録文書の処置) の指定	ウィルス駆除の可否	Document Manager の処理
駆除		感染ファイルとウィルスを駆除したファイルを差し替える。
	x	感染ファイルを削除する。
破棄	-	感染ファイルを削除する。

(凡例)

- : 可能
- x : 不可能
- : 該当しない

(3) オブジェクトサーバの環境設定

Document Manager に対するウィルススキャンを実行する前に、オブジェクトサーバのシステム共通定義ファイル (xodrc) の lck_limit 値を 32767 にしてください。また、lck_limit 値の増加分を static_shmpool_size に反映してください。

オブジェクトサーバの環境設定の詳細については、マニュアル「Groupmax Object Server Version 6 システム管理者ガイド」を参照してください。

付録 M.3 ユティリティ

(1) ウィルススキャンユティリティ (ISvirscn)

(a) 形式

```
ISvirscn [-i 対象リストファイル名]
          [-f フォルダのオブジェクトID]
          [-s YYYYMMDDhhmm]
          [-l]
```

(b) 機能

一般文書のウィルススキャンを行います。

ウィルススキャンは、Server - Scan によって非同期に実行されます。このため、このコマンドが終了してもウィルススキャンは完了していない場合があります。

ウィルススキャン対象の文書

ウィルススキャンする文書は、このコマンド実行時に Document Manager に登録済みの一般文書です。

オプションを指定することで、次のような条件でウィルススキャンを実行できます。

- 特定の文書をウィルススキャンする (-i オプション)
- 特定のフォルダ及びその下位フォルダに所属する文書をウィルススキャンする (-f オプション)
- 更新された時間の範囲にある文書をウィルススキャンする (-s オプション)
- すべての文書をウィルススキャンする (オプションなし)

なお、ウィルススキャン対象外の文書は次のとおりです。

- フォーム文書
- Server - Scan がウィルススキャンする際に Document Manager で更新中の文書
- Server - Scan でウィルススキャン中の文書

ウィルススキャン対象の文書のバージョン (版)

ウィルススキャン対象の文書のバージョン (版) については、「付録 M.3(C) オプション」を参照してください。

ウィルススキャン対象のファイル

ウィルススキャン対象のファイルは次のとおりです。

- Server - Scan がサポートしているファイル種別
- Groupmax の各プログラムが提供するファイルは対象外となります。

ウィルス検知時の処理

Server - Scan の環境設定の内容に従って、文書中の該当するファイルを処理します。

Server - Scan の環境設定については、「付録 M.2(2) Server - Scan の環境設定」を参照してください。

文書中の該当ファイルを削除し、バージョン (版) 中の実体ファイルがなくなっても、そのバージョン (版) は削除しません。

入れ替え時に文書の属性は、文書実体ファイルサイズと文書実体ファイル名だけが更新されます。

更新中文書の取り扱い

Server - Scan でウィルススキャンする際に Document Manager で更新中の文書は、ウィルススキャンをスキップします。必要に応じて、ウィルススキップリストを基に対象リストファイルを作成してこのコマンドを再実行してください。

(c) オプション

-i 対象リストファイル名

ウィルススキャンの対象となる文書を定義した対象リストファイルの名称を指定します。

このオプション指定時は、-s 及び -f のオプションは無視し、該当文書の全バージョン (版) が対象となります。

-f フォルダのオブジェクト ID

文書が所属するフォルダのオブジェクト ID を 16 進文字列で指定します。ここで指定したフォルダの下位にあるフォルダに所属する文書もすべて対象となります。

このオプション指定時は、-s のオプションは無視し、該当文書の全バージョン (版) が対象となります。

-s YYYYMMDDhhmm

文書の更新日時を YYYYMMDDhhmm 形式で指定します。指定できる範囲は、197001010000 ~ 203612312359 です。このオプションで指定した日時以降の文書 (版) が、ウィルススキャンの対象となります。なお、文書の最新バージョンがウィルススキャン対象かどうかによって、ウィルススキャン対象の範囲が異なります。

最新バージョンの文書がウィルススキャン対象の場合

指定した日時を基にして、古いバージョンもウィルススキャン対象かどうかをチェックします。チェックの結果、ウィルススキャン対象とならなかったバージョンの直前までがウィルススキャンの対象となります。

最新バージョンの文書がウィルススキャン対象外の場合

古いバージョンの文書はウィルススキャン対象となりません。
なお、サーバマシンの時間を更新したことによって、新しいバージョンの文書の更新日時より、古いバージョンの文書の更新日時が新しくなることがあります。このような場合、このオプションを指定していると、ウィルススキャンの対象とはなりません。

-l

このオプションが指定された場合、結果リストにウィルススキャンリスト (scanchk.txt) が出力されます。

(d) 対象リストファイルの入力形式

対象リストファイルは、1 行を 1 レコード (80 バイト以内) として、ウィルススキャンを実行する文書のオブジェクト ID を記述します。形式を次に示します。

```

AAAAAAAAAAAAAAAA
BBBBBBBBBBBBBBBB
:
:
CCCCCCCCCCCCCCCC

```

(凡例)

AAAAAAAAAAAAAAAA, BBBBBBBBBBBBBBBB, CCCCCCCCCCCCCC 文書ID (16バイト)

(e) 出力ファイル

出力ファイルには、次の3種類があります。

- ウィルススキャンリスト (scanchk.txt)
ウィルススキャンを実施した文書情報 (ウィルス感染を検出しなかったファイルだけ) を出力します。ただし、このリストが出力されるのは、-l オプションを指定ときだけです。また、ファイルが存在しない文書の情報は出力されません。
- ウィルススキップリスト (scanskip.txt)
ウィルススキャンをスキップした文書情報を出力します。
- ウィルスエラーリスト (scanerr.txt)
ウィルスを検知した文書情報を出力します。

既に出力ファイルが存在する場合は、当該ファイルを .bak ファイルに変更後、出力ファイルを作成します。既に .bak ファイルが存在する場合は、既存のファイルを上書きした後、出力ファイルを作成します。

出力ファイルの格納先

出力ファイルの格納先は、/tmp 下 (デフォルトパス) です。/tmp 以外のディレクトリに格納する場合は、環境変数「ISVIRSCN」に格納先ディレクトリパス名を指定してください。指定方法については、「付録 M.2 環境設定」を参照してください。

出力ファイルの総容量

- -l オプションを指定していない時
約 $240 \times (\text{ウィルススキャンをスキップしたファイル数} + \text{ウィルスを検知したファイル数} + 4)$ バイト
- -l オプションを指定した時
約 $240 \times (\text{総文書数} \times 1 \text{文書辺りの実体ファイル数の平均値} \times 1 \text{文書辺りのページ数数の平均値} + 6)$ バイト

出力形式

ウィルススキャンリスト (schanchk.txt)

```
*VIRUS SCAN CHECK LIST*
Document ID      ,Version No,Modify Time      ,Modifier,Document Name...,File Name
AAAAAAAAAAAAAAAA,BBBBBBBBBB,CCCG/CC/CC-CC:CC:CC,DDDDDDDD,EEEEEEEEEEEE...E,FFFFF...F
```

ウィルススキップリスト (scanskip.txt)

```
*VIRUS SCAN SKIP LIST*
Document ID      ,Version No,Status,Modify Time      ,Modifier,Document Name...,File Name
AAAAAAAAAAAAAAAA,BBBBBBBBBB,GGGGGG,CCCG/CC/CC-CC:CC:CC,DDDDDDDD,EEEEEEEEEEEE...E,FFFFF...F
```

ウィルスエラーリスト (scanerr.txt)

```
*VIRUS SCAN ERROR LIST*
Document ID      ,Version No,Status,Modify Time      ,Modifier,Document Name...,File Name
AAAAAAAAAAAAAAAA,BBBBBBBBBB,HHHHHH,CCCG/CC/CC-CC:CC:CC,DDDDDDDD,EEEEEEEEEEEE...E,FFFFF...F
```

(凡例)

- AAAAAAAAAAAAAAAA : 文書ID (16バイト)
- BBBBBBBBBB : 文書実体ファイルのバージョン番号 (最大10バイト: 右詰め)
不明時は、「*****」を出力
- GGGGGG : ウィルススキャンスキップ後の状態を示す (最大6バイト: 左詰め)
Locked : 該当文書が編集中, 又はウィルスチェック中
Error : メモリー不足等のエラーが発生した
詳細は, Server-Scanで出力されたメッセージ又はメッセージファイルを参照。
- HHHHHH : ウィルス検知後の状態を示す (最大6バイト: 左詰め)
Clean : 感染ファイルからウィルスを除去した
Delete : 感染ファイルからウィルスを除去できないため, 感染ファイルを削除した
Error : エラーが発生したため, 感染ファイルの処置ができなかった
-iオプションを指定して再度実行。
- CCCG/CC/CC-CC:CC:CC : 文書の更新日時 (「YYYY/MM/DD-HH:MM:SS」の形式で19バイト)
不明時は,「****/**/*-**-**:**」を出力
- DDDDDDDD : 文書の更新者に該当するユーザID (最大8バイト: 左詰め)
不明時は,「*****」を出力
- EEEEEEEEEEEE...E : 文書名 (最大40バイト: 文書名が長い場合は, 先頭40バイトを出力: 左詰め)
不明時は,「*****」を出力
- FFFFF...F : 文書実体ファイル名 (最大128バイト: 左詰め)
不明時は,「*****」を出力

(f) 注意事項

- このコマンドを実行するには, Server - Scan が必要です。

- このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。
- このコマンドを実行する前に、Document Manager サーバを起動してください。
- 以前に実行した Document Manager に対するウィルススキャンが終了していることを、Server - Scan の vkstat コマンドで確認した後、このコマンドを実行してください。
- Server - Scan がウィルススキャン中の文書は、編集モードで取り出すことはできません。
- ウィルスを検知した場合、感染ファイルの入れ替え又は削除が実行されます。ただし、全文検索サーバには、感染ファイルの入れ替え又は削除後の情報が反映されません。ウィルスエラーリストを基に文書の再登録を実行し、全文検索サーバに情報を反映してください。
- ウィルススキャンユティリティ実行時に存在した文書が、Server - Scan でウィルススキャンする際に存在しなかった場合、無視（出力ファイルにも出力されない）して処理を続行します。
- -l オプションを指定した場合、ウィルススキャンリストのファイルサイズが大きくなるため、ディスク容量に注意が必要です。
- 出力ファイルの格納先を変更する場合は、「付録 M.2 環境設定」を参照してください。
また、このコマンド実行時にも環境変数の設定が有効になっていることを確認してください。
- Document Manager サーバに存在するフォルダの数が多いとき、オプションを指定しないでこのコマンドを実行すると、理由コードが 5035 のエラーメッセージが表示される場合があります。その場合は、「付録 M.2(3) オブジェクトサーバの環境設定」を参照して、環境設定を行ってください。環境設定後も同エラーが発生する場合は、次のどちらかの対処を実行してください。
-s オプションで更新日時に 197001010000 を指定してから、このコマンドを実行する。
-i オプション又は -f オプションを指定して、ウィルススキャンの対象範囲を分割するようにしてから、このコマンドを実行する。

(2) ウィルススキャン整合性ユティリティ (ISclnscn)

(a) 形式

ISclnscn

(b) 機能

Server - Scan 実行中に障害などが発生し処理が中断された場合、ウィルススキャン中の文書にロックが掛かったままになることがあります。このような場合に、このコマンドでウィルススキャンユティリティで取得されたロックを解除します。

(c) 注意事項

- このコマンドを実行できるのは、スーパーユーザだけです。

- このコマンドを実行する前に、Document Manager サーバを起動してください。
- Server - Scan サーバを停止後、このコマンドを実行してください。

付録 M.4 運用手順

(1) サービスの起動

サービスの起動順序は次のとおりです。

1. Document Manager サーバを起動する。
2. Server - Scan サーバを起動する。

Document Manager サーバより先に Server - Scan サーバを起動すると、Document Manager サーバを起動又は Server - Scan サーバを停止されるまでウィルススキャンがエラーとなり、一部の文書のウィルススキャンが実行されない場合があります。この場合、ウィルススキップリストが出力されます。

(2) サービスの停止

サービスの起動順序は次のとおりです。

1. Server - Scan サーバを停止する。
2. Document Manager サーバを停止する。

Server - Scan サーバより先に Document Manager サーバを停止すると、Server - Scan サーバを停止又は、Document Manager サーバを起動するまでウィルススキャンがエラーとなり、一部の文書のウィルススキャンが実行されない場合があります。この場合、ウィルススキップリストが出力されます。

付録 M.5 障害発生時の対処

何らかの障害によって、Document Manager のウィルススキャンが中断した場合、又はウィルススキャン実行中に Document Manager サーバ及び Server - Scan サーバを停止した場合は、次の手順に従って対処してください。

(1) Server - Scan サーバ が中断 (ダウン), 又はウィルススキャン実行中に Server - Scan サーバを停止した場合

1. Document Manager のウィルススキャン整合性ユティリティを実行します
2. Server - Scan サーバを起動します

(2) Document Manager サーバが中断 (ダウン), 又はウィルススキャン実行中に Document Manager サーバを停止した場合

1. Server - Scan サーバを停止します

Server - Scan サーバを停止するまでウィルススキャンがエラーとなり、ウィルススキップリストが出力されます。

2. Document Manager サーバを起動します
3. Document Manager のウィルススキャン整合性ユティリティを実行します
4. Server - Scan サーバを起動します

(3) Server - Scan サーバ及び Document Manager サーバが中断 (ダウン)、又はウィルススキャン実行中に Server - Scan サーバ及び Document Manager サーバを停止した場合

1. Document Manager サーバを起動します
2. Document Manager のウィルススキャン整合性ユティリティを実行します
3. Server - Scan サーバを起動します

付録 M.6 注意事項

ISvirscln 及び ISclnscln 以外の Document Manager のユティリティコマンドを実行するときは、Document Manager に対するウィルススキャンが終了していることを、Server - Scan の vkstat コマンドで確認した後、実行してください。

付録 N 用語解説

Document Manager で使用する用語について説明します。

(英字)

Document Manager 管理者

環境設定ファイルで、Document Manager 管理者として登録されているユーザです。Document Manager 管理者は、アクセス権に関係なく Document Manager のすべての情報を操作できます。

Document Manager データベース

Document Manager で定義および管理するデータベースのことです。Document Manager データベースは、アプリケーションプログラムで作成した文書実体ファイルを格納する領域と、文書の属性情報を格納する領域で構成されます。

(ア行)

アクセス権

Document Manager データベースに格納された情報を、操作するために必要な権限のことです。アクセス権は、一般文書、フォルダ、分類索引および文書データベースに設定できます。

一般文書

Word、Excel などのアプリケーションプログラムで作成された文書です。

一般文書データベース

Windows 上のさまざまなアプリケーションで作成したファイルを、一般文書として管理するための文書データベースです。

エリア

オブジェクトサーバのディレクトリ、ディクショナリ、ユーザデータベースなどを格納する領域です。エリアは、一つまたは複数のファイルから構成されます。

オブジェクト

Document Manager で管理されるデータのことです。オブジェクトには、文書、フォルダ、分類索引、文書データベースおよび Document Manager データベースが含まれます。

オブジェクトサーバ

Document Manager の属性を管理するプログラムです。Groupmax Object Server Version 6 または Groupmax High-end Object Server Version 6 を指します。

(カ行)

改変禁止フォルダ管理者

改変禁止モードが設定されたフォルダの管理者です。改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書を削除できます。

改変禁止モード

文書のアクセス権に関係なく、文書の更新や削除を禁止するモードです。改変禁止モードは、フォルダに対して設定します。改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書は、どのユーザも更新できません。ただし、Document Manager 管理者と改変禁止フォルダ管理者は、改変禁止モードが設定されたフォルダに属する文書を削除できます。なお、改変禁止モードは文書に対してだけ有効です。改変禁止モードが設定されたフォルダに属する下位フォルダについての操作は、既存のアクセス権に依存します。

グループ

複数のユーザをまとめる単位です。文書、フォルダ、分類索引および文書データベースに対するアクセス権は、グループ単位で設定することもできます。

また、グループに付けられる識別子を、グループ ID といいます。

(サ行)

最上位フォルダ

Document Manager を初期化したときに、システムによって作成されるフォルダです。初期名称は「root」です。ユーザは、このフォルダの下位に任意のフォルダを作成できます。

作業領域

文書を編集するための領域です。作業領域は、ユーザごとに割り当てられます。

システム管理者

UNIX のスーパーユーザを指します。サーバ全体の管理や運用をします。また、Document Manager のユティリティを実行できます。

システム文書データベース

システムで提供する一般文書データベースのことです。

集計フォーム

フォーム文書データベースに登録されているフォーム文書から、特定のデータを集計するときに使用するフォームです。

セグメント

オブジェクトサーバのデータベースファイルの初期割り当ておよび増分の単位です。

全文検索

一般文書に含まれる単語をキーワードにして検索する方法です。

全文検索サーバ

全文検索をする場合に連携するプログラムです。Bibliotheca/TS または Bibliotheca2 TextSearch が相当します。

属性

オブジェクトに関する情報です。属性は、Document Manager によって付けられます。また、属性に設定される具体的なデータを、属性値といいます。したがって、オブジェクトの「作成日時」が属性、「1996/5/20」などの値が属性値になります。

属性ファイル

属性の格納されたファイルのことです。属性ファイルは、サーバ上で管理されています。文書が作業領域に複写されるとき、属性ファイルも一緒に複写されます。また、オブジェクトが更新されるたびに、属性値も更新されます。

(夕行)

テキストファイル

一般文書からテキストデータだけを抽出して格納したファイルです。全文検索する場合に必要なになります。

デフォルトフォルダ

Document Manager を初期化したときに、システムによって作成されるフォルダです。最上位フォルダの直下に作成されます。初期名称は「default」です。このフォルダには、バージョン 01-XX のクライアントから登録された文書、および文書配布時に配布先サーバに配布元サーバと同一名称の格納先のフォルダが存在しない配布文書が格納されます。

(八行)

バージョン (版)

Document Manager では、更新前と更新後の一般文書が時系列に管理されています。このとき、作成および更新した順番に、文書に付けられる番号を指します。バージョンは、一般文書の実体と、文書ひな形にそれぞれ付けられます。

排他制御

Document Manager データベースにある一つの文書を複数のユーザが同時に更新すると、文書の一貫性が保てなくなります。これを避けるため、一人のユーザが文書を更新している間は、ほかのユーザがその文書を更新して登録できないように制御することです。

フォーム (文書管理機能)

フォーム文書データベースに登録するフォーム文書の基になるひな形です。Groupmax Form を使って作成します。

フォーム文書

フォームを基に作成された文書です。

フォーム文書データベース

フォーム文書を格納するための文書データベースです。

フォルダ

一般文書が Document Manager データベースのどこに格納されているかを明確にするための単位です。フォルダは、ディレクトリを使用したファイル管理のような役目をします。

複数グループアクセス権機能

グループを構成するメンバとして、複数のグループや複数のユーザの指定を可能にするための機能です。このメンバとそれぞれに付けられたアクセス権限を総称して、複数グループアクセス権といいます。

フリーアクション

文書を参照するときなどに使用するアプリケーションプログラムを、文書実体ファイル名に付けられた拡張子に従って起動させることです。一般文書データベースのアプリケーション名に指定します。

Document Manager の環境を初期化した直後は、一般文書データベースにはフリーアクションが設定されています。

文書

文書データベースの定義情報に基づいて作成されたデータのことです。Document Manager では、文書実体ファイルと、Document Manager によって付けられる属性を合わせて文書と呼びます。文書には、一般文書とフォーム文書があります。

Document Manager によって文書に付けられた識別子を、文書 ID といいます。

文書実体ファイル

一般文書として一般文書データベースで管理する、Windows 上のアプリケーションで作成したファイルのことです。

文書データベース

文書を編集するアプリケーションプログラムや文書ひな形を定義した形式です。文書は、文書データベースの定義情報を基に作成します。文書データベースには、一般文書データベースとフォーム文書データベースがあります。

文書配布機能

あるサーバで管理している一般文書の複製を別のサーバに配布することによって、その一般文書を複数のサーバ間で共用できる機能です。

分類索引

Document Manager で一般文書を管理するための分類のことです。分類索引を使って一般文書を分類することで、複数の観点から文書を絞り込んで検索できます。

分類索引帳

フォルダや分類索引の位置情報をユーザの利用目的に合わせて編集したファイルです。フォルダや分類索引を利用するのと同様に、所属する（リンクしている）文書の一覧を表示したり、文書を編集したり、削除したりできます。

(マ行)

目的別一覧

フォーム文書データベースに登録されているフォーム文書を、目的に応じた観点から一覧表示するために定義する表示形式です。

(ヤ行)

ユーザ

Document Manager の利用者のことです。ユーザは、登録されたログイン名とパスワードを持ちます。

(ラ行)

ログアウト

クライアントからサーバへの接続を切断して、Document Manager の使用を終了することです。

ログイン

クライアントからサーバに接続して、Document Manager の使用を開始することです。

索引

A

AP 情報管理ファイル 155

D

Document Manager 2
Document Manager Client 10
Document Manager Client での排他制御 44
Document Manager 管理者 16, 518
Document Manager 起動ユティリティ
248, 255
Document Manager サーバ 10
Document Manager サーバ管理用の組織の
定義 137
Document Manager サーバ情報の一元管理
136
Document Manager サーバ対応のアドレス
ユーザの定義 137
Document Manager サーバの起動 182
Document Manager サーバの終了 185
Document Manager 終了ユティリティ
248, 256
Document Manager データベース
6, 13, 518
Document Manager データベースの作成
179
Document Manager で作成されるファイル
362
Document Manager で使用するユティリ
ティ 245
Document Manager での環境設定 140
Document Manager とほかのプログラムの
環境の初期化 239
Document Manager に登録できるファイル
の規則 383
Document Manager の環境設定 119
Document Manager の環境設定の流れ 120
Document Manager の環境の初期化
179, 253
Document Manager の起動 255

Document Manager の組み込み 126
Document Manager の終了 256
Document Manager の使用例 110
Document Manager の初期化 179
Document Manager のディレクトリ構成
362
Document Manager の文書と全文検索サー
バとの関係 165
Document Manager 用サーバの登録 136
Document Manager を管理するユーザ 15

G

Groupmax Address 10, 136
Groupmax Address での環境設定 136
Groupmax Address を使用しない環境での
ユーザ及びグループの登録 379
Groupmax Address を使用しない場合の環境
設定 163
Groupmax Agent 11
Groupmax Form 10
Groupmax Integrated Desktop での排他制
御 44
Groupmax Mail 10
Groupmax 全体でのユーザ情報の一元管理
138

I

ISadddoc 249, 288
ISaddsrv 248, 285
ISchfldr 249, 315
ISchusrid 250, 335
ISclnsen 515
IScomprs 249, 308
IScpdef 249, 297
ISdefmga 248, 261
ISdelidx 250, 333
ISdirchk 248, 267
ISexform 249, 304
ISexpand 249, 309
ISexport 249, 301

ISfsck 248, 265
 ISgrprt 248, 274
 ISgrpinf 248, 277
 ISimform 249, 305
 ISimport 248, 273, 302
 ISinitdb 248, 253
 ISlgrpcc 250, 329
 ISlsdoc 250, 318
 ISlsfldr 249, 312
 ISlsview 250, 325
 ISmksvls 250, 322
 ISmvdoc 250, 331
 ISmvfldr 249, 317
 ISregist 249, 306
 ISreplica 248, 257
 ISreplicastart 248, 258
 ISreplicastop 248, 260
 ISrprsnd 249, 295
 ISrpstat 249, 290
 ISstart 248, 255
 ISstop 248, 256
 ISstsconv 388
 ISstsidtbl 250, 328
 ISstssync 249, 310
 ISuserls 250, 323
 ISvirscn 510

T

TS 管理ファイル 166
 TS 文書 ID 変換テーブルの生成 328
 TS 文書 ID 変換テーブルユティリティ
 250, 328

あ

アクション 156
 アクセス権 9, 35, 518
 アクセス権の管理 34
 アクセス権を設定できるオブジェクト 35
 アクセス権を設定できる単位 35
 アクセス権を設定できるユーザ 36
 アクセスログ 218
 アクセスログの出力形式 221

アクセスログを出力するファイル 219
 アプリケーションプログラムと連携するための
 環境設定 155
 アルファベット異表記展開 48

い

一括登録ユティリティ 204, 249, 306
 一般文書 6, 13, 20, 518
 一般文書データベース 6, 13, 23, 518
 一般文書データベースのアクセス権 37
 一般文書データベースの設計 82
 一般文書データベースの属性 30
 一般文書データベースの定義と変更 83
 一般文書のアクセス権 36
 一般文書の圧縮 215
 一般文書の管理 22
 一般文書の管理体系 23
 一般文書の検索 46
 一般文書の属性 31
 一般文書を管理する体系 13
 イベント通知機能 153
 インポート機能ユティリティ 248, 273

う

ウイルススキャン整合性ユティリティ 515
 ウイルススキャンユティリティ 510
 ウイルスチェック機能 508
 運用コマンド実行時の注意事項 345
 運用コマンドの実行結果 252
 運用コマンドの文法 251
 運用手順 243

え

エクスポート機能ユティリティ 249
 エクスポートファイル 57
 エクスポートファイルの作成 59
 エクスポートファイルの自動削除機能 242
 エクスポートファイルの配布 60
 エリア 132, 518
 エリア再構成時の分割手順 504

お

オブジェクト 30, 518
 オブジェクトサーバ 10, 518
 オブジェクトサーバでの環境設定 129, 239
 オブジェクトサーバとの整合性 231
 オブジェクトサーバの詳細コード 498
 オブジェクトサーバの初期化 179
 オペレーティングシステムでの環境設定 127
 オリジナル文書 61

か

下位フォルダ 24
 下位文書データベース 23
 下位分類 27
 改変禁止フォルダ管理者 519
 改変禁止モード 25, 87, 519
 拡張文書参照モード 51
 片仮名異表記展開 48
 簡易条件検索 47
 環境初期化ユティリティ 248, 253
 環境設定 242
 環境設定ファイル 140
 関連ファイル 155
 関連プログラム 125

く

組み込み 125
 グループ 16, 35, 519

け

検索ターム 47
 検索の種類 46
 検索の方法 46

こ

更新 21
 異なるバージョンが混在する環境を使用する場合の注意 386

さ

サーバ一覧更新ユティリティ 250, 322
 サーバ作業領域チェックユティリティ 248, 267
 サーバ作業領域のチェック 267
 サーバ情報一覧の更新 322
 サーバとクライアントの作業領域間の文書の整合性 229
 サーバの起動 182
 サーバの終了 184
 最上位フォルダ 24, 179, 519
 最上位分類 27
 作業領域 14, 519
 作業領域の運用 233
 作業領域の運用上の注意 233
 作業領域のディレクトリ構成 365
 参照 21
 参照モード 20
 参照用属性ファイル 155, 208, 367

し

システム管理者 15, 519
 システム共通定義ファイル 133
 システム定義属性 30, 76
 システムの運用 187
 システム文書データベース 23, 179, 519
 システム文書データベースへの属性値の設定 180
 自動設定 21
 集計フォーム 74, 99, 519
 上位フォルダ 24
 上位文書データベース 23
 上位分類 27
 障害対策 347
 条件検索 7, 46
 使用者の種類 35
 初期設定パラメタファイル 129
 所有者 35

せ

整合性ログファイル 231, 266
 セグメント 519

セッション 15
全角・半角異表記展開 48
前提プログラム 125
全文検索 7, 47, 519
全文検索サーバ 11, 520
全文検索サーバでの環境設定 169
全文検索サーバと連携するための環境設定
165
全文検索サーバと連携するときの文書の操作
170
全文検索サーバのテキストデータベースとの
文書の整合性 229
全文検索登録対象外ファイル 237
全文検索の種類 47
全文検索用テキスト登録・削除ユティリティ
236, 310
全ユーザ 35

そ

属性 30, 520
属性アクセス権 376
属性型 375
属性検索権 376
属性識別子 375
属性種類 376
属性値 30, 376
属性値情報行数 376
属性ファイル 367, 520
属性名 375

ち

チェックアウト 233
チェックイン 233
抽出対象リストファイルの編集 173
抽出元サーバ 190

つ

通信設定ファイル 127

て

定義情報抽出機能 194

定義情報登録機能 194
定義情報複写機能 194
定義の抽出及び登録ユティリティ 249
定義ファイル 203
テキスト自動抽出機能 171
テキスト自動抽出機能の設定 173
テキスト自動抽出サーバ 172
テキスト自動抽出サーバのアクセスログファ
イルの取得 176
テキスト自動抽出サーバの運用方法 175
テキスト抽出管理ファイルの編集 174
テキストデータベースの移行手順 389
テキストデータベースの移行パターン 391
テキスト登録エラーログファイル 237
テキストファイル 156, 520
テキストファイルの削除 236
テキストファイルの登録 235
テキストファイルの登録・削除ユティリティ
249, 310
テキストファイルの登録又は削除 310
デフォルトフォルダ 24, 520

と

同義語・異表記展開検索 47
同義語展開 47
登録先サーバ 190
登録用属性ファイル 155, 202, 206, 367
特定のフォルダに格納されている文書を抽出
して登録する 301

は

バージョン 7, 20
バージョン(版) 520
排他制御 20, 520
排他制御とアクセス権 44
排他モード 20
配布先サーバ 56
配布先サーバ追加・削除ユティリティ
248, 285
配布先サーバの追加又は削除 285
配布文書 61

配布文書追加・削除ユティリティ
249, 58, 288

配布文書又は抽出した文書を取り込むイン
ポートユティリティ 302

配布元サーバ 56

配布用属性ファイル 59

配布用定義ファイル 59

配布用文書ファイル 59

バックアップの取得方法 188

ふ

ファイル整合性ユティリティ 229, 248, 265

ファイルの整合 265

ファイルの整合性 229

ファイル名の規則 383

フォーム 8, 520

フォーム定義のアクセス権 79

フォームのエクスポート機能ユティリティ
304

フォーム文書 8, 13, 68, 520

フォーム文書インポート機能ユティリティ
305

フォーム文書データベース 8, 14, 70, 521

フォーム文書データベースのアクセス権 79

フォーム文書データベースの管理 76

フォーム文書データベースの機能 71

フォーム文書データベースの設計 97

フォーム文書データベースの属性 76

フォーム文書データベースの定義と変更 104

フォーム文書のアクセス権 68

フォーム文書の移行 212

フォーム文書のインポート機能ユティリティ
249

フォーム文書のエクスポート機能ユティリ
ティ 249

フォーム文書の管理 68

フォーム文書の属性 68

フォーム文書の抽出 304

フォーム文書の取り込み 305

フォーム文書を管理する体系 14

フォルダ 6, 14, 24, 521

フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録 297

フォルダ, 分類索引体系の抽出及び登録ユ
ティリティ 249

フォルダ, 分類索引体系の抽出と登録 194

フォルダ階層移動ユティリティ 249

フォルダ階層の移動 317

フォルダ階層の移動ユティリティ 317

フォルダ検索 7, 46

フォルダのアクセス権 38

フォルダの一覧表示 312

フォルダの一覧表示ユティリティ 312

フォルダの設計 86

フォルダの属性 32

フォルダの定義と変更 88

複数グループアクセス権機能 521

複数グループアクセス権情報出力・更新ユ
ティリティ 248, 261

複数グループアクセス権情報を出力又は更新
する 261

フリーアクション 521

文書 13, 521

文書圧縮ユティリティ 249, 308

文書一覧の表示 318

文書一覧表示ユティリティ 250, 318

文書一括移動ユティリティ 250, 331

文書一括削除ユティリティ 250, 333

文書関連ファイル 156

文書再配布機能ユティリティ 249, 295

文書実体ファイル 13, 521

文書実体ファイル格納ディレクトリの一覧表
示ユティリティ 249

文書実体ファイル格納ディレクトリの変更
315

文書実体ファイル格納ディレクトリ変更ユ
ティリティ 249, 315

文書従属ファイル 156

文書データベース 521

文書データベース関連ファイル 156

文書データベース従属ファイル 156

文書の圧縮 308

文書の圧縮解除ユティリティ 249, 309

文書の圧縮の解除 309

文書の一括登録 306

文書の再配布 242

文書の再配布機能 295
 文書の状態と作業領域との整合性 230
 文書のチェックアウト 233
 文書のチェックイン 233
 文書の配布状態管理機能 242
 文書の配布状態管理機能に関する運用 242
 文書の配布状態の受け渡しの仕組み 242
 文書の配布状態表示 242, 290
 文書の配布状態表示ユティリティ 290
 文書配布機能 8, 56, 521
 文書配布機能に関する管理 61
 文書配布機能によるサーバの運用 94
 文書配布機能の実行環境作成 257
 文書配布機能の実行環境の作成 61, 180
 文書配布機能ユティリティ 248, 257
 文書配布機能を使用するための環境設定 151
 文書配布時の一般文書の圧縮 216
 文書配布状態表示ユティリティ 249
 文書配布情報ファイルの取り込み 273
 文書配布送受信デーモン 60
 文書配布送受信デーモン起動ユティリティ
 248, 258
 文書配布送受信デーモン終了ユティリティ
 248, 260
 文書配布送受信デーモンの起動 183, 258
 文書配布送受信デーモンの終了 184, 260
 文書配布対象グループ 57
 文書配布対象グループ情報の表示 277
 文書配布対象グループ操作ユティリティ
 248, 277
 文書配布対象グループの一覧表示, 作成又は
 削除 274
 文書配布対象グループの操作ユティリティ
 274
 文書配布対象の追加又は削除 288
 文書配布の記録と管理 63
 文書配布の手順 62
 文書配布ログ 63, 226
 文書配布ログの出力形式 227
 文書配布ログを出力するファイル 226
 文書ひな形 6
 文書を抽出するエクスポートユティリティ
 301

文書をフォルダ, 一般文書データベース, 分
 類索引, 分類又はフォーム文書データベー
 スごと一括して削除する 333
 文書をフォルダ, 一般文書データベース, 分
 類索引, 分類又は文書単位で一括して移動す
 る 331
 分類 27
 分類索引 6, 14, 27, 521
 分類索引・分類・フォルダ名称に半角コンマ
 を使用した場合に発生する障害 506
 分類索引一覧表示ユティリティ 250, 325
 分類索引及び分類のアクセス権 39
 分類索引検索 6, 8, 51
 分類索引帳 53, 94, 521
 分類索引帳の定義と運用 94
 分類索引帳を利用した文書共用 53
 分類索引の一覧表示 325
 分類索引の設計 90
 分類索引の属性 32
 分類索引の定義と変更 92

へ

編集 21
 編集モード 20

ほ

ほかのプログラムと連携するときの運用 239

ま

マニュアルのメッセージの見方 393

め

メッセージ 393
 メッセージの形式 393

も

目的別一覧 8, 71, 522
 目的別一覧定義のアクセス権 80

ゆ

- ユーザ 522
- ユーザ ID , グループ ID 一括変更ユティリティ 250
- ユーザ ID ,グループ ID を一括して変更する 335
- ユーザ定義属性 30, 33, 77
- ユーザ定義属性の属性型 33
- ユーザとグループの関係 16

れ

- 連携サーバ設定ファイル 151

ろ

- ローカルグループ 123, 381
- ローカルグループ情報のキャッシュ化 329
- ローカルグループ情報のキャッシュ化ユティリティ 250, 329
- ローカルグループ情報ファイル 381
- ローカルグループの登録 381
- ログアウト 15, 522
- ログイン 15, 522
- ログイン先のサーバの切り替え 138
- ログインユーザ数の表示 323
- ログインユーザ数表示ユティリティ 250, 323
- 論理演算検索 8, 52

ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内

ソフトウェアマニュアルについて、3種類のサービスをご案内します。ご活用ください。

1. マニュアル情報ホームページ

ソフトウェアマニュアルの情報をインターネットで公開しております。

URL <http://www.hitachi.co.jp/soft/manual/>

ホームページのメニューは次のとおりです。

- Web提供マニュアル一覧 インターネットで参照できるマニュアルの一覧を提供しています。
(詳細は「2. インターネットからのマニュアル参照」を参照してください。)
- CD-ROMマニュアル情報 複数マニュアルを格納したCD-ROMマニュアルを提供しています。どの製品に対応したCD-ROMマニュアルがあるか、を参照できます。
- マニュアルに関するご意見・ご要望 マニュアルに関するご意見、ご要望をお寄せください。

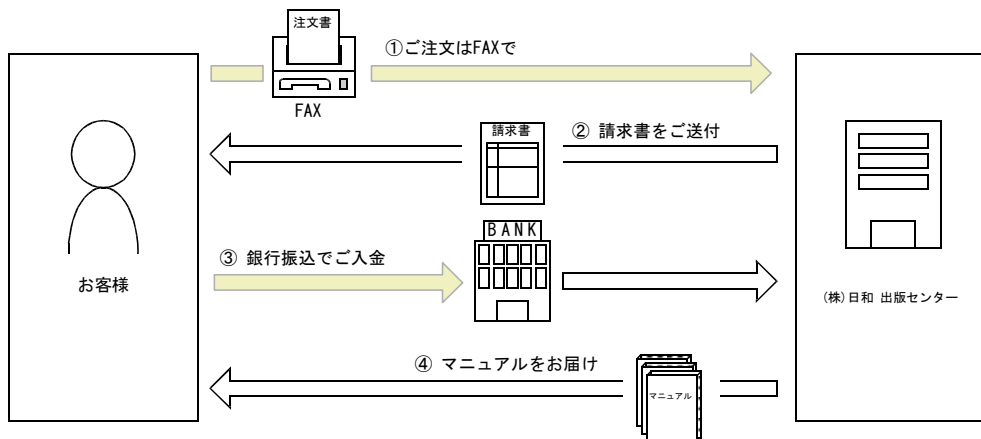
2. インターネットからのマニュアル参照(ソフトウェアサポートサービス)

ソフトウェアサポートサービスの契約をしていただくと、インターネットでマニュアルを参照できます。(本サービスの対象となる契約の種別、及び参照できるマニュアルは、マニュアル情報ホームページでご確認ください。参照できるマニュアルは、クライアント/サーバ系の日立オープンミドルウェア製品を中心に順次対象を拡大予定です。)

なお、ソフトウェアサポートサービスは、マニュアル参照だけでなく、対象製品に対するご質問への回答、問題解決支援、バージョン更新版の提供など、お客様のシステムの安定的な稼働のためのサービスをご提供しています。まだご契約いただけていない場合は、ぜひご契約いただくことをお勧めします。

3. マニュアルのご注文

裏面の注文書でご注文ください。



- ① マニュアル注文書に必要事項をご記入のうえ、FAXでご注文ください。
- ② ご注文いただいたマニュアルについて、請求書をお送りします。
- ③ 請求書の金額を指定銀行へ振り込んでください。なお、送料は弊社で負担します。
- ④ 入金確認後、7日以内にお届けします。在庫切れの場合は、納期を別途ご案内いたします。

(株) 日和 出版センター 行き

FAX 番号 0120-210-454 (フリーダイヤル)

日立マニュアル注文書

ご注文日	年 月 日
送付先ご住所	〒
お客様名 (団体名, 又は法人名など)	
お名前	
電話番号	()
FAX 番号	()

資料番号	マニュアル名	数量
合計		

マニュアルのご注文について、ご不明な点は
(株) 日和 出版センター (☎03-5281-5054) へお問い合わせください。